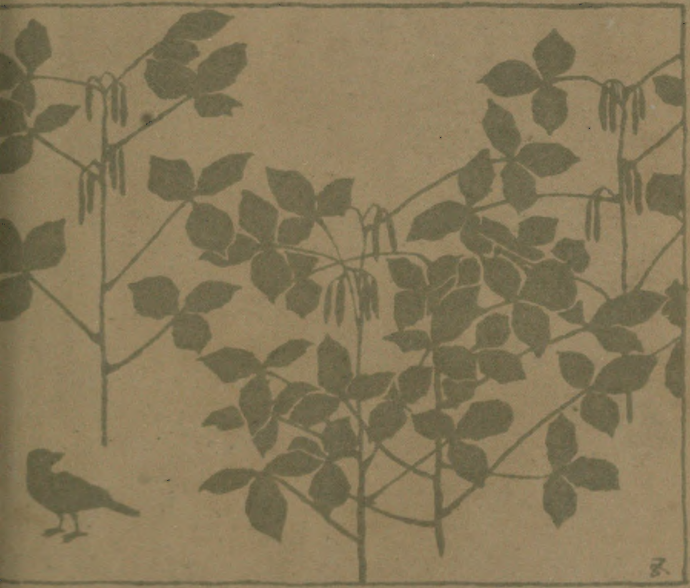




（岡山製本）

大正四年九月廿七日印刷
大正四年九月三十日發行

有朋堂文庫（非賣品）
風俗文選・和漢文操・鶉衣

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

人或は三つの心を深めて衣食住と判ぜんに、それもよし。雪月花と數へむにもはた羨まるべき住居なるべし。

花と見せ綿とも見せて雪の宿

長榮寺碑

何にかも人は忍ばむなき跡の
石にはかなき名はとゞむとも

辭世

病來辭世路　久隱舞津農　八十餘年夢　驚回曉寺鐘

きのふけふと思ひつゝ經し身の程ぞ
中々ながき世はかぞへぬる

短夜やわれにはながきゆめ覺めぬ

鶉衣終

(一)西行の歌「願はくば花の下にて我死なむ其きさらぎの望月の頃」

集には名をならべたれば、いでそよ笹の一よならぬ契と、つねに其ことを言かはしつれば、猶一入の袖はぬらしける也。西行法師の願足れる、(一)其きさらぎの花のかげに、望月の頃は過しぬれど、春は追手も西にふきて、彼岸の船路も便あしからじと、いさ見ぬ世のたのみに、今は此別を慰むばかり也。

蝶鳥もいざ涅槃會の啼きついで

與二自若庵一文

ものの足る日も自若たり、物たらぬ日も自若たり。顔子が一瓢の花垣根に白くさきて、其たのしみをあらためず、善哉馬山子、予に菴號もとむるに、自若の二字をおくりて、清貧の生涯を稱す。もし千兩のこがねを拾はゞ、それもまた自若たらむ。

夕がほにあすの米あり袋あり

名レ亭辭

いざさらば、此居をさして三富亭と呼ばむ。とは何をかさすや。只物のよき程なれば也。

(三)羽打れたる雀を助けたる報にある老婆の得たる不思議の瓠

(二)赤壁賦「惟江上之清風。與山間之明月。取レ之無レ禁。用レ之不レ竭」

えしも、忽然と夕に滿てり。かゝれば宇治の物語にいへる(三)姥が米は盡くる期有りとも、此酒は盡くる日あるべからず。むべ也長者の號ある事。あるじ我に一語を求む。卒爾に記して贈ることしかり。

名レ亭說

前に洋々たる長良川ながれて、向には巍々たる稻葉山たてり。まことにあるじの素絃子なるかな。亭に名付くるに巍洋の二字を贈る。(二)山間の月江上の風、取れども禁ぜず用ひて盡きざらんには、何ぞ必しも知音をとはむ。

悼二六々庵一辭

桃は盛りに梅は散り過ぐる此曉を世の見果にして、六々庵のぬし身まかりぬ。當時蕉門に俊良の才、世こぞりて惜むはさら也、我にはことに二十年の推敲を問ひし親しみのみならず、かの父貞靜は季吟老人に道を學びて、其世のすき人は名もよく知れりとぞ。我祖父の野双といひし、又同じ門下にかずまへられし、互に顏知れるほどはしらず、多く撰

歌に「たゞ頼めしめぢが原のさしも草我世の中にあらん限は」

(二)「製」は「誓」の誤

(一)老子の句

(二)鶡冠子に「中流失船。一瓢千金」

が原の御うたも、こゝに五文字を吟ずれば、たゞ茶のめとこそ聞ゆなれ。あるじこゝに餘白をまうけて、一句を請うてやまず。君見ずや、かの御製(二)に、枯れたる木にも花さかせむとは、もとより木々は歳寒の操に其用なきに似たれども、よし一鼎の煎茶とても、その光にもれざらめやと、半掃庵の狂夫筆にまかせて求をふさぐ。

落葉にもたかば花香の誓あり

瓢長者傳

巴陵舍に一つの瓢あり、其かたちをかしく曲れり。曲る物は全きとか(一)、久しく爰につかへて許由が憎をかうぶらず、鉢扣にも奪はれず、あるじも中流(二)に舟を失はねど、常に愛して千金の價に思へりとぞ。むかし不之庵の翁は、是を褒稱して長者瓢の三字を銘せしより、頓て此名を打かへして、みづから瓢長者とは名乗りける也。長者の自稱必しも其故のみにもあらず。此瓢に不思議ありて、酒を出す事綿々として不止。是仙術にも幻術にもあらず、只一婢に阮宣が杖を持たせて、一度市中に往來すれば、朝に尻の輕しとみ

が腸もなければ、是ばかりは俳諧師のをり〳〵來りて戸棚をさがすは、積の外なるべし。されば此軒に玉壺の二字を題せられたるは、一大事のはんじ物にして、町代宿老も分別の頭を傾け、老功の道具屋もこの壺の目利は及ばずとや。實にも酒にあらず茶にあらず、まして鹽辛砂糖づけにもあらず。さては仙術に天地をちゞめし市中の壺かと、潛に内證を聞合はすれば、是はむづかしき古みにはあらで、只此亭の入口はなはだ狹けれども、内に閑地の廣きかたち、尋常の壺に似たればいふ也とぞ。さてこそ所々の入札も、彼上人(三)の狛犬はまりとなりて、まことに分別は一生の損也と、世にほださるゝ理窟人は、此壺の底ぬけて、此曉にも夢はさむべきにぞ。

松操菴記

かくいへる閑居は、塵境にありながら庭に千章の松陰ふかく、寂寞山中に彷彿たり。あるじはその閑にふけりて、もつぱら煎茶に遊べりとぞ。そこに安置せる大悲閣あり。さぞな靈驗もあらたならめど、まづたゞ此庭の景色を添ふるぞ尊かりける。されば(二)しめぢ

(三)徒然草に聖海上人丹波の出雲神社の神前の狛犬の後向きたるを童子の惡戲とは知らず無暗に感ぜし話あり

(二)清水觀音の歌とて傳へたる

(一)史記、東方朔の言に「宮殿中可三以避レ世全レ身。何必深山之中蒿廬之下」

(二)空也上人の歌、上の句は「中中に市の中こそすみよけれ」

寶曆九卯七月

玉壺軒記　應二菴原楚巾老人之需一

何ぞ必ずしも深山の中蒿廬の下のみならむやと、むかし朝廷に俗を避けたるも、耳目は(一)おのづから世につかはれもしつらん。こゝの市中に一つの隱家ありて、豆腐賣はよく知れども、とりあげ婆々はさらにしらず。つきぐしき住居のほか、九尺にたらぬ別室ことにおも白うまうけ、前に泉石の目を娯ましむるも、今の主翁のたくみなせるにはあらず。もと住みし人の殘し置ける、月と花とは今も閑にして、今は猶ふるびたり。(二)人の多きを深山木にしてよみしも此あたりにや。伐木丁々たるは桶屋のたゝく也。鳴子のからからとなるは菓子屋の脊戸か。田家山莊の風流こゝに備はるのみならず、四方は城下の豐なれば、朧夜の笛も雨の日の三味線も、近からぬ方に音なひて、我身はよそに聞流せば、樵歌牧笛にもさびしさは劣るまじや。そもや主翁の身のうへ安きこと、仕官は若きにつくしたれば、北山移文の惡口にもあふべからず。色は老をしりて遠ざけ、酒は淵明

一狸ふぐりを四疊半にのばし、茶を立人を迷はし、諸道具に金銀を費さしむることよろしからず候。右の業相止申べく候。自分の樂としてはら鼓打候事はくるしからず候。
一馬の太鼓の義、往還問屋前を憚らず不禮の至候。畢竟これも榮耀のことに候得ば、以後は相止むべく候。
但廐にては苦しからず候得ども、火の見時の太鼓にさし合申さゞる樣相つゝしみ候べき事。
一青鬼赤鬼のともがら、虎の皮の褌いたすまじく候。當時病犬の皮澤山に候得ば、早速仕替申べく候。
但右は家持頭分の鬼の事候。借屋住召仕の鬼どもは、古き桐油合羽の切れを腰に卷用ひ申べき事。
右の條々かたく相守申べく候。忽に心得違これあるやからこれあるにおいては、急度咎申付べく候。品により蟻の町代組頭まで越度たるべく候。

らためこれあるせつは、何方へも申ぬけ役義等相つとめず候よし、不屈の至候。向後は立合の支配をうけ兩役屹度つとめ候べき事。

一音喚鳥猥に五色の錦繍を著いたし候事甚奢に候。向後は何色にても一色に相改、勿論縫箔等一切いたすまじき事。

一白烏白雀等此間は相見え候。先年は頭ばかり白きさへ稀なることに候ところ、近年猥に相なりよろしからず候。以後曾て異相の體いたすまじき事。

一鼠嫁入の體ことぐ〵しく相聞え候。二十日鼠に五升樽もたせ候こと過分の至候。以後は提錫にて相濟し申べく候。振舞の上天井にて躍など催さわがしく候。人々妨に相ならず候樣、明き二階緣の下等にても盆の中躍候ことくるしからず候。

一猩々つねに大酒を好み、亂舞の樂奢のことに候。潯陽の江邊にて持出しぶるまひ向後一切無用たるべく候。據なき義にて會合これあり候とも、一種一獻にかぎるべく候。其酒は其模寄のうけ酒屋にて小買いたし申べき事。

一蜘蛛御領地の内おいてみだりに網をはり、諸虫を捕る事不屆の至候。以後は其場所相應の運上(うんじやう)さし上申すべき事。

　但蠅とり蜘は運上に不及事。

一蜜蜂の小便高直に賣候よし、諸方の痛になりよろしからず候。向後は世間一統に只米六升ほどの積を以相はらひ申べき事。

一蟷螂己が短慮の我慢にまかせ、斧を以て諸虫を殺害いたし不屆千萬に候。向後はむね打をも一切いたすまじき事。

一金魚のともがら近年ことに花美に相なり候。向後金銀の飾一せついたすまじく候。

　但赤塗に砂箔等まではくるしからず候。

一蛤春暖のころ己が快晴にほこり、樓閣を建候事甚奢のさたに相きこえ候。向後は右體(みぎてい)の普請(ふしん)一切無用候。もし居宅の柱損候とも根つぎいたし用ひ申べき事。

一蝙蝠晝は橋下にかくれ居、夜々人里村里へ徘徊いたし候こと其意を得ず候。鳥獸のあ

なき魂やたづねて雲になく雲雀

鳥獸魚虫の掟

世上困窮につき、今般鳥獸并虫のともがらへ一統の簡略(かんりやく)(一)申付候。其外行作悪敷品相改申渡候。左の條々急度相守べき事。

一蟬すゞしの羽織を著候事、過分の至候。向後は横麻一羽ぬきに仕替(しかへ)申べき事。

一松虫鈴虫のともがら、籠のうちにて砂糖水を好み、奢のさたに候。向後は野山の通、露ばかりにて精出なき申べき事。

一蟻塔を組候事、自身の功を以建立いたし候儀はくるしからず候。寄進奉加等頼候義は一切いたすまじく候。且又熊野(二)へまゐり候に、大勢連にて無益の事候。已後は二三人づつひま次第に參り申べき事。

一螢夜中火を燈し飛行(ひぎやう)の事、町々家込の所は火のもと氣遣敷候得ば、遠慮いたすべく候。池川田地等の水邊はくるしからず候事。

(一)節約

(二)諺「蟻の熊野參り」

たに雲雀の高く上りたるさま畫きて、それに發句してえさせよ、とありしに、いとこちたくこそ、すゞろなる筆のいかゞ及びがたくや侍らん、今は旅のいそぎにしづ心なく侍れば、さるべき發句も、とみには思ひよりがたくなむ、さるにても、吾妻に下り侍りていかで念じて、まほならずとも書きとゞのへて奉りてむ、とうけがひまゐらせし、其いとまもなくて今はた悔しき數とはなりぬ。我母上をはじめて、女の御はらから九所までおはしつ。みなにげなからぬよすが定まらせ給ひながら、打つゞきて世を早う去り給ひ、今は二方ばかりぞ殘りとゞまり給へば、母上うせさせ給ひし後は、いとゞ御かたみとも見奉れば、なほざりに過ぎこしほどもとりかへさまほしう、今は身のおほやけに暇なきものから、いかで疎からずつかへ奉るをりもがなと、行末遠く思ひてしを、かゝるはかなき便きゝける心の、いくたびも只夢かとぞたどられ侍る。彼ののたまはせし空の雲雀も、雲がくれ給ふべきはかなきさとしにやとさへ、のこるかたなく思ひつゞくるままに、

爾として居れり。また其後神路山に登りて見れば、先生猶また默爾として居れり。先生のことは測るべからす。

悼₂伯母₁辭

是は歌物語の言葉をかりて、俳文にあらずといふかるべきが、只是も筆に任せし一體のすさびなり。

こはそもはかなき世なりけり。過ぎしはわづかに二十日あまり、武藏に旅立する御いとま申さむとて訪ひまゐらせしに、例のまめやかにもてなさせ給ひ、のどやかに御物語ありしが、おまへなる瓶に花ども多くさゝせ置き給ひしにつけて、過ぎし冬さくらのさし木といふこと人にならひて、庭にさゝせ侍りしに、まことにあやまたずなんと啓し侍りつれば、嬉しきことききゝつる物哉、ことしの冬必ずさゝせてむ、其すべきやう敎へて、とのたまはせしほどに、かゝる御別あるべしとは思しかくべきや。なほ何くれと語りつゞけさせ給ふついでに、此頃おほしよれることあり、下にあやしの耕す男かきて、上つか

(一)天子の詔書

壽光先生傳 壽光は鏡也

壽光先生もと山中を出で人間に交はり、つねに一人臺上に坐して默爾たり。人來て笑へば笑ひ、怒れば怒れり、只人に順へり、是を莫逆とやいはむ。しかれども美人に愛せられ、醜き人ににくまれ、やゝもすれば地に抛たるゝのことあるこそはいぶかしけれ。予久しく先生を拜せず、早に起き往きて拜するに、先生や婀娜たる美少年なりし。秋の霜一度下り、蘭艾ともにくだけ、しら髪兩鬢に垂れ、笑へる齒あばらとなれり。かく零悴せることの須臾なるはいかむぞや。先生默爾たり。それ人は一世にありて名こそ遂ぐべきに、一臺の上に逼々としてかゝる姿となりたり。たとへ(一)鶴書のいたることありとも、今はた用には立たじ、素餐の責はいかむぞや。先生默爾たり。予涙を含んでつら〳〵先生を見れば、先生も涙を含んでつら〳〵我を臨めり。長物語に朝飯の時過ぎて去らむとすれば、去らむとせり、立歸れば立歸り、しばし別ををしみ、ともに默爾としてわかれぬ。其後古かね店を見れば、先生猶默

ても一本、御かし可レ被レ下候。委は參り候て可ニ申述一候。御内儀御息女御心得可レ被レ下候。と申候て存出候。先夕はゆる〳〵と語候て滿悅申候以上。

正月八日　　丈草

堀彦左衞門樣

此文體に日附を見れば

髭の邪魔いかにきのふの薺粥　　蘿隱戲書

寫ニ海洲子文一

このごろ反古を引き破る中に、海洲子が文一章あり。此人柳川氏、文才ありて詩を能くし書を能くす。俳諧又幽趣を得たり。惜むべし、五十の比世をさりぬ。遺文いづれにか散りうせけむ、今わづかに此一章を見て捨つるに忍びず、又殘すべき方もなし。しばらく我が文草の中にとゞめて、追慕を慰む助とす。

聞耳たつる門の人音

其人　ふぐ汁の鍋を片手に提げながら

其場　片側はくら屋も交る與力町

時分　夜なかかと思へば星の明けかゝり

時節　延び〱た祭の空も五月晴

天相　一しきり雨やら松の嵐やら

觀相　勘當の跡にまよひの親ごころ

俤　木曾もまたのがれて見れば浮世なり

丈草文跋

傘と剃刀をさへもたぬ身の上かなと、よしなき貧乏自慢がこうじて、明日ある人のもとへ齋によばれ候に、鬚は汁をすゝる邪魔になり、雨は衣の袖しぼらんことを思ふに、ひしと困りはて申候まゝ、御無心申入候。よく〱とぎすまして一丁、たとへ破れかゝり

こり（栗鼠）ず二（豕）夜い（猪）も寢ずみ（鼠）しか（鹿）君來ざ（猿）るう（牛）しやく（熊）まなき月（狐）のかねご（猫）と

草の名十

道（菅）さへもなく（葛）住む（麥）君が（萱）山遠（荻）き世のよ（葭）しあ（蘆）しもう（獨活）とくき（菊）くらん

庚寅六十九歲元日試筆

東風回暖入二留阿一　老對二鶯花一樂若何
六十餘齡今得レ九　人生誰道古來多

惜むとも急ぐともなき年暮れて待たず厭はぬ春はきにけり

初日の外面を見渡せば、けさは農夫も鋤鍬（すきくは）を休めて、惠慶（ゑけう）（一）の葎（むぐら）の宿とよまれし秋ならねども、春はきにける。

田畠に人こそ見えね年の市

夜半まで空にまどひし足も皆かしこまりてや雜煮喰ふらん

八體付方

（一）「八重葎しげれる宿の淋しきに人こそ見えね秋は來にけり」

國の名二十をかくしてよみける二首

伊豆 伊賀 近江 陸奥 美濃 阿波 出羽 加賀 壹岐 甲斐
いついかであふ道あらむつひに身のあはではいかゞいきがひもなし

安藝 長門 肥後 安房 紀伊 能登 河内 大和 隱岐 佐渡
秋も最中とひ來よあはれ月いく夜野と川近く山遠き里

國の名十づつ入れて戀の心を

伊豆 三河 伊勢 紀伊 加賀 美濃 信濃 丹後 伊豫 阿波
いづみ川いせきくにかゝる浪のうし名のたゝむ戀よあはずも

旅のこゝろを

紀伊 出羽 伊豆 安房 美濃 遠江 山城 隱岐 對馬 志摩
漕出でばいつあはむ身の跡を遠み浪や眞白におきつ島々

祝のこゝろを

佐渡 能登 土佐 讃岐 美濃 加賀 近江 伯 隱岐 肥前
里の戸もとざさぬ君のかゝる世にあふみはうきをきかで老ひせん

鳥の名十

鵜 雁 鶴 鴛 烏 雉子 五位 鴫 鴇 鳧
うかりつる世はをしからずそむきしも都こひしきときは有りけり

獸の名十

返しながらに贈る。

和下六林子雅伯題二俳諧一所レ寄歌上

はせをおきなまちえぬるむへもよにいろねのこらす
（芭蕉翁待得ヌル宜モ世ニ色音遺サス）
わかやしつくりゆゑあれとさそひうけてたみほめるふ
（和歌ヤ詩作故有レト誘受テ民褒云フ）

雪中寄レ懐

いまゆきよりあけそむるたれうゑぬはなすへてさく
（今雪ヨリ明初ル誰栽ヌ花總テ咲）
えにほわねとるやめつらしろのひをかこみせちにおもふ
（得匂ハネ共翫珍シ爐ノ火チ圍セチニ思フ）

題二早梅一

むろたのまてよへゑみつるいちはやもさけあにとるふ
（室頼マテ宿笑ツル逸早モ咲ケ兄ト云フ）
これをほめえそおりせねゆきなからぬしわうくひす
（是チ褒得ソ折セネ雪乍主ハ鶯）

ふゆひとよろくりむしのうたをみきけにちゑやさいあれらはこそえわせめまなへるもておつかねぬ
（冬一夜六林子ノ歌チ見ヤ賓ニ智恵ヤ才有レヲハコソ得ハセノ學ヘルモ手オ束ネヌ）
ほする（暮水）

娑婆にては善知鳥安方と見えしも、冥途にては怪鳥となり、よのつねの米屋味噌やも節季(一)には懸乞となりて罪人を責めはたる、世の有樣を詠めて、あら拾ひ坊主の口すさびける。

たつた今乞食しかりし門口へ直にむくいて懸乞がくる

あてなしにつかひ〳〵て節季には錢は無いとて留守つかひけり

俳諧歌は古今集にいへる俳諧體にもあらず。かの集にあるは歌人の俳諧歌にて、俳諧師の歌にはあらず。狂歌とは混ずべからず。狂歌は全體の趣向を求めず、其物其ことにすがりて、他のものの名をかり秀句をとりなし、言葉をもぢりて全く言句にをかしみを求む。俳諧歌は趣向一つをたてて、其ことをすら〳〵といひ流して、言葉の緣字義の理窟は曾てとらず。されば右に云ふ二首、はじめのは全く俳諧歌にして、後のは狂歌といふにのがれず、二つの境こゝをもつて知るべし。

いろは歌

いろはの四十七字を以て歌をつくり、六林子より寄せらる。それに倣ひて三首つくり、

(一)謡曲「善知鳥」の文句

（一）許由

賢人の耳に(一)鳴らねば　風の吹く日もすてられじ
鉢叩も手に餘れば　雪の降る夜も靜なり

鯉の贊

及ばぬ瀧に思ひをかけて。　戀をすればや鯉と呼ぶらめ。
のぼれば落る悔ある世に　淵に住む身を安きとはしれ。

布袋贊

飾る錦の世はうらやまず。　布の袋の名ともなりぬる。
梅は肥えたと我を笑はば　我は痩せたと梅を笑はむ。

廻文

さくみつゝつまで待てまつつゞみ草

俳諧歌并辯

煤はきの日とて立てたる居風呂によごれぬ旦那先へ入けり

畑も雪間に若がへりつゝ。　去年の案山子も老や忘れむ。
なづな七草七日つみては　はなのなの字の猶ぞ待たるる。

蛤　アカの韵

もとの身の雀ならば。　竹の枝にもなれじや。
今は桑名に燒かれて　松かさのおもしろさ。

寄二團扇一戀　ウクの韵

えにしも夏の手には觸れつゝ。　いかに言葉の蠹そらごとなる。
一夜あふぎの名にあやからば　とけて心のうちはかたらむ。

手習の師に書てあたへし聯句

硯の海は明暮に湛へて　桃の日の汐干もなく。
筆の林は夜日に茂りて　霜の後に落葉も見ず

大砲銘

此翁たれか畫(ゑが)く　梅痩せて笑ひ松老いて高し
笠を携へて旅の情やまず　筆をとりて賛する辭なし

又　サクの韵

俳諧に故人なしといひける。いひける翁(おきな)故人となりぬ。
それより故人幾故人(いくこじん)　只此故人を慕ふことやまず。

又　イキの韵

詩家に李白(すもゝしろ)うして謫仙(たくせん)とよび。俳門に桃青(もゝあを)うして祖翁と稱り。
かれも三石の奈良茶(ならちや)を味はゞ　さらに百盃の酒にかふべし。

翁題笠圖賛

題笠旅裝吟　尋花狂客心　豈無芳野句
可識不言深

人日　サクの韵

(一)「路ばたの木槿は馬にくはれけり」

茄子 エケの韻

むらさきの名にめでて　まづちぎるせどのはたけ。
柿にへたはまなぶとも　瓜のつるにはならざれ。
つけものの夏のあした　鴫焼の秋のゆふべ。
獻だてのしな〴〵は　豆腐にも恥ぢざらめ。

風鈴 オコの韻

はるは山寺ならでも。　ちとつらし此かねよ。
なる日はおのづから　花も風のふくものを。

翁像贊

富貴誠に浮雲　滑稽初めて正風
道のほとりの木槿(一)を吟じて　ひそかに人の数有り
窓のまへに芭蕉を栽ゑて　永くおのれが名とす

くいあたまの鉢たゝき、へうたんならぬ炭とりの、ふくべも花は夕顔の、それはなつめのたそがれに、五條わたりや四疊半、よしや氣長に待合せ、茶うすのめぐる月と日も、あらば花咲く花生に、はなれぬ火ばしよりそひて、憂さもはなしのはつむかし、昔ばなしのぢいばゝと、なるまで釜の中さめず、緣はくさりの末長く、千代萬代もへ。

是を近世女てまへとなづけ、もてはやす。猶後にいたりて、翁は女手前にもとづき書かれしなど、人の思はむも煩はしければ、そのことわりを書い付けおく。

辻君　ウクの韵

月にうかるゝ鳥も多きに　いかで夜鷹と浮名にはたつ。
袖はやなぎの人を招ぎて　枕の草にむしやとびかふ。
待ちて相圖のうたはうたへど　あうて別れの文はおくらず。
曉かへるそでのしろさは　馬場の夜寒の霜やおくらむ。

(一)京都の遊廓島原なるべし

此端に餘白あるにまかせて、潛にかきとめおきぬ。題號をいはゞさと茶の湯などこそいはめと、其人いへりけり。

世の中にすぐれて花はよしの山、紅葉は龍田茶は宇治の、都の辰巳それならで、さ(一)とは都の未申、數寄とは誰が名に立てて、濃茶の色の深みどり、松の位にくらべては、圍ひといふは低けれど、情はおなじ床かざり、かざらぬ誠あかし合ふ、間夫や人目の中くゞり、なかだちいらぬ口切の、後はうき名の下地窓、影もる月のさしつけて、それといはねど世の人の、口に猿戸も立てられぬ、あうて立つ名が立つ名の内か、逢はでこがるゝ池田炭、炭を雪かというたが無理か、其白炭の雪と見て、雪にはあらぬあられ灰、くだけて物をおもふ夜は、夢さへろくにみづこぼし、水さす人にふか〱と、のるは三つ羽のかるはづみ、輕いはいやと飛石の、すわらぬ胸のうら表、ふくささばけぬ心から、きけば思はくちがひだな、逢うてどうしてかう箱の、柄杓の竹は直なれど、そちは茶杓のゆがみ文字、口舌にとけし茶せんがみ、に

しつれば、たまはりし祿をもかへし奉り、蓬がもとに隱れしは、二十年の昔なりけり。其爲ならぬ物から、とみに仕の途をのがれ、おのづから名利にかゝづらふ心の疎くなりもてゆくや、中々命つれなきたづきとはなりけん。(一〇)稀てふ齡もかぞへ過ぎて、此秋かゝる山ぶみをさへ思ひたちし、我身よくしれる我心のあやしきまでになん。さるにても、ふたゝび來べき境ならねば、しかすがに名殘おぼえて、跡の山々かへりみがち也。

鷹に似ず跡にこゝろの山わかれ

左を右に眺はかはれども、かへさはみなもと見し野山也。ゆき〳〵てかち川にいたる。こたみは水かさ増りたれば、駕ひてて此まゝ渡りがたしとており立ちぬ。從者どもの負はむといふに、いなそは中々危ふからん、けふはいたうも寒からざれば、たゞ手を扶けよ、かちわたりせむ、老いたれども猶かばかりは難からじと、細脛いと高くかゝげたり。若えたるふるまひの我ながらをかし。(一一)老の浪そふ影もはづかし、淺くとも渡らずとこそ丈山翁はよまれしを。

(一〇)古稀

(一一)「渡らじなせみの小川はあさくとも老の波そふかげもはづかし」

（九）そばの異名

こゝに來てわがのがれにしかくれ家は
　猶世にちかきほどぞ知らるゝ

あくる日は妙見寺にともなはる。あるじの僧、我がたしめる事聞き知りて、例の河漏子（九）にてもてなされぬ。

　鐘にちる葉や山寺の秋のくれ

あるじの求にかく言ひてとゞめぬ。

二十七日にはつとめて內津を出でてかへる。あるじも猶府下まで送らんとてともなひ出づ。行厨の事などいかめしくかまへて、世を捨人に似げなきほど也。又例のたはぶれて、

　老武者の我もながゐのさね盛が
　　さいとう辨當までせわになる

いでや身の一たび病づきてより、つや／＼世をはかなみ、たゞかげろふの夕をまつ心地

（八）書言故事「漢陳遵。每大飲。賓客滿堂。輒閉門。取客車轄。投井中。雖有急不得去」

ど、かゝらば斧の柄もくたしぬべし、明日は歸らんといふに、あるじ猶轄（八）を投ぐるの意ありて、今一日はと切にとゞむ。

もう一りんみよと木槿の莟かな

追はれねばたつ事しらず秋の蠅

いな船のいなにもあらず、心弱くて又とゞまりつ。

是にて一卷の名殘をつらぬ。すべてしづけき日ぐらしには、俳諧して遊びつる卷々もつもりぬ。あるじはもとより、也隣、わが從者の文樵なども、時々句ども有りつれど、事繁くて洩しぬ。詩ひとつ作りてあるじに寄す。

張北山林遠府城　相逢多日雅談淸
秋深老樹添霜色　夜靜流泉疑雨聲
驛馬稀傳都下信　啼猿常動客中情
纔看隣店商家在　豈比塵衢爭利名

（七）「あうなき」歟

いみじう心劣して、人はとまれ我は目もとまらず。門の前小川清く流れ、岩そばだち木立ものふりたる隈々、されど見所あり。庭などもたゞかく自らにてあらまほし。庭のかたはらに座禪石とよべる高き岩あり。是にのぼれば遠近の望よし。

座禪にも目はまよふ山の秋の色

歸るさの道すがらもいふべき事なし。すべて此頃の明くれに、鹿の聲は聞かざりけり。我耳のうとき故かとうたがふに、いまだ時早くして啼かずとぞ。されど若かりし昔、所所の旅寢に聞き馴れつれば、こたみ聞きもらしぬるも本意なき事ともおもはず。

三止はもとより年頃なづさひて、共に心をも知りかはしぬ。母なるものも、過ぎし年日のいたはりありて醫をもとめにとて、府下にいでしよすがに相知れり。家とうじさへに、此ほどの日かずにうちなれて、萬まめやかに、あかなき（七）さまにもてなさるれば、老の心慰みて、あやにくの長雨にふりこめられぬれど、つれ〴〵わぶる事もなく、あからさまと思ひしも、かゞなべて七日の假寢をぞ重ねぬる。故郷に待つ人もたる身にしもあらね

(五)佛印蘇東坡と問答して東坡の玉帯を奪ひ「收此玉帯永鎭山門」といひし事遯齋間話に見えたり

あらず、よろづ目安かりけり。

府下萬松寺にさきにいまそかりし綱國和尚退隱して、此里見性寺といへるに假に住み給へり。久しくしれる中らひなれば、雨の隙に訪ひて、とばかり語りて歸りし後に寄せらる。

深山客稀有孤猿　豈謂高軒過遠村
煨芋無收寒涕力　肯令玉帯鎭空門(五)

韵を賡いで謝す。

滿耳溪泉又斷猿　渾忌塵想宿山村
逢君猶憶重遊約　嶺上雲多恐鎖門

ある夕あるじ酒すゝむとて、こゆるぎのいそぎありくまゝに、鉢に杜若をつくりて水をもり、肴調じて出せり。見れば茗荷の子をもて巧に花の形をまねびたり。

八月のはちに咲いたるかきつばた

一日枕流臺にて俳諧す。餘興に戯れて、

　　こゝに住みて善正日夜きく水は
　　　　ひんがしならで西にながるゝ（四）

あるじが常の名長谷川善正といへばかくいへるならし。明智にすむ醫師羽白なるもの尋ね來りて初てあふ。

　　掘て來て草に藥の名をとはむ

と書きてあたふ。此人も俳諧を好めり。

試夕が家は更幽居にさしむかへり。一日こゝにも遊ぶに、あるじ一句を請へり。なりはひいと豐（ゆたか）なる男（をのこ）なれば、

　　あたゝかな家あり山は秋ながら

こゝはひたぶるの片山里とこそ思ひしか、更幽居は更（さら）にもいはず、試夕があるじまうけの樣（さま）すら、すべてよづきて、調度などもいと淸らに、心（こゝろ）つかひたる振舞（ふるまひ）どもけしうは

（四）戴叔倫湘南即事の詩に沅湘日夜東流去、不爲愁人住少時

どまらめと笑ひて登る。左右大きなる杉どもの枝さしかはして日の影ももれず、細き道の苔なめらかに石高し。右の方に天狗岩といへる、世にしらず大きなる巖そばだてり。只一つの山とこそ見知らるれ。かゝる怪しき岩は他の國にもをさ〳〵なしとぞ。

這ひのぼる蔦もなやむや天狗岩

次第に道さかしく、岩を攀ぢ木の根にすがりて、七町ばかり登りて、少し足とゞまる所に休らふ。こゝにあふげばかう〴〵しき拜殿みえたり。夫までは十間ばかり、ことに危き坂あり、社は猶奥まりてまします由。是まで登りしだにも、我にはこちたきわざなり、今はふようなり、とて爰にぬかづきて歸る。

杉ふかしかたじけなさに袖の露

げに本州にかゝる宮居ありと知らざりけり。若き人々はふりはへでもまうでぬべき靈地ならし。其あくる日より雨ふり出でて、二十四日まで晴れやらず。其ほどの事ども筆にまかせて書きあつむ。

あるじ懇にもてなし、湯あみ物くひて心落ゐたり。

夢もみじ鹿きくまでは臂まくら

あるじ、

まつ名もはての十九夜の月

と脇してその末々もありつ。美濃なる虎溪といへる所ながめよしと、早うより聞きわたりつれば、行かばやの心ありけれど、其あくる日は先づとゞまりて、何くれと語りなぐさむ。亭の前とばかり庭ありて、いと間近く山さし覆へり。其間に細谷川ながれて、水の音岩にたえず。此上にさしわたして造れる小亭あり。枕流亭と額を掲げたり。此名は孫(二)楚が意ならんと、

口すゝぐ石もあたりにきりぎりす

此日妙見宮に詣づ、舍よりはいとちかし。猶奥の院へ参らむといふに、こよなう嶮しき道なめり、老の歩の及ぶまじければ、只やみねと人々いふ。されど阮籍(三)が窮途にこそと

(二)枕流漱石は晋の孫楚の秀句

(三)滕王閣序「阮籍猖狂、豈效窮途之哭」

むかふより來れる人の、うちそばみて笠ぬぎたるを見れば、內津にすめる試夕なりけり。かれは彼の里に茶をひさぐ者にて、庵へも疎からず訪ひて年比相知れり。兼てけふ我がとふべきあらまし聞えて、三止が語らひて出せるならし。とばかり行きて、三止も出むかへり。こゝの名をとへば鞍骨といふ由。むくつけき名のいかなる故ならん。

　けふ爰へたづね來むとはくらぼねや
　　くらげの骨にあふ心地する

と戲れて打ちつれゆく。此あたりより山路やゝさかしく、峯々左右に近くそびえ、大きなる岩ども道にそばだち橫たはりて、決々たる溪泉いたる處にきく。

　名もにたり蔦の細道うつゝ山

晝ばかり內津につく。此所のさま、妙見宮の山うちかこみ、杉の木立物すごくしげりて、麓につき〳〵しき家居つらなれり。

　山は杉さとも新酒に一つかね

ゆく〳〵月もかたぶき過ぎて、夜も明けなんとす。

　麓からしらむ夜あけや蕎麥畠

鳥居松といふ所にて、割籠やうのもの取う出てよとていこふ。

　夜と晝の目は色かへて鳥居松

是より杖曳きてかちより行く。大泉寺といふ所にいたる。わづかに一里ばかりを歩びて、老の足まだき困じにたり。又駕にのる。

　山がらの出て又籠にもどりけり

道の側に尻ひやし地藏といへるあり。靈驗あるとて人の信仰するとぞ。

　尻ひやし地藏はこゝにいつまでも

　しりやけ猿のこゝろではなし

坂下、明知、西尾などいふ里々を經つゝ行く。

駕たてるところ〴〵や蓼の花

中長く過行くに、千家いねしづまりて物音もなく、往來の人影もたえてなし。今宵は居待月なれど、まつ名のみにて傾ぶく影は惜まずや、いとくちをしと思へど、さはれ我も又かゝらましかば、かゝる淸光もいぎたなく知らでぞあらまし。大曾根といへるあたりに至れば、家居どももさま劣りて、鷄の聲戸々にきこえたり。

おもひいづる詩あり鷄なく里の月

かくいはゞそは何の詩ぞと、おほめく人もあらんかし。

片耳にかたかは町のむしの聲

やゝ人家をはなれて、野山のけしき月の光に見渡す、いとあはれ也。山田川かち川をわたるほど夜猶ふかし。此川々はかちわたり也。

八月の川かさゝぎの橋もなし

從者ども、あなつめたなど笑ひのゝしる聲に、我は駕よりさしのぞきて、

かち人の蹴あげや駕に露時雨

（一）「武藏野は今日はなやきそ若草の妻もこもれり我もこもれり」

（一）尾張國春日井郡の内

武藏野に露ひとつなし冬の月

又の日、野火留といふ所を尋ね侍り。こゝは伊勢物語に、けふはなやきそとよみし跡なれば、里の名もかくよび侍るとか。業平塚とて寂しきしるしども殘れり。歌のこゝろを知らば、枯草に吸がらな捨てそ、とたはむれて、

こもるかと問へば枯野のきりぐす

內津草

內津の里に住める更幽居三止なるをのこ、予が庵に來る每に、いかでかの山里にも尋ね來よかし、あるじせん、とそゝのかす事年あり。されど、今はたゞ老の鴉の月に浮るゝ心さへ懶くて眠りがちなれば、羽をのぶる事もなくて打過ぎしが、此秋いかなりけん、しきりに山里の景色ゆかしく、ゆくりなく思ひ立ちてかのがり訪はんと、葉月中の八日丑三つ過る比庵を出でたつ。月くまなくすみわたりて晝のごとし。也隋なるをのこは、三止にも予にも常にうらなく睦まじければ、よべより庵に來りて此行に伴へり。櫛次の市

りねも十日あまり、母やある子やもてると、あるじに咄もやをらなじみそめて、此あたりの事など尋ねきくに、昔はこゝもとも月の名におふ武藏野なりし由。今は家つらなり田畑と變じて、露おく草の名にもあらぬ、大根牛房のことにめでたき里なりと語る。

武藏野や今は茶にたく枯尾花

今とても猶端々には、其廣き野の迹のこれりと聞きて、見にまかりける。案内するをとこの聾なるも、時鳥聞くしるべならねばと、其日の興にして、龜ヶ谷下富などいへる村村を過て、かの野には出でぬ。誠に四方に木竹もなく、草さへも今は霜がれはてて、哀に物すごき原のさま也。

武藏野やいづこを草のかげひなた

そこら見めぐりて、

枯野にもすゝきばかりは薄かな

くれ行く空もおもひやりて、

何がしの寺にて、重衡の盃をみる。

さかづきに銚子もそへず寒さ哉

盛久が首の座

盛久が命や濱のかへり花

鶴ヶ岡八幡

御供して鶴も留守なり神の松

十九日金澤の方にまはらせ給ふ。能見堂といへるより八景を見わたす。奇絶の勝景ことばに述べがたし。折からうちしぐれしに、

八景のうちふたつみつしぐれけり

廿一日武府にかへらせ給ふ。

武藏野紀行

庚申のことし、霜月のはじめなりけり。江戸を出でて、濟戸といふ所に、旅より旅のか

して、寺社古跡ども御覧ず。したがひ奉りて、殘(のこり)なく見めぐるほど、句などいふべき所も多(おほ)かりけれど、事にまぎれて皆(みな)もらしつ。道をまもりの神に申す。

守り給へ神もおたびの道すがら

榎の島

此神の御手にやにほふびはの花

白菊が淵

十月やげにしら菊の名もむかし

龍穴

此洞をおもへば神も冬ごもり

鎌倉にて

鎌倉のかまの名さびて枯野かな

梶原が矢筈もふゆのかゝし哉

暮秋

行秋の干魚に殘る鳴子かな

天神

飛石や梅にまけじと霜の花

眞鶴ヶ崎

まな鶴もみじかき冬の日あし哉

大島は遠くかすかなり。

大しまや片目しぐるゝ遠目鏡

はつ島はいとちひさき島の向に近く浮べり。沖の小島はこれ也といふ。又は大島をいへりとも、里人の傳もまちまちなり。

木がらしや片手に撫る島ひとつ

十月十三日熱海をたゝせ給ひて、江府へかへらせ給ふ。道すがら鎌倉に三夜ばかりおは

業平井は里中にあり。愛の男女の常に水汲むかげうつして、自ら妹脊の媒ともなれば、いひならはしたりとぞ。

　豆ひきの影や井筒にまめをとこ

平左衛門湯といふあり。平左衛門かひなしとよばれば湧出づるとて、里の子どもの呼びて旅客に錢などもらふ。

　子どもいざよばれ紅葉に立田姫

重陽にあふ、

　撰り出して菊をいはゝむくさ枕

後の月

　山の湯も饂飩にわくか後の月

木の宮

　木の宮も草からさきへ秋くれぬ

つの祠むかしはたがひに相背きてありし。今は八幡は外にうつして、其謂も殘り侍らず。常に后のみやこを戀ひたまひしが、あとのしるしの松も都の方へ枝葉さしむかひければ、これを都松といひける。僧正の社のきはに大きなる櫻の有りし、中比此うしろに御殿作りけるが、障なりとて此木を伐りしかば、かの松も程なく枯れにけりとぞ。其木のともに枯れたるちぎりならば、ぬれ衣の名もいかなりけんと覺束なし。

松かれてどの木へ蔦や所がへ

僧正の祠は、ことに大きなる椎の木二本のはざまにあり。

御所柹の色にこりてや椎が本

湯前權現に我疾をいのる。

新蕎麥や疝氣に利生みせたまへ

伊豆權現奉納

海と山兩部に月のくまもなし

打まぜて浪にまけたる砧かな

釣舟や案山子のり行く波の上

あるじの子彦助といふ年十四ばかり、常に來なれて、あまの囀めきて、所のことなど聞きおぼえて語る。かれに案内させてあたりの宮寺など見めぐり、漁家に茶を乞ひ、樵夫にたばこの火かりて、吟歩機を忘るゝ程いひ捨てたる句ども、例の知る人のもとに書きつけてつかはす。登歩一里ばかり、日金山にのぼれば地藏堂あり、駿豆の海山眼下につらなり、景色いふばかりなし。富士は西に隈なく、こと山の秋にわかれて雪しろき姿、衣て(一)「錦尙」絅とかいへる、此山の徳に比すべきにぞ。

四方山のにしきや富士にはづかしき

都松といへるは、染殿(二)の后の跡のしるしなりと、野老のいひ傳へたりと語る。いづれの時にか、柿本紀僧正、染殿の后と密通の事ありとて、さらぬ疑の科にてこゝに流されて後失せ給ふ。後は八幡といはひ、紀僧正も宮といはひしが、其仇名のうきを厭ひて、二

(一)禮記の文

(二)文德帝の后

夜に六度ばかり、おどろ〳〵しくわき出づる音高く、山水浦波にひゞきあひてかしましきものから、世の中と渡りくらべて、いかにとかいふべき。網引釣するわざもあれどおり立ちて己が世のたづきとするものは少し。耳なれぬ魚の名ども、うづは、ひらこ、はまち、そうだなど、後にはおのづから見おぼえて皆いふ。山田色づく比にて、鹿追ふ小屋に引板ひきならすなど、めづらしう哀なり。鹿の聲は夜もすがら聞えて、夕霧の巻などよむこゝちす。

　夜は湯にぬれさす袖を鹿の聲

月は殊に海より出で山に入り、宵々の詠えならず、浪よする浦のけしき、我がやどりの東面よりもくまなく見えわたれば、明暮欄干に打もたれて、烏帽子著たらましかば我を屏風の繪に書くべきをと笑ふ。

　ほし棹の是にも月や濡浴衣

　尾花ちるかたはへりけり浦の波

て竹の子を調じて出せるを、いとめづらしくて、

　竹の子にあうて家路もほどちかし

十五日

土田にとまる。

あくる日家につき侍る、此間句もなし。

熱海紀行

府君の御母公、浴せさせ給はむとて、延享のことし江戸より豆州の熱海といへる所へわたらせ給ふ御とも仕うまつり、葉月の二十九日江戸を出でて、熱海にいたれるは長月二日なり。

　草の葉に月のたびねも二日から

此里のさま、後に山めぐり、前に海近くして、いさ見ぬ須磨のけしきもかくやあらんと、折から秋の寐覚も心すむ旅寐には有ける。湯本はことに我がやどりの後に近ければ、日

（一）新古今集「筏士よまてこと問はん水上はいかばかりふく峯の嵐ぞ」

（二）三歸の翁

しき物にめでさせ給ふ。（一）いかばかり吹くととふべき折にもあらず。

ちる物はなくて筏に青あらし

此あたりを見かへりの里といふなりと、人の指さして教ふ。

又いつか木曾の麻衣あさからぬ

なごりやあとにみかへりの里

是はもとより歌枕にもあらねど、句のなかりければ、歌よむ人のまねしてかく口ずさむ、いとかたはらいたし。こゝに（二）あやしき翁のこと、世俗にいひつたへて、誠は三歸の里とかけり。

野尻にとまる。

十四日

大井にとまる。

山中はたえて竹のなき所にて、桶の箍などいふ物も、木にて營めり。こゝの宿にて初め

里に春は告ると歌にもよみし雪のうちの夏は、知らでやあらん、歌よむ人などは、此心もて言ひつゞくる節もあるべし。

本山にとまる。

十二日

けふは福島にて、山村氏が亭に入らせたまふ。家居つき〴〵しく　のしめ上下にもてさわぎて、何くれともてなしたてまつる。鯛鰤などの膳にひろごりたる、けふは山家めきたる心地もせず。

　俎板のなる日はきかずかんこ鳥

十三日

けふは名におふかけ橋をわたる。

　眠るなと馬士はしかれど百合の花

臨川寺にいらせ給ひて、寐覺の床御覽ず。爰に筏士のさま〴〵自由をえたるを、めづら

わたりたる山を問へば、かれは大田澤これは槙榔山とをしゆ。名にしあふ黑髮山にもよらずして、いかで此名を呼びけんとゆかし。つれ〴〵なるに、おもしろき草紙やある、見せよ、といへば、主のいかにたくはへ置けるにか、運氣論といへる醫書を取出でたり。是はむづかしくてよみがたしといへば、義經記を持來れり。こゝかしこ讀みてつかれを紛るゝほど、童はそこに畏まりをれり。

やがてみむ幟もちかし武藏坊

十一日

和田峠を徒歩にて越す。こゝはすぐれて高き嶺にて、今すこし上の方に鳩の峯といへるは、日本にならぶ方なく高きよし。されど此國は地高き故、人はさしも覺えぬと也。けに雪の多く殘りて有り。けふはことに雲深き中をわけ行くに、咫尺もわかぬほど也。

雲ふみてなほゆかし山郭公

行尊僧正の、花より外にとよみ給ひし、谷の鶯のみけぢかき心地ぞする。かしこへも山

げに申出づる事も候はず、と御いらへ申すに、さりともこゝにはあるべき物を、とて笑はせ給ふ。

綿入を木曾路の夏や花の旅

雛の見ぬ山路の桃は四月かな

などさまぐ\に句をつくり見るに、よくもあらねば、御前に啓する事もなくてやみぬ。

追分にとまる。

宿の軒端に淺間山ま近く見えて、けふは晴れたる空に、ことに煙のまがふ方なく立登る樣めづらし。此あたりはいまだ蚊も出ねば、

蚊にはまだたかぬ煙を淺間山

十日

此夜和田にとまる。

あるじが子とて惣太郎といへる、十二三なる童の、茶など運びてかしこげなるに、見え

かくいへる所にて

　くらが野ときけばや里も木下闇

けふは過ぐる道すがら、家々の軒に藤をさし侍り、花をもさし薬をもさせり。所の人にきけば佛生會の手向也と云ふ。故郷にて見馴れぬ事也。陸奥國に花かつみふく類にやとめづらし。

　灌佛もやがてはへとて藤の花

此夜板鼻にとまる。

九日

碓氷峠を越え侍る。般若石といへる嶮岨をすぎてより、さのみ嶮しからねば歩行にて行く。山谷の桃櫻は夏としもなく、木の芽など打けぶるやうなるもあり。けふ御前に出でたるに、いかにや山はいまだ衣かふべき時節ともなし、花なども春の心地するに、例の口ずさぶ事も有べし、此心おもひよれるや、と宣はするに、いさ道の苦しう候ひて、む

の餅酒は見ぬ顏して過ぎ侍る。まことに風雅の本意ならぬもいかゞはせむ。こゝの山はとありて、かしこの川はかくありてと書き付けたらん、その所見ぬ人はさもおぼえぬ物にて、殊に筆の及ぶまじう、何の榮かあらん。たゞおもひよれる句ども少し筆にとむるのみ。

蕨といへる所に、とばかり晝餉とゝのへて出づ。

われとむる手もなき夏の蕨かな

此夜上尾に泊る。

七　日

熊谷寺に直實が像などあるよし、路のあわたゞしくて立ちよらず。

熊谷もはては坊主やけしの花

今夜本庄に泊る。

八　日

鶉衣拾遺中

岐岨路紀行　延享二年

乙丑のことし、君にしたがひ奉りて、卯月六日江戸を出て尾陽にのぼる。一年を恙なく歸國のけふを待ちえたるよろこび、人々も賀しあへるに、

　卯花の中にうからぬ首途かな

年々になじみし武府の人々には、淺からず名殘をしまるゝもありて、流石に心ひかるゝ別とり〴〵なり。

　麥の穗の睫もぬれてわかれかな

今年は木曾の山路を分くる也けり。仕官の身のならはし、心ならず馬槍のいかめしくさざめきつれたる、野老村童に事問まほしきも、物言ひかはさんはにげなき樣なれば、店

中何所レ有ヲ嶺上多シ白雲。只可自怡悦ス。不レ堪ニ持贈ルニ君ニ

し。かれといひ是といひ、此亭に宜からむと、宜白の二字を名として贈る。もし宜しからずといはゞ、白は物の下地(したち)にして、染むればそまる色なるからに、他の宜しきに染(そ)めかふべしと、爰に云抜(いひぬ)けの詞をまうけて、責をのがるゝ物ならし。

（一）徒然草の詞を用ふ

（二）陶弘景「山

見えすくや魚のこゝろも水の月

宜白亭記　應山村氏之需

見て是をいはんとする時は、詞の及ばざる事を苦しみ、見ずしていはんとする者は、心の及ばざらん事を恐る。我聞く、此亭は領主の閑に耽る所にして、謝氏が履を勞する事二町許、脩竹深樹の間をひらきて、登臨亦類なしとか。げに兼好も此麻衣の木曾にぞまづとて靜なる方は求めしをや。されば領主反畜舍にさゝやき合ひて、いざや此亭にさせる名なし、試に予に記をこひて、是が名もそれによらむとたくむ事あり。（一）名を聞きてこそ俤もおしはかられ、名はこれが後ならんぞ、ことに難きわざなめりとむつかれと、此頃そゝのかさるゝ事いと切也。爰に風雅の天眼通なからんやと、潛に此亭をはかるに、嶺の尾の花によろしく、月によろしきより夏によろしく、名におふ駒ヶ嶽にむかつて、雪に又よろしからざらんや。眼下一條の谷川流れて岩にくだけてちる浪も、心の塵を洗ふによろしく、（二）持ちて贈るにたへずといひし、雲心なくて吟魂を助くるによろ

大脇差、野中の淸水のむかしを殘せば、心知らぬ人にこはがらるゝもをかし。靜なる事に好きならひたる事ありて、つれ〴〵の手ずさびがてら、今のたつきともなるから、市中に藥をうらず、(二)二頃の田に足もよごさず、朝三暮四に餘りあれば、かの塞翁が馬のためし、幸や不幸ならん、不幸や幸ならん、世に謗る人はいさ、羨む人の多きをみるべし。此ごろ茶話の餘、我に齋號を定めてよと乞はる。口にまかせて自全齋と名づく。其心あるにあらず、なきかといはゞ無きにしもあらじ。

(二)史記に蘇秦曰く「使我有雒陽負郭田二頃、吾豈能佩六國相印乎」

名レ亭說

青木川の滸にすむ人の、其居に號あらん事を望む。かの川はもとより鯉の多くすむ所とこそきけ。爰に此人の逍遙せば、魚の樂をよく知るなるべし。されば(一)魚ならずして魚の樂をいかでかしらんと難ぜし人は、はた其知る人の知ることをも、其人ならねば知らじとぞ。今此人の知る事を知るも、我ならずして何ぞしらんやと、笑つて卒に知樂舍と書きて贈る。

(一)莊子「莊子曰。鯈魚出遊從容。是魚樂也。惠子曰。子非魚。安知魚之樂。莊子曰。子非我。安知我不知魚之樂」

いひてか記を作らん、只其人にかく傳へよと。木同猶乞うてやまず。予重ねて昔馳走、三人の僧あり、(一)ともに不言の行を約す、既にして一人の僧誤ちて言を發す、一僧驚きあわてて云ふ、何ぞ誓を敗りて物いひしやと、殘の僧かへりみて曰く、二人は既に行をやぶる、今守る者は我一人なりと、卒に三僧の行ともにやぶれりとぞ。此僧の例を思へば、いはずといふもの卽ちいふなる時は、我記を作らずといふも亦卽記を作るといふものならんをや、是を以てかの石に問へ、名にしおふ桃花(二)ものいはぬも蹊をなすはいふに似たり、(三)石も又うなづきたる例あるをと、笑つて卒に是を記とす。

定二齋號一序

大井氏瓦光子は、武門に生れて其家の技に拙からず。されど脚に惱める所ありて、云々に健ならず。かくては弓箭も取りがたしとて、(一)すつべき物はとよみけん藥師寺が心をしりて、五斗の米の望をたち、三石の奈良茶を甘なひ、常に蕉門の月花に遊ぶ。さりとて熊谷が無常を觀じ、瀧口が悲にも懲りねば、髮をもそらず法衣もまとはず、猶長羽織に

(一)沙石集にのせたる話

(二)史記「桃李不言。下自成蹊」

(三)呉の虎丘に點頭石あり、生公といふ僧こゝに石を集めて說經せしに談妙境に入れば石爲に點頭したりといふ

(一)「取ればうし取らねば人の數ならず捨つべき物は弓矢なりけり」

て悲を求むともいふべし。さればこゝの境にありて、世に平生のたのしみを知らぬ人は、夕にたのしみて朝にたのしまず、よく樂を知る人は何か心のたのしまざらん。もし此樂に乏しからずば、誠に吾樂庵のあるじなるべし。

月花の富や心の藏の數

桃花石記

一日木同きたり告げて曰く、或人の家の藪に色異なる石のうづもれてある事久し、或は人是を怪めども、わづかに半面をあらはして出だす事いとたやすからねば、さてやみぬとぞ。さるを頃日、其の友烏貢なる者深く望みて、あるじに受け得、とかくして掘出せり。是を石工に見するに驚いて曰く、此名を桃花石とよぶ。むかし津の國の御影村勝原村より出し、其性至て硬し、物に用ゆるに最上とす、然るに今其もとより絶て出す事なし、世に稀にして人知らず、最珍とすべしと。其主よろこびて是を彫らしめ、手水を湛ふる具となせり。翁これが爲に記を書かむ事を乞ふ。予曰く誠に既に盡せり、其外に何を

忘れがたしなどうかれ騒ぎ、裏なる柴折戸開けて稻葉の露にそほち遊びし序、あるじ此記を記してよと求む。莫逆の間に辭する事を忘れて、かたはらいたき筆とる事にはなりぬ。あなかしこ、知己ならぬ世の人にもらし給ひそ。

又こぼん菊より後の根ぶか畑

吾樂庵記　應二桑雨需一

獨樂園(一)のぬしは、みづから其記を書きて人に其樂をしらしめ、吾樂庵のあるじは、我に其記を求めて其樂をかたらず。我こちたくも君にさとさん。世に樂のおのがさまぐくながら、樂を求めて樂とするものは、哀情これが爲に先だつ。まだき秋風のはやうより言ひしろひて、今年は珍しき月見せんと催せば、巫山の雲心なく立ちさわぎて、夕の雨吟魂をなやまし、其日彼の日は興ある花見せんとさわげば、祈らぬ山おろしはげしく吹きて、賞心霞にへだち安し。況や娼樓舞莚のたのしみにおける、まして世務仕官の上においてをや。蘆分船のさはりがちにて、難波に恨のはれま無からん。さるは樂を求め

(一)司馬温公獨樂園記をつくる

(一)陶淵明門に五株の柳を植えて五柳先生といふ
(二)古今集の歌下の句は「世のうき時の隠れがにせん」
(三)顯昭の歌上の句「さびしさに哀もいとゞまさりけり」
(四)王子猷の故事

ねば利休が寸法にもほだされず。下戸なれども酒をにくまず、しかも淵明が風流をしたふ。さてこそ所も柳町の、その五株のゆかりなるべきにや。(一)みよしのの山のあなたに宿もがなとは、何をおもひの捨言葉ぞや。(二)靜なる望はさも有るべきが、雪の朝に豆腐賣もこず、月の夕は酒をも侘ぶらんを、たゞ此幽栖の、あやしくも市の中にありてさらに車馬の喧をきかず、鹽も油も求むるにやすく、饂飩蕎麥切にも自由をえたり。庭は僅の間地ながら北に一重の窓をひらけば、千町の田づら軒よりつゞきて、田かへす春は蛙の聲近く詩家の鼓吹を木枕に聞き、早苗とる比は螢のとびちがひて、車胤が夜なべに乏しからず。まして稲葉の雲も色づけば、雁わたり蟲啼きて、ひとりぞ月はみるべかりける(三)と、寂し好のかの法師も心とむべき住居なるを、冬はことさらに山々の雪を剡溪(四)に棹をもさゝず、佐野のわたりに袖もはらはず、火燵に目ばかり出せる詠は、昔王維が輞川の別墅もこの物好はいさ知らざるべし。比は長月なりけり、うらなき舊友みたりよたり、爰に招かれて酒のみ茶呑む事ありしが、折しも十五夜の月いとよく晴れたるに、此興は

に眼鏡も忘れがちなれば、行末遠くたのみし人々の、いかに翅もがれたる嘆すらんと、我にてよそも思ひしられぬ。夜話てうくたす（本ノマヽ）ばかりの袖いかにと、かの庭の草どもを季札がむかしに手折りて、あすの七日をぞとひ侍りける。

蟲はまだ人になかせて夏の草

贈二巴水一辭

二十五年の勤勞めでたく功なりて、今や耳目肺腸（一）我が物にもらひかへして、みづからの世帶をいとなむ。かゝる身においてはじめにその心あらざる者なく、巴水がごとく終をよくするは世に多からず。

鶯や籠をいでて竹に巣ごしらへ

某別墅記

あしたに劍を佩いて營中にひざを屈し、夕にはゆふつけ鳥のそら音ははからねば、理屈の關の戸をのがれて、此の閑居に耳をあらふ。そのあるじは茶をこのめども、茶人なら

る程は取られん事いづれの石とも知られども、數へあてて一つを取りぬれば、其外は遁れぬと見れど、又々數ふれば、彼是まぬきゆく程に、いづれも遁れざるに似たり」

（一）獨樂園記「耳目肺腸、卷爲二己有一」

に、笑つてこたへず。いざや〳〵とせむる内に、無下にゆりおこされ驚きて打寢がへれば、例の折敷をつきすゑたり。誠や五十年の變化をみしも、思へば粟餅の煮ゆる間にてぞありける。

悼ニ反喬舍ニ文

無常の風のおどろかすは、目(一)に見えぬ秋をしも待たざりけり。此水無月の十八日に、便の人につけて、過ぎし比より痰のなやましく、打籠り侍れば、久しくおとなひ侍らず、いぶかしとや思ふらんときこえしに、筆の跡も例の細やかに、物うげにも見えねば、たゞ此暑さの故にやあらん、庭に秋草の秋まちかねて咲き出づるもあれば、是折りて使せんと、さしもいそがぬ心に、其日又の日と暮し侍るを、あくるあしたの露と消ゆべしとは、いかに思ひかくべき。世はたゞ夢と知りながら、かゝる夢もならはざりけり。吉田法師がいひけん、繼子立(二)の石も一つうせ二つうせて、今は尾城に蕉門の一老となれば、名望四方に高かりしが、年も古稀には猶三つばかりも足ずや。吟行いまだ杖にもよらず、机

(一)古今集「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」

(二)徒然草「繼子立といふ物を雙六の石にてつくり立てて竝べた

（一）古今集「大ぬさの引手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」

猶おのがじし好む所にひかれて風體の癖はわかるべし。晋其角は作にひかれて、其枝其葉にいたりては、墨子が歎きし白絲も、本の色なくむすほれて、解けがたきなぞ／＼なるべし。強ひてそのかたはしを求めば、

今ぞ小春見よ大ぬさの大根畑

かくもいふべくや。引手（一）あまたの詞をかくして、其餘は風流をかざる。さてや許六がこのむ所はいかに、

手の甲で鼻ぬぐひけり大根引

惟然坊が手筋はいかに、

大根引ちから出いても哀なぞ

露川が身のなる果はいかに、

繼母やたぶさつかんで大根引

さま／＼の風格は得てきゝぬ。さらに我をたすけて正風不偏の一句を得させよと乞ふ

し猪の子の餘波とて、人のゑさせたる餅煮させなど、其間のすさびに大根引の發句せんと、例の集ども取りちらすに、猿蓑の時雨も折からの軒に音なふ。まして炭俵の其夜の切火桶もこの比にやとゆかしければ、これらを枕として思ひ寐の夢なりけり。忽然と人ありて、世々の俳諧の變化などかたる、其辯懸河の如し。さて我いはく、今案ずる所の大根引は、はじめて祖翁の季を定めて古人のしらぬ題なれば、こゝろみにこれを以て問はん。季吟老人世にありて、其時此句を求めんとせばいかに。夢人言下に吟じていはく、

暮るゝまでやすまずひくや大根機

増山井續連珠の趣もこれ也。根機つよきといふ秀句を思ひよりて、あとはそれに叶はせたる迄なり。其後宗因に變化してはいかに、

大根引あと黑波とぞなりにける

黑の一字をあたらしみにして、諸の詞を用ひたる、これらや談林にあらずといはざるべし。いでや元祿の比正風世にひらけて、其門人三千の徒すべて是に德化せられたれど、

（一）南齊書孔稚珪傳に「春日蛙鳴。或問之曰。欲爲陳蕃乎。稚珪笑曰。我以此當兩部鼓吹」

かはづ〳〵、すみよしの浦のみるめのかりならぬ、古今の序にのこされて其徳のたかきや。

かはづ〳〵、廬山の雨のつれ〴〵に、詩人も鼓吹（一）とほめおきて、その聲のたへなるや。

かはづ〳〵、木曾路の橋のそれならで、幽谷に虹を吐きて、そのわざのあやしきや。

かはづ〳〵、玉川の水にすだき、歌人のことばにめでられて、その名の世々に聞えたるや。

かはづ〳〵、朱雀の小田に啼きつれて、逢ふ夜別の曉に、嬉し悲しと歌はるゝ、其哀のわりなきや。

かはづ〳〵、深川の古池にさびしき音をきかせて、翁のゆめをさましたる、其功のうへなきや。

夢人記

旅の住ひは殊にすきまがちなる木枯の窓さしかためて、今宵は世務の妨なければ、あり

にはいとなまめいたる女はらから住みて、そこの旅ねの枕にぞ、常磐の山の岩つゝじ、忘れがたきかくろへごとも思ひやるに妬かりぬべし。さるを此作者は、蕉門の俳士とこそ聞くに、千萬言のうちに、などや一句の吟もなし。是や無絃の琴を撫したる、誠に琴道の尋常ならず、音立つる調にも勝れる事を、ひそかに此寐物語に聞き侍る。

贈二五條房一畫贊

小松殿の教訓は琵琶法師の曲に殘りて聞く人感を起し、白藏主が異見は大藏和泉が家に(一)傳へて、見る者笑を催す。誠のあるとあらざるなるべし。我筆すさびのざれ畫ながらもやう過ぎたらんは正風にや違ふべきと、深切の一棒に始て目悟めておもふに、誠に是よりいくばくの誹をか遁るべき。我爲には千金にもかふまじき賜なるをや。是を贈りて是を謝す。願はくは五條坊に納めて、昨非を改むるしるしと見給へと也。

こゝろある人の垣ゆふ野菊かな

（一）大藏も和泉も狂言の家元

るべき。そこを正風の俳諧にいはゞ、同じ野の草ながら、みどりにもえ錦にそめて、古き物は古き儘にして、其日其時に新しき、此野に心を遊ばしめば、たねはよし武藏野の、これもつきしなき言の葉なるべし。

寐物語後序　應二安田氏之需一

灞橋(一)に巵を擧げて陽關の曲を諷ひ、八橋に餉をひらきてから衣の歌よみしも、同じ旅の露けさながら、それはみぬ國の花鳥をかしからず、是は倭詞にさへられて、にげなきわざは言ひもらすふしぶしも多かるべし。昔我が翁、(二)川ばたの捨子に物なげくはせ、芋(三)あらふ女をも詠めすてざりしより、世に其風を學ぶ人、多くは杖笠の姿情をしたひ、紀行まことに牛に汗すべし。それが中にも、此一軸の殊に縱横自在をえて、あるは猿渡の舟に無常を觀じ、志津ヶ嶽に忠義をしたふ。小谷の城の跡をとへば、物おぼえよき男出來りて、昔がたりに竹杖も朽しつべく、今庄の驛に宿をかれば、笑上手の女ありて、酒あひに草鞋の疲れをわする。たのしみかなしみ見るうちに行きかふ中に、かの金津の里

(一)長安の東にある橋「漢人送レ客至二此橋一、折レ柳贈レ別」

(二)芭蕉翁「憐二捨子一辭」にあり、其句「猿をきく人捨子に秋の風いかに」

(三)野ざらし紀行「芋洗ふ女西行ならば歌よまん」

(一)後漢の嚴子陵、富春山にかくる、其釣せし處を嚴陵瀬といふ

そふ。不易は時雨の色もかはらず、流行は折々の風になびきて、爰に東坡も七賢も、いさしらぬ趣ありといふべし。身はよし劒冠の仕途におきて、理窟の塵にまじはるとも、纔に半日の閑を得る時は、是を五湖の舟棹とも詠め、富春の(一)釣竿ともなし、ある日は竹馬の稚心に戯れ、鳩の杖の老をもまねびて、俳諧自在の遊をしれるより、千竿の名のむなしからずは、よもつきじ〳〵、萬代までの竹のやどりと名におふ鳥も此枝をたのみて、ゆかしき軒端なるべし。猶思ふに、此亭の朝風さやぐ春も有るべく、雪にをかしき夕もあるべけれど、我はたゞ郭公の告ぐるを待ちて、筍のさかりをこそ訪ふべけれと、たはぶれて筆をとゞめぬ。

野遊集序　應二川合氏需一

仁者の山をも逐はず、智者の水をもしたはずして、今年野遊をおもひ立てるは、宜なり武藏野の騷客なればならし。そも歌よむ人のいへるは、其道を濱の眞砂とは、盡きぬたとへはさもありぬべし、おなじもののいつも白からんは、目まぎろしき方のいかゞはあ

が齒黑壺にも沈むべき身の果なるを、取上げて閑居の花生となしぬ。鈕よく〳〵示して云く、

幾春庭の土をかへして　もえ出る草の根は斷つらめ
今より過し罪を悔まば　いけおく花のよはひを守れ

杓子銘

或人杓子を床の餝物に物ずきして此銘をもとむ

爰に千早振お多賀杓子ありて、用ひざれば鼠と遊びて味噌桶の陰にかくれ、用ひられては虎の勢ありて床のうへにものぼらんとす。さるを杵も擂小木も同じ幸を眞似んと思へる、これを世のたとへにして杓子定規とはいふなりけり。

千竿亭記　應㆓下條氏之需㆒

亭に名づくるに千竿を以てする、君嫌ふ事なかれ。竹は古人のとり〳〵に愛して、友には今更ふるめかしきも、物は年々にふりゆき、姿は日々にあたらしからんに、まして蕉門の風雅にいはゞ、句は此君の空心にもとむべく、てにははふし〳〵のほどよからんを

（一）晉書劉伶の傳「使ニ人荷レ鍤隨レ之。謂曰。死便埋レ我」

婦に三從の道あるや、其家に在りて親にしたがふも、父母まめにして揃へばなり。嫁して夫に從ふも、中の睦まじければ也。老いて子に從ふも、よき子をもてば也。物の三つ揃ふは稀にして有りがたし。鼎の脚も三つ揃へばこそかたぶかね。宮地氏の家に娘を持てり。子の年子の月子の日に生れたりとぞ。願うてなり難く求めても得まじき不思議なるをや。子はそも十二の始にありて、しかも大黒天のつかはしめ、打出の小槌おもふままなる行末の幸を賀して、宮地氏に贈る。これ其求なればならし。

花も何みねにみどりの姫小松　峰は三子の隱語也

鉏花生箴

見ぬ國の上戸が、我飲死にたらん所に埋めよと、其具を常に荷はせてありきたるとか。今日もわするな明日（一）も忘るなと、調市にせわやきて、祝言ぶるまひの門々へも持ちて立たせたらん、物忌する人はさぞ惡み嫌ふらむ。これらは鉏に赤烏帽子ながら、わる物ずきとはいふべからん。我がせどに古き鉏あり。久しく久三が手にも捨てられては、今玉

興をうしなひ、馬やろの聲は魂を消す。雨の夕は殊に悲しく、月の曉はいつもねぶたし。我かく知りて一座旅情の附合に及ぶ時、眼をふさぎて爰に來往すれば、箇のうち新規無量の事あり。たとへば今世の軍者としるべし。つひに軍はせざれど、かけ引備立の師となりて人をも敎ふるは、あつぱれ軍者也。我又門を出でずといへども、心をこゝに用ふる時は、卽ち千里の旅客としるべし。此一段はわれ二十七歲にて書きつけぬ。行末いかなる旅をして猶奥深き隈はしるとも、此論は一字をかへじ。蓋風雅の居ながら物情に亘るの謂を、後見ん人にしらせんとなり。

馬かたの寢たあともありつく／＼し

月ひとつほしや／＼とたび乞食

我紋の夜著にあふたる旅寢哉

出女の口に蚊のよるくもりかな

賀二小女一辭

茶屋の田樂は串の數をあらため、酒の直は茶碗に極め置きて、口のかけたるを置くはいとさもしきを、其缺口に親指をあてるは、ともにぬからぬ才覺なりけり。出女の上は木導が說につくしぬ。御油赤坂ははでにて名高く、吉田濱松は地味にして艶くし。足袋鼻紙の商ひは譯の相紋としるべし。赤前垂紺前だれは所の風にもよらん。片輪車の染入も、引くには廻るならひにて、旅客のうさを慰さむ便とはなれり。かりの契もなほざりならず、草鞋のふしに心をつけ、酌茶に情をはこぶなど、さすがに涙もよほす人もありなん。五十三次はさら也、邊土の旅に猶うき事はありとしるべし。木賃の宿いといぶせくて、行水の湯は鍋にてわかす、片破月の盞をしたれば、藁火の灰飯にまじはりて、喰ふべくもおぼえず。さらでも蚊屋は破れたるを、赤子せわりて夢も結ばず。向ひの土臼のうたはをさまりて、隣の女夫いさかひを聞く。ふすまは引立てたれどおくび形にあきたるなど、足つかれては褌かゝぬ男に駕かゝれ、戻り馬にまたがれば新鞍に腰骨をいたむ。うき目つらき目卽ち風雅の種にして、言ふにつきず思ふに限なかるべし。あるはいかつの乘合に

(三)駿河

笠の緒の取りいそぎたるも、さすがに堺川越る時心細く見かへるは、父母の國をはなる誠也。案のごとく歩みつかれては泊を待ちかね、わらぢの緒は解たれど、あがりはなに兩手をつき、やゝ膝頭にて這ひあがり、居風呂に呼びたてらるゝも、中々物うきばかりにて、桶に手をかけぬれども、縁のいと高くおぼえて、横ざまにまろび込みたれば、四方はせばくて肩はすぼめたり。折釘に物かけるなと、連のをとこに氣を付けられ、財布の置所に迷ふ。あるは名物の小刀、仕出しの煙草入賣、ねぶたき耳にかしがましくて、木枕に横たはりてぞ一日のたのしみはおぼえぬ。心よき夢は七つの鐘にゆすられ、起出づる床のうさは、戀の別にもまさりぬべし。鷄の聲も鳴きわたり馬の鈴音などして、馬士のあくびに横雲はわかるれど、目は猶さめかねて追分の並松にだきつき、出はなれの橋につまづく。道端の家に松葉ぱち〳〵と打くべて茶の匂ひかうばしきは、浦山しく心とまるわざなるべし。(三)安倍川の餅は山吹の面影ありて淸らかに、岩淵の小豆餅は藤の覺束なきに似よらでいとむくつけ也。大根漬は喰次第として、すべて五錢の定なるべし。

だあやしの篛といふものにいれて、葭垣の南うけ、又は井戸屋形の端にさし置きたるをこそみれ。さるを、

御製のめでたきをおもへば、目にみると心に知るの二つならざるいはれならずや。其雲の上にこちたくもたぐふるにあらねど、わが旅情の十が一つもくみしるは、風雅の門を覗くによれり。抑明日の足をたばひて草臥れぬさきに馬にたより、闇けんこの相詞をもて行過ぎがてに駕の直をなし、物をおとさず草鞋をぬがさず、茶屋の嫁々泊の下女にもしこなして物いひたる様、初心の者のうらやましと思へるばかり、旅になれたるわざならん。旅を家とし千里を胯にかけたる者は、晝休の店に匍匐うてもやがていびきはかくなれ。只年わかき初旅こそ、其きはは物も手につかず、無用の繼ぎせるに物ずきを盡し、笠草鞋も十日以前より鼻の先に掛置きて、船川の説法きかじと、伯父の見舞に出逢ひてそはつきあへるは、駒の朝はやりなり。さるを故郷の旅とおもへば、さすがに節分の豆、早船の守とさわがれて、少しは心の覺束なき方もあらん。出立は茶漬にはしらかし、菅

いづ方にてか酒一つ酬まんといふに、秦皇の雨ならずも、雪に立ちよらば松屋の名もをかしと、つひに此門に下駄の歯をたゝきて、

面白の雪の蹴あげや小挑灯

旅論

俳諧は人々笠草鞋の情を専にして、旅情をしらぬ人は風雅もいと乏しくや。かはゆき子に旅をさせよとは、風雅に魂入れよとの金言にぞ覺え侍る。誠に花鳥月雪は、うちある樣にもありぬべし、戀と旅とに深き哀は知るならひを、我十六の春やらん、始て伊勢に詣でて、わづかに六日ばかりの旅行をなせり。其比風雅もかつて知らず、今の思出とするにたらず。是より十とせの今にいたり、たゞ宮路にのみ往來して、さらに旅だつ事なし。しかるに(一)川風寒み千鳥なくなりの歌を唱ふれば、六月の晝中も寒く覺ゆると古人もいへりける。げにや妙句を吟ずれば其境の思はれ、其境を思へば新句を得る。(二)干瓜や汐のひがたの捨小舟とは、いともかしこき御製なり。此捨小舟、玉敷の庭にある事をきかず、た

(一)大江匡房「おもひかね妹がりゆけば冬の夜の川風寒み千鳥なくなり」
(二)靈元法皇の御句とぞ

(二一)也有「朝霜や誰がおくられし下駄のあと」

らず。いざころぶまでと詠めし草鞋の跡を尋ねて、白妙なる夜の目もをかしからんと、誰彼の無差別つれ、いづこはあれど例の新地にぞ人は起き居たらんと、南頭にあゆませ出づるに、町はねぶかの所々かをりて、酒屋饂飩の行燈にこそ、まづは目とゞまる夜のさまなれ。廓の門にさしかゝれば、おなじ心のうかれ人も見えず。月は師走の空すさまじく冴えわたりて、はえあひたる雪も流石によそよりは身にしむ心地して、過し年武陽の其里にて、誰が送られし下駄の跡と、(二一)朝霜を詠み捨しふること、今我ながらなつかしく、ふと打誦じたるに、見も知らぬをのこの頭巾をまぶかく、あたゝかげに木綿羽織にふくだみたるが、行過ぎがてに耳とくも聞きとゞめて、げに此心ばへの淺からず面白くさふらふと、打かへし吟じて、むかし伊勢の富倉屋とかいへるに住みける女の、馴染の客の別を見送りて、雪のあしたに立ちつくして、初雪やわがふところのさむる迄と、口ずさびしをぞ思ひ出侍る、今こゝらにも、さる情しれる女こそ候はね、口をしくこそと、なれ〳〵しげに語りて、やがて立別れぬ。いかなる者なりけん名も問はず。さては今宵

（二）郭橐駝、植木屋の名人

（三）大江佐國、花を愛せし人

（一）白樂天「香爐峰雪撥ㇾ簾看」

いふべくもあらず。春の雨に鍬を入れても、栽うるに橐駝（二）が手をくだき、秋の霜に箒をあてて、凋むに佐國（三）が心をなやます。むくつけき土大根だに恩をしる心あれば、まして年月の愛をかさねて、いかでか此宿の千年を守らざらん。いでや世に此花ありとも、此人あらずばこの色にさかじ。さらば此人ありとも、此花ならずば此色にさかじ。あるじや此あるじならん、菊や此あるじならんといふに、あるじは其譽を菊にゆづり、菊は其功を主に讓りて、この挨拶の果しなくば、世にいふ水懸論にして秋やむなしく暮れぬらん。いざ我判者せんといふに、物定の博士にはあらねど、只賦つくりて其日の笑とはなせりける。

蝶々も土ふまぬ日やきく合

雪見賦

月花は其へだてなきを、雪見はひたぶるに下戸ならぬ物好ならん。さるは香爐峰（一）に簾を捲き、こたつに目ばかり出したる、それも雪見といはゞいふべけれど、我門には是をと

(一)杜牧「停レ車坐愛楓林晩、霜葉紅二於二月花一」

ふ刺(そり)の匕先も、正氣散(しやうきさん)にやすむひまなく、かれらは時を得たるに似たれど、さして手柄(てがら)の療治ならねば、はかゞしき藥代もよるまじ。噫此秋、いかなればかゝる災(わざはひ)を下して、吏民にくるしみをかけ給ふぞ。願くは天神地祇愛愍(あいみん)の眸(まなじり)をめぐらして、咳氣(がいき)の邪神を速に西の海へ送り給へ。さらば臣等も幣帛(みてぐら)のむつかしきわざは知らずとも、笹の葉にして切りかけ太鼓をならして、及ばずながら力(ちから)を合せ奉るべしと、丹誠を抽(ぬきん)でて告げ奉る微志を、それみそなはし給へ。

菊合賦　與二成田某一

此あるじの菊作るに好ける、好かずば誠にかくあらましや。されば作るべき花のこれならで何ならん。白は吉野の雲(くも)をなびかせ、黄は玉川の露をあらそふ。あるは二月の紅(一)にまさり、あるは八橋(やつはし)の紫をうばひて、詩客の車(くるま)も停むべし、昔をとこの袖もぬれなん。淺深濃淡の色はさらなり、花形は百種の新奇を咲きて年々に其目をおどろかし、國々に其名を聞ゆ。むかし陶氏が菊に名立てるは、只有(あり)のまゝの色香にとゞまりて、主(あるじ)の爲(ため)には

烏瓜の備はりたる食もあれば、身を墨染の善心に發起して、今かくいへる示をも、よくあゝ〱と打うなづかば、あんかうがらすのら烏、うかれがらすの浮名も消えて、長くお烏大明神の惠かうむるべし。さらば鳴子の枝もならさず、案山子も弓を袋の世となりてん。アヽ人の爲におそるべし、身のために愼むべし。

送二咳氣神一表　于レ時在二武州一

今年秋の初風身にしみわたるより、老となく若きとなく疫氣になやみて、清涼の露草葉を爭ひ、穂薄のかしらふらつきて、喰物の味をもいさしら河のそれならずも、とめがたきせきに苦しみぬ。上は玉だれのひまより煎藥のかをりほのもるゝより、下はあやしの柴ふる人までも、頭をからけずといふ事なし。芝居入なうして盆狂言の櫓幕いたづらに絞り上げ、色里客たえて夜見世の行燈かゝぐるによしなし。葛西の瓜畑も下冷に守る人なければ、隅田川の渡守も發熱にこがれ〱て、水馴竿の細元手を流す。祈禱の法師も長髪に忍辱の姿を失ひ、貴禰も祝詞の聲うらがれたり。醫者賣藥の門のみ賑ひて、きの

かなきしわざと、其關守もとがめざるべし。

する墨や明くれ須磨の花ぐもり

鴉箴

孝は百行のもとゝこそ聞くに、かれは反哺の孝心はありながら、いかで啼聲をさへ不祥の物に憎まれけむ。夫も夕ぐれの端居に、泊りがらすの三つ四つつれたるは、淸少納言もあはれとは見しを、まだ曉の鐘もならぬに、月夜あるきに起きさわぎて常に廓の夢をやぶり、かの楓橋の檝枕に、唐人(一)の寐言をも驚かしぬ。これらは人にかこたれながら、かへつて風雅の種となりて、烏丸殿の歌にもよまれべきか。田畑にむらがりては、麥をほぜり大根をつゝき、(二)曾晳が隱居屋のなつめも、栗栖野の祕藏の柑子も、などいたづらにあらしけむ。然るに古きためしには、かの烏羽玉も汝が寶にて、名劍に小烏あり、おふけなくも日輪に(三)三足の烏もおはしませば、さのみさがなき物とも思ひくだされず。されば一たび己を顧みて、鴉の眞似をする僭上をやめ、鷺を烏の無理をたしなみ、烏麥

(一)張繼が「月落烏啼」の詩

(二)曾晳羊棗を嗜む

(三)淵鑑類函「五紘通義曰、日中有三足烏」

松に鶴さて新そばに雁の聲

須磨硯記　應二加賀島氏之需一

連城の珠は其德を名とし、小烏の劍は來るいはれをしらせ、蟬折の笛はそのかたちの似たるをいふならん。それが中に、此硯をあるじの須磨とよべるには、此海の際に櫻の花を彫りなせるが、名におふ若木の俤ありと也。げにおもしろし。此浦はむかし平家の陣をとりては武士の譽をあらそひ、又は源氏のかりのうつろひに艶なる物語のあはれも添ひて、武になつかしく文にゆかしきを、まして其六十帖も、此卷より筆はたてそめて、本末もとゝのほりぬとか。其人の名の紫なるに此石の紫なる、それも捨てがたきゆかりなるべし。さればあるじの徒然のすさびに、みづから妙觀が刀をもてこれに覆へる物つくり、猶我に一語をそへよといふに、そのいふ人もいはるゝ我も、今年は吾嬬の旅客となりて、ともに故鄕戀しきすさびに、羨しくもかへる波かなと、此須磨の海の名にひかれて、つひに此記のぬしに成りぬ。いざや浦のみるめも恥かしけれど、よし蜑の子のは

(一)所謂趙氏連城の璧なり

鶉衣拾遺上

壽亭記

むべなり、此亭にことぶきの名ある事。門に萬里の湖を通じて千艘の出入るあした、一葉の行きかふ夕、枕によりて閑を求れば、軒端になれて伴ふ鶴あり。酒をとゝのへて客を呼べば、俎板に生きてはたらく鯛あり。さるは所の仙境に似て、漁村に近き自由なるべし。ましてやごとなき蘭の檝、桂の棹もこゝにうかぶ日は、枝も榮ゆるとうたひつれたる松風の里の松風も、濱の名にしおふ君が千年をや呼續ぬらん。もとより熱田潟蓬が島も這ひわたるばかり、かしこき神のめぐみは更にして、塵外の佳觀にあそべば、世にありふれたる饂飩蕎麥切も、爰に不老の藥となりて、ことさらに壽の一字の僞ならぬことわりを知るべしと也。

也有翁の著述のふみ、鶉ごろもにつきぬとおもひつるに、猶かゝるめでたき錦繡のかゞやける衣ぞのこりたりける。いでや、さかさまに著し朝服より葛巾山服の老の末まで、さる斑爛のいろにほこらず、てゝらふたのの いやしきをすてず、常談俗語にこゝろをやりて、常のすさみとせられしは、はづきにさらすほしぎぬの、すぐれてたかきこゝろとぞ知られたる。あはれ六德そなへし君子にておはしけるを、十德きたる誹諧子とのみおもふめるは、ばくものをのみめにふれし、ふるぎの市のふみちがへなりけり。そもく\このふみは、なごやなる垂穗ぬしの篳笥のそこにかくしおかれしさいでなるを、袖おほくびとゝりならべて、終にたけある衣とはなしつとぞ。かゝるみけしにおのれが墨つくべくもおぼえざれど、ふるきとくいのこはるゝまゝに、此はたぞてをかいけがすも、じちにかり著のまへしりへ、身にあひがたきことになむ。

六樹園主人

上下と置きかふるにも、心おなじくして呼ぶ所聊あたらし。終に秋千居の三字を題して、此主の求にかふることしかり。

（四）司馬相如卓文君と成都に佗住居の時鷫鷞裘をぬぎて酒を買ひし事あり

（一）項羽の語「富貴不歸故郷。如衣錦夜行。」

（二）禮記の文

傳ふれど、猶一室に扁すべき號あらむことを予に求む。卒爾に醉鶴の二字を與ふ。其意いかにと問ふに、かの鷫鷞（四）の裘を脱ぎ、金龜を解いて價にあてしためしあれば、仙鶴を日々百抔に醉はしめて、もとよりかれが持合せの千年の齡を、酒手にこちへとる合點也と、且戯れ且祝して、あるじが爲に謾に筆を採る。

秋千居記

居所に號を定めてと請ふ人あり。其人もとより名を楓夜とよぶ。楓は紅葉にて、夜の錦にかよへるにや。實にそれ錦をきて（一）夜行くが如しとは、富貴にして人に知られぬををしむ辭とぞ。されども其榮を他に羨ませ誇る心のある人ならばこそ、白晝に面をさらけて是見よがしの振舞もすべけれ、身に徳あり家富まば、いかに隱ろへたらんとも、世に自らかくれなかるべし。さてこそ錦著て（二）絅をうへにすとの、かしこき敎もあるものを。我は只其夜の錦こそ床しけれ。物必尤からぬは長久の端なるをや。されば夜の楓の限りなき世々を祝して、千秋の二字に定めむとするに、其唱古くしてめづらしからず。此字を

菊とりし手もふところや霜の朝

定二茶名一文

茶をあらたに製して、名をいかゞ定めむと我にかたらふに、とりあへず雑の一句を筆に任せて、

茶の下をあふぐ片手は枕かな

されば手枕ともいはゞや。

醉鶴亭記

こゝに呉竹の世々經たる酒肆あり。さるは臨卬(一)にかけむかひのわびしき店には似るべくもあらず。又六が杉葉常盤の色深く、碓のこだま花紅葉をうなづかせ、土藏の白壁雪を奪ふ。其あるじ又風雅にさへ富めば、騷人ことにこゝにたよるに、酒債尋常行處にあり(二)といひしは、つもる行への覺束なくも、毎日杖に百錢をかけて(三)、現金買のをのこそ、二季の帳をも騒がせず、たのもしき得意ならめ。されば暖簾には名におふ浅野屋の風を

(一)司馬相如が卓文君と共にひらきし酒店

(二)杜甫の句

(三)阮宣

おなじ山たゞ名をかへて呼子鳥

與レ某文

好みて豪飲に耽る人あり、いかに思ひよることか有りけん、忽ち八仙の仲間を遁れて、今よりはいたく醉はじと固く誓ひけるが、猶行末の亂、我ながらうしろめたし、座右に守るべき語を書きて得させよと請ふ。我はもとより下戸なり、醉ひて面白きやらん止めてよきやらん、其心に關からず。されども其責のいと切なれば、否びがたくてすゞろなる一句を筆す。

神もうけよ酒過さじとせし御祓(一)

一老翁畫賛

此畫は誰をうつせるならん。強ひて名をつけてと望まる。容貌うたがふらくば、陶氏に髣髴たり。されども例の菊なきはいかに。嗚呼我是をしれり。東籬すでに霜白うして、五株の柳も骨ばかりなる比か。是を更に冬淵明とはいふなるべし。

(一)古今集「戀せじとみたらし川にせし御祓神はうけずぞなりにけらしも」

六々菴に別れ、反喬舍世を去りし其折々の傷は、さることながら、猶此五條坊の健なる忍山かひなき其世のことどもをも互にいひ出でて、老を慰むつまともなりしを、名に呼ばれし蕣のはかなき秋をだに待たず、此水無月の露と消えし、惜むべし悲むべし。松竹卒に齢を譲らず、(一)桃李もとより言はず。そも我今日よりして、誰とともにか昔を語らん。

　なき友に泣くや心の羽ぬけ鳥

　　贈二信州松本射山一

姑山といふは、さきに宗匠某に受け得たる名なりとぞ。しかるに此となへの差合ごと出來て、改名の字を予にもとむ。されば此名を思ふに、めでたき(二)姑射山の字を摘みてかくは言ひしならむ。しからば上の一字を置きかへて射山とやいはむ、下の一字をあらためて姑峰とやいはむ。いづれももとの意は失はじ。二つに一つを定めむは、主の撰にあるべしと、筆の序にかくいふ。

(一)朗詠「桃李不レ言春幾暮。烟霞無レ跡昔誰栖」

(二)莊子「藐姑射之山有二神人一焉」

むべき程にもあらぬを、深く風雅に心を入れて、其才の勝れたるのみか、只明暮のふるまひもまめやかに、人にもてはやされて、只此人を見ならへと、若き子持たりける親々は、異見の度のこと草には引出だされつるが、あはれ世にあらば蕉門にも一旗の大將とは、たしかに秀づべき器を、かゝる夏野の露と見なせし恨、けふ御祓せぬ人の袖も、誰か泪の川浪にしぼらざるべき。今は詮なきたまよばひして、牌前に一句を手向け侍る。

こぬわかれあすの文月も片だより

悼㆓八龜㆒辭

時節庵のぬし身まかりぬ。馴れむつみし年月を思へば、老涙さらに禁じがたし。我庵の巽にあたりて、其あだし野も遠からねば、夕べの霧かと立ちのぼる、はかなき空を詠めやりて、

蚊やりにも泣いて見る野の煙かな

悼㆓五條坊㆒文

べきなど、うち笑みきこえしを、あなゆゝし、かばかりの惱にいかでさることのあらん、今は日にそへてぞ力つき給ふべからん、誰彼などかたらひて、やがて一夜の伽をし侍らんなど、さしむかひたる俤の、今更に目の前をさらず、猶ものに感じたる氣色なれば、又こそといひて立ちつるが、それこそ長き別れとはなれりける。我嘯花子が謀かきしほどは、互に袖をぬらして、さるにても世に不思議なる人の終かなと、有るまじきならひの樣に、愚なるまで惜みあひけるを、間もなく又其人をおなじ昔に見なしける、此恨みいかゞはせん。起きて思ひ臥してかなしみ、空しく隣笛(一)に腸を斷ちて、一句を手向くるもものうけれど、

誠とはまだ思はれず初しぐれ

悼鶴此文

今年の秋にあはじとは、誰に誓ひし命なりけむ。此水無月の晦日に、櫻井氏鶴此身まかりぬ。かく短夜の短かるべき端なるにや、いまだ年も二十四ばかり、月花の哀も身にし

(一)書言故事「晉向秀在山陽聞鄰人有吹笛者發音嘹亮。追想曩時嵆王遊宴之好感音而作思舊賦」

(二一)杜甫夢二李白一詩「落月滿二屋梁一。獨疑照二顏色一」

若靈魂物しることあらば、梁月(二一)の夢にも見えて、此手向の敲推を定めよ。嗚呼それ富士の雪は時有りて消ゆべし。此恨綿々として盡くる期あるべからず。

供花　そちむけて魂まねかせむ花すゝき

拜禮　社齋に泣く袖もなき夜寒哉

草風誄

おとゞしの秋は此武藏野にありて、嘯花子が訃音に魂をけづり、今年も同じ吾妻に下りて、祈るかひなき神無月に、草風子がはかなき便を聞きけるは、如何なることにや。其文披き見しには、餘りなる驚にや涙さへ落ちず、たゞ空をのみうち詠められしを、猶さだかに夢ならざりけりと思ひ知るにぞ、ほろ〳〵と袖は濡れそめぬる。過し秋の比、けにいつの日なりけむ、いまだ旅立つほども定まらざりし比、勞などひ侍りけるに、其折は頼もしく見なして、露落つる萩が枝の頭も輕げにもたげて、いでよこのころは、心地も死ぬべく覺えたれば、辭世の句など思ひよせたるを、かゝることもむだ骨折となりぬ

戯れにくみ、たま〳〵取りかへたる句振有れば、是は我ながらそこの句をいひたり、それは我が句をそこの言はれたりなど、さるがひ興じけるも、はかなく一夜の夢とはなりけるよ。思ふにかなし。ある年はそこの別墅にいざなはれて、夜をかさねたる清談をなし、あるは其山かしこの寺に、すべての行樂杖をあひ合ひ吸筒を荷ひて、露もたがふ事なかりし中らひの、此春の御恵によりて、我はおもはぬ官にうつり、暇なきにうち紛れて、風雅の會もひまありしが、卯月は旅の衣にぬぎかへて、百里の東に別るゝ名殘、ただにやは止まむと、梅軒に半日の閑をぬすみて、かの山に花あり雪の郭公、と我を見立てしに、四月になじむ菅笠の旅、といひつゝ、猶我もまた、一しげり蔭そへて待て今年竹、と取りあへぬ辭に互の無事を祝しける中にも、世のあだなる習ひもあればとかなしく、顏のうち守られつるも、それは我身の上をこそ思ひつれ、花子はすぐれて健かなれば、かゝる歎を我聞かむとは思ひもかけざりしに、かくぞ定めなきとは、始めて思ひ合されぬる。されば此別のかく怪しきまでに覺ゆるも、我には理と人も思ひゆるすべし。

じの風流いかに心にくき住居ならんと、おもへばゆかしく、見ねばいよ〳〵なつかし。

生壁にまた旅の香やほとゝぎす

嘯花誄

（一）絃を斷ち劍をかけしむかしの涙袖にしたゝりて、今年ぞ身一つの秋とは歎かれぬる。さるは梅軒の嘯花子、いまだ二十に三つを一期とし、此中秋の月をも待たで、故郷の露と消えぬと告げこすにぞ、目に見えぬ風の音におどろくは、たゞよのつねにして、ひとへに鳥の翅をかゝれたる悲、たとへて言はんかたなし。誰か惜まざらん。此花子は武門の藝能他に勝れ、百事百成の器用のみか、深く蕉門の跡を慕ひ、過ぎし比は一日に千句の獨吟を試み、又は夏中百題の日發句をつらね、明暮風雲霜露に魂をなやまし、一たび此道の大悟せむとは、常の諺なりしぞかし。我はた如何なる宿世なりけむ、斷金の交久しく、月の夜ばなし雪の朝會、其人もれて我をかしからず、我かけて花子樂しまず。さるを一座の口ぐせに、花子は天象時節のけしきを好み、我は人事の上かちて、常に其事を

（一）伯牙季札の故事

いでや印を解き冠をかけばやと、世を迯尻の心も誘ふべし。孟母の折々借屋替も只それなり。永田氏の居宅は城樓を望みて、金鱐常に軒に輝き、朝日夕日の詠ことなりとて、主人是を愛し、則望鱐の號を掲ぐ。愛すること誠にむべなり。官路に立ち青雲の志ある眼に、常にかしこき御座所を仰げば、世祿の高恩忘るゝ事なく、報國の忠情日々に撓むべからず。かくて功なり名とげて後こそ、子孫に長く傳へ讓りて、かの山林江湖に望をうつしかへ、殘生をも安く養はめ。今は此望何かは是にしかむ。主人此記を求めてゆるさず。筆にまかせて其責をふさぐ。人嗚呼なりと笑はむも、よしや請はるゝよりも、笑はるゝは身に安ければなり。

訪ニ以文一辭

以文子君にしたがひたてまつりて、木曾路の夏げしき、名におふかけ橋寢覺の詠をつくして、歸國の折しも、かねてあらたに家居をまうけ、此新宅に馬をとゞむ。さても釣りそめし蚊屋の匂ひに、猶旅寐の心やせむ。今ことに夏をむねとする物ずきに叶ひて、ある

ねたきわざなれ。庵守りける男の思ひがけなくて、顏は目ばかりになりて、驚きまどひぬらん樣も、思ひやるにをかしかりけり。さるもあるじの居たらましかば、椎の葉にもるもてなしもすべきをと、今更いひたらんは、かの千切木（一）といふ猿樂狂言の心地やせん。秋もやゝくれぬ、時雨のやどりは更にして、友おもはるゝ雪もあらざらんや。かさねて夜討の油斷すべからずと、茶碗とゝのへきせる求めて、是よりひそかに人待つ心はならひ侍り。猶菊によせて句を殘し給へる、楚巾子いひつかはす。

犬蓼のはなやとがめし留守の門

芭蕉によせて句を殘し給ひし薦丈子へ贈る。

いかにとひし立枝も見えぬ梅もどき

望鱐亭記　應二永田氏需一

目に視る所にして思是に從ふとは古人の言なりかし。されば世の人の住する所、或は山林にむかひ江湖に望むを以て其居に誇れども、官士の上に於て此望にこゝろをとめば、

（一）臆病者が恥を受けてこはごは仕返しにゆき留守をつかはれて空威張する狂言

茶にたわむ竹や雪より猶寒し

飛鳥山賦

今日はこの事かの事にさはる事あり、明日は飛鳥山の花見ん〳〵と、心に過ぐる日數も、やゝ彌生の廿日あまり、尋ねし花は名殘なくちりて、染めかはる若葉の其色としもなきを、春を惜む遊人は我のみにもあらず、爰に酒飲み、かしこに歌ひて、此夕暮に歸るさわするゝも、中々心ふかき方におもひなさる。

ちり殘る茶屋はまだあり花のもと

山下千里のまなじりさはる物なく、うら〳〵と霞みわたれる田野村落の詠えならず。きせるをくゆらすこと暫時あり。

雲雀より田打へ遠し山の上

贈ニ所レ訪不レ遇人一文

安達が原の閨ならずも、さしもしのび蓬生の隱家を、留守のすき間に見綱はれたる、

（三）黄州竹樓記「黄岡之地多竹、大者如椽」

様々なり。かれはせはしき世渡ならんも、餘所にみる目は忙しからず。東には岐岨川ながれて、とわたる舟の櫂の音も夜半の枕にひゞくとぞ。されば歌人の題する物、詩客の吟に入る所、こゝにとりてあまり有り。此比人ありて此亭に名を求め且記をもとむ。辭する事度々なれば、請ふこと又度々なり。しかれば我猶きける事あり。此居の北にめぐりて竹の林しげれり、（三）大なる物椽のごとしと。是ぞ此家のときはを守りて、あるじの千代の友ならんには、かの地に是をなぞらへて卒爾に黄岡亭とよぶ。たゞ我聞いて目には見ず、心に察して筆に寫す。もし此言のかなふべくば、取りて此亭の記とすべし。もし此言のあたらずんば、よし醤瓶に蓋してやみなむ。やみねく、重ねてわれを煩はす事なかれ。

名茶杓辭

茶杓に名を付けて得させよといふ人あり。其いふ人は、わが此道によらざるを知りていふなれば、おもしろく覺えて、霜の夜と書きて贈る。君知るや、霜はしろく夜は寒し。

(一)鴨長明

(一)淮南子「橘樹之江北。則化而爲枳」
(二)芭蕉斜嶺亭の句「其まゝに月もたのまじ伊吹山」

蝸牛齋頌

梢による物は風のおそれあり、土にかくるゝ物は雨の患有り。かの蓮胤(一)が車二つにつむといひしも、猶此のものの安きには如かず。あるじはこれにならふものか。

集でもなく穴にもあらず蝸牛

黄岡亭記

世の求むる所、衣食住の三つありて、一日もなくては叶はず。されど心をして淸からしめ、心をして靜ならしむるは、只棲む所によれる事、かの江南の橘(一)の類にあらざらんや。我聞けり、此亭は西南に望をひらき、(二)其まゝに月もたのまじと翁の吟を殘されける、伊吹の嶽は殊にしるし。南宮の山つらなり、養老の瀧一眸に入る。眼下は千町田限りなく、村落よきほどに隔たれば、春は雲雀の雲に啼き、秋は砧の月に音なふ。螢飛ぶ夜は欄によりて班女が扇をわすれ、雪つもる朝は爐に座して淸女が簾を挑げて、四時の農業目をたのしましむる外、岐山の街道もこゝによれば、通ふ市人の負ふ者うたひ行く者、おのが

いらぬ有りがたき隱居とはなりぬ。同じ穴の狐これをよろこびていひ贈る。

梅雨晴や世を卯の花は跡の事

庵記 應二曉吾需一

(一)緡蠻たる黄鳥の丘隅に止まるは其棲なり。世に雲水を追ふ僧侶の、一所不住を事とするは、假の宿にも心留むまじとにや。夫だにも年老い足弱らば、止まる栖なくてやは有るべき。恒の栖なき時は恒の心靜ならず。宜なり、此翁のこの庵むすべることや。子あり姉ありて朝夕の餐を饋れば、維摩の三萬二千(二)はしらず、安置する物佛一躰、行灯一つ、箒一本、茶瓶は火燵にかくべく、硯は机に屬すべし。臥具を納むる櫝あり、書籍をあぐる架あり、膝を容るゝにいと安し。風雨の防、座臥の設、いくばくの疊をか費すべき。是ただ姑く支體の爲にして、心は無邊の天地に遊べば、世人はこれを狹しといふとも、あるじは猶ひろしとぞいふなりける。

蚊屋つりてなほあまりあり草の庵

(一)大學「詩云緡蠻黄鳥。止二于丘隅一。子曰。於レ止知二其所一レ止。云云」

(二)維摩居士は方丈の室に三萬二千の床を並べて十方の諸佛を請じたりといふ

すべきやと、年々東西の旅になぐさみ、今年又越の七不思議見んと思ひたてるも、此人にして此病、さらに不思議にはあらざりけり。さればめでたき御代に俳諧の行はるゝことや、西行に宿惜みし江口の君のつれなさもなく、(一)宗祇に髭を乞ひし盗賊のおそれもなし。行く先〳〵に同志の徒ありて、(二)鷄黍の約をなさゞれども、草履を倒にはき、鉢の木をも蚊遣にたきて、まめやかにもてなし、手より手へおくらるゝ事、紀行を見て知んぬべし。主人紀行の稿を示すに、末に二三葉の白を餘したるは、予に物書きそへよとの設なりとぞ。されど染むべき一言の葉もつや〳〵思ひよらず。たゞおもふに、主人の遠遊に耽る、歸鄕の今日も、猶越の旅寐のこし方や惜むらんと、句一つ書きて贈る。

捨てかねん扇もこしの馴染より

贈二曉吾一辭

曉吾子は、我きく公の悲歡丁度五十年、盧生が夢の勘定さらりと濟まして、老を告げ致仕をこふに、勤勞むなしからず、其子に職祿をうつし給はりて、けふや衣食住の求も

(一)宗祇山賊にあひ盡く所有をわたして行きしに賊おひかけ來りて其美髯を乞ふ問へば拂子に作りて賣るなりといふ其時宗祇歌をよみてきかせければ賊感じて前の奪ひし物をかへしたりといふ

(二)まちうけの約

ず。今壯年の官路にたゝむには、友に善惡はえらむとも、只よく衆に交はりて禮を忘れず、心に忠を存ずべくば、かの霜雪のしろきを得て、松はいよ〳〵青かるべし。道なんぞ風雅をたのまむ、風雅なんぞ道をそこなはん。あけては金城に登つて青雲の志たわまず、暮れては閑居に休んで白露のさびをたのしみ、ながく青白舍の主ならむには、青白舍の名空しからじとぞ。

七　不思議後序

和歌に西行あり、連歌に宗祇あり、俳諧に芭諧翁ありて、三筋に道はわかれども、皆雲水に境界をよす。文人騷士其跡はゆかしむものから、殊に俳諧する人の、杖草鞋のさびをしたひ、四方の志を專とするより、今や松島象潟をもいまだ見ずといふ俳諧師は、世に開眼せぬ佛の如く、(一)疱せざる娘のごとし。されども家業に手のひかれず、仕官に脚をほだされて、本意をとげぬも又多し。我はた其とげぬものの一つなり。布袋庵の主人は世に素封の名をしられ、もとより風雅に富めれば、身健に年壯にして、何ぞ雌伏をな

(一)諺に「麻疹は命さだめ、疱瘡は器量さだめ」

（一）古池の句は江戸深川六間堀の芭蕉庵にての作なりとぞ

（一）晉の七賢の一人、よく青白眼をなし禮法の士には白眼をなし不羈磊落の士には青眼を以て交はる

口にいづ。其音また人の耳にひゞきて、正風大悟の一句なりとぞ、傳へて口にいふ事也。まづ耳に入り口にいひ、又耳に入り口にはいへども、目にかの昔を見んとする者、今深（一）川の陳迹はたづねても、世うつり人すみかはりて、いづこか夫と知る人もなし。たとへば今寫さんとするも、絶えてその池なければ、いかに能畫の巧をなせりとも、皆他の池にして此池にはあらず。されば只是を見ん物、ひとり自畫の一軸にあるべし。あゝ此家の風雅を守りて、高く雲井に虹をはくは遠し。此風を望まん者、誰か此水音舍を知らざるべき。

青白舍記

疊は常に青かるべし、障子行燈は白きをいとはず、清きことその内にあり。其居清ければ住む人の心すなはち清し。あるじもとより風月に遊べり。口に風雅をいふとても、清からざれば佳句を得がたし。昔阮籍（一）が我儘にして、好く友と好かぬ人に二色の眼をつかひたるは、頬癖わるき名に立ちて、人又かれに白眼せざらんや。青白さらに此名によら

（一）孔子の子名は鯉

し。人此庵を思ふにも、我他のうへを思ふにも、ともに不羨の庵にして、自他の境をわくべからず。若此羨まざるを羨む人ありとも、我はたゞ羨まれんとの心にはあらず。

讓二庵名一文

鯉とは魚の名なり。大聖（一）取りて御子の名とし給へり。虎は獸なり、名を大磯の妓女にとらる。鯉の意よろこぶにあらず、虎はたこれを怒らんや。不羨庵とは、我昔しばしつき捨てつる號なるを、はたして羨む人ありて、請うて其居に呼ばむとす。我かの鯉と虎とにならひて、喜ぶにあらず惜しみもせず、たはぶれて是に答ふ。

　さかばさけつきすてし名を手鞠花

水音舍記

鈴木氏某が居、みづから名づけて水音舍とよぶ。其よぶこと他にあらず。家に久しく傳へたる翁の自畫贊あり。かの古池の蛙をかけるなり。あるじの祕藏宜なるかな。そもや雷霆の百里に轟くも、過ぐれば人の耳にも殘らず。此古池の水の音は、翁の耳に入りて

(七)源氏夕顏卷の詞を用ふ

隣舍の春歌は、もとよりの農家の間なればいふにも及ばず。かのからうすのごほ〳〵となりし、夕顏の隣どのは、なほ豐なる家居にてもやありけん。(七)こゝらはたゞ手杵の業わびしく、麥の秋稻の秋、あはれは砧の丁東にもゆづらず。是をまじへて七景とはなせりけり。さるはいとをこがましく、遼東の豕にも似たれど、賞心は必しも山水の奇絶にもよらじ。名にしあふみの人の見るとも、おのが八所の厚味にあかば、かゝる淡薄のけしきも、又珍らしきにめでて、一度の目をとゞめざらめや。

不羨庵記

(一)經がたくみゆる世も、わびてはすむらん月を羨み、(二)過ぎにし方の戀しさには、伊勢や尾張の波をもうらやみけん。月も浪もおのれ人に羨まれんとは思はぬを、心に物の叶はざるには、無常の物だにうらやむ、世の人心なりけらし。されば身に富あまり、幸心のまゝにしては、只事每につきて、他に羨まれんとのみ思ふこそ、苦しきならひなれ。我が此草の庵のことそぎたる、更に羨む人なければ、我また爰に事足りて、他をうらやめる心な

(一)藤原高光「かくばかり經がたく見ゆる世中に羨ましくもすめる月かな」

(二)伊勢物語「いとゞしく過行く方の戀しきに羨ましくもかへる波哉」

める、何ぞ然るやと。我是に答へて曰く、客もかの二十年(三)の昔を知るならん。此あたりはしばし歌舞の遊里となりて、明暮絲竹の艶をあらそひ、月雪花もたゞ少年醉客の遊に奪はれしが、其世は此鐘の曉ごとに別を告げて、幾衣々の腸を斷ちけむ。世かはり事あらたまりて、今は其形だになく、峨眉蟬鬢も今いづくんかあるや。さればつく人に心なくとも、聞く人の耳にのこりて、遺響(四)を悲風に託せるならんと、客も實にと聞きて、且いたみ且笑ひにき。さてや、

市門の曉鷄は、此西の方あやしの小借屋といふもの軒をならべ、己がさまぐ〳〵の世渡り侘しげなれど、かゝればおのづから遠里小野(五)のかばかりの聲も事かゝぬ程に音づれ、はかばかしき商人は來られね共、海老、鰯、小貝やうの物名のりて過ぐる事も明暮なり。さればたまく〳〵訪ふ人ありて、御肴(六)に何よけんなど、一盃をすゝむるには、こゆるぎのいそぎありかねども、居ながら求め得る日も有るべし。家居は是より市門へつらなれば、曉の鳥も枕につたへて、老の寢覺の力とはなれる也。

(三)藩主宗春卿が積年の藩制を破りて此地に遊廓を開きし也

(四)赤壁賦の詞を用ふ

(五)誤あるべし

(六)催馬樂の詞を用ふ

路傍古松とは、世に七本松とよべり。あるは相生めきて立てるもあり、又程へだたりて見ゆるもあり。染めぬ時雨のゆふべ、積る雪の朝、ながめことに勝れたり。草薙の御劔の昔語を思ひて、もしは此七つを以て辛崎の一つにかへむといふ人ありとも、我は更におもひかへじ。

蓬丘遠樹は、則熱田の御社なり。高藏の杜は猶ちかくて、春の霞、秋の嵐、此亭の南の觀、たゞ此景にとゞまる。しばらく杖を曳けば、赤の華表も木の間にみゆめり。鳴海は熱田につらなりて、松風の里、夜寒の里、呼續の濱、星崎など、我國の歌枕は皆此あたりにあつめたり。すべて是熱田の浦邊なれば、海づらもやゝ見ゆべき程なれども、家店にさはり森にへだちて、一望のうちにいらず。されば、

海天歸雁も此あたりをいへるなりけり。

龍興寺鐘は、庵の東よき程に隔ちたる木立、一村の禪林なり。ある日客ありて、物語しける折しも、此鐘のつく〴〵と雲よりつたふを聞きて問ひて曰、けふ此聲の殊に身にし

東嶺孤月　路傍古松　蓬丘烟樹
海天歸鴈　龍興寺鐘　市門曉鷄
隣舍春歌

東嶺孤月とは、嶺は三河の猿投山なり。遠き山々の夫より北につらなりて、此山のあはひより、十月ばかりのよく晴れたるには、士峯の巓もみゆる事あり。夫かあらぬかと昔は人の疑ひしが、寶永の比かの山の燒けける時、夫とは定まりしかと、古き人のいへりけり。さればさなげ山とは、名のをかしくて歌などにも詠むべきを、文字を猿投と書けるは少しくちをし。たゞ萬葉にぞかゝまほしけれ。されど目には猿の名もよそならず、ほとゝぎすも蜀魂と書き、朝顏も牽牛とかけばむくつけき類にや。清氏の女も晝にかきて劣るものといひしが(一一)、字に書きて劣るさたはなし。月は夜の長短によりて、此山の南北より出て、清光ことにさはる物なし。此府下に月の名所を撰まば、此地をこそいふべかりける。

(一一)枕草紙「晝にかきて劣るもの、なでしこ云云」

き秋の名の、水無月の半に立ちそめて、けふくれ行く月も影さやかに、端居の袖もすゞしきに、一人の客西瓜によりそひて、我はた星にむかひて何の願かあらん、あはれ此西瓜の赤くてあれかしと思ふこそ、さしあたりての願なれといふ。かたへの翁打笑ひて、おもへばかの樂天が、(三)海底の魚も天上の鳥も、高くとも射つべく、深くとも釣るべし、たゞあひむかひて、咫尺の間もはかりがたしと言ひしは、たゞ西瓜の事にこそありけれ、されど織女にいのらむは門違にもやあらんとて、

赤かれと西瓜いのらむ龍田姫

と、思ひかけぬ山姫をおどろかして、星の手向はなくてぞ歌みにける。

七景記

知雨亭とは、嚮に其譯たくはへるが如く、務觀(一)が詩によせて靜なる心をいへり。今又半掃庵とは、我物ぐさの明暮、掃く日よりははかぬ日多く、床は塵、庭は落葉に任せがちなる、庵のだゞくさをいふなりけり。名は二つにて物二つならず。さればこれに七景を撰ぶ。

(二)居家必用に出でたり。

(三)白樂天の新樂府「天可度」の句

(一)務觀は陸放翁の字放翁冬夜聽雨の詩に「遶簷點滴如琴瑟、支枕幽齋聽始奇」

（一）漁父辭「聖人不レ凝二滯於物一善與レ世推移」

（二）枕草紙「節は五月に如くはなし」

ひかへして、

死に殘れ一つばかりは秋の蟬

賀二某剃髮一文

漁父が曰く、（一）柳は物に凝滯せずよく春秋の風にしたがふと。さるも官路にある中は、身を清からんとては、世にさからひて人に憎まれ、身を安からんとては、世にへつらひて心に恥かし。今や浮世の髻をはらひて、二つの間に住み易き人あり。

滄浪の水すめらば頭巾あらふべし

星夕賦

今宵は星の逢ふ夜なりとて、小娘どもの暮待ちかねて、帶帷子も常ならず裝束き連れて、硯洗ひ梶の葉求め、笹に短冊し竿に絲懸くるなど、此節句ばかり殊にをかしきを、いかで（二）淸少納言は菖蒲にしかずとは定めけむ。（三）人間の囁きは、天の聞くこと雷の如しとか。星の睦言は二階の耳へも洩さず、天上下界のたがひめこそ殊に妬ましけれ。今年はまだ

驅る。ひとへに汝が業火なれば、他をうらむ事あるべからず。さるにても淺ましき汝が身を觀ずれば、

火をとりに來ぬ蚊は人に燒かれけり

送二其常一辭

浮藻の花のあふつ別れつ、さるは仕官の常ながら、きのふまで待たれし身の、まだ笠紐のあともうせぬに、けふは見送りの席につらなりて、盃を上て驪歌(一)をとなふ。各餞別は、今年竹に祝詞をよせて、是より無事の便をのみ

まつといふ名はそひものぞことし竹

蟬引

三伏の日ざかりの暑さに堪へがたくて、

蟬あつし松きらばやとおもふまで

と口ずさびし日數も程なく立ちかはりて、やゝ秋風に其聲のへり行くほど、さすが哀に思

(一)書言故事、大戴記、驪駒逸詩。客欲去歌之。文類曰。其詞云、驪駒在門。僕夫具存。驪駒在路。僕夫整駕。

鶉　衣　續篇下

燒レ蚊辭

おのが身ひとつはたゞ塵泥の幽なる物ながら、類を引き群をなし、夕のせどに柱を立て、軒端に雷の聲をなし、貴賤の肌をなやますより、世に蚊帳といふ物を以て汝を防ぎ、末末の品に至るまで、誰か一釣の紙帳をもたざるべき。積りて世の費いくばくぞや。されば虻の利觜蜂の毒尾も、しひて人を害せむともせず、既に仇の逼る時、是をもて防がんとするは、人の刀劍を帶するにひとし。汝が針は只人の油斷をうかゞひ、ひとり口腹のために貪らんとす。たま〱蜘の巣につゝまれ、人の手に握られて、其針を出すことあたはず。然れば巾著切のはさみには劣れり。今宵一把の杉の葉をたいて、端居をこゝちよくせんとすれど、猶も透間をうかゞふ憎さに、大人氣なきわざながら、紙燭をして汝を

（一）晉書に豫章の雷煥斗牛の間常に紫氣あるを見て寶劍龍泉太阿の在所を察せし事見えたり

我が祖父野雙翁、其世に季吟老人の門に學びて、吟老人及び湖春と兩吟三吟の二百韻をとゞめて家にあり。さるは延寶八年野雙の齢四十四歳、今七十年の後是を見るに、其たのしむ心一つながらも、風體まことに今とおなじからず。我又此道に遊ぶが故に、當時尾城の兩宗匠をかたらひて、賡ぎて一卷の三吟をとゞむ。嗟呼又七十年の後に至らば、今のつるぎ菜刀とやならむ。さらば今の菜刀のひかりあらたまりて、紫氣の斗邊を射るべきもいさしるべからず。されば子孫の古きを慕はゞ、是ぞ風雅の變遷（二）をしれと、あはせて青氈の櫃に納めおくことになむ。

寛延三年庚午にあり。紫隱里野有四十九齢の秋八月、知雨亭に筆をとる。

句中所謂䔖子者。生前所レ嗜。勸レ酒必爲二下物一。且石榴一株嘗與レ予。今猶存二庭畔一。

其齢なほわかし　此わかれなんぞはからむ

面影を慕へば　曉の月枕にのこり

音信をまてば　夕の嵐簷にたえぬ

忍ぶ涙を添ふさつきあめ

歸らぬ魂を喚ぶほとゝぎす

手向の䔖子　酒むなしくあり

記念の石榴　露自らうるほふ

仇なりやさて [illegible]

怨むべしあゝ [illegible]

短夜やうそと見なほす夢もなき

巴雀木兒三吟十二表長歌行の奥書

(一)反復辯難すること

巻の俳諧をつらねて、法樂に供へんとす。連衆已に定まりて、予が老いたるを以て小序の求あり。薄劣のあたらざるを慙ぢて辭せんとするに、またおもへらく、實に世の諺に、年役といひ若役といへる、手足を勞し働くわざは、若役の請取にして、居ながらなす業は多く老年の課役となれり。今や一座に頭をめぐらすに、あぢきなきかな、齡は吾が右に出づる人なし。よしや鬢髭を染めて若殿原と競はむは、たとへ病衰の思ふとも叶はじ、眼鏡にしばし筆をとらむは、難きより見れば易かりぬべしと、鄙陋はみづから年に許して、こちたくも此日の序者となんぬ。

舍螯挽歌 并序

今年寶曆甲申の五月、是非庵舍螯身まかりぬ。舊知各追悼の句を賦し、惜み歎くも宜なる哉。年比夜話亭に風雅を學び、其志厚きより、文會必此人を缺かず。予もまた親しく草廬を訪はれて、句あればともに支吾(一)を定め、吟ずれば互に敲推を論ぜし。今更に往事を思へば、老涙しばしば白鬚をうるほす。聊挽詞を諷ひて曰く、

聞說、むかし頓阿法師みづから百體の人丸の聖像をきざみて殘せしが、今も世にちりぼひて、たま〳〵和歌者流の家に求め得たれば、こよなうかしづきもてはやしける事とぞ。邇日黑田氏釜月子の手に、かの一體を求め出せり。黑田氏嘗て城南前津の里に別莊あり。此地は、名におふ富士の高根をこと山の間よりわづかに望めば、かねて富士見原ともいへり。釜月子の嚴父、過し寬延の比ほひ、韓使の朝にきたりける時、異客の手に請ひて第一樓の三字をかゝしめ、則此別莊の號とす。此樓の向ふ所、富士はさら也、其餘參州の猿投、信州の御嶽、駒が嶽まで、皆一望のうちにいる。南に指をうつせば、熱田鳴海潟より、すべて當國の歌枕なるもの、十にして七八を計ふ。實に府下の第一樓なる哉。さればかの聖像をこゝに安置し、あけくれの富士にむかはしめ、石見潟高津の松に見果てし月も、ふたたびこゝにてらさむとや。しかるに主人つねに俳諧の連歌に遊びて、和歌は事とせず。そも俳諧は連歌に出で、連歌はもとより和歌の流れにして、皆伯仲の風雅なれば、枝こそわかれたれ、根はおなじ柿の本の、何ぞ白眼し給はむやと、いま一

(二)韓退之の聟昌黎文集を編みて其序をかけり

ほけなく物汚したる心地して夢さめぬ。蠅や我ならんわれや蠅ならんと、分別いまだ定まらざる所に、花雲師の消息いたりぬ。緘を披けば、さればこそ書中にいへることあり。師曾て掛錫の所々、或は其地に問訊の句どもを輯めて、笠の次手といへる一集梓行の志あり。予に其小序をそへよとぞ。先づ名を聞いてより其集の玉なるべき俤こそおしはからるれ。さるに其地は、文人の輻湊する東都にもいと近し。金聲の序文は得るも易かりぬべきを、雲水遠き弊邑の老拙に請はるゝことや。たとへば崑山の下に居ながら、遥の鞍馬に便して燧石を求むるがごとし。實に不才のあたらざるを以て辭せむとするに、彼の思ひ合する夢あり。天已に是を定め、物已に知りて、遁るまじきを諭すにこそと、只此物語を述べて其責に代ふ。思ふにまた其蠅の、かゝる笠の次手を得て、驥尾につき千里に蹤を遺さむは、李漢(二)が韓文に序かきて、世に知らるゝためしにも似たりと、厚顏に筆とりて、雁の翔を勞することしかり。

法樂俳諧序

れて夜もすがらいも寢ず、雪の寒きにも朝起する鴉の羽こそ、俳諧に借るべき物にありけれど、終に此羽は此鳥に定りぬ。さてこそ烏羽玉のひかりさして、此集も世にはかどやくならむ。是此三鳥の傳にして、我はた幸にきくことを得たり。歌學者の三鳥は、われのみ知りて、意地わろく人に敎ぬがうるさければ、此序に是をあらはして、撰者のもとめにかふるとしかいふ。

笠の次手序

東羽の花雲師は、予と時をおなじうし、好む所も同じうして、只其國のおなじからざる故に、つひに半面の識ともならず、わづかに紙筆に風雅を通ずれども、それさへ幾重の山を隔て海を渉れば、あるは洪喬が(一)不埒にあふこともなきにあらず。されども蘆垣のまぢかくて心の疎からむよりは、荻の葉の稀なる音信も、心の親きは老を慰む友なるべし。一日假初に晝ねの肱を曲げたる漆園に、蝴蝶にもあらで人もすさめぬ身は、似合しき蠅となりて戯れしが、そこにも一顆の玉の上に卒然として立ちとまりたるを、我ながらお

(一)晉の殷喬洪、人に賴まれし手紙を盡く水に投じて曰く「沈者自沈、浮者自沈、殷喬洪者不レ爲ニ致書郵一」

三鴉集序

信濃なる駒が嶽は、名におふ富士の俤して、四時の雪たえず、花の名所と呼べる吉野も卯月のあらしに吹きちらされ、淀のわたりの郭公も聲とゞまらず、須磨更科の月といへど、山にかくれてあとの闇は、よのつねに變ることなし。よそにはなき雪をとゞめてこそ、誠に雪の名所ともいふべけれ。されども歌人の目にいらず、淺間の煙にだに立ちおとれる詠を惜みて、此國に好事の三士、集作りて世に挑げむとす。集成りて題號を三鴉とはいかに。されば古今集に三鳥の傳ありて、それは安からぬ習なるよし。今又こゝに三鴉の傳あり。そも此撰者三人の、各羽の字を以て名とせる、いまだ其羽はいづれの鳥とも定まらざりしが、いでや今定めむとするに、もとより異國のことはとはず、我朝にても、春ぞ秋ぞと季節あるものはむづかし。あるは山にかたより水にのみ住めるは不自由なり。さらば片よらぬ常住の物をえらぶに、鶴の羽は仙人くさく、鷹は猛くて寂しみなし。まして鳶のむくつけなる、鷄は山野にわたらず、鳩は不情に、雀はいそがし。只月にうか

鯉はさぞな烏賊さへのぼる春の雲

戯八龜

五十やら六十やら、七寺の裏に八龜と名のれども、はつきと年の知れざれば、厄年もいつなりしや、有卦に入るやらむけたやら、泥田に棒の土性か、膝皿から出る火性、金性にてはあらざるべし、かくては年の賀も祝はれず、先生にはあるまじきことなり、いざや年を定めむと、連中いひ合せて目利講をもよほし、さすり佛のごとく、先生をすゑて各入札をするに、其さま年の古びやう、所詮了簡をやめて、くる年を生れ年とし、六十一歳本卦のかへり、みづのとの丑、もう〳〵是にうつておけ、しやん〳〵と埓あけぬ。世はこのごろ、年忘の最中に、わすれた年を定むるも、定めなき世の中やと、觀念して笑ひける人の、

今迄ははつきとしれぬ生れ年

けふ定まるも又時節庵

を汚す。求めては得がたきならひ、かゝる愚人は論ずるに足らず。金銀を拾ふはことに幸の甚しきに似たれど、それは落したる人に穴があきて、身上破滅に及ぶもあれば、心ある人は其主を尋ねて戻し、又は心のねぢけ人は、かくして戻さぬ不埒もあれば、其主の怨をおひ、世話を拾ふ筋ともなり、災を拾ふ端とも成りぬべし。このごろ知樂舍の主人、途に一柄の扇を拾へり。是人の落したる物ながら、其主はたゞ腰を撫でて是はと言ひたるばかりにして、さして惜しとも妬しとも思ふべからず。世に澤山なる拾ひ物ながら、其畫は松竹草花にもあらず、鯉の龍門に登れる畫とぞ。されば此人の心に、つねに願望のかゝれるありて、天にも神にも祈る中に、此登龍門の吉兆を得たることを、たのもしき物にして、歡ぶこと大方ならず。宜なりや、其知樂舍の號も、もとは其住めるあたりの青木川の鯉によりて名づけたる謂あればならし。さるや怪みを見ても怪まざれば、其あやしみ破るとぞ。よろこびを見て喜ばゞ、其悅はた空しからじ。比は雪解けて梅咲く折なれば、戯れてかくいひ贈る。

（二）漢の司馬相如、昇仙橋の柱に題して曰く「不レ乘ニ駟馬車一。不ニ復過ニ此橋一」

世には物いひかはし、此集のあらましをも語り、ものせし言の葉のつましあれば、小序を請はる。老のまさなごと、何の榮かあらむと、辭するも辭し得ず、漫言を書きて贈るに、猶謝していふことあり。駟馬の車にのらずばと、青雲をのぞみし賢き人のしわざに似ず。かの順禮といふものの、行き過ぎがてには憚らず筆とりて、かくあらたなる八橋にも、はしたなく物かきつく。我只かれが類ならし。もし見苦しと人の惛まば、橋守の心にまかせて削り去らむもよしや安かるべし。

拾レ扇說

人の手より得るを賜はるといひ、交易して得るを賂ると云ふ。もらへば謝するの禮あり、買へば價に高下の論あり。二つの世話をはなれて、拾ふといふ幸あり。住吉の濱の小貝も、秋の山路の落栗も、ひろふは拾ふ物ながら、それはあるべき所にあれば、幸のさたには及ばず。思ひがけざる所に得るを、天の與へともいひて、人の喜ぶ事なるをや。されば慾に爪長き男は、天もあたへぬ物を望みて、くらがりに狗子をつかみ、牛の糞に手

て知る、萬世の後も花見む人の植にしもとの主を慕ふことを。吉野には其人をしらず、こゝには其人いちじるし。されば不朽の名を植うるといふべし。我が短才なる、他のいふべき事をしらず、只此一句を擧げて、願主の勞の後の世に傳へて空しからざることを賀す。是をも小序といはゞいふべし。

今植ゑし櫻や世々の春の雲

八橋集序

はる〳〵きぬるあとの年月にはあらず、昨日は今日のむかし男ありけり。參河に序草と(一)よばれて、風雅に耽るあまり、此國に迹ふる名によりて八橋集選ばんと思ひわたりしが、頼むまじき世の、はかなくも、水行く川の泡と消えて、かけはてざりし恨の捨てがたしとて、二三の門人遺志をつぎたして、かく一部の功なりぬ。されば名をかりて容はからず。必しも蜘手にかけし姿にかゝはらで、只四季の表をならべて、是を八つわたせるなり。是且選者の洒落なるべし。我は其澤にさく花の、紫のゆかりにもあらねど、ありし

(一)業平の歌「からころもきつゝなれにしつましあればはる〳〵きぬる旅をしぞ思ふ」

にもあらず、よからぬ物をとの誇りもあらじ。且此名をかくよぶは、もし見る人あらば見てしるべきのみ。

一聲や二見にかよふほとゝぎす

白藏主贊

醫者の若死少からず、出家の地獄さぞあるべし。人の口ばたの飯粒を笑はむより、まづ我が鼻毛をかへり見るべし。

異見いふ尻に尾花や白藏主

櫻の句小序

松井氏壽庵の主の、こゝに千本の櫻を植うる心や、只遊人の興を誘ふのみにあらず。おのづから精舍にたよりて、佛緣をも結ばしめむとするにあり。剰へ四方に櫻の句を請ひ集めて、永く寶前にとゞめむとす。其志なるに及で、予に小序の需あり。我きく後京極攝政殿の歌に、むかし誰かゝる櫻のたねをうゑてよしのを春の山となしけむと。是を以

(一)二見形の文臺は芭蕉の意匠になれるもの西行の歌に據れりとぞ

(二)徒然草「よからぬ物貯へおきたるも拙く、よき物は心をとめけんとはかなし」

郭公の文臺は、名におふ二見潟の浪に立並ばむとにはあらず。昔持ちける文臺は、世を遁れかくれ入りける比、今は蓬がもとに客をかぞへて、奈良茶たくべき身にもあらず、さらば不用の物はなきこそまさらめと、ほしがる人に打くれて過ぎける程も二十年に近し。邇日蓼哉なる男訪ひきて物語りける序に、此庵に此物なきは、寺に鉦なき心地ぞする、かばかりの物一つ、何の所せきことかあらむ、かゝる事よく心得たる者あれば、翁の爲に造らせん、と強ひてすゝむ。げに思へば、必ず懐紙を置くのみにあらず、坐右にあらば萬に便よきこともあるべし。長明が車につみて、建てつ崩しつ事そぎたる方丈にだにも、折琴繼琵琶を貯へたるためしを思ふに、あらばさてありなむ。さるにても、今世に此道の行はるゝことや、凡心なき惣内杢兵が徒まで、家に一脚の二見なきは稀なり。さるから裏書々々の望たえず、老の手もたゆきばかり、夢にも見え幻にも立つがごとく、いとむつかし。只畫も裏書もなき物あらばやと、この一脚を新製して、草廬の藏物とはなせるなり。身の後に財のころは吉田の法師も憎みしが、(二)心とめけむと云ふべき程

（一）「貂不足。狗尾續」晉書に出でたる諺

秋の日の序

蕉翁生前の七部集とて、世にあがむるが中に、冬の日の集は、尾張五歌仙ともいふなりけり。しかるに、暮雨庵の門人騏六なる者の家に、つたへとゞむる一卷の歌仙あり。これは往昔竹葉軒のあるじの、翁を招きて其日になれるものにして、其坐の荷兮が筆したるまゝに遺せるなり。いづれの集に出でたりとも見えず。されば暮雨庵曉臺子、是ををしみ是を尊みて、社中をかたらひて四卷の歌仙をつらね、再尾張五歌仙を繼がむとす。稿なりて閲するに、誰かは狗の尾をもつて貂を續ぎたりといふべき（一）。祖翁の魂もしかへりきたるとも、靑眼にして賞し給はむ。今人なしといふべからず。實に本州の面起すともいふべし。淨寫に臨みて、予に一語をそへよと請はる。嗟乎是また蕉門の盛事也。何ぞ口を嘿まんやと、年は明和の五めぐり龍諡方に集る比もあひに逢ふ冬の日の、短き筆さし濡して、聊責をふさぐこととしかり。

郭公文臺記

（五）知雨亭は也有の亭號、川崎やは出入の酒屋歟

ず。今はた是に何をか加へむ。しかるに先にいふごとく、我君を鏡とせむには、我又清き光なくとも、只潦水の淺きを恥ぢず、聊君をてらさむとす。其いふ所他にあらず。君蓮二を謗るをきけども、いまだ支考を稱するを見ず。儒士は釋氏を防げとも、其說のよろしきあれば、潛にとりて身の益とし、佛徒は儒道をいやしめども、其ことの理に叶へば、聊用ひて今日の法とす。內證皆かくのごとし。況や支考は蕉門の俊良なり。舊說もとより規矩とすべし。かの文操十論の說においても、猶俳諧にとるべき物少からず。君俳諧の益をもとむるに、必是を誤ることなかれ。そも我は君が愛する物なり。君もし憎みてよきを忘れむは、其損只君にあり。君もし愛して惡きを知らずば、其損我にありて、くもれる鏡にむかふが如くならむ。歎く所こゝにあり、呵々。今書をよせて寸志をいふ。多言まことに恐るべし。但我君にかくすことなし。君はた我をいかなる者ならんや。知雨（五）亭の秋日に深く、川崎やが酒日々に厚し。訪はれむこといづれの日ぞ。又一飲に相笑ひて、三秋の悶を解かむのみ。多罪々々。

は、今あるとても何かせむ。我が俳諧の好惡をてらすに、君をますみの鏡とせむに、五十餘年の非をもしるべしと、今や老後の力を得たり。つら〳〵君が俳諧を見るに、もと露川が藍に出づるがごとしといへども、其藍の藍ならざるを知りて其色を慕はず。今ただ濃きみどりは獨り染め出せる物也。このごろひそかに論ずる所、文操十論の上において、誠に我多年睥睨するところ、涓埃もたがはず、不思議也。しらず我魂もし君が懐をかるかと、一度は驚き一度は嘆ず。こゝに論ぜむ。抑東花坊は蕉門の逸物也。昔葛の松原より續五論を著す。姿情花實附合の論、實に俳諧の骨髓を顯はす。其後東西夜話、夏衣、所々に云ふ物、金言妙說少からず。さるを惜むべし、みづから終焉の記を書きて、支考の名をなきものに擬してより、すべての咎を蓮二に謂せて、(三)文鑑を選して自注をはばからず、(四)文操を編みて眞名の新製に及ぶ。十論を著しては虛實を論じ、名に俳諧の二字を假れども、長助李助が耳に入らず。酒はやしして餅賣るがごとし。徒然草の讃は、俳學のさたに及ばず。毀譽は見る人の心にあるべし。かの君がいふ所、確論にして殘さ

(三)本朝文鑑
(四)和漢文操

(一)嵐雪は嵐蘭の誤。松倉氏。芭蕉門人

(二)「いつまでか」なるべし

(一)禮記の文
(二)論語の孔子の語

むかし祖翁は浪華の露と消え、嵐雪(一)は鎌倉の月に身を終ふ。もとより俳諧行脚の調ずる所かくのごとしと知れば、如是菴何ぞうらみむ、何ぞ驚くべき。さはいへ、齢は一つの兄にして、交りし我が年月も久し。嗚呼哀れなるかな。此度は不之庵におくれ、今亦此漢を愴む。老の身のいづれか(二)人の上には見聞くならむ。

呼ぶかひもなし蓊鷹の雲陰

與二有功子一書

(一)愛して其惡きを知り、憎みて其よきを知れとか。(二)人を以て言を捨てずとも聞けり。花に囀る鶯も、夜なかぬはわるし、畠ほる烏も月に啼くはよしと、世に公の眼こそあらまほしけれ。そもや我若き時君を知らず。一度見て肝膽をかたぶく。君はもとより和漢の才に富みて、詩を以て府下に鳴る。且俳諧に遊びては貴賤の情を知ること敏く、口を開けば玉を吐き、筆をとれば錦を綴る。我が鷄の羣にはあらず。思ふにいかなる夙縁にや、君がいふこと我が心に違はず、我が云こと君に叶ふ。あはれ老の身の容をてらす鏡

ぶことの、聊喜撰に似たらむと、筆にまかせてかく書き贈れるなり。よし今は世にたたぬ身を、たつみとは人も言はじとぞ。

示二先以一辭

横須賀の先以は、桶を結ふを以て業とす。深く蕉門の風雅に耽り、手は世渡りの隙なきも、心は向上の月花に遊ぶ。知多の浦浪かへす〲も、予逢ふ時はかれにしめす、風雅を以て家業を妨ぐべからず、家業を以て風雅は妨ぐべし。せぬも其日の俳諧にして、障るも其夜の俳諧なり。此こと五論(一)によくいへり。あはで(二)やみにし憂さをおもひ、仇なる契をかこつをこそ色好まむとはいはめと、高く論ずれば、戀すらかくのごとし。まして俳諧においてをや。月更けては、十市の里の衰にも通ふらんと、丁東舍と書きて與へぬ。只其響の家にたえず、いとまも浪の音さへ打添へて、長く風雅の冥加もあれと也。

如是庵挽詞

かりそめの旅とて立別れしが、はかなくも遠きあふみの土となりし、南空坊が魂に告ぐ。

(一)支考著
(二)徒然草の句

（一）小町「あるはなくなきは數添ふ世中にあはれいづれの日まで歎かむ」

只年々の上をおもふにも、あるはなく無きは數そふと、歎くは老の常なるを、今年いかなる春なれば、かくまで古き友を失ふらむ。睦月も若菜つむ比、有齋子世を去りぬ。

十くだりにたらでなき身や初暦

と袖の涙もかわかぬに、其二十日餘り、百枳身まかりぬ。かれはおなじ世を捨人、ことに住庵も呼びかはすばかりなれば、明暮にかたらひしを、立登る無常の煙も見るかたになびけば、猶思ひ出るふしぐ〳〵も多し。

摘菜せし友を其野の煙とは

是だにさしつどふ悲なるを、きさらぎの初、再兒子江戸にて亡せける由、嗚呼今年はいかなる春なれば、かくまで古き友を失ふらむ。

なきかずに指をる蕨はる寒し

爾住庵說

こゝにしか住みける法師の、妻もち魚喰ひて尊きことはなけれど、只世を遁れ風雅に遊

はずして著し。人其誠を感ぜざらむや。我が辭せずして筆をとるも、此ことのかくあればなり。

九日寄二服先生一辭

我を生むものは父母也、我を蘇する者は先生なり。僕が今年の秋いたく病めるや、此六十こそ我が世の限なりけれと、みづからも思ひ人も左思へるにや、さし向ひては言はざれども、つきしろふ樣いちじるし。さるを先生の良劑日をかさね、再び九死の地を出で、世は今草木黄み落ち蟲の音よわり行くほど、我は引たがへて心地頼もしう、菊祝ふけふは聊盃をさへ手にふるれば、親しき者どもの、たゞ此翁を拾ひたるもののごとく笑ひのゝしる樣、いと嬉しげなり。さながら例の一辭は止まず、つたなき狂句して、けふの歡を先生に告ぐることしかり。

菊の日やまつ初立の東籬まで

三士挽歌

(一)書言故事「宋之愚人、得燕石於梧臺之側、藏之。以爲大寶。革櫃十重、緹巾十襲」

き物をと愛(め)づるが中にも、長月比の水仙をたづね、雪間の嫁菜(よめな)をさがし、三月の筍(たけのこ)も孝行のさたにはあらず、なべてはしりの初物(はつもの)を爭へば、二月の梅、秋の茄子は捨つる心も早からむ。これらを風雅の上に思へば、年の内の梅のみこそ、花なき時の賞翫(しやうくわん)なれ。其餘ははしりの物を問はず、只のこる雪、殘る花、螢も菊も名殘(なごり)を慕ひ、おくれし物を四季に憐(あはれ)みて、行く物はかなしめども、來るは物の時節に任す。さらでも隙(ひま)行く駒の足に、心の鞭(むち)は加ふることとなし。是は茶人を誹(そし)るにはあらず、其道々のよる所にして、ここに風雅の本意をしるべしとぞ。

紙袋序　其考句集其子洞同が求に應ず

紙袋を披(ひら)けば、金玉有り。錦幾重に包みたる宋人の(一)燕石(えんせき)もあるを、是かの絅を尙(うへ)にすといへる、かしこき敎にして叶ふ物か。されば其玉も、價をもとめて賣(う)らんとにはあらず。只これ父を慕ふ孝子の手になれるなり。そもや吉野(よしの)の春にあはざりし人も、靑葉の木末しげきを見ては、さこそと花は思ひしりぬべし。今此集に序を請はれて、生前の至孝問

（一）幻住菴記に「まづ頼む椎の木もあり夏木立」

あるじの取ることあるべし。そこを天道まかせにして、新古菴の記と題して贈りぬ。誠はせめを免れむための御茶濁らすといふ物か。もし早合點の人聞きて、しんことは團子のことかといはゞ、よしそれも茶受のさびとなるべし。

贈二或法師一辭

衣を墨に染めねども、世を遁れたる法師あり。むかしは城下に富める家、誰彼とかぞふるには、指一本のあるじなりしが、利欲に心のうときより、畢竟は無分別の三字に、家居も藏も廬生が夢となして、蒔ける種の菜の花と咲く日は、身を蝶々の袖かろく浮かれありきて、今は寐覺樂也とぞいへりける。さるにかの祖翁の幻住菴も、人の住み捨てける跡なりとぞ。其椎の木の陰を慕へば、おのづから似ることありて、こゝに一廬の主とはなりけり。もとすみし主は茶に遊ぶ人なりとぞ。げに窓も垣根もよしある樣なり。されば境によりて心は轉ずとか、聊あるじのためにいはむ。昔の數寄者今の俳諧、其風流は通ひもすらん、心はおのづからけじめや分るべき。そもや茶道はすべての調度も、古

新古菴記

數寄者ありて、其閑居に名あらむことを予に請ふ。請へば辭し、辭すれば請ふ。請ふと辭すると織るがごとし。つひに辭しまけて止むことをえず。されば予が辭するは、茶道に疎ければなり。しからざれどもはた是を思ふに、此道はそも古式ありて、一事一盞の矩をはづさず、はづせば放埒の誇りあり。茶杓のあつかひ、ふくささばきも、さすてひくての舞曲ならねば、さして上手のけじめもわかれじ。しかれば古き二の舞して、何の面白きことかあらむ。それを面白がるは其故あり。同じことのかはらざれども、昨日の古きも今日すればあたらしく、今日の新しきはあすの古きにして、まして道具も古きを賞すれども、用ふる心は日々にあたらし。新しき物の古くなるは、天地自然のことにして、古き物のあたらしくなるは、人の才覺智のはたらきなるをや。さればこそ、目に見えぬ鬼神も我を折り、武きものゝふも丸腰の交をなせば、一椀のつけざしに男女の中立ともなるべきを、傾城の客なき宵を御茶ひくとはいかにぞや。予が此論もし偶中ならば、

(一)孟子「五十而慕者。予於二大舜一見レ之矣」

(二)孟子「曾晳嗜二羊棗一。而曾子不レ忍レ食二羊棗一」

爲二或人一書序

五十にして親を慕ふは、世にありがたき例とは、昔大賢も宣ひし。(一)七十にして慕ふ人、今參陽の箕山翁か。此秋先考の五十回の忌に、佛事作善のいとなみはさら也、其生前にすける道とて、四方の俳士に手向の句をもとむ。されば心の水の淺からぬより、かけ見ぬ人までも寄せおくり、やごとなき方にも聞えあげて、かたじけなく給はりし句どももありとか。誠に人を動すこと、詐にはあらざりけり。そもかの先人烈志子は、貞享元祿の比にありて、其角嵐雪が曹を友として、深く風雅に遊べりとぞ。其世の詠句は古集にも見えたり。其子孫までも、猶風月の才に富めること、ためしはた世に多からむや。昔曾子が羊棗(二)を食はざるは、父の嗜みしことを忘れざれば也。今此箕山子の俳諧を翫るも、又父の嗜めるを慕へば也。それは孝よりして捨て、是は孝よりして捨てず。捨つると捨てぬと表裏ながら、追慕孝情の重さを荷はゞ、只鈎がねとつり鐘にして、挑灯のさたに及ばず。もとより挑灯何ぞたのまむ。孝子の追福よく冥闇は照すべしとぞ。

鶉衣續篇中

贈二交花堂一　住二柳町一

所の名にふる遍昭が、見わたせばの歌を思ひよりて、かくのごとく書きて贈りし。時も今春の半なれば、東坡が亭に名づけたる前蹤にも似たらむにや。此心を一句にいはゞ、

さく花や交ぜてにしきの柳町

續後朗詠集跋

むかふの町に匕の廻らぬ醫師あり。三年に三度名をかふるに、かの梟のおなじ音を啼きて他の里へうつるの喩にして、はやらぬは元のはやらぬ也。夜話亭に三度の撰集ありて、題號は同じ朗詠なり。かの醫師を見て是を知りぬ、よく世の人のもてはやすことを。賀すべしく〳〵。

所にも身をおき、いそがしき勉も遁るべからず。其灘をつゝがなく越えすまして、かく安靜の境に至らむは、誠にあやかりものなるをや。それも只ひとへにかく用ふる人にあひける幸ぞかし。もと此主のつかへたてまつる老君の、是を物好きて久しく坐右にもてあそび給ひしを、新居をトせし歡とて賜はりけると也。愛藏すること宜なるかな。予に一語の記を求むるまゝ、思ひよれる趣を漫に筆して贈ることになりぬ。

(一)諸の「昔の劔今の菜刀」を反覆したる也

て、塵にうづもれありしを見出でて面白き容なりとて、其片面に漆して、かく風流なる物とはなれり。さればにや、渠がむかしを思ふに、至つて危き所にかゝり、若水の晨より大晦日の風呂の夕べまで、一日も休することなし。其古びたるさまを見るに、それも暫のほどにはあらじ。影うつせしうなゐ子の振分け髪より、檜垣の嫗みつわぐむまでも見果てしならむ。さてや其危きを經つくし、いそがしきを仕果して、今の身の安く靜なること、釣瓶の露ばかりも昔に似たることなし。さも忙はしかりしほどは、あやしの五助六助にまはされ、飯たきの玉や竹が手にのみひかれつらん。物換り星うつりて、玉も六助も今何くにかある。思ひきや、ひとり此物の身を全うして、今は疊に登り花瓶を負ひて、大賓貴客のためにも聊も床を下らず、かゝる貴き行末ならむとは。昔の菜刀(一)今の劔ともいふべからむ。かく安く靜にしてこそ、千世の壽も持ちぬべし。そも又擂鉢の欠けて犬の飯器に下げられ、磨の引きわけられて踏石となるなど、靜なりとも何の面目かあらむ。只此物の宿世こそありがたけれ。人も少壯の比は世につれ事に與る習ひ、危き

(一)紀貫之の乘打を咎めし事あり
(二)關處を通るには笠をぬぐ法なり
(三)芭蕉「吉野にて櫻見せうぞ檜笠」
(四)芭蕉「市人にいて是賣らん雪の笠」

形をさしていふなるべし。さるは蟻通(一)の明神もゆるし給へば、箱根今切(二)の關守もとがめず。あるは吉野(三)の櫻みせんとうかれしも、市人(四)に是うらんと雪に狂ぜし昔人も、居ながら爰の俤にぞみるらん。されば世の俗客は、此庵のありとは見ゑて、是が笠なる事をしらず、あるじは是が笠なる事をさとりて、これが菴なる事をしる。いざや我も此道の同行なり。春はござれと諷ひ古せし、拔参といふ物の眞似せんと、此笠の端に書付け侍る。

袋賛

器は入る物をして己が方圓に從へむとし、袋は入るゝ物に隨ひて己が方圓を必とせず。實なる時は肩に餘り、虚なる時はたゝみて懐に隱る。虚實の自在をしる布の一袋、壺中の天地を笑ふべし。

月花の[illegible]や形は定まらず

花瓶臺記

井戸車の古びたるを以て花瓶の臺となせるあり。是はある官邸の天井のうへにかくろへ

（二）白氏文集に「二十年前舊詩卷。十人酬和九人無」

見ず、朝にとひ夕になぐさみて、かたらふ友の乏しからねば、九人はなしと歎きつる白氏が酬和の恨も薄かりけむ。（二）さるは老のにげなくも身の靜ならぬをとて、あざむく人もあるべけれど、すべて老は、むつかしとて、世に疎まれ勝なるには、かゝる老の生涯は、なべての人のまねびがたき業に、羨む者はた少からざらん。我にも忘年の交久しかりければ、是より後の明暮には、あらましかばとおもふ悔あらでやは有べき。よはひは恨なき齡ともいへ、別はうらめしき別也けり。

弓張の梓にもよれほとゝぎす

方笠庵記　應二松原氏需一

方笠庵のぬし、方笠庵をいとなみて方笠庵の記をもとむ。けだし此庵に此名をよぶ事、いかならんとゆかしむに、たゞ世を例の洒落に見破りて、爰に五十年の尻をすゆるとも、味噌する朝、茶を煎るゆふべも世帶にはほだされず、耳目は四季の花鳥にあそばせ、吟魂は千里の雲水にかけめぐりて、是を一盞の笠とおもへるにや。方の一字は笠のかさならぬ

よしかけ橋の雲にかゝらば　招くに魂もかへらんや不

悼二楚巾子一文

卯月末の四日に消息あり。使の男の外へまかりて、返事は後に取り侍らんとて、さし置きて出でける。其文をひらけば、尋常の無事を問ひ終りて、此頃かし得させたる双紙のおもしろくて、永き日をまぎれぬ。猶是が末々の巻取りかへて貸してよなど、其事ならぬ明暮のすさびも、例の筆まめにこまやかに見えたるに、そこ〳〵に返事とゝのへ、使のかへり來むをまつ程も久しからず、其家の從者のもとよりあはたゞしき使して、此老今俄に終り給へりと告げこしたるぞ、誠にあきれたる世の樣なりける。齢は八十に猶一つを添へて、さこそは天年の終なりけめど、かくまであだならんとは誰かは思ひかけし。朝につく杖はとりながら、耳目もなほ衰へず、浮世の是非を渡り盡して、古きためしもよく知れるうへ、人の爲に事をはかるもまめやかに物し給へば、萬にたのもしき人にして、若き人々も遠ざけず、常に出入る人、文をかよはし音信して、門には苔のみどりも

(一)禮記に「八十は朝に杖つく」

(一)世説、孫子荊以有才少所推服。唯雅敬王武子。武子喪時。名士無不至者。子荊後來。臨屍慟哭。賓客莫不垂涙。哭畢。向靈牀曰。卿常好我作驢鳴。今爲卿作。體似聲眞。

はなりぬ。かなしむべし惜むべし。只年々になき數をそへて、老の心を傷ましむよ。齢又われと同じかりければ　過ぎし行李の頃は、こと羨みて、我はかく病みおとろへたるに、猶四方の志ある勇ましさよ。さるにてもかくまで人の强弱はたがへるものか、是や世の定むまじき定ならんと、思ひもし言ひもせしが、我身の露はかく殘りて、其人の爲に袖ぬらすや、是又定むまじき世の定にはありけり。(一)驢鳴の挽歌を裁して曰く、

木曾路に假の旅とて別れしが、武藏野に長きうらみとは成ぬる。(留)

呼べばこたふ松の風　消えてもろし水の漚。

わすれめや　茶に語りし月雪の夜

おもはずよ　茶に悲しむ露霜の秋。

菴は鼠の巣にあれて　蝙蝠群れて遊。

垣は犬の道ありて　蟋蟀啼て愁。

昔の文なほ殘り　老の涙まづ流。

咄々房挽歌幷序

咄々房委迺は、一たび天台の教に入り、豆腐蒟蒻の淸僧なりしを、いかに思へるならむ、只頭のみ其儘にて、袂は浮世の色にそみかへり、或は和歌を學び茶に樂み、殊には俳諧に遊ぶ狂客とはなれりけり。かくて其身の年もつもりて後、我隱家の蓬生ちかく、一廬を結びてすめりければ、明暮にこととひかはせしが、七年ばかりのさきならむ、信濃へ行脚し、夫より北越に渡り、奥羽の隈々までも見むとて、菴はあたりの人に預け置きて、杖笠にうかれ出しが、本意のごとく打巡りて、頃日は武藏に情ある宿かり求めて、暫し尻のあたゝまりぬる由聞えかはしぬ。さるに信濃路や、木曾の旅寐に夜をかさねしほど、そこの人々を語らひて、名におふ棧のもとに一基の塚をいとなみ、翁の句を表して往來の好士の跡慕ふたづきとはなせりとぞ。猶夫よりの行く先々に此句を乞ひすゝめて、やや一軸をなすばかりなれば、棧塚の撰集して、世に行はむの志ありとて、過し夏の比、予に小序の求もせしが、其事半にして病にかゝり、此長月の廿日あまり、卒に夜臺の客と

（一）法規は法顯の誤なるべし徒然草に「法顯三藏の天竺にわたりて故鄕の扇を見ては悲み、疾にふしては漢の食を願ひ給へることを聞きて云々」

我庵に隣せし咄々庵のぬし、名におふ蕎麥の花咲くころ、木曾の旅にとて假初に別れし袂も、ことしの春に指折れば、早蕨の片手握る計になん。かくて行く先々のことをきけば、岐岨のかり寐におもひ立ちて、そこに翁の一句をしるし、棧のあたりに一堆の塚を築き、旅客のしたふ便とし、それより越路の雪をふみ、奥の細道の跡までめぐりて、國國の句を拾ひ、今は武城に錫を休めしとぞ。頃日隅田の春雁に消息をつたへ、まめなる便に此事を告げこしぬ。實や釋氏の說にきく、聚レ沙爲二佛塔一、功德猶空しからずとなり。夫は一時のまさなごとをさへに、まして永き世に此跡を遺せる、祖翁の追福何ごとか是にまさるべき。其句どもやゝ頭陀に滿つれば、まづ東都の梓工をかたらひて、編集一部の口をひらくと、余に其小序の望あり。江戶は騷士の輻輳する所、隣に乞ひ途に需むとも、かばかりの一語はいと安からんを、遠く老拙に此望を思ふに、さすがに法規（一）の扇に泣き、漢の食を願ひしためし、旅客の情の故あるにかこち、殊には雁の便をよろこび、人の笑ひもこりずまに、またすゞろなる筆をとりぬ。噫我病の膏肓に入るか。

けさとくわかの春は來にけり

若菜賣序

七十二候の三つが一つを省きて、俳諧の月令あり。蓑月文樵の二士、集のもやうとして予に序を請ふ。是(一)田鼠に羽がはえて、深草の秋に啼き、雀が踊り忘れて桑名の松かさに燒かるゝなど、怪しき說にはあらず、誰も見て疑はざる俗間の有ることなり。蕉門正風の本意かくこそあらめ。乍麽生か是俳諧は上手にうそをつくことは、よしや世に煩惱あれば菩提あり、うそあれば誠あり、柳はみどり花は紅の色と悟れば、すべて俳諧の種にして、糺の神に問ふもよしなし。君見ずや、たとへば彼の田鼠も鶉となりて、初めて和歌によまれ、雀は蛤となりて後歌人には見限らる。夫も是も漏らさゞるは、我が俳諧の大綱なるをや。かゝる自在の手にえらまば、何ごとかならざらむ。いざ見ぬ國のことわざもあらばあれ、和朝に民の時をしる、是や月令の始なるべし。

棧集小序

(一)田鼠化して鶉となり雀大水に入りて蛤となるは月令の本文

（一）第三、連歌の三句目

たび兒とはいへど、昔の兒より大きにきたなし。さらでも老の身の苦しき、霜冴ゆる夜もすがら、深草の少將の九十九夜を一夜の心地して、見る人もなきといひけん師走の月を、あかぬ顔に詠めて折々かよふ寒さは、御衣をぬがせ給ひけん有難き御心にも、是迄の事はおぼしも寄らざるべし。あはれ今宵も風さわがし、幾度の行交かせんと、寐よとの鐘に寐所とゝのへて、例の緣ばなにまづ立出でたるに、餘所にも夜なべの身じまひにや、戸のがら〳〵と鳴る音のしければ、一首はかうぞおもひつきける。

死ざまに念佛申さぬ人はあれど
　ねさまに小便せぬ人ぞなき

東甫東湖兩筆の萬歳の畫賛

師の畫けるを發句として、弟子のこれに書添へたるは則脇の趣あり。我も又其鼓にはやされて、かたはらに筆をとる。是や此第三（一）賛也といはゞいふべし。

節季候につもりし雪を萬歳の

たゝみ上げて、思はぬ敵に後をもみすべし。まして談義芝居の中に、こらへ袋の切れかかる時は、群集の膝をおし分け出て、往生の要文を聞きもらし、大事の狂言の所作を見殘す。あるは下馬先に供をはづす槍持、長舟にもみ尻する女中など、是が爲に惱さるゝ事世に多し。されど馬方小者の身の上のみ、あるきながらもやり放し、淸水をけがし雪にも跡をつけて、人目を恥ぢぬは論ずるにたらず。かくとりえなき物なれども、猶其德を尋ぬるに、地藏の開眼に一休の法力は、茶のみ噺の眞僞をしらず。昔鴻門の會に、高祖は是にかこつけて危き座敷をはづし給ひ、越王はこれをなめて會稽の恥をすゝぐ。今も世上の途中にて、いやなる人に行きあうたる時は、立ち宿るべき家もなく、迯ぐる方なき道芝の、露とこたへて消えたき時には、件の用をとゝのふ振にて、やがて溝端に後をむけて、時宜にもおよばずやり過したる。その事なくてはいかで此難をのがれん。これを小便にも一德ありといふべし。幼子の居びたれは、乳母の油斷と叱られて、其子の科にはならざるを、老人の取はづしは、子にもはづかしく娵にうとまれて、老いてふた

（一）九損一得は鞠にいふ諺

（二）古今著聞集に見えたる大食家

（三）晉の人其の傳に「食日萬錢。猶曰。無二下レ箸處一」

鞠をすかぬ人は九損(一)ありとそしり、好く人は一徳ありと尊ぶ。あらゆる遊藝、九損はこれに限るべからず、もしは十損も知りがたし。さはいへ、いかなる不用の事にも、しひて求むれば、一徳もなきといふ事なし。つら〱思ふに、人のもとめてなす業の外、天よりしからしめ、身に備はりたる業は何ぞといふに、只飲食と二便にとゞまる。然るに飲食の重きこと、聖王の國を養ひ民をめぐむといへるも、畢竟はたゞ飲食なり。さるから奢れば法にすぎて、三條中納言(二)の大食には醫師もあきれて迯げ、何曾(三)が萬錢には料理人の手も廻らず。されど二便はこれが類にてもなし。雪隱に高麗縁の疊を敷き、きんかくしに蒔繪を粧ひ、たとひおかはを梨子地にするとても、いくばくの費をかなさん。道具好の茶人とても、南京青磁の溲瓶は尋ねず。しかれば出入の違ひありて、飲食とは各別のさた也。そも又大小の二つが中に、大は人の平生に長雪隱の時をうつすも、纔に一晝夜に一兩度に過ず。只小便のわづらはしき、さのみ隙はとらねども、しきりに是を催す時は、いかなる公卿僧正も輿車にたまりかね、武者の戰場に急なる場にても、草摺を

（一）李白の句「心靜海鷗知」
（二）晉書王獻之言に「青氈我家舊物」
（三）藤原忠通

ながち、こゝに半日の閑を得る時は、窓に高嶺の月を招き、池に潁川のながれを引きて、官暇塵衢の耳を洗ふ。そこに水鳥の馴れておどろかざるは、かの鷗（一）の爲ならでも、人の心をよく知るならん。されば昔蜀山兀として阿房出づ、今田を埋んで傍眺なんぬ。百尺の樓閣八疊の座敷、足れる心の二つやは有る。それは天下に猛威をふるへば、やがて楚人の手に毀たれ、是は僻地に閑寂をたのしめば、老の行へを養ふのみにあらず、千代まつ岩に苔を敷きてかの青氈（二）のおもひをなさば、長く子孫を守り傳えて、こや色かへぬ幽居なるべし。たま〳〵爰の門敲きける日、あるじ一筆の記を求む。されば最勝寺（三）の額書きて後悔いけむ人も有りしが、我既に老にむかへり、よし名をおもふ人ならばこそと、東籬のもとの醉に乘じて、つひに狂語一篇をとゞむ。中々勝景をけがすわざにして、あはれ此句なからましかばと、憎みおもはむ人もありぬべし。

蘭をとりてみる山の端は西にあり

十德辯

(一)莊子に「子祀子輿子犁子來四人。相視而笑。莫逆於心」

はこゆるぎのいそにもいまだ至らねば、いざ月見むいざ雪見むと、さそふも誘ふも、おのづから物好のたがふふしぶしもあらざらむや。かれは此爲にねぶたき月をも詠め、是は彼の爲に惜き雪をも見捨て、さてや莫逆の遊びをなしけむは、祀輿犁來が交(一)にも、厚きは勝る方にやあらむ。そもや彼の老は、風雅に遊び客を愛し、緇素の友に信ありて、萬にたのみ思へる人多ければ、此別を惜む涙、墓栢も色のかはるばかりになむ。さるを思へば、それらも只口にいひ、心にこそいため、今此時に此集を編みて、其人の跡とふは誰そ。獨此人に止りけること、手向の山の郭公も、雲のそなたに呼びつれて、此信いかで其魂に屆かざるべき。

傍眺亭記　應野呂氏需

こゝに新に此居いとなむと聞きしは、更に久しからねど、いざ又隈なき軒端に鳥もなじまずと思ひやりしには樣かはりて、木立ものふり竹も陰ふかめて、只此ごろの樣にもなきは、いかにあるじの心つくせるにかあらん。あるじは猶年若うして、身は世路に立ち

筆墨の類にあらず、その筈ともいふべけれど、只つかはるゝ身の幸によるもの歟。たとへば燧石となりては鐵にもまれてうち碎かれ、其齡は月を以てかぞふべし。あるはまた挽磨と用ひられては、おどろ〳〵しく挽廻され、目きりの親仁に敲かれては、是も齡はただ年を計へぬべし。これらは皆下ざまの娌嫁につかはれて、貴介膝もとの勤にあらず。さればかの硯は昵近のつとめにして、さてや世を以て計ふべき、己が壽をも逐ぐるなるべきをや。こゝに山田生は、致仕大夫鏡徵君の近侍にして、多年の奉公他にことに、寵遇のあまり一面の硯を賜ふ。常に拜して是を祕藏す。予に硯の記を求むるに、此ぬしの勤るところ、硯のつとめに似たらむには、ともに幾代の春永くつかへ奉るべき行末を賀して、筆にまかせ書きおくりぬ。

仍㆓某求㆒作序

其人のために此人の此集編めることいかにぞや。紫の露のゆかりあるにあらず、只風月の席に交ること年あり。さるも其齡をたくらぶるに、かれは八十宇治川もわたり過ぎ、是

すむる道理はなし。しかれば肴は不用なれども、膳に一菜の乏しければ、若は到來殺生の物あらば、肴と名づけて一種もあらむは、亭主の心に任すべし。或は雪霜の夜風に歸路の寒さを防がむには、膳後の銚子を殘し置きて、一座滿尾の上において一酌をめぐらすも、又其時の模樣によるべし。それとても、一種二盃の掟を堅く背べからず。相撲芝居の果は必ず喧嘩に成りやすく、俳諧の集會の飲食に流れたがるは、今世のならはしにて、其道の歎なるをや。されば翁のなら茶三石は、皆人の口實としながら、其しめしを思ふ人少し。なら茶といへば、汁一つをだに省く教なれば、まして菜數を奢らむや。さしみの鱠の壺の平のと、奈良茶の膳にならべむは、たとへば行脚の僧の頭陀をすてて、荷馬荷持をつれたるがごとく、本姿本情にあらざることをしるべし。梅二なるをのこ、此ことを恐れて、予に俳席の掟を請ふ。道に信ある志を賞して、饌具の定をしるして贈るもの也。

硯部文

動靜壽夭の論をなして、硯の壽は世々を計ふといへり。石の性は硬くして、もとより

べし。

右先達ての定にもれたるを拾うて、庵の新制とす。飲食もとより亭主の了簡なれば、客の心得に及ぶべからず。且は言譯に似たらんも口をし。そも奈良茶にも限るべからず。なら茶の奈良茶なる心を守らば、菜めしも麥飯も則三石の内と知るべし。

贈レ人俳席定

一　飯はなら茶專用なるべし。汁なきは勿論にして、奈良茶ならずば汁あるべし。

一　菜は一つとして魚鳥は有るに任せ、珍奇を必ず求むべからず。なき時は豆腐茄子に、精進ならぬ言譯は、鰹といふものあらざらんや。

一　香の物は論ずるに及ばず。

一　もしは麵類の好ありとも、定規は右に准ふべし。

一　酒は盃に大小あれば、上戸とても二獻に限るべし。

酒に肴といふ物は、すゝまぬ酒をすゝむる助にして、もとより宴會ならねば、しひてす

(一〇)風俗文選
(一一)射御の辯の末にかける趣也

(一)晉の王衍、玉麈尾を揮ひて終日淸談す

り。文選(一〇)は俳諧の文集とこそきけ、此一篇にやさしき言葉もをかしき語もなし。我子へ(一一)の異見ならば、部屋の壁にはり置にはしかじ、何故に此辯はありやと、潛に謗りたる人もありしぞかし。是臭きが故に蠅のたかるがごとく、人も其非をいひたがる物なり。されば武を講ずるも兵を鍛ふも、武士には勿論と云ふ附合なれば、俳諧においてはいとうるさし、早々此號を改め給ふべし。我も武門に生れたれば、第一に先づ鼻を掩ふ。たゞしかくいふも則臭きやらん。さればこそ臭きものの身しらずといへば、少しの匂ひは愼し給ふべからず。

俳席掟

一 袴を取るに辭義あるまじき事。

一 夜更けて時を問ふべからざる事。

但勝手の鼾におどろくべからず。

一 世間ばなしにわやつく人は、たとひ王衍(一)が麈尾を揮ふとも、瀟園の居眠には劣る

（八）西行「鶯は田舎の谷の巣なれどもだみたる音をば啼かぬなりけり」

（九）許六作

からいろは習ふに異ならず。仁義五常と云ふ詞も、重言にしてくどし。外に鼓三線にのせる五常もあるかはしらねど、先づは五常のうちに仁義はありて、仁義五常といふに及ばず。願人坊主がかのえ庚申〳〵とよびありくとおなじこと也。我はそも俳諧は知らねど、釋迦の鼻をせゝりたる蠅が、金色の光もさゝず、孔子の肌著を這ひたる蝨に、道德備はる物にもあらず。勸學院の雀が蒙求を囀れども、だみたる聲を啼かぬ也けりと、（八）鄙生立をほめたる鶯には及ぶべからず。されば其世に生れ合せて、碩德の直弟とても、必上手とも極めがたし。しかるに滑稽傳（九）直指の傳を見れば、祖翁の血脈をうけて、俳諧文章の名人は我一人也とは、すゝどし。そも又翁の方からも此一人に渡したりとの賣上げ證文のさたを聞かねば、心もとなき樣なれど、俳諧は定めて上手にてやありけむ。武士道は口臭くして馥くはおぼえず。泰平の代に手ぐすね引いて、楠村上が上に立たむと大言いふ人も、其場に臨み其ことに與らざれば、ほか〳〵とは受取られず。さるを聖賢もこり給ひて、言を以て人を擧げずとは宣へり。是を我里にては陰辨慶とはいふ也け

(六)是講武軒のかきたる文句なるべし

(七)これも講武軒の文なるべし

たる返しに、釋迦達磨定家家隆もしらぬ歌、糞の役にもたゝぬなりけり、とはよみしが其ためしも思ひ出でらる。師匠が下手ならば、弟子は師匠を越すもあるべし。只我のみにほこるは遼東の豕也。めづらしさうにかきたるにて、のこりの衆の思ひやられてと云ふ、或狂歌の下の句やつくべからむ。佐々木梶原が先陣を評して、(六)搦手數萬の油斷人、一騎も殘らずわたしたれば、鎌倉にての荒言も、少しは是にて戻りけりとは、餘りに不案内なる心得違ひ也。二騎より外渡されぬ川ならば、何しに不覺の先陣して、犬死をばすべき。後陣のつゞく川と見たればこそ、先登の功は立てたれ。抑武藝十萬人に勝れたりとも、用ふる所不義ならば、明智を誅せし土民の竹鑓にも劣るべし。しかるに、(七)功なり名とげて餘力あらば、仁義五常の道を學びもすべしとは、碁象戲も舞謠も、おなじ物と覺えたる也。そもや五常の規矩にはづれて、何を以て其功をなし、何を以て其名をとげむ。家を建てて後に地築せよといふが如し。功なり名遂ぐるとは、我が行ひの仕上を云ふ也。老子は身退けといひたる、已に暮合比ぞかし。夫から仁義の學問は、隱居して

を以て是を害せず。文武二道と稱するは、其事跡を見て、後人是を嘆美せる也。我れと名のることは甚臭し。(三)五老井が射御の辯すら、或人是を評して曰く、其文の始には、武士の武士臭きは鼻を掩ふと書きて、人の謗りに針をさし、武藝をあてにすべからずといひて、他の嘲に蓋をして、さて其末に書きたる一篇、臭きこと糞土のごとく、藝の自慢は傍若無人也。律を知りたる僧の破戒無慙と、經學にわたりたる人の不行跡なるは、あしきを知りつゝあしきをなせば、世にいふ三寶の捨物にして、異見も療治もほどこす所なし。(四)白藏主も口を閉ぢ扁鵲も手を袖にして、只つくさせて見るより外なし。新當流も正法念流も、もとより武士の常にして、それがこゝへ出ることにはあらず。誰か武門に生れて、是をたしなまざるべき。二流三流の印可免許も、此邊にては珍らしからず。天下の名人はおのづから人も知り、世に顯はれて各別のさた也。(五)世に馬を見ると云ふ人あれど、山上入道の名をだにしらずとは、入道が身にとりては迷惑なる披露なるべし。昔或人歌を自讃して、この歌の心の奧はよもしらじ、定家家隆も釋迦も達磨も、と讀み

(三)五老井は許六、射御の辯は風俗文選にあり

(四)釣狐の狂言の伯父坊主

(五)射御の辯の文

聞く度に名におふ佳境俤にうかびて、常に雪月花の風情を添ふ。さてこそあるじ深く愛して、年立ちかへる屠蘇よりも、まづ此物を手にふるれば、醉來る初夢にも、其名のえにしあれば、などか一富士の嘉兆をも見ずやはあるべき。あるじ一語を予にもとむ。其物其名の來由はかねてあるじの筆に盡せり。我才の藻屑なる、何をか其汀にかきよすべき。只予に酒腸の乏しくて、八仙のなかまにも入らず、是に對しても蚫のいひがひなき、是のみ田子のうらみなるものを。

贈二或人一書

吾子今講武を以て軒號とし、句にも俳諧にも用ひて名とす。あら面白からずや。吾子はもとより武門の人也。紙賣る者の暖簾に紙屋としるし、油賣る家の看板に油屋と名のるは、買ひよる人のまがふまじき爲なれば、其いはれあり。吾子たゞ風雅の贔屓なるより、武道も一つに混ぜんとす。私心の迷ひといふべし。槊(一)を横たへて詩を賦するも、扇を敷き(二)て歌よみけるも、それはそれ是は是にして、しかも是を以てそれをあやまらず、それ

(一)曹操
(二)賴政

してたはむれの言葉に、

久しくものぶる齢はきくの露
はらふ千とせのしるき老樂

獻立に百六歳のはしとりて
これはめでたき世の茶めしくふ

田子庵記

こゝに田子庵と號するいはれは、此家に愛翫せる蚫貝の盃ありて、それを田子浦といふ故也とぞ。そはさらば難波にきこえたる浮瀬屋(一)の出店かといふ人も有りぬべし。そもや浦の名をとりて盃の名とし、亦盃の名をとりて庵の名とす。かくまで物を用ひたらんに、器財衣服の類ならば手數の入りて古びぬべきに、用ふる度に新なる、田子の名こそめでたけれ。思ふにそれ坡翁が亭(二)の名も、其時は左も有りつらん、欄によりて散る花を惜み、簾をかゝげて月待つ夕、よろこばぬ雨もあるべきに、此庵の名のそれには似ず、いふ度

(一)名高き酒樓こゝに浮瀬と名づけたる蚫貝の盃ありし也

(二)喜雨亭

鶉衣續篇上

みづから文章をかき集めて、或日腹を鼓し謳つていはく、實やをしといひし、夜のにしきのそれならで、是は又きれぐの、はかなきうづら衣なるは、いとゞ深草の、ふかくつゝむにしくはなし。

是を聞ける人やがて此名とせし。

百六歳なる大工甚助がけづりたる箸を人の饋りければ

食は是、とことはに命をたもつもとにして、四時其元氣を養ふの主、箸は又食をすゝむる從者にして、常につかへ怠らず。さればこそ壽を延ぶ。こゝに或所に百六歳に成れる翁ありて、是がけづりなす箸、たつとみうるはしく、珍らしくめでたき物なればとておくる人あり。是をよろこび、又百膳命長きを尊ぶは人の品によらざれば、彼の翁を賀

にちりぼひ出づ。さるを天明のころ大江戸なる南畝のぬし護花關にたよりもとめて、翁の遺稿鶉衣の前後篇は、木にゑりて世にひろめられける。されどのこり文ども猶こゝら多かりけるを、護花關みまかりて後はあともなくちりうせぬ。垂穂幼より父の志をつぎて、翁の文どものこりなく見るまゝにうつし、聞くまゝにかいあつめおきつるが、おのれも亦老の坂路のたのもしげなければ、おのれがみまかりし後は、さながらすたれうせなむとおもひて、こたび木にゑりて世にひろめつ。さるは、うづら衣にもれたるくさ〳〵の文ども、或は紀行の類也けり。是を鶉衣の三かさね四かさねとして、木にゑらせつ。亦翁の文に、管見草、短綆錄、古革籠、美南無壽比、野夫談、永代藏、無夜食談あり。詩集を蘿隱篇、和歌の集を蘿窓集、狂歌の集を行々子と云ふ。また俳諧の集に千句集、五百句集、蘿葉集、蟻塚集、もり桶あり。漢和聯句集二巻あり。皆翁の遺稿にして、みなおのれなからん後のかたみにもとて、たくはへおける物になむ。

文政未のとし

をはり人　たりほ

鶉衣續篇序

山鳥のをはりの國年魚市の郡なる前津の里に、一老翁おはしき。半掃庵也有の翁とぞまうしゝ。さるは尾張の君に世々つかまへたてまつり、中ごろはやごとなきつかさにものして、君の御おぼえもあさからずぞありける。わかきより月花に心をしめ、雪のあしたをたのしみ、郭公の一聲をしたひつるが、身にやまひ多きを常にうれへ、はやくつかへをかへしきこえて、前津の里に世をのがれ、俳諧滑稽のふみどもに心をやりつゝ、常のすさみにこゝらものせられつれど、深く庵にかくして祕めおかれつれば、をさ〳〵世にしるもの少かりき。おのれがうみの父なる文蘆翁は、此翁と交はりて俳諧滑稽のふみに心をよせられける。おのれがおほぢなる楚巾翁と也有翁とは、うるはしき友なりければ、いよ〳〵ゆきかひもしげく、つねにむつましくうちかたらはれける。おのれも稚き比父のせうそこ持たるずさのせにまたがりて、半掃庵に行通ひぬ。翁天明の始みまかられし後、くさ〴〵の文ども半掃庵および護花關六林翁のもとにのこりありしが、月を經年を經るまゝ、彼のふみども世

の霜積みて後、さてこそとは知らるべしとぞ。

花のやどり音をのこす鳥の跡たえじ

明和歳庚寅に集る。古稀前一年の翁也有、蘿の隱家に筆をとる。

（一）火

補逸

布袋庵風客句巣序

風雅を帯びて西東するもの、布袋庵を訪はざるはなし。訪へば句のあらざるなし。句あれば記せざるはなし。その記する者三百餘吟、かつて一軸に滿てり。さるを過ぎしその年の夏、情なき青あらし、丙丁（一）を延きて池魚の災此册子に及び、年來のすさび端なく一時の烏有となんぬ。惜むべし恨むべし。あるじ深く悔み、猶幸に心に記するを思ひ出し思ひ出し、ふたゝびつらねてこの一帖を起せり。さるも其もと有りしもの、十にしてそれが一つにも及ばず。されどもあるじの年いまだ甚老いず、徳いやましに隣ありて、是より書きつゞけば、ほどなく又棟にも充ちぬべし。序を請はれてたはぶれていふ、君見ずや青山の草一たび燒けば後に生ふ蕨必茂し。されば祝融心ありて、これより句を多からしめむとて、初の草を燒くものならむ。何か悔いん。かの塞翁が馬のためしも、今十年

りて覺ゆるまゝ、是に習ひて琴曲のうたひとつ作りて、かの求めに答ふ。松に琴の緣もあればなり。

かりそめにうゑしまつ。
人と共に年ふりぬ。
たとへ松はふるくとも
人は千代をたもたむ。

六林校

（一）左傳「絳縣老人曰、臣生四百四十五甲子矣。師曠曰、七十三年。史趙曰、亥有二首六身、下二如身。是其日數也云々」

歳旦の口號

舞津に久しくかくろへて棲む翁あり。年明けていくつぞと人の問ひしかば、もとより絳（一）縣の老人のむつかしきなぞ〳〵は知るべくもあらず。かた腹いたき歌よみて答へける。

足らで死ねといひし四十もふたり前
　つれ〴〵草に面目もなし

松歌并引

金森氏桂五子の庭に、一株の松あり。此松によりて我に一語を求めらる。そも此求めはいかにといふに、慈母のいとけなくて始て髪置きける年、すさびにうゑし小松の、其人と共につゝがなく、幾星霜をかさねて、梢は鶴も巣くふべく、影は雨も凌ぐべく、今はなりにたりとぞ。我知りぬ、桂子の意必しも此松にはあらず。只たらちめをことぶく孝情より、其愛松に及べるならし。されば少女の琴を習ふに、かならずふき組といふ曲よりす。此はじめの唱歌を四句にして、假名の韵をふめり。自然に叶へるものか。いと興あ

ずろごとを書ちらして、是を記とはせよとて贈ることとしかり。

送月堂記

西濃成戸の里に世々栖める人の號を求めけるまゝ、送月堂の三字を與へぬ。猶其記をと乞ふに、只ふかく思ひ入りたる謂もなけれど、其事しばしばにして止む事を得ず。そもそも此地景、東は朝もよひ岐岨の大河清く流れて、雨に著る美濃と尾張を分てり。西は角もじや伊勢より近江の山々まで、嶺をつらねて甚遠からず又近からず、只よき程に屛風をひけるごとし。もとより城下へだたれば、風塵の喧しきなく、常に農業の目を慰むるあり。四時の佳觀いひつくすまじく、何を揚げてか此名とはせん。されば蛙なく朧夜、時鳥にのこる有明、秋は稻葉の露に宿し、冬は霜雪に冴ゆる詠、只夫月にのみこそ遺るまじけれ。且又一字を添ふに、物皆入るといへば、出るはこもり、歸るといへば來るを兼ね、送るといはゞ迎ふは兼ねつべし。是を以て此二字に定む。隈なき影を惜む心也。所謂東坡が亭とは(一)、裏合せの隣ならむも亦おかしからずやと、筆に任せて記とす。

(一)東坡扶風郡を治めし時喜雨亭をつくる

（一）枕草紙に見えたる謎

げに世に商沽のさま〴〵なる中に、是ぞ羨ましきなりはひならし。店静にして秤十露盤もさわがず、常に文人雅士になづさひて、我智の益るたつきとなるべく、諺にさがなきものにかぞへたる、お乳の人はいさしらず、船頭馬かたの忍せたるかぎりは、立ちよるべき店にはあらず。むかし孟母の借屋を撰んで、衒賣とていやがられしは、三銭五銭の利を爭ひ、手をうち鬧る商家のうへにして、かゝる類にはさしもあらじ。いでや市中に栖を求むとならば、此隣こそ子を育つる最上の所なるべけれ。然るにあるじかつてある先生の門に乞ひて、號を指峯と定めけるとぞ。其意いかならむ、主もおぼろ〳〵として、予に此記を書きてと求む。されば思ふに、高きを望む丈夫の志を表せるもの歟。猶も心の奥の海のふかき心やあらむ、又は山の井の淺きやらむ、いさ汲みしらぬ予にもとむる事や。かの天に張ゆみといひ出でけむ、（一）安らかなるためしにもあらで、いとむづかしきなぞ〳〵を造りて、予に解けといふに似たり。老懶の手に及ばずと、むつかりて固辭すれども、うけひかず。とまれかくまれ筆染めてと、ひたぶるに責められて、聊取次のす

こそ思へるに、人やゝ穴を嗅ぎつけて、侘びたる栖も面白きやらむ、今は叢に道ふみひろげて、腹つゞみの閑を妨げらるゝ事しば〲なり。されどもしか厭ふは塵客の事、孤松のあるじは同調相應ずるの人、世にいふひとつ穴の狐なれば、來ん〲(二)といはむには、昆(三)布に山椒の濃茶をまうけて、我も亦快々とかたらふべし。

方十園記

あるじ名付けて方十園といふ。十は十里の十にあらず、町にあらず反にもあらず、只わづかの閒地なり。爰に山をも築かず泉をも引かず、賤(一)がこもりのまねびして、明暮慰むつまとはなせり。世の人はともいへ、(二)有宗入道をして此園を見せしめば、かくこそ有るべけれと、手を拍て稱嘆すべし。時も今安永四年閏臘月、若菜つむべき春已にちかき日、七十四翁半掃庵筆とる。

指峯堂記

年比相知れる好事の漢あり。あらたに世わたる業をいとなむとて、書坊の主と成りけり。

(二)「こん〲」「くわい〲」共に狐の鳴聲
(三)釣狐の狂言、伯藏主の詞に「昆布に山椒でよい茶を申さう」
(一)木守歟
(二)徒然草に有宗入道兼好の庭を見て細路一つ殘して畠につくり給へと諫めし事あり

（一）漢書の語

る。一日我が幽栖を敲いて後、はじめて其高致をしれり。そも〳〵我は隱遁の容をまねびたれども、猶世に隣るが故に、舊識遊人に撩されて、夙志の閑を得る日少し。かれは中々世路に立ちて、人しれず閑を得る。鷺と烏のうへを見るに、夏木立のしげみによれば、烏よく隱れて鷺はあらはなり。雪のあしたに見わたせば、鷺よく隱れて鴉は紛れず。黑白の隱見いづれをか得たりとせむ。されば我亭のもとより知雨と號する、其意を汲みたりとて、頃日例の金玉の文をつらねて我に試み問ふ、文意誠に面白く、くり返して擊節に堪へず。されども此の二字を取る事、聊別に微意あり。（一）巢居知風穴居知雨の語あり。つら〳〵我身の上を思ふに、幸に上國世臣の家に生れて、不肖の身のおほけなくも父祖の祿を傳へ、剩こちたき官に承乏して、南郭が竽を吹きしも二十とせあまり、たとへば狐狸の人らしく化けて、よく尾を藏したるが如し。程ふるまゝに、しかすがに青松葉の辱を恐れて、みづから妖の皮を脫ぎ魯鈍の正體を顯し、卒に蓬蒿のもとに穴を營み、かく世の外に餘齡を守るなり。知雨の因緣かくのごとし。今は燒鼠にも迷はじと

らねて、世に一帖を遺さんとす。予に小序を請はる。嗟乎我もとより不才の樗櫟、今は猶老朽ちて、花もなく葉も落ちて、聊のことのはも綴るにたへず。たま／＼かゝる求あるも、固く辭して筆をたつ事已に年あり、今更に何をかいはむ。わづかに一句を寄せて、且いたみ且弔ひ、且は求に答ふる事しかり。其蒿里の歌に曰く、

淸女が筆の跡も、(一)たどよのつねのさまをこそいへれ。

かなしきもののことし師走の月夜哉

(一)一本枕草紙「すさまじきもの、老女のけはひ冬の月」

知雨亭後記

城北の市中におそろしき男有りけり。世々藥を鬻ぎて業とす。表には兒玉屋の暖簾を浮世の風になびかせ、世わたる塵の紛々と見ゆれど、内には孤松軒の額を閑適の月に照して筆硯にあそび、詩を賦し文章をつゞりて、見ぬ世の人を友とす。此樂世の俗客は夢しらず。吏隱祿隱の類にして、商隱とこそいふべかりけり。昔伯休は身も名も隱して藥を賣らんとして、かへつて安く見知られぬ。今此男は隱れずして賣る故に、其心をよく隱

ればこそ俳諧の夜會ありて、其句數百に滿つる比ほひ、勝手口の屏風の上より、女の首ばかり忽然と見えて失せたるは、夜食の時分を窺ふならむ。やがて臺所に摺小木踊り、俎板動き出し、膳棚のあたりぐはら〳〵として、しばらく家鳴のけはひするは、妖物の出づるにはあらで、奈良茶の出づるなりけりと、見し人の語りしなり。此亭に一章の文を請はれて、例の戲言を筆に任す。是も亦世のよしあしにわたらざる、百話の内のひとつに宛てんには、饒舌の咎もあらざるべし。

贈二佐屋洗耳一序

をしめども限あるものは命なりけり。佐屋の里に世にしられたる水鷄塚あり。されば四方に蕉翁を慕ふが故に、其句(一)を殘せし地をしたひ、地をしたふが故に此塚をしたひ、塚を慕ふがゆゑに築きし人をしたふ。其慕はるゝ人は誰ぞや。此里に久しき騷士吟山なり。むかし月空庵に其道を學びて、生涯風雅に遊びしが、惜むべし、丙申の冬、享年古稀に四つを添へて、卒に夜臺の客となんぬ。孝子洗耳、哀傷のあまり、遠近親疎の挽詞をつ

(一)芭蕉「水鷄鳴くと人のいへばや佐屋泊り」

と、取て笛につくればその聲獨絶れたり
(二)同人呉人の桐を焚く音を聞きて良木なるを知り琴を作る其端焦げたるを以て焦尾琴と名づく

る。されば臼といふものは、賤の手にならして、その品下れるに似たれど、君見ずや、久方の月の中にも藥を搗くときけば、もしや其臼も此木の類にやあらむ。

臼の香や月の兎はきゝ知らむ

百話亭辭

金人の口を緘し、物いへば脣寒しのいましめも、只いふ人の上にして、聞く者にはあづからず。さればにや耳を緘せるためしもなく、耳たぶ寒しとの句も聞かず。非禮聽く事なかれの教は、たとへば客人の來りて非禮を語ればとて、庚申堂の猿の如く、耳をふたぎても向はるべきかは。たゞ是聞きながら、其よきはとゞめあしきは捨てて、心に撰のあらむのみ。ましてよしあしの理屈を離れ、俳諧一時の談笑に、客を愛せる百話亭には、さぞなあるじの徒然もなからむ。そもく世に百物語といふ事を傳へて、燈火のもとにまとゐして、奇怪の談をかたみに言ひもてゆき、其數百に滿つる時は、かならず妖物の出づるとぞ。人もし百話亭の名を聞きて、扨はかの百物語の會所かとも訝らん。さ

(一)くわいは狐の鳴聲

(一)後漢の蔡邕柯亭に宿す、其館椽を竹にて作れり、邕仰見て曰く良竹なり

り古き一帖を得たりとぞ。猶是に筆を加へ、こまかに料理鹽梅して、歯のなき口にも味ひ安き一巻を著して、手引草と題して初心の俳士の便とす。我はもとより一つ穴の狐、(一)快なる哉〳〵と、撰者の求に任せて、序者と化けて一語を贅す。

香木記

むかし龍の繪を好ける人には、眞の龍顯れて姿見せけるとぞ。好むに信あれば、物に感應あることなきにあらず。我府下に花井某、深く香の道を好みて常に樂む事久し。しかるに其家に古く傳へたる臼あり。いたく年經るまゝに、底なども破れにたれば、今は所せき不用の物なりとて、くだきて釜木に打交ぜけるに、ある日いみじき妙なる香の、家に滿ちわたりけるを、あやしみて求むるに、かの竈に燒ける臼の木なりけり。心いれて見るに、實に木のさまもよのつねならず。驚きて香の師のがりたづさへ行きて是を問ふに、うたがはず赤栴檀にさだまりぬ。名はそのまゝに花井臼と呼ぶとぞ。柯亭竹の笛、(一)(二)焦尾の琴を得たるためしにも通ひ、週日こゝらあつかひ草にして、めで羨む事にぞ有りけ

もし年を經て毛がはえたらば、茶筅で剃つて事なかるべしと、かの老農求めにおふて、筆に信せて漫に記す。

與二脇息一文

應二濃州内津更幽亭三止之需一

机には狹し脇息には長過ぎたり、是は我庵の長物といはむ。用ふる事もなく側に捨置きたるを、世にすたるものはなかりけり、三止なる男是を得させよといふ。もとよりおしまづきの惜まずして讓り與ふ。小庵の棚を狹め、煤拂の厄介なりしを、我はうつゝ山の鬼に瘤とられたる心地ぞする。其事を書きて添へよといふ。筆に任せてかくのごとし。

漢和手引草序

俳諧の漢和、昔今きくもの多からず。さるはもとより俗語ながら、一向に字を知らぬ人はしにくき業にて、假令志ある人も、法式も覺束なく、かたらふ人も稀なれば、興なきが故ならし。爰に未足齋の主人此道に遊ぶ。天斯文を助けしにや、はからずも壁の中よ

地紋心ありげに、其容つぶ〳〵といふに及ばず、ゆかしむ人は尋ねてみるべし。もと此人久しく茶道に遊びて、其奥儀熟して後の今は、必しも茶に專ならず。さりとて思ひ捨たるにもあらず。宜べなり、此釜の心に叶ひて愛するや。冬籠の爐に懸けて湯を沸し茶を煮るの外、あるは霜夜の雜炊を焚き、雪の朝に粥を煮るに、六七合の用をなせり。其大さ是を以て知べし。然るに奇妙に驚くべきは、かつて釜月の名を定むる事年有りて、果して此釜を得たるはいかに。其名や渠を呼出しけん、かれや此名を兼ねて呼ばせけむ。我が釜かかまが我か。されば世の物語に、昔俵藤太なる者龍宮に賴まれて、其謝禮として取れども盡きぬ俵を得たり。夫より俵藤太とは號せしとぞ。是を思ふに蜈蚣を射ざりし始の姓を何と云ひけむ、世に傳へず。只もとより俵藤太にして、後に俵を得たるなるべし。しからば此釜と同じ日の談にして、釜月も釜を得て後の名なりと、世にまた誤傳ふべし。よしそれはともあれ、此釜のかまはぬ事。つら〳〵思ふに、名にのみ聞けるぶんぶく茶釜とはいかなる物ぞ。字は分福とも書くやらむ。或はこれらの事をもいふか。

とは思はざりけむ。思ふにむくつけき姿は似もよらねど、もろこしの鍾馗と我朝の六林を、鬼一口にいひて畏るべし。さらば此一卷をたくはふ家には、鰯の頭も何かせむ、柊もたのむべからず。奇なる假名妙なるかな。舞津の老隠感嘆の餘り、戯れて此端に筆とる事しかり。

釜賦

舞津の老農が忘年の一知己あり、俳諧に遊ぶ日はみづから名を釜月と稱す。もとより大邦に祿を得て、さばかり物のやつ／＼しからぬを、濁りて富めるよりも清くて貧しからむこそと、高きを慕ふ心より、史雲(一)が釜の魚を生ずるに至らざれども、弊居の板間まばらに荒れて、月もまに／＼竈に漏るの心なるか。あるは又巷の世話にいふ、月夜に釜のをかしみによるにや。さるに近き比、市中に時雨のやどりならむ、ある店先によりて郭巨が鍬もからず、あやしくさゝやかなる釜ひとつ掘出せり。是を得て大に歡ぶ。そのさま茶人のたのしめる物ともみえず、又塵俗の世帶じみたる物にもあらず。すべて夕顔の

(一)後漢の范子雲、窮居自若たり、閭里歌つて曰く「甑中生塵范子雲、釜中生魚范萊蕪」萊蕪は子雲が吏たりし處

を求むる時は、襖に風塵を隔てて名におふ手枕の茶を煮て、一室に幽趣をたのしめば、もとより深山簷に近くして、伐木の丁々たる耳さらに清かるべし。此亭に號を呼ぶに、更幽の二字を以てす。我は老と病にほだされて、神飛べども訪ふ事あたはず。訪ふ人あらば、此名の虚ならざるを知るべし。

つのもじ序

むかし〳〵蒙恬といへる人、始めて筆を造りけるより、和漢に能書の人こも〴〵出でて、我朝の高野大師は、五筆の名をふるひ給ふ。されば五筆のほまれは、蒙恬かつて知る所にあらず。かつその大師又四十七のいろはを造りて、和國に自由の働をなす。しかるに今また六林出でて、その四十七字を配りて、文を綴り歌をつらぬるに自在を得て、人の目を驚し、つもりて一巻の小册子なんぬ。是また假名を始めし大師のしろしめさゞる所なり。聞くならく、(一一)むかし世に文字てふ物の始りし時、かく人の智さかしくなりて、己等がかくろへて住む方なからんと、鬼の目に涙して泣きけるとぞ。それもかばかりの事

(一二)錢の神

(一一)淮南子「昔蒼頡作レ字。而天雨レ粟、鬼夜哭」

題レ像文

人の見よとて携へ來たる一軸をひらけば、上に我句の書添へてあり。さては此翁は我姿を寫せるにこそ有りけれ。老の手に鏡も捨てて久しければ、面かげは我忘れにたり。今は此絹よりも劣りぬらむものをと、あさましく且なつかしく、暫見とれぬる内に、傍の童の口さがなくてよみける。

金岡が馬にならはゞ夜は出て
　萩の戸棚の餠や捜さむ

いと憎けれどいかゞはせん。

更幽亭記

から衣うつゝの山里に、代々薬を鬻ぐ家あり。所は少陵がたづねし張氏(一)が隱栖に似て、貧富は同じからず。夜金銀の氣は只此家より立ちのぼりて、上清童子(二)常にはたらけば、物の不自由なる山中ならず。今のあるじ風雅にふけりて客を愛する中に、實に山間の閑寂

（一）杜甫が題ニ張氏隱居ニ詩に「春山無レ侶獨相求。伐木丁々山更幽。澗道餘寒歷ニ冰雪ニ。石門斜日到ニ林丘ニ。不レ貪夜識ニ金銀氣ニ。遠レ害朝看ニ麋鹿遊ニ。乘レ興杳然迷ニ出處ニ。對レ君疑是泛ニ虛舟ニ」

て一句をとゞむ。

手の跡や雪の足あと見ぬ世まで

六林いはく、風月堂は尾府本町書林なり。此家に芭蕉翁行脚の比立よられて、一句を残されし眞蹟あり。今此に模寫す。

印
書林風月ときゝしは名もやさしく覺えてしばし立寄てやすらふ程に雪の降出ければ

はせを印

いざ出む
ゆきみに
ころぶ所まで

丁卯臘月初
夕道何がしに送る

縦九寸五分斗横一尺四寸五分斗有。今横物の一軸とす。

是貞享四年丁卯冬の事なり。今天明八年戊申に至て百二年なり。

夕道は今の風月堂孫助が曾祖父にて、あら野集の作者なり

歸り來るとも、野中の清水も影迷ひて、知らぬ翁とおぼめきやすらん。よし只かはらぬ心の手向を冀くはうけよとぞ。

露は袖萩の名にあるみそ三とせ

送㆓曉臺㆒辭

此秋名にしおふ更科の月みん、それより武藏野の露をも分けばやと、思ひ立てる曉臺を送る。其行先の信濃路には、我知れる千丈友梅なる男あり。武藏に布袋庵の主は、殊に年來の交あれば、我が一言を傳へて立寄らむには、假の宿をよも惜むまじ。行きくればよし此陰によりて、心の花のあるじとせよと、(一)陽關の一句を筆して、別るゝ袵にさしいれぬ。

漏らぬ宿をしへむ月の旅ながら

懷舊辭

風月堂を訪ひて、むかし翁の此家に書殘されし一軸を見て、感あるの餘り、紙筆を請ひ

(一)送別の句

（四）瓜の末なりをいふ

世にすさめられ、名をさへかりもり（四）とは、平家の公達を似せけるやらむ。「只己が身を省るべし。味噌に油に味ひをかざりて、寺に鴫焼の仇名こそ惜むべきを。かくいひ〳〵て果しなければ、今は翁も枕をもたげて、あなよしなし〳〵、彼はかれ、此はこれ、瓜の蔓に茄子はならず、只己がさま〴〵にて、何ぞ尊卑の品あらむや、不用の爭ひをして、なれそこなひ味變じなば、人に疎まれ捨てられて、畠のこやしと成りや果てなむ、やみねやみねと、扇を把つて席をうつ事三下。ふたつの姿たちまち消えて、夢も亦さむれば、只青丹よし奈良漬桶のみ、依然として棚本に殘れり。

祭二嘯花一文

この秋は毛利嘯花子が三十二回の忌に當りて、いさゝか其魂を祭る。我少壯の日明暮の友なりし昔を思へば、まづ身の老ぞおどろかれぬる。そも文場に交りし其世の人を指に折れば、夫も失せ是も去りて、のこる者今日こゝに打かたらふ只三人ばかり。木兒翁は七十を越えて猶健に、米布は六十に臨みてもとの姿さしもかはらず、只我のみ六七十の間にながらへて、其數に入りながら、病み衰へさまもかへて、有りしにも似ねば、魂もし

（一）秦の邵平瓜を長安の城東につくり東陵瓜とてもてはやされし事史記にあり

（二）催馬樂の文句

（三）わさゝは新酒。夫木抄「初茄子わさゝの粕につけまぜてよめにはくれじ棚におくとも」

進んで云、我そも居士の下に立つべくもあらぬを、今一桶の内に在りて、何ぞ我より上つ方に横たはれるやと。居士云、我もまたいかでか先生の下とは定まらむ。予はひたぶる賤しき農夫の手にのみもなれず、昔邵平（一）が東門に作り、殊に驪山の溫湯を分ちて、二月中旬の走りをも獻ぜしものを。「いな唐土の事はしらず、山時鳥里馴るゝ頃は、駿河のはつなり價玉の如く、籠に盛り馬にのぼりて、東都に下る勢を見ずや。たま〳〵白瓜といふものありて、わづかに其威を借れども、我目には驥尾の蠅とこそ見れ。「抑々官人の他郷の役に倦みて、故國へ還る悦の時を、瓜期とて殊に待たるゝものを。「さらば一富士二鷹に並びて、夢の吉兆とするにはいづれ。「我聞く昔禪僧にふみ躙られて、夢裡の蝦蟆となりて命を請ひし妖怪はいかに。「いさ我も亦聞けり。一條帝の御時に、怪しき毒を含み、清明に占はれ行尊に祈られて、踊り狂ひし不祥こそ増りぬべけれ。「（二）山城のこまのわたりの瓜作りと、故人の詞にも連ねしぞかし。「扨はかのわさゝの糟（三）につけ置きてと、讀みける歌はしらざりけるよ。「うたてやそれは秋茄子の、姫に立ちける浮名ならずや。「大原や田中の村の瓜作り、秋は果つともかりもりなせそと、示しける歌も有りしを、見苦しく

習はねば何をか祕せむ。五倫五常は外に師あり、狐狸の輩に迷はされて俳諧に混ずべからず。明和四年朔旦冬至、半掃庵隱士示レ之。

寄ニ未足齋一歌

未足齋々々々、未足齋のあるじこゝろみに物問はむ。そもや花にめでて春の日の足らざる歟。傾く月をしみて秋の夜の足らざるか。目に物のたらざるか。心に物のたらざる歟。世にいふ長者富にあかず、蟻の如くにいそがしく、蠅のごとくにあつまるは、あるじの常に笑ふ所、茶漬に菜のたらぬ日も、酒に肴の足らぬ夜も、人に未足の名は示して、未足をもとむる心なし。君が心我しりぬ、未足は知足なる事を。未足齋のあるじなる哉。

足して見ぬ心や月の十三夜

夢ニ二客一賦

秋の蟬猶梢の暑さをのこし、暮待つ翁の肱を曲げたる假の夢に、怪しき二客の爭ひを見ける。一人は色黑くして疎なる髭針の如く、みづから崑崙先生と名のる。一人は面長に頂すこし窪なるが、眞桑居士と稱す。共に酒臭きはいたく醉ひたるやらむ。先生まづ

二歳、火燵に脊をくらべ、乳を明暮にして、いまだ奈良茶を甘なはず、もてあそぶ物は何ぞや。風車の花につらきも、起上り小法師は月に寢ぬ夜の心あるかも。さるから師に對していまだ一字の問をなさず、我が物ぐさを勞せざる事、深切最上の門弟、いづれの人か是にしかん。我辭せずして約をなすは此故なり。しかれども我生先に示す事あり、故人いはずや、和歌に師なしと、況や俳諧に於てをや。只法式はよく習ふべし、されども其道に交れば、法式はおのづからにも知りぬべし。法といへば理非の穿鑿なし、天下を公道にして、隨分人のしる事を專とす。祕する法は有るべからず。しかれば世に祕事口訣とするは何ぞや。物に用捨の心得あり、或はてにをはの習あり、夫は皆當然の理にして、我智明らかなる時は、己と知りて無理はいはず。習ひて知るものは、只其一事に止りて他に働かず、我と一理を知る時は、萬端にわたりて物みな明らかなり。師はたゞしばらく東西を指すのみ。たとへば詩文章を學ぶ人の、祕事口訣といふ事は一つもなし。しかれども上手あり下手あり、只我才のなす所にして、何ぞ別に祕事を貴まむ。世に祕事傳授といふものは、渡世の者の術なり、予は渡世の爲にせねば祕事口訣はならはず、

(一)謡曲「大江山」の文句を取る

入りかはり給ふこそめでたけれ。されば爰に節分庵あり。是常住の節分にして、來る福は日々に親しく、去る鬼は日々に疎し。されどもあるじは殊に酒を好みて、酒豪の名をとれば、酒の一座にては鬼とや人のいふらむ、鬼とな思しそよ(一)、赤きは酒の咎なるものを。只是常に訪ひよりて、友とする者ことごとく上戸なるべければ、古く諺にいひ來る、下戸と鬼とはなき世なりとは、この節分庵の事なるべしと、請はれて以て是を記す。

與二晉路一辭

晉路は竹内某が男兒、二歳なる春の初に、正月が來たうまうまをおれもくはふといふを、よみて見れば發句なり。翁感じて脇を付けて、戯れて門人とす。

不佞少年の頃より俳諧を好み、今老境にも此一癖はやまず。是を幽居の友とすれば、何知り得たるもなけれども、さすがに年久しきに迷ひて、人はゆかしくも思ふやらん、敲推を問寄るもあれど、師弟に似たるを慚ぢいとへば、身の薄劣を告げて固く辭し來れり。さるを玆年六十六歲、始て一人の門人を約する事有りて、名をも晉路と授く。此弟子年

不レ如二生前一樽酒一

(四)白樂天「古墓何代人。不レ知姓與レ名。化爲二路傍草一。年々春草生」

や生れぬ前の襁褓定めとは、早計を訾る諺にいひて、花見にと催す興は嵐に吹きさまされ、月みんとたくむ空は三五の十八にくの雨に妨げられて、世にあて事の違ふは多きならひなるに、只此終焉のまうけばかり、萬に一つもたがはねば、明日の事笑ふ鬼も眞顔になりてうなづくべし。風雅に心ある人の誰か羨まざらむ。(四)年々春の草生ずと白氏が歎には事かはりて、是はめでたき例なるをと、とみに手向の一句を寄す。

我とわが塚の掃除や春の草

節分庵記

もろこしには鐘馗といふ者ありて、能く鬼を逐ふとぞ。其容を見るに、眼を怒らし臂を擐げて、長劍をふり廻せば、實に鬼は恐れつべし。されども騒がしき其中へは、用心ふかき福の神は、怪我を氣づかひあぶながりて、あたへりは寄りつき給ふまじ。かしこき我國のならはし、年々の節分にはひよわき親仁も年男と名のりて、二句の文を唱へ、豆をつかんで蒔きちらせば、鬼は外へと逃げちり、福の神は呼ぶに隨ひ煎豆の香にめでて

（一）晉の七賢の一人。酒のみとして名高し
（二）呉の季札の故事
（三）白樂天「身後堆金拄北斗」

及ぶとも、對決の場に臨んで能の多少をくらべんには、板倉殿の捌にもあやまたず勝を取るべし。自在鍵々々々、世に己が名を憚る事なかれ。

發句塚序

聞くならく時節庵の社中、庵主に告げて云ふ、足下百年の後には生前得意の句を石に彫り、不朽の發句塚を築くべし、此約必しもたがへじと。庵主云、誠に厚情謝するに堪へたり、しかるに、たとへ劉伶（一）が墳に酒を灑ぐとも、只徒に蟻の穴を驚かし、徐君（二）の塚に掛けし劒も、其意しらぬ人は鴉威しとも見てや止みなん、汝達その志あらば、同じくば生前に其事あれかし、さらばまのあたり見て悦び、一言の謝禮も述べなんをと。社中皆云、是只忌々敷の憚あり、庵主其望あらば、もとより我曹の願ふ所なり、さてぞ言を食まぬ寸志も見えんと、しきりに此事を營みて、時しも春の鶯なく寶生院の傍に、さるべき地を求め、一基の石を建て一堆の塚成んぬとぞ。頃日庵主來り、予に此事を語りて一句を請へり。實にかの北斗（三）をさゝふ黄金も、南都をほむる諸白も、身の後には何かせん。そも

(一)平家物語屋島合戰の條に義經弓を海に落して鞭にてかきよせし事あり

(二)陶潜頭巾を以て酒を漉す。よりて漉酒巾の稱あり

は路兮のぬし、我が老衰の立居むづかしきを見て、居ながらの用をなせとて、新に工夫してみづから造り出し、我に贈れる物にして、もとより手の巧なる事左甚五郎が右に出づともいふべし。しかのみならず一章の文を書きて添ふ、仙才又妙にして愛すべし。予も此頌を書かむと思ふに、義經の弓流(一)猿猴の手の喩を、彼の文章に取られたれば、外に文華を餝るべき言のはもなし。抑此物の多能なる、座右に入用の調度を搔寄するは更なり、杖として老を助け、棚の鼠を驅出し、簷にすかく蜘の巣を拂ふ。俯して石公が橋下の履を取り、仰いで伯獵が松の羽衣を盗むに便あり。花は折りたし梢は高しと、心づくしの木のもとに、是をもつて曳きたはめて、ほしき枝をもたやすく得べければ、まして柹を落し柚子をちぎるに、心の欲する所に隨ふ。採蓮の舟に借さば、西施が袖をぬらすに及ばず、洗濯の盥のもとには、淵明が(二)酒臭き頭巾も懸けて干しつべし。さればたとへ八町二郎が手には短しとて捨つるとも、物臭太郎が膝もとには、此君なくてはとも愛しぬべし。もし此物の世に弘まりて、彼爐上の自在鍵、我名を奪ひたると爭論を起し訴に

のうそばかり、人の爲にいはず身の爲にせず、跡なき雲の郭公、名のりかけてつくうそは、人をあやまる罪なしとて、うそ八百坊の額うちて俳諧に遊ぶ人あり。實も鼻のほどおごめきて世路にうそつく人は、我はうそならずと僞り、自らうそなりといひて俳諧する人は、それ則まことなれば、交を結ばむには賴むべき友の一つなるべし。されども麁忽の者ありて、坊と屋の字を心得違へて、茄子を大根をと求めに來たらむに、是は靑物賣る店にあらずと、あるじの答に不興して、さては家名にうそつきたりとつぶやかむ無風雅人は、論ずるに足ざるべし。八百坊の記を請はる。我八百の意を問はねども、そのよる所を推量して、此一語を書きて贈る。あるじの心まことあらば、よもや此記を捨つべからず。

自在鍵頌

世に自在鍵と呼ぶ物あり。夫は爐上に下げて茶釜藥罐をつるすに、延縮を心に任する物とぞ。わづかに一用をなして、何ぞ其名のみことぐ〵しきや。予別に自在鍵を得たり。是

(一)芭蕉翁二十五ケ條

て此わたりへも音なふ事にぞ有りける。行く年波のしげく打ちよせて、かたち見にくう心頑に、今は世にいとはるゝ身の、老は外へと打出されざるこそ、せめての幸なれ。

一えだの梅はそへずや柊うり

雪はらふ垣ねや梅の厄おとし

梅やさく福と鬼とのへだて垣

八百坊記

二十五ケ條(一)といふものに、蕉翁の詞とて、詩歌連俳は上手にうそをつく事也とぞ。翁は俳諧の祖師なり。詩歌連歌の人はいさ知らず、俳諧師は是を守りて我劣らじとうそをつけども、夫も翁の嘘かもしらず、あるは門人のうそにもやあらむ。うそは乾坤に滿々たれば、我口にうそはつかねども、耳にはうそを聞かぬ日もなし。そもやつれ〴〵草に、うそ聞く人の品々を云ひたれども、うそつく人の品はいはず。うそに大うそあり小うそあり。佛のうそは人を救ひ、莊子のうそは人を敎へ、傾城のうそは人を迷はす。只俳諧

鶉衣後篇鏡裏梅　うづら衣拾遺

節分賦

こよひは鬼のすだく夜なりとて、家々に鰯の頭柊さし渡す。我大君の國のならはし、いづくか鬼のすみかなるべき。昔の聖は衣冠して殊に此夜をつゝしみ給ふとこそ。世をのがれたる翁の炬燵に足さしわたし、年を惜むの外に何の辨へたる事もなきこそ、中々安かりけれ。今は捨てたる世ににげなきわざながら、家に老いたる男の、かゞめる腰にしほたれ袴かけて、けしきばかり豆うちちらし、聲わなゝきて鬼やらひたるも、昔覺えておかし。年の數を豆に拾ひて厄拂ふ者にとらするものとて、己がさま〴〵する事なるに、昔は膝のあたりかい探りても其數は得たりしが、今は八疊の一間にもあまるばかりに成りにたるぞ侘しきや。厄拂ふ男の、宵は町々をめぐりて後、夜更くるほど聲呼びからし

惜ㇾ宿疑二弘法一　換ㇾ題試二頓阿一　耳言牽ㇾ袖笑

口說入ㇾ牀和　截ㇾ指女郎誓　挐ㇾ腰祖父褌

移敷殘暑褥　脫曬有明蓑　濱市初鮭貫

辻能油蟲多　花開粧二寺院一　柳動彩二溪河一

後うづら衣寶暦より明和の末まで、半掃庵の遺稿をもてこれをうつす。

六林校

（一）灸治の法に頭に二穴手に二穴背腹に二穴足に二穴處を定めて點ずることあり之を四火といふ

聯句并引

晝寐に槐安へ至りしは、夢にも足のまめなる男なればならし。我が夏の蘿の門をも鎖して戸出もせぬ物ぐさを知ればにや、あちらからこちらへ見しらぬ老僧の訪ひ來て、半日の閑談をす。いづこにすむ人ぞと問へば、近き方の穴にすむとしらばけいへば、根問に及ばず聯句せんと筆とりて挨拶の發句を唱ふれば、妖僧會釋の對を吟ず。やゝ短歌の二巻に至れば、退屈の尾を見られじとや、末は又の夕べと歸るを送れば夢さめぬ。跡に黍團子の土産も見えず、只たばこの火の僅に殘れり。

挨拶

雖汲水無葛　可涼風在蘿　庭宜松氣色

山惡月邪魔　長咄夜方冷　大跳盆亦過

酒醒懸嫁々　茶沸饗婆々　擇日四火灸（一）

憐春萬葉歌　遲櫻留記念　歸雁惜餘波

商ふあるじの連歌に好けるありて、たま〳〵宗祇を招き請ひ、一座の興行に及びけるが、我が句の順に當りて案じ入りける時、表に人の音なひして、僅に一二錢の胡椒を求むる者あり。折しも店に應對の人なきを見て、我句を惜からず他に讓りて其座を立ち、胡椒を商ひ遣しけるを、宗祇見て深く感じ、世わたる人の連歌にすける、かくこそ有るべき事なれと、殊更に稱美有りけるとぞ。吾子が俳諧に耽るとも、此ためし忘るべからず。産を破り家を沽りて、頭陀草鞋の先蹤をよき事としてこれをしたはど、傾城賣も博奕打も同じつらなる俳諧なるべし。或はまた身持よく家榮えば、見る者ごとに必ずいはむ、俳諧はめでたき物なり、翫ぶに妨なしと。さらば俳諧に第一の奉公となりて、三神の冥慮に叶ひ、夷大黑も風雅を助けて、つひに俳諧の妙處にも至るべし。今や其居に號を乞はれて、其家の業を棄てず、藍光舍と書きて贈るも此意有るによる。今我が贈る藍より出て藍よりも濃き趣を得ば、世に俳諧の名も高くあらはれて、光の一字も空しからじとぞ。

稀に、巍々洋々もいたづらに、猫に小判の耳なければとて、包みて光を世にあらはさず、只獨の樂とす。頃日みづから輯錄して予に小序を求めらる。久しく金蘭の契ありて、辭すまじき故ながら、不才の腸何を探りてか是に當らむ。されども又思へる事あり、世に吳服を商ふ家の、繻子、緞子、紗綾、縮紗は、店に庫に滿々たれども、入口の暖簾には必木綿をこそ用ふれ。其店を尋ぬる人の、まづこれに目を留むれども、暖簾地相のよしあしはいはず。されば、我が木綿の才を以て、始に一重の暖簾を掛けむには、などか店物の價を妨げんやと、つひに彈らず序書きて贈りぬ。

與レ號說　爲二紺屋巴良一

和歌には神とも世にしたはるゝ、昔男(一)の昔をきけば、芥川のかけ落にあだ名の髮を切られ、詩賦に秀しもろこし人(二)は、酒屋に掛のたゝまりて、朝三暮四の燒餅さへ乏しかりし例多し。こゝに知れや、風雅必しも身を修むる助とならず、道は外に學ぶべし。文章もとより富を來たさず、家業に思ひかふべからず。人の咄にきける事あり、そのかみ藥種を

(一)業平
(二)杜甫「酒債通常行處有」

へばやごとなき人の編笠羽織にやつして、花のもとの床几によりたれど、田樂團子に手をふれず、茶ばかり飲みてやすらひたるが如し。其位に至らぬ人の及ぶ事やかたからん。東花坊支考が文は、はたらきて逼らず、おもしろくいひなぐりて情を深く含ませたり。たとへば諸藝に勝れたる當世男の、一座の興に三線とりて、相の手ばかり引捨てたるがごとし。彦根の許六は、物の姿情をよくいひて、詞を飾るにおくれたれば、やゝ卑きに似たれども、さりとて雅趣のなきにあらず。たとへば何がしの忠右衛門など、人に顔よく見しられて、駒下駄に尺八吹きて、大道に肩いからし、あはれ傍に人なきがごとしといはん。其餘碌々たるは論に及ばず。只和漢の故事古語をしり、俗の諺にも入りわたり、其影を用ひてあらはならず、長きを縮め堅きをこなして、俗ならず、雅に過ぎず、主意よく本末を貫きたるをこそ、調ひたる文章とはいはめ、誠に難からざらめやは。我友護花關の六林子が文章、章ごとに玉をつらね錦を綴れり。我常に目を驚して三の舍を避くるに至る。他はいさ知るべからず、本州誰か其右に出でむ。されども音を知る人は

るよしあり、鄙陋は愧るに堪へたるも、辭すまじき故ありて、筆に信せて記して贈れり。

六林文集序

俳諧の世に行はる事や、今は縉紳の品高きより、あやしの柴ふる人までも、此道に遊ぶ事宜なるかな。ことしの春三韓の客東都に使する道すがら、我蓬左(一)に宿りせしを、出會ひける人々扇をさし出し一筆を請ひけるに、韓人笑つて芭蕉の發句書きてあたへける。そもいづこにて學びしやらむ、ふりにし王仁が難波津のためし、ふたゝび俳諧に立ちかへりて、今見ける珍らしさよ。かゝれば花に啼く鶯も、なら茶たく小鍋やほしからむ、水にすむ蛙も俳諧々々とは鳴くなるべし。しかるに世の俳人、とかうも五七五はいふべし、只俳諧の文章は難し。風俗文選世に行はれて後、其體を學ぶ者の間々あるも、よくいふものは甚稀なり。古人の文とても其風體一つならず。祖翁の筆を評するはいとこちたきわざなれど、潜に是をいふべくば、蕉翁の文は正しくして俗中に雅を失はず、たと

(一)名古屋をいふ。

山々にして、高低の容淡濃の色、よく眼を悦ばしむ。されば山を愛するに品々あり、仁者の樂むといひけんは理窟なればこゝに論ぜず。深く吉野の奥を尋ねて、身の隱れ家を求むる者は、偏に山の世に遠き寂寞を愛する者なり。笏を拄へ簾を挑げて、雪の朝雲の夕を憐むは、山の風景を愛する者にして、必しも靈運(三)が屐に烟霞を攀ぢて、山の寂寞を問ふにあらず。然ればいづれの賞心か勝らむ。思ふに夫三國一の名山とても、扇にたとへ烟を詠めて、只眺望の上にこそめでつれ、鹿の子まだらの雪踏みわけて、富士詣とて登るなどは、必無風雅の人のなす事なり。(四)山に入る人山にても猶うき時はいづ地行くらんと、よみて覊りし人も有るをや。此亭の愛する山は、かの風景を愛するにして、寂寞を愛する山にあらず。飽きて枕に倚る時は山なく、起きて檻に倚る時は山あり。自由は名畫を卷舒するに似たり。高き哉其趣、須彌の四州も下視すべし。已に能書の手に求めて三字を題して檐に掲ぐ、其餘狂語を予に請はる。いでや其あるじは、知己の舊きといふのみならず、もとより同じ瓜の蔓に、茄子ならでも紫のゆかりあればや、我も其地は能く知

(三)謝靈運山に上るに必木履をはき上るには前歯を去り下るには後歯を去る

(四)躬恒の歌、初句「世をすてて」

三石の奈良茶をしも十石峠の名に積らば、俳諧骨張の古狐となりて、鳥居峠を越すも難からじ。正月のことぶきは木曾雜煮の風俗あり、盆の遊びには木曾踊の風流あり。牧はなけれども馬市を賑はし、巣鷹は年々尾府より尋ねて東都へ獻ぜらる。橡けやきの類多きが故に、器に製して近國に販ぎ、行客必是を求む。產する所、干瓢、岩茸、蕎麥は殊更佳名ありて、名月前の走を賞す。末川の蕪、風味又世に超えたり。すべては雪深き故、春の花遲く、霜又早ければ、秋の紅葉は里に先だつ。抑信濃は十郡、此賦豈一國の半をも盡さんや。只是木曾に屬する事を纔に拙き筆につらぬ。

四州亭記

尾府の西に一亭あり、四州亭と名づく。さるは濃江勢の三つを兼ねて一望の内に入ればなり。其一望に入る事は、つらなれる山々の是を見すればなり。むかし妓を携へし東山(一)は慕はしからず、北山はまして移文の浮名もよしなしや。主人は今猶仕官の身にしあれば、悠然(二)として見し南山も侶ならず。おのづから此亭のむかふ所、立ちつゞく西の

(一)晉の謝安の傳に「常住二臨安山中一。放二情丘壑一。每二遊賞一必以二妓女一從」

(二)陶淵明の句「悠然見二南山一」

（三）浦島太郎

寺の寝覺の床は仙客の釣垂れし所、奇石怪巖人よく知れり。されども歌人の慕ふものは、掛橋、其原、御阪、風越の峰、小野の瀧はすぐれたる飛泉なるを、戸難瀬、布引にも名を爭はざるは、都に遠き恨ならむ。男瀧女瀧の契はかはらずも、連理の松は今名のみなり。名にたつ烟の淺間山は、こゝに境のへだたれども、御嶽駒が嶽に不斷の雪を見せて、富士にも肩を並ぶべし。（三）三歸りの翁の齡は死嫌ひの人に羨まれ、巴女が勇力は男勝りの高名をとゞむ。良材昔より伐れども盡きず、尾城に運びて萬家の用とす。山を出して澗川の漲る岩間を下すには、筏工の術に馴れて、曲乘踏かへしの自在を働く、他郷の及ぶ所にあらず。神風や伊勢の宮木は湯舟澤より奉る例とぞ。福島には關門ありて、治まる世にも備へ固く、鷄の空音もゆるさゞるは、代々山村氏のあづかれる守りなり。南宮諏訪明神、鎭の明神、八幡宮、禪刹には定勝寺、長福寺、兜の觀音、岩戸の觀音、鐘の峯は相圖の古迹、根の井の峯は火ともしともいへり。彌生の浮石、明星が岩、釜が橋、伊奈川橋、滑川橋、櫻澤の橋は是岐岨と松本を分てる境なり。かゝる佳境に居て風雅に遊び、

ずとはいふべからず。馬籠より妻籠の宿、三留野は木曾家の舊居にて、もとは御殿と書けるとぞ。野尻、須原、上松、福島は山中の一都會、則巴笑も爰にすめり。宮の越、藪原、風そよぐ楢井の里、贄川の宿まで十餘の驛亭、各家居つぎ〱しく、大名の旅寢には本陣の幕をも飜し、荷馬の鈴の聲夜る山を過ぎて、(一)今は椎の葉にもる不自由もなし。しかれども此山中に覺束なくも呼子鳥の、出女の色を置かざるは、是聊の傳授事にして、淫靡の風を恐れ給へる、我邦昔よりの法令なり。されども宿の間々は深山幽谷の難所なれば、詩人は偏に蜀道の險に比し、斷腸三聲の猿を憐み、和歌には兼好法師が世を遁れし始、麻ぎぬの色の淺くてはやまじとよみしも、(二)先此山中をこそ慕ひしか。俳諧猶此地をゆかしみ、玉味噌の木曾路とは、吾翁の置き初めし枕詞なるをや。元より朝日將軍の興りし所、今のこるもの城山あり。福島の興禪寺、宮の越の德恩寺に各その影像を留む。元服の松、矢篦竹、硯水、兼遠の故宅、御料の森は、光盛が陣迹、樋口が谷は兼光が舊蹤、楯の小彌太は野上に生れ、今井が城址は野尻に遺る。山中の藥師は行基の作、臨川

(一)朗詠「驛路鈴聲夜過山」

(二)「思ひたつ木曾の麻衣あさくのみ染めてやむべき袖の色かは」

（四）後漢の劉松袁紹の子弟と河朔に避暑の飲をなす

名水にして、あるじはもつぱら蕉門の俳諧に遊ぶ人なり。昔孝行の德によりて養老の水流れ出づ。天はた風雅を感じて殊に此井の生ずるにかあらむ。あるじのこゝに樂むや、もとより其名にし負へる、年立ちかへる若水は更にして、夏は葛に汲みて河朔の飲（四）の渇を消し、秋はさやけき月をうかべ、雪の夜の茶を煮るにも、氷を敲く手を勞せず、四時の幽趣、老のまさに至るをしらず。誠に知んぬ、濯老の名の空しからざる事を。されば我聞く、一たび貪泉を飲む時は、皆千金を懷とす。しからば此井の水を汁なふ人は、假令無風雅の腸なりとも、忽三石のなら茶を思ふべし。

岐岨賦　木曾 岐岨 吉蘇 共通用

信濃は吾が尾藩に隣り、朝もよひ岐岨の山は、即封疆の内に入れり。そこに好事の巴笑なるをのこ有りて、予が草廬に來るごとに、其地の山川勝概を語る。語り〳〵て後に請ふ事あり、其所々をつらねて賦を作れとぞ。されば木曾は、文武帝大寶二年始て此道を開きしより、今や西東兩都の通路にして、予も三度の往來せしかば、いさまだふみも見

贈二不及法師一文

でゝむしのなまじひに家持ちて、蟖蚯蚓にはうらやまれ顔なるも、行く先々を負ひありく苦しさは、中々なきが勝るべし。不及法師が求めえたる方丈の栖は、もとより樹下石上の身にほだされざる、借屋といふものなりけり。落ちたる壁も雨もる軒も、只家主のあつかへば、我手に勞する事をしらず、夕顔のゆふべにあけば、朝顔の朝は捨つるに安し。況や津梁(一)の大志あらば、しばし只神龍の雲待つほどの宿にして、卒に地中の物にあらず。我知りぬ我知りぬ。

心とめぬ安さはしらじ蝸牛

濯老井賦

瓜畠(一)に分ち得て早き二月の初物を獻ずといひしは、華淸(二)の溫泉なり。我に事たるとよみ(三)しは、はつかに山水の滴るならん。それは至尊の遊びに愛し、これは隱者の貧閑を助く。それにあらずこれにあらず、其二つの間に湧出せる濯老井なるものあり。これ布袋庵の

(一)世説に「庾公常入二佛寺一見二臥佛一曰、此子疲二於津梁一」

(一)王建「內園分得溫湯水、二月中旬既進瓜」
(二)玄宗の別宮
(三)西行「淺くともよしや又くむ人もあらじ我に事たる山の井の水」

（一）螯は蟹のはさみ、世説に、「畢茂世云、一手持二蟹螯一・一手持二酒桮一、拍二浮酒池中一。便足レ了二一生一」

友あるにも飲み友なきにも飲み、志學の始より四十の此比に至るまで、腸は只沖の石のかわく間もなき生涯なれば、昔の人に思ひなぞらへて、ある時左螯（一）の二字を戯れあたへしが、辛巳の秋重くなやみてより後、いかなる時か來りけん、飲まぬは飲むに勝り、醉はざるは醉ふよりも面白き物をと、三十餘年の夢忽然とさめて、さしも世のそしり人の諫も蚊虻に聞捨し男の、壺を破り盞を碎きて、雫もいとふ下戸となりけるこそ目さむる業なりけれ。此人の痛飲せしほど、下戸はさらなり、上戸仲間さへつぶやきて、かくては命もつゞくまじく、錢はた頓て盡きなんと、うたてき事に思ひし人々、且驚き且賞して、是を賀してやまず。されば楓の青きより霜を經て染出せるは、二月の花よりも紅に、枝柹の澁きより甘きにかはれる味は蜜砂糖に勝れるを思へば、生れながらの下戸に彌増して、もとの青きに戻るまじう、始の澁にかへるべからず。さらば其名の螯をも舍てて、今より左に餅を持し、右に煎茶を甘なひて、再び昔の醉鄉には頭をめぐらすべからずと、舍螯の二字に改めて贈る事しかり。

人に其心のさとしがたく、荘子が喩へていへるにも、地に入用は足二本をいるゝ所なれど、其餘を不用とて地を掘りうがちなば、二本の足もはこぶ用なからむ、其空地を全うするが不用といふものなりと、是も喩のさる事ながら、間ぢかく此理を知らむとせば、今此夜著の袖といふものを見るべし。手を通すべき用はなけれども、今不用とて是を闕きなば、徳利子のすげなきに似るのみならず、是を左右に覆ふが故に、手を働き寢がへるにも、自由のくつろぎとなり、自らの重しとなりて、寒を防ぐの便となる事、鳥に翅のなくて叶はぬがごとし。されど人々常に馴れて是に心のつかざるべし。さればこよひも此夜著を引かぶりて、蒲團よりあたゝかならば、不用の用をさとるべしと、そこの童子にをしへ侍る。

夢をのせて飛ぶ翅あり夜著の袖

與二舍螯子一文

酒よく人を浮べ酒又人を覆す。是非庵の主がもと酒に耽るや、雪月花の興にもよらず、

人はかぞへても笑ふらんを。

六十てふ身や夫だけのはぢ紅葉

夜著頌

まくらといへる和訓は、いかなる故ならむ。蒲團とは字義いとむづかし。夜る著る故に夜著といふは、五尺の童子も義解に及ばず、媚を求めぬ自然の名にして、俳諧の正風とても、是を鑑とはいふべかりける。此物下ざまに在りては蚊屋と矛盾の中にて、雁と燕の行かふ如く、多くは質屋へゆき返るこそわびしきわざなれ。昔孫晨(一)は是をうき瀬に流してより、藁一束に冬を送り、我國の聖主は、寒夜にぬがせ給へる有難きためしも有るを、空蟬(二)のもぬけを恨しは、以の外の不埒といはむ。鴛鴦のかたらひにはとめ木をくゆらせ、旅のかりねには順禮の虱をのこす。なべては此物冬の用にして、夏に必ず遠ざけらるゝに、我は多病の枕低きをきらへば、夏も疊みてよりかゝりとす。殊に此君なくてはと、四時にかはらず愛する中より、聊發明する事あり。そも世に不用の用といふ事ありて、

(一)蒙求に「孫晨字元公、家貧、冬月無被、有藁一束、暮臥朝收」

(二)光源氏が空蟬の君の閨に忍びし時の事

に交れるにも、聊世の是非を論ぜずかりにも人の長短をいはず、よく知る事も知らざるが如く、知らざる事に下問を恥ぢす、有りがたき隱者の鑑なりと、知るとし知る人に稱嘆せられしかば、今や世の惜める も尋常に過ぎたり。まして同じ老の身の恨、一句はわづかに其かたはしをいふのみ。

魂ばかり秋來む雁のうきわかれ

六十齡說

上壽は百歲、中壽は八十、下壽は六十とかや。蒲柳多病の身の、いかで六十の齡に至り、かの壽の數には列なりけん、けふは長月の四日、我が生れたる日なりけり。世の人の賀とてもて騷ぐは此日なり。妹あり妻あり男女の子どもあり。かれらが心には嬉しともめでたしとも思はゞ思ひもすらめ、只犬馬の年老いたるこそあれ。もしは彼方此方に詩を乞ひ和歌もとめなどして、世に知られ顏なる、我に於てはいと恥かし。必音なせそと、かねていましめてさる事せず。げにや古人の恥多しといひけん、我は愚に知らずとも、

はる。あるは巨靈(一)が手に擘き持ち來れるか、壺公(二)が術に地を縮めたりなどいはんも、今は文人のいひふるしたる糟粕なり。思ふに此地は勝槩の名あるのみならず、妙音天の迹たれませし靈場なれば、ゑの島の繪にかくとも筆はえも及ばじとて、十五童子の手を勞して、かくは佛を石に削りなし、風騷の人の手に傳ふるならん。主人もとより風雅に好けり。是を文房の座右に愛すべくば、詩に和歌に俳諧に、只知んぬ、神助自らむなしからざる事を。

波すゞし江の島うかぶ青疊

悼子禮文

若くて十人の友を失ひたらむも、たとへば髪のぬけたるごとく、日あらば又生ひ揃ひぬべし。かなしき哉、老いて、一人の友の闕けたるは、齒の落ちたるがごとく、ふたゝび生ひ出づるたのしみなし。今かく歎くは何故ぞ。久しく知れる子禮翁、此睦月の二十日あまり身まかりぬ。此老一たび仕官のほだしを遁れてより、殘生を風雅に寄せ、其道の友

(一)支那にて太古山を開きたりと傳へらるゝ神靈
(二)費長房

(之因轉法輪之緣)

(二)芭蕉の忌日

ゐらせしが、今其家を出で、世を遁れたる身に、かの御神には申べき事なし、同じ時雨の十二日は、殊に忘るまじき祥忌なれば、有りし世の鯛の奢をなら茶田樂の寂にかへて、是を一年の會日と定め、同志の友をかたらひて、一卷の祭をなさんとなり、願はくは尾城下に此道の光いやましにかゝげそへて、祭奠たえず取傳ふべくば、わが此報謝の志も長く後の世に殘すべしとぞ。かの庵主がいふ所是の如く我聞き、同調の志げにとうなづきあふまゝに、夫を筆にうつしてと、庵主が請ふに任せて、記して贈る事しかり。

盆石記

盆石あり、江の島と名づく、我もと聞ける事あり、虎の怖ろしき物語仕出でたるに、其座にむかし虎に遇ひける人ありて、實に其人のみ色を變じたりとぞ。我此石に對し此名を聞くに、ことに戀々としてなつかしきは、少壯の比かの島に遊ぶ事二度有りて、今も絕境の忘れがたき故ならし。そもや此石の容をみるに、わづか尺ばかりにして峰聳え谷遶りて、裾にことさら一つの巖穴あり、是もつぱら此名のよる所也。主人一語の記を請

かざれども、杉立てる門の極樂となれば、杖頭に錢をかけて、迷ふ人は迷ひもすらむ、只己身の彌陀唯心の上戸と悟らば、賣らぬ酒屋の酒にも醉ふべしとぞ。

月花の下戸に案山子や酒はやし

與二時節庵一文

尾城の西南に把茅の一廬あり。そこに住みける八龜法師、此比思ひ立てる事ありて、みづから其意を說いて曰く、今世のさまをみるに、菩提に心有るほどの人、家あれば必佛あり、我も其道を賴まざるにはあらねど、咫尺に淨刹の多くて、朝夕數十歩を勞せずして佛に向ひまゐらせん事いと安ければ、十萬億土の遠きをしらず、まして己身の佛と聞けば、庵に佛像はなくてもあらなん、されば此ならはしの古ければ、只芭蕉翁の像一體を刻みて新に庵の本尊とす、そも我生涯あけくれ遊ぶ所たふとむ所、偏に蕉門の俳諧なればなり、(一)狂言綺語もおのづから讚佛乘の因とならば、わけのほる道はかはるとも、同じ高ねの月も見ざらめや、我ももと商家に產れて、昔は十月二十日ごとに三郎殿を祭りま

(一)白氏文集「願以二今生世俗文字之業、狂言綺語之誤一、翻爲二當來世々讚佛乘

はいり所を見た者もなし。しかれば幽靈を出る／＼といふは、世俗のとなへ誤りなり。出るといふは芝居の幽靈に限る事なりと、ある故實者の申しき。

笠もたで幽靈消るしぐれ哉

杉の門序

季眞(一)は金の龜を解き、祐乘(二)は銅の猿を彫りて酒手に宛てし風流は傳ふれども、酒屋はいづこの誰にてか有りけん、いさしら雲の跡だになきを、ひとりかしこき聖の歌に、(三)又六が名を知られたる、酒屋冥加こそ有難けれ。さるから其名をしたひ繼ぎて、こゝに酒屋の新見世あり。いでかの五文字のたうとさには、憎しあるじの高ぶりて、極樂の出店とも思へるならん、姿も木の端の法師にぞ有ける。世に此得意を附けむとて、撰集一部を思ひ立つ事あり。只是酒腸の有無を問はず、月花の方人を求むるとぞ。さればこそ此庵の、夕顔に隣れども碓のおとも響かず酒桶の一つもあらず、壚に文君が色もかざらず、お菊と呼ぶ娘もなし。人見よや、悟れる目には七寶の棗もかゞやかず、菩薩の音樂も聞

(一)唐の賀知章の字。知章李白にあひて腰に帶びたる金龜を解きて酒に換へ樂を共にす

(二)彫物の名手後藤氏

(三)一休の歌「極樂をいづくの程と思ひしに杉葉たてたる又六が門」

ありないもあり。あゝら閻浮戀しやと、子細らしきは雄幽靈なり。もうし〱とよびかけたるは雌幽靈としるべし。多くは行脚の僧に近よりて、布施なしの經を頼み、或は剛なる侍を見かけて、無心をいふもたま〱なり。何の用もなきにあらはれて、女童をおどしたがるは、木の葉幽靈のわざなるべし。そもや人死して幽靈の自由あらば、佛果を得ぬ亡者共は、我も〱と立ちかへり來て、訪ひ弔ひのあつらへは勿論にして、言ひ殘したる巾著のこまがね、隣の親仁の無沙汰して居る取かへの錢の事までを告げて、妄執の雲は拂ふべきを、あだし野の露消えぬ日もなき世中に、幽靈の至つて稀なるは、むざとはおこさぬあの世の法度なる歟。されば初秋の盆會には、みそ萩灯籠に座敷をかざり、かはらけ麻木の膳だてに、索麪團子の獻立をまうけて、家々に招請すれば、表門より手を引つれてはれやかに來たらむも、何の遠慮かあるべきに、其俤も見及ばぬは、迎ひ火の馳走過ぎてかゞはゆしと思へるにや、晒浴衣の伊達染の中へ、經かたびらを恥づるにや。そも〱舟岡鳥邊野は、幽靈の名所なれども、いづくに住居の穴もみえず、

ぬけ参りの筆にもよごされざるを、茶屋の燒印は平大納言のしわざ歟。そもや印籠巾著脇差のたぐひは、世にある時に愛せられて、翠帳紅閨の内までも、腰をはなれぬ寵あれども、金銀の盡くるに隨ひて、つれなくも主を見放して、いづれか漂泊の落日を見つぎたるや。只此物ばかり、賴母しくも恩を忘れず、手拍編笠と諺にもいはれて、破れ紙衣の先途を見屆くるにぞ、疾風勁草をしり、松の凋むにおくるゝ操も、此時にいちじるし。されども異國には此寶をもたざる故に、豫讓は顏を隱しかねて、漆をさして癩となり、伯休は藥を賣れども、女わらべに見付けられたり。たふとしや、我朝には此ものの一盞あらば、大隱の德あらずとも、安く朝市に隱るべしとぞ。

（四）燒印編笠、遊廓の茶屋にて客に貸す笠

（五）韓伯休

編笠の俄隱者や年の市

幽靈說

鬼一口のいきほひもなく、妖物のやつしも叶はず、幽靈はそもいかなる者ぞ。其姿を寫し繪にみれば、三角なる紙をいたゞき、廣袖のゆかたに竹杖をつき、膝より下はあるも

鶉衣後篇下

編笠賛

迹を深山の雲にくらまし、身を蓬生の陰に隱しても、浮世より通ふ道あれば、顏しる人にも逢はでやあらむ。蓬萊の島なる鬼の持ちたる寶はしらず、昔晴明が隱形の祕術を傳へて、世に編笠といふものあり。是を戴いて出る時は、車馬紛々たる市中をあるけども、人我をしらず。まして朱雀の夕ぐれ(一)日本堤の曉(二)、いかなるやごとなき人かもしらず。鳥追節季候の世わたり、諷うたひよみ賣も、其人の果ともみしらねば、貴賤通用の寶にして、今泰平の世中には、妙珍(三)きたひの兜より、其德はるかに優れりとせむ。しかれども女はかぶらず、出家には似合ず、みさぶらひみかさとよみしは此物ならず。笠がよく似たとうたはれし淸十郞が佛も、是にてはあらざりけり。もとより旅の具ならねば、順禮

(一)島原通ひ
(二)吉原踊り
(三)明珍とかくを正しとす甲冑製作の名家

て、其日の供にははづるべからずとぞ。

月花に配れ富士見る目の餘り

(一)好文木は梅の異名

(二)秦の簫史簫をよくし能く鳳凰を致す一日鳳に随ひて去る

雨を催し、猿投山の猿の手に雲なき月を擎ぐ。下戸は餅にもつく名とて、蓬が島に頭をめぐらせば、上戸は酒のゆかりを思ひて、麹が池に涎を流すべし。もとより主翁文章に富めれば、こゝに來り遊ぶ客、皆一時の英才にして、新詩百篇瞬くうちになり、雅談一日欠をしらず。扨や好文(一)の花もこゝに向ひて色香を增し、天津空の德星もこゝを會所とは定むるならん。玉も錦も事かくまじきを、あるじ詩歌の遊びに餘りて、狂夫に俳語の文を請へり。其心いかにぞや。さては知んぬ、砥石を拾ひて玉を琢き、灰汁をもとめて錦を浣はむの爲か。それだにも不才なる、何を以て砥にあて、何を言ひてか灰汁に代へむ。されども我賀する事あり。世に祭の棧鋪の幕毛氈に餝れども、纔かに槿花一日の榮をなすは、其見るものの動いて過ぐればなり。此理によれば、此樓はたしかに松樹千年の久しきを期すべし。さるはその見るものの動かずして、しかも時しらぬ名山なればなり。しかれば主も老をしらず、共に幾代の齡をたもち、卒には此樓に簫(二)を吹きて、鳳に駕して登仙せむとにや。我居も幸にこゝに近し。もし長壽の契あらば、木の葉衣の著替を負ひ

(三)初句「故郷や」

て、臍金といふを溜められしより、天津空の鳴神も好もしがりて、いかで是抓まむとし給ふより、女小童の氣づかふ事は、麝香の狩人を恐るゝにもこえたり。むかし祖翁の古郷にかへりて、(三)臍の緒に泣く年の暮と、懐舊の袖をぬらさせしは、耳も及ばじ鼻も及ばず。かれはかく風雅にも大功あれば、今は我身を何にたとへん。されば臍はわが下に立たむ事かたくとも、われも又臍の下といはんは、何とやらむ場所よからず。かれに倣はむとするに、天に二つの日なく、腹に二つの臍なきためし、しかれば上下の品定はやめて、けふより只彼をそしるまじとぞ。

友とせむ臍物いはゞ秋の暮

望嶽樓記

樓成れり。成りて望嶽とよぶ事はいかに。名高き富士にむかへばならし。そも此樓の眺望東南北にひらけたれば、かの望嶽の一つならず。千里吟畔の内、田あり野あり村落あり。神社佛閣のこるものなく、畫に似て畫には及ぶべからず。龍興寺に龍吟じて花まつ

木綿取、冬は大根引とおきかへて見よ。一物四用にはたらきあれば、句のつたなきをいふべからずと、傳授の一語にまぎらかして、おくり物とはなせりけり。

臍頌

臍を不用の物なりとは、我も誹りし人の數なり。されば他の一寸は見えて、わが一尺は見えずとか、世に役なきものくらべせむには、まづ我こそは先なるべけれ。そもかの臍は物やは食ふ、素餐の誹もなし。さらば物やはいふ、(一)三緘の誓にも及ばず。わが世にありて物を費すには似るべからず。人の支體に不用を論ぜば、男の乳ばかりこそ、如何なる益のあるとも見えねど、今更これらをとり拂はゞ、腹は(二)渾沌王の面影して、世にすげなきものなるべし。いでかの臍は頓死急症のせん方なきにも、先とて是に灸する時は、泉下の首途を留むるためしも多し。扨こそ腹のさしも草、只たのめともよみ給ひけん。たとへ項羽が山を拔く力も、此垢を取れば忽に落つとぞ。痛悔臍をかむとは、漢文の古語にして、我朝に人を嘲りては、臍が笑ふともいへりけり。しかるにつましき隱居あり

(一)周廟に金人あり其れを三緘し且銘して「古之愼言人也」とありし由孔子家語に見ゆ

(二)南海の帝を儵といひ北海の帝を忽といひ、中央の帝を渾沌といふ渾沌は耳目口鼻すべてなきよし莊子に見ゆ

はなれたら繼げはなれたらつけ幾度も
破れ世中にあらむかぎりは

贈二分平菴一文

平易を以てわが分とす。誰か是を願はざらむ。もと此菴、只はなれ家にして、呼て餘盃をつくさしむべき、垣越の翁もなかりしが、あるじの德の孤ならぬにや、隣めく軒のこかしこに建ちならびたるは、よしとや見るらん、むづかしとや思ふ。いさあるじの心は知らず。されど東面はもとのまゝにして、わが庵とても月まつ嶺はおなじ方ながら、(一)廣寒宮への道のりは、一町ばかりも近かるべし。こゝに一句をとゞめよと乞はるゝに、四時の多景何れをかわきていふべき。されど庵近きよしみもあれば、つれなく否びがたく、只眼前の姿をいふ。

給の中にうごくものあり

として、下五文字に掛けはづしの自由あり。春は円にし取とすべし。夏は早苗取、秋は

(一)月の異名

贊下補二破茶碗一辭上

大極の氣二つに破れて陰陽となる。その陰陽の又あふからに、夫婦いもせの契ともなれり。おもしろし、此茶碗のまどかに望月の隈なきのみかはと、一たびわれて有明の盈虚を示し、會者定離を打かへして、離れたるものの、又あふたるぞ、佛も我を折り給ふべき。嚮に此事に文あらむ事を我に求む。我田先生が言にきけり、騏は壯なる時、一日に千里をはしる、老いては駑馬も先だつとか。(一) まして駑馬の老いたるもの、何のいふ事をか知らむ。そもそも是より北にあたつて護花關あり、そこに一人の好事あり、かしこに乞ひて求むべし。あなかしこ、疑ふ事なかれ、只たのめたのめとあらたに告げて、我は火燵の山にかくれぬ。かくてかしこに其文成れり。始の茶碗のあやまちに懲りて、いかにもそつと敲いて見るに、果して金玉の響あり。噫此茶碗のわれずば此文あらじを、あざ丸の太刀蟬折の笛も、その瑕ありて瑕ならず、繼目をいたむ事なかるべし。嫦娥が天上の藥はいさしらず、人間に石うるしといふものなからむや。

(一)燕の太子丹怨を秦に報ぜんことを處士田光先生に謀る光曰く云々

き給へ〳〵。けふも歎き明日もなげき、歎き〳〵てゆくまゝに、なげきの森に秋ふけては、柞の色のうすきをも覺らむ。七々の日の法事には、萬行の涙千行に減じ、百ケ日の墓參には、百行やゝ十行にしてやむ。まして一周忌のかい餅は、その日の空の腸は斷てども、砂糖つけて最一つともいふべし。されども節の膳をならべ、桃に雛の祝ひ日には、(三)あらましかばの怨は盡きず、盆の踊の手拍子は、人知れぬ胸にこたへて、此かなしみは一生の病なりと知り給へ。されば子の親を失ひてこそ、手ふれし調度目にめでし草木までも、長くとゞめて損はず、是を見かれにつけて、慕ふ心を忘れじとはするなれ、今君が歎くたぐひ世の倒の別なれば、書きのこせし筆の跡も、鬼となりて引きやり捨て、手なれし物も火にうちくべて、兒女の態をなし給ひそ。かくして早く住吉の岸なる草(四)を求めむには如かず。噫我今先達の顏して君をいさむ。君また先達の顏して、誰があすの身の上をか諫べき。只あだし野の草のもと末、さだめなき露こそかなしけれ。

跡の鴈先へとはたが秋のそら

(三)拾遺集爲賴、「世中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにける哉」

(四)わすれ草

がたくて、其座は取ていたゞきければこそ、門前までは携へ出でけめ。是をもつて彼を思ふに、我はまして斗擻(三)の身にもあらず、わが子の祿に命をかくれば、さすがに人の心をも破りがたし。是たゞかの臍と思へるなりけり。豈臍此理にあらざらむや。

弔二不幸一文　贈二六林一

君きけや、鳥にあらざれば鳥の心を知らず、魚ならざれば魚の心をしらず。君愛女を失ひて、貫之が涙袖を浸し、長嘯のいたみ襟に滿つ。さだめて知る、とぶらふ人々の、少し物わきまへたる限は、例の天命を說き、(一)哀んでやぶらずなど、しひて忘憂(二)の物をすゝめ、只あきらめよ忘れよと、君がもとより知りたる事をくり言して、浮世の義理の蒸籠を贈り、あるは樹木の菓子籠に長口上をもつらね添ふらん。いかで饅頭に涙かわかん。何ぞ栗柹に悲をまぎれん。果は出入のうばかゝが懷を高うして、もらひ泣とは、是をしもいふにや。是たゞ鳥にして魚を弔ふなり。我も近き頃十九の愛女を先だてり。されば君が心我よく知りぬ。君又はじめて我を察すべし。我かの魚にして魚をいさむ。只なけ

(三)頭陀に同じ煩惱をはらひて修行するをいふ
(一)論語「哀而不傷」
(二)酒

たへ目を三つ四つも付けたらば、因果物語にのせられて、開帳芝居の見せ物となるべし。これ天の長物をとらざる所なり。又は鼻ばしらを眼鏡の臺とし、耳を笠紐のたよりとする類は、天の理に則つて聖人是ををしふるものか。その中に臍といふものの、蓬生のかげにかくれて、表のかざりともならず、何の益なき道具にして久しく不審の晴れざりしが、今此身にしてはじめてしりぬ、慥に天地開闢の時、餘義なき方よりの貰物なるべし。その理いかにと言はんに、我かく物の不用をいとふに、飲んでしまひ喰うてしまひ、又は遣ひてのこらぬ料紙やうのものは、嬉しき折もあらんが、さもなき調度の類、是は仕(三)出しの風流なり、これは細工の面白しなどいひて、人のくるゝ物あるにのぞみて、取らざれば心を破る。流石にうれしき顔してもらへば、一つ二つと物のつもる、いと本意ならず思へども、いかゞはせむ。こゝに世のためしを思へば、むかし西行の鎌倉にとゞめられて、銀の猫を賜はりしを、やがて門前の童にうちくれて去りしとぞ。されば其人の身を思ふに、何ぞ王侯にも將軍にもへつらふ心あらむや。しかるを猫はいらぬとも言ひ

雪の願ひ水にはなしそ夕あらし

解說

世を捨てたる法師の(一)、物くるゝ人をよき友に數へたるは、にげなき心地するに、げに思へば其庵に一鉢のまうけも咳氣にさへられ、あつものの藜も冬がれては、物くるゝ友のことに嬉しき日もありけるか。もしは又くるゝ物をよろこばねども、くるゝ心の慾なきを喜ぶや。我はかく世を捨てたれど、かしこき惠の祿を世々にして、その蔭にやしなはるれば、もとより凍餒の患はいはず、たゞ虫干も煤はきも世話なからむ事を思ふには、無用のものを貯へず、うちある調度も事足るを限として、只一用に物の多からむをいとひ、一物にして多用ならむを思ふに、杓子は定規にならざれども、煙草箱は枕となるべく、頭巾に酒は漉さずとも、火燵のやぐらは足代に足りぬべし。そも一物にして多用の省略は、天地開闢よりその沙汰あり。今見よ鼻は呼吸をかよはし、物嗅ぐ用を兼ね、口は飲食をなしながら言語の用をかねたり。天もし人を尊からしめんとて、二つの鼻をあ

(一)兼好法師

（一）僧靈徹「相逢盡道休官去。林下何曾見二一人一」

（二）「ことわりや日の本ならば照りもせめさりとては又天が下とは」これ實は某狂歌師の作なりといふ

（三）「天の川苗代水にせきくだせ天降ります神ならば神」

ひ來んといひし人々もあれども、その日の火燵のはなれがたくば、林下（一）なんぞかつて一人を見むと、いひし詩の類ならむと、かねてまたるゝ思ひもなし。木の葉も時雨も降り盡して、霜ふり月の半すぐれども、氣色ばかりにのみうち散りて、簑笠に見むまでの雪は猶つれなし。されば昔より雨を請ふ例はありて、神泉苑の四ヶ度の祈は、貴僧高僧の法力をあらそひ、小町が歌は（二）兒女の諺にのみつたへて、あめが下の理窟にとがめ、能因の（三）天河は古書にもしるしてその事さだかなり。雨は五穀の爲ながら、雪も豐年の瑞とこそきけ。そもや雨を降らす神あらば、雪ふらす神などかなからむ。歌に感應あらば俳諧にも感なからむや。いでやおほけなくも鳥羽院のをさなくおはして、ふれ〳〵粉雪の御祈りをためしにたのみ奉り、名におふ富士の頂も一望の内にあれば、半掃菴に雪乞をせばや。年比の俳諧もか樣の時の爲にこそあれ。かた〳〵も力をそへて給はり候へと、ことには不元庵の老和尚を先達として、好事の連衆をかたらひ、丹誠を抽て一夜火燵の壇をかざり、雪請の一巻をぞ催しける。

やすからむをと、此日人のもとへ消息の筆にまかせて、たゞ暮水とは書きはじめける。それだに人の味ひて、これは何の心にて、それは此語によるならむと、蛇に足をそへ摺小木に耳をもはやして、自然とふかき字義にも叶はゞ、それも又をかしかりぬべし。

へちまとはへちまに似たで糸瓜哉

鍾馗畫讚

豆をうたぬ家もなし　いづこに鬼をたづねらん
素人繪の幟にかゝれて　あやめふく軒にひらめく
疫神除の板に押されて　ひいらぎの門をまもる
其劍と摺小木と　つひにいまだ鞘を見ず

雪請序

ことし前津の里に世をのがれて、秋の月は心ゆくばかり詠めすごしぬ。山野の眺望くまなきには、雪のけしきの殊によからむと、我も思ひ人もおもへるにや、雪の朝は必ずと

剃りてこそ月にまことの影法師

自名づく說

遁世の姿すでに定りぬ。さては浮世の名にもあらじ、さるべき二字に改めばやと、名を思ひ字をえらむに、今は父母も世にまさず、官路もいとひ離れたれば、忠孝の字義を取らむも、跡のまつりとやいふべからむ。よし又四書古文の抜書も、あまねく人の取盡し、まして歸去來の辭など、あらゆる隱者のむしり取りて、骨ばかりに喰ひちらしたる。さらば博識の門に乞はゞ、意味深長の二字もなどあらざるべき。されども夫は耳遠ければ、名はいかにと問ひ聞かむ人の、とみに心得ぬ顏の口をしく、骨折の詮なき心地すれば、これは其書の誰が言なりなど、一人々々に講釋せんは、いとむづかしかりぬべし。菩提の道も疎ければ、西念淨蓮にても有るべからず。されば世の人の上をみるに、金藏といふも貧に責められ、萬吉も不幸はのがれず。玉といふ下女光もなく、かるとつけても尻重し。名はその人によらぬものかも。よしさらばたゞ調市走女も覺よく、娵も娘もかき

(二二)比丘尼の姿したる賣笑婦

後は共に剃髮の望もおはせしかども、その世にいさゝか障る事ありて、いまだ心に任せ給はざりし事、我よくこれを知る。故にかつはかの遺體を以て寸志を繼ぐともいはゞいふべし。そもまた釋門に此姿の始まる事、深き心はいさ知らねども、先は浮世のかざりともなれば、これも煩惱の端ぞと拂ひすてて、もつぱら色の防にもやあらむ。されども今は醫者も連歌師も剃りこぼして、妻帶は頭にしもよらず。まして妻こもれる武藏野の八貫町には、四部の御弟子の比丘尼(二二)をあつめて、比丘も優婆塞も入交れば、頭巾は紫の色ならねど、吉原の朱をも奪はんとす。しかれば佛も頭ばかりの目利にて、御弟子帳には書きのせ給ふまじ。ましてわがあたま、道にいらねば、入道もいひがたく、人を敎へねば法師にもあらず、禪門でもなし、坊主にてもなし。さはいへ世の習にて字義にはかゝはらず、湯茶ばかりを沸せども、その名は藥罐とよばれ、藥ばかりに用ふるも、茶碗は茶わんの名をのがれず。されば容のおなじき故に、妖物の見越も、あだ書のへマムシも、蛸も入道の號あれば、我を坊主とも法師とも、よばゞよぶ人に隨ふべし。

纏十萬貫騎鶴上揚州。蓋兼三人之欲也。

（三）「たらちねはかゝれとてしもぬばたまのわが黑髮はなでずやありけん」

鶴は頭にだになかりけり。これを吉田の法師にとへば、冬は如何なる所にもすまる、あつき頃わるき住居は堪へがたしとぞ。是こそ此爲の師なりけれ、誠に頭巾といふものあらざらむや、手水行水にさはるものなく、襟に垢しみず枕に油つかざらむは、心も共に清かるべし、夏をむねとこそ思ひ定めて、つひに剃るには極まりぬ。されば遍昭がよみけんたらちね（三）も、今は世におはさねども、官路の險難をしのぎ盡し、功こそ成らね、名こそ遂げね、譽なきは恥なきにかへて、今此老の身しりぞき、浮世の塵を剃りすつべきは、いかで嬉しとおぼさゞらんや。かゝれとてこそ撫で給ひけめと、こゝに疑ふ心もなし。されども儒者の顔付をうかゞへば、あまり機嫌のよからぬは、父母の遺體をとの咎めなるべし。さるは一朝の怒に喧嘩を起し、二世の契に心中をくはだて、我とわが身を愛せざる、無分別をするなとの、道理にさとす教なるべし。それを理屈の十露盤にかけて、分厘までをはじき詰むれば、爪も剪りがたく、髭もぬきがたく、鼻毛も蜻蛉のうき名をつなぎて、かへつて親をも恥かしめぬべし。その上わが雙親世にましませし時、老

書ける家札をみて、これはとしばらく目さむる心地はしけるが、今や身の上になりぬれば、隱居したる悦とて、親しき限はいふに及ばず、疎き人々にまでとはれて、門前しばらく市めけば、昨日の浮世よりやかましく、それ又謝せずば有るべからずとて、家を尋ね門たゝかせて、物申に人を驚かし、隱居の禮にいそがしきは、をかしかりける世の樣かな。炙餐に食傷して煩ふ人の類なるべし。

四角なる浮世の蚊屋はしまひけり

剃髮辨

すべて天地の間その理ありて姿あるべく、姿ありて後名はあるべし。いでや世をのがれて浮世の名を改めんには、その姿まづあらざらむや。今や月代の世間をやめては、神儒の束髮にや似せん、釋氏の剃髮にやならはんと、(一)模稜の手に思へるも、かりそめながら生涯の仕上なれば、一大事の分別にはありけり。さるも心にまなぶ事なく、かの三教の善惡もわかたねば、只明暮の自由を思ふに、かれは夏あつくこれは冬寒し。げに(二)楊州の

(一)兩端を持して決せざるをいふ

(二)書言故事に「昔有レ客、各言ニ其志一。或願レ爲ニ楊州史一。或願ニ財貨一。或願ニ騎レ鶴上昇一。其一人曰、腰

られ、俗の諺にはよりがもどけたともいふなりけり。されば物の始にぞ、行末はよく思ひはかるべき事にこそ。そもや我身の上をいはゞ、かしこき陰を頼み奉り、官路に立ちしも久しけれども、もとより毒にも藥にもならねば、人にあかれし身とも覺えず。雨露のめぐみ深くして、すなほなる國に鬼もなければ、世に人に我もあかず、只病になやまされ、今は弓も引きがたく馬にも乘りがたく、さても武士の名に數まへられんは、南郭が竽を吹きけん、此身の上のはづかしければ、老と病を一荷にして、うき世の關は逃れ出でたるなり。しかれば誰をおそれ何を恥ぢて、さのみは逃げも隱れもすべき。さりとて又貴顯の門松をくゞり、桃に菖蒲に袖ふりはへて、こゝの嫁入かしこの法事にも列ならんは、いと見苦しう、官事をさへ辭したればいかでかは。こゝに浮世の店をしまへば、まことはたゞ遁世者とこそいふべけれ。さるを押付けて隱居々々とは痛み入つたる名目ながら、是非なき世の通稱となりて、行灯挑灯の取ちがへも、多勢に無勢叶はねば、益なき事はあらためぬをよしとこそ。過ぎし比いづくの程にか、市中の門柱に隱居某と

(三)古今集「古の野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞくむ」

(四)北山の隱者周顒の再出でてつかへしを孔稚圭がそしりてつくれる北山移文に山神が怒りて周の再來を斷る趣をつくれり

れば昔の隱者を思ふに、德ある人の世に慕ふをむづかしがり、仇ある人の敵を恐れて、さてこそ名をもかへ、かたちをも忍びけめ、德もなく仇もなき人の、たとへ四條五條に金の看板を出したりとも、訪ふべきよしの人こそ訪はめ、さもなき人は見むきもせざらむ幼遊びのかくれんぼも、尋ぬる鬼のあればこそあれ。さるを浮世にかくれ顏なるぞ、中中恥かしき心地ぞする。いでや世に隱居の二字至からむと、みそかにちかき有明の月さしこめて、門は葎に閉ぢさせ、假にも人にあはじ〳〵とひそまりたらむ、さは見事なる隱居ぶりかな。是をこそ見習へと出すりこ木なる隱居を恥しめて、人もよしとは譽むるならむ。それは後世にもかたぶきたる人の、吾が佛をこらへ力にして、たま〳〵堪へても遂げぬべし。さもなくて命つれなき人は、朝寢晝寢の閑づくしにも飽けば、次第にさびしくくらし侘びて、彼はかくいふゆかりあり、これは久しき友なればと、おとづれ交すほどに、野中の清水(三)にことよせて、そろ〳〵昔をとりかへし、始には似ぬ人もあるべし。花山の上皇も、かゝるうき名には立たせ給ひたりとか。さるは北山(四)の神靈にもいか

(四)師信
(五)祐信

位の品々なるはなし。能畫のうへはさらにもいはず、鳥羽繪の男は痩せてさびしく、大津繪の若衆は肥えて哀なり。浮世繪は又平に始り菱川(四)に定まり、今西川(五)に盡きたるといふべし。旅籠屋の屛風には罌粟か牡丹かしれぬ花咲きて、人より大きなる鷄の、屋の棟にとまりたるこそ目さむるわざなれ。又は藪寺の襖には、遠水に波高く、遠人の目鼻あざやかに、帆かけ舟に乘りて跡へ走る、これも繪にあらずといはざるべし。俳諧師の繪は上手下手の沙汰なしとて、翁も跡をのこし給へば、我も我流の筆ぬらしそめて、破れ鍋の畫贊をかけば、綴蓋の望みてありてこゝかしこに散りぼふ。あはれ恥知らぬわざながら、憚らず書きちらすはよしと(六)、吉田の法師を無理なる荷擔人にして、此年比硯の海にも遊ぶ事にぞありける。

(六)徒然草「手の惡き人の憚らず文書きちらすはよし」

隱居辨

箕山(一)の月は高うして望むべからず、五湖(二)の水も深うして窺ひがたし。垣は紫陌に隣れども、大隱の市にもへだたり、菴は黃稻の陰にまじはれども、小隱の陵藪よりも淺し。さ

(一)唐の隱士田游巖箕山に隱る
(二)范蠡五湖に隱る

（一一）説苑に少孺子が呉王を諫めし時の喩

（一二）晉の王質が石室山に入りて斧に腰かけながら仙人の圍碁を見て七百餘年を經し故事

口のかゆさを覺え、菓子盆に蟻の付きたるを驚く。冬は清涕の露落ちて無常を死石の上に觀じ、火燵蒲團に吸物は、いつの間にかはこほれけん。たゞかの蟬（一一）といふものの、おのれなく音にのみ心を入れ、それをねらふものは後に鳥の窺ふを知らぬに似たり。その蟷螂の斧朽ちて、七世（一二）の孫にあひし時、久しき年月の別ながら、咄すべき事のひとつも無かりけんは、大きなる損といふべし。我もとより不機根にて、此樂を知らざるはふかき恨なり。さて手跡の拙からぬは、ことにあらまほしきわざなり。夫も上品の人は、詩歌文章にのみ筆を染め、書翰もいやしからぬ文體に、萬世の後も名はとゞむべし。品下りたる人は、日用の事々にも用ゆれば、或は文庫の覺書に何匁何分何厘、此錢何百何十文と定家樣の筆法もいと口をしく、又は此暮利分ばかりに御了簡偏に賴み奉ると、文徵明が跡を殘すも似氣なきわざにして、心の外なる事ながら、世わたる習いかゞはせむ。惡筆兵衛が出るまゝ口に、手は只よめ安きこそ要なるべけれ、たとへ能筆が書きたりとて、一字が二字の用もせず、といひたるは、理に似て無下に覺えしか。そも又畫ばかり

（四）杜詩「酒債尋常行處有。人生七十古來稀」

（一）晉の陶淵明常に無絃の琴を貯ふ之を撫して曰く「但識琴中趣・何勞絃上聲」

願はくば人はよきほどの仕舞あらばや。兼好がいひし四十たらずの物好は、なべての上には早過たり。かの稀（四）なりといひし七十まではいかゞあるべき。こゝにいさゝかわが物好をいはゞ、あたり隣の耳にやかゝらん。とても願の屆くまじきには、不用の長談議いはぬは言ふにまさらんをと、此論こゝに筆を拭ひぬ。

四　藝賦

琴碁書畫は異國の沙汰なるべく、こゝにあはぬ評ながら、しばらく名を假りて論ぜむに、琴はことさら品の異るやらむ、彼處にはもつぱら隱者閑人の弄びにして、十三絃だに所せきに、二十五絃のいそがしきも、いかなる嶺の松風にやかよひけん。さるも無絃の琴（一）を撫でて意ありとたのしみけんは、こゝにも上戸の樽のせんを齅いて月見たる咄には似たりけり。碁にすける人ほど羨ましきはなし。差向ひたる内の無念想なる、士は金門に腰を折りし今朝のつかれを忘るれば、貧僧は明日の米櫃のあてなき事を思はず。夏は入日の西に迫りて、膝の上までさし入れども、たゞ地を造りはま卷き盡してぞ、始て蚊の

一人、火燵蒲團の島守となりて、お迎がまゐりましたと、問はぬに告ぐる人にも、忝しと禮はいへども、何のかたじけなき事かあらむ。六十の髭を墨にそめて、北國の軍に向ひ、五十の顔に白粉して三ヶの津の舞臺にまじはるも、いづれか老を歎かずやある。歌も淨瑠璃もおとし咄も、昔は今のに勝りしものをと、老人ごとに覺えたるは、おのが心の愚なり。物は次第に面白けれども、今のは我が面白からぬにて、昔は我が面白かりしなり。しかれば人にも疎まれず、我も心の樂しむべき、身のおき所もやと思ひめぐらすに、わが身の老を忘れざれば、しばらくも心樂しまず。わが身の老を忘るれば、例の人には厭がられて、あるは似氣なき酒色の上にあやまちをも取出てん。されば老は忘るべし、又老は忘るべからず。二つの境まことに得がたしや。今もし蓬萊の店をさがさんに不老の藥は賣り切たり、不死の藥ばかりありといはゞ、たとへ一錢に十袋賣るとも、不老をはなれて何かせん。不死はなくとも不老あらば、十日なりとも足りぬべし。(三)神仙不死何事をかなす、たゞ秋風に向つて感慨多からむと、薊子訓をそしりしも然る事ぞかし。

(三)陸放翁「世上年光東逝波。咸陽銅狄幾摩挲。神仙不死成何事。只向秋風感慨多」

鶉衣後篇上

歎老辭

芭蕉翁は五十一にて世を去り給ひ、作文に名を得し難波の西鶴も五十二にて一期を終り、(一)見過しにけり末二年の辭世を殘せり。わが虚弱多病なる、それらの年もかぞへ越して、今年は五十三の秋も立ちぬ。爲頼の中納言の若き人々の逃げかくれければ、いづくにか(二)身をばよせましとよみて歎かれけんも、やゝ思ひ知る身とはなれりけり。されば浮世に立交らんとすれば、なきが多くもなりゆきて、松も昔の友にはあらず。たま〳〵一座につらなりて、若き人々にも厭がられじと、心輕くうちふるまへども、耳うとくなれば咄も間違ひ、たとへ聞ゆるさゝやきも、當時のはやり詞を知らねば、それは何事何ゆゑぞと、根問葉問をむづかしがりて、枕相撲も拳酒も、騷ぎは次へ遠ざかれば、奥の間に只

(一)「浮世の月見過しにけり末二年」

(二)「世の中に老を厭はぬ人しなければ」

の上をなげくらんを、蓑虫の父よと呼ぶは、守宮の妻を思ふには似ず。されど父のみ戀ひて、などかは母を慕はざるらん。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の比端居めづらしき夕べ、はじめて仄にきゝたらむ、又は長月の比力なく殘りたるは、寂しきかたもあり。蚊屋釣りたる家のさま、蚊やり燒く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團の隙なかりけむ。

むかし銀に執心のこせし住持は、蛇となりて錢箱をまとひ、花に愛著せし佐國は、蝶となりて園に遊ぶ。そも俳諧に心とめし後の身、いかなる虫にかなるらん。花に狂ひ月にうかれて、更行く行燈の影をしたひ、なら茶の匂ひに、音を啼くらんこそ哀なるべけれ。

この續篇は、也有翁寛保のすゑより寶曆のはじめの比までの遺稿をもて抄出す。

末僚　六林

蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども、ゆく先々を負ひあるくは、水雲の安きにも似ず。

蛇蚯蚓の足なくてもあるくべくは、蜈蚣をさむしの数多きは不用の事なり。

蟷螂の痩せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にも此類はあるべし。

蟹のあゆみに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を、駕にのりて富士を詠めゆく人には似たり。

促織、鈴虫、くつわむしは、その音の似たるを以て名によべる。松虫のその木にもよらで、いかでかく名を付けたるならん。毛生ひむくつけき虫にも、同じ名ありて、松を枯らし人にうとまる。一在所に二人の八兵衛ありて、ひとりは後生をねがひ、ひとりは殺生を事とす。これ松虫の類なるべし。

きり／＼すのつゞりさせとは、人のために夜寒ををしへ、藻にすむ虫は我からと、只身

（五）浮千芬が夢に見たる蟻の王國

（六）木下長嘯子に「紙魚を憐む辭」あり

蠶の生涯は世の爲に終り、火取虫は誰がために身をこがすや。蜉蝣ははかなき例にひかれ、蓼くふ虫は不物ずきの謗となれり。さば俳諧するものを、俳諧せぬ人のかくいふ折もあるべし。

おなじ寶の名によばれて、玉虫はやさしく黄金虫はいやし。

蟻は明くれにいそがしく、世のいとなみに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求てやまず。いつか槐安(五)の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるも便あしき方に穴をいとなみて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚(六)は長嘯子にあはれまる。

狗の歯に嚙まるゝ蚤はたま〳〵にして、猿の手にさぐらるゝ虱は、のがるゝ事難かるべし。

虱を千手觀音と呼ぶに、蚰蜒は梶原といへり。さるは梶原が異名なりや、げぢ〳〵が異名なりや、先後今は知りがたし。

（三）時鳥の異名、時鳥は蜀の望帝の生れがはりなりといふ傳說あり

（四）楚の龔舍蜘蛛の網を見て仕官を辭す

たるは、此ものの本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ことの外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく比ならん。つく〴〵ぼうしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して此物になりたりと、世の諺にいへりけり。哀は蜀魂（三）の雲に叫ぶにもおとるべからず。

蜘蛛はたくみに網をむすんで、ひそまつて物を害せんとす。待つくれの歌によまれ、又は退隱（四）の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵の始として、賴光をさへおびやかしたる、いと恐ろし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝか哀そふ折もあらんか。彼はかひ〴〵しく巣つくりてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、蜘とはいかでいふやらむ。

芋虫は腹たつものに譬へ、毛虫はむづかしき親仁の號とす。脊虫咨虫は名のみして虫ならず。油むしといふは、虫にありて憎まれず、人にありて嫌はる。

(一)芭蕉「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」

(二)車胤の故事

とは、いかに己が身を思ひあがれるにかあらむ。花に狂ずるとは詩人の稱にして、歌にはさしも詠まず。蜜をこぼして世のためとするはよし。只人目稀なる藥師堂に、大きなる巣作りて、掃除坊主をおびやかさんとす。それも針なくば人には憎まれじを。

蛙は古今の序にかゝれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで、翁の目さましたれば、此物の事更にも誇りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに啼きさかる比は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、此物ばかり初蟬といはるゝこそ、大きなる手がらなれ。(一)やがて死ぬ氣色は見えずと、此ものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢はたぐふべき物もなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすだく、五月の闇はたゞこの物の爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに(二)貧の學者に取られて、油火の代にせられ

(二)徒然草の故事

さして、楊柳觀音のあり所は知られ、(二)栗栖野の柑子にはきたなきあるじの心をさへ知られつ、白壁の樂書には醫者の家なる事も知らるべし。されば色をも香をも知らざれば知らず、しる人は知りぬるかし。

垣にへちまさてはあるじも疝氣持

百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限なるべし。それも啼音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそ猶めでたけれ。さてこそ莊周が夢も此物には託しけめ。只蜻蛉のみこそ、かれにはやゝ並ぶらめど、糸につながれ黐にさゝれて、童のもてあそびとなるだに苦しきを、阿呆の鼻毛につながるゝとは、いと口をしき諺かな。美人の眉にたとへたる、蛾といふ虫もあるものを。

子を持てるものは、その恩愛にひかれてこそ苦勞はすれ。蜂の他の虫をとりて我子となす、老の行衛をかゝらんとにもあらず、何を讓らむとてかくは骨折るや。我に似よ〳〵

と、嘲りて去らむとす。案山子猶よびとゞめて、汝賢きに似て又わが心を知らず。そも笠を誇るや蓑をそしるや。其の句の返しにはあらず、たゞ此歌をきけ、とてよみける。

是は笠これは蓑とてのけたれば

あとには何が案山子なるらむ

絲瓜辭

むくつけきふくべも、ひさごといへば伏猪のやさしみあり。花はまして夕顔の、人めきて裝へるを、此ものの諂はず、うき世をへちまと名のりけるより、源氏の御目もとゞまらず。まして歌よみは此名にもてあつかひて、こちの料理には使はれずとて、ほからかし捨てたるを、やがて俳諧師のひろひ取りて、己が垣根には這せたるなり。その味ひの美ならねば、鴉もぬすまず蟻もせゝらず、鉢坊主も見かへらねば、隣の人をも疑はず。

草刈のそしるをきけば絲瓜かな

猶又いみじき疝氣の藥なりとて、ことに此翁の愛するにぞありける。むかし水の流に光(一)

（一）沙門延鎭淀川の水に金色の光さしたる源を尋ねて行きて清水に逢ひ、終に居士を寺を立つ、清水寺の緣起

いふ鳥を聞けるや。九萬里に羽うつて翼垂天の雲のごとし。をどりはねて穗ひろふ汝らが、よくその心を知る所にあらず。いかで我をみゝづくに類して、みだりに笑はんとするや。雀なほも口々にいふ、さればその大鵬の雲に羽うつは、莊子の例の大噓にして、斥鷃の蓬生に飛ぶは、今見る所の實なり。たゞその實を以ていはむ。世に鶴といへるものだに、千年の齡に壽かるれど、今は是を取て、大饗に屠られ、羽は矢にはがれ、殼は黒やきにして何かれの藥とて爭ひ求めらる。鷹はこれらをも組敷いて、其功上に出るに似たれども、その藝のすぐれたる故に、朝三暮四の餌をあてがはれ、足をつながれ架にほだされて、雲を戀ふの愁をまぬがれず。しかじ世中の人には、葛の松原に、一枝のねぐら求めて、淺茅が露にかくれやすからむには。そもや汝が身にあきはてて、稻莖已に霜寒し。などや五湖に棹さして蓑笠の塵を拂はざるや。他をそしり我を知らざるは共にいふべからず。昔鶯(一)は歌をよみたれども、それは花に啼くぬめりなりとて、

捨時をしらぬ案山子の弓矢かな

(一)古今の序「花になく鶯、水にすむ蛙までもいづれか歌をよまざりける」

の花のうつくしきを歌の沙汰に及ばぬは、喰れぬ故によまざるにや、無下に口惜しと人の言ひたる、さがなき詞ながらをかしかりけり。

案山子辭

守るとせしおくての稻葉苅りはてて、山田の畔にひとり立てる案山子あり。群れ渡る穗雀の落穗ひろひけるが、例の口さがなくて笑ひけるは、養由は百歩に柳の葉をはづさず、義家は鳴弦を雲の上にひゞかせ、頼政は鵺を射る、その外武將名士の弓箭に功ある、みなその藝を發して世に名をふるへり。何ぞや、あしの竹に繩はりて、射る事しらぬ弓の形をいつはり、我輩を欺かんとするや。案山子これにこたへていふ。ひかぬ弓放さぬ矢にて射る時は中らずしかも外れざりけりと、よみける歌の心を知らずや。その奥州の鳴弦も、矢は放さずして德をあらはせり。麟は角を備へたれども、肉ありて物をやぶらず。むかし忠盛の闇討も、木太刀に身の難をのがれてこそ、賢しと人にはほめられつれ。しひて物をやぶり損ひて後その功をなさむとするは、愚將のなす所なり。いでやかの鵬と

(一二)鹽鐵論「昆山之傍以玉璞抵烏鵲」

蕎麥喰ひたりなど、ほのめかされて、羨しき比ならん。

泥鰌は、酒の上に赤味噌ほどよく調じて、唐辛子くはへたるこそよけれ。白味噌がちなる大みや人は、いかに喰ふらんとさへ覺束なし。

鰒とは先名のふつゝかなり。いかで無比の美味をそなへて、あやしき毒を持たりけむ。その味ひと毒の世にすぐれたれば、くふ人を無分別ともいひ、くはぬ人を無分別ともいへり。

鰯といふものの味ひことに勝れたれども、昆山のもとに玉を礫にするとか、(一二)多きが故に賤しまる。たとへ骸は田畠のこやしとなるとも、頭は門を守りて天下の鬼を防ぐ。其功鰐鯨も及ぶべからず。

されば歌人は鳥蟲に四季をわかちて、魚に四時の題詠はなし。俳人兼ねて魚を品題とするは、もつぱら味ひの賞翫を捨てざる故なり。しかれば歌よみは、耳目の愛にとゞまりて、食は野卑なりとて取らざるに似たれど、かの喰ふべき若菜をもつぱらによみて、菜

ねば、しら魚といふこそよからめといへば、かたへの童のさし出でて、否とよ、世にしら猫ともしら鼠ともいふにこそと打込まれて、爰に物定の博士暫く默然たり。

鮎は鵜川の篝火に責られ、鯰は濁江の瓢箪におさへらる。比目魚は黒白に裏表をあらはし、海鼠は跡も先もなし。

齒にもたまらぬ鱠の骨は、何の爲に持ちたるや、それも海月のなきには勝れるか。

こゝに蛸の入道は、壺に入りてとらるゝこそ愚なれ。那智の瀧壺ならば、文覺が行力をも傳ふべきを、一休(一〇)の口にはほめられながら、まさなの法師の身の果かな。

かながしらといふ名のめでたくてぞ、產屋の祝儀にはつかはれ侍る。さるを石持といふものの、銀持ともいはゞ、世に如何ばかりもてなさむを、益なき名をもちて口をしとや思ふらん。

鱚細魚はをさなき心地ぞする。大男の髭口そらして食ふべきとも覺えず。

鯊は、たゞ釣る比の面白きなり。里は砧に蚊屋しまひて、木曾に便よき人は、まだき新

(一〇)一休餡を好まれしことと一休咄に見えたり

鮟鱇の唐めきて子細らしきに、つるし切とはいぶせくして、桀紂が料理めきたり。かれは本汁にゐらまれ、鱒はかならず二の汁の大將にて、搦手をぞ承はりぬ。もしは文字の理屈によらば、紫の上(九)には鯖をめでさせ給ひ、中宮の御膳にはことに鰍をや召させ給ひけん。

鮏は越路に名ありて、其國の雪にも似ず、色は入日の雲を染めて、うるはしく照りたるこそいみじけれ。たまたま鱒といふものも、その色は負けじとや挑むらんを。狹夜姬は石となり、山のいもは鰻となる。かれは有情の非常となり、これは非常の有情となれり。石となりて世に益なく、鰻となりて調法多し。牡丹は花の一輪にて賞せられ、梅櫻は千枝萬葩を束ねて愛せらる。それが勝れりとも劣れりとも、更に衆寡の論には及ばず。白魚といふものの世にもてはやさるゝは、かの鯛鱸の大魚に比すれば、今いふ梅櫻の類と等し。しかるに、國俗のとなへ異にして、しろ魚ともしら魚ともいへり。是いづれならんといふに、さればしろ菊ともしろ鷺ともいは

(九)源氏物語の紫上は春を好み中宮は秋好中宮とて秋を好めば也

間には泣子をも威すべく、朝比奈辨慶にも肩をならべんとす。しかるに記錄の上にしては、輜曳の外はさせる働なくて、只二郎兵衛も五郎兵衛も同じ列なる侍なり。いかに世に名の事々しきぞと、ある人評したるものあり。かれたゞ七兵衛が類なるべし。

松江の名産、(四)我朝にも品くだらず。張氏(五)は是を秋風に思ひて仕途を辭し、平家は是を船(六)中に得て官路を進む。進退いづれをか羨むべき。

鮒は近江に洞庭の名をくらべたる、鯉に似て位階おとれり。名には紅葉(七)をかざしたれど、鱠は春の賞翫となれり。

鰤は節變の比もてはやされ、梅咲くころを世に匂ふ。

鯖は初秋に祝はれて、空也(八)の蓮の葉に登るは、後生善處の契もたのもし。

鰹は芥子鮓の風味、上戸は千金にかへむとも思ふらむを、鎌倉の海の素性を兼好に言ひ探されたる、いと口をし。鰹節となりては、木の端のやうにも思はれず、その梢とも見えずして、花の名をさへ世に散らしぬる。

(四)鱸
(五)晉の張翰秋風の起つを見て故郷の鱸魚鱠を思ひ辭職して歸る
(六)淸盛熊野參詣の途中の事
(七)紅葉鮒
(八)「空也」は「中元」を草書より誤りしたらん

(一)一休の狂歌と傳ふる歌、下の句は「小袖は紅梅花は三吉野」

(二)莊子に朱泙漫屠龍の技を學び技成りて用ふる所なしと見えたり

(三)孔子の子名は鯉

百魚譜

人は武士、柱は檜の木、魚は鯛とよみ置ける、世の人の口における、己がさま〴〵なる(一)物ずきはあれども、此魚をもて調味の最上とせむに咎あるべからず。絲かけて臺にすゑたる男振さへ、外に似るべくもなし。然るを唐土には、いかにしてか殊に賞翫の沙汰も聞えず、是に乘りける仙人もなし。されば夷三郎殿も、他の葉武者には目もかけず、たゞ是にこそ釣もたれ給へ。龜を鱗の司といふは、食味はなれたる理屈にして、さば是を料理せんと學びたる人は、(二)昔愚なる名をもこそとゞめたる。

龍門瀧にのぼらんとする魚有りて、おほけなくも大聖の御子にも、(三)此名をからせ給へる。されば世の名聲はかの鯛にも竝ばむとす。かれは如何なる幸にかあらむ。味ひ美なりといへども、鯛の料理の品々なるには似るべくもなし。乾物炙物にせず、鱠汁によろしからず、くづし蒲鉾に用ひ難く、鹽にも鮨にも調ぜず。只刺身あつ物にとゞまるは、多能を恥づといひけんを、中々譽と思へるにや。昔平家に悪七兵衛景淸と名乘りて、今民

(二)寂蓮「籠の中もなほ羨まし山雀の身の程かくす夕顔の宿」

(三)「勢」は例の「熱」なるべし

(四)蘇東坡扶風郡に吏たりし時喜雨亭をつくる

(五)定家小倉山に時雨の亭をつくる

(六)漢書に「巣居知風、穴居知雨」

の山雀(二)の身のほど隱して、四壁たゞ風をふせぎ、三徑わづかに草を拂ふ。こゝに汲むべき山の井なければ、井戸ひとつこそ過分の貯なれ。あたりは夕顏の小家がちなれば、枕に鷄の曉を告げ、夜はとがむる犬も聲して、ひたすら遠き程にもあらず。門を出でて東北の方しばらく十歩の杖を曳けば、指頭萬疊の山横をれ、眼下千町の田つらなり、村落畫圖の中に入る。南は高倉の森高く、鳴海の浦風も通へばや、勢(三)田潟も名のみして、夏は夏しらぬ日も多かり。やゝ賤が屋の蚊やりも細りて、衣うつ聲蟲の音もよそよりは早き心地するは、夜寒の里も近ければならし。年くれ年かへり、垣根の梅は遲からねども、萬歳鳥追などいふものの浮世の春には、一日二日も立ちおくれたるなど、さすがに片里めきたり。されば名付けて知雨亭とよぶ事、かの蘇氏(四)が喜雨にも習はず、何がし黄門(五)の時雨をも追はず、只これ穴居(六)に似たればなり。やゝ多病の老にともなひ、繁きことわざに物ぐさなるには、あはれ思ひし儘なるをと、我は心ゆきて覺ゆるを、こゝもまた府城の辰巳なれば、世をうぢ山と人はいふらんかも。

るにはまされり。老いては人の交うとく、獨居がちにかき籠りたらむには、是こそ三の友の一つには足ぬべけれとて、かの無絃にあらぬ一面の琵琶を抱いて、雨の日月の夜、官務の隙に掻きならせば、人はたゞ平家を習ふとや見るらん。我はひそかに老隱の稽古をするなりといへり。さればかの琵琶も、母かたの祖父より傳へたれば、絶まじき絲筋なめり。撥面に三日ばかりの月さし出て、桐の一葉も散りたれば、新涼とはよぶ事とぞ。これに寂しからむ句ひとつ乞ふまゝに、

膝やせて琵琶のなづきや秋の暮

知雨亭記

市中はなはだ遠からねば、杖頭に錢をかけて酒を賖る足を勞せず、市中また近からねば、窓底に枕を支へて夢を求むる耳靜なり。こゝに少の地を求めて、聊膝を容るゝの幽居を營む。よし、かの鬼はわらひもすらん、我世のあらまし違ふまじくば、花とならびの岡ならずも、有とだに知られでぞ、老の春をも過さばやと、人知れず思へるなりけり。か

(一)晉の阮宣常に百錢を杖頭にかけて酒代とす

のうへにこそ、歌はすてがき哀ぞ多かる。舟歌は、めでたく祝ひて勇ましき物から、漁歌の棹歌のと古人のいへるは、波間蘆間のさびしさにて、是にてはあらざるべし。山更に幽なるに、樵の歌のきこえたるは、伐木の丁々たるよりもまさり、あけ野が原に菫咲きて、比丘尼の歌のなめげなるより、小夜の中山夜ふかき霧わけて、馬かたの欠まじりにうち出でたる一節ぞ、楚客の魂たゞこゝに碎けぬべし。田植歌、麥歌、臼挽うた、水汲うた、いさゝか折々にたがひありて所々に品ことなり。いづれか哀ならざるべき。和歌にはさして稱せざれども、詩客俳人多くはこれに情を託せり。

平家といふもの有りて、まづは琵琶法師の家にのみ傳はれども、はやりうたの花やかなるにも似ず、說經の哀なるにも似ず、舞のすたれたるにも似ず、淨瑠璃の新なるにも似ず、すかぬ人は甚すかず、すく人はことにすけり。我に友あり。其人のいへる、稍老になんなんとして、かの音曲の品々、一つも身の上に唱へがたし。されば此平家は、こと〴〵く信ずべからねども、和朝の記錄にして、懷舊覽古の情ふかく、諸のねからつくり事な

(一)琴操に「寗戚飯二牛車下一叩レ角而歌曰云々」
(二)論語に「子擊二磬於衞一。有下荷レ簣而過二孔氏之門一者上云々」
(三)馮驩が孟嘗君の冷遇を怒りて長鋏を彈じて歌ひしこと史記に見えたり

多くは兄に見かぎられ、親の勘當も少からず、養子緣組の相談には、少しさゝはる方も有りぬべし。きはめて工商の間にありて、年も三十ばかりまでのわざなるべし。歌とは總べたる名目なるべけれど、今自ら筋わかれて、其品また貴賤の異なるあり。古今も一樣ならず。琴の組などは上代のまゝにて不易の眞なり。今三線にあやどる類は、流行しばらくもとゞまらず、文句も百端に音節さだまりなし。本調子は、たとへば女の下髮にうちかけしたるごとく、二上りは髮當流にとりあげ、姿も一つ前に亂れたり。三下りは靜まりたるに似たれど、かくし化粧にしごき帶したるよそほひ、物思ふ人はこゝに淚をも落して、中々淫奔の媒とはなりぬべし。すこしも品あがりたる人は、耳にこれを慰めども、みづから口には弄しがたし。やゝさだ過ぎたる身の上には、猶にげなくてうたふべくもあらず。かの牛の角を敲きて(一)田の畦にうたひ、簀荷ひ(二)の一節は、今も月夜の門過ぎがてには、さる類もあるべきか。(三)鋏を彈じてうたひしなどは、大人げなくもなかりしにや。いざ唐土の事はしらぬ風俗なり。たゞ緣によるものならなくに、賤の男賤の女

がましき舞臺の面に、眞貌に足拍子ふんで、辨財天とはわが事なりとは、まことに仁體にも似あはず、あまりなる事と思へば、少しかたはらいたく覺ゆる折もありけり。されば、世うつり、人の耳も心もたゞ向上にはしりて、淨瑠璃といふものは、洒落のはじまりにてやありけん。夫だに五十年のむかしは、さてもその後弓取一人おはしましてと、一部を發端に名のり、御臺姫君の道行も、たゞこゝに哀をとゞめしに、今世は年々月々に新奇をあらそひ、義理に虛實の入組みて、二重どきの謎よりはむづかしく、不飮込なる老人の耳には、善も惡もおぼろ〳〵として、三段目の愁には、あたりの顏を詠めわたして、たゞ泣くより外の事ぞなき。是を弄ぶ人の、外の音曲とはふりかはりて、本ひかへたるは上手めき、空にかたるは心劣りぞする。日待庚申に專にして、燭臺の陰に衣紋かきつくろひ、翠簾あるかたを側目にかけて、聲づくりたるよそほひ、やゝ三重の間に息つぎて、氣色ばかり汗のごひ、湯をのみたる樣よかりけりなど、人のつきじろひたるけはひ、世にある思ひ出かくこそなど、若きは羨む心もあらむに、よく其人の上をきけば、

今樣朗詠といへる、むかしは遊びの最上にてやありけむ。かの催馬樂などいふものは、我つひに聞ける事もなし。たま〳〵幸若が家に、舞といふ事の幽に殘れるも珍らしとて、一度は人の聞きもすべし、二度と聞くべしとも覺えず。今は謠といふもの、上中のもてあそびとなりて、はなはだ下へは至らず。法制そなはり老若のさかひなく、古今に變なし。されば是を玩ぶは、人品よろしき方にさだまりて、たとへ商人のよき衣著たらんほどの際は、高砂東北をも知らぬは、玉ならでも盃の底なき心地ぞする。世にさるべき饗應の席へは、その職なる人召し出だされて、小袖と上下の紋は定まらねども、時ならぬ足袋はきたるは、ひとさしも心得たるなるべし。一座のさし合折からの文句には心づかひして、いかで盃の間をぬかさじと眼を配りたるなど、扇は膝の上に斜なり。あるは亂酒の打やはらぎて、やごとなき方よりも上調子に聲打ちいで給へるに、やがて一座聲をあはせて、中にも手鼓の心得たるなど、蟬のごとく蛙に似たり。かゝる中に、たま〳〵その道心得ぬ人は、炙物にせゝり箸してうち背きたるは、口をしとや思らむ。然るに晴

（一）芭蕉句集に大曾根成就院より歸る時、「何事の見立にも似ず三日の月」

たゞ爰に此一句（一）のみならん。猶その詠みし物の上にいはゞ、かの武隈の松も跡なく、井出の欵冬、六浦のもみぢも、今はむなしき名ばかりなるを、たふとくも、此寺に古の月そのまゝにありて、眺望もまた世にこえたれば、昔をしたひ道しのぶ人の、誰かはこゝに來て仰がざるべき。さるを五條房のぬし、朽ちせぬ印をたて、院主また堂に名づけて、此句の光いやましに掲げしより、雲上の雁も水底の魚も、弓と驚かず鉤とうたがはず。まして舟とも黛とも、一度たとへて二度目は古ければ、たゞ三日月の三日月なるその影は、世々にかはらずして、いつも此寺に隈なからむとぞ。

猿の手に摩づともつきじ三日の月

翁像贊

道は古池の吟にひらけつ　吟は枯野の夢にをはりぬ
檜の木は月の笠ならねども　影を風雅の世にあふぐらむ

音曲説

も人を免るゝ事あたはず。是を、彼が五能ありて(一)、一つをもなさずとはいへりとぞ。ここに翁あり。詩つくれども詩ならず、歌よめども歌に似ず、物かけどもよからず、繪かけどもつたなく、俳諧すれども下手なり。我かの蟲に劣らめやとて、みづから螻翁とぞ名のりける。やゝ老いたり、今はかゝる身のほどを知りて、他にほめられむ事をねがはず、人の誹をいとはず。さらば何にかも腹たてて、かのつぐみ(二)といふ鳥には喜ばるべき。よし、たとかれは腹立つべくとも、我は笑はむと思へるなりけり。

(一)文選が勸學篇の文

(二)諺「けち腹立てりやつぐみ喜ぶ」

三日月堂記

應二大曾根成就院需一

そもや故人の手にならせし調度、筆にのこせる跡は、もとよりめでたき形見なれど、世に露霜もおきかはれば、あるは失せあるは損ねて、にせか眞かの疑もむづかし。只よし人の言葉ばかりこそ、代々にむしばまぬ寶とはいふべけれ。されば翁の一生の吟、いづくはあれど、此府下(一)にしては、何がし院のかへるさにとさして、其寺の紛れざるは、

(一)名古屋

(一)芭蕉の句「星崎の闇を見よとや啼く千鳥」
(二)芭蕉の既望賦の趣

乏しからず、巨口細鱗も俎にひるがへれば、斗酒はもとより坡翁が妻の才覺もからず、海老煮る闇も漕ぎはなれて、隈なき月の海面にのぼれば、こよひや星崎(一)の千鳥も月見んとは啼くならん。いでや其翁も、湖水(二)に今日のかげをめでて、成秀が門敲き給ひしとか。むかし鏡の山こそなけれ、呼續の濱松風の里、浪のみるめも迷ふばかり、西湖江湖の秋風も、今宵はこゝに吹かざらむやと、酒に賑はし茶にさはして、やゝ清興を高ぶれば、まして鳴海潟、夜寒、寐覺の里の名に、歌よむ人は衣かたしき物思ひ顏なるを、いざや宮蒟蒻の寂しみこそと、例の唐辛子のいらひどきに、戀ならぬ袂をぬらして、又一盃をあらたむれば、白鳥山の鐘の聲、おどろくばかりに更けわたりける。

呼つぎの名にいざよひの月見かな

螻翁傳

螻といふ蟲は、よく飛べども家を過ぐる事あたはず、よく登れども木を窮むる事あたはず、よくおよげども谷を渡る事あたはず、よく穴ほれども掩ふ事あたはず、よく走れど

有ける。

　心ありて荒さぬ軒に浦の月

乞食畫贊

もとより小町が身の果にもあらず、豫讓が忠のやつしにもあらず。君よく是を忘れずば、廚に肥肉を遠ざけて、仁政野邊の草葉に及ぶべく、臣よくこれを忘れずば、つねに飽溫の恩澤を省みて、報國の志もいかでかこゝに起らざらむ。ちかく治世の明くれとても、これを見かれを思ひ知らば、花に一盃の望は足りやすく、雪に鰒汁の奢はやむべきをや。あはれ世の人心、蟹の目の上にのみつきて、猿の手の及ばぬ方に延ばすらんを、あが佛を香華にまほりて、その黄金の肌を羨むよりは、たゞよしこれを起居に詠て、薦一枚を忘れざらむにはと、みづから座右に畫贊す。

十六夜賦

十六夜の月みむと、勢田潟(一)に舟よそひするに、何がしがあるじまうけして、世帶道具も

(一)「熱田潟」の誤なるべし

て、身の爲ならぬ旅寐ながら、舊痾幸の折を得て、疝氣の腰を溫泉に浴し、浮世の耳を澗水に洗ふ。されば此里の地理、うしろに山かこみ、海はもとより波こゝもとによせて、月の寐覺の枕を支ふれば、鹿の妻乞巴峽の猿にまさり、雨のつれ〴〵に盃をとれば、鰹の刺身松江の鱸に恥ぢず。伊豆のお山、眞鶴が崎、久かたの日金山、朝もよひ紀僧正の宮、眺めて吟魂をなぐさめ、歩して舊迹をたづぬ。沖の小島は朝夕にみればこそあれ、大島はやゝ波路へだたり、雲晴れてあらはれ、霧わたりてかくすも、げに隈なきのみ見るものかはと、えならぬ眺望いひ盡すべからず。しかれば家ごとに東面をひらき、湯入の客の目をよろこばすが中に、渡邊氏某が亭にぞ、わきて便よき樓は構へり。むかし佐(一一)文山こゝに來けるついで、三字の額に筆をぬらせしより、一色亭の名によべるは、滕王閣の趣なりとや、(一二)落霞孤鶩と齊しく飛び、その長天と共なる海づらの、秋も今にして、浦のみるめ軒端にさはる方なく、心あるあまの庇のわざと荒して、と詠みけむには事かはりて、家居もことにつぎ〳〵しければ、立寄る人もこゝをせに、先やどりとる事にぞ

(一一)元祿比の書家、佐々木文山

(一二)王勃が滕王閣序「落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色」

朱硯にまづ手染せむ窓の蔦

そもや、芭蕉翁は、生涯を雲水に終り、杖を引かざる國々もなきが中に、奥羽は行脚のはじめにて、奥の細道の紀行をあらはし、その句は人の耳口に殘れば、ことにゆかしき隈々も多し。さるを仕官にほだされて、(二)雄島の苫やまたも來てみんと、欲なる願ひは思ひもかけず、たゞ一度の見るめも及ばぬその千賀のうらみは、千島も數ならず千尋の海も淺からむ。されば(三)能因の一首を思ひて、一句はその人にゆかしさを告ぐるならし。

しら川や夢にこす夜も秋の風

[illegible]一色亭記

豆州熱海に寓居の時、渡邊彦左衛門といふものの求によりて記す。

(一)沂に浴し詠じてかへらむとねがひし、彌生の空にはあらで、秋も綿入の羽織きる比、此熱海の湯本に一月ばかりのやどりする事あり。さるは我國君の母公にしたがひまゐらせ

(一)論語の曾晳の語に「浴ニ乎沂一、風ニ乎舞雩一、詠而歸」

(二)俊成「立ちかへり又も來て見ん松島や雄島の苫屋浪にあらすな」

(三)「秋風ぞふく白河の關」の歌

（一）唐庚が古硯銘に「硯之壽以世計」

朱硯の來由を記して、株人雅伯に謝する辭に代ふ。

世には蘆垣の間ぢかき軒をならべてだに、心あはぬどちは音づれもせぬ習なるを、遠き陸奥の見もしらぬ許より、一句を添へて、かの地の產なる由、小やかなる硯を贈り給はりぬ。あやし、しのぶ文字摺誰ならん、我ならなくに人たがへもやと、その便せし風水翁にとへば、その國に名だたる騷客島庵主の何がしとや、かの翁の旅寐にいかなる序か我名もらし給へるより、そは俳門の友なりとて寄せ給へりとぞ。されば我及ばぬ此道に心入れてより、蕉門の人としきけば、皆十年の舊相知のごとく思へるが、さては我ならでもかゝる心の習にやと、うれしき傳のいひ盡すまじう、硯は袖にかくすばかりなるも、遠き惠の荷恩を思へば、千引の石の心地こそすれ。

　ためしなき雁に重荷やすゞり石

いでや、この情のかき消すまじくば、松の烟の黑からむよりと、これを文房の朱硯には定めぬ。（一）世をもてかぞふ壽によらば、長く風雅の契も絕えざれとぞ。

我名もつゝみ人の名も問はねど、おのづから見なれ物言ひかはして、いざたまへ今日は花火あげてなぐさまむ、あまごといへる魚捕りになどさそふ人々もあるが中に、ことに明けくれとひ來りし覺樹といへる若き僧あり。下手なる象戲などさして、淋しさまぎるるたづきともなれり。過ぐる日數も二廻りばかり、今はとてかへる日は雨にふられて、

湯にぬれし袂の果や秋の雨

かばかりの事も、後の思ひ出にもやと書きつけ侍る。此は乙亥の年になん有りける。

樂老庵主像賛

滄浪の月すめらば酒に惜むべし、くもらば茶に遊ぶべしと、二つの間になぐさむは、樂老庵のあるじなり。これを爲がき是に賛して、

酒に待ち茶に待ちかへて月二夜

といへる、その友、紫隱里の某がもとめに應ずるなり。

贈二奥州株人一辭

山の上に藥師堂あり。三岳寺と名のみことぐしく、回祿ありける後はかたばかりに營みて、すめる僧もなく、明けくれ鐘つくは堂守の男にて、法師にはあらざりけり。

鐘つきや剃らぬあたまに散柳

六日ばかりの月山の端にかゝりて、風も湯あがりの身にしむばかり、端居の夕をかしきに、鹿の聲遠く聞きつけぬ。

笛にせぬ湯下駄にもよるか鹿の聲

つれ〴〵紛るゝかたなき日は、そこら見めぐり侍るに、大石と名に立てるあり。

友寐して猿と月みむ石の上

青瀧といへる、うしろの山をへだてて西より落る。

青瀧や竪に音きく初あらし

この山下にあやしき野火あり、人の亡魂とかいひ傳ふ。

たが魂ぞほたるともならで秋の風

（一）伊豫の湯桁は數多きものをいふ中古の喩

湯本の家はわづか二十にたらねど、二階づくりの家居つぎ〳〵しく、古市などいへるあたりより、たはれ女多く來り居りて、絲竹に客をなぐさむれば、小歌淨瑠璃山どよむばかり、峯の松風も三線に音をうばはれ、淸き谷水も脂水のけがれに濁るべきぞ。思ひの外の山里には有ける。今年はことに湯入の多くて、（一）伊豫の湯桁もよみ盡すまじく、近き比にすぐれたりと所の人もいふめり。若々しきかたは心にもとまらず、あたら山里の秋の夕をと、本意たがひたる心地するが、もと見し事どものさすがに思ひ出でらるゝ折もありて、むかし忍ぶの家の名も橘屋といへるに、しばしの宿もとめて居れり。襖一重へだてて、ことに賑はしく諷ひさわぐに、

　色鳥のねぐら隣や山がらす

日々の口號、

　湯の山やにしきに交る染ゆかた

　幕は湯にゆづりて秋の櫻かな

菰野記

つのもじや、伊勢の菰野なる山に温泉あり。年頃なやめる疝疾に試みむとて思ひたつ。比は七月の二十日あまり、尾城を舟出して桑名にいたる。あさけ川といへるより道わかれて、かの山へむかふ。

鳴たてば夕べはいかにあさけ川

その末は人家もまばらに、薄はまねけど酒屋もなく、餅は萩の花の名のみして、秋草のやさしく咲きみだれたる、こゝを絹野とはいふなるよし。

誰すてゝ扇の絹野の花づくし

山口といへる一つ家ありて、菓子などうる店に尻かけて、

こだまより外隣なき砧かな

それよりは嶮しき道、細くあやふき岩をつたひ谷を渡りて、雲より雲にわけ入れば、世の外遠くへだたる心地して、さては静けき山の中にこそと思ひやりしには似もやらず、

（二）「中流に舟を失へば一瓠も千金」

（三）韓信が漂泊せし時洗濯婆が一飯をふるまひし故事

すがに辭義合に手間も取るべし。只木枯の松蔭に駕立てて、繼烟管取りまはせば、茶屋の嬶のさし心得て、鮑がらに藁火もりてさし出したる、（二）一瓠千金のたとへも此時をいふにや。または雲雀なく空のどかに、行先の渡場問ひながら畑打のきせるに雁首さしあはせて、一服吸付けたる心こそ、（三）漂母が飯の情よりうれしさはまさらめ。そも煙草の德もむかしより人のかぞへ古して、今更いふもくどければ、かの愛蓮にならひて、たゞ此類の品定せむに、酒は富貴なる者なり、茶は隱逸なる者なり。煙草はさしづめ君子の番にあたりて、用ふる時は一座に雲を起し、退く時は袖のうちに隱る。こゝに神龍の働ありともいふべし。下戸と妖物は世にすたれて、下戸は猶少からず。今や稀なるは烟草ぎらひにして、野にも吸ひ山にも吸へば、たばこ入の風流日々に盛に、烟管の物ずき年々にあたらしくて、若輩の目を迷はせども、楠が金剛山の壁書を見て思ふに、たばこはさがぬを專とし、きせるはよく通り、灰吹はころばぬを最上とこそ。さらば色見えでうつろふ花の人心にも、畢竟そのものの本情實儀を失はざれとなり。

(一)西行の歌「路のべの清水ながるゝ柳蔭しばしとてこそ立留りつれ」

鶉衣前篇續

煙草説

夜道の旅のねぶたきとて、腰に茶瓶も提げられず、秋の寐覺の淋しきとて、棚の餅にも手のとゞかねば、只この烟草の友となることそ、琴、詩、酒の三つにもまさるべけれ。埃のもえ杭をさがしたるは、宰予が晝寐の目ざましにて、行燈に首延したるは、小侍從が待宵ならむ。達磨は九年の壁にむかひて炭團の重寶を悟り、西行は柳陰(一)にしばし火打の光を樂しむ。されば出女の長ぎせるは、夕暮の柱にもたれて口紅兀がさじと吸ひたる、少は心遣すらんを、船頭の短きせるは舳先に匍匐ひて、有明の月を詠めながら、大海へ吸殻投げたるよ、いかに心の晴やかならむ。やごとなき座敷に、緞子張の煙草盆をあまた數に引きわたしたるより、路次の待合に吸口包みたるは、憎からぬ風流なれど、さ

て、聊かそのあらましを附するのみ。

天明五年乙巳師走の下旬

護花關　六　林　識

題鶉衣後

也有翁は風雅の隱君子なり。予に莫逆の交を許され、つねに教をうくる事あつし。玆にまた東都の四方先生あり。予はるかにその芳名を慕ふ事久し。然るに此うづら衣は、翁少壯より老に至るまで、生涯四時の不斷著なりき。簞笥にをさめてかくし置、むざと人にはあたえられざりしを、東都の先生はいかにしてか聞つけられけむ、ある人にことづてて、その地合染色をも見ばやの望あり。翁生前傾蓋はあらざれども、高山流水の音しる人また外にやはあると、前津の舊庵へかけ込みて、そこを守れる文樵なる男に、さびたる鍵とらせて、押いれの引出しをさがし、文匣の底ふるひて、あまたの中に烝り垢のつかぬをかれこれと撰出し、速にこれを贈れり。日あらずして梓に上せられ、遠近の好士に一襲づつ、衣配せばやとの沙汰あり。誠に翁に於て隔世の知音といふべし。さぞな泉下にも雀躍して歡喜あらむ。そも四方先生の高誼は、海内みなしる所なり。也有翁のうへは、さきに發句集のはしにつたなき筆をそへぬれば、かたぐ\玆に贅せず。たゞ四方先生の此一擧をふかく感じ

(二)「關守」は「關寺」なるべし、關寺小町
(三)檜垣の老女
(四)蘇東坡に九相詩あり美人の死後の姿を九段にわけて詩に詠ず

さるに、昔今の美婦國色すら、身の終はみぐるしく、關守(二)におちぶれ、檜垣(三)にさまよひ、又は猿澤の池の藻屑にまとはれ、馬嵬が原の草葉にさらされて、果は東坡が九相(四)の見たてもうるさきに、たゞこの物の終ばかり、引幕の陰をもたのまず、あとに箒も雜巾もいらず、かきけすやうに失せにけるこそ、いふばかりなくめでたけれ。

右の文章享保の初より寛保の比まで、半掃菴著述の遺稿也。

張藩　六林　校

妖物論

世に妖物といふ物ありて、おほくは女となり兒とあらはれ、大坊主の取沙汰はきけど、月代そりたるはつひに聞かず。夜ばかり出づるはいかなるゆゑぞと、或人の問ひたるに、晝は例の子供のたかりて煩はしさにと答へたるぞ、さしあたりての名言なるべき。臆病者を相手にとれば、その藝ことに出來榮して、武功の人に出あはすれば、思ひの外のあやまちをかうむる。鬼は伯母に化けて腕をとりかへし、狐(一)は叔父にばけて畏の異見をいふ。誠に鬼が伯藏主になり、狐が伯母に化けたらんは、その姿をかしからじ。これらや正風自然の本姿なるべきをや。まづは狐狸のなすわざに落ちて、猫また河童はたま〳〵の沙汰なれども、その正體の穿鑿は、樂屋の見えておもしろからず。たゞ理屈なき妖物といふものこそ、ことにゆかしけれ。そも〳〵神は湯立にもうつらせ給ひ、佛は稱名に來迎なるを、此妖物は百物語に感應して、何とさだまれる姿なければ、三才圖會にものせられず、訓蒙圖彙の筆にも及ばず、たゞ赤表紙の小双紙にはづかしき姿はとゞめられける。

(一)吼噲の狐言

にさわがず、座頭の蛇におどろかざる、こぼれ幸なきにもあらず、よのつね聞きわたる茶のみがたりも、はじめ聞ける事の耳にのこらねば、世に板がへしといふ咄ありて、またかの例の大阪陣かと、若き人々はつきじろひて小便にも立つが中にも、我は何がし僧(二)正の時鳥ならねど、きく度にめづらしければ、げにと聞くかひある翁かなと、語る人は心ゆきても思ふべし。ましてつね〴〵手馴れ古せし文章物語の双紙も、去年見しことはことし覚えず、春よみし書は秋たど〳〵しく、又もくりかへし見る時は、只新なる文にむかふ心地して、あかず幾度も面白ければ、わづかに両三帙の書籍ありて、心の樂さらに盡くる事なし、むかし炎天に腹をさらしたる男は(三)、人にも折々物をとはれて、とりまがはし言ひたるべしと、いかにかしましき心かしけん、今は中々うれしき物わすれかな、とぞ言ひける。猶かの翁が家の集に、何の本歌をか取けるならむ。

わすれてはうちなげかるゝ夕べかなと(四)

物覚えよき人はよみしか

(二)永縁僧正「きく度に珍らしければ時鳥いつも初音の心地こそすれ」

(三)郝隆

(四)新古今集「一かな我のみ知りてすぐる月日を」

なじ醉鄕にあそぶべくば、いざ松の尾の山烏も、月にはもとのうかれ仲間と思ふべし。

花あらば花の留守せん下戸ひとり

物忘翁傳

わすれ草生ふる住吉のあたりに住みわびたる、物忘の翁あり。さるは健忘などいへる病の筋にはあらで、只身のおろかに生れつきて、物覺の疎なるにぞありける。昔は經學の道をもとひ聞き、作文和歌の席などにも、誘ふ人あれば交らひけれど、きく事習ふ事のさすがに面白しと思ふ物から、夕べに覺えしことゞも、朝ぼらけには漕ぎ行く舟の跡なくて、身にも心にものこる事すくなし。さればこれを書付け置かむと、しひて硯ならし机によれば、春の日は蝶鳥に心浮かれて過ぎ、秋の夜は虫なきていとねぶたし。かくてぞ老曾の森の草、かりそめの人の約束も、小指を結び手のひらにしるしても、行水の(一)數かくはかなさ、人もわらひても罪ゆるしつべし。されば翁のいへりける、身のとり所なきを思ふに、若きに數まへられしほどは、人やりならず恥かしかりしが、つんぼうの雷

(一)伊勢物語「行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」

(一)出來ぬ事を出來るふりして人に交る喩、韓非子に見ゆ

(二)古今集「あまのかる藻にすむ虫の我からと音をこそなかめ世をばうらみじ」

かずたゞ口をしく、忍ぶ草の忘られず、隔ゆくあとのみ惜まるれば、額に無待の二字を書きしも、たゞこの心に思ひよれるを、いざほとゝぎす我な疎みそとぞ。

斷レ酒辯

もとより李杜が酒腸なければ、上戸の目には下戸なりといへども、下戸なる人には上戸ともいはれて、酒に剛臆の座をわかてば、自ら飲む人の方にかずまへられて、南郭(一)が竽をふきけるほども、思へば四十の年にもちかし。されば衆人みな酒臭しと世に鼻覆ひたる心はしらず。まして五十にして非を知りしとか、賢き例には類も似ず。近きころいたましう酒のあたりけるまゝに、(二)藻にすむ虫と思ひたつ事ありて、試に一月の飲をたてば、身はなら柴の木下戸となりて、花のあした月の夕べ、かくてもあられけるものをと、はじめて夢のさめし心ぞする。けふより春の蝶の醉心をわすれ、秋のもみぢも茶の下にたきて、長く下戸の樂に老を待つべし。さもあれ此の誓ひ、みたらし川に御祓もせねば、たとへ八仙の一座なりとも、まねかば柳の青眼に交り、吸物さかなは人よりもあらして、お

(三)晉の王子猷竹を愛す

(四)梁の陶弘景松を愛す

(五)長明の歌「石川やせみの小川の清ければ月も流を尋ねてぞすむ」

て、平生座臥の一間となせるよりは、馴れ來つる眞木柱も我を忘れじを、我はまして馴れこし方の花もなつかしく風も忍ばしく、窓に雪みる夕べは、早梅色養の笑をふくみ、軒に月もる曉は、鷄聲盥漱の期を告げて、猶孝情の盡さざりし事を惜む。されば一室は八疊の南をうけて、床も押込ももと見しまゝの名殘とゞめつ。北に三疊の奧まりたる所、夏はあけわたして風を通はす便あり。中はまして冬籠によろし。茲に襖さし燈火をかゝげて、讀書靜座のかくれ所とす。その窓に子猷(三)が竹あり。陰を愛して秋にもきらず。その軒に弘景(四)が松あり。聲をたのしみて蚊遣にも手折らず。背戸には淵明が西疇ありて、雪間の若菜つみそむるより、苣も酢味噌にとぼしからず。茄子はもとより世に久しくて、且暮のあつものには少しあかるゝもつれなしや。午房はほそくとも大根は太きをいとはず。まして芋は地に叶ひて、いかめしきまでそよぎたち、豆も實入の折すぐさねば、せみの(五)小川の影ならずとも、月も此軒をたづねずやはあらむ。十日驅馳の騷がしきも、一日の閑にとりかへして、これだに治世の住みよきを知るにも、おはさぬ人のいかでかと、あ

思ふにも手の屆かぬは、具足著て灸を搔くより、猶不自由のくるしみあるべし。いでや戀といひ旅といふ。旅はかたちを勞して情は後なるべく、戀は情を先にして哀は姿に品をわかてば、内外いさゝか先後のたがひもあらむか。さらば句案の上にも、其心あらざらむや、おそるべし。かゝる說は、饒舌の罪おふべくして、只後の君子をも待つべきを、忍びもはてずして筆とり侍る。これもまた戀の闇に迷ふたぐひかも。

閑居記

忘るまじ、此一室は、古き世のわがゆかりなりけり。もとは城西の閑居にして、我曾祖母のいまそがりし、今は四十年の昔ならむ。その人おはせずなりて、鴉の軒をあらし、鼠の壁を穿ちしほどもやゝ年あり。そののち母の住み給へる方に、ふたゝび營みしつらひつれば、旦暮の定省に寒喧をとひ馴れしは、十年あまり三年ばかり、千代もと祈りしそのかひもなく、むなしく風木のかなしみを抱き、(一)桃李物いはぬ昔とはなりぬ。しかれば毀つに忍びず、今官邸に閑地あるにまかせ、暫くこゝに引き移し、猶(二)菅原や伏見の里もと契り置き

(一)朗詠「桃李不言春幾暮、烟霞無跡昔誰住」

(二)「いざこゝに我世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくも惜し」

（一〇）瘡毒の藥になるといふ

（一一）百韻の俳話に初八句を表といひてこゝには神祇釋敎戀無常の句を禁じたり

（一二）「我戀は松を時雨のそめかねて眞葛が原に風さわぐ也」

前に紙屑をひろへば、四條河原へ賣りたる子の大名に抱へられ、親までゆたかなる扶持方を得て、長がたなの銀こじりは、ひとへに我子の光ながら、むかしの念佛講中は、傘もどさぬ謗ものこるべし。これらや一生浮沈なれど、其源はたゞかりそめの檜原が露の契にはじまりけむ。しかるに色白なる疊さしありて、屋敷がたにて煙草入をもらひ、琴の指南の檢校が、月見の夜から出入とめられたるなど、あるはお寺から手を廻して、山歸來（一〇）買るゝも、飯のくはるゝ痞に、折々針立の泊りて行くも、わけを糺の神にとはゞ、表（一一）八句につかはれぬ事も有るべし。又は風俗にいにしへ今の違もありて、律義なる漢帝は、反魂香をたきて夜すがら夫人の面影をしたひ、榮耀なる隠居は地黄丸をのみて、季時に飯焼の器量をえらむ。猫にひかれて見そめし夕べは、玉だれの隔をかこち、蚤にくはれて待ちわびし夜は、古夜著のうらみあかすなど、自ら貴賤のけぢめなきにも有るべからず。慈鎭和尚（一二）の眞葛が原も、破戒の罪の謗もなければ、其身に戀をせよとにはあらず、戀に心の覺束なかりせば、前句に對して趣向はありても、句作も道具も取つくかたなく、

佛は、色をも香をもしる人やしるらん。まして江戸櫻の花やかに、人の心の張もつよく、上野淺草の花ぐもりより、箕の輪の雨の名にぬれて、土手の露ふむ戸なし駕より、今戸舟ののこがれ寄るこそ、あそびに巾の廣がり安きは、さしも武藏野の深入する人ぞ少なからじ。波にうかるゝうかれめ、草に音をなく辻君、白人、比丘尼、野郎、影間、それとて賣かふものは更なり、御油赤坂の留め女さへ、をかしからぬ事もよく笑ひで、ねよげにみゆる旅人に、なじみの文よみてもらひ、さし足袋賣りたるえにしより、七日つゞしみし始末もやぶれて、一夜の露に落ちやすきは、いさ此道の習ならぬか。それよりの世のさま、人しれぬ事のみ多き中に、お比丘尼のかたみわけに、似げなき文の簞笥から出たるも、若旦那の鼻毛ぬきを、物縫の部屋に見付けたるも、みな〳〵跡の祭なれど、物いひさがなき世にしあれば、浮名は千里に立ち安きを、蚊をやく紙燭にいねわるき蚊屋をすかし、小角豆つむ垣根に隣の行水をのぞくなど、わづかに蟻穴のあやまり心ながら、身をはふらかす端ともなるべしや。さればこそ吳服屋の手代は、思はぬ濡衣著て稻荷の

（五）川東のかくれ遊び、川は加茂川
（六）島原
（七）新町は大坂乳守は堺
（八）兩所とも奈良
（九）長崎

夫婦に立ちならびたる中をのみいふ物かは。逢はでよめりし娘を思ひ、こぶとき乳母をかこち、長廊下にまどひ明し、向ひの女房を詠めやり、浅茅が宿に後家忍ぶこそ、色このむとはいはめ。ことに都のおそるべき、所々に遊里の軒をきしれば、しばしこそ親の關守もかたけれ、物よみ諸のつれに囁かれ、東は（五）朝日の陰なる遊びもつのれば、西（六）にかたむき安く、もらひのなりし夜は面白く、口説にあけし曉はをかしく、うそは誠にかくれ、根は情に負けてより、人のいさめ世のそしりも、行過の古みに見下し、宿はお留守の夢の浮橋、程なくとだえして、奢るものなど久しからむや、秋風内證に吹きわたり、出口の柳見すぼげに散り初むるより、丹波口の茶屋も見ぬ顔して、身をこりずまの浦ならずも、後に山の借金負となれば、今出川の家も質に流れ、姉が小路の妹聟よりよすが求めて、今ぞ落日の境に下り、わづか二三年の夢茫然とさめて、思へば千束の文は何の爲になりけるぞや。昔の孔子も今の伯父坊も、異見はこゝの事なるべし。新町（七）乳守の夕暮、木（八）辻鴨川の曙、唐土ちかき丸山（九）とても、おなじ戀風は吹きかよへど、猶とりどりに加はる

戀説

かはゆき子も旅はさせよといひ、戀は道ならぬ道もあれば、ふみ迷ふ佐野の舟ばし(一)親もさけて、あだし心は、いさ神とてもいさめずやはあらむ。さてしも世に絶えぬすさびにて、身にこそ人の戒むべけれ、そのくまぐは尋ねわけてぞ、物の哀も知る端なるべきを、歌にはもとより專にして、荻の上葉にとはぬを恨み、有明の月に別れをかこつより、沖の石に涙をかけ、衞士のたく火に思ひをよそへて、たとへ雲かゝる高間の山も、浪よする高師の濱も、てには詞に品はかざれども、逢ふの別るゝの忍ぶぞ恨むぞと、たゞ一筋の情のみをいひて、女の男を思ふやらむ、男の女を慕ふやらむ、姿に千變の品はわかれず。俳諧は萬化にくだけて、老若貴賤をわかつより、姿に自由の働あれば、井筒がもと(二)のうなゐ子の、手鞠もらうたる情わすれず、(三)源内侍の十夜參りは、紅裏に名をたてて、逢ふの待つのと詞にはもたれず、其句の姿に戀を見すれば、戀を一句で捨る事歟と、他門の初心の迷ふもこゝならん。しかればかの法師(四)の筆にもかける。まこと男女の情は、雛の

(一)萬葉集「上野の佐野の舟橋とりはなし親はさくれど我はさかるがへ」

(二)幼戀に伊勢物語の筒井筒の物語をきかす

(三)源氏物語の浮氣婆をひきて老女の戀をきかす

(四)兼好

（一）白鼠は福の神のつかはしめ

もしはさる能畫の筆して、四條のすゞみ、淸水の花見など、賑しき繪の屛風襖にもあらば、あまたの人の夜ごとに出でて、扶持方もつゞき難かるべし。我袋戸の猫は、たとへすゝけて千年ふるとも、赤手拭の踊もしらず、まして肴の棚さがしもせねば、主の爲は中々心やすき方ならむを、朧月夜にうかれぬのみぞ。玉の巵の底なしとやそしられぬべき。世につたなき筆の虎をゑがきては、必猫なりと笑はるれば、われ又猫をうつさば虎にも似るべきを、杓子にはちひさく耳かきには大きなりと、かの柹の木の昔咄ならん。かくいへば、鼠の爲とてもよしなし事に似たれども、いでや鼠にも白黑の賢愚ありて、子祭の白鼠（一）はあるけもいざ憎むまじければ、かしこく知りて避けぬもよし。心の鬼の惡鼠のみ、これだにも氣づかふべきは、落武者の薄の穗を人なりと見る類にて、少はそれよりも近かるべし。さらば牡丹花下に蝶を驚かさむよりは、此棚にねぶりてかのわる鼠を警むべしと、かれに示の一句にいはく、

ゆだんすな鼠の名にも廿日草

世の掟こそ有がたき例なれ。

かる人の手によごれけり金銀花

訪二剃髪一辭

五夕剃髪して桐の坊といへりとぞ。まづは殊勝の法師ぶり、名を聞くよりやがて俤の推しはからるれ。されども十徳(一)はきるやきぬや、鰒汁はくふやらん、悉しき便はいまだ聞かず。

襟垢の世をぬぎ捨て紙衣かな

猫自畫贊

此小襖の白くてさう〲しきに、物かきてえさせよとあるに、更に何かくべしとも覺えず。されど辭しても許るまじきかたを早く知りて、よしさらば、此棚に鼠のあれぬまじなひせむと、をこがましく筆とりてかきたるは何ぞ。我は猫なりと思へども、大宮人はいかにいふらん。むかし金岡がかきたる萩の戸の馬は、よる〲萩を喰あらしたるとか。

(一)立てば羽織のごとく、すわれば衣のごとく、よりて十徳といふとぞ

世の立ちがたきにや、二季の臺所には掛乞の衆生來りて、色衣の長老これが爲にをがみ給へば、又ある寺には有德の知識ありて、これはこちから借しつけて、きりの算用滯れば、貧なる檀方を呵責し給ふ。かれもこれも、ともに佛の御心にはたがふらむとぞ覺ゆる。そも顏子は陋巷にありて、いかきの飯瓢簞酒に貧の樂をあらためずとや。さるを今の世の人々、借金の山なして、是を苦にすれば限なし、百までいきぬ身を持て、さのみは心をかなしめむや、一寸さきは闇の世ぞと、放言に腹うちたゝきて、我は貧に安んじたりなど、おなじ貧樂の引ごとにいふは、やるせなき心のはらへならめど、實は雲水の間違なり。なべて世にある人の、衣服調度をはじめて、人なみならねば恥かしとて、その爲に金をかりて、世上の恥はつくらふらめど、人の物をかりてかへさぬを恥と思はざるは、ただ傾城の客に向ひて、飯くふ口もとを恥かしがれど、うそつく口は恥ぢざるにおなじ。かくいへる我も借らぬにてはなし。かす人だにあらば、誰とてもかりのうき世に、金銀道具はいふに及ばず、かり親かり養子も勝手次第にて、女房ばかりはかりひきのならぬ、

らねど、ことしは齢も四十の老ちかく、しきりに懐舊感慨の情に忍びず。旅の賦一章を書きて寓居の筆をつひやすも、誠はあぢきなきすさびなるべし。

借物の辯

久かたの月だに日の光をかりて照れば、露また月の光をかりて、貫きとめぬ玉とも散るなり。むかし何某の尊の兄(一)の鈎をかり給ひしより、まして人代に及んで一切の道具を借るに、かすものも互なれど、砥の挽臼のといへるたぐひは、かすたびに脊ひきく、鰹ぶしはかりられて痩せてもどるこそ哀れなれ。金銀ばかりは德つきて戻れば、もとかる事の難きにはあらぬを、かへす事のかたきより、今は借る事だにたやすからず。むかし男(二)ありて、身代もならの京春日の里にかす人ありて、かりにいにけるより、やごとなき雲の上人も、かりにだにやは(三)君は來ざらんと、露ふか草のふか入し給へば、鬼のやうなる武夫も、霜月比よりは地藏顔して、人にたのむのかりがねは、尾羽うちからして、春來ても越路にかへらず、かりの宿りに心とむなと、人をだにいさむる出家達も、借らでは現

(一)彦火々出見尊の火闌降尊の鈎を借りて失ひし神代の話

(二)伊勢物語の初段の詞をもじる

(三)上の句は「野とならば鶉となきて年は經ん」

（一一）建禮門院の六道の物語、平家物語にあり

六部にさへきたなまれぬ。誠に一生涯のありさま、觀ずればみな旅にして、世を旅の空にたとへたるは、假の住居といふのみにあらず。樂みも苦しみも行く先に見盡して、たとへ女院の六道の沙汰とても、是に漏れざるべし。たゞ、俳諧師のなる果のみぞ、棄恩入無爲のしめしもまたず、ふつゝかにあたま丸めて、吉野初瀨の春をゆかしみ、松島象潟の浪にうかれ廻り、三文ねぎりて戻り馬にはぐれ、乘合なくてわたし舟も出さず、誰が爲ならぬ雨にもぬれ、月にも道法をつもりちがへて、氣の毒の山かげに、一夜は一つ家の情をかりて、すゝき折たく圍爐裏ばたに膝ざらあぶりながら、虫歯やむ子にまじなひ敎へて、稗團子のもてなしにあふ。あるはしるべの古寺を尋ぬれば、和尙は漢和もすこしなりて、足のぬけたる碁盤になぐさみ、五六日の名殘をしまれて、松茸に喰あきたるなど、水雲萬里をうかれありきて、ほだしなき身の安さながら、そこの下人を孫平とは、我伯母聟の名なるものをと、ふと故鄕の戀しき折もあるべし。われ仕官十年の間、木曾路東海道の繰言ながら、のぼれば行程千四十里ばかり、猶ながらへていかばかりの旅行もし

赤腹は巻わらにさし、梅澤の鮟鱇は鍵にかけて軒につるす。されば日よりは天道次第ながら、さしも大井川は膝たけにこして、思はぬ酒匂に二日留められたる、荒井の茶屋に鰻のあたらしき日は親の精進にあたりて、ひしげたる小家に日越の燒餅をくふなど、昨日は絹賣に道づれして、大濱に溫飩をふるまはれ、今日はぬけ參の介抱して、天龍の川風に新らしき笠をとられたる、哀樂日々に移りかはりて、幸と不幸は首途の吉日にもよらぬなるべし。旅に哀を知るとは、その行客の身の上のみにあらず、駕かる人はかく人の達者を羨めども、駕かく人はかる人の錢をうらやむ。(九)小揚の合言葉はいつの世よりの洒落ならん。やみげんことは三十五文にして、またと坂東とは、二十八文なるべし。朝は鳥羽の早追にはしり、晚は姬路の女中をつりて、身は定なきむらしぐれ、雲助のゆく末もいとこゝろもとなし。疝氣陰囊の川越の首に髭奴のまたがりて、及ばぬ富士をながめたるも、片目の馬かたの、座當のせてくらがり峠こすも、いづれ世わたりの悲しからぬかは。それが中にも、口の過ぎたる船頭は大坂番(一〇)にたゝかれ、鼻の落ちたる餠屋は六十

（八）丁稚小僧などの主人に無斷にて伊勢參宮するもの

（九）やとひ人足

（一〇）大阪城の守護の爲に上下する武士

者は取かへ錢の勘定にのゝしる。人よぶ手拍子のならぬこそことに侘びしけれ。月おち馬いなゝき、草鞋うり燒酎うり、按摩けんぴきの聲もをさまりて後、拍子木丁々として、これらはいかめしき旅の一體なり。すべて旅籠屋の庭の氣色は、蘇鐵つくり、松を植ゑぬはなし。畑峠(五)には山水をしかけ、大磯小田原には小石をまきちらす。塀にしのびがへしはありながら、大戸のかけがねはひずみてかゝらず。湯殿は無性にひろくて晝鼠を迷はし、雪隱の疊は座敷よりつらなりて、張付の裏梅もあらぬ匂ひに破れかゝり。蛩の啼くこそ哀なれ。膳にはいなだの鱠幽かに、鰹のやき物、大根菜のあへ物、壺皿の豆腐にきざみ昆布の味も覺束なく、箸のふときはいく度もけづり直さんとにや、いとうるさし。出女を赤前垂とは、都にちかき名のみなるべし。宵は返辭の尻輕に立廻り、鼻歌に雨戸はしらかすも、今宵いかなるさゝやきの橋(六)をかけたる契もとこそゆかしけれ。沓草鞋笠の頭甲は、ゆく先々の店につるし、あやしのはなれ屋には、竹につけて道ばたにも出せり。赤表紙の道中記(七)、おもりに鐵錭をさけ、椢のぼた餠にはすゝ黑き雑巾を覆ふ。箱根の

(五)箱根山中の一小驛
(六)内々の約束したる
(七)旅行案内

(二)宇津谷峠の名物
(三)旅の賦、風俗文選
(四)出女の說、同上

脚の頭陀をうるほし、冬は鈴鹿の吹雪に飛脚の足を定めかねたる、いづれもとり〴〵の哀なるべし。五十三次の紀行は、あまねく人の言ひ古せど、多くは歌よみ連歌師のぬめりに、小夜の中山に旅寐の詞をつゞけ、宇津の山邊の蔦にまとはりて、十團子(二)のさびしさは知らず。さらねば寺社舊跡の由來書、道のり方角の詮義に落ちて、猶俳諧に拾ふべきものは殘れり。許六が賦に、(三)馬方の境界を盡し、木導が說に、(四)出女の盛衰を述べたり。强ひてそのまねびせんとにはあらねど、例の腹ふくるゝわざなればならし。旅の哀といへば西行の笠しめつけ、宗祇の草鞋の跡を思へど、大名の往來とても、たとへ煙草盆の銀金物はかゞやけど、竟日の籠駕に足をいため、緞子の夜著に雨もりを聞くも、旅ならずしてはいかでかは。いでや本陣の夕暮は、たて砂に幕をひるがへし、すそする馬の尻をならべ、亭主が鬢はそゝけながら、上下に泥足をすゝぎて、塗臺に小鯛のはね廻りたるは、さすがに草枕とは言ひがたかるべし。下宿のさまは引劣りて、見せ先に居風呂ふすぼり、小ぐらき行灯の陰とり廻して、ねころぶものは、木枕に虱をつぶし、まだ寐ぬ

雞肋堂にめでたき德利あり。もとより其名を此童と呼て、あけくれの愛をかうぶりしに、今年また一つを求出て、樂老とゐぼし著せけるとぞ。されば昔男ありけり。(一)井筒の女の底意なくかたらひける後に、高安の郡に行きかよふ所いで來にけるは、けには心の花のうつろひて、ます方に引かるゝあだし心ならむにや。これはその類にはあらで、主人の腹の量なきに、此童も折々の宵寐にこりて、たゞこれをもて彼をたすけ、彼をもて此がたすけとなせれば、棚に兩雄の爭もなく、此童に月をむかへては、此樂老に月ををしむ。肴核すでに狼藉して、水雜炊のやゝしらむ比、此童は膝にねころべば、樂老は枕とこけて、主人の鼾の響きわたり、そこの柳もねぶり添へたらむは、おもしろき四睡の圖なるべし。

旅賦

春は乘かけの鈴なりて、浴衣染の花やかなるは、參宮の都道者か。夏は五月雨のかきたれて、(一)金谷島田に大名の市をなし、秋は木曾路の木々も紅葉して、猿三聲の淚ひとり行

(一)伊勢物語の筒井筒の故事

(一)天龍川の出水によりて川どめになれる也

（一二）晉の惠遠法師廬山の東村寺にこもつて足曾て虎溪を過ぎざりし故事

（一三）晉の王子猷竹を愛して曰く「何可ニ一日無ニ此君一乎」

は乏しくとも、虎溪（一二）の禁足は忘るゝに足りぬべし。なほ此物の德を思ふに、斗樽は座敷に場をとれば、これが類にはいふべからず。あるはちろりといひ、間鍋といひ、前後左右のむづかしみありて、弦によそほひ袴をかけて、實は心の解けざる方もあるべきに、たゞ此物の口を空樣になして、竝み居る人の中に出ても、いづれに向ふともなく、誰にそむくともなき、姿をも備ふなるべし。此主これに名を呼ばむことを求む。むかし子猷（一三）が竹は見ぬ日ありとも、さてやみぬべし。此主のこの物における、一日も無くてはあらざるべく、つねに膝下に召しまつはさるれば、かの此君の名の古きを尋ねて、此童と呼んにいかゞ有るべき。されば世の近侍の童は、立居の尻のかろきを譽れども、此童の奉公振は、たゞ何時までも何時まで草の、根づよく尻の重からむこそ、主人の心には叶ふなるべけれ。

月に雪に花に德利の四方面

樂老記

れるが中にも、風雅のことに水に似て世々に盡さず、水に似て時々にあらたなるも、汲みて知らばこゝに明かなるべきを。されば頃日人につたへて予に此銘を求めらる。我きく湯の盤に銘して、日々に新なり(一)とは、もとの汚を濯ひ去りて、心も口々に清かれとや。まして此物は、飯くひ酒のむすさびにも、常に柄杓を手に觸るれば、しばらく俳諧のおかしみを離れて、これに時々新の三字を銘せむに、かの盤の銘にもまさりて、先聖もたしかにうなづき給ふべし。世はよし五月雨のはれみ曇りみ、滄浪(二)の水は濁るとも、ひとつ此水の底清からましかば、纓を洗ひ耳をすゝぎて、長く閑居の契をもむすべとぞ。

汲かへてもとの月あり手水鉢

名ニ徳利ニ説

つくねんと靜なる時、泥塑人(一)のごとしとは、賢徳の姿をほめて、此物にはあらざれども、親しめば一團の和氣あたゝかに、雪の夜嵐も身にしまざるは、これが爲の喩にもいふべかりける。まして備前の名産にして、六升ばかりを入るゝと聞けば、たとへ八仙の客に

(一)大學「湯之盤銘曰、苟日新、日々新、又日新」

(二)屈原漁父辭に「滄浪之水清兮、可ミ以濯ニ吾纓ニ」

(一)程子語錄に「謝顯道云、明道先生如ニ泥塑人ー、及レ接レ人、渾是一團和氣」

（一二）論語に「非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動」

ぬ山とも稱すべけむ。されば恐るべき人心、むかし聖賢のをしへにも、視聽言動（一二）の四つばかりをあげて、鼻に警のゆるがせなるより、世に傲のきざし起りて、寵にほこる妾小姓の、おほくは主を鼻にかけて、心にあはぬ傍輩をも鼻にあしらふ高ぶりより、すでに鼻つくあやまちも仕出でぬる。えならぬかをりにひかれ寄る、色のいましめは尙更にして、女のよれる髪筋には、鼻の高き大象もつながれ、あほうの延ばせる鼻毛には、蜻蛉もつらるゝ例、わざはひ蕭墻より起るときけば、つゝしむべきは鼻のさきなるべし。

手水鉢銘

いでや此手水鉢に、若水汲めるあしたより、怠らず立ちなれて、齒みがく楊の枝をうつし、軒端の梅のひとへに淸かれと、時に口すゝぎ時に手洗ひて、洗はゞ心の塵もなどかは去らざらむ。さるに此亭に愛せる鉢は、石なるや、銅なるや、もしは陶なるや、我さらに知らねども、水はもとより方圓の鉢にしたがひ、鉢はたゞあるじの物好によるべし。見ずや、此水の四時に絶えずして、しかも朝ごとにもとの水にあらず。萬理のこれに籠

鶉衣前篇下

鼻箴

しのぶの浦の見る目はもとより、耳とも口ともつゞけたらむ。歌にもさのみけやけからず。如何なれば鼻といふ名の、ひとへに俳諧にはとゞまりぬらむ。末摘花(一)のわる口も、あからさまには詠みなし給はず、そのおかしみこそ俳諧には嬉しけれ。さりとて臍の尻のとて、いやしむ類の物にもあらず。そも猿田彦の御鼻は、神代一番の見事さにて、愛宕高雄の天狗達も、自慢は鼻にあらはれながら、杉の木の間に露霜のおきどころなくていかに寒からむ。見よや、人の老いゆけば、目は遠山の霞棚引き耳には鳥蟲の聲もうとく、口は冬がれの歯も落ちて、盛衰のあたり悲を催す。たとへ百年のつくも髪だに、鼻ばかりはかけもやらず、つぶれて用をかく事もなし。ひとり常磐の操を守りて、時しら

(一)「なつかしき色とはなしに何に此末摘花を袖にふれけむ」源氏が常陸宮の姫君の鼻の赤きをかこちてよめる歌。

しにて、唐人の耳には日本人の寐言なるべし。されば夢の得失を思ふに、かの邯鄲の枕はあまり古ければ、更に言はず。蝶となりて(一)漆園にたはぶれ、蟻にひかれて(二)槐國にあそぶ。かしこき雲の上人は、うば玉の夜の衣をかへしては、(三)銀いらずの戀をも巧むらん。あるは葛城の神にもかぎらず、晝は見しらぬ神々も、七日滿ずるあけがたの枕上には、まみえさせ給ふなる。かゝるたつとき夢の告を、佛はいかなれば例の世をはかなみて、夢幻泡影のたとへごとより、人は現も夢の部に入れて、世中を厭ふまでこそうたてけれ。とても夢現のおなじものならば、夢を現にかぞへ入れて、起きて樂しみ寐て樂しまば、五十年の月日をわたるも、百年の算用にはあふべきをや。鬼神に横道なし、傾城にまことなし、聖人に夢なしとは、いつの世に誰か定めたるぞ。鬼神は聞いてよろこび、傾城は聞いて腹立つらむも、聖人ばかりは何とも思しめさず。さるは冷にも熱にもならねば、どちらでもよしとの御心こそ世に有難けれ。

(一)莊子の夢
(二)淳于棼の夢
(三)衣をうらがへして寐れば戀しき人を夢に見るといふ諺あり也

藏人傳

天に信天翁あり、地にはあすならふといふ木あれば、人にも此男ありて、かの世にむかしよりいひわたれる、

　世中にねたほど樂はなきものを知らで阿呆が起きてはたらく

とよめる歌の、これが返しとはなくて、

　はたらかで起て居る身の氣樂さよ寐てもあほうは物思ふ世に

とよめりけるを、何がし(一)の大將は大きに此歌におどろきて、物ぐさの藏人と召されけるより、世にはなまかはの藏人ともよぶ事になむ。されば此歌の心は、その藏人ならで知りがたし。たゞ藏人もしらずしてや詠みけむ。

　寐てや樂起てや安き雪の竹

(一)德大寺實定「物かはと」の歌をよめる藏人を「物かはの藏人」とよびし源平盛衰記の故事

夢辨

節分の夜の寶舟に一年の幸を待つより、一富士二鷹の品定も、これらは和朝のならは

いかさまに四たびはくどし村しぐれ

連衆に酒好ありて、此箇條の掟にははなはだ苦しむ。よつて了簡の一句をしめす。

狐さへ五こんとどもる霜夜かな

一 菓子は其日のあるに任す。まづは煎豆に定むべし。

煎豆に音こきまぜてあられ哉

一 燈は行燈にて事たりぬべし。

蠟燭はたつといふ名の寒さかな

右之條々、今日よりかたく守るべし。亭主に卑下の辭なければ、客に輕薄の挨拶も古し。此約束を空になして、厚味を求むる輩あらば、後の世蝿とむまれて、風雅に不信第一の人とすべし。

元文元年

誓文はたてぬ筈なり神無月

の齢をたもち、正成が旗に忍がけば、十萬騎の敵をなびかす、癡人はこのために粗み、愚將はかの功をうらやむとも、それだに花の心にや高ぶらん。菊よ、こゝろみに物とはむ。その肥えたるや慕はしき、この瘦せたるやうれしき。よしさらば答へずとも、汝が心われよく知りぬとさゝやけば、秋風の物いはぬ花をぞうなづかせける。

我菊や尺とりむしの手もからず

俳席之掟

一　飯は三石(一)の掟を守るべし。

茶の花の比をなら茶も盛かな

一　汁一つ菜一つ、酒の肴も一つに限りて、鰹に精進の咎をのがるべし。夏は必ず茄子を用ひ、豆腐は三季にわたるべし。香の物は論ずるにたらず。

昔も香もせぬや豆腐の冬籠

一　酒は膳の前後をすべて、三盃を過ぐべからず。さるから、盃は得道具をゆるすべし。

(一)奈良茶は茶粥に限るべしと也

うちきせたらむは、小夜衣の名に立つもうしと、あはれに見しまゝに、物よくかく人語らひて、これを閑居の額となしぬ。

たれ雜炊に落葉たきぬる

すゝけし昔とへどこたへず

われわれ鍋の世をのがれなば

よし綴蓋の汝とあそばむ

問レ菊辭

植ゑすてし菊の自らに瘦せ自らにひらきて、赤きはたゞあかく、白きはたゞ白菊なり。今や世上の富家にかしづかれて、箱に戸ざされ曲尺にあてられ、花は年々にあらたなる、其全盛を人にたとへば、傾城といへるものの、うき節の里に賣られ、高雄奥州と時めき立ちて、心にあらぬ人にめでられ、あだなる枕に起きふす類、がゝれとてしもたらちねはそだてじ、かゝれとてやは雨露はめぐまむ。むかし彭祖の盃にくめば、八百歲

(四)汪信民の言

(一)芭蕉の歌「あみざこを升にはかりて賣る人は買ふ人よりも哀なりけり」

むべし。さるも貧富は等しからず、我をそなたへ招き給はむに、膏粱珍味の嫌ならねば、よき魚よき肴はかへても給はらむ。まして茶ばかり給はるとも、吾門のあそびならば、はたかこちまゐらせじ。けふの無馳走は紫隱里の掟にして、菜根咬得ば百事なすべしを、(四)貧の風雅の方人とはし侍るなり。

魚うりの聲よそにふけ青嵐

鍋蓋額贊

武藏にかりの旅居せし比、あやしの店に求め出せるものあり。さるは鶯やほしからむ小鍋の蓋なりけり。算は落て釘の跡のこり、月もるばかりの節穴ありて、いと古うすゝけたる色のわざとならず。その侘しさのほどを思ふに、獨坊主の佛供をや調じけむ、借屋の婆の娵をやふすべけむ、是をたづきの代なしける哀は、(一)あみざこ賣る人にもまさりて思はるゝに、今はたこれを買取りし我を、あるじのいかに見なしぬらむ。世に擂鉢に蓋なきと諷はるゝを、かれは蓋のみありて、みはいづこにか引きわかれし。今更に異鍋に

（一）料理の名人園の別當入道鯉を料理したる話徒然草
（二）晉の張翰秋風の起るにつけて故郷の鱠の味を思ひ辭職してかへる
（三）曾我殿原は貧乏者の喩

ず。やゝ銀河の水東西にながれ、生憎のやもめ烏、ひま白き松に啼きかはせば、さしも所せき船もみないづち行けん、霧わたるそなたに漕ぎきえて、瓜の皮のみたゞよふ曉の名殘こそ、見しには引きかへてまた哀なれ。

謝二無馳走一辭

こよひのあるじ野有、人々に謝してまうす。ことゞゝしく招きまゐらせて、汁に園殿の（一）鯉も料らず、皿に張翰（二）が鱠も盛らず、夜食は例の奈良茶に濁らして、豆腐に鰹の花の名はちらせど、何をよし野の色香とはめでむ。さばれ旅路の椎の葉にもる、ものの寂しき山家にもあらず、肴は宮の夕あがりを荷ひつれ、八百屋に二月の瓜をならぶれば、自由はこゝも都ながら、もとより曾我（三）の内證にして、いとなみとゝなふに侘しければなり。人々俳諧に信ましまさば、いざ是をしもにくみ給ふな。いでやかの土器の味噌を思し棄て給はずは、風雅に喰寄の他人むきを離れ、けふを饂菜の矢合せとして、雨の夕べ雪のあした、鍋擂粉木はさわがせずとも、いざと心のむかふにまかせて、折々の廻状をはじ

（二）舟饅頭、舟に情を賣る賤婦

（三）遊廓

屋形の前には花火の光もみぢを散し、吉野屋が行燈の影には樺燒のけぶり花よりも馥し。幕の内の舞子は鶯聲聞にゆかしく、舳先の生醉は衢足みるにあぶなし。伽羅薫物のかをり心ときめきて、吸物かよふ振袖は、燭臺の透影いとわかく、大名の次の間には、袴著たる物眞似あり、女中の酒の座には、頭巾かぶりし醫者坊あり。かしこにどよむ大笑ひは、いかなる興にかあらん。こゝに船頭のいさかふは、何の理屈もなき事なり。老人の碁會は仙家のかげをうつし、役者の聲色は芝居もこゝに浮ぶかとうたがふ。卵子卵子、田樂田樂、瓜西瓜、三味の長絲賣る聲、西南にかしかましく東北に漕ぎめぐる。風呂をたく船、酒をうる船、菓子にあらぬ饅頭（二）あり、鼓にあはぬ曲舞あり。あるは三圍深川にうかれ、あるは兩國の橋にとゞまる。遊ぶ姿こと〴〵なれども、樂しむ心二つならず。それが中にも、猶淺草の淺からぬ契たがへじ、待乳山の待ちやわぶらんと、更け行く空に漕ぎわかれて、里（三）にひかるゝ人もあるべし。さるはいかならむ遊びも、同じ心に面をならべて見もし聞かばと、こゝにだに物のかなしく、事たらはぬ心地せむも、はた憎から

ありける。

　　ほうろくや棚から下りる秋の暮

隅田川涼賦

水無月のあつさの、今日ことにさめかたければ、いざ隅田の川風に扇やすめばやと、牛込といへる所より舟出して、「まづ涼しおし出す舟に蘆の音」などたはぶれつゝ竿を回らすに、舟は素より一葉のこと〴〵しからず、破綻も場どらぬ趣向ながら、けふの乘合に手なみしれる曲者もあればと、樽一つはいかめしくつきすゑたり。數々の橋こえ過ぎ、兩國の河づらに漕ぎ出づれば、風はかたびらの袖寒きまで吹かへすは、秋もたゞこの水上より立ち初むるなるべし。椎の木(一)の蟬日ぐらし、けふも暮れぬと啼きすさみ、岸の茶屋々々火影を爭ふほど、今戸あたりのかけ船も纜を解き、絲竹をならして己が樣々にうかべ出でぬ。京に四條の床をならぶるより、爰に百艘のふなばたを連ねたるは、誠に都鳥の目にも恥ぢざるべし。舟として諷はざるはなく、人として狂せざるなし。高雄丸の

(一)隅田川の東岸松平豐後守の邸に名高き椎の木ありし也。

（一）宋の茶人
（二）能の間の狂言に「鞨鼓炮烙」あり
（三）歐陽修に「憎蒼蠅賦」あり
（四）炮烙頭巾

しまれども、その德を論ずればいとたふとし。鍋釜は眷族も多くわかれて、藥鍋などと號するは、銀に毛彫の繪樣にほこり、數奇の茶釜は天明蘆屋の作にたふとまれ、探幽が下繪にあたへを高ぶれば、臺所の太郎二郎も、おのづから氏族の榮に心傲はするなるべし。炮烙は一類もなく、世にかゝづらふほだしも持たず、盧仝（一）が夜なべに茶をほうじて、雨夜のさびに伴ひ、炙變の豆のから〳〵となる時は、隣のやもめの耳を悅ばす。いでや是を荷ふ商人は、程朱の說をきかざれども、常に身をつゝしみて、細道假橋を大足にはこばず、市中に股はくゞれども、深くいさかひをたしなめば、馬士船頭の氣隨には似ざらん。なげくべきは本間の狂言に、鞨鼓（二）と威勢をあらそひ、又は歐陽公（三）が工夫より黐といふものを尻にぬられて、蠅をとる道具となれるは、己が心にもあらで似氣なきわざながら、かの足鼎の醉狂人の鼻をかゝし、石川五右衛門が釜いりより論ずれば、罪は至て輕かるべし。しかるに和田殿の大磯がよひに、頭巾（四）の名に物ずかれてより、今に老人の寵愛にあひて、常にきんか頭にいたゞかるれば、かれは藥鑵の下に立たむ事かたくなん

めぬにもあちねど、うつら〳〵と夢見夢みず、花に朝日のにほひたるも、松に有明の殘りたらむも、かの閨ながら思へるは、起きてみるにも勝るべけれ。いつもの豆腐賣の聲行過ぎて、車井の走るおと、雀の餌はみにあつまり鳴くなど、幽閑の情にたへぬ折しも、けうとき物申の聲に胸つぶれて、雨戸一本おしあけたれば、空は四つ比にもたけ過ぎて、さし心得たる童のくみ置きたる手水湯は、(二)名殘なくさめきりて、その奉公の水になるもかはゆし。さればかしごげに朝起して、一日目のさめがたく、晝寐に光陰を盜まむより、枕序に朝寐たるこそましならめとさとりて、此睡工夫をなす事になむ有ける。さはいへ秋の夜長になりて、又朝起の面白き時は、たちまち朝起の男と呼ばるべければ、釋迦も孔子もしばし氣長に見ゆるし給ふべし。

鶯を夜にして聞くあさ寐かな

炮烙贊

一生をつくろひなくその日ぐらしに覺えたる、炮烙といふものは、圍爐裏のもとにいや

そ瘤とられたる天下となりて、萬民泰平を謳ひ、丹後丹波の境なる城跡も松風さびしく、安達が原の黒塚も草茫々として、とふ人なければ、今はたゞ棟瓦に佛をのこし、大津繪にわらはれて、下戸と鬼とはなき世とぞなりける。

朝寐辭

神儒佛の教さまぐ\なる中に、上はかしこき朝政より、下は十露盤のせはしき世渡り、市の出買のその身過まで、朝寐せよとの教こそなけれ。まして鷄はじめて鳴いてより、忠臣は蚊にせゝられて、たばこに明ゆく鐘をかぞふとや。げにも唐帝の玉妃に腰うたせて、飯時もわすれ給ひたらむ、又は若息子の色酒にあそび過して、胸ふくれ頭おもくて、いつも朝顔の花をしらず、萬事は手代まかせならんは、身代破滅のはじまりなるべし。さばれ世にする事なき姑の、佛なぶりの朝起に、おも屋の家うちに謗られたらむより、これらは炬燵に火を起す間を、うち寐がへりてもあれかし。されば用をかきても寐よとにはあらねど、三四五月の短夜に、枕加減のよき比は、朝寐こそ又をかしけれ。必ず目のさ

(一)鍾馗が鬼を對治する畫は玄宗皇帝の事にもとづく、楊貴妃の枕に忍びたりとは也有の俳諧手段也

(二)紀友雄天智帝の勅を受けて鈴鹿山の鬼神を征伐せし時送りし歌「草も木もわが大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき」

(三)伊勢物語の芥川の段「女をば鬼早一口にくひてけり」

むかしは佛の國に住みしが、舍利をぬすみし科により、天竺牢人の部になりて、唐土へわたりしを、鬼も十八のあだし心より、楊貴妃(一)の枕にしのびて、鍾馗といへる髭男に追はれ、かくれ簑の身も住みうしとや、十郎姫にも引わかれ、赤裸に身代たゞみて、はじめて日本へ親に似ぬ子と生れ出けるとかや。其比はまだ涙もろくやありけん、朝雄が歌(二)の理屈につまりて、一と先分散しけるまでは、さすがに横道なしと、役の行者の情ふかく、大峯かつらぎの荷持にも雇はれしに、次第に身持あしくなりて、煎餅もめづらしからずと、芥川のくらまぎれに、鬼一口(三)のあばれ喰にむかし男を泣せ、それのみならず、鈴鹿山の好色、大江山の醉狂、戸隱山にて惟茂をなぶりし取沙汰より、洗濯も鬼の留主にと、世上物噪になりけるにぞ、神々のいかりつよく、鰯柊の責道具にかり出され、煎豆の追放にあふて、婆婆にもたゞずむ方なくて、冥途の出かはりに赴き、しばし佛のしめしに發起せしも、衣の似合はぬ生れつきなれば、是非なく業の秤目をならひ、釜の火のたき加減を覺え、呵責のあら仕事に獄卒とよばれ、地獄の六尺とはなりける。扨こ

にもてはやし給ふに、草葉もよらるゝ土用の比、水餅の鍋鉢にうかび出でたるぞ、上戸の知らぬ涼しさなりける。風も文月の音づれして、七夕のあふ夜は御酒のみ奉りて、子のこの餅もまゐらせぬは、葛餅のうらみながら、その鵲のはしとよみしも、やかもちときけばゆかし。魂祭も團子におくりすて、お萩の花に秋もたけて、こもちもち月の團子より、栗の子餅の節句も過ぐれば、十月はもとより亥の子の餅に荒初て、時雨こがらしの寒きまとゐに、火鉢のもとのやき餅も、おもしろき時節なるべし。やゝ御佛事のもちひ始まる比、つもる粉雪ももち雪も、あられ(一一)も酒の名のみにはあらず。おとごの餅は朔日にいはひて、師走はなべて餅の世界なれば、あけてもいふべからず。さればよ、いかなれば詩人は酒のみ友(一二)にかぞへ入れて、李杜が筆にも餅の沙汰はなけれど、兩部習合の俳諧には、劉伯倫がのみぬけも、夏爐亭の餅ずきなるも、ともに俳諧の趣向なれば、我門には上戸もめでたく、下戸も猶めでたし。

(一一)奈良名物にあられ酒あり

(一二)白居易の北窓三友は琴詩酒也

鬼傳

わたりなるをや。たるもたらぬも住む人の心にして、我は故郷の外とも思はずと、此心を額に題して、とひ來る人にも興じさせける。

餅辭

君見ずや、餅は例のをかしみありて、しかも四時の流行あり。まづは一年の初空、松も竹もあらたまるあしたに、飯は素より常住にして、なら茶麵類もしどけなければ、雜煮と趣向を定めたるぞ、神代の骨折のところなるべし。それより具足かゞみ開き、餅に睦月の寒さもくれて、二月は彼岸の團子をぞ、花よりとよみし人もありしを、草餅の節供に桃もちりて、つゝじ山吹とふけ行くまゝに、饅頭賣の聲もねぶたく、空は蛙に曇りを呼ばれて、春雨つれ〴〵とふり出づる比は、かき餅のいじり燒にぞ、かの右馬頭(一)が夜咄もしみつべけれ。卯月は例の卯花ぐもりに、蚊屋の香もめづらしく、藪蚊も軒にもちつく比は、牡丹餅の花いとむまく、千團子ときくもたふとしや。粽はそのまゝに見るいと涼しく、解きたるほど假の匂ひ又をかし。水無月の朔日は氷餅とて、やごとなき上つがた

(一)雨夜の品定めに女の品々を論じて源氏にきかせたる源氏物語の色男

なく、蠣殼屋根はるかに見こして、時しらぬ雪をあらそふ。常に花やかなるゆききは、まれに音なふ物、念佛題目代待代參り、あるは木魚のひゞき幽に、箔置の佛になひて建立奉加のかねさわがしく、比丘尼は赤坂に畫の情を賣りて、夕暮のかへるさ雪踏を引きつれ、辻君は白過ぎたる顏明はなれて、手拭によしばみたれど、心の動くべくもあらず。隣は一重の壁をへだてて、朝の火打の音ひゞくより、摺鉢に客待つ日も、烟草きる日のつれ〴〵なるも、紙帳に團の寐しづまるまで、こなたに物のかくれなければ、かしこにも又限なく知りかはすなるべし。日數ふるまゝに、從者どもも所得がほに、貧乏樽に唐辛子を植ゑて紅の秋を待ち、葭垣に刀豆を這はせ、塵塚に蓼をそだてて鮓賣の聲をわぶるなど、かく不自由のくらしを、商人はかしこく、餅を艾の底に忍ばせ、酒に味噌桶の似せ銘を書付け、御門の咎をのがれて范蠡が忠をもどき、煮豆和物に朝夕の飯時をかんがへ、雨のあがりは灸賣るなど、なかなかをかしき住居のさまなりける。されば阿房の雲をしのぐも、煤拂のやかましからむに、かたつぶりの戸一枚もたでも、うき世はぬめり

（一）比丘尼の姿したる賣春婦

（二）越王勾踐が囚はれたる牢の中へ手紙を魚の腹にかくして差入れし話太平記にあり

闇の夜の礫とはなりけるとぞ。

武陽官邸記

百里の海山かぎりなく越え來たる目には、こゝに一年の起臥はと、顏に物のふたがる樣に覺えしが、けふよあすよと、すめば都の月もさし入りて、寐心よき夢も結ぶばかりにはなりける。四疊ばかりの所に、手ぢかき調度どもかたづけて、常の居所に定めつ。庭は二三間に穴藏なかばの場をふさぎて、のこれる所わづかなるに、誰植ゑすてし一もとの石菜、二もとの躑躅、花は時過ぎて靑葉つやゝかに、我たのみ顏なるを、そこゝと植ゑかへなどして、朝夕の水そゝぐも、うき身わするゝたづきとはなれりける。軒の風鈴に夏山のすゞしさを招き、壁のやぶれに色紙をおし、障子のたらぬにあやしき簾をかけて、月の夕暮なかば卷きたるは、かの行平の須磨の住居もかくや と思ひ出でらるゝに、うしろの松風とうくと吹きならせば、「波こゝもとに」(一)などぞひとりごたるれ。西あかりの二階窓御土居間ぢかく、梢さしおほひて遠望をさへぎれども、富士は木の間にくま

(一)謠曲松風に「波こゝもとや須磨の浦、月さへぬらす袂かな」

く、身をあへ物の顔よごれぬれば、買臣(五)が妻の恥をいだき、手ならひの君の昔を思ひ、つひには土にかへるべき無常をや觀じけむ、ある夜鼠のあるゝ紛れに、棚の端より身を投げけるにぞ、顔かたちかけ損じ、見にくきまでの姿にはなりける。かくては食物のつとめ叶はじとて、あるじの怒り甚しく、石漆の妙藥にも及ばず、妹脊の中も引きわかれ、内庭まで下げられたれども、猶五月雨の折々は、雨もりの役につらなれば、いとゞ長門(六)の涙かわく隙なく、こゝにもすわりあしくなりて、井戸端にころがり出で、蓼箒に埋れて、後は誰哀とふ人もなかりしに、ほどなく露霜も置うつり、壁の虫の音もかれゆく比ならん、間ぢかき寺の門番にひろはれ、ふたゝび部屋にかくまはれながら、ならはぬ火鉢に樣をかへ、酒をあたゝめ茶を煎じて、今年はこゝにうさを忍びしに、やゝ春雨に梅もちりて、きさらぎの灸もすめば、また灰をさへ打あけられ、唐辛子といへるものを植ゑられしが、からき目ながらさてあらばあるべきを、それさへ秋のいろ見過ぎつゝ、つひに橋づめの塵塚によごれふし、果はさがなき童べのまゝごとに碎かれ、行衛もしらぬ

(五)漢の朱買臣の妻其夫の出世せぬを厭ひて離別を乞ひ後夫は出世し己は落魄して恥を受けし故事

(六)漢の陳皇后の故事より宮人思慕の情を述ぶる詩を長門行長門怨などいふ

ひて、片山里に朽はてん身をうき物にや思ひそみけん、馬舟の便につけて遠く都の市中に出て、しるよしある店先に、しばしたつきをもとめけるに、師走の空いそがしく、木の葉を風のさそひ盡す比は、世も煤掃のふるきをすて、物みな新器を求むるにつれて、ある臺所によき口ありて、宮仕の極がてら摺木と聞えしもとに、うち合せ(一)の夫婦とはなりける。かれは柏木(二)の右衛門にも似ず、松木の荒くましき男ぶりながら、少しもかざりなき氣だてのまめやかなれば、女も心に蓋もなく、明くれ忙しきつとめも、おなじ心にはたらきて、とろゝ白あへの雪いたゞくまで、糊米のはなれぬ中をねがひ、水もらさじとは契りけるに、その比せつかひといひし男は、檜の木目細かに、その姿やさしきから、昔は御所にうぐひす(三)の名にも呼ばれしが、おなじつとめの夜ふくる時は、走水の下にころび寢がちなるを、よそのいかきの目にもれしより、さらでも住うき傍輩の中に、はしたなき間鍋の口さし出で、杓子の曲り心よりうき名は立ちそめ、炮烙さへ仲間破れして、あけくれ茶釜にふすべられ、なら坂(四)やわさびおろしの二面、とにもかくにもたゞずむ方な

(一)かりそめに取合せたる意なるべし
(二)源氏物語の色男
(三)鶯はせつかひの異名
(四)萬葉の歌「なら坂や、この手柏の二面とにもかくにもねぢけ人のとも」

しきわざにはあるべからず。くさめもあくびも同じものならんに、かれが出所のいやしければ、貴賤これをつゝしみて、かたく公界の嗜とす。されば退之(二)が鳴物づくしにも此沙汰なきは、もしとりはづしにてもやあるらん。その鳴ること不平にもかぎらず、たゞ盛親僧都の芋の腹味、あるは麥飯おなら茶の過食にさそはれ、勢ひことに甚し。むかし太平記の無禮講に、はじめて是をゆるしそめたるより、つひに鎌倉に嗅ぎつけられて、七日の說法屁一つに破れぬれば、はては資朝俊基の屁負ひ(三)比丘尼となられける。または雜混寐のくらがりに、ぬししらぬ(四)香こそ匂へれと歌人はよみも置しか。思ふに鳥羽の僧正の筆あとも、ひとへにたはぶれのみにあらず、かの音あれども目にみえず、物におとなくあだなる事は、更に電光石火にまされるをもて、人につねなき世の理をも知らしめむとなるべし。

摺鉢傳

備前の國にひとりの少女あり。あまざかる鄙の生れながら、姿は名高き富士の俤にかよ

(二)韓退之が「送孟東野序」

(三)人の過を身に引き受くる者の喩

(四)古今の歌「秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも」

宰予(一)が枕にも雇はれざる。日和つゞきて隙なる時は緣の下に寐ころび、蛬の霜夜にともなひ、又は座頭の杖にさゝれて、日待の壁にぶらつきては、かたぶくまでの月をも見るらむ。たま〳〵輕業の綱わたりにはかれて、高みに人を見おろす事もあれど、常は沓ぬぎにひざまづき、洗濯の日の腰掛となりて、それより上の交はしらず。かく下樣のものながら、狩人の笛(二)となりては、口にふかるゝ例も有りとや。その鹿の命を斷るは、罪ふかき身の果なれど、佛(三)も下駄もおなじ木のきれと、例の一休のしめしに逢ひて、はじめて輪廻の鼻緒はきれてん。抑も足高きものを木履足駄と號し、たけ低きを下駄といへるは、いづれ一體分身にして、こゝに尊卑の差別はあらねど、俳諧のうへに二つの姿を論ずべくば、ぼくり〳〵と靜なるは、雪降の朝にして、下駄々々といそがしきは、村雨の夕べなるべし。

鳥羽繪贊

蝦蟆の息に虹を起し、蜃はよく樓臺を吐く。腹中の虫(一)氣を吹いて聲を出すも、さらに怪

(一)論語に「宰予晝寢」

(二)徒然草「女のはける足駄にてつくれる笛には秋の鹿必ずよるとぞいひ傳へ侍る」

(三)上の句は「佛とはなんだら法師柿のたね」

(一)屁のこと

（一）論語に「褻裘長。短右袂」

（二）淵鑑類函に「張果老常騎白驢、日行千里。休則疊之、其厚如紙。致之于巾箱中」

必ずながきみじかきが上にも立ち難し。物はたゞ秋の夜のながくてよからむは長く、難波潟みじかき蘆の長からずしてよきは、短くてあらなん。さるを聖人も右の袂の自由を（一）物ずけり。世に式法をこまかに定めて、かね合極るものあれど、そのむづかしき境は人の製作なり。天地もと窮屈ならず、長短は自然にそなへて寸分の詮議はなし。摺粉木は兩手に握るを程とし、杓子さい槌はかた手に足れり。下ざまの物ながら、天理のまゝなるぞ尊けれ。我友田氏、過し比かりそめの旅のつとに煙管を贈れり。その短きこと掌にかくすべし。我この秋西郊にあそぶ事ありて、調寶はなはだ長きにまされり。是をくはへて手をからず、久くして歯を勞せず、ゆく／＼野山に雲を吹き、飽く時は、袖にをさむ。（二）張子が馬を懐にするがごとし。こゝにおいて感あり、つひに長短の解をつくりて、是をむくふの詞にかふ。其辭の長過ぎたるは、また才のみじかき故ならし。

木履説

木履々々、笠は東坡が春の野がけの尻にしかるゝ折もあるべきに、などや汝は夏の日の、

りて楊貴妃の魂のあり所をさがせし事あり

と杉立る門に迷ひて、ふせやのはゝき木の晝狐に化され、うつの山邊の道とふべき人にもあはで、ふたゝび桃源に棹さすごとくならむ。たゞ梅の色も香もしりて、思ふ事いふべき人ならば、今も壺入にたづねあたらん、茅門とは知るべしとなり。

物ずきの虫はきてなけ蓼の花

長短解

大はよく小をかね、短は長にまかるゝためし、世にそのたぐひ多かり。たゞ君を賀し人を壽ぐにぞ、よはひを長濱の鶴にたぐへ、あるは龜の尾山の尾を引て、五百八十七曲と祝ひものするには、あくかたあらじかし。その餘はひたぶるに十八さゝげのゆたけきにならへば、獨活の大木の謗をのがれず。矮鶏の足はみじかきを愛し、禿が返辭はながきにのどけし。出る杭頭うたれてつるの益なく、下手の談議のとまり來ては、軒の柳もねむり顔なり。たゞ女の髪こそめでたくてあらましを、手ながき人は一門にも遠ざけられ、鼻の下ののび過たるは大事の相談にもらされて、其夜の饂飩のながきをしらず。されば、

汝我に馴れて、はだか身の寐姿を、あなかしこ、人にかたる事なかれ。

袴著る日はやすますする團かな

蓼花巻記

(一)一もとの芭蕉五株の柳の、其人の徳にてらされて枯れぬ名をとゞめしもあるに、不仕合なる榎木は、ある(二)僧正の號に呼ばれて、つひに斧の怒をかうぶり、なほ切杭堀池の名をさへ流しけむ。我劍冠の仕途に身を置きながら、一つの隱家あり。これを蓼花巻と名づく。蓼花にむづかしき心はなけれど、夕日朝露の氣色心ゆくばかり、その一もとのゆかりなきにもあらず。松茸さふの聲きけばと、俊成卿の庭もせもなつかしく、世にわびたる樣のをかしげなれば、みづからこれが名とせり。そも此幽栖(三)無何有の郷にとなりて、山に向ひ、海にそひ、河あり、野あり、月雪花鳥は四の時の詠を供し、時わかぬ松の夕風竹の夜雨の音までも、聽くにいとはず見るに乏しきものあらず。城市を出て遠からねど、人たゞ杖草鞋をもてとはむとせば、たとへ(四)力士が肉刺はふみ出すとも、三輪の山も

(一)芭蕉は桃青翁、柳は陶淵明

(二)良覺僧正、徒然草にあり

(三)仙卿、熱田の神境をいふなるべし

(四)長恨歌に臨卭の道士玄宗の爲に天地をめぐ

鶉衣 前篇上

奈良團賛

青によし奈良の帝の御時、いかなる叡慮にあづかりてか、此地の名産とはなれりけむ。世はたゞ其道の藝くはしからば、(一)多能はなくてもあらまし。かれよ、かしこくも風を生ずるの外は、たえて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたゝまれて、公界にへつらふねぢけ心もなし。たゞ木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならむ。さるは、桐の箱の家をも求めず、ひさごがもとの夕すゞみ、晝ねの枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また來る夏をたのむとも見えず、物置の片隅に紙屑籠と相住して、鼠の足にけがさるれども、地紙をまくられて野ざらしとなる扇にはまさりなむ。我汝に心をゆるす。

(一)論語に「大宰問於子貢曰。夫子聖者與。何其多能也。子貢曰、固天縱之將聖。又多能也。子聞之曰、大宰知我乎。吾少也賤。故多能鄙事。君子多乎哉。不多也」

あやしくはえもなききれぐをあつめつゞりたるを、うづら衣とはいふなり。げに、その鶉ならば、たゞふか草のふかくかくろへて、かりにだも人にはしらるまじきものにこそ。

也有

いにし安永のはじめ、すみだ川のほとり、長樂精舍にあそびて、也有翁の借物の辨を見侍りしが、あまりに面白ければうつしかへり侍りき。それより、山鳥の尾張のくにの人にあふごとに、この事うち出てとひ侍りければ、金森桂五、うさぎの裘にはあらぬ鶉衣といへるもの、二卷をもてきてみせ給へり。翁なくなりぬときゝて、なほ馬相如が書のこせるふみもやあるとゆかしかりしに、細井春幸天野布川に託して、その門人紀六林のうつしおける全本をおくれり。まきかへしみ侍るに、からにしきたゝまくをしく、とみに梓のたくみに命じてこれを世上にはれぎぬとす。翁の文におけるや、錦をきてうはおそひし、けたなる袖をまどかになして、よく人の心をうつし、よく方の外に遊べり。鶉ごろもの百むすびとは、みづからいへることのはにして、くつねのかはのちどのこがねにあたらざらめや。右のたもとのみじかき筆は、なへたるもはづかしけれど、たどにやはと、けにもはれにもかいつけ侍りぬ。

四方山人

和漢文操 終

むや。南無の始より綺語の終まで、これらを十誡の俳諧體といふべし。本より和漢文操とは、假名と眞名との通用をいひながら、どちらも我朝の平話なれば、和漢は一枚の繪圖のごとく、獅子庵の文庫に寫し置て、爾雅篇海のもろこしをさがさず、伊呂波韻一册にて日本の埒をあけむと也。

享保十二丁未秋九月如意珠日

リ、細擧ニ暇アラズ。△檀林トハ輕口ノ咄ヲ云ヘリ。宗因風ノ誹諧ヨリ、天和ノ比ノ常談ト成レリ。△倭語拾芥ニ瓜茄ヲ馬牛ト訓ス。茄子瓠子トハ禪錄ノ詞續ナリ。△源氏供養ハ諷物ノ名ニテ、源氏ノ君ヲ始トシ、六十餘帖ノ寓名ヲ擧テ、石山ノ湖水ニ供養セシ樣ナリ。△其諷ニ「朝貌の露稻妻の影、いづれかあたならぬ」とあり。△或ハ云「狂言綺語をふり捨て紫式部が後の世をたすけ給へ」トモアリ。

○評ニ云、此文は全く詼諧ながら、文操一部の趣向には、儒書佛經の新論をおこし、倭文漢詩の舊式を崩せば、おのづから自をほめ他をそしりて、しひて我家を建んとす。さるは儒佛のつれにして、一道建立の意地なるには、莫囂實の自讚に似て、鹽梅よしの名にほこるとも、言語の無用をしらん人は、文操の過當を惜まざれど、此祭文に狂言をつくりて、一部の跋とはなせるならし。殊に弔祭の三篇を見れば、終焉記には文の幽玄をつくして、大和に優情の哀怨をなし、行狀記には文の死活をそなへて、我家に風姿の筆力をあらはす。しかれど今の祭文には、例に風情のさびしみを寫し、例に風姿のをかしみをつたへて、一體萬用の詞の心に、萬法一理の心の實なから

△史ノ滑稽傳、優孟ガ贊ニ「常以二談笑一諷諫」△優旃ガ贊ニ「善爲二笑言一。然合二大道一云々」△涅槃經ニ「佛法附二囑國王大臣有力檀那一」△阿含經ニ「預知二機嫌一云々」「按ズルニ、此一段ハ、「諫レ君有二五義一。五諷諫、唯度レ主而行レ之」ト云ヘル、孔子家語ノ取意ナリ。△論語ニ「君子可レ欺不レ可レ罔」トハ、宰我ガ爲言ノ巧ヲ責ムルナリ。△遊敵トハ双紙ノ詞ニテ、物評シテ遊ブ友ヲ云ヘリ。「按ズルニ、俳諧師以下ハ、諷諫ノ意ヲ汲ミテ、漢ノ武帝ヲ諫メタル東方朔牧皐ガ面影ヲ云ヘルニヤ。畢竟ハ例ノ面白味ナリ。△大論ニ佛經ノ選場ハ竹林精舍ノ畢鉢羅窟ナリ。阿難モ迦葉ノ命ヲ承リテ、鑰ノ隙ヨリ這入テ佛ノ如ク說法セシニ、大衆ニ三疑アレバ、如是我聞ノ發語ヲ置ケリトゾ。述而不レ作ノ辭宜ヲ察スベシ。△論語ノ序ニ「乃叙レ書傳二禮記一、刪レ詩正レ樂」△論語ニ「述而不レ作、信而好レ古、竊比二於我老彭一」△註ニ「老彭商賢大夫、見二大戴禮一」「按ズルニ儒學者ハ、其書ノ實否ヲ糺スヨリ、其人ノ有無ヲ究メ下ス、總テハ實學ノ費ト云フベシ。△山崎老人ノ一貫抄ニ、舜紀ト世本トヲ引キテ、老彭ハ二人ノ寓名ナリ。老子ト彭祖トノ面影ニ寓セテ、古賢ヲ信ズルノ證文トゾ。△孔子ニ七人ノ師ト云ヒ、釋迦ニ七佛ノ授記ト云フハ、總テ諸經ノ取意ナ

老與彭者寓二人之而影而、所謂神變權化之師爾哉。儒家之七師歷釋門之七佛歷、可知有名無相之證據人也。惣而擬釋迦孔子之文而、令穿鑿證人之名判則、爲似折檀林咄之中而、詰言葉之散焉。以耳於聞萬卷之表、以心知一字之裏了哉。于時烏有仙歷博望司歷、笑々類合而、不誇一部始終之骨折、急度演茶漬之一禮而、博望者乘瓠子之馬則、烏有者乘茄子之牛而、飛去西之太虚了矣。享保丁未秋七月盂蘭盆日、狂等臨三輪川之流、效源氏供養之模樣而、和兮漢兮連詩兮詠歌兮、斯者弔胸亡之跡歷兮。將所存此世人歷、慰此祭文而、朝貌之露兮稲妻之影兮、不咎狂言綺語與也。

○註ニ曰、△一言芳談ノ聖光上人ノ詞ニ「遁世者はなきに事かけぬやうなはからひてすぐる、最上のやうにてある也」俳優ノ二字ハ古語拾遺ノ取意ナリ。前ニ出デタリ。△悲華經ニ「慙愧懺悔滅無量罪云々」△花輪違トハ茶筅ノ印ニテ、美濃ニ茎長ノ名産ナリ。△論語ニ「言語宰我子貢云々」四科ノ中ノ一藝ナリ。「按ズルニ此一段ハ、花實ノ二字ニ川アリテ、萬一ノ轉回ヲ稱スベキナリ。

不實之實與不虛之虛者、可爲三道一致之祕法孱哉。就中俳諧師者、常欲搜佛家之迂詐、崩儒門之眞言。譬則如爲大名之伽人之、不惛孔子兮不泥釋迦兮、譽花兮毀鳥兮、知其日其時之變則、忖檀那之機嫌而歎其事此事歟。是以、論語爾麼謂君子可欺居、倭語爾者謂詞之遊敵歷。所詮者、所謂滑稽之贄、和繰五倫面通味也。今夫謂懺悔之大祕事乃者、此度於文操之選場而、註者與評者之虛實也。今歳閑獅子窟之戸而、欲撰例之草稿日、忽有二人之客而、鶴髮之叟謂烏有仙居、黃衣之男謂博望司歷。博望者實麼註者回而、其面麗敷、烏有者何樣評者顏而、其容老矣。卒厥好思儒仙之萬卷則、畢鉢羅窟之撰集爾麼、卜扉卸錠而、阿難副人於鑰穴而、以如是我聞之四字擴文殊普賢之智惠兮、顯觀音勢至之通力兮。其餘之天人麼龍王麼、乍在涅槃像之繪、其後無爲逢人梟矣。于然聞儒門之沙汰則、遠乍刪詩正樂、近至自撰之論語而、以述而不作之四字、竊比於我老彭與者、曰竊兮曰我兮、爰操給一代之虛實則、門人達者認例之實學而、爲指定商大夫共

在るも得べけれ。彼は酒色にあそびながら、かく俳諧の優游をしれるにや。和漢の隱逸にほめ置し、市中の大隱はさらにして、かの八仙の詩にいへる、酒中の大仙とは稱すべき也。

祭三界萬靈文

渡部狂

南無三界萬靈、無貴兮無賤兮、有緣歷無緣歷、從儒佛老莊之聖靈、至詩歌連俳之亡者迄、旅寐蓮葉一枚而、不厭獅子庵之侘者、不熏于抹香之臭兮、不生於宿魂之花兮、一言芳談之不事缺無則、爲寐兮爲起兮盡俳優而、不包文操一部之虛實、令懺悔兮者嬲之所以矣。懺悔爾者誘引滅無量罪與哉。扨謂俳諧之馳走者、不冷素麪兮不飾團子兮、煎茶者入遇名花輪違而、茶漬者面々之滅次第也。斯言則、乘佛於三味線而爲似口而爲馳走共、言語者謂孔門之一藝居、謂釋氏老家之口過居、花咲一體萬用則、實成萬法一理與好。此故、俳諧者令贊談笑有諫笑言有道了也。乍去言語之遊者、認虛認實人之、假令抑下我身而直人之草履共、言則爲似瓦器置鉋而振舞針之和物焉。左有者認一言之實而不知萬物之虛故也。

獅子庵の遺稿を見るに、ある時の夜話に、他門はまして我家にも、門人好の宗匠ありて、西に東に幾百人と、扣帳にしるせるよし、我はあづまより筑紫をめぐり、四國中國も三越路の果も、故翁の俳諧を荷ひあるき、其道を天下にひろめむとすれば、故翁をしたふ者は我をしたふ、我をしたふ者は故翁の門人なり、我門人とて一人もなし、されども美濃に黒太といふ者は、敬叔が車の轍をおして、是を門人の始ともいふべく、越前に伯兎といふ男は、季孫の粟の禮をつくせば、是を門人の終ともいふべし、しかるを本朝文選に、雲鈴法師が列傳をあげて、東花門人と書しるされ、備中の倉敷に蓑里といふ若男ありて、箸箱の蓋のしるしに西花門人とかけるよし、雲鈴は仲人の肝煎にまかせ、蓑里は自稱の手すさみをとがめず、其餘は三千の徒あらんも、すべて同胞のよしみといふべきを、今や蓮二を兄となし、白狂を弟として、汝達ふたりを弟子といふべければ、顏回が早死の不幸をつゝしみ、阿難の說經の內意を察して、獅子庵の遺稿を奉行すべしとぞ。しかれば此法師の獅子門に故ある。まさに始あり終ありといふべし。たとひ漢土の高僧傳にも、我朝の往生集にも、禮佛看經の功をつみてこそ、生死到來の曉にいたりて、坐脫立忘の自

中八仙ニ「長安市上酒家眠云々」此詩ハ李白ガ洒落ヲ云ヒナガラ、前ニ謫仙ノ把結ト知ルベシ。「按ズルニ、琵琶湖以下ハ行狀ノ要文ナガラ、筆ニ反魂ノ術アリテ、紙面ニ其人ヲ寫出セル、此等ヲ形容ノ絶妙ト稱スベシ。△赤壁ノ賦ニ、「肴核既盡盃盤狼藉云々」○辭世ノ事ハ兩說アリ。其比ノ訃音ニ「出替に行や淨土の今まゐり」トモ聞エ、今云ヘル「二月二日かな」トモ聞ユ。畢竟ハ句作ノ違ノミ。趣向ハ當意卽妙ト稱スベシ。△往生傳ニ「如ニ倚レ柱眠一」トハ臨終ノ安穩ヲ云ヘリ。傳燈錄普化和尚ノ下ニ「普化曰、明日去ニ東門一遷化、郡人相率送出レ城。師厲レ聲曰、今日葬不レ合ニ青鳥一。（中略）第四日、自擎レ棺出ニ北門外一振レ鐸入レ棺而逝。郡人揭レ棺視レ之。已不レ見。唯雲中聞ニ鐸聲一云々」△讖文トハ未來記ニテ、佛家ニハ授記トモ云ヘリ。▲涅槃經ニ「結ニ三生値遇緣一云々」△墓誌ノ文ニ「金口木舌、迅雷轟レ天」ト云ヘルハ、字ノ謎文ナリ「按ズルニ、金口木舌トハ雲鈴ノ鈴ノ木鐸ノ釋文ヲ假リテ、天下ニ俳道ヲ觸レ行ク徇人ノ喩ナリ。迅雷トハ法師ノ機鋒ナガラ雲ト鈴トノ響トゾ。

○許ニ云、記は生卒の實錄にして、法師の姿情を寫せるや、筆に丹青の妙ありと稱すべし。かつて

（一）李白の自稱也

リ。菊阿佛ノ山莊ナリ。「按ズルニ、結社トハ廬山ノ白蓮社ノ詞ニテ、次ニ淵明ヲ出スベキ爲ニヤ。△淵明傳ニ「爲ニ五斗米ニ不レ屈レ腰。解ニ印綬ニ而歸ニ故郷ニ云々」飮中八仙ノ詩ニ「臣是（一）酒中仙云々」其註ニ「此天上謫仙人也」ト云ヘリ。謫トハ流罪ノ義ナリ。△史記ニ「賢士之處レ世、譬若ニ錐在ニ囊中ニ。其先立見」「按ズルニ、此對ハ囊ノ錐ノ漢語ヲ和ゲテ、桶ノ鱧ノ倭語ニ對セル、尖（するど）ト云ヒ淳（すなほ）ト云ヒ、包ムト云ヒ曲ルト云ヘル、字對意對ハ更ニ言ハズ、錐ト鱧トノ自他ヲ對セル、格ニハ轉對ノ絶妙ト稱スベシ。△卯七ハ蓑田氏ニシテ、洛ノ去來ノ從弟ナリ。長崎ニハ卯七アリト、祖翁ニ稱セラレシ俳將ナリ。○梓弓ニ張ルト云ヒ、引返トモ矢長トモ、總テ古歌ノ裁入ナリ。擧グルニ及バズ。前後ノ文勢ヲ見ルベキナリ。△老子經ニ「善人不善人師。不善人善人資云々」師資トハ師弟ノ義ナリ。△不レ知火トハ筑紫ノ枕詞也。和歌ニ數多アリ。▲西行物語ニ、あづまくだりの時西住法師も供せしに、天龍のわたしにて、船頭にたゝかれ給ひしを見て、なきかなしめる事あり。▲蓮生坊ハ、小原問答ニ鉈ヲ挿タル義勢ノ俤ナリ。▲童子經ニ「七尺去不レ可レ蹈ニ師影ニ」●東坡詩ニ「十年報ニ新水恩ニ」云々」△其暮山モ入日記モ、雲鈴法師ノ俳集ナリ。●飮

に、髪そり浴し、衣裳をもあらためて、けふは人々をもてなすべき故ありと、例の我も飲み人にもしひて樽も盃も狼藉たる中に、我は今此櫃に入て、一生の観法をとけむと思ふ、さて我息のたえなむ後は、ともかくもはからひ給はれとて、いひ置べき事二つ三つかきて、その紙のはしに辭世あり、

○出かはりはあの世も二月二日かな　　雲鈴法師

されど一座の人々は、見ならはぬ今日の醉狂や、婆娑の名殘のさのみ安からば、おのれらも後よりまゐるべしと、興ずる人もあざむく人もありしが、午の時ばかりに息絶えて、醉へる色なほさめず、柱によりて眠れるがごとくとぞ。そもや唐土の普化和尚も、かゝる終焉のさまときけば、もしや雲中に鈴の音やすらん。よしそれ先師の讖文にあひて、鈴の一字をさづかりしは、三生値遇の結縁にして、まさしく權化の奇特ならんと、出雲崎に其廟をつくりて、碑面に洛の渡吾仲が墓誌の文を銘せしと也。

○註ニ曰、△雷柱子ハ武ノ其角ガ標號ナリ。或ハ雷子トモ云ヘリ。△五老井ハ湖東ノ小野ノ宿ニ在

は西住の袖のなみだをしのび、ある時は蓮生が心のつるぎを折りて、かりにも七尺の影を忘ず。かくてその年は伊勢國に歸りて、山田の冬籠に薪水の恩をむくい、あくる春は美濃國にいざなはれて、かの獅子庵の松の陰には、幾世のちぎりも朽ちずや とおぼゆ。其後は三越に師の光をつたへ、佐渡の國にも三年あまり住て、其幕山に撰集の名を残し、ある年はさゞ波の琵琶湖をなつかしみ 三井の麓にすみ所をもとめ、その比は髪をも油に撫て、竹の錫杖に鐵鉢をたづさへ、大津八町をゆるぎありけば、心得ぬ者はその風俗におどろき、物このむ人はその洒落をたふとむ。されど衣食の産ならねば、ある日は歌舞の地に鉢の子をわすれて、長安市上のねむりさめず。そこも二年か三年には過ざらん。しかるに享保の初つかたは、越後の出雲崎に草庵をむすびて、こゝに半白の老をやしなふべきに、高田直江の風雅をあらそひ、柏崎にさまよひ新潟にあそびて、氣力ます〳〵人をへつらはず、酒に世界を見破りて、果は米のたぐひを絶てば、世ははた此比をかぎりとおほゆらん。其所のしたしき人々を語らひ棺やうの物をさゝせて、二月二日の早旦

をいとひ、始は武陵に雷柱子が風をまなび、中比は湖東五老井の社をむすぶ。僧にもあらず俗にもあらず、酒をこのみて色をこのまざるは彭澤の隱者に似たれども、年わかく面のうるはしきは、かの飲中の謫仙にやと、其比の人ははたはぶれあひぬ。誠や常ざまの人にすぐれて、其詞のするどなるは、嚢の錐のつゝむ所なく、其心のすなほなるは桶の鱣のまがることとなし。さるは東人の木直なればと、憎むべきことの憎ぬ人もおほし。さて元祿の中比ならん、筑紫のかたを行脚せしに、御房はなどや其國を過ながら、美濃に獅子庵をしらざりつるぞと、かの長崎に一城をかまへし、卯七が黨にとがめられて、引かへす心のあづさ弓、春はやよひの末なりとや、備の倉敷といふ所にて、東華先師に行あひたり。さはよし神のはからひならばと、そこの人々の取つくろひて、鈴の一字にあらたむるより、師資の盃のしるしとぞなせる。是より暗夜のともし火にあひて、烏の雲にひろがへり、魚の水にあそべるが如く、野店山橋の案内人となりて、ふたゝび筑紫に具せられ侍りき。名にし不知火の浦々をつたひ、薩摩潟千島の巣のかぢ枕にも、ある日

の對問のあはれなる、今とても袂はかわきあへず。ましで松江の姨君が、かゝらましかばと行暮たらん、和歌の怨情も誹諧の微言も、すべて此間につきざらんや。終は玉樹の連枝によせて、侍ふ人人の愁情をほどきたる、文に轉換の法ながら、虚實は例のおどろき入候。こゝに思へば、去年の秋なるか、鵲巣の別れに虚實の高論も、文質はげに一理なりしなと、此記に鼻孔遼天せりと云々」さりや先師の文稿には、此類の艷曲も四五章ありて、歌書の幽玄を寫されしが、それが中にも今の終焉は、かくまめやかに、かくあはれなれど、未練の學者の此艷にならひて、邯鄲にあゆみを失ふべきやと、本朝文鑑にもえり殘されしが、さのみはまもり果つべきにもあらずと、今の文操に再撰して、雅俗に當用の證文となせり。讀む人は風雅のさびをまなび、聞く人は俳諧の名を忘れず、例に言語の虚をさばきて、例に文章の實を行ひなば、俳諧はたゞ時宜の日用にして、雅俗は家々の意地なる事を知らん。誠に此評の大切なる、此記を一部の實體ならんには。

雲鈴法師行狀の記

蓮二房

其傳にいふ、雲嶺法師は奥州南部の素生にして、本庄家の侍郎たりしが、官馬の塵に世

俳諧ノ閑莊ナリ。祖翁ノ無縫塔アリトゾ、△淳風坊ハ十坊ノ一ナリ。東六條ノ邊ヲ云ヘリ。○須磨のあまりとは蜑ノ縁語ニテ、歌ノ詞ニ多シ。爰ニハ住ト須磨トノ寄セナリ。△晉史ニ芝蘭玉樹トハ兄弟ヲ稱セシ詞ナリ。

○評ニ云、此文は歌書の婉麗をうつして、先師に一代一篇のぬめりといふべし。されば獅子庵の遺稿には、より〳〵名達の書通をすぐりて、草書のまゝに致し置れしが。其中に駒萬子の狀ありて、今の終焉記の口評あり。畢竟は文章に強弱の公論也。其狀の略文に、「頃日京師より霜の光をつたへて（霜の光ハ此君ノ追善集ナリ）終焉の記を熟覽いたし、はじめて俳諧のたふとさを覺候。むかしより和歌連歌の人は、俳諧は里民の雜話をもて一座の戲言なればとて、あなづりがましういひ傳へしを、今や此記の文法を評せば、源氏物語の艷詞をはこび、枕草紙の優情をつくして、さして湖月の註にもおよばず。しかれば貴坊の立る所は、さびしみは和歌の怨情をうつし、おかしみは俳諧の笑言にあそべるや。五七年の虛實の說法も、今更たふとくこそ候へ。殊に此文の次第を見るに、始には朋友の信をつくして、菊に病中の賀の實情なる、中には小萩の愛情より別院の明暮を書つくして、生死

(六)此歌萬葉になし但上の句は此通りにて、下の句「わがふる袖を妹見つらんか」といへる歌あり後世この下の句を「浮世」云々とつくりかへて人麿の辭世といひ傳へたる也

(七)文選、宋玉の作

ノ撰集ニモ先師ノ俳諧ヲ疑ヒ給ヘバト、去來ヨリ内談ノ斷アリ。其狀ハ例ノ遺稿ニ殘レリ。〇萬葉ニ人丸ノ辭世「石見野やたかつの山の木間より浮世の月を見はてつるかな」(六)山ノ端トハ倶利伽羅ヲ云ヘリ。井波ヨリ西ニ當レリ。△有磯海(ありそ)ト砥波山(となみ)トハ、一集ノ前後ナリ。序者ハ洛ノ去來ナリ。△そこの花ハ萬子ト兩撰ニテ、夕顔ノ發句ナリ。〇それその花ハ旋頭歌ナリ。前ニ出デタリ。△かたふハ荷擔(かたふ)ニテ歌書ノ詞ナリ。△いちはやきハ壹早(いちはやき)ナリ。眞名ノ伊勢物語ニアリ。〇眞葛が原ニ慈鎭ノ歌アリ。前ニ出デタリ。其邊ハ東門跡ノ墓所ナル故ナリ。△朝雲暮雨ノ四字ハニ神女ノ(七)賦ヨリ亡後ノ面影ヲ慕フ意ナリ。「按ズルニ此一段ハ、越ヨリ都迄ノ名所ニ寄セテ、比ハ十月ノ九日ナレバ、都ハ花ノ返リ咲ト云ヒ、眞葛ノ風ニハ訃言ノ騷(さわぎ)ヲ云ヘル、古歌ノ採言モ古詩ノ摘語モ、此等ヲ裁入ノ絶妙ト稱スベシ。〇貫之娘ノ歌、「鶯よなどさは鳴くぞ乳やほしきこなべやほしきははやこひしき」〇俊成ノ娘歌ニ「あだにちる露の枕にふしわびて鶉鳴くなり床の山風」△寢覺ノ森トハ、守(もり)ノ字ノ寄セナリ。古歌アルニヤ尋ヌベシ。△松江ハ都ヨリ添ヒ來レルル此君ノ乳母ナリ、其比ハ七十餘ノ老媼ナリトゾ。●闌省廬山ノ一對ハ前ニ出デタリ。△淨蓮社ハ井波ノ店外ニテ在。

澤ノ別院ハ安江町ニ在リテ、井波ヨリ十二里ナリ。△親方トハ、金澤ニテ津田家ノ聟君ナル故ナリ。○源氏ノ桐壺ニ「みやぎ野の露吹むすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」トヨメリ。小萩トハ子ノ字ノ寄ナリ。男子ト女子ト二方アリ。△ゆゝしきトハ歌書ノ詞ニ忌々シキ事トゾ。△鶴巣ハ別墅ノ名ナガラ、伊駒萬子ノ標號ナリ。此公ハ金城下ニ文遊武備ノ名ヲ傳ヘテ、祖翁ト傾蓋ノ盟ヲ殘シ、先師ト忘年ノ交ヲ結ベリトゾ。○枯尾花集、祖翁ノ難波ニテ病中ノ吟「旅にやみて夢は枯野をかけめぐる」トアリ。△風雲ノ詞ハ、謝靈運ガ漂泊ノ遊情ヲ採レルニヤ、惠遠ノ傳ニ尋ヌベシ。△一向宗門ノ改悔ノ語ニ、「雜行雜修の志を振り捨て、唯一心に阿彌陀如來を頼み奉り」トアリ、雜行ノ二字ハ一宗ノ要語ナリ。△さるがうハ猿樂(さるがふ)ナリ。歌書ニハ戯ヲ言云ヘリ。△論語ニ「天之未レ喪二斯文一」トハ、彼所ニハ儒法ヲ云ヒ此所ニハ俳諧ヲ云ヘリ。然レバ此語ニハ、顏回ガ早世ヲ含ミテ喪吾ノ歎キヲ取意セルニヤ。△桃華坊ハ、洛陽ノ間ヲ十坊ニ分チタル其一ナリ、此時ノ會ハ長者町ノ去來亭ナリトゾ。△法師トハ東花先師ナリ。同ク祖翁ニ具セラレテ越ノ行脚ノ約束アリトゾ。「按ズルニ其比ハ、先師モ二十七八ノ年ニテ、有磯砥波

(五)東本願寺

泣き悲しめるは、こゝらたとふべき世の様にはあらざめり。此君今年は三十あまり三つか二つにはすごし給はじ。さらば二十年の春秋を此山里に見馴らし給へて、●蘭省の花のらうがはしきには、△淨蓮社の入相に世をしのぶ便をもとめ、●廬山の雨のさびしさには、淳風坊の郭公に歸らん事もおほしたらんよ。とてもかくても住はてぬ世ながら、△須磨のあまりに短かりし、夢の假寐にはおはしけらし。さるにても御子たちふたりは、天地にもおほしなぞらへけむ、げには世のにほひにもまぎれ給はず、△芝蘭玉樹の枝につらなりて、せめてその方の人々は、月日の生先を守らひて、たのもしき日蔭にぞ思ひ居ける。

○註ニ曰、△涙化君ハ東門(五)跡ノ連枝ニテ、越中井波ノ瑞泉寺ニ住シ給フ、官號ヲ應眞院ト云ヒ、標號ヲ應々山人ト云ヘリ。示寂ハ元祿十六年癸未ノ十月九日ナリ。○行平ノ歌ニ「わくらばにとふ人あらばすまの浦に藻鹽たれつゝわぶとこたへよ」▲淵明本傳、漉酒巾ノ下ニ王弘ガ使ヲ以テ重陽ニ酒ヲ贈レル事アリ。△榮花物語ニ「なにがしの阿闍梨もまうでき給へり」トアリ。△金

（四）「咲くべき比」歟

て、いひもいはれも擇まひ給へるしも、それその花の面かげのみ、年々の泪はそへぬべし。さりや此君の此道にかたうなる、萬にいちはやき所おはして、世をやつす人のわびしさも、田作る者のことわざも、まいて月雪花ほとゝぎすの折節の心におくれ給はねば、三越には、さは此君おはしてと、我家の光に思ひをおきしを、あだに風雅の花ちりて、歸山の名も今は恨めしく、あふ坂の關はとざしもあへざらん。都は花のかへり咲べく比（四）ながら、嵐山の雲も立そひて眞葛が原の風さわぐらん。むなしく朝雲暮雨の情をよするなるべし。むかし此君の都をはなれて、今の越路にうつり給ひし比は、花の蕾の三つ四つとかぞへて、いまだ六つばかりにやおはしけむ。其時をなんうしとはおぼし知らで、春の鶯の乳やほしからん、秋の鶉の床やさむからんと、ねざめの森にそだてあげ給ひし、松江のおば君とかや、我身の年月を餘所にかぞへて、頭の雪のふりつむことも思はず、たゞ此君の生先をのみ、此世の花にめで思ふらんを、かくおくらかし給ふるにぞ、今はた我身の老をかぞへて、かゝらましかば此君にを換へても行まほしきをと、物狂はしう

も寐ず。ある夜かいさめ給へる御心の、例もくるしからぬ様にて、我翁の難波にやみて、野山をかけめぐる夢心の、風にしたがひ雲にたゞよひて、そは忘れやせむ、忘まじくて此道の奴とも生れ來なば、難行の罪ものがるまじくや、此心のあつかひには、物さだめの博士こそ、まのあたりあらまほしけれど、さるがう樣にはいひなし給ふれど、たゞ今の生死を目の前におきて、いかで身のうへにははからひ給はざらん。それをも常樣に聞なして、此日此君を失へるは、道に斯文をほろぼすといへる、三越の人のなげきならざらんや。十年のむかしは、かの翁と洛の桃花坊にして、かりそめの風雅をむすび給へりしに、終日に道の虚實をかたらひ、おこたらで風雅の旗あげむとほおぼしたちね、そこなる法師こそ、くりからの坂をも越ゆべけれど、おかじごとに契り捨給へりしが。その言葉のあやまたでよ、かく入方の月の名殘をさへ、かの山の端には見はてぬらん。さほど類なき宿世をも、世におはしなばかくはしらじ、ましてありそ海砥波山の二集は、遠く八島の外の心をかよはし、そこの花のそこにあそぶ日は、近くおしまづきに筆取かはし

例の人々も召し置きぬ。其日はいとゞ心細くて、

たてよこと屛風に暮てしぐれ哉　　浪化公

つとめて此日は、龜樂のぬしもおなじ紙のならびに書て、病中の吟といふ題をみづからの筆にかきそへ、胡仲といふ者に給はらせ給ひて、我なからん後のかた見にをと、今日はいとあぢきなふ渡らひ給へば、おのれも涙はつゝみあへねど、近くさふらふ人にむきて、いかでさる事のおはすべき、此程にめでたふ見奉らんをと、公ごとには言ひもなすらん。さむれいと若々しや。世にいける身のたのむまじきをだに、まいて病の床にあらんものの、死のことば忌むらんをや。あが佛のまちおはすらん國をこそ、今は一方にねがふべけれとて、みづからの袖にもいこぼれ給はめど、まめだちたる方にや紛らはし給ふらん。さしかふ人の如何に忍ぶるぞやと、屛風のこなたより聞居たらんは、聲をはなちても泣くべかりけり。されば此程は物のきは〱しき中より、手のもの忘たらんやうに、がい寐入らし給ふるをば なほざりにまるる人は、やすければ然なむなゞどいふめれど、心得たる人は

(三) 「あればやとありかゝりの」歟

するせさせ給ふるほど、これより猶八里ばかり、秋の日のつれなくて、此あたりに暮もやせむ、急ぐべきほどの外様人は、さま〴〵にも行とゞきぬ。かくて別院の旅寐ながら十三夜の月のあそびをも見過し給はぬ御心には、氣色ばかりにながめ捨て、さふらふ人人にも心おき給ふらん、隙間の風をだにいとふ折なるにぞ、こゝにも寄りつどふ人はほかれど、中にも龜巣のあるじのみ、明暮のまじらひは世の外のやうにも思しかはすらん、その人はしも、公事に心のいとまなき身ながら、一日もかけず渡らい給ふるにぞ、淺からぬちぎりあればやと、(三)ありかゝりの人も思ふなるべし。かくて、長月もやみがちになりて、虫の聲々も寒げなるまゝに、

行秋を身にしたがふや夜著ふとん　浪化公

其夜は時雨も俄がましく、今宵を秋の名残なればと、此句を人に判せさせ給ひて、みづからもあらがひなどし給ふ。一夜二夜はさてすぎぬ。冬もさし入たる一日の氣色は、空も住がはりたる心地して、時雨もはなやかに詠むべかり。それをしも何ともいはではと、

おまへなる人々の、此つぎをもいひ〳〵たるが、物のまぎれにもらしつ。つとめてはなほめでいふ日なるべし。さるを山里は物のおぼつかなきに、今は金澤の別院にうつり給ひてよ、久しきかた〴〵につきてもちかく見給はぬ事のあやしきにと、使もうち頻り聞ふれば、大方ならぬ秋のあはれさには、そこも宮城野のよそならで、小萩が露も御心がかりにや、みづからもさばと思し立ぬらん、具せらるべき人々も、おのがじしとりしたたむるより、見送の人もあまた所に、今朝はちまたに行ちりて、馬も嘶きあへるなンど、いとゆゝしき樣におぼえ侍しが、これや永き世の門出にはおはしつらん。かくいふは長月の十日あまり、空の氣色もさだむまじう、時雨たつ雲の日影をさふるばかり、そなたの麓は照ながら、神かとばかりとゞろきたるも、あの雲の音づれにやと、見はらしたる人は思ふべかりしか。

神鳴のすゑ野はとほし花薄　　浪化公

さるは御輿に立そへる人の、かうぞ聞傳へ侍しにや。其日は石動といふ所にて、人々ひ（二）

（二）「ひすゐ」は

(一)「べちに」歟

のつねの返しばかり、便も風の耳おどろくべき頓のおとづれにはあらざりけり。長月六日七日のほどは、木の葉になり行秋の名殘を、安居の山寺にあそび居けるが、此君の心地なほおこたり給はで、今はむつかしき程におき臥し給ふるなンど、そこにまうでつる人におどろかされて、井波の方にいでまゐりつるは、菊の八日の宵にぞ侍し。上には例のなつかしう、脇息により居給へるしも、あさましきほどのやつれにもおはさで、髪はややおひすぎ給へりや。されよ此春もすぎ行ぬ。卯月も十日ばかりにや、都にての別をしさ、今年は水無月のたへがたきに、文月の文のなつかしう、七夕の三物なンど、此わたりいとゞ珍しかりしかど、一年の事ども崩し出給ふるに、此ほどの御氣色には今宵ぞすぐれさせ給へばとて、法師をなにがしの阿闍梨にあがめて、そこなる人々もさゞめき居けり。今宵はまして此君を祝ふべき、菊は折節のよはひなればとて、(一)へきに盃を奉りて、

菊の香をあふぎに汲て山路かな　東花坊

灯もはなやかに銀屏の秋　浪化公

○弔祭類

浪化公終焉記

東華坊

ことし神無月九日は、物のかなしき日なりけり。此君此わかれ、此日をこそ忘るまじけれ。秋は葉月の十日あまり、それも九日の日なるべし、此君例ならずおはしそめて、物のたち騒ぐほどにはあらねど、五日六日もさて過し給ふる由。その比法師は高岡のかたにありながら、名月のあそびもいかにぞや、此わたりは須磨のわび寐ならでもなんど、市人のたよりにつけて林紅法師に消息せしに、その返しには、

名月や夜著ににげこむ雨の音　浪化公

名月やかねてたのみし松のかげ　林紅法師

其夜はむげに雨のふりてよ、其時はとありかゝりてよ、此ほどは心地むづかしかれど、菊の日もやゝちかければ、何がしの使ならずとも、此山里の濁酒をもとへかしなゞど、よ

煎ジテ痳病ノ妙藥トセリ。△古硯銘ニ「豈非ニ鈍者壽而鋭者夭一乎」○顕詠ニ「とのもりの伴のみやつこ心あらば此春ばかり朝ぎよめすな」○つれ〴〵艸ノ御讓位ノ段ニ「殿守のとものみやつこよそにして拂はぬ庭の花ぞちりしく」○古今ノ俳諧歌ニ「もろこしの芳野の山に籠るともおくれんと思ふ我ならなくに」「按ズルニ、此一句ハ、前ニ隱逸ノ起結ト云ヒ、爰ニ和漢ノ文法ヲ繋ギタル此等ヲ鎖詞ノ絶妙ト稱スベシ。▲畫譜ニ寒山ハ箒ヲ携エ、拾得ハ巻物ヲ持テル、細擧スルニ及バズ。寒山詩ニ「可レ笑寒山道。而無ニ車馬蹤一云々」▲四睡ノ圖ハ、豐干ノ傍ニ寒山ト拾得トヲ畫キテ、虎モ睡リ居ル樣ナリ。豐干ノ事ハ前ニ出デタリ。

○評ニ云、此傳は始より終まで、例に俳諧の寓言ながら、詮ずる所は人間の浮沈より、王公后妃は更にして、數ならぬ宮女官士も、その身のほどを諷諫せり。しかるを一篇の結文にいたりて、箒に轉寐の二字をかい捨て、五睡の論に語をむすびたらん、これらを斷續の奇法にして、筆に三寸の舌ありといふべき也。

木の葉吹ちる秋のゆふべは、隱逸の心も忘れずとや。扨こそおほうちの朝ぎよめにも、諸司百官にさき立しが、いつしか御讓位の變にあひては、花もちりしく院の御所に、仕の御奴もよそ〳〵しく、かくては宮づかへもおかしからずと、塵の此世をいとふ心より、唐土の芳野も遠からで、國淸寺の會下に寒山和尙をたのみて、明暮の酒掃におこたらねば、心のちりも拂ふばかり、竹のうきふしも聞ぬ身となりて、馬に車のおとをだに見ず。しかるを豐干の四睡の圖は、我もかたはらに寐ころびて、其時の名をとゞむべかりしに、給師のあやまりて五睡ならねばと、さしもなき事をいひつのり、浮世の煤掃に立かへりて、芥川の名に流れけむ。さるは箒の傳のみにあらず、人も榮落のかぎりあれば、一季二季の奉公人とても、かゝるみのほどをしれとなむ。

○註ニ曰、●三體詩ニ「奉ニ帚平明ニ金殿開云々」此詩ハ宮女ノ奉公ノ樣ナリ。帚ト箒トハ通用トゾ。○萬葉ニ「初春の初子のけふの玉はゝき手にとるからにゆらぐ玉のを」△老子經ニ「和レ光同レ塵云々」△源氏ノ箒木ハ第二ノ卷ナリ、歌ヲ以テ名トセリトゾ。妙樂祕傳抄ニ樓欄箒ノ古キヲ

(一)「かたけれど」歟

いへる、世界に秀句のはじめなりとぞ。さて白幣青幣など、社をきよめ神を涼しむるより、天にかゝれば彗星とかゞやき、地におふれば箒木とさかふ。まして人間の用にたつ時は、●金殿をひらきて○玉箒の歌によまれ、民間に光をやはらげては、藁箒の塵にまじはる。いとゞ飾羽の公義むきには、卓の香爐に名をならべて、三羽一羽は爐手前より、風爐の炭の時節をあらため、太羽箒は尻ゐざりして、茶人の風情をもつくるなるべし。しかるに椶櫚箒といふ物は、山寺の兒そだちにて、髪も櫛の歯のはけ先をそろへ、蕨繩のまきめもかたけたれど、暖簾の奥の娵が手にふれて、あだなる心のつきそめしより、廊下に狂ひ廣敷にうかれ、馬に乗られつ鐺にふられつ、所さだめぬ轉寐に、性悪の名のたちそめて、箒々とはいはれけむ。源氏も箒木の名のみ残りて、今は紙袋の頭巾もなく、倒になりて蛛の巣をはらひ、あるは忍草のつり繩になはれ、あるは石菖の根をからまれ、果は何やらの薬とて喰物醫者にむしられて、薬罐の中のうき目を見る。彼は一類もおほかる中に、竹箒と聞えたるは、心とければ命みじかく、おほくは市中にありながら、

ナリ。△庭ノ柑子ハ栗栖野ノ結文ナガラ、「此春は伊勢のしろ人音づれて、便ゆかしき花柑子かな」ト云ヘル其歌ノ裁入ナリ。△倭語拾芥ニ「むかしより我朝に唐人の筆跡は數多なれど、虚堂の筆跡といふ詞は、取賣のならはせとなりて、大方は一行物なりとぞ。△松花堂ハ素人繪ニシテ、多クハ片成ノ墨繪ナリ。○古今集ニ「秋のきて月のかつらの實やはなるひかりを花とちらすばかりに」▲畫簾ノ榮耀トハ盧生ガ故事ナリ。前ニ出デタリ。△唯心己心ハ觀經ノ詞ナリ。前ニ出デタリ。

○評ニ云、此傳はつれ〳〵艸の栗栖野の沙汰によせて、和漢の隱者の眞僞をたぶし、儒佛の學者の殊勝を崩さむとす。そこを俳門の意地にして、頓挫の筆格とは此事也。題は讀孟嘗君傳といへる古文の例にならへるにや。作者は佐伯氏にして、藝の廣島に住す。父の里洞は先師の舊識にして、家に三代の風雅ありとぞ。

箒の傳　　井童平

天地いまだひらけざる時は、霧のごとく霞に似たるを、天津朝起の神ありて、それを掃よせ給ひぬれば、ひとつの嶋となりけるを、伯耆の國と名づけ給ひ、唐詞には伯州とも

（一）元の禪僧

むかし栗栖野の奥の奥に、花紅葉の風情をつけて、雜炊に肱をまげたる人を、まことの隱者と思へるは、大きなるあやまり也。まして今の世の人心は、素讀の比より耳なれて、九尺二間に七堂伽藍をさとり、織るにむづかしく耕すにわづらはしと、喰はず貧樂の年の暮に、婦夫いさかひの炮烙を打破りて、一念發起の青隱者となれるは、誠に世を捨たる隱遁者にはあらず、世に捨られたる天竺浪人にて、庭の柑子のしる人にもいやなり。願くばたゞ市中に松風を聞て、節供正月の妻子をとゝなへ、月雲のゆふべの友達をまねきて、虛堂（一）の墨跡はありながら、松花堂のさびをたのしまむには、春のさくらの花もあれば、秋のかつらの實もありて、それを俳諧の隱者とも、或は茶人ともいふべき也。我は晝寐にその榮耀をねがへば、ある時は唯心の嵯峨野にかくれ、ある日は己心の芳野山にあそびて、和漢の人のたふとがる、隱逸傳をあみ直す合點也。

○註ニ曰、▲つれ〲艸ニ「栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋入る事侍しに、あか棚に菊紅葉など折ちらしたる、さすがに住む人あればなるべし」△曲肱ハ論語ニアリ。雜炊トハ其段ノ取意

(一二)「飛流直下三千尺、疑是銀河落二九天一」

も又宜也。

○註ニ曰、△音語トハたちつノ通ニヨリ譯文ノ一名ナリ。砂鉢ト云ヒ、三線ト云ヒ、蟬ト云ヒ、錢ト云フ類ハ、音卽訓ニシテ、八義ノ中ノ音語ナリ。都久念トハ萬葉假名ニシテ、都久ト築トノ兩用アリ。大和詞ノ後勘ニ見ルベシ。▲撰集抄ニゆがみ坊ノ事アリ。前ニ出デタリ。△論語ニ「三十而自立云々」●古今ノ旋頭ニ夕貌ノ歌アリ。前ニ出デタリ。△許由ガ瓢ハ前ニ在リ。爰ニハツレヅレ艸ノ詞ヲ採レリ。△李白カ瀧見ノ圖ハ世ニ多シ。「飛流直下」(一二)ノ詩ニ據レリトゾ。●飲中八仙ノ詩、「李白一斗詩百篇云々」斗樽トハ此意ヲ摘メリ。●公子行ノ詩ニ「借問酒泉何處在。牧童遙指杏花村」△神仙傳ニ「盡二金壺之之美一云々」

○評に云、此傳は實記にして、論語に自立の二字をもて瓢の一生を諷諫せり。しかるに築然の音語より、道心の名にひゞかせたらん、例のなかしく例のさびしく、こゝに茶人を笑殺すといふべし。此ぬしは荒井氏にして、俳名を猿之といふ。主君の沒後に發心して、濃の岩崎に隱遁せりとぞ。

讀二隱逸傳一　　佐 其 玉

（一）「とを」は「ことを」歟

からんとを思ふ。本より其姓は瓢にして、其名は纍然ともよぶべければ、音語は大和のつねなるより、萬葉の時は都久念ともいふべし。さるは世をすねたるゆがみ坊の掛花生ならんと聞ゆれど、その長は一尺ばかりにして、口細に痩かたぎなるが、床に置こそ殊に愛すべけれ。誠に此物はみづから立てりあたはず、木にそひ竹にたより、垣根につたひ隣の屋根にもはひわたりて、花は夕顔の歌にはよまれねど、白く咲たるはさながら物さびし。今や此物の生質を思ふに、野分のあした霜のゆふべ、身を中空にふらつきて、境界さらに尻を居ゑたる事なし。日にほす時は倒につられ、物入る時は柱にかけらる。たま〳〵許由の水飲となれゝど、そこの木の枝にかけられて、風にかしましと憎まれけむ。されど李白が瀧見には、例の斗樽に留守させて、おのれは童子の肩にはひのぼり、杏花の酒の道すがらは、彼が一生の榮花とは見ゆ。しかるを今の山里に、風に瓢簞の浮名をかくして、世をつくねんと居りならびたるは、金壺玉瓶の美にあきて、山木水草のわびをたのしむらんと、汝を愛する其人もゆかしく、其人に愛せらるゝ汝をうらやむ

の土にかへりぬれば、すべて燒物の觀相となりて、たとひ南京の染附も、金襴にしきのかりの世なればと、無常を知らしむる便とはなりぬ。

○註ニ曰、△伊部ハ備前ナリ。常滑ハ尾張ナリ。擂鉢炮烙ノ類ノ名所ナリ。▲岩戸ノ關ハ前ニ出デタリ。△授決經ニ「昔有二貧女一、以二一灯一欲レ作二後世德本一。特勝二諸灯一云々」●詩仙叢話ノ宮詞戲ニ君一盃酒一。忘二妾百年身一▲三國志ニ「張遼字文遠、勇力過レ人、莫二不レ怖者一。曰二遼來一則小兒止レ啼云々」張遼ト饅頭トハ例ニ強弱ノ詼諧ナリ。

○評ニ云、此傳は例の寓言ながら、詮ずる所は瓦器の訓義より、神祇釋教戀無常に、彼が四相を觀じたらん、筆に笑言の術ありといはむ。たとひ鬼神のなみだならずも、たけきものゝふの腹筋はよりぬべし、作者は藝の廣島に產して、河本氏の騷人なり。みづから五蘭子と稱せりとぞ。

築然の傳

東花坊

みのの山里に世捨人ありて、明暮の調度はさしもならねど、花生ひとつをのみ祕藏せられしが、彼が名あらん事を我にもとむ。我はた茶人の物數奇に敵して、其名のぬめりな

にうつし、内侍所の明暮にも、此物なからざらんには、和光の影もいかにつたへむ。況や釋教のはじめには、燃灯佛の御もとにて、貧女の一灯をかゝげしより、十二灯といひ萬灯といへる、いづれか此物なくてありなむ。さて初春の蓬萊には、ふたつ重ねの妹背を祝ひ、娵取聟入の晴がましき、金銀に身をかざりて、三々九度の榮花をつくす。げにも一盃の酒にたはぶれて、百年の身をわするるといへる、古人のいましめもおそるべくは、むかし野山の竈を出し、素顔のさびをわすれざれ。つら〳〵それが一生を評せば、院家門主のお手にふれては、一滴の流に萬民をうるほして、尼入道の袖をぬらさしめ、愛宕(一)山の嵐にひるがへりては、女子わらべの慰となれるも、さもしき煎餅の買喰には似ざらん。まして春秋の灸する比は、かならず此物にひねり置て、童部の泣をやむる事は、唐土の遼來はいざしらず、三分(二)饅頭の威光にはまさりぬらん。されど世界の有情非情ながら、生死の斷をはなさねば、靈祭の比は一家ひきつれて、軒の灯籠の迎火より、汁の菜のと身をくだきて、送火のあしたの物あはれなる、果は鴨川の流にたゞよひて、もと

(一)京都愛宕山の土器投

(二)三分は一匁の十分の三、饅頭の價也

し、例の諷諫を信ずべし。さて一篇の稱する所は、前には平安の都をいひて、道具屋に藪の一字をおこし、後には長安の市をいひて、出替宿に憂節の二字をむすぶ。しかれば一篇二段にして、こゝには髭黒の肉太といひ、かしこには赤鬚の暑病といへる、句對字對は例のいはず、文對の巾の一格にして、これらを隔對の絶妙と稱すべし。作者は深山氏にして、賀の金城の素生ながら、越の石動に婚官すと。亘は姓にして童峰をあざ名とす。詩書に博覽の風士なりとぞ。

瓦器の傳

河何龍

そも瓦器といふ物は、混々沌々の間より生じて、その容まろくその性あかし。それを天帝のはからひにて、神祇釋教戀無常の、四季のうつは物とはなせりけり。それより人の代の調度となりて、嵯峨深草の土をえらび、伊部常滑の名にわかれて、瓶ともいひ炮烙ともいへど、いづれも彼が氏族なりけるとや。しかるを我朝の重寶記には、土器をかはらけと訓ぜしが、さるは陶物の惣名なるべければ、和訓は瓦器の二字を用ひて、音訓の通語たるべしと、享保年中に此傳はさだまりぬ。誠や岩戸の常闇には、一點のひかりを鏡

ゾ。▲琵琶湖ノ宇賀長者トハ、竹生島ノ辨財天ヲ指テ、竹ト夫人トノ寓トス。此等ニ傳記ノ文用ヲ知ルベシ。△參差ハ絹張ノ具ナリ。倭ニハ簇ノ字ヲ用ユ。和訓ハカタヽカヒノ意トゾ。△白雲ノ鄕ハ東坡が詩ニアリ。爰ニハ莊子が無何有ノ鄕ト見ルベシ。▲竹とりの物語に竹の中より美しき娘を得ておふし立てたる事あり。萬葉ノ歌ハ前ニ沙汰アリ。△木六竹八トハ俚諺ナリ。木ハ六月ニ伐リ、竹ハ八月ニ伐ル事トゾ。爰ニハ若男ノ寓名ナリ。▲源氏ノ玉蔓ノ巻ニ、髭黒ノ大將ノ誹諧アリ。肉太トハ今ノ形容ナリ。▲芙蓉掌ハ漢武故事ニアリ。前ニ出デタリ。○後撰集ニ「秋風の吹くにつけてもとはぬかな荻の葉ならば音はしてまし」⑮班女ノ扇ノ怨歌行ハ、前ニ出デタリ。△長安ハ漢土ノ都ニテ、帝都ニ和漢ノ市ヲ對セリ。▲山谷ハ黄魯直が標號ナリ。石牛洞ハ魯直が別墅トゾ。⑯山谷詩集ニ「趙子充示二竹夫人一。詩蓋涼寢竹器、憩レ臂休レ膝、似レ非二夫人之職一。予爲名曰二青奴一。並以二小詩一取レ之。穠李四絃風拂レ席。昭華三弄月侵レ床。我無二紅袖堪レ娛レ夜。政要青奴一味涼△黄龍寺ト云フハ晦堂和尚ノ寺ニテ、山谷居士が參禪ノ師ナリトゾ。

○評ニ云、此傳は全く寓言ながら、始より終まで竹夫人の榮落をもて、人に寵辱の進退をさとせ

此殿も見過しがたく、帝にも啓し聞えさせ給へば、竹の翁のよしあればと、竹夫人とは召しけるとぞ。されど秋風の吹くにつけて、夜も長月のそら淋しく、葛の上葉もあちらむく比は、おなじ心につかへぬる、扇も閨の怨を殘して、殿の御けしきにもたがひぬるより、あやしき板敷のごろねがちに、今は籠の目の涙にもとゞめず、如何なる山里の一季奉公にもと、此世を思ひ果しが、捨がたき宿世のちぎりにや、唐土船のうき瀬にさそはれて、長安の市の出替宿に、憂寐のふしぐ〵をかぞへあかすに、花の三月もおもはしき口なく、身を卯の花の時にも鳴て、凌宵の花のもゆる比には、そこにも赤鬚の暑やみありて、山谷が家にかよへられ、石牛洞の添寐には、鬚の因果を恨ながら、名をさへ青奴とかへられて、今さら冠者のさまながら、穠李昭華と寵をあらそひしに、其人も遠流の事おこりて、此洞のひとり寐もあやしければと、菩提所の黄龍寺にあづけられしが、反故籠にや成果ぬらん、煤掃の後の行衛をしらず。

○註ニ曰、△竹夫人ハ抱籠ノ唐名ニテ、臥内ノ暑ヲ避ル調度ナリ。或ハ竹奴トモ青奴トモ云ヘリト

○傳の類

竹夫人傳

良峯

むかし琵琶湖の浮島に、宇賀長者のひとり娘あり、錦帳のうちにひととなりて、終に參差のみをまげず、田樂の灰をもふまざりしが、一夜の雪の轉寐より、鳥の名ながら住うかれ、行衞も白雲の鄕をはなれて、藪里の片ほとりにさまよひたるを、竹取の翁にはごくまれて、雨にたもとのかわく日もなく、風に鬘もくしけづらず、木六竹八のあだ名たちて、鉈とやらんのからき目にあひ、鋸の音のうきふしにひかれて、果は籠つくりに身をまかせ、都も藪下の道具屋に賣れたるを、その比鬚黑の大將とて、肉太なる殿のおはしけるが、取賣の媒にめされて、すゞしの蚊帳になれまるらせしに、本より仙女の芙蓉掌をさゝげて、風をまねき露をふくめば、水無月のそらの堪へがたきにも、眞爪葛水のかりそめにはあらで、大將大きにめで給へば、あまたの御許人も紅粉を失ふ。かくては

サランヤ。然レバ此等ノ文法ヲ、雙關ノ絶妙トモ互照ノ好辭トモ稱スベキナリ。△つれ〴〵草ニ法花堂の三昧僧、ある時鏡を見て我かたちの見にくきをはぢたりと。其段の評詞に「但容は鏡に見ゆ、年はかぞへてしる」トイヘリ。○覊旅ノ歌ニ「鏡山いざ立よりて見て行かん年へぬる身は老やしぬると」○金葉集ニ「かはり行く鏡の影を見るからに老曾の森のなげきをぞする」▲螢雪ノ二句ハ四季ノ用ナガラ、孫康車胤カ學文ニ寄セテ、儒佛神ノ學道ヲ粉成ントス。例ニ俳文ノ意地ヲ知テ、鼻毛ノ二字ニ看破スベシ。

○評ニ云、此銘は虚實相まじはりて、大和に眞名の文鑑ともいはむ。さらば讀の一字をもて、水と花との當用をわけたる、或は和訓の字くばりより、句讀の長短をとなへたる、これらを眞名の詮用といはざらんや。さて一篇の稱する所は、我日本の神を稱せむに、鏡の沙汰に更なれど、儒佛の二鏡の殊さらにおかしき、爰を俳諧の滑利といひ、徹中解紛ともいふべき也。作者は例の渡吾仲にして、銘は入道の後の自稱なるべし。

法ニハ隱見ノ絕妙ト稱スベシ。△一寸四方トハ心ノ方寸ナリ。唯心モ已心モ此用ト知ルベシ。「按ズルニ、此二句ニハ大和ノ眞名文ニ句讀ノ設アリ、是ヲ漢文ノ字配リニ云ヘバ、被照ノ二字ヲ以テ爲入ノ上ニ置クベキヲ、和訓ハ語路ノ違アリテ、上ノ讀ハ十字ト成リ、下ノ句ハ五字ト成ル故ニ、上ヲ八字ト成シ下ヲ七字ト成シテ、句讀ノ長短ヲ配レルナリ。此等ハ大和ノ新製ニシテ、例ニ倭文ノ國出ハ返點ナキ故ニ、和漢ニ音訓ノ差別アリトゾ。前撰ノ百花賦ニモ、木爪花ニ此配アリ、比丘尼ノ句讀ニ互見スベシ。△唯心モ已心モ淨土經ノ語ナリ、前ニアリ、△去此不遠モ前ニ出タリ。△日本紀ニ「乃以二左手一持二白銅鏡一則有二化出之神一是謂二大日靈尊一」云々」大日靈ハ天照皇ナリトゾ。▲岩戸ノ事モ八咫ノ鏡モ前ニ出デタリ。△齊部廣成ノ古語拾遺ニ「八十萬神於二石窟戸前一擧二庭燎一巧作二俳優一相與歌舞云々」俳優ノ二字ハ漢書ニ出テ、滑稽ノ優游トゾ。▲鏡ノ御影ハ筑紫ニ在リ。天神ノ自畫ニシテ、神酒ヲ供フレバ色ニ出デ給フトゾ。「按ズルニ此結語ハ、岩戸ノ鏡ノ影迎ヨリ、御影ニ神酒ヲ結ビタルハ、菅神ハ本ヨリ風雅ノ祖ニシテ、神變ノ和光ヲ尊バ

地、方圓ハ前ニ出デタリ。△天下一作トハ、鏡裏ノ銘ニシテ、爰ニハ其銘ノ古風ヲ稱ス。君父以下ノ三章ニハ、五倫ノ裁斷ヲ見ルベキナリ。○古今集ニ「年をへて花の鏡となる水はちりかゝるをやくもるといふらん」「按ズルニ此五字ハ、大和ニモ眞名ノ用アリト云ハン。假名ニハ水之鏡ト續ク故ニ、水之鏡ニシテ花之鏡ニ非ズ。眞名ニハ成ノ字ヲ以テ水ト鏡ヲ隔ル故ニ、水ヲ以テ花之鏡トハ成セリ。去ルハ眞名ノ伊勢物語ニ、人爲ㇾ被ㇾ知ノ歌ノ手爾波ニハ、不不ト華爲トノ差別アリ。但シ爲ト矣トハ大和詞ニ勘アリ。▲鳥ノ我影ヲ見テ其鏡ニ舞フ事ハ、まさな草ニ出テタリ。細擧ニ用ナシ。畢竟ハ花鳥ニ寄セテ鏡ノ風雅ヲ云ヘルナリ。△論語ニ「七十而從㆓心所ㇾ欲不ㇾ踰ㇾ矩」△大所學ニ「道在ㇾ明㆓明德㆒云々」△論語郷黨ニ「紅紫不㆔以爲㆓褻服㆒」註ニ「紅紫近㆓於婦人女子之服㆒也」△論語ニ「關雎樂不ㇾ淫、哀而不ㇾ傷云々」詩經ノ關雎ハ、夫婦ノ中好キ喩トゾ。△大學明德ノ註ニ「程子曰、虛靈不昧、以具㆓衆理㆒而應㆓萬事㆒者也」「按ズルニ、此結語ハ程子ノ實學ヲ謗ントテ、強テ我家ノ虛ノ字ヲ擧ゲテ明德ノ二字ノ證文ト成セル、例ニ俳諧ノ意地ト知ルベシ。△淨玻璃ノ鏡ハ佛經ニ出テ、三世通達ノ喩ナリトゾ。「按ズルニ此起語ハ、俳諧ノ面影ヨリ、箱ノ一字ヲ形容セシニヤ。

抑從正月之重鏡、五九添月日之光了則、不失四季折々之姿、花爾者水之成鏡兮、鳥爾者翟之寫影兮。孰若不爲風雅之便歟者。但聞儒門之孔夫子者、七十而從心所欲共、建置明德之鏡而、若紫之伊達者不爲歷、樂而不淫兮哀而不傷兮。程子歷所謂虛美不昧則、可謂孔子無兮諧之虛實矣耶。扨又佛家之釋世尊、高懸置淨玻璃之鏡而、令覗地獄極樂了則、八萬大衆歷五百羅漢歷、爲入一寸四方之箱被照智惠之鏡而、唯心淨土兮己心彌陀兮、去此不遠與所。矧夫神國之天照皇者、生給白銅之鏡則、被爲泛岩戶之神樂而、移給于八咫之鏡居矣。左有者萬之神遊迚、有面白俳優之歌給則、歌人連歌之家者不知、俳諧侚者供神酒而不崇鏡之御影焉耶。乍左有入道者、懐入一寸之鬚鏡而、容者所見其鏡兮、年者所算此指兮、額皺之漣々波也、鏡之山歷近了則、恥老會森之名而、墮涙而鬚歷不拔。增而可覗儒佛之奧義探神道之祕密耶。螢夕兮雪旦兮、仰花嘯月而、爲鼻毛之用心而已也。

○註ニ曰、△老子經ニ「天地之間、其猶橐籥乎。虛而不屈、動而愈出云々」橐籥ハ吹革なり。△天

にむかふ時に、語路の拍子のたがふもおほからん。滅後の選論は此大事をしるべしとぞ。さて笠のうらに物書給ふは、祖翁の在世にあまたありて、伊賀より芳野の紀行には、岩菊丸を具せられて、櫻見せうぞの狂筆あり。されど其笠の行衛を聞かず。其後木曾寺の形見わけに、湖東の孟耶観につたへられ、笠塚の名に殘されしは、洛の野童子が作れる笠なり。或は武江の發句塚とは、今の發句の短册を埋めるよし。しかるを例の泊船集には、やどり哉をしぐれ哉と出せり。さるは羽の鶴岡に住せる、澤嵐乜が掛物には、笠やどりの前書をかへられ、直筆の證文あれば、これらに選論の用をしれと也。

鬚鏡銘

百阿佛

原夫世界之始者、無鍛冶鑄物師之橐籥了共、天圓地方也了、萬物各莫不具質含德事臭矣。中爾歷謂鏡物者、傳儒佛神之魂而、遠照國家之政兮、近顯君父之道兮。況向明暮之鏡而、男者持鬢之不暴心則、女歷嗜目許之有鹽敷樣而、寐宛起宛松之二葉、成日出度御代之媒了矣。斯者和五倫之中了則、實歷謂鏡之天下一者矣。

殊に興ず。興のうちにして俄に感ずる事あり。ふたゝび宗祇の時雨ならでも、かりの宿に袂をうるほして、みづから笠のうらに書きつけ侍る。

世にふるはさらに宗祇のやどり哉

○註ニ曰、▲竹取翁ノ事ハ、萬葉ニ長歌アリ。擧グルニ及バズ。△つれ〴〵草ニ「妙觀がかたなはいたくきれず」トアリ。△撰集抄ニ「もゝすぢりゆがみ坊まがれるながら往生す」ト云ヘル、其詞ヲ互照シテ、次ニ西行ヲ出スベキ斷續ノ筆法ナリ。△富士見西行ノ笠ノ圖ハ、畫師ノ家ノ形容ナリ。△東坡ガ「載レ笠乘レ驢」ト云ヘル雪中ノ圖ハ、和漢ニ多シ。○古今ニ、宮城野ノ歌ハ前ニ出デタリ。

●詩仙叢話ニ「笠重呉天雪。屐香楚地花」○宗祇ノ發句ニ「世にふるもさらに時雨のやどり哉」

○評ニ云、此銘は諸集に出て、こゝかしこのたがひめあり。さるは元祿甲戌の夏、伊賀の西麓庵にいまして、文稿十二篇の再校ありしが、此銘もその一篇也。されば遺稿の夜話にいへる、今や故翁の遺文とて、傍聞の麁抹は論にたらず。風國が泊船集のごときは、落柿舍にたよりて人も信ずべけむが、まさにおそるべきは古文のたがひめならん。たとひ自筆の遺文ありとも、我と我文

（一）「堪」は「勘」なり
（二）「ならへり」歟

○評ニ曰、此銘は虚實の當用にして、歐陽公に不仁の字をおふせ、殿の一字に訴詣せし、談笑の意地を堪破すべし。しかるに與叔が克己銘は、敵味方の用ありて、此銘の證文となせる、格は陋室銘になへり。作者は尾城の史官にして、大崎氏の逸士なりとぞ。

澁笠銘 並序　　芭蕉翁

草の扉にひとりわびて、秋風さびしきをり〳〵、竹取のたくみにならひ、妙觀がかたなをかりて、みづから竹をわり竹をけづりて、笠つくりの翁となのる。心しづかならざれば日をふるに物うく、巧につたなければ夜をつくしてならず。旦に紙をかさね、夕にほして又かさね〳〵、澁といふ物をもて色をさはし、ます〳〵堅からん事をおもふ。二十日すぐる程にこそ、やゝ出來にけれ。其かたち裏の方にまき入、外ざまに吹かへりなど、荷葉の半ひらくるに似て、中々おかしき姿也。さらば墨尺のいみじからんより、ゆがみながらに愛しつべかし。西行法師の富士見笠か、東坡居士の雪見笠か。宮城野の露に供つれねば、呉天の雪に杖をやひかむ。霰にさそひ時雨にかたむけ、そゞろにめでて

をこしらへて、をり〳〵座右を打ならせば、世にいふ唐鐵砲の心にて、是を蠅打といふべきや、蠅はらひといふべきや。すなはち其柄に銘して曰、

殺事なかれ。敵はふせぐべし。

打事なかれ。蠅ははらふべし。

△胡爲不仁なるやと、

與叔が克己の銘にあり。

○註ニ曰、△つれ〳〵艸ニ「盃をとれば酒をおもひ、賽をとれば攤うたむ事を思ふ」「按ズルニ、此對ハ、鐵砲ヲ見レバト云フベキニ鳥ト賽トノ一字ヲ對シテ、倒裝ノ絶妙ト稱スベシ。▲秦ニ長城ノ防ギハ史記ニ出デタリ。一炬ノ火ハ阿房宮賦ニ在リ。炬字ヲ炬トハ和訓ノ習俗ナリ。△論語ニ「釣而不レ綱。弋不レ射レ宿」△中庸ニ「愼二其獨一也」△憎レ蠅賦ハ歐陽公ノ作ナリ、爰ニハ殿ノ一字ヲ稱スベシ。△家語ニ「其征也、還二師衽席之上一云々」○與叔が克己銘ニ「凡厥有レ生、均レ氣同レ體。胡爲不仁云々」

炭取瓢の銘

此銘ハ謎文ナリ。評註ニハ及バズ。獅子庵ニ五寶ノ其一ナリ。

獅子老人

花は夏さきてしろく
實は冬いりてくろし

蠅打の銘 並序

崎一秋

おほよそ打物のその物における、賽をとれば双六をおもひ、鳥を見れば鐵砲をおもひ、太刀かたなをさしはさめば、たゞちに人を殺さん事を思ふ。其人は人にかたむとして、防ぐといふ道理をしらず。さりとて秦の長城は一炬の火の油斷よりほろびたり。此故に聖人は仁の一字を本として、魚をとれども網をはらず、鳥を射れども塒をおびやかさず、蚊には蚊屋をつり、團扇をとゝなへて、其獨をつゝしめり。しかるを其家にあそびながら、歐陽殿は蠅をにくみて、椶梠の葉の蠅打をこしらへ、炮烙の尻に黐をぬりて、悉く殺しつくさむとす。さるは軍を社席にかへす、孔門の教にはあらざめり。予は竹皮の蠅打

我此箱もをさまれる代は　むかしのつるぎ今の飯櫃

○註ニ曰、△尹文子ニ「萬事歸レ一云々」碧巖錄ニ「萬法歸レ一云々」▲螢雪ノ故事ハ前ニ出デタリ。△達磨ノ六門集ニ「以レ心傳レ心、不レ立ニ文字ニ」▲晉書ニ「郝隆七月七日仰レ庭、曰、曬ニ服中書ニ云々」其銘▲莊子ガ蝶ノ事前ニ出デタリ。▲野語述說ニ「勸學院ノ雀ハ蒙求ヲ囀ルトハ野語ノ說アリ。或ハ云、雀卽僕隷名也トモ、或ハ云、學院園中有ニ黃鳥ニ呼ニ呂望非熊四字ニトモアリ」△淮南子ニ「魯般仕ニ楚王ニ作ニ雲梯ニ攻レ宋云々」▲竹田ハ倭朝ノ細工人ニテ、爰ニ和漢ヲ對セン爲ナリ。△倭語拾芥ニ「むかしの劍今の菜刀とは、盛衰の變化をいひ、老者の血氣をいへりとぞ」

○評ニ云、此銘は隱見の筆法ありて、虛に居て實をおこなふとやいはむ。詮ずる所は、儒佛者の和漢の書籍を買ひあつめて、博學の名をかざれば也。しかれば達磨と郝隆とは、學をこのむ人の程にして、用捨は此間にしるべき也。況や飯と劍との錯綜は、例に笑中の刃といふべし。作者は菅氏にして、別に木牛兒と標號す。八尾城の仙觀を師として、書をよくし畫をよくす。童名を萬能麿といへりとぞ。

心の實なりて、千枝萬葉の經書とはなれりけり。しかればあらかねの土も木も、太平樌、の學者まで、晝は油の錢もいらず、夜は螢雪のまかなひをして、精出すべきは學文の道也。しかれども達磨大師は、蠹に銀杏の葉も求めず、鼠に栗の毬もむづかしとて、童子經一卷をも持給はず。まして本箱の沙汰はなけれど、我は隆老か生皮にならひて、腹の隅々に棚をつり、儒書佛經はつみたれど、酒によふ日は物を取ちらし、食にあく時は眠おこりて、その置所も忘れがち也。よしさらば此蟲ほしより、一理萬通の俳諧にあそびて、其蓋をあけぬ思案をすべし。

其銘

智惠は海より廣い物とよ　假名と眞名との船も行かふ
杉の直なる詩をけづりてや　桐の節なき歌にやはらぐ
机に蝶の目をさます日は　軒に雀のいろはさえづる
魯般が雲の橋はかけずも　竹田が鶴に乘て遊ばむ

ド、荳翁ノ連綿ニ對セントテ、論語ニ嗅字ヲ假リナガラ、雌雉ト一名ニ訓ジタル、此等ヲ摘語ノ絶妙ト稱スベシ。▲淵明ガ本傳ニ「常撫ニ無絃琴一。曰、但識ニ琴中趣一、何勞ニ絃上聲一云々」△論語ニ「質勝レ文則野、文勝レ質則史。文質彬々而然後君子也」

○評ニ云、此銘は廿句十韵にして、文欣の韵のせばきをもて、一字も私の韵礎をもちひず、すべて漢文にしてすべて倭語なり。これらに狂詩と俳詩との雲泥なるをしるべき也。さて一篇の稱する所は、無絃に俎板の容をよせて、常に魚鳥の富貴を求むより、海雲荳翁のさびをたのしみて、風雅の趣をしれやとは、誠に文質彬々として、ある日は風雅の實をおこなひ、ある日は俳諧の虚にあそびて、是を我門の文者とはいふべき也。

本箱の銘 並序　　菅師冬

久かたの天の地を文庫として、中に月日のともし火をかゝぐれば、萬物おのづから四時にわかれて、其四つは二つとなり、其二は一に歸するより、聖人は其一にあそび、愚人は其三其四にまどひて、今は六藝の名にならへば、すでに儒といひ佛といひ、詞の花に

ントテ、新古ノ二字ニ力ヲ添ヘタリ。△論語ニ云ヘル告朔ノ餼羊ハ、俎板ノ銘ノ寄セニシテ、愛
コハ晦朔ノ佳節ヨリ、年月時ノ日用ヲ見ルベシ。△三日ノ節ニ鶴ノ庖丁ノ事ハ、本膳式ノ沙汰ニ
ヤ、尋ヌベシ。△七種ノ式ハ學グルニ及バズ。△孟子惠王ノ章ニ「庖有二肥肉一云々」宣王ノ章ニ
「君子遠二庖厨一云々」「按ズルニ、此一句ハ、莊子ニモ梁惠王ハ庖丁ノ沙汰アレバ、宣王ノ如ク庖
厨ハ遠ケズト、同書ニ同語ヲ飜轉セシ、此等ヲ奪胎ノ絶妙ト稱スベシ。△論語ニ「俎豆之事則嘗聞
レ之矣。軍旅之事未二之學一也」▲論語ニ父攘レ羊而子證レ之。子曰、父爲レ子隱、子爲レ父隱。直在二
其中一矣」▲史記ニ「桓公曰、易牙亨二我子一以快二寡人一。倘可レ疑邪」「按ズルニ、此對ハ、羊ニハ俎豆
ノ孝行ヲ含ミ、兒ニハ饗應ノ忠節ヲ顯ハス。君臣父子ノ字對ハ更ニシテ、文ニハ意對ノ絶妙ト稱
スベシ。△論語ニ「畏二天命一、畏二大人一云々」「按ズルニ、此對ハ公私ノ二用ヲ云ヒナガラ、河豚ト云
ヒ海雲ト云ヘル、物ノ名ノ働ヲ見ルベシ。△白馬ノ談笑訓ニ「色を好む事溫飩のごとくすべし。
蕎麥切のごとくすべからず。豆腐には和歌の體ありて、蒟蒻には俳諧のさびありとぞ」△論語ニ
「山梁雌雉、時哉々々、子路共レ之。三嗅而作」「按ズルニ、此一對ハ、雌雉トハ雉子ノ雌鳥ヲ云ヘ

俎板銘

岸昨囊

日新兮日古　朔云兮晦云
竪象一年往　横準四時嚑
三日節獻鶴　七種粥囃芹
惠王何遠廚　孔子未學軍
子攘羊隱父　臣亨兒饗君
抑鱣身欲滑　解鱠鬆爲斷
鎌矛頻令響　納豆坐所聞
天命畏河豚　我生宜海雲
爭忘莨蒻銹　縱嗅雌雉薰
寧識無絃趣　質而且有文

註ニ曰△書經湯之盤銘ニ曰、「日新日々新」「按ズルニ、此發語ハ俎板ノ日用ニハ甕晴アルヲ云ハ

其口一。銘曰、古之愼ㇾ言人也。中略 口是禍之門也云々」△關口ノ聯ハ前ニ出デタリ。△論語ノ異端ノ註ニ「當下如二淫聲美色一以遠上之云々」「巧言」ノ二字モ論語ノ詞ナリ。

銘解

△論語ニ「吾豈匏瓜也哉。焉能繫而不ㇾ食云々」▲許由ガ瓢ハ隱逸傳ニアリ。細擧ニ及バズ。▲空也ノ鉢扣ハ高僧傳ニ在リ。細擧ニ及バズ。△韓文ニ送二孟東野一序ニ「大凡物不ㇾ得二其平一則鳴。以ㇾ鳥鳴ㇾ春、以ㇾ雷鳴ㇾ夏、以ㇾ蟲鳴ㇾ秋云々」「按ズルニ、此一段ハ鳴ノ一字ニ言語ヲ形容セシガ、韓子ガ神鳴ハ憎愛ノ結ビニテ、此等ヲ文中ノ文ナガラ、漢ニハ筆端ノ鼓舞ト云ヒ、倭ニハ筆占ノ絕妙ト稱スベシ。△莊子ニ「魏王貽二我大瓠之種一。我樹ㇾ之成而實五石云々」△倭語拾芥ニヨリ殿ヘマキルトイヘルハ、識伊達ナル學者ノ證據ニマドヘル樣也。

○評ニ云、此銘は克己の意也。しかれば一篇の稱する所は、猿に視聽言の三を起して、瓢に言の一字を結べる、口は誠に老後の嗜としるべし。作者は越の福井に產して、俳諧に一城の發頭なり。氏は天井にして、有底窩と標號す。昨雞伯兎は忘年の友なりとぞ。

そびながらも、自己の不自在をかへり見れば、道理はかへりて理屈なるやと、座右の瓢に其意を銘して、其後の箴とはなしける也。

銘に曰

瓢よく〱、汝は目もなく耳もなけれど、繋而不レ食やと、口に自慢の沙汰あれば、若きは花の名にまがふとも、老ては口をつゝしめや。

瓢よく〱、物に虚實の變あれば、打身の黒焼に實をも認ざれ。鯰をおさゆる虚にも浮ざれ。虚實は其日其時の用なるをや。

飄よく〱、許由は鳴を憎めども、空也は鳴を愛せられしか。韓愈が友達をおくるとて、おほよそ鳴物は不平なればと、春の鳥よりも秋の蟲よりも、夏の神鳴をきゝつるよし。たとひ五石の大いならんも、又は千生の小さからんも、口より殿へまいるといふ、俳諧の法語を忘されと也。

○註ニ曰、△視聴言動ノ四箴ハ前ニ出デタリ。△家語ノ観周ニ「入ニ太祖后稷之廟一、有ニ金人一焉。參緘ニ

どもその門人として、百世の名望をつゝむにたふべけむや。すべては遺稿の祕記なる也。誠に命官の占文を評せば、金階玉階の名はしらず、たとひ破厄孤驛のごとき凶星に逢ひたらんも、手藝術士の蜚にはあらで、世すでに我師の文章をしたへば、こゝに禪師の掌をさして、たとへば俳諧の大宗師といふべき也。

瓢の銘 并序

天嵩吹

世間に庚申の夜をつゝしむ事は、むかし視聽言の三箴より、三疋の猿を繪に寫し、視ざる聽ざる言ざるの爲なるよし。それが中にも、口をもて禍の門なればと、魯の廟守の口をふたぎて、其國の其子孫までも、言をつゝしむの證人に、孔子は書つたへ給へりとぞ。近くは關口の聯といふ物に、物いへば脣さむし秋の風とは、我家の翁の箴なるをや。予ひそかに三箴を思ふに、耳と目は若き時の箴にして、淫聲美色は我すでに老いぬ。口は朝夕にうまからん事をもとめ、言はます〳〵たくみにして、老の繰言も例のおほえず。今生も後生も俳諧につゞめて、他人のよしあしをためむとす。しかは言語のあ

(一)「鳶飛戾レ天、魚躍二于淵一」

△鑑之影坊ハ一篇ノ結語ナリ。「按ズルニ、十論以下ヨリ「認レ虛認レ實」マデハ、十論一部ノ註釋ナガラ、儒佛詩歌ノ褒貶ヲ斷リテ、影坊ノ二字ヲ以テ例ノ言語ヲ散ジタル、談笑ノ諷諫ハ更ニ言ハズ、微中解紛ノ絶妙ト稱スベシ。千歲ノ二字ハ太玄經ノ取意ナリ。

銘の解

△魚鳥ノ一對ハ詩經ノ取意ニシテ、魚鳶ノ天遊ヲ云ヒナガラ、魚ト鳥トヲ自他ニ成セル、コレ等ハ摘採ノ筆力ニテ、格ニハ飜轉ノ絶妙ト稱スベシ。或ハ擇レ林トハ、夜間擇レ木鳥將レ墮ト云ヘル、例ニ古語ノ取意ナリ。△文章錦繡ノ一對ハ、一掌經ノ頌文ナガラ、難易ノ二字ノ働ヲ見ルベシ。△曾孔ノ對ハ、顚倒ノ格ナリ。孔子ノ道ハ曾參ニ傳ヘ、曾參ノ道ハ子思ニ傳フ。伋ハ子思ノ名ナリ。「按ズルニ、此一對ハ、祖翁ニハ東華坊アレド、蓮二ニハ子思ナシト、銘者ノ辭義ヲ演ベナガラ、三人ヲ以テ四名ニ對セル、顚倒ハ例ノ常法ニシテ、文ニ錯綜ノ絶妙ト稱スベシ。勸懲ノ對ハ字意ノ働ナガラ、温厲ノ變ヲ盡セリト云フベシ。

○評ニ云、此銘は前後實錄にして、我師の生卒をあらはせば、注者も評者も憚る所おほし。しかれ

トハ、獅子庵ノ遺稿ノ夜話ニ「我むかし手習のはじめに、其寺の紅葉を見て、「色は葉に出てちりぬる紅葉哉」といひしに、師の坊やがて其脇に、「山のけしきもあさき秋風」と附給へり。さるは我伯父の古風を聞おぼえて、かくこそ申出つれ。孟母が友えらびも此故なれば、今の若き人々は、生知の才覺も出づべき事にや」トアリ。「抜ズルニ、此夜話ハ、祖翁ノ遺訓ニ、我滅後廿年ニシテ俳諧ノ上手モ出ヅベキ事ナリト宣ノ。其訓ノ評詞ナリ。△滕王閣記「勃三尺微命、一介書生云々」三尺ノ微命トハ、童部ノ背ヲ云ヘリ。△本朝文鑑十名ノ説ニ「東にあそぶ時は東華坊といひ、西にあそぶ時は西華坊といふ。華の字は榮也光也」トアリ。其始ハ東花集ト云ヒ西花集ト云ヘル、東西二集ノ名ニ據レリトゾ。△侍人モ不レ知モ古歌ノ裁入ナガラ、不レ知火トハ筑紫ノ枕詞ナリ。△葛ノ松原ハ、奥州行脚ノ俳談ニテ、△續五論ハ筑紫行脚ノ遺訓ナリ。續ノ字ハ葛ノ松原ニ續ケリトゾ。△東西夜話ト云ヒ、梟日記ト云ヘル、何レモ俳諧ノ附方ナリ。△俳諧十論ハ芭蕉家ノ大綱ニシテ、白馬ノ要文ヲ擧ゲタレバ、佛家ノ正法眼藏ト云ヒ、涅槃妙心ト云フベキナリ。

多學少成、不レ爲ニ書算文墨之輩一、必爲下雲ニ遊湖海一之人上。乃手藝術士之下命也。
按ズルニ、貴福以下孤驛マデノ九字ハ、佛道天貴ト云ヒ鬼道天驛星ト云ヘル。十二星ノ名目ナリ。去ルハ年月日時ヲ以テ掌中ノ圖ヲ算ヘ、回ルニ或ハ天貴ノ吉星ニ遇ヒ、或ハ天驛ノ凶星ニ遇フ。圖ヲ算ルニ師傳アリ。細學スルニ暇アラズ。●長恨歌ニ「天生麗質難ニ自棄一」●謝靈運ガ傳ニ「嘗於ニ永嘉西堂一思レ詩、竟日不レ就。忽夢見ニ惠連一、即得ニ池塘春草生一。大以爲レ工。常云、此語有ニ神助一。非ニ吾語一云々」
△十論ノ爲辨抄ニ難波ノ遺狀七通アリ。中ニ横折一枚ハ、遺物ノ覺書ナリ。第五ノ一書ニ「一文章の反故等、右ハ杉風方ニ有之。文章之草稿は支考可レ被レ爲ニ點檢一也」△文星觀ノ三字ハ横額ニテ燒桐ニ紺青ヲ入レテ、穴金篋ノ篆字ナリ。筆者ハ賀ノ金城ニ聞フル富田太椿ナリ。本ヨリ彫工ノ名高シテ、古篆新篆ニ委シク、或ハ八分韻府ヲ著セリ。△梅花佛ノ三字ハ草體ナリ。和泉石ノニ、白河石ヲ以テ臺トス。三重ニシテ五尺餘アリ。筆者ハ洛ノ井出一適ナリ。此老ハ井出家ノ嫡流ニテ、越ノ福居ニ産シテ、洛ノ淳風坊ニ住メリト。卓犖不羈ノ風人ナリトゾ。●伊呂波ノ裁入

勸溫ニ甘艸ー　懲厲ニ人蓼ー

其虛其實　機鋒凜々

○註ニ曰、△三輪山ハ、清輔ガ袋雙紙ニ「美濃國山縣郡三輪明神の御詠歌に」トイヘル、其神ノ宮所ナリ。通夜物語ノ表ニ出デタリ。▲黄山ハ北野ノ丑寅ニ在リテ、山ヲ雲黄ト云ヒ寺ヲ大智ト云フ。鷲見美作守ノ建立ニテ、玉浦一派ノ本山ナリ。境内ハ七萬五千坪ニシテ、所々ニ十景ノ名ヲ備フ。雲土園ハ寺内ノ栽園ナリ。塔頭ハ十二坊アリテ、梅泉ハ其一坊ナリ。其名ヲ下谷ノ清水ト云ヒテ、一郡無雙ノ麗水アリ。麓ハ總テ竹ト杉トナリ。△一行禪師ハ唐ノ高僧傳ニ在リテ、占文ノ知識トゾ。一掌經ハ此禪師ノ作ニテ、僧家ノ弟子ヲ養フ時ニ、其子ノ吉凶ヲ定ムル書ナリ。始ニハ命宮圖ヲ出シ、次ニハ十二星ノ頌アリテ、文星ハ第六ノ主命ナリ。題ニハ仙道天文星トアリ。其頌ニ曰、「命遇ニ天文ー秀氣清。聰明智惠意惺々。男才女秀身清吉。滿腹文章錦繡成」

其註ニ「星主命、聰明伶利學識。遇レ人作レ事和美。若逢ニ貴福藝相助ー者、定爲ニ鰲頭ー。獨占ニ虎榜ー、登ニ名金階玉階ー之人也。若得ニ權刃ー者、文武多才、乃爲ニ上命ー。若過ニ破厄孤驛ー、及犯レ重者、乃

俳之聞出習、當時紛成茄子瓠子之宗匠而、不令其齒著其衣、假令可爲我門之荷擔人歷、古老者鉗口、新輩者欹耳而、憎愛者例之無究時梟矣。左有者不察建立之意地、相手鑑之影坊而、認虛認實則也。爾有則從彼忘此、從此忘彼也則、十歲之先者可拜彼人、千歲之後者可拜此塔矣夫。

銘曰

鑑本無相　喩物有心
風吹虎嘯　雲起龍吟
可魚遊水　不鳥擇林
文章難操　錦繡易紝
目見如礫　心聞似金
交和于漢　叶訓與音
會家無伋　孔門有參

我之俳諧則、我者可レ遊二文章一、彼者可レ狂二俳諧一與者、人麽有二年榮之遊品一而、文章者慰二老之起臥一、俳諧者交二人之好惡一則也。扨社見二難波之遺狀一了則、文章反故者在二武陵一而、乍レ預二杉風之文庫一、可レ任二我師之點檢一與乎。誠思二此等之遺命一則、今將讃二文星之二字一而、可レ不レ題二祠堂之面門一矣耶。梅花佛之三字者、乍二師之標號一、不レ擧二在世之名數一者所レ憚二自稱之横柄一也焉。斯而鑑之爲レ用也、人之視レ之愛レ之、人之視レ之憎レ之、憎愛者唯在二人之妍醜一而、鑑者從レ本無心也則、爰建二置一面之鑑塔一而、世々將レ寫二我師之本情一與也。率哉錄二先師之行狀一則、入學者延寶之始也焉。其頃詠二山寺之紅葉一迚、裁二入伊呂波之詞一而、爲レ響二勃之三尺名者一、年漸十一之秋也來。爰算二俳諧之臘一則、尤謂二三十六年一矣。斯而不レ擒二世上之是非一、募二東華西華之名一而、東者無二松島之待人一歴、西者踟二筑紫之不レ知浦山一而、濟二身於憎愛之隅一了則、置二心於虛實之岐一矣焉。葛松原爾者綴二俳諧之皮毛一居、續五論爾者調二俳諧姿情一歴。其外夜話云、日記云、十論者増而開二白馬之眼藏一而、論二俳諧與二誹諧一之有レ差二別古今一事了則、從二笑儒佛老莊之態學者一、答二詩歌連

和漢文操 卷之七

○銘類

鑑塔銘 並序

蓮二房

今歳享保丁酉秋八月十六日者、當先師亡名之七回忌則、構一間四面之墓所而、祠堂曰文星觀居、諡名曰梅花佛歷。然則此塔之爲鑑也、圓亘一尺三寸而、面爾者彫今之諡名、背爾者令誌年與月日矣。其地者令造立美濃國山縣郡三輪山之西北、黄山禪利之塔頭梅泉庵之西岡止乎、山者從本備水竹之奇麗而、先師一家之菩提寺也。抑謂文星意者出一行禪師之一掌經而、天文星者我師之主命也。其頌曰、命遇天文秀氣淸。滿腹文章錦繡成云々。然則我師之所遊文章、天生文質而、非吾輩之可議。實夫觸月花之折也則、夢麼無神助之樣焉耶。祖翁嘗稱我師之文學而、以彼之文章換

老經にあそび、和歌連歌にわたる。今の選場に名を稱せば、唐梵通義の人といふべき也。

○註ニ曰、▲凌雲觀ハ魏明帝建レ之。摘星樓在ニ淇縣一トゾ。眩暈トハ西都賦ニ、「目眩轉而意迷云々」▲史記ニ「東郭先生貧困、履不レ完、行ニ雪中一、履有レ上無レ下。足盡踐レ地云々」▲晉史ニ靈運木履ノ事ハ前ニ出デタリ。○佐夜ノ歌ハ數多アリ。擧グルニ及バズ。○雄神川ハ萬葉ノ名所ナリ。歌ハ擧グルニ及バズ。○高瀨舟ノ歌ハ諸集ニ多シ。擧グルニ及バズ。△岳陽樓ノ江山ハ前ニ出デタリ。●元稹ガ詩ニ、「螢火亂飛秋已近」●淵明が詩ニ、「白日淪ニ西河一。素月出ニ東嶺一」△羲皇上ノ高臥ハ前ニ出デタリ。●杜律ニ「盤剝ニ白鴉谷口栗一。飯煮ニ青泥坊底芹一」△乙文ハ諸書ヲ暗記シテ、異名ヲ五車韻瑞ト云ヘリトゾ。▲大論ニ、畢鉢羅窟ハ佛經ノ選場ナリ。阿難ハ迦葉ノ命ニ依テ鍮穴ヨリ入リテ五千餘卷ノ撰者ト成レリトゾ。此等ニ撰集ノ內證ヲ察スベシ。

○評ニ云、此記は虛實あひまじはりて、評せば曲節の一體とやいはむ。其故は三面の風景に四季の詠物を書つくして、全く賦の體といふべきを、瑟々と獅々との訴諧より、百世に兩名の證文となせる、爰を記文の起結なるに、蝙蝠の沙汰は文のちらしにて、これらを鼓舞の筆すさみといふべし。

作者は越の石動に住す。土井は氏にして榛巢は標號なり。かつて先師の棒頭に觸著して、儒書

るより、桔梗山の名も秋すでにちかし。況や東嶺の月の影には、羲皇上の人の夢も寒からん。さて雪の日の更なるに、消なむ春をとまたるゝは、すべて越路の心ならひにや。爰も赤砂川の芹にあそぶ日は、かの白鴉谷の栗もおもはれて、風色さらに和漢をはぢざるべし。ことしは我里の櫻さく比に、蓮二房の艪をとゞめて、この庵に鍋釜の所帶をかまへ、名にさへ與平が調菜にまかせて、爰に文操の草稿をえらばむとす。榛巣は例に和漢の橋をわたし、壺峯を詩書の便覧にそなへて、文をば五車の史令となして、額には獅子窟の三字を題し、傍には理窟の人入るべからずと、かの畢鉢羅の鎰をかけて、門には禁牌の石を立ぬばかり、七堂伽藍の體相なるべし。しかるに其寺の兒わらんべは、瑟とつめるをむづかしがりて、しゝ庵〳〵といふなれば、彼記にいへる越路の獅子庵にして、宗門帳には瑟々庵といひ、俳諧の時には獅子庵といひて、おほやけわたくしの二名をととなへば、鳥にもよろしく鼠にもよろしく、ある日は蝙蝠のあそぶにまかせて、自在庵といふべき也。

（一）「媚」は「楣」歟

瑟々庵の記

土方堅

観世音寺の西の岡に、一字の草堂ありて、石座の不動尊を安置す。山さらに蕭々瑟々たればとて、媚（一）して瑟々庵とはいへり。されば此庵は三面にひらきて、越の海山を見おろせば、一眺萬里の風景をそなへながら、後は粟稗の山畑につゞきて、高からず低からねば凌雲摘星の眩暈をもいとはず。東には正面の華表坂ありて、青氈の苔をしきたれば、東郭が素脚も恥る所なく、北には佐夜の細道ながら、木の間の露のかわく日なければ、靈運が木履も此時の用なるべし。まして臥龍堤の遠望には、名にあふ立山も朝日にかゞやき、雪の白根は辰巳の雲にまがふ。こなたは倶利迦羅の峯につらなりて、卯花や砥波の山々も、井波は麓のをぐらきに、松杉の色は見わかねど、瑞泉寺の鐘は聞ゆなるべし。そこに雄神川の流遠く、小矢部は目の下に布引て、高瀬さす船のさまぐに、歌にながめ給によそほふ。しかは山をおひ江を呑みて、かの岳陽にもまさるべきや。春は櫻町の山ざくらに、百千の鳥のさへづりも、いつしか卯の花の時鳥を待て、池田の澤に螢みだる

之八九ニ兮、其奥者過ニ蓬瀛之五三ニ兮。況夫黄金之花咲了、其國之山副近了則、花爾者不レ待ニ初櫻之春ニ而、月爾歴忘ニ紅葉之秋ニ梟矣。言則飽ニ藥珠之八珍ニ而、爲レ待ニ兜卒之三會ニ焉。其輩者騷人雅士而、壺中之主者例之左角也來。

○註ニ曰、△竹莊ハ慈竹亭ナリ。鑑亭ハ七里ガ別觀ナリ。何レモ新潟ニ風騷ノ名アリ。●白氏ガ二千里ハ前ニ出タリ。●司空曙ガ遣レ妓詩ニ「黄金用盡教ニ歌舞ニ」△親子ガ一瓢ハ前ニアリ。▲盂蘭盆經ニ目連ノ天眼通ノ事アリ。爾時トハ其經ノ熟語ナリ。△上林賦ニ「呑ニ雲夢八九ニ。胸未ニ帶芥ニ」▲列子ニ方壺瀛洲蓬萊等ニ五山アリ。郊祀志ニ三島アリ。何レモ仙境ナリ。○萬葉ニ黄金花ノ歌ハ前ニ出デタリ。▲藥球宮ハ仙觀也。常ニ八珍ノ美味ヲ供フトゾ。▲彌勒下生經ニ兜卒ノ内院ニ在シテ三會ノ說法アリトゾ。「按ズルニ三會トハ俳諧ニ會席ニ嗣ノ便アレバ也。

○評ニ云、此記は文に婉曲ありて、論ぜば名說ともいふべけれど、始には其主の生質を稱し、中には此壺の由來を記し、終には其園の快樂をあらはす。しかれば人境の當用にして、これらを記中の一體といふべき也。

川に住めりと。文鑑にその姓氏ありて、和漢に通稱の文人なりとぞ。

壺中園記

東花坊

昔々遊越之新潟而、頃者水無月之半端也焉、竹莊迯暑日則鑑亭迎涼夜歴。不左有而歷江山清絕之地而、謂不有乏風雅處矣。或日者遊蓮咲了寺而、盃待十六宵之影兮、或夜者泛月涼敷江而、船遣二千里之心兮。其友者名染于詩兮、目出于歌兮、謂風流使人醉矣乎。我且漂其地而、中求俳諧之人則、獨有左角之男而、年未及三十焉。于然知渡世人之實而、識遊文日之虛了則、出而者染花鳥之色而、敎曙公之千金舞兮、入而者澄月雪之心而、盡顏子之一瓢佗兮。奚爾馴我家之俳諧而、斯者遊虛實焉。見綴希有之男哉共、其頃者若了則、思置等閑事來矣。其後過十年了共、不聞其人之行末則、左在那所覺左許社止乎、此頃見雲鈴之狀則、佐渡之浦山陰有和漢不思議之壺而、覗則有月花之別世界與哉。爾時假目連之遠目鏡而、從是寄萬里之情了則、誠哉園林備四季之花鳥而、其口者呑雲夢

じの素雪は、筆道にあそび風雅になぐさみ、水に翰墨を愛する日は、きのふの學者の求たる所をもとめず、山に風雅をなぐさむ時は、けふの童部の遊ぶ心にあそばむとす。出るに五人の兄友あれば、入るに五人の弟友あり。皆たゞ盃にあそぶ下戸にして、ひとりも酒にあそぶ上戸なし。いさや茶碗の一盃酒に、芳野の櫻も目にて見ず、淀のほとゝぎすも耳にて聞ず、俳諧大悟の場にいたりて、蜾蠃と螟蛉との是非を論ぜず、褒貶は言語の遊なりとしらば、此樓の正面に押直して、山水一味の優情のみならんや。文墨二方の亭主とあがむべし。

○註ニ曰、△岳陽記(一)ニ「銜ニ遠山ヲ呑ニ長江ヲ。此則岳陽樓之大觀也」△つれ〴〵艸ニ「月花はさのみ目にて見る物かは」○「おいらくの耳にはうとき時鳥おもひ出づるや初音なるらん」△伯倫酒德頌ニ「二豪侍レ側焉。如ニ蜾蠃與ヲ螟蛉ニ云々」

○評ニ云、此記は筆舌にあやありて心に連俳の虚實をいへるにや。さるは小盃の模様を崩して、茶碗酒の洒落をすゝめたらん、例に俳諧の頓挫なるをや。作者は江の湖東に產して、此時は佐の相

(一)「岳陽樓記」なり

無心所著ノ絶妙ト稱スベシ。△淵明ガ菊ヲ愛セシ事ハ、細學スルニ及バズ。「按ズルニ、此章ハ薊ノ花ヲト云ハズシテ薊ノ名ヲト云フ所ハ、薊ト欺トノ響ヨリ、無理ニ古人ヲ粉成タル、意地ノ虚實ハ爰ニ知ルベキナリ。○兼好法師ノ歌ニ「こゝもまた浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな」○金葉集ニ「琴の音に峯の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけむ」△「昆布に山桝よい茶を申さふ」トハ、狂言ノ釣狐ノ伯藏司ノ詞ナリ。「按ズルニ、狐ノ黍團子ハ馬糞ノ事ナリト童部ノ昔咄ニアリ。彼物トハ隱見ノ法ナリ。

○評ニ云、此記は虚實の當用といはむ。みづから何尾の二字を釋するに、第一は歌人の艷曲に敵し、第二は茶人の風儀をこなす。すべては俳諧の意地なる也。作者は茶にあそび俳にあそび、儒佛の道にも疎からで、自己の名利をうち明けて、俳人の內證を發たる、學ぶべきは爰の筆格にして、恐るべきは爰の虚實なり。作者の姓氏は文鑑にありて、本より獅子門の先哲也。

二方樓の記　　相左角

此樓を二方といふ事は、山にむかひ海にのぞめる、其地の大觀なれば也。しかるにある

のぬめりにはあらで、晨には算盤の音せはしく、現在の利用を求めながら、夕には木魚の聲すみて、未來の因縁をむすばむとする、其尾は慥に有ながら、何の尾なりとも見えずとや。今は何をかつゝむべき、かしこに稲荷の御社をあがめ、我は其神の尾をかりて、ある時は北山の老僧をもてなし、▲昆布に山椒の古風なれど、三茶杓半に影を見あけて、たま〳〵茶菓子の黍團子さへ、かの物ならぬかと人に疑はれ、ある日は釣瓶の掛花に、いちごの枝の露ながら、花も實もある茶人かなと、世界の人に思はすれど、本より根もなく葉もなければ、何の尾もなき物まねにして、たゞ此亭にあそぶ日の、たはぶれなる物を、我を茶人とも俳人とも、まして後生をねがふ人とも、此尾を見ぬ人はさたし給ふなるべし。

○註ニ曰、▲仙傳ニ壺公ガ事ハ前ニ出デタリ。○喜撰ノ歌ハ前ニ出デタリ。▲つれ〲草ニ喚子鳥の鳴く時に返魂法をおこなふといふ事あり。「按ズルニ、此二句ニ、世外ハ幽居ヲ云ハントテ、婆婆ノ二字ヲ云ヒ起シ、喚子鳥ニ返魂ノ意ヲ結ベル、謡ノ錦ハ更ニシテ、此等ノ體ヲ論ゼンニハ、

ことしの春、一把の草庵をかまへて、しば〳〵隱遁の心ざしをまなぶ。全く世界をはなれむとにはあらで、たま〳〵商家のいとまある日は、市中の壺にかくれんと也。さるは我家の辰巳ながら、世を宇治山にはあらねども、名にあふ稻葉山の麓にして、おも屋をさる事百歩ばかり、茶にあそぶ人の指圖をもどかず、四疊半に曲床をつけて、勝手は二疊のおら所帶なれば、娑婆のたよりのたばこの火も、喚子鳥の聲に、聞まがふ。春は永き日の窓にかげろひ、隣の寺のさくらかも。庭は菜の花の畠につゞきて、苣に酢味噌の侘數奇も、一度か二度はおもしろし。岸の山吹も土堤のたんぽゝも、我はあざみの名を愛して、菊に淵明が古風をあざむけども、人は此花の紅白ある事を問はず。さて山笹の風もそよぎて、若葉の雨の雫ながら、兎のあそびに出る日は、思ひしまゝの山里がなと、心はよし野の奥をたどりて、げには世俗をはなれたる心地ならん。此ほど黄山の便につけて、蓮二の御房に此名を求るに、たゞ何となく何尾の二字を題せり。さては稻葉の山もちかければ、かの琴の音の松風も、何れの尾よりと思ひやりたるに、是は歌よみ

出羽の國最上（もがみ）といふ所にて、ある人のつくり得させたる也。越路の浦々、山館野亭（さんくわんやてい）の枕のうへには、二千里の外の月をやどし、蓬もぐらのしきねの下には、霜にさむしろのきりぎりすを聞て、晝（ひる）はたゝみて背中に負ひ、三百餘里の險難をわたり、終に頭をしろくして、美濃（みの）國大垣の府にいたる。なほも心のわびをつぎて、貧者（ひんじや）の情をやぶる事なかれと、我をしたふ者にうちくれぬ。

○註ニ曰、●長恨歌ニ「翡翠衾寒誰與共云々」唐詩解ニ「舊衾故枕」ニ作レリ●文選ノ詩ニ「文綵双鴛鴦。裁爲ニ合歡被ニ」●白氏文集ニ「三五夜中新月色。二千里外故人心」○新古今ニ「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねむ」

○評ニ曰、此記は、元祿のはじめ奥羽の行脚に、三越より美濃をへて伊勢の遷宮に詣て給ふ時也。さろは如行が門人に竹戸といふ者ありて、其衾に此記を得て、今も其家の寶とす。路通も越人も其記をかきて竹戸が幸をうらやまれけるとぞ。爰に二老の文を畧せり。

何尾亭（の）記

井　童　平

採文ナリ。前ニ出デタリ。△倭語拾芥ニ「藁苞ひとつに國傾く」とは禮に和節の心得をいへりとぞ。

○評ニ云、此箴は勸懲の二用をかねて、始は大隱の洒落を稱し、中比は隱者の榮耀をこらし、終は自己の放埒をいましむ。さるは莊子の建つる所にて、第一には自適の逍遙をさとし、第二には文章の形容をつくす。これらを俳諧の筆格といひ、虛實の箴とはいふべき也

○記の類

紙衾の記

芭蕉翁

●古きまくら古きふすまは貴妃がかたみより傳へて、戀といひ哀傷とす。錦床の夜のしとねの上には鴛鴦をぬひ物にして、ふたつのつばさに後の世をかこつ。彼はその膚にちかく其にほひ殘りとゞまれらんをや。戀の一物とせんむべなりけらし。いでや此紙の衾は、戀にもあらず無常にもあらず、蜑の苫屋の蚤をいとひ、驛のはにふのいぶせさを思ひて、

（一）古今集の序の詞を用ふ

（二）海鼠は藁にあへば溶けて正體なくなるものといへり

（三）周顒北山に隱れて隱者を以て自ら高うす後出でて仕ふ。孔德璋之をそしりて北山移文をつくる

なし給へど、いつしか色ごのみの家にもてなされて、梁の惠王も厨を遠ざけず、にほふの宮もかをるの君も、（一）酢海鼠の煎海鼠のと調ぜさせ給ひ、淺香の影も汲たらぬ、其香の淺みをめで給へど、梅の花のかうばしき夜は、御垣が原の露わけ出べき、色ごのみの樣ならぬを、所さだめずぬめりあるきて、（二）藁と添寐のあだ心より、行衛なき身をはふらしけむ。さらばいにしへの諺に、藁苞に國を傾しとは、さして好色のさたならねど、汝に傾國の兆あれば、これらの諷諫に目をさまして、海山の隱者の箴としるべき也。

○註ニ云、○海鼠ノ發句ハ湖東ノ許六作ナリ、○萬葉集ニ「すべらぎの御代さかえむと東なるみちのく山に金花さく」▲海鹽縣ノ沙汰トハ、（三）周顒ガ僞隱ナリ。海鼠ニ海鹽ノ寄ト知ルベシ。△能登ハ海鼠ノ名産アリ。海蔘トハ干シテ刻メル物ナリ。▲戰國策ニ易牙ハ齊ノ桓公ノ臣ナリ。百味ヲ知リテ料理ノ名人ナリ。▲神農ノコトハ前ニ出デタリ。△孟子ノ梁惠王篇ニ「君子遠ニ庖厨ニ云々」▲匂宮モ薫ノ大將モ、源氏ニ好色ノ沙汰多シ。畢竟ハ海鼠ノ香ニ匂フト薫ルトノ寓言ナリ。○采女ガ歌ニ「淺香山影さへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふ物かは」△梅の花以下はつれ〴〵の

生海鼠箴

長　鷺洲

世にいふ鱗甲に身をよろひ、羽毛に容をかざる物は、其程にさかへ其時におとろふ。まして人間の衣食における、若きにつゝしみ老におそれよとぞ。しかるに生海鼠といふ物は、ひろき海原をぶらつきて、さして衣食を求るとも見えず、春の花にさまよひ、秋の月にたゞよふ。山隱といひ市隱といへど、これらを海隱の先生とやいはむ。そこを我家の俳諧に、「○大海にふとしもかくすなまこ哉」と無雙の隱者に稱せられしが、其名もみちのくの金花さく寶の山のふもとにて、金海鼠の御爵をかふむれるより、かの海鹽の沙汰ならでも、能登の嶋山も住うかれけむ。都は錦の鯛鱸に、串海鼠、桁海鼠の名をあらそひ、もろこし船の便をえて、かしこに海蔘の名を稱すれば、今は朝鮮人蔘とも價をあらそふ心なるべし。是より金襴錦手の鉢に、こたゞみほそかきのあやをなし、煎酒に山葵のいたりつきて、易牙も海鼠腸の猪口にむかへば、ほとんど蘭麝の香にまどへり。さる事は神農もしろしめさず、五錢か三錢の位にて、山芋の部に入れて腎をおぎなふ加藥と

子丑寅卯ノ十二名ヲ云イ、十干トハ甲乙丙丁ナリ。●巫峽ハ猿ノ名所ナリ。斷腸ノ詩ハ數多アリ。擧グルニ及バズ。○古今集ニ「をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくも喚子鳥かな」「按ズルニ、此歌ハ古今ニ三鳥ノ傳授トゾ。去ルヲ俚諺ニ、稻負鳥ハ馬ノ事、喚子鳥ハ猿ノ事ト云ヘル、俗談平話ヲ改メ又ハ例ニ我家ノ意地ナレバ、其所ヲ俳諧ノ面通味(おかしみ)ナリトゾ。△倭語拾芥ニ、猿ハ心臟ノ火ナキ故ニ、手脚ノ働ヲ火ト成セリト。△傳灯錄ニ「僧問。如何得二見性一。師曰、譬如下屋上有二六窓一內有中一獼猴上云々」△二程全書ニ視聽言動ノ四箴アリ。伊川ハ程正叔ノ標號ナリ。

○評ニ云、此篇は虛中にちからありて、箴の一字を盡せりといはむ。しからば人間の世智辨にほこりて、自己の安閑を失へる、本より聖賢の箴ならずや。しかるを伊川の四箴に敵して、俳諧は言語のあそびたるをいへるは、言ふと言はざるは人天の兩用なれど、人は日夜に物いひて言語の實をとめざれとは、本より一字銖の遺訓なるをや。作者は周防の岩國に產して、安藝の廣島に現住す。詩文は宇都宮由的を師として、遯庵詩集に義周の名ありとぞ。

をさへまさるとは祝ふならし。しかれば和漢に名をつたへて、詩につくり歌によまれけむ。それが中にも、巫峽の曉に詩客の腸をたゝせたらんより、木曾の山中に人をよびて、歌人を傳授にまどはせたるは、猿智恵の中のをかしみとやいはむ。それより世の中をうかめ過て、木にのぼり竹をつたひ、粟の穂をつみて腰にはさけ、木の實をぬすみて頬にかくし、手脚の隙なきはさる事ながら、尻で栗むくわざをさへ得たり。さてこそ禪宗の小僧をいましめて、六窓一獼猴のたとへとはなれり。そののち人の手に飼はれて、刀に羽織の丹前をふり、杖に菅笠の女舞をならふ。盤に杉立のくるしさも、綱に蜘舞のあぶなさも、おのが心のわざならぬかは。しかじ餅屋の見世に立て、猿持替の名にたてられ、楊枝の看板にあふむきて、往來の人に笑はれんよりは、つねに庚申のかたはらに侍りて、視ざる聽ざるは勝手次第にて、言ざるは伊川の實用ながら、言ふてあそぶべく狂ふてこほさぬ、俳諧の自在を知れと也。

○註ニ曰、○朗詠ニ「君が代はちよにやちよにさゞれ石の巖ほとなりて苔のむすまで」△十二支トハ

内親王の墓石にまつはるといふ傳説なり

（五）趣意の歸著する所なきをいふ

其詩ニ「三郎推レ指貴妃吹云々」三郎ハ玄宗ノ稚名ナリ。○西行ノ歌ニ「鈴鹿山うき世をよそにふり捨ていかになりゆく我身なるらん」○西行ノ江口ノ歌ニ「世の中をいとふまでこそかたからめかりのやどりを惜しむ君哉」○西行ノ富士ノ歌ニ「風になびく富士の煙のそらにきえて行衛もしらぬ我おもひ哉」△無心所著（五）トハ和歌ニ誦方ノ一體也。△梵網經ハ持戒ノ沙汰ナリ。舉グルニ及バズ。△家語ニハ辨物篇アリ。物ノ奇怪ヲ記セリ。△論語ニ「酒無レ量不レ及レ亂云々」

○評ニ云、此文は劉亮體にして、いはゞ蓑笠賦ともいふべきにや。しかれども結段にいたりて、西行法師の富士の煙は、全く筆占の寓言ながら、無心所著の四字をもて其歌の情をおこし、此文の用をことわる。これらを托物比興といひて、無用の用をしるべきは是也。

猿の箴　　　僧　一空

あらめでたや、猿は山王のつかはしめにて、老ては奥山に千年をかさねて、○岩に苔猿の名をかふむり、若きは孫子の枝もさかえて、木の葉猿ともいふなる由。さて正月の祭事には農業を祝ひ商家を賑はし、武士の御厩を守れるより、十二支の中にもえらばれて、名

(一)宋の黄山谷

(二)晋の劉伶、竹林七賢の一

(三)「酒は爛肴は氣取酌はたぼ狆猫ばゝあ子は出ぬがよし」

(四)定家の執心葛となつて式子

らぬとはよみけらし。さらずば此歌の何にかは、無心所著の體ならん。さはとて此物の戀しさは、錫に冷水のかわきをもやめず、餅に砂糖のうまみもなければ、かりの煙の香にまよひて、たゞ明暮のおもひ草とはなりぬ。さらば梵網の戒品にも聞えず、家語の辨物にも見えざれば、いかなる美人のたましひが、かゝる草は生ひぬらんと、後の君子に根葉をたづねて、飲とも亂におよぼすべからず。

○註ニ曰、▲世説ニ「王敦毎ニ醉後ニ、以ニ鐵如意ニ敲ニ唾壺ニ歌云々」(一)●山谷ガ瓊芝軒ノ詩ノ註ニ「所レ謂唐婆鏡、倭朝之莨菪也」△漳州府志ニハ淡婆姑トアリ△羅山文集ニハ多波古希施婁トアリ。皆蠻語ナリト。△本草洞詮ニ「烟艸或想思艸也云々」△文選ニ(二)伯倫ガ酒徳頌アリ。擧グルニ及バズ。△漁隱後集ニ盧仝ガ茶歌アリ。擧グルニ及バズ。「按ずるに、此一段ハ茶ト酒トノ好惡ヲ云ヘルニ、(三)酌取ノ笑言ハ常ニシテ、「ひもじが原に頭をめぐらさず」トハ倭語ニ漢文ノ勢ヲ假リテ、詞ニ千里ノ野ヲ擴ゲ、筆ニ萬里ノ地ヲ縮ムト云ヘル、文ニ形容ノ絶妙ト稱スベシ。▲美人艸ノ事ハ前ニ出デタリ。▲定家蔓ノ事ハ諷ニアリ。(四)式子内親王ノ執心ナリトゾ。▲吹笛ノ圖ハ玄宗ト貴妃ナリ。

るともいへり。茶はまた盧同が歌に詠じて、佳賓高客の禮をとゝなへ、詩は文者の眠をさませども、茶の子といふ物のなき時は、ひもじが原に頭をめぐらさず。しかるを蕢箬といふ物は、花の咲日の賑しさも、雨のふる夜の淋しさも、料理にも及ばず鹽梅をもまたず、寐てはおもひ起きてはたのしむ。こゝを大和にやはらげて、おもひ艸とはいふなるべし。むかし虞美人の名を殘し、定家かづらの執心をおもへば、世におそろしきためしならんに、知るも知らぬも戀ひこがれぬる、此草の宿世こそあやしけれ。さて此比の風流を見れば、服部和泉の二品より、五畿七道の風土にしたがひて、其香をあらそひ其味をえらび、今はたおほやけの貢物ともなりぬ。是より貴となく賤となく、男女の中をやはらげ、遊女白拍子の手すさみとなりて、口に三盞の輪をふけば、鼻に十種の香をわかつ。玄宗の笛のたはぶれならでも、連理のきせるのちぎりには、添寐の夢のつくる時なからん。誠に思へば西行法師の、浮世をよそにふり捨て、笠一蓋の東くだりにも、江口の君のかりの宿に、寐さめのたばこをわすれかね、富士の煙におもひよせて、行衛もし

人は例の察すべき也。しかも一篇の許する所は、祖師には雲母の坂をよせ、人間には師走の坂とむすびて、雪も貧苦をかくす事あたはずとは、例に談笑の觀法ながら、是を諷諫の絶妙と稱すべし。作者は西濃の北方に産して、仙石を氏とし、黄鸝園を標號とす。獅子門に授記の高弟なりとぞ。

莨菪の箴

渡　吾　仲

我朝の中比かよ、たばこといへる草ありて、飲食の中の媒となれり。さるは飲ともいひ吸ともいへば、茶と酒との氣類ならん。しかるにもろこしの王敦も、鐵如意をもて唾壺をたゝくとあれば、これらはたばこの調度にして、彼處にもひさしき物とは聞ゆ。或は山谷が詩にも作れる唐婆鏡は、倭朝の莨菪なるよし。淡婆姑ともいひ、多波古ともいひ、想思艸は漢にして、長命草は倭なるべし。和訓は戯事の略語なりけるとぞ。そも〳〵酒は和漢にひゞきて、ひとり伯倫が頌のみならんや。儒佛の家にも名をよばれて、好惡は人のまち〳〵ならめど、肴といふ物のなき時は、さして望にもないといひ、又は酌取によ

はしかずと、心の下帶をしむべき也。

○註ニ曰、▲莊子ノ應帝王ニ「儵與レ忽謀レ報ニ渾沌王之德一。曰、人皆有ニ七竅一以視聽食息。試鑿レ之。日鑿ニ一竅一。七日而渾沌死」「按ズルニ、此篇ハ渾沌ノ一氣ヲ趣向ニシテ、始終ノ文意ヲ形容セル、結語ノ裸身ニ眼ヲ著クベシ。△急參綏辛ト云フハ俗談ニテ、料理人ノ口授ナリ。▲大師講トハ傳敎大師ノ事ナリトゾ。「按ズルニ其日ハ小豆粥ノ初穗ヲ擂鉢ニ入レテ擂小木ヲ中ニ指入レ、臺所ノ棚ニ供フ。此式ハ下樣ニ起リテ、諸國ニ色々ノ品アリトゾ。○定家卿ノ歌ニ「いつはりのなき世なりけり神無月誰まことよりしぐれ初けむ」「按ズルニ、此歌ノ裁入ハ、噓モ嵐ノ序語ニシテ、此等ヲ鎖詞ノ絕妙ト稱スベシ。△山姥ノ謠ニ「山また山を山めぐりして」トアリ。△論語ニ「赤之適レ齊也、乘ニ肥馬一衣ニ輕裘一」云々」△つれ〲草ニ「みかきが原の露わけ出ん有明の空も、我身ざまにしのばるべくもあらずば、たゞ色このまざらんにはしかじ」

○評ニ云、此文は鳥鼠の一格にして、しひて評せば蛇足を添ろに似てむ。さるは擂小木のふつゝかなるを、好色の二字に形容して、簾の一字に文をつゞめたる、是を隱見の體法といふべし。見る

（一）「鐵杖」の借字

ここに汝が名聞を評せば、霜月の二十三日には、大師講とてあづき粥をそなへ、其日の雪を摺小木がくしといへば、雲母坂の明ほのに、誰まことよりちらつきて、嘘もあらしのあれぬ時なし。誠やその祖師の片輪なるより、其脚のあとをかくさむとて、おのが憂名にかへたるよし。佛縁はいとたふとしや。さばれと人間の脚を摺小木にして、師走の坂を越えかぬる日は、雪もかくすに所なきや。爰におもへば摺小木の境界は、身に著ず口にむさぼらず、混々沌々たるべきを、比叡の山法師にそゝなかされ、横川の杉の嵐に高ぶり、天狗の鼻の慢心をつたへて、ある時は遊山の辨當につれだち、ある日は悋氣の鐵（一）丁にまはされて、果は化物揃にくはゝり、たちまち一日を生ずれば、摺鉢の笠を著そらして、伽藍にひゞき谷にこたへ、山また山をめぐるとて、其名もめぐりと呼れぬれば、三界輪廻のくるしみも、いづれの世にとおそるべし。されば古人の箴に、心の手綱をゆるすなとは、肥馬輕裘の人をいへれど、汝はいつも裸身にして、たとひ月見の船にうかれ、花見の幕にあそぶとも、おのが身ざまにしのぶべくもあらずば、色このまざらんに

て、食後の一睡に自己をたのしめる、これらを解の解といふべし。作者は文鑑の詩に名錄ありて、獅子門の親弟なりしが、享保のはじめに卒せりとぞ。

○箴の類

摺小木の箴

仙里紅

そもそも萬物萬象の中に、摺小木といふ物ありて、目もなく耳もなけれども、用ゆれば龍の雲にはたらき、用ひざれば葎の壁にかゝる。しかれば渾沌未分のかたちより、無用の用なる物といふべし。こゝに汝が生得を評せば、いら蓼の日の肩をいらゝげぬる、辛の時の身をなやして、利きも其日の用なれば、飽きも其時の用ならん。こゝに汝が奉公を評せば、そも元日の雜煮より、大晦日の夜食まで、日に三度づつ躍あるき、白味噌によろこび赤味噌にいかりて、頭のはけるもおぼえずや。されど深山木のそだちなれば、松の一ふしの息災にて、たとひ留守の戸の隙なるも、そこにふらつきて横寐はせず。こ

▲き雪にこゞえて、俳諧のをかしみをしらぬも本意なし。およそ晝寐の根元をきはむるに、ゆふべ夜遊の損にもよらず。けふ朝起の得にもよらず、食後一盃の汐時に、手の物もうち落すばかり、居ながらつり込こゝちなれば、枕もそこに▲肱をまげて、我たのしみを樂むとは申さむ。

○註ニ曰、△源氏ノ手習卷ニ「宵まどひはえもいはずおどろ〱しきいびきをしつゝ、前にもうちずかひたる尼どもふたりふして、おとらじといびきあはせたり」トアリ。▲盧生ガ夢ノ榮耀モ、莊周ガ蝶ノ逍遙モ、前ニ出デタリ。○百人一首ニ「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたゝむ名こそをしけれ」▲列子ニ「黄帝晝寢、夢遊ニ華胥氏之國。其後天下大治」▲論語ニ「宰予晝寢。子曰、朽木不レ可レ彫也。糞土之牆不レ可レ杇」▲車胤ガ螢ヲ聚メテ讀書ノ事モ、孫康ガ雪ヲ積ミテ學文ノ事モ、諸書ニ在リ。細學ニ及バズ。△論語ニ曲肱ノ樂モ、前ニ出デタリ。

○評ニ云、此解は虚實の當用にして、人は寐入らぬと思へどもかならず寐入るものなりとは、爰に俳諧の自在を得て、例の人情を盡せりと稱すべし。況や黄帝と宰予とに、晝寐の好惡を裁斷し

的中と稱すべし。まして中間の鼓舞を評せば、儒佛の二字に語を起して、腥物と精進とに、長芋の用の分明なる、之を文章の力といふべし。作者は山室氏にして、越の福井に醫をもて產とす。山流は今の俳名なりとぞ。

晝寐の解

得巳兮

木にはねずといふ木あり、花にはねぶといふ花あり。我はその中に晝寐をたのしみて、うつら／＼と寐ぬと思へど、おどろ／＼しき鼾かきたりといふ。寐たぞ寐ぬぞのあらそひは、おほかた寐ぬといふ人の負也。されば盧生がまくらの榮耀も、莊周がつくゑの逍遙も、皆たゞ夢の世の夢なれば、さめて理屈をいふ人よりも、寐て居る内を極樂とや申さむ。まして露霜のおきまどひ、うば玉の夜を晝にして、春の夢の手枕をかこち、朝顏の秋をしらざらんよりも、時節到來の朝機嫌に、はなひ草でも詠ながら、とろり／＼とひき入たらん、道に觀念のはじめとや申さむ。しかるに黃帝の晝寐をばとがめず、宰予は若氣の不機轉より、雪隱のたとへにひかれぬれば、古文眞寶の學問者は、晝にのぞ

(一)解の字の分析也。

それにもとろゝのきらひにて、徳利に鯫を買ふ寺には、水にひたしていのりもすらん。つら〳〵萬物の變をおもへば、都に舞子といふ者の、大名の子をまうけて、たちまちに御臺所とあふがれ、飯焼の玉が卞和に愛せられ、鍋墨の木目をみがきて、手足より內義になりかゝれば、お內義とうなぎは和訓のひゞきありて、つくね芋の鱣とならんも、嘘の皮にはあらざるべし。

○註ニ曰、○嘉元百首ニ「款冬の誰があやまちを咲初めて之をばよその色となしけむ」「按ズルニ、此歌ハ款冬ハ款釀ニ非ズ山ノ路ゾト云フ事ナリ。△月令ノ事ハ以下ニ在リ。文ノ起結ヲ見ルベキナリ。△禮記ノ月令ニ季春、「田鼠化爲レ鴽云々。季秋爵入ニ大水ニ爲レ蛤云々」▲法花經ノ龍女成佛ノ段ニ、變成男子ノコトアリ。狂言トハ例ノ紛成ナリ。△徳利ノ鯫トハ、隱買ノ才覺ヲ云ヘリ。輕口ノ噺ナリ。▲韓非子ニ「卞和抱ニ玉璞ニ泣云々」璞は琢又先ノ玉トゾ。

○評ニ云、此解は例の詼諧ながら、始は薯蕷と款冬とに同名異生の證據をあらはし、終は長芋と鶴鴟とに異名同變の道理を解す。さるは文心彫龍にいへる、角刀牛の釋文よりも、これらを解の(一)

○解の類

長芋の解

宝山流

思ふに漢土の薯蕷は、自然成の事にして、倭名には是を山芋といふ。さるは欸冬と山の蕗とのごとき、和訓には山吹のまぎれもおほからん。しかれば芋には幾品もありて、山芋といひ里芋といひ、自成他作の差別ながら、山の芋は此長芋にして、つくね芋といふは手作の名なるべし。しかるをいづれの月令にか、山芋の鰻になるといふより、其膚ほとんどなめらかにして、其味はなはだ腎をやしなふ。されども市に出る日は、彼は生洲町の活舟にこぞり、是は八百屋の土間にならびて、漁人は鰍の調法をしらねば、樵夫は釣の才覺をしらず。さら〳〵嘘とおもはむもむべ也。たとひ鼠が鶉となり、雀が蛤となるとても、おなじ腥物なれば、儒者も佛者もさしてとゞめず。今や法花經の狂言に、龍女の若衆と變じたらんより、山芋のたちまち鰻となりなば、僧達はいかに本意なからん。

改ニ其樂一△數奇ノ二字ハ和尙ノ通語ナリ。「按ズルニ遺稿ノ夜話ニ數奇トハ、漢文ノ好事ナリ。長キ物ニハ短キヲ取合セ、圓ナルニハ方ナル物ヲ置テ、物ノ數奇ナル故ニ茶人ヲ呼テ數奇者トハ云ヘリ。譬ヘバ北野ノ大茶湯ニ小キ雲龍ヲ掛タル類ナリ。今ノ茶湯ノ抄物ヲ見レバ、數奇ノ字訓ヲ失ヘリトソ。△家語ニ「邦有レ道則出而行、邦無レ道則藏云々」

○評ニ云、此論は例の談笑ながら、身口意の三にはたらきて、例の諷諫を盡せりといふべし。誠に人界の好と禁は、おのれ／＼がならはせにて、畢竟は虛實の不自在より、論ずれば言語の理窟のみならん。されば豆腐を捨る日あらば、蒟蒻をもちゆる時もありて、變化は、例のさだめがたきを、かしこに莊老のかた〻なるをいひ、こゝに風雅の和なるをいへる、白和の二字は和節の用にして、これらを俳諧の詼といふべし。作者は廣瀨氏にして、濃南の笠松に住す。家は分國の官吏ながら、何尾の童平に交をむすび、黃鸝の里紅に信を通じて、當時に文質の風士なりとぞ。

（一）「事しげき都の内はすまぬまされりの」誤

の木かげにあそぶ。しかるに蒟蒻といふ物は、黒津の里の山家にそだちて、都の水をきらふより、玄賓僧都の齋日に調ぜられ、道元和尚の一棒下に、てんぷらの名をかうむりて、世をあか味噌の隱者とはなりけらし。こゝに此二種の口論を評せば、繻子綸子のいたりをそしりて、一瓢一箪のわびをほむるは、菲老の家の口癖にして、唐土の文には好事といひ、大和の詞には物好といふ。好は數奇にしてしば〱奇なりとよ。しかれば蒟蒻の隱者にともなひ豆腐の大名にまじはるも、しば〱行藏の謀にして、今君が代の太平には、佛事の白和に中を直りて、獻立の位をあらそはざれと也。

○註曰、△武陵ノ翁トハ芭蕉翁ナリ。蒟蒻ノ風雅ト溫飩ノ好色トハ、白馬ノ類說ニ祇翁ノ笑言ナリ。當時ノ俳集ニ其詞アリ、再擧ニ及バズ。▲酉陽雜俎ニ「淮南王始製豆腐」云々」賦類ニ出デタリ。○江談ニ玄賓僧都ノ歌ニ「外國は水草きよし事おほき君が都はすまずまされり」（一）▲道元和尚ハ曹洞ノ開山ナリ。都ノ内ニハ我宗ノ寺ヲ建ツベカラズトテ、越前ノ永平寺ヲ本山トセリト。爰ニ棒下トハ天不落ノ名目ノ禪語ニ似タレバ云ヘルニヤ。△論語ニ「一箪食、一瓢飲、回也不

○評ニ云、此論は曲折深遠にして、虚實に例の虚ありとやいはむ。詮ずる所は、人間世に好惡の變あるより、聖賢もさらに決しがたき所をいへり。しかれども其後の優游をしりて五倫の人和を要となせる、談笑の實を稱せざらんや。さて此論の和尚と先師とは、本より竹馬の心友ながら、かしこには僧家の實をおこなひ、こゝには俳門の虚をさばきて、明暮のあそび敵なるよし、禪家に這箇の物識なりとぞ。

蒟蒻の論　廣　逹　支

人に好といひ禁といふは、意におこりて身におぼゆれど、おほくは口の沙汰によるべし。さはとて麥飯をきらひ米の飯をうらやむ人は、無下に貧福の沙汰なれば、好禁の論にはあらざるべし。今や俳諧の論義には、人に豆腐のきらひはおほけれど、蒟蒻のすきはまれなりとて、武陵の翁の遺文にも、彼が風雅を稱し給へりとぞ。實にも豆腐のはじめを思へば、淮南王のお好より、我朝の帝へも、其法を傳へさせ給ひ、都に名高き長者町の、白壁にたとへられて、絹漉の榮花は更にいはず、海苔の紫に身をまとひ、鰹の花

詞ヲ歎キテ、此等ヲ大和眞名ノ絶妙ト稱スベシ。△「去此不遠」ハ前ニ出タリ○頓阿ノ歌ニ「山里の花さきぬやとたづね來し此すまひこそうらやましけれ」△在太仲ガ招隱ノ詩ニ「岩穴無ニ結構」ト隱棲ノ無造作ヲ云ヘリ。△大惠ノ語ニ「求レ之皆苦」△「君看」トハ諸人ヲ指ス詞ニテ、禪錄ニ數多アリ。△或翁トハ、老子ノ取意ヲ合セテ我家ノ翁ヲ云ヘルニヤ。白馬ノ遺訓ニ「俳諧は中品以下に風雅をひろめむと、中品以下の言行をもて中品以下の人をみちびくと云々」虛實ノ論ニ「虛に居て實をおこなふべし、實に居て虛にあそぶべからずと云々」此二語ハ蕉門ノ要言ナレド、和尚ニ對シテ我祖ヲ讃セズ、或翁トハ時宜ノ文法ナリ。△禪語ニ「易レ遊ニ天堂。難レ入ニ地獄」「拔ズル」ニ或翁以下ノ二章ハ、禪家ト俳門ノ意地ヲ競ベタル、論ハ此二章ニ看破スベキナリ。△つれ〴〵艸ニ「いざ給へ出雲をがみに」トアリ。人ヲ誘フ詞ナリ。▲雲士園ハ其寺ノ栽園ナリ。黃山ノ東岡ニ在リテ、書經ニ雲夢ノ採言ナリトゾ。其後其岡ニ蓮二房ノ別墅ヲ構ヘ、或ハ黃山老人トモ云ヘリトゾ。爰ニ橋尼(きつに)ハ白狂ガ童名ナリ。聯句行ニ其故アリ。▲虎溪三笑ハ擧グルニ及バス。三人連(つれ)ノ形容ナリ。

掛一問了則、日已傾西而秋色涼。誘引給些、歸我寺而振舞雲土園之西瓜迚、不撫敢橘尼之髪歷、問答者爰爾揚棚而、不鎖例之尻戸而、打笑虎溪之橋而過矣。

○註ニ曰、○喜撰ノ歌ニ「我菴は都の辰巳しかぞすむ世をうぢ山と人はいふ也」「按ズルニ、此歌ハ人ハ云フナリ我ハ云ハズ、しかぞハ爾所ト書キテ如斯ト註スベシ。古抄ハ何レモ分明ナラズト、遺稿ノ夜話ニ此評アリ。此等ニ大和眞名ノ當用ヲ稱スベシ。和歌ニ假名眞名ノ取違ヘ多シ。

△淵明ガ歸去來辭ニ「三徑就荒、松菊尙存」○興風ガ歌ニ「誰をかもしろ人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに」○西行ノ歌ニ「世の中の人には屑の松原といはるゝほどの身こそやすけれ」▲小倉ノ山莊ハ嵯峨ニ在リ。定家卿ノ別莊ナリ。△莊子ノ養生主ニ「緣督以爲經」註ニ「緣順也。督迫也。不得已而後起也」△世ノ諺ニ「伯父ガ甥ノ草ヲ苅ル」トハ、嫡家ト庶流ノ果報ナガラ、渡世ニ身持ノ誡ト知ルベシ。右範モ東羽モ先師ノ猶子ナリ。○拾遺集ニ「音に聞く狛のわたりの爪つくりとなりかくなりなる心哉」「按ズルニ、此段ハ我者ノ起語ヨリ令習ノ結語マデニ、論者ノ老情ヲ演ベ盡セリト云ハン。娵麼著心於起臥トハ、例ニ俳語ノ雅言ヨリ、歌人連歌ノ艶

手盛之飯而息災也了伯父之事也焉。我者好厭菜飯于霜夜居、慰欠餅于雨日則、姬歷著心於起臥而、嘸那思六箇敷焉矣。○兎成角成乍成心歷、世者不有安令習所哉。或時有掃好之和尚而、訪給我庵止乎、都久々々詠庭之氣色而、世者不知無限物也焉、我者飽我庭之箒目而、此庭之更不雨而露歷凉敷荻萩者、假令有嵯峨野之奧共、去此不遠迚、實歷羨給此住居則、主者乍我庭之松風、爲得手揚帆心地猿耶。若夫人情之令習迚、物有好惡之變則、人之飽其庭之結構而、有面白此庭之不掃地、與我者飽此庭之不掃地而有面白其庭之結構、面白意者五五也共、人來而十倍此所也則、我往而百倍其所也焉。其意奈何也則、常求結構人者、筆好紅粉之色則、箒惡蜘蛛之巣而、雖自娛掃地、求者皆々不苦耶。自苦而慰人者可謂損之損摩哉。君看遊不掃地人者、詠其身其儘之庭而、慰我宛慰人宛、遊心之易遊了則、爲得之得也爲百倍之百倍焉。或翁歷苅投此理而、居卑而交尊、居虛而行實與所。增而論禪家之意地則、往極樂者易了共、遊地獄者難與哉。和尚向何處去。扣疊而

をたつれば、爰に俳諧の家風を寫して、闇の一論はかけるならん。しかれば一篇の詮する所は、詩歌連歌の實地をほめて、我俳諧の虚誕をそしりながら、噓八百の三字に結語せしは、誠に談笑の諷諫といふべし。作者は岸本氏にして、越中の魚津に俳城をかまへ、書畫に風流の名をつたへて、みづから知二齋と標號す。先師の愛弟なりとぞ。

不掃地論

東花坊

○我庵者非都之辰巳兮、從本非爾所住心兮。往時者任木葉之風而、還日者渉蓬生之露則、年兮月兮左程爲過焉。△松兮菊兮斯迄荒果止乎。淵明歷無辭于茲梟矣。今年者迎古郷之春而、○松者不忘往昔之友歷、浮世之道歷所斷許、○人爾者被謂葛之松原矣。春者雉子之通巣居、秋者山雀之尋塒而、芳野之花歷更科之月歷、捨此庭而覓孰國矣。斯言則在世人之有面白小倉之山莊而、爲似態佗我身共、造庭爾者不遣得木鋏兮、直垣爾者不知枝折結兮、△順物迫事而不得已時者、忖右範東羽之機嫌而、不如養其日之老焉。左在共所謂苅萠之草因果歷然之喩事者、打喰

つら今の風雅を思ふに、月の夜の金持をほめて、闇の夜の油虫をそしれば、詩歌の人の遊にまじはり、まして連歌の振舞には、月夜の馳走にあふべけれど、俳諧はたゞ闇の瓢をほめて、あと先のしれぬを面白がれば、唐へなげ金の商をして、嘘八百の論といふべきにや。

○註ニ曰、△つれ〲艸ニ「夜に入て物のはえなしといふ人いと口をし。萬の物のきら飾も、夜のみこそめでたけれ。中略神佛にも、人のまうでぬ日夜まゐりたるよし」トアリ。△おなじ草紙ニあだし野の露も鳥部山の煙も、人のいやがる物をほむればなり。つれ〲一部は此意地也。○ばせを翁發句ニ「稲妻にさとらぬ人のたふとさよ」△彼愚トハ論語ノ取意ニヤ、顔回ト伯玉ガ愚ヲ譽メ給ヘリ▲闇ノ夜トハ瓢ノ花生ノ名ニテ、跡先ノ知レヌト云フ意ナリト。然レドモ此論ニハ、瓢ニ誹諧ノ名ヲ假リテ、闇ノ一字ヲ寄セタルナリ。花生ノ名ヲ稱スルニハ非ズトゾ。

○評ニ云、此論は例の意地ながら、月夜をそしり闇の夜をほむるに、つれ〲の法師をかたふ人となせるは、かの好色の一段より、二百余段の要文には、儒佛の詞を飜轉して、つれ〲一部の意地

○評ニ云、此論は始より終まで樽と徳利との尊卑を論じて、人間一生の苦樂をさとす。さるは其智には及ぶべく、其愚には及ぶべからずといへる、孔子の金言ならざらんや。まして德利の名も容も、世情の色香をはなれたらん、これを論の曲折にして、設論の體とは此事也。

闇の論

岸倚彦

いにしへより諺に、いつも月夜に菜汁米の飯とは、神祇釋教は論におよばず、戀も無常もしらぬ人の、鼻の先のあだ言にや。神佛にも、人のまうでぬ日夜まゐりたるいとよしとは、聞及びたる風流法師の、闇をほめたる言葉ならずや。戀の暗がりはましていはず、あだし野の露に身をかこち、鳥部山の煙に命をなぞらへて、さらずば哀もなからんと、無常の闇をほめたるも、道に物數奇の論といふべし。世はいざ餅の酒のとて、月雪花のしなじなに、晝狐の物見だけきも月夜鴉のうかれ心も、わらべ相手の遊數奇にて、我俳諧の友達にはたらず。かの稻妻にさとらぬ人を、世にたふとしとほめ給ふは、我家の翁の金言にしてかの愚をほむると此闇をほむるは、ほむる人の表裏をしるべきなり。つら

（一）歸去來賦

り出て、飴薬の名を忘ざらんには、又六が門の極樂にあそびて樽と松葉の色香をあらそはず、婦夫いさかひの棒にくだかれぬ、願以此功徳の徳をつゝしめや。

○註ニ曰。△易ノ繫辭ニ「寂然不レ動、感遂通ニ天下之故ー」▲晉史ニ「阮籍能爲ニ青白眼ー云々」ハ睨ム時ナリ。△淵明ガ賦（一）ニ「有レ酒盈レ樽云々」▲武陵トハ江戸ノ市ナリ。津ノ　ノ伊丹酒ヲ上品トスレバ、船中ノ薦ナガラ店ニ積ミテ、薦被トハ新到ノ稱ナリ。△白氏文集ニ、「黄纐纈林寒有レ葉」トモ「林間煖レ酒燒ニ紅葉ー」トモ、二章ヲ裁入レテ一句ト成セリ。△漢武故事ニ、芙蓉盃ヲ擎ゲテ通天臺ノ上ニ露ヲ承クル事アリ。「按ズルニ、此一對ハ故事ヲ採リ古語ヲ摘ム。轉換自在ノ鑑ト云ハン。去ルハ纐纈ト芙蓉トノ連綿ヲ對セントテ、臺ノ一字ヲ錯綜セシハ、林ト臺ノ字對ヨリ、紅葉ト黄金ノ光彩ハ言ズ、格ニハ互照ノ絶妙ト稱スベシ。●山谷ガ四休ノ詩ニ「三平二滿飽卽休云々」三平二滿ハ顔ノ高低ニテ、俀語ニハ餅屋ノお福也。△漢書、「上拜ニ朱買臣會稽大守ー曰富貴不レ歸ニ古鄕ー。如ニ衣レ錦夜行ー」○一休和尚ノ歌ニ「極樂をいづこのほどと思ひしに杉葉立たる又六が門」△「願以此功徳」は念佛の結文にして德の一字の結語なり。

麁相なる男に徳利はいかゞとて、寐て居る樽に水を入てさかさまにふりまはされ、傘の片手にさげられて夜更の門に立らんもさぞや。こゝに徳利の榮花を論ぜば、桃の祝ひ日は更にして、菖のゆふべ菊のあした、娵見の部屋に行とても、木地に吹繪の簞司に入られ、多くは箱入の菓子とつれだつ。本よりかけ流しのうき身ならねば、名をさへ家德利と呼れぬる家持の德のうらやましからずや。たとひさし樽も瓶子にはおとり、塗樽も蒔繪の果報なきに、武陵の市に賣らるゝ時は、薦かぶりの名に立て、終に君王の宴にもあづからず、果は味噌桶の納戸にすまひ、小糠漬の片廂に佇む。さるを德利は俳諧師と遊びて、世情のさびをしれるより、纐纈の林に紅葉の酒をあたゝめ、芙蓉の臺に黃金の盃をさゝぐれども、其容ます〳〵大へいにして、三平二滿の美目をつくろはず、肉黎に肌のあれたるは尙おかし、それが中にも、都の俳諧には南京交趾の媚をかざり、唐津御室の名をあそぶに、かつてもて彼が本意ならねど、尼達のためには美淋酒にまじはり、童部のあそびには雛の調度ともなりぬ。たとひ買臣が錦手にほこるとも、素生は美濃の山家よ

和漢文操　巻之六

○論類

徳利の論　　張升角

むかしより酒のうつは物には、唐の大和のたくみをつくして、花鳥の風情をそふれども、唐土の詩人は樽の新しきを愛し、我朝の俳諧師は徳利の愚なる形をほめたり。されば此物の世に出る事は、瀬戸の藤四郎が飴薬にはじまり、備前の喜三郎が赤薬にけはふ。天はまるく地はたひらかに、寂然不動のかたちを得て、尻のすわりをほむるとて、其名もとつくりとは付けぬらん。しかるに樽といふ物は、かりにも寐ころべば阮籍ににらまれ、起てはたらけば淵明にほめられて、起居に心のいとまなきを、徳利は棚の下にうづくまりて、酒の殘りをまつらんもおかし。況や頓の客ありて、氷をくだき雪をはらふ夜も、

或の三十三篇も、これらの寓言には過ぎざらん。作者は伊勢の桑名に産して、或は京師に住み、或は尾城に住めりと。陳は姓にして佐々部を氏とす。麥士は尾城下の俳名なるよし。是をも一體別名の風士といふべし。

○註ニ曰、△東鑑ニ「千葉介常胤獻二垸飯一云々」或説に、垸飯ハ必ズ小豆ヲ用ユトゾ。▲定家卿ハ頼家公ノ和歌ノ師ナリ、入道後ニ鎌倉ニ下リ給フ事アリトゾ。按ズルニ此段ハ、定家卿ニハ假名遣ヒノ撰アルヨリ、いきくふひへノ論ヲ設ケテ、欠（かき）ト掻（かき）トノ二用ヲ顯ハス。去ルハ先師ノ大和詞ニ、和訓ニ假名眞名ノ兩用ヲ知ラネバ埒ノ明カヌ事アリトハ、此等ノ字義ヲ云ヘルニヤ。▲つれ〲草ニ「いさたまへ出雲ながみに、かいもちひめさせむ」トアリ。○「物の名も所によりてかはりけり難波のあしは伊勢の濱荻」△白川夜舟トハ俚諺ニシテ、夢ニモ知ラヌ事ノ形容ナリ。「按ズルニ一體別名以下ハ、文ニ錯綜ノ術アリト云ハン。去レバ難波ト云ヒ伊勢ト云ヒ、善惡ノ沙汰ノ太騒ナルモ、畢竟ハ音ノ一字ニテ、前後ノ用ヲ結バントナリ。然レバ戯頭ノ格ニ似テ、此等ヲ雲土夢ノ絶妙ト稱スベシ。△古樂府琴ノ唱歌ニ「露といふも草の名、茗荷といふも草の名、富貴自在冥加あらせ給へや」トアリ。

○評ニ云、此説は例ながら、七名の中にかい餅を釋して、いきくの通語に聊の風情をたゝへたる、これらを俳諧の名説にして、耳ちかといひ口ちかといへる、一篇の結文を稱すべし。たとひ荘子

ひより、よろづに風流を好ませ給ひ、皆朱のそり椀も法事めきたりとて、花も吉野の菓子椀などにおしひらめ、くぼかなる所に例の小豆を置たれば、花のかたちに似たるより、牡丹餅とはいへりとぞ。しかるを今の世の内裡上臈は、萩の花ともいふなれど、さるは強飯といひ赤飯といへるを、鳥の子のかたちに握れば、紅白のうつろひより、媚ては宮城野ともいふなるべし。すべては一體別名にして、○難波のあしもよしといふなれば、伊勢の濱荻の音もせぬ時は、隣しらずとも名をかはり、夢もしら川のつくほどを知らねば、夜舟とよばるゝも又おかし。此比山寺にいざなはれて、そこの和尚のもてなしに、山伏の弟子をと聞えたるに、いかにといぶかしく思ひ居けるに、かのかいもちにて侍しは、さしもなき秀句にはありけむかし。そもや花鳥の色々に、梅に鶯の春よりも、鹿に紅葉の秋よりも、餅に砂糖の君が代には、富貴自在は更にいはず、牡丹といふも餅の名にして、小萩といふも餅の名なれど、搔餅は名の無造作にして、俳諧はたゞ耳ぢかなるを旨とするべし。

○評ニ云、此説は虚誕ながら、眠に五つの品を配るに、例のさびしく例のおかしく、こゝろを名説の當用といふべし。されば此主は、越の直江津に石陸夜が従弟にて、一向門の新發意なるより、月花には兼好の名言をかり、是非には法然の諧語をひきて、奈良茶三石の戯言をもて、一篇の起結をそなへたらん、さして註解の筆墨にもわたらず、文は簡古の用をほむべし。

搔餅の説

陳 素 六

むかし鎌倉の頼朝公は、朱椀朱折敷の古風より、よろづに小豆をすかせ給ひて、その世に埦飯の振舞とはあづき飯の事なりとぞ。それより七郷にもてはやして、尼將軍の御時には、歯ぬけの尼達もおほかれば、餅米の飯をやはらかにたきて、杓子にて搔合せ、握りてあづきをまぶしぬれば、名も取あへず搔餅といへるを、その比定家卿は入道にて鎌倉におはしつるが、此名にいきくの假名づかひを、かへすぐ\もほめさせ給ふるよし、欠餅と搔餅との眞名の兩用をもしるべき也。しかれば兼好のつれぐ\草にかいもちひめさせむとは、飯を握りたる故ならん。そのゝち頼家の御時には、ひたぶる公家衆のまじら

字をいひよせて、餅につきせぬとむすびたる、當時の祝言を稱すべし。作者は伊勢の桑名に住す。

佐々部氏の古老にして、風雅になかしみなしれる人なりとぞ。

眠五の説　　東花坊

此家に三代の風雅ありて、其祖を眠否といひ、其父を眠鷗といふ。眠鷗は我翁に逢ひて鷗の一字を得られたるよし。其子眠五は東花坊にあひて、今の一字を得たる也。そもそも我門の風雅には、眠るべきの五つあり。天にねむり地にねむり、人にねむり月花にねむり、さて俳諧にねむる事也。それ天地人に眠る時は、天地人のあはれみに任せて、おのが理窟を用ひざるのいひ也。次に月花に眠る時は、月花はさのみ目にて見ねど(一)、心の風雅を忘ざらんには、四時の變におくれじとの謂也。まして俳諧に眠る時は、世間の是非に心をとめず、臺所の椀の音に耳をそばだてず、目のさめたらん時(二)口にあそびなば、雜行の念佛にはまさらんとの謂也。此五つのものを眠り得て、奈良茶に、三石の意味はしるべし。されば朝寐宵まどひの無下の浮名はとるべからずと、此一鞭を加ふるもの也。

(一)徒然草に「すべては花をばさのみ目にて見るものかは」

(二)徒然草に無然上人の人に答へたる詞に「ただ目のさめたらん時に念佛し給へ」とあり

はる。其形はいさ愚なるが如ならん。しかるを奈良の都にちかき木津あたりの晒つく比は、佐保の河原の轉寐より、あだなる戀にうかれそめて、秋は班女が扇ならねど、爰かしこにつき捨られて、杵の行衛もしらずなりぬらん。されど高砂の松の木臼は、山川萬里の杵を忘れず、住吉の神の鏡餅に、つきせぬ契こそめでたけれ。

○註ニ曰、▲易ノ繋辭、黄帝ノ下ニ斷レ木爲レ杵、掘レ地爲レ臼云々」「按ズルニ、此發端ニ易ノ辭トハ、寓言ニテ、黄帝ノ始チ云ハン爲ニヤ。△三杵ノ御饌ハ伊勢ノ古記ニアリ。前ニ出デタリ。●東坡臼ノ詩ニ「鑿破混沌穴云々」○俊成ノ歌ニ「我戀はこもつちこしの一もぢりもぢりやすらんあふかひもなし」△論語ニ「回也如レ愚」●班女が扇ノ歌ハ前ニ出デタリ。△源氏ノ明石ノ巻ニ「珠數の行衛もしらずなりて」トアリ。△高砂ノ諷ニ「山川萬里をへだつれども、たがひに通ふ心づかひの」トアリ。

○評ニ云、此說は全く諛諂にして、黄帝のはじめより高砂のをはりまで、虛誕ならずといふ所なし。しかれば其虛に其實をほどきて、文章の優游は此間にしるべし。まして高砂住吉の神に、鏡の一

んや。しかるを伊勢が賣家より、人に盛衰の姿をしめし、物に哀樂の情をうつす。こゝに談笑の諷諫をしれや。作者は伊藤氏にして、尾の城下に嘉遁す。或は市中の閑を標して五條坊ともいへり。

臼杵の說　　佐倚山

易辭にいふ、臼と杵とは陰陽の兩儀より、夫婦の容に思ひよせて、黄帝のつくらせ給ふよし。春はたがやして夏は植ゑ、秋はいろみて冬はをさむ。いづれか此物のはごくみにあらざらん。人をやしなふの本なりとぞ。況やあまてらす神の御供も、三杵の掟の永き代まで、此物の名のみくちざれば、正五九月のそなへより、節供々々のめでたさにも婦夫のものの働て、摺小木の杓子のも、其時の下知にしたがふなるべし。それを東坡は詩につくりて、混沌の穴ともいひ置しに、なぞや我朝の歌人達は、槌のみよみて杵をよまざるや。詩には萬物の名をつくせども、歌にはいへぬ事のみぞおほかる。さりや麥うち籾する比も、扱箸投槌のあらごなしに、塵あくたの働をしらず、月待日待には身をきよめ、二度の彼岸にもたのまれて、神祇釋教の兩部に手つだひ、娵入葬禮の戀無常にもまじ

燃ヲ抱留メタル事モ▲牛若丸ノ千人切モ、世ノ知レル所ニテ、細擧ニ及バズ。△栴檀香樹ハ佛經ノ説ナリ。木履ニ寄セタルハ寓言ナリ。▲雲ヨリ落チタルハ久米ノ仙人ナリ。諸書ニ在リ。細擧ニ及バズ。△玉鉾トハ道ノ枕詞也。「按ズルニ、盲人ノ一章ハ、寶ノ玉鉾ト枕ヲ重ネテ、金ト云ヒ馬糞ト云ヘル、文ノ斷續ハ更ニシテ、此等ヲ錯綜ノ絶妙ト稱スベシ。△晉史ニ、「謝靈運好登レ山嘗著二木履一。上レ山去二前齒一。下レ山去二後齒一」▲晉史、「或人有レ詣二阮孚一。見二其蠟レ屐、歎曰、未レ知一生當レ著二幾量屐一」△五條以下ヨリ軒ノ妻マデハ、源氏ニ夕顔ノ巻ノ裁入ナリ。其書ニ見ルベシ。「按ズルニ錦小路ハ、肴ノ爲ニ日覆ヒテ常ニ水ヲ灌グ故ニ、多クハ木履ヲ帶クナリ。此等ヲ諧語滑利ト知ルベシ。○古今ニ、伊勢が家賣ル時ノ歌ニ「あすか川ふちにもあらぬ我宿もせにかはり行く物にぞありける」○順禮歌ニ「古さとをはる〳〵ここに紀三井寺花の都もちかくなるらん」△中陰經ニ「草木國土悉皆成佛」▲法花經ノ龍女成佛ノ段ニ變成男子ノコトアリ。細擧ニ及バズ。

○評ニ云、此文は全く説の體をつくして、始より終まで故事をこなし古語を轉ず。誠に虚誕ならざら

落てある、金を拾はぬはいと本意なし。されど靈運が山あるきに、片齒の木履ならんよりは、おなじくば阮浮が家に買はれて、蠟引の寵愛にあへかしとは、京の木履屋がひとり言とぞ。むかしは五條も小家がちにて、軒づたひの道もしるかりけむ、あの花をりてまゐらせよとあれば、惟光やがて心得て、錦へ行て木履をかりて、軒のつまに伸上りたるは、さして狼藉の沙汰にも聞えず。垣のあなたより菓物をぬすむとて、それをかさねたる才覺はにくし。しかるに此物の宿世なるや、鴛鴦のちぎり淺からず、よのつね紅の鼻緒をならべ、あさぢが宿の轉寐にも、かりそめもはなれざりしが、伊勢が家賣る世となりては、緣の下よりかき出され、終には片足々々となりて、居去といふ者の手にはかれて、紀の那智山もはる〴〵と、三十三所の靈地をめぐれば、悉皆成佛の結緣にさそはれ、變成男子の化粧もはげぬらん。たとひ非情の木履ながらも、觀音勢至の箔をうらやまず、本の白木ぞたふとかりける。

○註ニ曰、▲役行者ハ元享釋書ニ傳アリ。木履ノ事ハ別書ニ尋ヌベシ。▲本朝ノ軍史ニ、平忠盛ガ火

○評ニ云、此辨は實記にして、纔に佐志の二字をもて公私の二用を盡せる也。げにも枕の主從に人和の虚實をさばき得て、五倫の優游をしれりと稱すべし。作者は紀姓にして、堀田氏なり。濃州の岐阜に住す。郡令下の舊官士ながら、公暇の餘力には俳諧にあそべる、官門の隱者といふべき也

○説の類

木履の説

藤　三　徑

聞つたふ欅の高木履は、役の行者の山ふみより、祇園の灯とほしにつたへられ、牛若丸の塗木履は、千人切の首途に念者法師の物數奇とや。栴檀は本より佛在世にはじまり、桐は今の世の輕はずみより、ある仙人は雲より踏はづしぬ。其外はいざしら雪の、雨をしのぎ露をいとふ。盲人は誰に寶の玉ほこや、道のちまたの馬糞はふまねども、その細道に

をとぶらふ事なければ、人のとぶらひ來る事もなし。宿は蓬生のおのがまゝに、箒はとこしなへに壁にいこふ。されど東方朔がいへる、禁庭の隱者には及ばねど、かの木枕を太郎冠者にして、月雪花のをり〳〵をたのしむ。是よし彼が忠功にて、是を邯鄲の榮花といふべければ、彼に昇殿の爵をあたへて、輔佐の心をあらはさむと、世にありふれたる貘の一字をけづりて、佐志の二字を銘ぜしが、さしまくらを佐志枕といへる、萬葉體の手すさみなるべし。

○註ニ曰、△文選ノ客難ニ「東方朔曰、知ニ朔等一所レ謂避ニ世於朝庭之間一者也。何必深山蒿廬之下云云」▲異聞集ニ、盧生邯鄲ノ枕ノ事アリ。世ノ知レル所ナリ。細學ニ及バズ。△白居易ガ貘屏贊ニ「寢ニ其皮一避レ濕、圖ニ其形一避レ邪云々」陸佃ガ曰ク、「然則以ニ避レ瘟之事一、爲下食ニ惡夢一之謬說上歟」「按ズルニ節序紀源ニモ此貘ノ論アレド、枕ノ木口ニ書キ來テ、芳野ニハ貘ノ觀音モアリ。謬ニ隨ツテ故實ヲ用フベシ。△萬葉體トハ假名遣ノ事ナガラ、佐志ハ古風ノ題ナレバト、此文ヲ昇下セシナリ。

ズルニ、不レ成レ名トハ、孔子ハ一藝ニ限ラズ、萬物萬用ニ名人ナレバ、大哉ト稱美セリ。朱註ニ惜レ名ノ說ハ文意不實ト、先後抄ニ難問アリ。△前漢楊雄ガ傳ニ「高明之家、鬼瞰二其室一」△莊子ニ名者實之賓云々」△百栗莊ハ石伯兎ガ別莊ナリ。文鑑ニ名錄アリテ、獅子門ノ親弟ナリ。

○評ニ云「此辨は桐の多能より、例に俳諧の温屬を說きて、世法の用をしらしめむと也。さるは辨明の實にして、これらを諷諫の鑑に見るべし。其主は增山氏にして、越の福井に產す。始は森山の家の吏令たりしが、今は石原家につかふ。ひさしく獅門に信を通じて、二字の恩を忘れざる人といふべし。

佐志枕の辨　紀梅因

我宿に唯ひとつのさし枕あり。出ればそなたによりていこひ、歸ればこなたに出てつかふ。予が出るはおほやけにして、彼がいこふは私なれど、我つとむれば彼いこひ、彼つとむれは我いこふ。世はたゞ車釣瓶に似て、君臣の間の優游といふべし。予か性は本より柔弱にして、損益は智惠にあたはず、名利は機根におよばず、寒暖となく愁喜となく、人

して規矩の定あらじとならん。誠に梅櫻のはなやかなるも、栗柹の用をなさゞれば、杉は木立の直なるをほめ、檜木はまげて用ゆべけむ。しかるに此桐の用たるや、たをやかならんとて楊柳の眉をもつくらず、たふとからんとて果李の名にもほこらず。まけて用ゆべくして又すなほ也。其葉は唐叔の國を封じ、其花は豐臣の家にさかふ。さりとて虹梁の名をなさず、障子骨にひかれ火打箱にさゝるゝは、高明の家の危ければ也。しからば俳諧にあそぶ人も、官祿の門に臂をはるとも、町人百姓の和を思ふべく、富貴の家に身をよするとも、頭陀乞丐の錆を忘ざらんには。それを此桐の用にして、名はよし實の賓ならんをや。ことし蓮二が行脚をむかへて、かの東桐の辨を求るは、そこに百栗莊の伯兎にして、彼は此主の公外の友なりとぞ。

○註ニ曰、▲周史ニ成王剪ニ梧桐葉一以爲レ圭、而授ニ唐叔虞一曰、余以レ此封レ汝云々」▲歷代備考ニ「天正十四年秀吉任ニ關白一。改ニ豐臣一云々。」「按ズルニ、此對ハ例ニ和漢ノ當用ナガラ、爰ニ其葉ト云ヒ其花ト云ヘル、文ニ互照ノ絶妙ト稱スベシ、△論語ニ、「大哉孔子、博學而無レ所レ成レ名」「按

ハ這箇ト云ヒ、倭語ニハ這箇ト云フ。チエコハ唐音ヲチト略セリ。何レモ指レ物詞ナリト。然レバ這ガ父ニト書クベキニヤ。△説文ニ烏ハ孝鳥ナリ、鴉ハ不孝鳥ナリトゾ。△卯ノ花ノ時鳥ヲ指セリ。「按ズルニ、此一句ハ梅ト竹トニ卯ノ花ヲ結ビデ、這ガ父ノ起結ナガラ、爰ニ時鳥ノ異名ヲ隠シタル、文ノ断續ハ更ニシテ、法ニハ隠見ノ絶妙ト稱スベシ。

○評ニ曰、此辨は方折明白にして、愛情の實を失はず。尤辨の的中といふべし。誠に一篇の稱する所は、四季の詞を押しかへして、始には其鶯を愛し、後には其鶯を惜める、すべて男女の情愛にも心の表裏ある事をしろべし。況や父子の情をよせて、二鳥の遊放をいましめたる、例の諷諫はここにしろべき也。

東桐舎の辨

蓮二房

越の山只と聞ふるは、むかし東花坊を師とし、東桐舎の三字を得たるより、風雅は年をかさね、朋友は日にしたがひて、世法の進退をもしれりとや。今はた東桐の二字を辨ぜば、先は東陽の生意より、さて桐の木の自由をいへる、本より番匠の材を用ふるには、さ

充ニ賄物ー。西行上人作レ科ニ領之ー於ニ門外ー與ニ放遊嬰兒ー」▲編年通論ニ「龐居士件ニ靈昭女ー、隱ニ居深山ー。賣ニ竹漉籬ー給ニ朝夕食ー」▲蔡邕ガ焦尾琴モ、仲景ガ古猿萬年ノ二琴モ、總テ桐ヲ以テ作レリトゾ。▲王羲之愛レ竹「一日無ニ此君ー哉」ト云ヘリ。▲日兮トハ、鶯ノ聲ニ月星日兮ト餘韻ノ長キヲ、三光ノ引鳥トテ世ニ祕藏スル事ナリ。「按ズルニ、兮字ハ和歌ノ助語辭ニ分明ナラヌヲ、先師ノ大和詞にあいうへをの釋文ヨリ、始メテ和訓ノ用ト成レリ。譬ヘバ永キ日ノ詞鎖ニ「ひいモ「ひゐモ通ジ難ク、「日いトハ增テ書法ナシ。然レバ兮字ノ和訓ヲ得テ、大和ノ當用ヲ稱スベキナリ。

▲鶯ト詩文ニ亂モ狂鶯トモ。老鶯トハ夏ノ鶯ナリ。▲畫譜ニ、金衣鳥トハ鶯ノ一名ナリ。○古今集ニ「あさみどり春たつ空に鶯の初聲またぬ人はあらじな」△枕草紙ニ「鶯の夜鳴かぬはいぎたなし」といへり。平語ニ寢濃ト云ノ事ナリトゾ。○定家卿娘の歌ニ「鶯よなどさは鳴くか乳やほしき小鍋やほしき母や悲しき」▲枕草紙ニ鶯ヲ難ジテ「九重の內に鳴かぬぞいとわろき」トアリ。長保ノ內裏トハ淸少納言ガ比ナリ。○萬葉ノ長歌ニ「鶯のかひこの中のほとゝぎす、ひとりうまれてさが父に似ては鳴かずや」トアリ。其註ニ、さがは汝が也」「按ズルニ、大和詞ニ漢語ニ

もことかゞじを、秋もやう〱時雨がちなるに、小春の朝日に新まりぬる比は、野烏も笹垣をつたひ來て、舌さきにさけびわたれば、おのが榮花の冬籠をも忘れて、いつしか野心もつきぬらん。いとゞ梅が香の軒ちかう、早咲の春にそやされて、羽ぶくらんさまもいとにくし。さてや長保の内裏には、何にかは鳴ずして、清少納言にもにくまれけむ。さはいへ妹脊のなからひにも思へばや、人のうらむらん。憎むは愛の深ければならし。我さらば汝が父たらん。烏たも孝と不孝との名あれば、梅にあそび竹に忘れて、卯の花の烏の行衞なさには似ざれや。

○註ニ曰、▲枕双紙ニ「うへにさぶらふ御猫は、かうぶり給はりて命婦のおとゞとてなかしければ」トアリ。▲左傳ニ「衛懿公好レ鶴乘レ輦云々」▲史記ニ楚ノ項羽ノ歌ニ「力拔レ山兮氣蓋レ世兮。時不レ利兮騅不レ逝兮。虞兮虞兮奈ニ若何一」云々」烏江ハ敗軍ノ地ナリ。▲唐玄宗ノ事ハ前ニ出デタリ。▲鬪犬ノ事ハ太平記ニアリ。相模入道ノ遊ナリ。●長恨歌ニ「驚破霓裳羽衣曲云々」▲晋史ニ「王羲之好レ鵝。爲ニ山陰道士一寫ニ道德經一。換レ鵝携歸云々」▲東鑑ニ「一品以ニ銀作猫一被レ

ねば、猪口も南京の市にもとむ。しかるを籠の外家には桐をもてつくれるも、此木を琴にもちゆれば、妙なる聲の出ればとや。さて初春の暖なる日は、竹の葉に水をそゝぎ梅の花ををり入て、はやく野山の氣色をうつす。まして夏の日のたへがたきには、芙蓉の水に橋かけて、暮にあつさをさますより、秋は露霜の夜をいとひ、冬は水ならぬ鐘もこほれば、曉の爐に炭つぎて、老をやしなふ子の寐ざめも、子をおもふ親の心づかひも、明くれの擂餌につかはれて、我は此君なからんやの、竹を愛せし無情には似ざらん。是は生あり死あるものゝ、愛別の理も思はざらんや。されど春たつあしたより、月星の影もはなやかに、日兮の永からん彌生も過て、卯月は老の名にたつらん、みな月のほどに毛をかゆれば、實は肌さむの秋をおぼえて、名月の比は長く短く、その羽はいまだそろはねど、ほのかに金衣のひかりありて、みどりの初音も待心とはなりね。誠に春の夜の長閑なる月に、此鳥の鳴たるためしあらば、此ほどの月夜には、その一聲の聞えまほしからんに。今のいぎたなきはおさなくいとよし。さはれ鶯よ、母やこひしき小鍋も擂鉢

し。其傳は文鑑にありて、蕉門無双の道心なりと。湖南の松本にその遺跡あり。

愛レ鶯辨

苗窄陀

あそぶ日は琴碁の外もあらん、このむ時は書畫にもかぎるまじきに、むかしおはしつる帝の、月もふけては物さびし、花もちる時はかなしとて、御前ちかく猫を召されて、名をさへ命婦のおとゞとは召しけむ。まして唐土の鶴は手ぐるまにかしづかれたる、すべてその數奇におくれたらん人は、益なしとのみ思ふらめど、楚王の駒も烏江にいなゝきて虞美人がなみだにさまよひ、唐帝の車は馬嵬にたふれて、楊貴妃が血にそみぬ。いづれか愛情の限ならざらん。それが中にもおろかなる人の、大に羅綾の衣裳をかざりて玉階の下にたゝかはしめむよりは、木兎にあかねの頭巾をかぶらせ、猿に殿中羽織をきせて、霓裳の舞にもかえじと思ふは、世に物數奇の罪なき方にや。予は百老館に籠の鶯を愛して、王羲之が鳥を反故にかへ、西行法師のしろ銀の猫を又貰せしたぐひにはあらで、百金をくだきて一羽を買得たるに、三光の名のこゝにむなしからず、籠も靈昭がふり賣なら

ちかき比はばせをの翁のみ、此所のおもしろみを知りて、我はた病がちなる身の、齢はすでに五十年にして、廿年は此所に老はてぬと、つねぐ\は戯れ聞えしか。誠に野梅の垣根に咲日より、初雪のさゝ葉にちる頃も、此所のみぞ世の外の心地はせらる。佛經に説れし五百劫の思惟も、歌書に作れる六十帖の觀相も、後は筆墨の働ならめと、始はたしかに此所の工夫なるべし。

○註ニ曰、△歸田錄、「思ニ索文字一在ニ於三上一。所レ謂馬上厠上枕上也」△赤壁賦ニ「馬上横レ槊賦レ詩云々」●陸放翁ガ夜雨ノ詩ニ「支ニ枕幽齋一聽始奇」○新古今ニ「待宵に更行く鐘の聲きけばあかぬ別れの鳥は物かは」▲軍史ニ信長公ノ長雪隱ノ間ニ、蘭丸ガ太刀ヲ持チナガラ割鞘ノ數ヲ算ヘ覺エタル類ナリ。△無量壽經ニ、「具ニ足五劫思惟一云々」○源氏六十帖ノ趣向ハ、湖水ノ觀相ニ浮ビテ、一部ノ始終ヲ作レリトゾ。

○評ニ云、此辨は婉麗の文法にて、文章の地をつくせりといふべし。しかるに雪隱の誹諧より、佛經の思惟をもて源氏の觀相に合せたる、これらは虚中に實を行ひてこゝに辨者の優遊を察すべ

○辨の類

三上の辨　　僧文草

世にから歌をもてあそぶ人の、三上の吟とてほめ置ぬるは、鞍上、枕上、厠上とかや。實にも一鞭に月雪花をうちはらひたる、そのをり〳〵の氣色など、野店山館に心もあらたまりぬらん。況や軍中にほこを横たへて詩を案ずる人の、鞍のうへこそおだやかならめ。或は枕を幽齋にさゝふといへる夜の雨に、心をすましておもひ殘す事なきほとりには、殊にもてはなれたる趣も出來ぬべし。されど待宵のふけ行くるしさよりも、別れてあふせなき枕の上こそ、詩歌のまことはあらはれぬべけれ。しからば鞍上には遊子の心をなぐさめ、枕上には寡婦の腸をたつといふべし。さるを厠上に吟を催す人は、人のきたりて其事をさまたぐる事なく、ひさしく居ればとて呼にもこさねば、たゞ一筋に思ひ入て、まぎるゝ方もなからん。むかしの武將勇夫とても、長雪隱の名譽はつたへ侍る。

句對ト云ヒ、論ゼバ文對ノ絶妙ト稱スベク、美濃ト尾張ハ大小ノ用ナガラ、評セバ意對ノ絶妙ト稱スベシ。文章ハ此等ノ斷續ニ知ルベキナリ。▲澤庵漬トハ小糠漬ノ名アリ。去ルヲ菩薩漬トハ、小糠ノ宿ヲ替テ粥ニ糀ヲ交ゼテ漬ルコトナリトゾ。△神農ノ百艸ヲ嘗ムルコト前ニ出デタリ。△つれ〴〵艸ニ大根ノ化身ヲ云フトテ、「土おほねらにさふらふといひて失せけり」トアリ。▲猿蓑集ハ落柿舍ノ撰ナリ。冬部ニ「大根引といふ事を」ト前書アリテ「鞍つぼに小坊主乘るや大根引」トイヘル發句アリ。「按ズルニ此前書ハ、四季ノ題名ニ大根引ト云フヲ、冬ノ部ニ定ムベキ爲ナリ。此等ヲ選場ノ働ナレバト、白馬ノ類説ニ此評アリ。

○評ニ云、此篇はすべて頌體なるより、神農の二字に前後をつなぎて、朝廷の沙汰を結文とせり。しかればそば切以下の數章は、例に文中の筆占ながら、大根引の詞に俳諧を稱して、連歌に敵せむとするは例のをかしみ也。作者は沼波氏にして、伊勢の桑名に住す。未了はその亭號也。

あしく、物にあらそひの端おこりて、連歌は若菜のつやある詞になづみ、俳諧は大根のへつらはぬ名をよろこぶ。さてこそつれ〴〵の大根らも、土の一字にいやしめられ、歌によまれぬは無下の沙汰なりとて、八百萬の神の留守に、ある翁の猿蓑集をえらみ、大根引といふ詞を、十月の季にさだめ給へりとや。そこを大根の面皮におもひて、頌の一字をそふるなるべし。

○註ニ曰、▲風土記ニ「鎮州蘿蔔之産土也云々」此語ハ禪錄ニ數多アリ。△名義集ニ飜譯ノ訛也ト云ヘルハ、天台ヲ天梯ノ如キ、ダイコヲデイコノ如キ、國詞ノナマリトゾ。「按ズルニ、本朝ノ儒學者ニ訛字ヲ訛錯ト思ヒテ訛ナリト假名ヲ附ケタル事、つれ〴〵ノ讀ニ此論アリ。

△官女ヨリ笠井マデ、三對ノ相紋ニ文章ノ斷續アリテ、尾張ハ宮重ト云ヒ、美濃ハ鏡島ト云フ。此對ハ大小ノ起結ナリ。森口ハ攝津也。細根ノ粕漬ヲ産トス。笠井ハ武藏ナリ。桒大根ヲ出セリ。「按ズルニ此三對ハ、始ニハ若根ノ艶詞ヲ起シ、長月ノ長ノ字ヨリ大根ノ大ノ字ヲ結ベル、尾張ト美濃トハ大小ノ辨ニシテ、森口ト笠井ハ土産ノ名稱ナリ。然レバ官女ト遊君ハ字對ト云ヒ、

(一)「笠井」は「葛西」の誤

いへる、これらや飜譯の訛といはむ。されば此物は、都ちかき鳥羽竹田の里にそだちて、鴨川の水に身をきよめ、中ぬきの名をよびそめしより、酢揉青漬の冴をほめられて、官女が里下の朝寐にあつらへ、遊君は身あがりの晝飯にこぞる。さて長月のふとり行まゝに、かの大根の名にしあふ比は、尾張にはいけて太からんとし、美濃にはほして細からんとす。其外國々の名を得たる、盛口は洛陽の公家達にほめられ、笠井(一)は武陵の大名衆にまじはる。されど淺漬は菊の比にもてはやされて、桃の比のうつり香をきらはる。しかるを澤庵和尚にたよりて、小糠の宿をかゆるより、糀のはなに身をよそほひて、菩薩漬の名にほこれり。まして神無月の荒まさる比は、名をさへ風呂吹の嵐をふせぎ、人參汁の霜をいとへば、愛宕の峯は雪ながら、大内山はかすみぬらん。今朝は雜煮の春をむかへて、芋に牛房の一家晴がましく、花鰹をかけに君がちとせをいはふ。さるは神農のまつり初て、代々の帝の儀式となれば、今はた頌するにもおよばざらん。そののち世界の行過より、そば切といふ物をたくみて、木曾伊吹のからみをえらび、すでに地黄と中

孫成が美肉をもこのまず、葛由耆域が靈丹をもなめず、たとひ浦島が手箱は明るとも膚うるはしく色おとろへず、愛すればはしり捨つればしづかに、是よし仙家の翫物ならん。

○註ニ曰、△天地ノ方圓ハ前ニ出デタリ。△海槎錄ニ「相思子大如レ豆。此郎耶君子也。或云、放ニ醋中ニ雌雄相逐。便合便下云々」▲唐史ニ國忠(一)ハ肉屛風ノ耆アリ。孫晟ハ肉臺盤ノ耆アリ。細擘スルニ文繁シ。▲神仙傳ニ葛由周代ノ仙人ナリ、耆域ハ天竺ノ神ナリトゾ。靈丹トハ延齡丹ノ類ナリ。▲浦島ガ故事ハ前ニ出デタリ。

○評ニ云、此文は大むね賦の體ながら、結語に美肉靈丹の諷詞より、浦島に箱の一字をよせて、君が八千代を祝したらん、こゝを雅頌の文法といふべし。作者は安藝の產にして、廣島の文殊院に住す。柳眠堂は閑居の標號なりとぞ。

大根の頌

沼潜柳

そも我朝の大根といふは、もろこしの蘿蔔にして、△鎭州に大蘿蔔を出すといへれば、大小の辨は爰にしるべき也。それをきざみては纎蘿蔔といへるを、我國の人はせろつほと

(一)楊國忠

○評ニ云、此頌は例の虚誕に似たれど、始は神代の草創より、中比は朝廷の沙汰にして、終は佛法と王法とに當時の太平を稱したる、詮ずる所はこれらの裁斷をもて頌體とはいふべき也。作者は伊吹氏にして、越の敦賀に住す。俳諧は獅子門の親弟にて、四幅對の撰者たり。桂下園は彼が別莊なりとぞ。

醋貝頌

僧　壺　天

醋貝は伊勢國二見の浦におほく産して、其色はみどりのうるはしく、天の圓に地の方なる、自然のかたちを失はず。唐名は郎君子といへるよし。誠に君子の德ありて耳目鼻口のちからを假らず、一盃の醋にはなつ時は、精神たちまちにはたらきて、竪にはしり横にめぐり、あるは行ちがひあるは面をあはせて、妹背のさゝめ言にも似たればとて、緣むすぶ人の手箱にしたゝめ、初産の手にふれては、かならずその事もたひらかなれば、又は相思子ともいへりとぞ。まして玉樓金殿にめされて、やごとなき御手にもてはやされ、紅粉白粉の箱にかしづかれて、珊瑚琥珀の光にもあらそふ。しかれば此貝の頌する所は國忠

あらめの一杓子(ひとしやくし)に、十萬人をすくひ給ふとよ。しかれば佛法といひ王法といひ、▲三種の神器は雲井(くもゐ)の沙汰にして、是は萬民の重寶(ちようほう)といふべし。

○註ニ曰、△管子ニ「王者以二民人一爲ㇾ天、民人以ㇾ食爲ㇾ天」△天ノ浮橋ニ逆矛ノ事、日本紀ニ在リ。細擧ニ及バズ。△つれ〴〵草ニ「久我の相國は殿上にて水をめしけるに、土器を奉りければ、まがりしてぞめしける」「按ズルニ、曲(まがり)ノ事ハ先師ノつれ〴〵ノ讃ニ、此段は堀川殿の花香をそしるとて、久我の殿無造作をいへれば、曲は柄杓に決定せり、流抄の穿義如何ト云ヘリ。○萬葉集ニ「家有者笥爾盛飯乎草枕旅爾之有者椎葉爾盛」▲東山殿トハ義政公ナリ。文明ノ比ノ太平ニテ、茶湯道具ナド名物多シ。▲三杵米トハ神供ノ實朴ヲ云ヘリ。神代卷ニアリ。▲織田信長モ武田信玄モ、天下ノ七雄ト稱シテ、天文ノ比ノ名將ナリ。▲遊行ノ緣起ニ、荒和布(あらめ)ノ杓子ノ事アリ。八十萬人決定往生トハ、廻向ノ時ニ頂載スル祕符ナリトゾ。「按ズルニ、童ノ諺ニ、杓子ニテ人ヲ招ケバ必ズ死スルトテ忌ム事ナリ。何ノ故ニヤ知ラズ。▲三種ノ神器ハ神璽、寶劍、內侍所ナリ。

世は衣食住の三の中に、食を天として第一となせるは、釋迦孔子の八千餘卷も、毛嬙西施が三十二相も、喰はねば面白からぬ故也。げに我朝のはじめにも、天の浮橋のみもとにて、夫婦かけむかひの新所帶に、一杓子の手づまより、あきつ島山を盛ならべ、天神七代も地神五代も、上をやしなひ下をすくひ、人の代ながく家をさまりて、餅搗のゆふべの賑しく、雜煮のあしたのことぶきまで、聟入にも娵とりにも、此物をめでずといふ時なし。されど其名のさもしければとて、女院はゆがみとよばせ給へど、久我殿のまがりにまぎれて、柄杓か杓子かの穿議もむづかし。これらに俳諧の日用を論ぜば、おむしもしろ物も連歌の家にまかせて、久三も長太も合點する、味噌鹽の平話にあそぶべし。さりや五器皿のうつは物さへ、萬葉の古風には椎の葉にもるとよみ置しを、東山殿の物數奇より、赤繪錦手の風流にわたる。それが中にも此杓子は、神代に三杵の姿を失はず、蒔繪のさたに及ばぬことたふとし。その後信長の信玄のと鑓長刀の骨ををりて、我朝の王道ををさめむとせしに、今は是をもて彼をまねけば、百萬の敵をもいやがらせ、遊行は

○註ニ曰、▲王代實記ニ、延喜ノ帝神泉苑ニ行幸アリテ、藏人ヲ以テ池ノ鷺ヲ召ス。宣旨ナリト云ヒテ立寄ルニ、其鷺ノ手ニ留レリト。御震筆ニテ、鷺ノ羽ノ上ニ汝鳥類ノ頭タルベシトテ、五位ノ官札ヲ給ヘリシトゾ。△論語ニ「繪事後レ素云々」○扶木集ニ(二)「鷺はゐなかの谷のすなれどもたみたる聲は鳴かぬ也けり」△つれ〳〵草ニ「妙觀が刀はいたくたゝず」トハ名人ノ細工ノ無造作ナルヲイヘリ。△倭語拾芥ニ「鷺とはいさぎよきといふ畧語なり」トアリ。△起ツ鳥モ跡ヲ濁サズトハ、往者ヲ誡ムル訓辭ナリトゾ。

○評ニ云、此文は畫贊とも見えず、池の鷺の稱名なるにや。又は簡古の體をほむべし。誠に一篇の評する所は、鷺に鳶烏の論はいはず、鳳凰を聲の證文にひきて、ひじりの帝に語をむすびたる、文の斷續を見るべき也。作者は藝の廣島に產す。金谷氏の俳人なり。

○頌の類

杓子の頌

伊東　恕

(二)「扶木集」は「夫木集」の誤

(一)「手さみ」は「手すさみ」の誤なるべし

世に傳へんとするは、あながちに先師の大任なるより、獅子庵に五祕の遺稿をつたへて、今や天下の公道となれる、三類は例の唯佛與佛にして、合點の二字に此の贊を看破すべし。しからば孔子の伯常をさとして、察の一字をほめ給へる、道に荷擔の用をしるべき也。はんじ物とは例の遁場也。

鷺の贊

金李潭

むかし延喜帝の御震筆に、鷺は我朝の鳥頭なるべしとや。げにも鳶烏のたぐひならで、歌にもよまれ詩にもつくられ、繪の事は論語の論におよばず。しかるを此鳥の宿世にや、其聲のたみたるより、むくつけき鳶にもなぶられて、月のゆふべも花のあしたも、心の色は鳴ぬなるべし。されど宮女の手さみ(一)に紙をたゝみて其かたちをつくり、烏賊の甲をきざみて童部のもてあそびとなせるに、妙觀細工の無造作なるも、鳶をつくりたる沙汰なければ、鳳凰もよし其聲は論ぜざらん。聖の帝のみことのりを失はず、身をいさぎよき名にはぢて、たとひ鰌をふむとても、其跡をにごすべからずと也。

浦ニ句ヲ對シ、言語ノ善惡ニ語ヲ寄スレバ、合點人形ノ訴諧ナル、學文ノ目傭ノ的當ナル、此等ハ例ノ斷續ナガラ、文ニ裁斷ノ絶妙ト稱スベシ。△論語ニ「學而不レ思則罔、思而不レ學則殆」▲高僧傳ニ、寒山拾得ハ文珠普賢ノ化身ナリト。豐干和尚ノ教示ニ依リテ、閭丘胤ハ國淸寺ニ往キテ兩僧ヲ拜セシニ、豐干饒舌ノ彌陀ト云ヒテ龕ノ前ヨリ逃去リヌト。饒舌トハ口マメナル事ナリ。△三人行ノ語ハ論語ノ全文也。△文殊ニ智惠ノ事ハ細學ニ及バズ。三人寄レバ文殊ノ智惠トハ本朝ノ國語ニシテ、孔子ノ詞ノ起結ナリ。「按ズルニ二字以下ハ豐干ノ饒舌ニ語ヲ起シテ、寒山拾得ノ風狂ヲ以テ蓮二ト白狂トニ喩ヘタル、三顚ノ祕訣ハ此段ニ看破スベシ。然レバ今云フ三顚ハ、圓相ノ中ニ半身ノ像アリテ、東華坊ト蓮二房ト渡部狂トナリ。其圖ハ大和詞ノ首丁ニ出テタリ。

○評ニ云、此の圖は獅子庵の遺稿にして、或ひは先師の贊もあり、或ひは蓮二の贊もあり。いづれも百合の發句也。「あふむくもうつむくも淋しゆりの花」となむ。その繪はむかし五老井の物數奇より、尾城の太郎庵も其の圖を寫し、そこの八仙觀主も是れを圖して、當時に五幅か七幅もあるべし。されば此の圖の本懷といふは、難波の遺狀に祖翁の命をおびて、俳諧の世法を百

詼諧ノ絶妙ト稱スベシ。△家語ニ「子曰、諫レ君有ニ五義一中略五諷諫。唯度レ主而行レ之。吾從ニ諷諫一乎」トアリ。史記ノ滑稽ノ贊ニ「常以ニ談笑一諷諫云々」△佛說ニ心ハ本虛靈ナリトモ禪語ニ虛靈不時ナリトモ、總ベテハ心ノ實體ナキ事也。△莊子ニ形容ノ二字ハ全部ノ趣意ナガラ、三籟ニ無情ノ形ヲ寫シ、庖丁ニ有情ノ客ヲ盡セリ。總ベテ俳諧ノ鼓舞ナリ。「按ズルニ此段ハ、三章ニ三要ノ法アリテ、俳諧一道ノ內證ト云ハン。諷諫ハ本ヨリ滑稽ノ本懷ニシテ、虛靈ハ言語ノ優游ヲ云ヒ、形容ハ文章ノ的當ヲ云ヘル、爰ヲ此贊ノ骨節ニシテ、俳門ノ虛實ハ察スベキナリ。△禪錄ニ「暗黑豆老和尚」トハ埒ノ明ヌト云フ罵謠ナリ。△三味線ハ三線ナリ。マミムノ通ニテ音語ナレド、俗習ニ從テ味ノ字ヲ加フ。大和詞ニ細訓アリ。爰ニ芳野ノ山ト云ヒ間(あひ)ノ山ナド云ヒテ、三線ノ手也。○新千載ニ「よしあしも人にかたるな難波潟こと浦にすむ蜑のしわざを」難波ニ善惡ノ歌ハ數多ナリ。△學文ノ日傭ハ白馬ノ詞也。文章訓ニ「たとひ當時の學者達の萬卷の表を知りつくせども、其裏の一理をしらざれば、其書此經の故事古語を問はれて、一字も自己の授用ならざれば、そこを學文の日傭といへりとぞ」「按ズルニ此一段ハ、三線ノ手ヨリ芳野ノ山ト云ヒテ難波ノ

俳諧之談笑也。乍去乘人之三味線而泛芳野山之花了、靡難波浦之風而類葭兮類芦兮、類于月于雪也則、立合點人形之疊名而、成果學文之日傭也矣。二子能察我言之虛實而、學而思兮思而學合、知今日之用與無用則、穴賢悖豐干之饒舌而、看破獅子庵之遺稿矣。爾有則所謂三人行則必有我師、爲合點文殊之智惠焉。此圖者類儒佛老之內證而、可謂俳諧一宗之判物矣夫。

○註ニ曰、▲醋吸ノ三聖ハ世ニ多キ圖ナリ。近クハ繪本抄ニ註解アリ。△倭語拾芥ニ何ツモ月夜ニ菜汁米湯ト云ヘルハ米飯ナリト。爰ニハ米ノ飯ト平話ニ讀ムベシ。△異端ハ論語ノ全文ナリ。「按ズルニ、此語ハ攻ノ字ト治ノ字ノ論アレド、孔子ノ意ヲ察スレバ、道ハ家々ノ建派アリテ、佛老モ楊墨モ一理アレバ、譬ヒ我家ノ建立ニテ自ヲ譽メテ他ヲ毀ルトモ、實ニ怒リテ責ムベカラズトゾ。右ハ先後抄ノ取意ナリ。△五常五戒ハ儒佛ノ制法ナリ。細學スルニ及バズ。△老子ニ「割斗折衡云々」天地ノ家モ其經ノ取意ナリ。「按ズルニ手振千貫トハ一錢ノ基手モ持タズ大商ノ平話ナレバ、老子ノ五千餘言ヲ縮メテ四字ハ說著スト云フベケン。此等ヲ奪胎トモ換骨トモ、文ニハ

三類圖贊

東華坊

世傳醋吸之圖者、鹽梅儒釋老之三道而、酸共甘共苦共、所謂人之好不好與乎。然虜有世界謂物數奇事而、飽不有甘兮不有苦兮奚麼月夜之米飯則、爲鮓其飯而譽少所酸了也。增而好納豆人者、譽其爲饐臭爾哉。孰虜謂道之是矣。孰虜謂道之非矣。攻乎異端斯害也已。抑謂太極之道者、從本一筋之道也共、分千車萬馬之岐而、或者打鳴念佛之鉦宛、或者橫倒參禪之棒宛、此所爾者說虛兮彼所爾者說實兮、儒家結五常之垣則、佛門張五戒之網而、互斷往來之道則、老子者說手振千貫而、割斗兮折衡兮、爲家天地而錠麼不卸、將擴我好之道與所。率哉謂俳諧之道者、汲合三家之意味而、鹽梅和漢之風雅了則、人法者從孔子之諷諫居、心法者傳釋子之虛靈些、文法者效莊子之形容歷。然則非儒兮非佛兮、不構老莊楊墨之一城兮、假令謂釋迦孔子之御經共、知言語之用與無用了則、其虛麼合點兮其實麼合點兮、何條可算暗許之黑豆臭矣。從譽而嗜人柄麼、欲毀而遊者、

觀音大士と烏蒭瑟麼は文中の筆ずさみならん。しかるに遺敎の知足をひきて、貧福の二字を結語せしは、近くは一鄕の諷諫といひ、遠くは百世の庭訓といはむ。作者は長野氏にして、越の新潟に住す。此柱とともに獅子門の親弟にして、鑑亭の兩翼たり。一閑人は洲子が標號とぞ。

花生の贊　　蓮二房

孔子の曰

繫而不喰

蓮二云

口あれども是非をいはず

○評ニ云、此花生は瓢のさびあるに蔓をのこして掛花生となせり。しかるに此贊は、論語に孔子の詞ながら、倭語には不食のひゞきをはゞかりて、不喰の二字に書替へたらん、これらを一座の才覺といふべし。此主は小森氏にして、濃の大矢田に住す。その地は紅葉の名所にして、洛の高雄にもあらそふべけむとぞ。

(一)那智谷汲は三十三ケ所の觀音の札所の初と終

(二)徒然草の詞を用ふ

婆の大福長者にして、補陀落界に屋形をかまへ、唐へも日本へも見世を出して、那智の(一)瀧には心太をひやし、谷汲の奥さへ鮓ににぎはふ。今の越後屋の基手もおろさず、一錢二錢の塵つもつて、山といひ里といひ、その見世なしといふ國なし。それが中より烏芻瑟摩といふ神は、當來彌勒のあかつきまでも、雪隱を守らんとや。これらは貧福のさかひをはなれて、物數奇の神といふべきにや。梅の朝日も菊の初霜も、かりのにほひとや(二)おぼし捨てけん。つらつら神佛のをしへを思へば、身に錦繡をかさぬとも、口に雜炊をすするとも、心の知足と不知足とより、我身の貧福を知れとこそ。いさや此津の儒者も商人も、近思錄にこひず塵劫記にくらからず、たゞ俳諧の異見にまかせて、つねに知足の神をいのるべし。我も此賛は書きながら、をりをり足らぬがちなればいふ也。

○評ニ云、此賛は例の敏捷にして、註するに實記なけむ。尤一篇の稱する所は、貧者の福をいのらんよりは、福者の貧をおそれよとは、儒佛の萬卷にも老莊の二門にも、いまだ說ざる所なるを、是ぞ俳諧の微中といふべき也。此故に佛經を證文にして、辨才天と虛空藏は神と佛の起結にて、

對ハ聯句ニ底返ノ古法アリテ、無ト有ヲ對シ、常ト戀ヲ對ス。戀無常トハ和歌ノ續キニテ、倭文ニ字對の絶妙ト稱スベシ。●詩經ノ邶風ニ「駕言出遊云々」

○評ニ云、此贊は眞名の和訓ながら、一字も漢文の語脈を失はず、俳詩に叶韵の鑑といふべし。されば序文に音訓の沙汰は、或は團扇と音にとなへ、或は團扇と訓によめど、爰には仰の譯義をもて、扇と團とに字對せり。これらに譯文の用ありて、今より此贊をもて譯文となすべし。作者は賀の山中に素生す。幼年に東花坊を師として柳邑の二字をかふむり、その後は大聖寺の慧光院に住せりとぞ。眞言の學匠也。

福の神の贊　　長　鷺　洲

世界に福の神といふあれば、貧乏神といふもありて、世は其福をいのれども、貧をいのる人なければ、次第々々に神さびて、今は宮もなく社もなく、家々門々を覗きあるきて、奢る者を倒さむとす。さるは貧者の福をいのらむよりは、福者の貧をおそれよと也。けに佛經にも此沙汰ありて、辨才天の虚空藏のと、福佛あまたおはす中に、觀音大士は娑

おほくは隠者の調度ともいふべし。

其贊

禮云樂云　園離名聞　卯花明曙

時鳥夕嚏　拂塵隱几　招風讀文

信玄釵甲　兒玉寫紋　胡爲畫鳳

母乃追蚊　無常崇佛　有戀怨君

若化鴬去　駕言遊雲

○註ニ云、△論語ニ禮樂ノ二句ハ前ニ出デタリ。▲軍史ニ、甲斐ノ信玄ノ床几ニ腰ヲ掛ケテ軍配ヲ釵セル圖ハ、信州ノ川中島ニテ謙信トノ軍ナリ。▲兒玉黨ハ關東ノ武士ナリ。團ヲ以テ紋トセリ。●文選ノ詩ニ「畫作ニ秦王女ー。乘レ鸞向ニ煙霧ー。良註言畫ニ北於扇上ー以慕レ之。鸞亦鳳也云々」列仙傳ニ、秦ノ穆公ノ女ナリト。▲和泉ノ家原寺建立ノ時ニ、行基菩薩ヲ導師ニテ、本尊ヲ團扇ノ上ニ崇メ置キ給フコトアリ。●戀ニ怨レ君トハ班女ガ怨歌行ヲ云ヘリ。前ニ出テタリ。「按ズルニ、此一

ノ歌ニ前ニ出デタリ。△論語ニ「林放問ニ禮之本ヲ子曰、禮與ニ其奢一也寧儉云々」

○評に云、此贊は例の辯利をこのまず、隱に四季の次第をくばりて、扇の日用をつくしたらん、これらを虛實の實とやいはむ。しかれども俳諧の文鋒には、唐土の人を相手にとりて、かしこには宮女の翫物といひ、こゝには禮の本といへる、文章の意地を稱せざらんや。まして不忘の二字をもて、四季の贊詞をとゝなへたる、斷續の法もこゝに見るべく、起結の法もこゝにしるべきなり。

團の贊 並序

僧　馬泉

むかしより我朝に扇と和訓せし事は、あふぎて風を納れば也。しかるに團扇といふ和訓は、いかなる故とも知りがたし。さるを俳諧の書法には團の一字をも用ひきたれり。誠にもろこしの詩も歌も、扇とも聞團とも聞えて、爰に音訓のまどひもあらん。さりながら杜陵が團翼も孔明が羽扇も、すべて團と聞ゆれば、あなたも二品の名ありと知るべし。されば扇のをりめ高に鋭き物は命みじかく、團はかどなく鈍ければ、扇には生まさりて

（三）「思ひかね妹がりゆけば冬の夜の川風寒み千鳥なくなり」大江匡房の歌

らし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山」△中庸ニ「道也者不レ可二須臾離一云々」「按ズルニ此贊ハ扇ニ不忘ノ三字ヲ以テ全篇ノ趣向ト成セルヨリ、爰ニハ不離ノ二字ヲ假リテ、禮ノ一字ヲ繋ギタル、章段ノ起結ハ常法ニシテ、此等ヲ斷續ノ絶妙ト稱スベシ。△畫譜ニ背面美人ノ圖アリ。蘇子ガ麗人行ニモ此類アリ。△源氏ノ夕顔ハ前ニ出デタリ。▲無明抄ニ「思ひかね」（三）ノ千鳥ノ歌ノ評アリ。六月廿六日寛算が日も是を詠ずれば寒くなるといへり。●長恨歌ニ「鴛鴦瓦冷霜花重云々」●壺山ガ雪夜ノ詩ニ「一爐柴火三盃酒」●盧仝ノ茶歌ハ擧グルニ及バズ。七厘トハ茶具ノ寓言ナリ。▲つれ〴〵草ニ「小松帝のまさな事に御かま木にすゝけたれば黒戸といふ」トアリ。△禪録ニ臘月扇子トハ無用ノ物ノ喩ナリ。○定家卿ノ歌ニ「來ぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの身もこがれつゝ」△論語ニ「禮云禮云、玉帛云乎哉」○古今集ニ「春たつといふばかりにやみよし野の山も霞みて今朝は見ゆらん」●詩經ノ棠棣ニ「脊令在レ原。兄弟急難云々」脊令ハ鶺鴒ナリトゾ。「按ズルニ、此一對ハ前後ニ五倫ノ結ナガラ、屠蘇ニ雜煮ハ更ニシテ、蓬萊ニ鶺鴒ノ聯綿ヲ對セル、文ニハ字對ノ絶妙ト稱スベシ。△書ノ武成ニ「歸二馬于華山之陽一。放二牛于桃林之野一」○菊ニ雁

（二）「神谷」は「紙屋」の誤

つほの浦の來ぬ人をまてば、蜑の小舟にはあらねども、一葉そよ〳〵とうち乘せて、扇ながらにさし出せしは、是ぞ一年のかなめにして、孔子にかくして是を論ぜば、禮は玉帛をしもいはざらんや。そもやその年も立かへりて、霞むといふなる春の旦には、桐の箱より例のおろして、親子の屠蘇に蓬萊のことぶきをそへ、兄弟の雜煮に鶺鴒のよしみをむすぶ。況や婦夫は高砂の鶴にならひて、名も末廣の君が代は、櫻に馬もつながねば、桃には牛の遊がちにして、梅に鶯の春はいはざらん。菊に雁鳴秋も忘れずや。忘れずば此扇を、四季にちり失ぬ松の色の、雪の操になぞらへて、禮の本とはいふべき也。

○註ニ曰　●怨歌行ニ「新裂ニ齊紈素。皎潔如ニ霜雪ニ」●王建ガ詩ニ「輕羅小扇撲ニ流螢ニ」○秋扇ノ詩歌ハ數多アリ、擧グルニ及バズ。▲鞍馬山ト神谷（二）川トハ、竹ト紙トノ名所ナリ。源氏ニモ神谷紙トアリ。▲菱川以下ノ四人ハ、中古ニ浮世繪ノ名人ナリ。▲清少納言ガ枕草紙ニ、扇ノ骨ノ珍シキヲ譽ムルトテ「さて扇のにはあらでくらげのにや」トイヘリ。▲高僧傳ニ法顯三藏ノ天竺ニ渡リテ、「見ニ白絹扇ニ不レ覺淚下云々」或抄ニハ中啓ノ說アリ後勘スベシ。○百人一首ニ「春過ぎて夏來にけ

ばかり、なにがしの歌をも思ひ出ぬべし。秋は文月の三日の影より、六日七日は更にして、小萩が露も身にしみながら、星まつる童部の藤ばかまにも、などや此扇をさし添ざらん。葉月は暑さも殘がちなるに、まして朔日を忘るべきや。秋も長月の夕つかた、げにく〳〵しき神の御社にまうでて、白洲にぬかづく扇のうへに、もみぢの二葉三葉かつちりたらん、又なくあはれにおぼえ侍しか。神にも佛にもまうづる日は、白き扇こそ心もきよまれ。やゝ十月も杉の窓に、鴛鴦の瓦も霜の花すさまじく、照くもる日影もきら〳〵と、障子のうちに冬ごもりて、壺山が一爐も炭いまだかわかねば、盧仝が七厘も水さらにひやゝか也。まして黒戸の小鍋あそびならば、忘れめや此扇の、しばらくも手をはなるべきかは。さるを禪僧の詞とて、臘月の扇子とは、用なき物にいひすさめたる、田樂ぎらひの法師にやとおかし。忘れめや此扇の、その年忘のめでたき夜は、歌ひあそべば膝にかまへ、舞ひかなづれば袖にひるがへる。今宵はよろづの忘れ事にも忘れぬは、さしも朋友の禮也。いでそよ年も暮ぬとて、寺々の歳暮はさらに問はず、諷をしへも鼓の師も、。ま

へりけり。むかし流砂をわたりたる法師の、古郷の中啓に泪をこほせしは、いかなる風の目にはしみけむ。その中啓は我朝にもありて、殊に敬禮のうつは物也。されば唐にも日本にも、物には寵辱のさかひありて、おろすといへば春によろこび、忘るゝといへば秋にうらむ。さば忘れめや此扇は、卯の花月の空はれて、あまの香久山も白妙に、更衣のあしたより、桐の箱入のせめをはづし、例の打たゝきおろしぬるに、ことしは三百幾日ならん、出る日はやがて印籠にさきだち、歸る夜はまして脇差につれだつ。しばらくも離べからずとは、扇に禮の道あれば也。さてたち花の香にくれて、初ほとゝぎすの待ほどもあらで、蚊のおとづれを聞そむるより、さみだれの夕日も珍しう、物見る女の半部に此扇をかざしぬれば、我朝の繪師の物數奇にて、背面の美人の俤を寫せり。其比や、夕貌のあやしき軒に其花をりてまゐらせし時は、先とて扇をこそ御覽じけめ。誠や扇に物をするゑて君臣の禮をおもんじたるは、此時よりや思ひ出けむ。いかに世の人の取まがへて、扇を夏とのみおぼゆらん。されど水無月のはらひ川には、繪にかける千鳥も啼

和漢文操 巻之五

○贊類

四季扇贊

藤巴雀

扇は方圓のうつは物なるや、唐土の人は齋のうすぎぬをさきて風霜のかたちをつくれるよし。あるは夏の夜の螢に愛せられ、あるは秋の日の風に捨てられて、ただ宮人のもてあそび物とは見ゆれど、扇におほやけの禮ありて、腰にさしたる四節の沙汰なし。そも我朝の扇といふは、鞍馬山の竹をもてはやし、紙屋川の紙に調ぜられて、はじめは白き物たふとかりしが、世々に花鳥の風情をこのめば、菱川が浮世繪も、光琳が片輪梅も、鳥羽繪の脚のほそからんよりは、又兵衞が袖のみじかからんには。骨は紫寒(一)の色をまじへて、要は金玉の光をあらそふ。朱骨あり黑骨あり、淸少納言が草紙には、海月のもありとい

(一)紫竹、寒竹

の聞きつたへ侍りしとや。誠に文鑑のなしむべきは、其時其人の命終ならん。爰におもへば我師と此老は、風雅に李杜のあらそひを殘して、重與論文といへる、千歳一遇の知己ならんには、我輩の黄口をひらきて横説竪説すべきにはあらず。おそれてもおそるべきは此返狀の評なるべし。

此一件は獅子庵の祕藁なれど、百世に二老の爭ひの君子なる故をつたへんと、三還するものかくのごとし。

成二文鑑之飾一則、文選之咎者成二紙上之戲論一而、文章之交情者可レ傳二百世一庠哉。穴賢不レ惑二風雲之沙汰一爰添二給謝公之筆力一則、選場之大幸何事如レ之矣。此故封二此狀一而、祖翁之牌前焚レ香而、薰誦再三而申遣候。貴報者例之奉レ待二柳後園一候。

多罪々々誠恐頓首。

○評ニ云、此狀は倭文のつねながら、細に漢土の助字をやはらげて、例に和漢の通用となせる、かしこに雁魚錦といひ、翰墨全書といへるとも、これらの當用には過ぎざらん。しからば我朝の學者達は、論語にもよらず庭訓にもよらず、書通はこれらの日用を學びざらんや。そも此狀のおこりといふは、寶永の中比ならん、選文選の題號につきて、先師と許六と贈答の論ありしが、先師は其事をはたさずして、寶永の辛卯に世をさり給へば、門人こゝに遺命をさしおかず、此書を五老井に再報して、本朝文鑑の一助たらん事を乞ふ。さるは正德乙未の秋なるべし。しかれども五老主人はその年その秋に世を辭せしとや。其比雲鈴は湖南より行きて、五老の病床にさぶらひしか、むかし落柹舍と五老井との筆戰に及びたる俳諧往來のごとく、今の報書のあらましをも、ほ

其次者有假名眞名之配事。其次者有標題之取捨事。右之五條者、於五老井貴老與先師相談之時、皆々乍被成合點、臨出板之節、文章手弱所聞了則不慨武士之機鋒迚、如本御直候而、先師在京之比也則、校合歷隱可申旨、從井筒屋内意有之與哉。左有事者、不拘世間之評判、不取愚人於相手與者、適作五老之家風、此義者遺蕉門之法式則、某所如俳諧涅槃經、此所如南無俳諧體、似一花之説開敷乎。左許拉和漢之學者而、唯可恐者言語之虛實也焉。譬則如文選之直旨傳、坐斷天下之舌頭共、自慢者家々之建立而、釋迦副有唯我獨尊之讚則、數不成兼好法師歷、有七品之自讚了共、曾以人不憎。左有者虛實無虛實之跡故也。然序其傳爾者、舉四季之發句而所刺給自慢之釘、假令其句放光明共、人情之姤者此實也焉、左在那丹霞燒給木佛歷、爵者當院主之身而、佛之一字爲認其實歷、俳諧之二字爲認此實歷、何賊者可分其罪梟矣。俳諧者好不忘談笑之用、言語之散者可越松坂與所。右之條々者先師之遺命而、答御紙面大旨也。將又我黨之所冀者、得尊老之文章二三篇而、此度

ハ、例ニ其跡ヲ師トセズト云ヘル、俳文ノ意地ニシテ、竹ト藪トノ鎖詞ハ言ハズ、筆力ニ換骨ノ絶妙ト稱スベシ。○兼好ノ歌ニ「世の中をわたりくらべて今ぞしる阿波の鳴門に波風はなし」●千家詩ニ「將謂レ偸レ閑學ニ少年一」山谷集ハ、「江南野水碧ニ於天一。中在ニ白鷗一閑似レ我云々」

○評ニ云、此篇は始より北山移文に敵して、市中に大隱の實錄といふべし。しかれば一篇の間に二十三箇の故事古語をもちゆれど、一字も學文の闇をかざらず、前をむすび後をおこせる、一的一中の用を稱せざらんや。文章は例の裁斷にありて、これらに博學の用と無用となしるべし。

答ニ五老井ニ狀　　蓮　二　房

久敷打絶、御病氣無ニ心元一存候所、從ニ橘屋一御狀到來、撰集之御不審共、逐一令ニ承知一候。去比者雲鈴八菊抔緩々得ニ貴意一候由、病中之御器量尙以不レ撓、御勇健之段悦入候來。此集出板之後迄者、奉レ祈ニ御存命一候。然則此度逢ニ御答一申候、謂ニ選文選之意趣一乃者、就ニ風俗文選之中一而再選申度事四五也焉。第一者、我家之文章悉可レ有ニ虛實之設一事。第二者假名之叶韵聊可レ有ニ竪横之違一事。第三者和訓之文法尤可レ有ニ語路之拍子一事。

竺潜傳ニ「支遁買レ山欲レ隱。潜曰、欲レ來輙給。豈聞二巢由買レ山而隱一」▲白鷗堂記ハ文鑑ニ出テ、實ハ紙帳ノ寓言ニテ、文ハ長明ガ方丈ニ據レリトゾ。△源氏ノ須磨卷ニ「波こゝもとにたちくる心地して」とあり。△瑠璃界ハ、藥師經ニ云ヘル東方ノ淨瑠璃世界ナリ。「按ズルニ白鷗ノ一段ハ、五湖三江ノ廣莫ナル、清風明月ノ皎潔タル、枕ノ一字ニ紙帳ノ面影ヲ寫シ、瑠璃ノ二字ニ紙帳ノ玲瓏ヲ含メル、摘語採文ノ自在ヨリ、此等ヲ謎文ノ絶妙ト稱スベシ。○行平ノ歌ニ「立わかれいなばの山の峯におふるまつとし聞かば今かへりこむ」。「按ズルニ此段ハ、烏丸ヨリ因幡藥師ヘ今ノ幽居ヲ移セルニ、藥師ハ瑠璃界ノ起結ナガラ、稻葉ノ鳥ト因幡ノ松トニ、二首ノ古歌ヲ摘入タル、起結斷續ハ例ノ言ハズ、法ニハ鎖詞ノ絶妙ト稱スベシ。▲萬姓統譜ニ「趙清獻公初任二成都、携二一琴一鶴一以行云々」家越ニ道具のナキ喩ナリ。△愛宕ノ雲モ比叡ノ嵐モ、總テ移文ノ趣意ニシテ、神力ノ奇特ヲ云ヘリ。●杜律胡馬ノ詩ニ「風入二四蹄一輕」▲増賀ノ前駈ニ空鮭ノ詼諧アリ。本朝高僧傳ニ委シ。△隱士傳ニ、竹林ノ七賢アリ。細擧ニ及バズ。「按ズルニ此二句ハ、藪ノ下ト云ヘル名ノ都ニ似氣ナキ所ナレド、竹ノ林ノ風流ヲ添ヘタリ。然モ賢人ノ跡ヲ追ハズト

ヲ飜轉セリ。其文ノ下ニ互見スベシ。△夜鶴トモ曉猿トモ、例ニ移文ノ裁入ナリ。●文明ガ病中遺レ妓詩ニ「黄金用盡教ニ歌舞一。留ニ與他人一樂ニ少年一」●朱褒ガ悼ニ亡妓一詩ニ「昨日施レ僧裙帶上。斷腸猶繫ニ琵琶絃一」「按ズルニ此一對ハ、白鷗予ガ壯年ノ比ニ朱褒ガ如キ遊女ヲ失ヒテ浮世ノ嵯峨ヲ見果ショリ、今ノ隱者ト成レルニヤ。二詩ノ取合ヲ稱スベキナリ。○兼好ノ歌ニ「ありとだに人にしられで身のほどやみそかにちかき有明の月」▲雪ニ曉ノ舟トハ載逵ガ故事ナリ。前ニアリ○俊成ノ歌ニ「むかし思ふ草のいほりの夜の雨に涙なそへそ山ほとゝぎす」▲浦島ガ七世ノ孫ニ逢ヒタル事ハ、萬葉ノ長歌ニアリ。擧グルニ繁シ。△漢書李廣ガ傳ニ「桃李不レ言下自成レ蹊」○兼好ノ歌ニ「こゝもまた浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな」▲東晉モ南郭モ移文ニアリ。其下ニ互見スベシ。

△六玉川ハ六所ノ名跡ナリ。歌ハ擧グルニ及バズ。「按ズルニ此畫賛ハ、和歌ハ當時ノ名所ヲ選ビ、俳諧ハ夷洛ノ文人ヲ聚メテ、二幅一對ノ卷物ト成セリ。誠ニ家珍ト云フベキナリ。▲神仙傳ニ「有ニ老翁一賣レ藥、懸ニ一壺於肆頭一及ニ市罷一跳入ニ壺中一云々」壺公ハ費長房ガ師ナリトゾ。▲梁

はともありかくもあらんが、夏をば老の身のすこやかならんをと、かしこに一堆の堂をきづき、みづから方丈記をつくりて、白鷗の二字を題せしに、五湖の清風も三江の明月も、波こゝもとの枕に涼しく、誠は瑠璃の別世界なるや。しかは年頃に住ならして、朝にはうかれゆふべには歸る。此からすまの幽居をもわかれて、因幡藥師のこなたなる、藪の下といふ所に、一琴一鶴の所帶をうつせば、まことよ叟の御佛も、風士をまねき給ふるにて、十二神將も擁護たるには、愛宕の雲は車のわだちをめぐり、比叡の嵐は馬のひづめに入て、名利の塵をはらふにぞ、都は物の晴がましく、増賀の前斷にはまさりぬべし。こゝにも白鷗の一堂を移して、竹の林の名にあふる、藪の下には住むなれど、花より賢人のあとをもおはず、年も六十瀬にわたりくらべて、浮世の波の風も吹あへぬ、長安の市中に、閑をぬすみて、白鷗の名は永くくちざらまし。

○註ニ曰、△招隱ノ二字ハ諸書ニ出テ、詩トモ云ヒ文トモ云ヘリ。隱倫ノ人ヲ招請シテ我友ト成スノ謂ナリ。▲周顒ガ僞隱ノ事ハ、北山移文ニアリ。前ニ出テタリ。「按ズルニ此一篇ハ、總テ移文

鞠の遊をさへ、琴碁書畫の風流をつくして、文明が黄金のかぎりあらざらんにも、朱褒が琵琶のかなしみなきにはあらで、世をあだなりと思ひ入けむ、やをら古里のかたを見はなちて、行衛なき身とはなりけらし。かくて都の片ほとりに、みそかの月のありとのみ聞えて、影もかすかに住侘びしが、梅に鶯の春をおもへば、紅葉に鹿の秋もわすられず、嵯峨の雪には、曉のふねを催し、淀の時鳥にはむかしの友を思ふに、浦嶋が子の便ならでも、世にあればやと人もとひくるにぞ、さすが都の花鳥になれて、桃李のこみちも蹈まがへてむ。こゝも浮世の心地ながら、東魯の幽人をまなびざれば、南郭の隱士をもうらやまず、今はた洛陽に此老ありて、市に隱者の鑑とぞなれる。是より夷洛に名をしられて、家に六玉川の畫贊をあつむるに、その一軸は歌人の風流より、その一軸は俳諧の模樣をつくす。すべては三十餘章とかや。其外は身にしたがふ調度もなく、あるは風景の地をたづね、あるは風雅の隣にまねかれて、まぼろしの世を住かはれども、壺公が市の遊ならば、支遁が山を買ふには似ざらん。さして十年の春秋をおくるに、冬

一首有氣候得共、急ニ戰死ヲ申候。何事替行世習、今更候。可祝。

正月朔日

○評ニ云、此狀は世に名ありて、東書西史に書傳へたれば、文の長短もまちまちにて、或は一首有氣の二句をはぶき、其末に歌を載せたるもあり。されど此時に歌はよみ捨て、戰死に文を忘れざらんには、忠度の風雅に忠義をそへて、まさに文武の大將と稱すべし。其軍は寬永十五年にして、其日は唐頭の冑を著し半月の指物をさせりとぞ。板倉は氏にして、内膳正に任ぜらろ、名は重昌といへりとぞ。

招隱の文

東花坊

むかし周顒は鍾山にかくれて、名利に神のにくみを得たるに、今の白鷗子は洛陽にあそびて、神にもまゐり佛にもしたしみ、風雅に人のまじはりをかさぬ。さらば人目なき山の奥に、鶴とともなひ猿にまたれむより、爰に市中の大隱なるをしるべし。されば此人は攝の伊丹に產して、名にし在岡の甍をならべ、錦繡の中にひととなれるより、歌舞獄

の機變をさとせしは、萬子一父の遺誡といふべし。

馬符の文

荒木山城の守

態申入候。近日西國可レ令ニ下向一候。拙子好物共色々可レ被ニ調置一候。聊無ニ御弓斷一賴入候。恐惶謹言。

天正三年八月日

阿彌陀殿參

○評ニ云、此作者は丹波の城主にて、天正の比の勇將なり。しかるに此馬符は、白絹の四半なる物に、朱にて此文をかけりとぞ。さて全篇の評する所は、彼の生質の文にかちて、聊野なるに似たれども、西方の聖主に其文の横柄なる、劍戟の中にありながら、春の花見に出立ちぬる心地にや。それらを俳諧の荷擔人にして、此文操に名を傳ふなるべし。

申ニ石谷十藏一狀

板倉内膳の正

去年元日者、於ニ江城一縮ニ烏帽子之緒一、今年今日者、於ニ嶋原之城一縮ニ甲之緒一候。

ありて、當時の人を惱殺すといふべし。

遺書　熊谷入道

一先祖相傳所領安堵御判七、并ニ保元元年以來至ニ建久年中ニ軍忠御感狀二十一通有レ之事。

一對ニ主君ニ不レ可レ成ニ逆儀ヲ并ニ武道可レ守之事。

一上人御自筆御理書、并ニ迎接曼陀羅、可レ成ニ信心ヲ事。

右三箇條、至ニ子々孫々ニ能々可レ令ニ存知ニ旨、其外依ニ其身器量ニ可ニ覺悟ス者也。仍置狀如レ件。

○評ニ曰、此書は子息小次郎への遺訓也。しかるに三段の三要なる、第一は家名の由緒をつたへ、第二は君臣の義理をなしへ、第三は人間の無常をしめす。誠に智あり仁ありて、勇氣は例のいふに及ばず。況や信の一字をもて、又五常の釘語となせるをや。しかれば三品の公狀をしめて、其外はその身の器量によるべしとは、彼いふ滿籯(一)の金言にして、死後の油斷をいましめながら、物

(一)「子に黃金滿籯を遺すは一經に如かず」漢書に見えたる諺

出羽の國の配所を問ふ二首の歌のかへし、

そなたさへ秋になるみの濱楸

しをれぞまさる袖のうら波

別れてもわかれぬ筋は片糸の

あはであひ見む事をのみこそ

後の歌はまつとしきけば也、いな我はまちまたれじ、別つもわかれぬ筋のあれば、あはであひ見むと也。そは道也。世の中の人ごとに、容をまじへ言をかはさゞれば逢ふとせず。道はかくはあらず。次に君を此筋に引かむとのことば也。よそにもらさせ給ふまじき也。家醜は外にあげず。

八月十三日　　花押

○評ニ云、此返状は、よのつれの法語ながら、返歌の評にはあやしき所あり。されば此和尚は、さることおはして出羽國に配せられ給ひしが、先は法友の示ながらも、家醜の二字に配所の憤悱

音といはむ。しかれども庭訓には、漢土の助語をあつかはれば、爰には例の大和詞をもて、和漢の兩用を通ぜむとす。それたゞ文操の本懐なるをや。むかしより文章の優情は論語を唐土の鑑といひ、源氏を大和の鑑といへる、助語辭と手爾波との通用は、兩書の詖にしるべき也。

遣㆓庄五郎㆒書

楠　正　成

此度隼人差下事、非㆓別義㆒。我等最期近しと覺候。願貴殿成長之器量見屆度候得共、義之所㆑重更難㆑遁候。彌勤學無㆓懈怠㆒、成長之後我等心中可㆑被㆑察候。謹言。

尚々此巻絹一疋公より拜受、具足は祖より著ふるし候。永きかたみと贈㆑之候。

○評ニ云、此書は、建武三年正月廿日に、湊川より故郷におくれるよし。全篇は親の子になしゆる恩愛の常ながら、結語に察の一字を評せば、論語に視觀察の用のみならず、一言以覆といへる、夫詩の心をつくさゞらんや。是をもてこゝにいへば、誠に文武の軍師にして、生前は張良が智勇をあらはし、死後は孔明が韜畧をのこせる、本朝無二の武鑑と稱すべし。

配所返狀

澤　庵　和　尚

曲節をつくさろ、句作の手づまを稱すべき也。是仰房は先師の隱號にして、知事とは僧家の普請奉行也。

○書狀の類

年始の狀　　左衛門の尉

春の始の御悅、向貴方先祝申候畢。富貴萬福猶以幸甚々々。抑歲の初の朝拜者、以朔日元三之次、可急申之處、被駈催人々子日遊之間、乍思延引。似谷の鶯の忘檜の花の苑の小蝶の遊日影、頗背本意候畢。將及楊弓雀小弓の勝負、笠懸小串の會、草鹿圓物の遊、三三九の手夾八的等の曲節、近日打續經營之。尋常射手馳挽の達者、少々有御誘曳、思食立給者、本望也。心事雖多、爲期參會之次、委不能腐毫。恐々謹言。

○評ニ云、此狀は庭訓往來に出て、世すでにしれる所なれど、大和に眞名文といふ時は、これらの先蹤によるべきにや。或は候畢をもて、是を和訓の爲習といひ、或は思食をもて、是を漢文の假

ありがたや寺はかつらの花の陰

鴈　胡津

淨土から雁のたよりやすまし汁

菊　里鳳

淵明はどこにじや菊の極樂寺

斧鶴　半卜

みそさゞゐこゝを飛ぶ事十萬里

雪花　過角

後から彌陀の長柄や雪のはな

天人　陵夜

極樂は羽箒舞ふて煤もなし

○評ニ云、此敎は全く誹諧にして、別に註解するに及ばず。註する所は、四季の花鳥に七縱八横の

梅の花さくやちかひの鰹ぶし

鶯　貫仙

鶯や紫衣にもならで極樂寺

櫻　佐巴

七寶の提重てらすさくら哉

時鳥　左明

寐佛も起きて聞きやるやほとゝぎす

橘　盤泉

たち花の抹香くさし起佛

蝙蝠　許丹

かはほりや花にあそべる繪天井

桂花　石人

題すれば、諸佛一音に咏吟して、天龍も夜叉も腹の皮をよらんとす。爾時に寐佛はむくと起て曰、家に佛壇を置ざれば、念佛を申す年寄もなく、隣に獵師の網をほせば、小鯛はないかと聞にちかし。湯屋はあの柳の陰に涼しく、三味線の音もをり〱に聞えて、ただ此寺の貧地ながらも、朝寐夜遊の安樂城ならんと。東花坊曰、あらたふとし、我こと新潟より出雲崎の間を流轉して、今はた分別の夢さめて見れば、世に米は鉢をひらき、鍋は隣へいふてもかりなむ。杓子摺小木はなきに事かゝぬ、其日々々の工夫もあるべし。しからば此世のねがひもやすく、蓮の葉一枚に父母をむかへ、故翁の尊靈をまつらんには、是を極樂の借座敷にして、盆に灯籠の花をもさすべし。今より是を無佛の極樂寺と名づけば、新地御法度のとがめを遁れて、彌勒の三會をまつに及ばず、月次の會所となすべしと、師檀の心も和合して、名主も組頭も名判をゑ、四季の體相をかざる事しか也。

四季の花鳥

梅　是佛房

尙又後勘あるべき也。さて此令の稱する所は、辨慶は例の武骨にして、嚴科の二字のするどなるなど、一枝に一指のあやを添ふれば、誠に花の制札にして、爰を文章の優情といへば、義經に文武二道の名ある事をしるべし。

極樂寺の敎 並發句　　是佛房

知事それがし是佛房うけ給はりぬ。そもそも三界流轉の中に極樂といふ都ありて、意に夜著の榮花を思へば、純子のひかり目にかゞやき、口に濱燒の風味を求むれば、山葵のにほひ鼻にみつとこそ。されど其所には彌陀佛といへるあるじありて、露もその心にたがひぬれば、一日逗留もかなひがたし。おほくは歌人連歌師のつとめて行所なりと聞ゆ。しかるに越後の國直江の津に、ふしぎ世界のおもしろき所ありて、そこの亭主の物にかまはねば、其名を極樂寺の仁平とはいへり。こゝに一蓮托生の座をわかちて、盆には東花坊をまてるよし。其のまつ人は檜下の陸夜なるべし。故に優婆塞も優婆夷も、一紙半錢の心ざしをはこびて、行灯をはりかへ、硯箱を吹はらひ、四壁に四季の花鳥を

道に俳諧の用と無用とをしりて、文に文操のあそびなるをしるべし。さて標題下の狂名に卉名蓮とは、蓮二の隱語にや。さるは艸字の說文に、「卄百卉惣名也」といひ、連は上代の姓名なるより、合せて蓮の一字となせる。さるは世にいふ字謎にして、官名は敎令の用なれば也。

花の制札

源　義　經

此花江南の所務也。一枝於ては折盜之輩に者、任せ天永紅葉之例に。伐らば一枝を者可き剪る一指を者也。

壽永三年二月日

○評ニ云、此制札は、世々に書つたへて、或は須磨寺の若木櫻なりと、兵庫名所記に出せしが、其記には「江南所無也」とありて、所無の字義通じがたし。或は弘安禮節には、「難波之別當源判官殿へ花制札申請候處に辨慶に被仰付候、其札に江南梅花折ニ一枝ー者可レ處ニ嚴科ー者也と相認候へば、義經御覽ありて、花を折者心なくては不レ折、あまり强き文言とて、則御直しのよし、江南梅花折ニ一枝ニ可レ切ニ一指ー者也云々」今思へば、亂世の紛れに、難波の制札を須磨寺に持傳へしや。梅に江南の傾あれば、いづれに後勘あるべきなり。或は天永紅葉之例も、其代に此制の沙汰ありや、

○評ニ云、此文は全く俳諧にして、其格は潘元茂が魏公の九錫にならへる也。しかれば俳諧の文といふは、馬にゑぼしをきせ、松によめ入をさせて、托物比興の情をつくすに、かしこに諷諫の用をしらず、こゝに談笑の遊をしらざれば、法をもてあそぶ輩となりて、世にいふ檀林の輕口にまじり、詩書禮樂の名を失ひ、六藝の贊もあだ言にして、太史公が虚名を立つるのみならず、史記の證文は反故となりなむ。知るべきは俳諧の新古にして、學ぶべきは俳諧の虚實なるをや。此故に今の二篇は、宋袁淑と卉名連と、文に俳諧の虚實をくらべて、和漢の腹筋をよらんとす。されど袁淑は博學につのりて、張三李四が耳に遠く、目なれぬ文字もおほかれど、卉名は例の平話をもて、與平三藏が心をなぐさむれば、こゝを大和のかちとやいはむ。それが中にも、九錫をあぐるに秬鬯の二字の音訓をさゝず、論語の不知を不知とせしは、ほとんど俳諧の意地にして、遠くば漢土の文人を蒸殺し、近くは倭國の學者を看破す。況や三條の法によせて、たとひ九錫の榮花にほころとも、人和の虚實を忘るべからずとは、一篇の結段もこゝにありて、一部の結文もこゝにあれば、例の談笑は更にいはず、例の諷諫に此用をたふとむべし。しからば今の二篇をもて、

ハ笑中ニ刀ヲ含ミテ、文ニハ隱見ノ絶妙ト稱スベシ。○宗于ノ歌ニ、「常磐なる松のみどりも春くれば、今一しほの色まさりけり。△晉ノ王羲之愛レ竹曰、「一日無ニ此君一耶云々」△梅ヲ天職トハ、歌舞ノ地ノ優言ナリ。然レバ太夫ヲ松ト云ヒ天神ヲ梅ト云ヘル、爰ニハ松竹梅ノ寓（よせ）ニシテ、此等ヲ十分ノ誹諧ト云ハン。△難波物語ニ「こゝすみよしの浦なれば」トアリ。△松花堂ハ、金城ノ戌亥安江町ノ西ニアリ。○能宣ノ歌ニ「ちとせまで限れる松もけふよりは君にひかれてよろづ代やへん」△馬ニ無相トハ、衣冠ヲ云ヒ△松ニ有情トハ夫婦ヲ云ヘルニ、畢竟ハ有無ト姿情トニ文字ノ曖（あつかひ）ノ自在ナル、言ハヾ互照ノ絶妙ト稱スベシ、●白樂天ノ諷ニ、明神ト樂天ト詩歌ノ爭アリテ、爰ニ和漢ノ勝劣ヲ結語セリ。詩歌ハ例ヲ擧グルニ及バズ。○田村ノ謠ニ「草も木も我おほ君の國なればいづれか鬼のすみかならん」△風雅の體と云ひ俳諧の名と云へる、三條の法は前に出でたり。「按ズルニ此二句ハ一篇ノ總結ニシテ、汝ノ體ニハ其風ヲ含ミ、汝ノ名トハ其聲ニ寄セテ、虛誕ノ中ニ家法ヲ忘レザル、増テ蒼々颯々ノ一對ニ、談笑ヲ盡シ、祝言ヲ調フ。誠ニ俳文ノ鑑ト云フベキナリ、

（二）正しくは「かさねばうとし」

（三）正しくは「南風之薫兮。可以解吾民之慍」

鶴ト云ヘル、總テハ松ノ緣語ニシテ、故事ヲ摘ミ古語ヲ採ル時ハ、此等ノ裁入ヲ鑑トスベシ。●松ノ蒼髯ハ例ノ官名ナガラ、「風梳ニ新柳髮ニ」ト云ヘル都良香ノ詩勢ヲ含メルニヤ。蒼ト綠トノ互照ヲ見ルベシ。○時雨ノ松ハ前ニ出デタリ。○遍昭ノ歌ニ「世をいとふ苔の衣はたゞひとへかさ（二）なはさむしいざふたり寐む」「按ズルニ、此二錫ハ孔明ト周顗トニ、漢家ニ恩顧ノ故事ヲ摘ミ、慈鎭ト遍昭トニ倭朝ニ艷色ノ古歌ヲ採リテ、爰ニ和漢ノ文對ヲ裝フ。詞ノ裁斷ハ例ノ言ハズ、此等ヲ錯綜ノ絕妙ト稱スベシ。○齋院ノ歌ニ「琴の音に峯の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけん」●史記ノ本紀ニ「舜彈ニ五絃琴一。歌曰。（三）南風薰兮、解ニ吾民之慍一」云々」按ズルニ、此一章ハ、松ニ樂器ノ自在ナル、松雖ノ寄ハ更ニシテ、琴ニ詩歌ノ和漢ヲ對セル、此等ヲ雙關ノ絕妙ト稱スベシ。●八仙ノ詩ニ「宗之瀟洒美少年。皎如ニ玉樹臨ニ風前一」云々」「按ズルニ、此一章ハ、檀木屋ノ松ノ起語ニシテ、粉黛ノ姿ヲ作ラザレトナリ。△文選ニ曰、「九錫ニ秬鬯一卣ニ珪瓚副焉」云々」「按ズルニ此章ハ、八錫ニ俳諧ヲ書盡シテ、爰ニ秬鬯一卣トハ、音訓トモニ讀ミ難キヲ、學ビテ博學ノ媚ヲ飾ラズ、日本ノ俳諧師ハ讀メヌトテ、副焉ノ二字ヲ漢文ニ假リテ、九錫ノ間ヲ合セタル、實

（一）太平記

諧語ニヤ。然ルニ此段ノ萬歳樂ハ、跡形モナキ寓語ナレド、松太夫トモ鶴太夫トモ、大夫ノ二字ノ繋ギト知ルベシ。忠峯ガ歌ニ「子の日する野邊に小松のなかりせば千代のためしに何をひかまし」△枕双紙ニ「如意輪は人の心をおぼしわづらひて頬杖をつきて」トアリ。○帥ノ宮ノ歌ニ（一）「數ならぬみの〱お山の夕しぐれつれなき松はふるかひもなし」○慈鎭ノ歌ニ「我戀は松を時雨の染めかねて眞葛が原に風さわぐなり」△松花室ハ、賀ノ金城ニ在リテ風曲亭ノ別號ナリ、支那ノ僧高泉ノ筆ニシテ、額ニハ松花室トアリトゾ。●事文類聚、松ノ詩ニ「風韻颼々遠更清。蒼髯瘦甲聳亭々」○詞花集ニ「君が代のひさしかるべきためしにや神も植けむ住吉の松」△つれ〲艸ニ「その子うまごまでは」トアリ。其子其孫なりとぞ△者則トハ、大和ノ返辭ナリ。然ルヲ古訓ニハ、テイレハト有レド、爰ニハテヘレハト訓ズベシ。ヘハテノ餘韻ニテ、左様爾而兮在則ト、語ヲ註テ次ヲ稽ル故ナリト、大和詞ノ後勘ニ註セリ。▲臥龍臣トハ孔明ナリ。蜀志ニ「徐庶曰、孔明臥龍也。先主三往乃見云々」車馬ハ三請ノ尊敬ナリ。△鍾山ノ鶴トハ周顒ガ僞隱ヲ云ヘリ。北山移文ニ「蕙帳空兮夜鶴怨云々」或ハ「截ニ來轅ヲ杜ニ妄轡ヲ」トアリ。「按ズルニ此一章ニ、龍ト云ヒ

錫二車馬一云々」九錫ノ名ハ今ノ文ニアリ。册ハ「命二諸侯一符也」トアレバ、帝詔王令ノ類ト知ルベキナリ。▲淮南子ニ「蒼頡始視二鳥跡之文一造二書契一云々」黄帝ノ時ナリトゾ。▲呉志ニ「丁固夢レ松、謂レ人曰、松十八公也。後十八歳吾其爲レ公云々」按ズルニ、此三字ハ錫文ノ用ナル故ニ、別事ヲ合セテ黄帝ノ命ト成セル、爰ヲ俳諧ノ文ト云ヒテ、寓言ノ絶妙ト稱スベキナリ。⊠高砂ノ諷ニ「中にも此松は萬木にすぐれて、十八公のよそほひ」トアリ。按ズルニ、此一篇ハ松ノ祝言ヲ趣向ト成セバ、其諷ノ詞ヲ摘ミテ、總テ十品ノ裁入アリ。逐一ニ擧グルニ及バズ。滕(ちぎり)ノ相紋ノ下ニ知ルベシ。▲史記ニ、秦始皇ノ狩場ニテ雨ヲ松陰ニ避ケテ、大夫ノ官ヲ賜フ事アリ。○古今集ニ「御さぶらひみかさと申せみやぎ野の木の下露は雨にまされり」▲つれ〴〵艸ニ衞士ノ又五郎ガ才覺ノ事アリ。追儺ノ下ニ見合スベシ。「按ズルニ此一段ハ、一篇ノ中ノ名文ニシテ、松ニ官爵ノ用ナガラ、唐ト日本トノ智惠ヲ競ベタルハ、錫文ニ和漢ノ譯アリテ、一字一言ニ俳諧ヲ失ハズ。此等ヲ虚實ノ虚實ト云ヒテ、文ニハ烏鼠ノ絶妙ト稱スベシ。△古今ノ序ニ「松の葉のちり失せずして正木のかづら永く傳りて」とあり。「按ズルニ徽幸トハ思ヒ懸ケヌ仕合ヲ云ヒテ徽松葉(こぼれ)ノ

代の小紋字にして、天帝もしかとはしろしめさず、日本の人はましてよめねば、替ふるに鞍掛をもて副焉とぞ。さばとて鞍掛に木鏟をかまへ、植木屋の松にならひて、温飩あげの笊のごとく、火搔蠅打の容をつくらず、和漢の理窟を苅つくし、古今の風雅をため直さば、東に松嶋の奇石をさゝげ、西に箱崎の眞砂をしきて、汝の容の魏々堂々と、汝の髯の蒼々たらんには、今一しほの色まさりて、竹も此君の名をはゞかり、梅も天職の位をはぢて、こゝ住吉の岸ならでも、所は安江の名にめでて、松の常磐の千歳にはかぎらじ。誠や唐土の滑稽をもて、馬に無相の情をよすれば、爰にやまとの俳諧をもて、松に有情の相をうつせる、假名と眞名との通用は、本より日の本の神慮にして、かの住吉の松のむかしより、白樂天も我ををりぬとよ。さらば三越の草も木も、我大君の風になびかずば、風雅は汝の其體よりもさびしく、俳諧は汝の此名よりもおかしからん。蒼々の髯をたしなみて颯々の聲をたのしめや。

○註ニ曰、△文選ノ册類ニ、魏公九錫文アリ。潘元茂ガ作ナリ。其註ニ「諸侯有レ德、天子錫レ之。一

に、和漢のあつかひある事を、此錫文に勅してかゝしむ。者則天機かくのごとし。さて九錫の次第といふは、一には車馬、二には衣服、むかし臥龍の臣のごときは、馬に車に谷の戸をひらきて鍾山の鶴の怨をもおはず。しからば老松の髯をくしけづりて若松のみどりを添ざらんや。色も時雨のそめぬ心より、苔の衣に世をいとふ事なかれ。三に虎賁は汝の用にあらず。替ふるに日傭をもて是を賜ふ。箒とさらえは高砂の能具なれば、月に花に掃地をおこたらず、木陰の塵をきよむべし。四に樂器は汝の家ながら、笛に太鼓の松ばやしはいはず、其音もまして遠山鳥の、いづれの尾よりとよみ置きし、琴のしらべの風やはらかに、吾民の愁をとくべき也。五には納階といひ、六には朱戸といへる、本より松花臺の結構ながら、野山のさびを忘まじき也。七に弓矢は今の用にあらず、名にあふ松の太平なれば、竹弓に羽なしの矢を賜ふ。雨のあした雪のゆふべ、藜蘆南天の實をかすめむとする鵯かし鳥をおどすべし。八に鐵鉞は汝の讐なれば、替ふるに木鋏をもて是を賜ふ。風に玉樹の姿をばいはず、つねに男ぶりをたしなむべし。九に秬鬯とは、上

て我朝のいにしへは、君がねのびのためしにひかれて、女后更衣のまじらひより、年も姫松の名に若やぎて、高砂住吉のよめり沙汰となれば、唐崎の松はひとり寐をうらみ、曾禰の松も頰杖にかたむきて、世を數ならぬみのゝ松も、眞葛がはらの風にさわぎて、尉と姥との相生をそねめども、公家武家の賀例は更にして、田つくりも呑ふりも、大工左官の家々まで、萬民これを賞翫して、今は祝言の第一に諷へば、げに四海波しづかにて、皆たゞ汝の壽ならずや。さてこそ和漢の詩歌にほめられ、かく文章に名を傳ふなるべし。爰に三越の名に高き、金城の松花臺に、一株九曲の松ありて、其枝は龍の雲に横たはり、此枝は虎の風にそばだつ、一國無双の木なりとて、享保のことしその月その日、天帝の命ありて、蒼髯公の名をかふむり、九品の官祿を賜ふ。松は非情の物ながら、相生の名に夫婦の信あれば、なぞや君臣の禮なからん。遠くは君が代のひさしからば、近くは今の世の松もたひらかに、まして此家の孫までに、枝もさかえ葉もしげりて、九錫の恩を忘れざれと也。こゝにおいて獅子門のなにがし、卉名連うけ給はりて、馬と松との俳諧

ここに和漢の文對となさば、古今に俳諧の名をさだむるのみならず、文章に虚實の鑑ならんと、返書におくるもの左のごとし。かつてきゝぬ、事文類聚は林羅山の點にして、そのうちの注解なしと、しかれば漢音に通ぜざる我輩の註すべきにはあらず。たとひ菅相江帥の才ありとも、漢に俳諧の風言ならんには、訓釋はいさ推量の沙汰ならん。見る人はやゝ後勘あるべき也。

蒼髯公九錫俳諧文

也有

むかし黄帝の御時に、蒼頡に仰付られし、千艸萬木の文字をつくり給ふに、梅櫻の色にめでず、蘭菊の香にほこらず、松はちとせの操あればと、十八公の名位を賜はりて、その名の萬木にすぐれたるは、本より汝の徳ならずや。そのゝち秦王の御狩の時に、一むら雨のあわたゞしく、そりや御さぶらひみかさと申せと、唐人の尻をもつまげず、衛士の又五郎が才覺もなければ、そこの松影に立寄らせ給ひ、そら色の御衣もきはづかねば、其日の御爵にあづかりて、松に太夫の名をめされしより、萬歳樂も此御代にはじまりて、素袍に烏帽子の威儀をつくらふ。其名は松の葉のちり失せず、汝のこぼれ幸ならずや。さ

俯協漏刻。應更長鳴、豪分不忒。雖契壺著稱、未足比德。斯又爾之智也。青背絳身、長頭廣額、修尾後垂、巨耳雙礫。斯又爾之形也。嘉蔆旣熟、實須精麪。負磨廻衡、迅若轉電、惠我衆庶、神祇獲薦。斯又爾之能也。是用遣中大夫閭丘驟如爾使御勒大鴻臚斑脚大將軍宮亭侯、以湯洲之廬江、江州之廬陵、吳國之桐廬、合浦之朱廬封爾爲廬山公。

○評ニ云、此文は宋の事文類聚に出て、標題の八字もすべて此通也。されば俳諧の道といふは、史記の滑稽傳に名をあげて、孔門の六藝をひきあはせ、微中といひ解紛といへる、太史公が贊詞より、優旃が談笑に言語のあそびをさとし、優孟が諷諫に勸懲の用をあらはせば、姚察が評林にも、滑稽猶俳諧といへれば、俳諧と俳諧との倭國の字論は明なれど、かく俳諧の文となのりて、馬に官祿をあたへ、勅使を給はり、供奉の行裝をつくらふ事は、こゝを言語の遊にして、漢には此文を始とやいはむ。しかるを賀北の金城に、なにがし風曲といふ俳士ありて、たまたま此文を寫出し、我文操の選場におくらる。しからば其家の祕藏の松に、菅丞公の九錫をつくりて、こ

(一)「豪」は「毫」

史ノ滑稽ノ贊ニ「常以ニ談笑一諷諫云々」諷諫ノ稱美ハ孔子ノ家語ニ出タリ。△惡懲レ罪善勸レ功トハ、勸善懲惡ノ常語ナカラ、爰ヲ文章ノ裁斷ト云ヒテ、格ニ倒裝ノ絶妙ト稱スベシ。

○評ニ云、此表は自家の風聽にして、論ぜば師德を滅ずるに似たれど、始段は産神の御詠にたよりて、風雅に生知の故ある事をあらはし、中段は我師の三科をあげて、俳道建立の證文となし、結段は産神の親愛にあまえて、百世の德光を神慮にまかせたらん、畢竟は款狀の古例にゆづりて、爰に文句の起結を見て、爰に言語の虚實をしらば、表狀はよし怨慕のあまりなる事をしるべし。誠におそるべく誠につゝしむべきは、たゞ此表の評詞なるべし。

○敎令類

廬山公九錫俳諧文　宋　袁淑

若乃三軍陸邁、糧運艱難、謀臣停レ算、武夫吟嘆。爾乃長ニ鳴上黨一、慨慷應レ邦、崎嶇千里、荷レ囊致レ餐、用捷ニ大勳一。歷山不レ刊。斯實爾之功也。走隨時興、晨夜不レ默、仰契ニ玄象一

セリトゾ。△辭類引類ハ本朝文鑑ニ細註アリ。其題ノ下ニ見ルベシ。△款狀トハ我身ノ才藝ヲ數ヘ擧ゲテ官祿ヲ望ム時ノ訴狀ナリ。款（くわん）ハ苦管ノ切ナレド撥（はね）メハ大和ノ故實トゾ。△東花式ハ貞享式ノ附錄ニシテ、多クハ月花ノ誑ナリ。△一字錄ハ先師ノ家訓ニシテ、時宜ノ二字ヲ以テ世法ノ用トセリ。△三條ノ法ハ十論ニアリ。△五條ノ式ハ文賦ニアリ。共ニ其書ニ見ルベキナリ。△授記ノ二字ハ佛經ノ語ナリ。「按ズルニ、一切經ハ多クハ燃灯佛ノ授記ニシテ、例ニ「述而不レ作」ト云ヘル聖經ノ辭義ナレバ、爰ニモ祖翁ノ授記トハ云ヘリ。△史記の滑稽ノ贊ニ「談言微中」トハ、俳諧ハ微細ニ物情ヲ盡シテ、言語ノ的中ナルヲ云ヘリ。按ズルニ此段ハ三條ノ法ノ結文ナガラ、老若ノ一對ハ字對ト云ヒ意對ト云ヒ、文ニ筆占ノ絶妙ト稱スベシ。△論語ニ「君子有二三變一。望レ之儼然。即レ之也溫。聽二其言一也厲」△我貢ハ宰我ト子貢トナリ。禪語ニ「坐二斷天下舌頭一」トハ、人ニ口ヲ明セヌ事ナリ。△史記ニ「孔子誡二子貢一曰。美言傷レ信愼レ言哉」「按ズルニ、宰我子貢ハ言語ノ一科ニ響ナガラ、折々ニ言語ヲ誡メ玉フ。其等ノ懲惡ヲ勘破シテ、釘語ハ頓坐ノ絶妙ト稱スベシ。△誹諧ノ字トハ中古ノ風ヲ云ヘリ。言偏ト人偏ノ論ハ、十論ノ第一段ニ見ルベシ。△

千那、尙白ハ、有若、曾參ノ實アリテ、譬ヘバ蕉門ノ補佐ト云フベク、其角、嵐雪、去來、丈艸ハ、子游子夏ガ才アリテ、譬ヘバ蕉門ノ史令ト云フベシ。△論語ニ「顏回曰、無レ伐レ善、無レ施レ勞云々」薪水ノ勞トハ朝暮ノ爨炊ヲ云ヘリ。△論語ニ「吾與レ回言。終日不レ違」△三科ハ德行ト言語ト文學トナリ。政事ハ今ノ用ニ非ズ。「按ズルニ、此詞ハ我師ノ德行以下ニ三科ヲ擧グベキ表文ノ有增ナリ。是ヲ本注ノ文法ト知ルベシ。▲假名ノ碑ハ七字ノ謎文ナリ。漢ニハ曹娥ガ碑ニ效ヘリ。假名ノ碑文ハ此銘ヲ以テ本朝ノ始ト云フベキナリ。▲娑羅双樹ハ天竺ノ香木ナリ。今ノ双林寺ニ此木アリ。●筌歌ノ雲ハ前ニ出デタリ。▲難波ノ遺狀ノ奥書ニ出山佛ノ事アリ。十論ノ爲辨ニ見ルベシ。△佛書ニ結ぶ香火の因を」トハ、燒香燃灯ノ因緣トゾ。△老子經ニ「爲而不レ恃。功成不レ居」▲祖翁ノ遺稿トハ、難波ノ遺狀ニ「文章の反故は杉風にあり、支考可レ被レ爲ニ點檢ニ」トアリ。貞享式ハ五祕ノ第一トゾ。△白馬集ハ俳諧ノ遺訓ナリ。四十二條ノ家法アリ。滅後ニ其集ヲ尊ミテ白馬經トハ門人ノ稱名トゾ。△貞享式ハ俳諧ノ式目ナリ。用捨ニ古今ノ違アリトゾ。△大和詞ニ二册アリテ、先師ノ新撰ナリ。漢土ノ助字ニ和訓ヲ加ヘテ、大和眞名ノ用トス。五義ノ古法ヲ以テ譯

（一）「德行、顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。言語、宰我、子貢。政事、冉有、季路。文學、子游」

諫の談笑ならんか。今や産神の御まへに啓して、かく氏人の名を稱して、三科の款狀を奉れば、いかでや我子を召はなち給はむ。あしきは其子の罪をこらし、よきは其子の功をすゝめて、遠くは祖翁の道をひろめ、近くは我師の德をてらし給へ。是たゞ狂等が祈願する所にして、佛法をいろへ儒法をやはらげ、俳諧の世法をつたへんと也。時に享保丙午のとし、三月十二日筆を寶前の水にすゝぎて、此表を奉る事しか也。誠恐頓首敬白。

○註ニ曰、△「棄恩入無爲」トハ剃髮ノ文ナリ。前ニアリ。△禪錄ニ百發百中ト云ヘルヲ、爰ニ一發トハ頓挫ノ飜轉ナリ。△論語ニ「吾道一以貫之」トアリ。萬貫トハ一理ノ萬通ノ敏捷ナリ。△詩格ニ「春宵一刻價千金」トアリ。「按ズルニ、此詞ハ「俳諧ハ老後ノ樂」ト云ヘル白馬ノ遺訓ヲ摘ミナガラ、老ノ月日ノ大功ヲ云ヘリ。然レバ一發百中ト飜シ、一以萬貫ト轉ジタル、此等ヲ換骨ノ頤神ニシテ、文法ハ例ノ言フニ及バズ。百千萬ヲ以テ三段ニ分ケタル、字對ノ絕妙ヲ稱スベキナリ。▲論語ニ（一）四科十哲ノ名錄アリ。舉グルニ及バズ。按ズルニ、武洛ノ間ニ杉風、嵐蘭、

に和訓の韵をもちひ、是をもて眞名の詩を製しては、漢家に平仄の法をまもれば、大和に狂詩の新話をあらためて、古今の雅俗をたゞせりといはむ。其餘は大和聯句といひ、求韵の俳諧といひ、辭類には和漢のたがひめを窺ひ、引類には古文の不明をとがむ。今いふ九條は和漢の碩學をもどきて、我家の文道をひろめんとすれば、法式に一字の私なき事を、今はた產神の御まへに啓して、千歳の冥慮をあふがざらんや。これらを文學の欵狀にして、東華式には一座の設をつたへ、一字錄には五倫の交をとゝなふ。たとひ俳諧に三條の法をさとし文章に五條の式をさだめしも、すべては祖翁の授記にして、遺稿の五祕とは無祕の祕ならんをや。そもや我師の言語を表せば、史記の談言微中より、例のおかしく例のさびしく、例の五倫を和する時は、若き者には小笠原をゝしへ、老たる人には源五平をうたふ。其溫にしてやはらかなる、其厲にしてするどなる、皆たゞ虛實の自在より、言語の無用をしれば也。しからば我貢が舌頭を坐斷すとも、美言は信をやぶるといへる、夫子の釘語を忘ざらんには、輕口の憂名は誹諧の家にゆづりて、彼いふ諷

り。さて十七年には、假名の碑を製して、その双林寺に造立せしが、其時は自門他門をえらばず、洛陽の名ある宗匠をまねきて、詩歌連俳の風雅をまじへ、一山の僧徒は法灯をかゝげて、薫香拈花の法養をつくせば、所は名にあふ双樹の林に、花は極樂の臺にひらき、鳥は笙歌の雲にあそぶ。さるは彌生の半なれば也。此時はまして遺物にひゞきたる出山の像を此寺にをさめて、第一には供佛の料をさゝげ、第二には日牌の價をつぐなひて、百世に香火の因をむすぶ。是よし祖翁の累徳ながら、我師の成功ならざるや。徳はおこなふに跡なしとは、なしてたのまざるの謂ならん。そもや我師の文學を表せば、祖翁の遺稿を獅子庵にとゞめて、白馬の四十二法より、俳諧十論の筆授となりて、和漢に世法の日用をあらはし、貞享式を再撰して、古今に法式の所以をしらしむ。二書は我門の大綱なるをや。況や唐土の助語辭をやはらけて、我朝の大和詞となせる。たとへば源氏狭衣の類より、神書のごとき帝詔のごとき、假名を其まゝに眞名となし、眞名をそのまゝに假名となさむも、一字の不用あらせじとや。是をもて假名の詩を裁しては、國法

(一)鯉屋杉風、松倉嵐蘭

(二)支考

は俳諧の談笑にあそびて、一刻千金の老をたのしむ。始あらずといふ事なく、終あらずといふ事なし。さるは芭蕉家の棒頭に虚實の變をしれれば也。つら〳〵我家の草創を思ふに、孔門に四科の十哲あるがごとく、武陵に松風嵐蘭(一)あれば、其角嵐雪は國の判者となり、洛陽に千那尚白あれば、去來丈艸は道の奉行となりて、筑紫の浦々も陸奥の末々も、其德をしたはずといふ者なし。しかるに我師(二)の若ければ、武洛の往來に親灸して、幻住庵の山居には薪水の勞を人にゆづらず、芭蕉庵の撰集には、筆墨の相手にえらばれて、談言はまして終日にたがはず。さるは三科をかねたりとやいはむ。爰を産神の御まへに啓して、百世の證文につたへむと也。そもや我師の德行を評せば、祖翁の一道を天下にかゝげて、滅後三年の法會より、七年には湖南の木曾寺に一日千句の追善を修せしに、遠近七ヶ國の門葉を催し、十三年には洛の双林寺に一萬句の法筵をのぶるに、西は中國四國より、しらぬひの筑紫にひゞき、北は三越の國々をへて、奥羽のはてなき千嶋までも、まして武洛の古門人は、感仰の心ざしをはこべるより、そこに三日夜の法樂をつくせ

する故に、これらを選場の働とやいはむ。吾仲は文鑑に名錄ありて、本より此集の序者たり。百阿は俳諧の道號にして、直秋は今の法名とぞ。

通夜物語表

渡部狂

世に傳ふ、此御やしろは、いにしへ大和の國より一本の杉を移し奉りて、一體兩部のその光を、此三輪にとゞめさせ給ふより、今は井關の神とあがめ、其流ちまたにわかれて、萬戸の民をうるほし給ふ。其いはれは三輪山の舊記にありて、其寺は聖武の御造營なりけるとぞ。さて淸輔の袋双紙にも、美濃國山縣郡三輪の明神の御詠歌に、「食とする木の葉は風にちりはてぬ露の命を何にかけまし」となむ。是は參籠せし行脚の僧にあぢきなき世のありさまを示し給ふる御歌なりとぞ。しかれば神慮にかくおはして、詩歌もよそに見はなち給はねば、月雪のゆふべ花鳥のあした、有がたき御手洗の流をくみて、產神の風雅をあふがざらんや。そも〳〵我師東花坊は、此御神の氏子として、始て佛門の無爲に入て一發百中の禪に參じ、中の比は儒家の文章をまなびて、一以萬貫の道に通じ、終

也。

○註ニ曰△叢林清規剃髪ノ文ニ「流ニ轉三界中ニ、恩愛不レ能ハ斷。棄レ恩入ニ無爲ニ、眞實報恩者」△佛經ニ善男子善女人トハ、衆生ヲ稱スル勸善ノ詞ナリ。△禪錄ニ「三家村裏老禿奴」トハ片山里ノ愚夫ヲ云ヘリ。△叢林清規得度ノ下ニ三歸戒ヲ授クル詞ニ「師云、汝能持不(たもつや)。沙彌云能持云々」△阿彌陀經ニ四十八ノ誓願アリ。細擧ニ及バズ。△教行信證ニ遠流ノ事アリテ愚禿ノ沙汰アリ。一向門ノ大祕訣ナリ。△禪語ニ「汝只莫レ慢レ人莫レ見ニ人慢ニ」○西行ノ歌ニ「世の中の人には葛の松原といはるゝほどの身こそやすけれ」○「捨はてゝ身はなき物と思へども雪のふる夜は寒くこそあれ」●白氏文集ニ「匹如身後有ニ何事ニ應向人間無レ所レ求」○梓弓ハ剃ノ詞寄ナリ。發心ノ歌多シ。●白詩ニ「笙歌遙聞孤雲上、聖主來迎落日前」△清規授戒ノ下ニ「誦ニ授歸依三寶語ニ三遍、歸依佛、歸依法、歸依僧云々」△一文不知ハ一枚起請ノ詞ニテ、四文拔タルノ結語ナリ。

○評ニ云、此文は例の虛誕ながら、畢竟は愚の一字をもて俳諧の洒落をいましめたる、虛中の實に眼をとゞむべし。されば此文をもて表類に置く事は、剃髪は佛に歸依し奉りて、今までの罪を懺悔

（一）「聖主」は「聖衆」の誤

念佛誦經のたふとき心ざしとは見えず。さりとて佛の道にうとき、三家村裏の入道にもあらず。さるを佛になれまどひて、茶湯をそなへ團子をかざる人は、此輩を見ては外道といふ也。吾仲よく此心をたもつやいなや。よくたもつべし。今日得度して百阿と名づくることは、本願不思議の四十八をあはせて、我朝の錢の數なれば、四文ぬけたる百阿にして、そこの聖人の仰せられし愚禿の二字にもかよひぬらん。無智無能の人となりて、世の數ならぬ身と思ふべし。かならず人を慢ぜざらんには、人に慢ぜらるゝ事もなからん。さてこそ世の中の人には葛の松原と、西行法師の面白がられしも、節供の朝寐にたばこ吸ながら、つや／＼此歌をばよみけらし。されども雪のさむき夜は妻子のそひ寐も戀しかりけむ、ひとへにするすみならぬこそ、風雅にはいとたふとけれ。梓弓のそりてかたくなる心も、青柳のなびきてやはらかなる心も、世にあれば人の難ずまじきにもあらず。百阿よく此さかひを知りて、俳諧の自在にあそぶ時は、聖主（一）來迎のゆふべの雲に、歌仙音樂の往生をとぐべし。永く三寶に歸依し奉りて、一文不知の愚にかへるべき

和漢文操 卷之四

○奏表類

剃髮の文

東花坊

柳後園の吾仲剃髮して、遠く恩愛の道をはなれ、近く無爲の樂に入らんとす。是よし人間の始終といふべし。そもそも三界の輪廻とは、人はくるしみを見てたのしみと思ひ、佛のたのしみ給ふをば凡夫はくるしき事と思ふ。こゝを顚倒とも流轉ともいへり。されど此世に輪廻なき時は、人間のねばりなし。そのねばりなき者を俳諧師とはいふなるにや。その俳諧の講中に、善男善女の沙汰は聞かず。大工あり商人あり。百姓もあれば武士もありて、醫者はいそがしく山伏はするどに、貧者はすきにして福人はきらふ。それが中より、俳諧の道心は茶の八德にいたれるもあれば、墨の十德にやつるゝもあれど、

○評ニ云、此序は例の虚誕ながら、愛の一字を形容するに、面には牡丹の富貴に敵し、心には百合の貧閑を憐む。さるは榛公の本情にして、源氏をつくさずといふ所なし。これらを虚實の鑑にして、つれ〴〵の意地をも之にしるべき也。作者は越の石動に住む。東は姓にして千葉氏なり。みづから白梅溪と標號す。闇記不忘の博士なりとぞ。求韻序ドに互見すべし。

(一)浮舟の亡姉君、薫の情人
(二)「長恨傳」は「長恨歌傳」
(三)「虞美人草行」「古文眞寶前集」にあり

末ヲ慕ヘルハ、姉君(一)ノ面影ニ似タレバトゾ。手習ノ君ハ浮舟ノ事也。宇治十帖ニ散在セリ。▲西京雜記ニ「花之奇者有ニ姚黄魏紫ニ」▲李唐ハ玄宗ノ比ニテ、牡丹ニ千金ノ賣買アリトゾ。▲長恨傳(二)ニ「玄宗得ニ貴妃ニ疏ニ溫泉ニ。詔賜ニ澡瑩ニ。既出レ水。體弱力微。若レ不レ任ニ羅綺ニ云々」○遍僧正ノ歌ニ「蓮の葉のにごりにそまぬこゝろもて何かは露を玉とあざむく」▲史ノ司馬相如ガ傳ニ「盡賣ニ車騎ニ買ニ酒舍ニ、令ニ文君當レ壚。相如自著ニ犢鼻褌ニ滌ニ酒器ニ云々」▲源氏初音ノ巻ニ末摘ノ事アリ。「きぬどもゝえぬひ侍らでなむ。かはきぬをさへとられし後はさむく」とあり。「按ズルニ、此對ハ和漢ニ好色ノ侘ナガラ、壚トハ賣場ノ土竈ニテ、赤前垂ノ様ヲ云ヘル、假著ト前垂ノ字對ハ更ニシテ、和漢ニ文對ノ絶妙ト稱スベシ。△源氏ノ玉鬘ニ「年月へだたりぬれど、あかざりし夕がほの露わすれ給はず」とあり△兼好法師ノつれ〴〵艸ニ「萬にいみじくとも色このまざらん男は玉の巵のそこなき心地ぞすべき」「按ズルニ、此結語ハ「玉巵無レ當」ト云ヘルヲ、有レ色ト飜轉セシハ、影畧モ互照モ例ノ言ハズ、文ニ双開ノ輕妙ト稱スベシ。●美人艸ハ說多シ。曾子固(三)ガ詩ノ註に、「虞姬身刎。其墓上艸。人呼爲ニ美人艸ニ云々」

露而、▲玉妃歷覆湯上之面許、殆不恥千金之價焉、從是風通我朝止乎、元祿之後者被壓百菊之名而、牡丹者如有而無也焉。增而不染此世之濁、蓮花之有佛嗅焉者、愛情者例之可誠虐哉。左在則所我鄕之榛巢子者、離蓮與菊之古風而、園植色色之百合而、且培兮夕灌兮、不作十二一重之襟矣共、紅白自有品而、如頭插兮如居眠兮、隨風而有爲彼地等向了者、從本謂此花之愛相矣。爾有則榛公之所好者、和漢尋佗數奇之色而、彼方慕▲卓文君之前垂居、此方憐▲未摘花之假著焉。左有者所謂年月爲經了共、露不忘給、弗其人之本情焉耶。但者效或法師之物數奇而、可謂玉巵之有色隱者矣乎。

百合不誇蘭菊名　自態巧藥似傾城
假令唐有美人艸　爭若此花含愛情

○註ニ曰、△愛蓮說ニ「水陸艸木之花可愛者甚蕃云々」「按ズルニ、梅櫻ヨリ水仙ニ至ル迄ハ、其花ノ面影ニ寄セテ四季ノ愛情ヲ書盡セル、發端ノ意味ヲ稱スベキ也。▲源氏ニ薰大將ノ浮舟ノ行

なむおぼえける」△烏玉ハ夜ト云ヒ闇ト云ヘル枕詞ナリ。去ルヲ眉墨ノ詞ニ寄セタル、俳諧ノ微中ヲ稱スベシ。此等ハ句對ニ似タレドモ、是ヲ文對ト知ルベキナリ。△芋頭ヲ鶉ト成シ、草餅ヲ鷹ト成セルハ、中古ノ檀林噺ニ在リ。物語ノ二字ノ起結ナリ。△噓艸トハ百題ノ用ナガラ、噓ノ一字ヲ夜寒ノ惣結ト成セル、文ノ斷續ヲ見ルベキナリ。

○評ニ云、此序は題號のこと〴〵敷に、一册の模樣の手輕なる、これを茶人は置あはせといひ、俳諧にはこなしといふ。まして一篇の稱する所は、九尾の詞の寓より、四季の化物のおかしくさびしき、まさに俳諧の百物語といふべし。作者は岩城氏にして、能登の七尾に住す。者來子は彼が標號にして、或は一鬼橋とも聞ゆ。しからば一籏の俳將といふべし。

愛百合序 並詩

東乙文

我聞、水陸艸木之花者、從梅也櫻之咲日、惜藤山吹之春而、愛牡丹則思芍藥居、愛菊則思水仙歷。左有者如薰大將之所慕手習之君、愛情者不忘其面影賦也。于然牡丹者被生達魏姚之家而、盛李唐之間也則、戻子之障子厭日居、蒔繪之簞司溺

し、百韻の巻に百品の情をうつさば、彼いふ九尾の野狐ならでも、七尾の夜遊にせむと也。そも〳〵風雅の變化を思へば、詩歌連俳のちまたにわかれて、帝の御目には龍田川の紅葉を錦と見給ひ、人丸はよし野山の櫻を雲かとなむ思へるより、連歌は烏玉のまゆずみを作り、俳諧は晝狐の人をばかさむとす。月の朧夜に猫の娵入も、靑田の曉に鴻の入道も、秋の芋頭を鶉と思ふは、檀林ばなしの古みなれど、冬の柳を雪女と見るは、腰の細ければさもあらん。されど俳諧の百物語は、身の毛もたちておそろしき、三面六臂の理窟なければ、灯心はへらさねど唯さびしく、夜は更るほど猶おかしく、今宵は噓艸に風ひかせて、百題のあらましに明行ぬ。

○註ニ曰、○赤人ノ歌ニ「あし曳の山鳥の尾のしだりをのなが〳〵し夜をひとりかも寐む」△奈良茶三石トハ祖翁ノ戯言ナリ。十論ノ法式ノ下ニ出タリ。▲殷紂ノ略史ニ、金毛九尾ノ野狐アリテ妲己ト化シテ國家ヲ亂セリト。細擧ニ及バズ。△古今集ノ序ニ「秋のゆふべ龍田川にながるゝ紅葉をば、帝の御目には錦と見給ひ」△「春のあしたよし野山のさくらは、人丸が心には雲かとのみ

○鹿嶋ノ言觸ノ歌ニ「ゆるぐともよもやぬけじのかなめ石鹿島の神のあらんかぎりは」▲智多ハ尾張ノ一郡ニテ、萬歳ノ出所ナリ。「按ズルニ、此一對ハ一篇ノ要文ニシテ、岩ト扇トノ不形ヲ云ヒナガラ、爰ニ此序ノ辭宜ヲ調ヘ、爰ニ此文ノ訴諧ヲ盡セル、字對句對ハ例ノ言ハズ、文ニ意對ノ絶妙ト稱スベシ。△事林廣記ニ繪ノ法格アリ。氣韻生動ハ六法ノ第一ニシテ、石老而潤ハ八格ノ第一ナリ。細學スルニ暇アラズ。△白馬ノ文章訓ニ、「俳諧ノ文章ハ無用ノ用アリテ令書訴狀ハ有用ノ用アリト云々」「按ズルニ此詞ハ文學ノ人ノ要言ニシテ、文章ノ意地ハ此間ニ知ルベキナリ。

○評ニ云、此序は我門の當用にして、一ニ見文臺の由來をしるし、百世に俳諧の調度たらんと也。文はその始中終の次第を見るべし。作者は尾府の名護屋に住す。張は姓にして土佐氏なり。先に八仙の撰者となりて、みづから八仙觀と稱す。和漢多藝の優人なりとぞ。

百物語の序　　　岩　司　鱸

頃は長月の木の葉ちりて、山鳥の尾の夜寒なるに、例の友達あつまりて、なら茶三石の恩報じに、一册の集を作らんと、其名を百物語といふは、四季の百題に百色の姿をあらは

に此文臺を作らせ、其繪は觀主に書せられしが、○岩は鹿島の言觸もおぼえず、扇は智多の萬歳もたゞず。ましてよ氣韵生動の法もなく、石老而潤の格もなけれど、彼いふ無用の用にして、取あへず今日の用をとゝのふれば、天下に一脚の文臺とはいふべし。

○註ニ曰○西行ノ歌ニ「玉くしげ二見の浦のかひしげみまき繪に見ゆる松のむら立」▲西行上人ノ住ミ給フ所ハ、二見ノ西吹ト云フ里也。岩ニ扇ヲ敷キテ文臺トセシ其跡ハ今ニ在リトゾ。△十論ニ「俳諧に三條の法あり。世情の人和は五倫の常法にして、おかしきは俳諧の名としろべく、さびしきは風雅の體としろべしとぞ」△論語ニ「繪事後レ素云々」「按ズルニ此二字ハ繪前生後ノ常ナガラ、此等ニ文章ノ斷續ヲ知ルベシ。△海松ニ蛤ハ硯箱ノ繪ナリ。然ルヲ兩用ニ書キタルハ、五老井ノ作ナリトゾ。硯箱ノ事ハ爲辨抄ニ在リ。文臺ノ圖ノ下ニ見ルベシ。○松梅ノ證文トハ、裏書ノ發句ニ「二見とは松の朝日に梅の月」トアリ。「按ズルニ此裏書ハ洛ノ柳後園ヲ始ナリト。去ルヲ五老井ノ云ヘル圖ハ「若松ニ朝日ヲ書クベケレト、彩色ナラネバ紛ハシ。二見ニ松ハ論勿ワシテ、梅ニ朧月ノ圖モアリテ、故翁ノ筆跡ナレバトテ、其後ハ松バカリモ書レシトゾ。

り侍りて、道に斷絃の歎を殘せりとぞ。

二見文臺繪序

張　升角

玉くしげ二見の浦は、伊勢の國の名所也。それを文臺の面に寫して、右には岩に注連をはり、左には扇に若松をかけるは西行上人の風雅をしたひて、我家の翁の物數奇なりとぞ。むかしより文臺の蒔繪には、柳櫻に金粉の霞をよそほひ、菊萩に銀玉の露を置しが、床に盜人の目をよろこばせ、倉に質置の心をなやませば、今は俳諧のありのまゝに、白木の黒繪をまなべとて、形は俎板にむかひてつく〴〵わびしく、足は海鼠をすかしてほとんどをかし。是よし俳諧の家法にして、例のさびしく例のをかしく、世情は例の白地ならんをや。さて繪の事は、祖翁の生前にみづから書給ふも三四あらん。今は武洛の寶物となれゝば、それを湖東の五老井に寫して、扇に梅を書たるも、海松に蛤を書たるも、其繪は世上に十ばかりもあらん。それに東花師の裏書あり、蓮二房のうら書あり。いづれも松梅の證文なり。享保のことし、卯月のはじめ、八仙觀に蓮二の駕をとゞめて、俄

に嫁入し給ふも、本より虚をもて虚ならねば、まして實をもて實ならんや。かゝる聖賢のあそびをさへに、今の人もいふてあそばざらんや。此故に此集のぬしも、春になりては櫻狩にあそび、夏になりては川狩にあそぶ。茸狩の比は牢人をあそばしめ、鷹狩の時は大名をあそばしむ。皆たゞ天のあそぶ物にして、貴賤貧福は人のくるしめるなりけり。

○註ニ曰、△逍遙遊ノ三字ハ莊子ノ篇名ナリ。逸註ニ「遊者心有二天遊一也云々」按ズルニ此序ハ東濃ノ芦文ガ翼集ニ、莊子ノ篇名ノ假テ四季ノ狩ヲ分タル、其一篇ノ序詞ナリ。翼トハ翼註ノ意ヲ運ベリトゾ。●詩經ニ「鳶飛戾レ天魚躍レ淵」▲列仙傳ニ「丁固學二仙術一化爲二白鶴一也」▲佛祖統紀ニ、觀音ノ美女ト化シテ馬郎婦ト成給フ事アリ。例ノ十九應身ナリ。

○評ニ云、此序は全く莊子が文法にして、草木鳥獸の名に寓せて遊の一字を形容せしが、丁固と觀音との似て似ざる、之を莊子が意地にして、筆端の鼓舞とは此事也。況や四季の逍遙に貴賤貧福の觀相を忘れず、遊人の苦樂をさばきたらん、例の諷諫は更にして、例に笑中の刀をおそるべし。撰者は文鑑に姓名ありて、かつて祖父翁にまみえ、獅子門の親友なりしが、享保のはじめ身まか

○評ニ云、此文はかの尼の自筆にて、湖南の百老館に祕藏せられしが、所々虫ばみてよみ難き事あり。されど此序の文勢を許せば、あながちに和歌のぬめりを求めず、發語より古詩をつみて、大むれ句對の法をもて其寺の風景を賦し、其人の風儀を稱す。まして玉くしげふたゝびといひ、足曳のやまずといへる、是等は俳諧の筆格にして、我家の荷擔人なればと、此文採に寫出せし也。誠に臙脂のねばらんには。作者は藤の爲相卿の母にして、安嘉門院の四條と聞えし二條家の歌仙女なり。

逍遙遊の序　東花坊

道に逍遙の二字あることは、それ〴〵の心に天遊ありて世を面白うあそばむと也。天は是をもて月にあそび、地は是をもて花にあそぶ。鳶と魚とは詩にあそぶ物也。しかるに野馬の風に狂へば、草喰ふ牛のあきて靜なる。虻はその尾にあそばむとすれば、牛のぬしはとまらせて打んとす。はたと打れてくるしからんは、あそぶ時の面白さにかへよ。其ぬしは其牛にはぢかれて、ふたつなき鼻のかけたるためしも、愛する事の過たらんにを。遊ぶにもほどあれば愛するにもほどあるべし。むかし丁固は鶴とあそび、觀音の花

の道をてらし、心の堅固なる色は、あしびきのやまず上人のあとを藍よりも染まして、心をみがける德たかく世に聞えたればにや、深く浮世のちりの底にうづまれたる心ながらも、ねがはしき事をやまと歌によみて、蓮の上の露はかりも、消えなむ後に半座をゆづり給へといへるなるべし。

○註ニ曰◎文選ニ「越鳥巣二南枝一胡馬嘶二北風一云々」此意ハ故郷ヲ思フコトナリトゾ。△「鳥ガ鳴」モ「玉鋪」モ東ト都トノ枕詞ナリ。枕詞ノコトハ道理ノ有無ヲ論ズベカラズ。故實トハ此類ナリトゾ。○滿沙彌ノ歌ニ「世の中を何にたとへん朝ぼらけこぎ行くふねのあとのしら波」▲水相觀ハ、觀經二十三觀ノ一ナリ。月光童子ノ故事アリ。細擧ニ及バズ。▲高僧傳ニ「惠遠法師勉二六時禮讃一云々」其後ニ、善導大師禮讃ノ偈ヲ集メ給ヘリトゾ。△阿彌陀經ニ「七重行樹皆是四寶云々」同經ニ「有二七寶池八功德水一云々」△無量壽經ニ「隨應而云々」同經ニ「百味飲食自然盈滿云々」○「玉櫛笥」ハ蓋ト云ヒ、足曳ハ山ト云ヘル、例ニ和歌ノ枕詞ナリ。△荀子ニ「學不レ可レ已。青出二於藍一而青二於藍一氷出二於水一而寒二於水一」

奉二珂憶上人一歌の序

阿佛尼

●北の駒は北の風にいなゝき、南の鳥は南の枝にすめることわりにや、西方の仟（此次二字はど消えて見えず）（仟の字は行の字とも見ゆ）阿憶上人、鳥がなくあづまをいとひ、玉敷の都の西にすめり。そのすめる所は空也上人の古き跡にて、木上山口人寺（寺の名にや消えて見えず）といふ古き名あり。しかのみならず、骨と皮とに身のなるまでつかへ給ふて、やがて蓮に有漏の露をやどし給ふ。本尊は法輪の闍梨の許にありしとゆづり給ふ。前は大井川にくだす筏のあとの白波を見て世の中をあはれび、後は嵐山に入りぬる月の、あとの雲にやみなる身をなげき給へり。水相月輪の観念のたすけおほき所をえらびて居給ふなるべし。善導大師のあとをしたひては、六時禮讃かくる事なく、山にあそぶ鳥水にすめる魚、これを見て七重行樹八功徳地に縁をむすべり、法然上人のながれをたづねては、六字名號おこたらず。是を聞て山に木高く山がつ里にたがやす。里人随應而現自然盈滿を得む事に思ひをかけたり。まして心ある人は、上人の風を聞せて心ざしをかたくする也。誠に戒の清淨なる光は、玉くしげふたゝび大師

○評ニ云、鑑亭は越の新潟にありて、北七里が別莊なり。しかるに其時の草稿をとゞめて、板にゑりて聯となせるは東濃の野航にして、柳雪堂の珍器とす。しからば此聯の世に二板ありて、百世の異論もむづかしからんと、こゝに其故を記するもの也。

五字の聯

線香に眠るも　猫のぼたんかな　西花坊

分別三十棒

○評ニ云、此聯は備中の倉敷にありて、素秋亭の茶所に掛けたり。さるは先師の莊子を論じながら、其兄の露堂と禪法の商量ありて、此一句に說破せられしが、今の五字を題にして、一枚の聯となせる、これらや禪寶の座右銘にして、遮箇の子個を打殺すといふべし。此聯の主は小野氏にして、家々公領の長なりとぞ。

○序の類

(一)堪の字を分つ
(二)忍の字を分つ

堪忍の聯　字訓詩　　張昇角

(一)土ははなはだ馬にふまれて　馬場の櫻の日は長閑なる。
(二)人は心にやいば添ふれど　池の柳の氷とけつゝ。

○評に云、此詩は字訓の格にならひて、一三を起語となし、二四を結語となす。起句の蹈おとしは此故也。これらを大和の新格といふべし。作者は文臺の序に名錄あり。

鑑亭の聯　東花坊

山は遠ければ花と見て雲しづかに
水は近ければ月を得て風すゞし
　郭公の夜
　　是は鑑亭のあそび也
　時雨の日
主も其水に似て寛仁ならば
客も其山に似て悠然たらん
　　是は鑑亭のまじはり也

若葉摘宛桃于萌
八十年老亦待春
阿佉

○評ニ云、此聯の序は簡古ながら、例に俳諧の意地ありと稱すべし。誠に藥甕の一字題は杜律見題減藥甕文にもあらず質にもあらず、人の死生の大事にのぞみて、周と廊とのごとき木と瓜とのまぎれあらんは、無用の中の無用にして、商家の符帳に似たらんもあやし。しかるに大小の二字をのべて、楚語の無用にあそべるは、例に風雅の文なるより、無法に有用の質なからんや。これらに文章の優游をしるべし。演連珠とは題類の一名也。格は文選の陸士衡が文に見るべし。今の序者は武藤氏にして、尾の城下に住す。反裔舍はその別莊なりとぞ。

關口の聯

物いへば唇さむしあきの風
芭蕉老人

○評ニ云、此發句のはじめは、唐紙の三牛なる物に書きて、芭蕉庵の柱かくしなるを、洛の去來子が物數奇より、落柿舍の聯となせるよし。祖翁の一行物といひて、其類は世にまれなるべし。

風流となせり。其品は經書の一對か詩文の一聯かを板にえりて左右の柱に掛くる故に、略して聯とはいふなるべし。されど今の世は二枚にかぎらず、一枚の板に一聯の語あらんも、一句一章にして五字七字あらんも、すべて聯とはいへりけり。しかるに月次の大小を板の表と裏とに銘して、それを大小の額といひ、家々の當面にかけ置く事は、いづれの時の才覺にやしらず。予かつて風雅の物數奇を思ふに、薬嚢の題の一字なるはあやしく、大小の額の二字ならんはをかしと、摩訶と阿佉との梵語を題し、其下に胡粉をもて其年の大か小かを、和にても漢にても一方をつくりて、彼いふ聯とはなせりけり。さるを文操の選場に傳ふるに、文選の連珠も文格に似たれど、それを操題にあげたればと、左にいふ大小の吟をもて、初めて聯類と題せる、其を此集の操なればと、和漢に新格の當用を稱して、反畨舍のなにがし序する事しか也。

摩訶

一二りんしろく咲きけり　　菊の霜

(一)一、二、四、六、九、十一の六ケ月を藏せる也

知ラバ、風雅ハ今日ノ優游ナルヲ知ルベシトゾ。

○評ニ云、此一巻は先師の滅後に蓮二と白狂との兩吟也。さるは此時の文操に、大和聯句の鑑なればと灯花詩叢の聯句をすぐりて、章句にはおほく其詞を摘めり。此故に折ごとには章句と對句とに入替れり。芋頭叟とは蓮二の聯句名にして、橘尼子とは白狂が童名也。さるは生質の柔和なれば、先師はつれに尼の名をよびて、其後橘の字をそへられしは狐と橘尼との通稱なるよし。彼は壯年より聯句に名ありて、玉をくだき錦をさくことは、其傳にいへる賛詞也。委曲は文鑑の傳類に見るべし。

○聯の類

大小の聯 並序

藤　巴　雀

聯ははじめ門榜にして、かならず左右の柱にかけしを、趙宋の比の物數奇より、横に方なるを額といひ、竪に長きを聯といひて、佛閣神館の莊嚴をなし、野店山莊の

ノ霜ハ古歌ノ裁入ナリ。但シ三日ニ二星ノ如キ音訓ノ附合モ亦有ルベシ。强ヒテ二星ト和訓スベカラス。日星ハ例ノ假對ナレバナリ。

▲此聯ハ句作ノ奇絶ト云ハン。晨鐘ニ百八ノ八ヲ殘シテ、東白ノ樣ヲ云ヘル、蘆ノ穗ハ橋ノ顧ナリ。增テ其對ノ十ノ字ハ時深ノ切ヲ以テ平音ト成セル、此等ヲ聯句ノ才覺ト譽ムベシ。但シ「晝レ花不レ晝レ香」ト云ヘル古詩ノ詞ヲ轉ジナガラ、白晝ノ二字ニ光彩ノ働ヲ稱スベシ。

▲此聯ハ名殘ノ曲節ニシテ、顧ハ御所ノ遊宴ナリ。世ニ好色ノ徒人ヲ箒ト云ヒ、藥鑵ト云ヘルハ、歌舞ノ地ノ風言ナリ。源氏ニ匂宮ナラバ樣字ニ俳倡ヲ盡セリト云ハン。佐殿ハ賴朝ナリ。宮ト殿トノ字對ヲ稱スベシ。蓮生坊ガ鉈ノ事ハ、小原問答ノ要義ニ見ルベシ。

▲此聯ハ、鎌倉ヲ顧ミテ當時ニ太平ノ結文ナリ。柳箱ハ禮器ニテ、重ト半トニ吉凶ノ沙汰アリ。然ルニ此對ヲ穿鑿セバ、柳箱ハ柳即チ箱ニシテ、依主ト自業トノ釋文ニ據ラバ、花筏ニハ對スベク、花幕ニハ對セネド、我門ノ俳式ニ、月花ノ句ハ指テ沉吟セズ、一座ノ首尾ヲ先トスベシ。然レバ擧句ハ勿論ニシテ、其日其時ノ用ヲ知リテ法ニ泥マヌヲ時宜ト云ヘバ、爰ニ俳諧ノ世法ナルヲ

藤鞭、火桶、頼政ト云ヘル四品ノ題ヲ入レテ一首ニ讀ムベキヤノ仰ヲ蒙リテ、「宇治川の瀬々のふちぶちおほければ氷魚(ひを)けさいかによりまさるらむ」ト取アヘズ讀メリトゾ。つれ〴〵草ニ「右大臣殿へ追儺(つゐな)の儀式を尋ねたれば衛士の又五郎を師とするにしかずとぞ」此等ヲ三字對ノ奇絶ト稱スベシ。

▲此聯ハ、草紙ノ詞ヨリ花ノ杖ニ文(ふみ)ヲ附クルハ、全ク禁庭ノ顧ナリ。然ルニ文素ノ一格ハ、文彩ニ色字ノ假對ナガラ、粉地ノ素練ヲ倣ニシテ、意對ノ働ヲ稱スベキカ。先素ノ二字ハ周禮ノ詞ヲ(七)轉ズ。論語ノ朱註ニ見合スベシ。

▲此聯ハ全ク俳諧ニシテ、嫩鑑ニ母衣(ほろ)ノ附合ハ字對ノ中ノ意對トヤ云ハン。然レバ顧ニ鑑ノ一字ヲ寄セテ、親闇ハ古歌ノ裁入ナリ。(八)親武闇光ノ輕重ナリ照紹ノ字對ヲ稱スベシ。

▲此聯ハ、和漢ヲ錯綜シテ別ニ一格ノ働アリト云ハン。史記ノ列傳ニ「飛鳥盡良弓藏」トハ韓信ガ武功ヲ評シタレバ、月ニハ前ノ光ノ字ヲ顧ミテ、聯句ニ附心ノ奇絶ト云ハン。増テヤ古語ヲ飜轉シテ、鳥ノ藏ルヽトハ夕昏ノ會釋ナリ。惣ジテ故事ヲ採リ古語ヲ摘ム事ハ、此働ニ倣フベキナリ。鴻

(七)禮記の考工記に「繪畫之事後素功」

(八)「子を思ふ道にまどひぬるかな」の歌

（六）「苛政猛於虎」

ノ大和風ナリ、去レバ佛ノ功德ヲ讃シテ、譬ヘバ蝶ノ花ノ香ヲ嘗ルガ如ク、衆生ハ其德ニ潤ヘドモ、曾テ其跡ヲ見ズト云ヘル、遺教ノ意ヲ摘ミタルナリ。但シ代官ノ願ニ平家ノ衰ヘヲ附ケタルハ、家語ニ苛政（六）ノ諷詞ト知ルベシ。

▲聯ハ十成ノ俳諧ニシテ、佛前ノ供物ニ箸ヲ置キタル彼岸ノ殊勝ヲ崩セルナリ。拜ノ一字ニハ作者ヲ看破スベシ。彼岸ト節供トハ時候ノ對ナガラ、爰ニハ團子ヲ彼岸ト云ヒ、茅巻ヲ節供ト云ハンガ如シ。然ルニ團子ト蚌腸トハ、此類ヲ指テ名字ノ對ト云フ。去ルハ溫飩粉ヲ撮入レテ蚌ノ拔身ニ似タルヨリ、其名ヲ蚌腸汁ト云ヘル、上﨟ノ詞トゾ。化ストハ「雀化レ蛤」ト云ヘル月令ノ詞ヲ假リテ、粽ノ枯回タルヲ雜煮ニスル事モ、獨法師ノ小鍋立ナラン。願ハ例ノ釋教ナガラ、蝶ニ佛前ノ飾ヲ見ルベシ。

▲此聯ハ前ノ貧樂ヲ願ミテ此體ヲ例ノ地ト知ルベシ。嚼レ老ト和歌ノ詞ヲ摘ミ、爲レ倡トハ滑稽ノ辨利ナリ。然レバ此地ハ曲節ノ會釋ニシテ、一折ノ間ニ一兩所モ有ルベシ。

▲此聯ハ滑稽ノ願ナガラ、一巻ノ曲節トヤ云ハン。或日殿上ノ戯ニ源三位ヲ嬲ラントシテ、宇治川、

（五）「世にあふ坂の關はゆるさじ」の歌

レバ對ノ稱スル所ハ、茶字ト木綿トノ俗談ヲ用得テ、願ハ但シ牢人體ト見ルベシ。

▲此聯ハ一卷ノ奇絶ト云ハン。鷄偽ニハ古歌ヲ摘ミ、猿望ニハ古詩ヲ採ル、増テ桂川ノ用ヲ評セバ、歌仙ハ例ノ二花二月ナガラ、或ハ見渡ニ月ヲ含メケル桂ノ餘情ヲ稱スベシ。去レバ名所ト云ヒ人名ト云ヘド、偏旁ニモ對ノ心得アリテ、關ト桂トハ絲ニ圭ヲ對シ、寺ト川トハ其名ノ寄ナリ。譬ヘバ關寺ニ嵯峨ト對センハ中古ノ麁學ト云フベキニヤ。願ハ小町ニ逢坂ノ關ナリ。

▲此聯ハ連歌ノ漢和トモ云ハン。二句共ニ詩歌ノ詞ヲ摘ミテ、願ハ人望ノ限ナキ觀相ナリ。此等ヲ聯句ノ地ト知ルベシ。

▲此聯ハ俳諧ニシテ、衛士ノ油賣ヲ待ツ事ハ、世ノ式モ衰ヘテ皇居ノ荒行ク樣ヲ云ヘル、例ニ前句ノ願ナガラ、待ノ一字ニ作者ヲ稱スベシ。本ヨリ衛士ト代官トハ官職ノ品ナガラ、字意ノ配ヲ稱スベク、油ト米トノ附合ニハ、俳諧ノ笑言ヲ稱スベケン。但シ御年貢ノ前ニ米ノ買賣停止ノ制札ハ、代官所ノ定法トゾ。

▲此聯ハ、一轉シテ是ヨリ二折ノ曲節ヲ盡サン爲ナリ。平家ニ釋氏ハ氏族ノ意對ニシテ、花蝶ハ例

(一)易の卦象☲

(二)郷黨篇に「不レ撤二薑食一」

(三)「季文子三思而後行。子聞レ之曰、再斯可矣」

(四)「爰有美玉。韞匱而藏諸。求善價而沽諸」

トナリ。

▲此聯ハ謎文ナリ。離(一)ハ板橋ノ中斷ニ喩ヘ、肺ハ五臓ノ金ヲ貯フ。離火肺金ハ五行ノ意對ニシテ、臓ト藏トハ通用ナガラ、卦ノ字ニハ奇絶ノ對ト云ハン。然レバ例ノ顧(かへりみ)ハ、杜若ニ橋ノ一字ヲ寄セテ、卦ノ名ニ假橋ノ姿ヲ見ルベキナリ。

▲此聯ハ假對ナガラ、風月ニ大和ノ働ヲ稱スベシ。然ルニ古風ノ薑(はじかみ)トハ、論語(二)ノ詞ニ實ヲ認メタル、儒者ノ養生ヲ笑ヘルナリ。掘(ほる)ノ一字ハ筆耕ノ語勢ヨリ、當季ニ句作ノ働ト云ヒ炊掘ノ意對ニ聯句ヲ盡セリト云ハン。顧ハ分限者ノ月見ナリ。

▲此聯ハ俳諧ニシテ、稱スル所ハ一三ト山澤トノ字對ノ配ヲ見ルベキナリ。論語ニ「季文子三思」(三)ト云ヘルヨリ、句情ハ無道ノ世ヲ隱レテ螃ノ如ク穴居ストゾ。邦無レ道則隱ルト云ヘル字毎ノ裁入ヲ稱ズベシ。顧ハ机右ノ山雀籠ナリ。

▲此聯ハ古語ノ裁入ナリ。論語ニ「求二善賈一而沽諸」(四)トアリ對ハ小町ガ俤ナリ。卒都婆小町ニ「痛はしやな小町は、さもいにしへは優女にて」トアリテ、首ニ嚢ヲ掛ケタル乞食ノ様ヲ云ヘリ。然

身貧常嚼老　口滑頓爲倡

題嫐源三位　式師又五郎

捧文梅早咲　先素竹初粧

娵鑑照親闇　母衣韜武光

烏藏三日月　鵲渡二星霜

終鐘百白盧種　橘尼子　盃十畫菊香　芋頭叟

匂宮謗箒様　佐殿惜鈍坊

日本治花幕　春初調柳箱

註ニ曰▲發端ノ一聯ハ全ク大和ノ新格ニシテ、郭公ニハ和歌ノ情ヲ結ビ、杜若ニハ俳諧ノ姿ヲ寫ス、二様ハ風雅ノ本懐ト云ハン。本ヨリ漢家ノ例ヲ見ルニ、生類ト植物ノ一對ハ、文法詩格ノ常ナルヲ、何トテ中古ノ聯句ヨリ古人ノ法格ヲ失ヒケン。然レバ今ノ稱スル所ハ、郭公ノ松ニ杜若ノ鶴ト當季ノ花鳥ヲ錯綜シテ、郭杜公若ノ字意ヲ配リ、獨雙ノ數量ヲ合セタル、一巻ハ殊ニ效ヘ

之所レ謂花鳥之名ニ而、謂下爲二學文一之始終上矣夫。

聯句歌仙行

郭公松獨立　芋頭叟　　杜若鶴雙裝　橘尼子

橋落纏離卦　　家榮調肺藏

玉炊新月芋　　筆掘古風薑

始　噫一驚山雀　橘尼子　　思三隱澤螃　芋頭叟

沽諸茶宇袴　　痛也木綿囊

闕寺雞無僞　　桂川猿有望

顧身浮艸佗　　濺涙淺茅荒

衛士待油賣　　代官停米商

平家花將散　　釋氏蝶先嘗

中　彼岸拜團子　芋頭叟　　節供化蚌腸　橘尼子

有歌仙聯之沙汰與所。次謂去嫌之古式者、所謂地名人名氣植之類者都可隔二聯、同字者量字門之輕重而可隔十句廿句共、不曉其法其式之道理則、如童部之習心經、欲覺無的焉。今止將爲大和之聯句爾者、尤不替連俳之式、分四折八面之表裏而、可效四花八月之法式矣乎。此故今之歌仙爾者、以始中終成折附止矣。四十四歷五十韵歷。效此例些。爾有則曰連歌之漢和居、曰俳諧之和漢共、式者可任其座之宗匠哉。乍去擔行國華對類初學士歷、偏參僧歷、爲著述而知平仄事者、殆無所越聯句物。唯從東冬至咸巖迄、姿情之鹽梅、漢尋城南兮倭搜城西兮、效韓孟江策之達者而、視儒書兮眇佛經兮、混尙覺切々之故事古語、些知和訓漢音之可假用烏於與松待之譯焉則、知盡平聲之韻字則、上去入之三韻者有我不知而知之理焉。左有人者不及縱夫謂學句之果敢遣矣。斯而知其學之用與無用了則、知詩歌有今日之優游、知聯句有姿情之品而、誠被謂和漢之才人矣。然則聯句之爲用也、識論語

（六）「遂」ハ「逐」の誤

了共、不運其題其題之情。譬則如以牛對僧以松對鶴、句對字對者不及言、意對知聯句之作不作了哉。然則月爾者有日星之體而、花爾者有枝葉之用則、倭如玉椿與糸柳、漢如山色與水光、尤可以鳥之聲對梅之香了則、分部隨類而爲附分厘毛焉、某所可謂聯句之詮用庫哉。于然對十二門之字耳則、從乾坤時候之二門、不及器財食服之差別、態藝虛複者似有名而無形而矣。今也我家之所建者、每句每字分姿情之品而、遂（六）一定附方之法。譬則以古風對新月、此類曰文字之姿矣。字面者對風月了共、古風者風俗而弗天象故也。譬則以蚌腸對團子、此類曰文句之情矣。字面者全不對了共、蜂腸者言麥粉之摘入則也。此外隨字門之輕重而不離姿情之二事者、爰以郭公之一卷可知大和之几例也。抄謂古聯句之法者、不知爲孰代誰人之掟、凡從五十韵至百韵、然共今之聯句者、長了則乏敷韵礎、自有自己之曖焉。先者從二十四之短歌行、用三十六之歌仙行而、長共唯可限長歌行矣乎。聞則五山之標式爾歷、

從是江西湖南之間令遺聯句之名譽與所。白龍子與者先師之聯句名也。其後元祿之始也焉、在武江之芭蕉庵而、素堂與故翁夜話之次、撰三日月日記迚、往古評漢和之爲不自在、當時論聯句之爲不吟味而、其夜試有一聯之隔對。唐土有芳野、櫻將妬海棠（山素堂）楊州無伏見、桃被惡山薑（白龍子）

○遺稿ノ奥書ニ、此一聯ハ大和聯句ノ濫觴ナリ。此故ニ古今集ノ俳諧歌(五)ヲ摘ミテ、唐土ノ芳野トハ云ヘリ。本ヨリ聯句ノ結構ハ、和漢ノ兩用ヲ通ズベキ爲ニゾ、山薑ハ本艸ニ出テ、白朮ノ一名ナリ。楊州ノ産物ニテ、桃李ヲ忌ム物ナリトゾ。然レバ此對ノ稱スル所ハ、唐楊ノ國名ヨリ土州ノ地形ヲ對シ、增シテ山海薑棠ノ一名ニ用ヲ附分クル、此等ヲ意對トモ字對トモ、是ヲ以テ定規トセバ、大和ニ聯句ノ鑑ナラントゾ。彼記ニハ漢和ヲモ論談セリ。

如斯者我家建詩聯句之一格而、和漢可通假名眞名之用爲也。率哉謂大和聯句者、其樣似鳳城之五言聯而、全用我朝之俗談居、其言學羅山之七字城而、爾亦不爲者也。其意如何也則、聯句者本出詩之變律而、對其字其字之姿

（五）「もろこしの芳野の山に籠るともおくれむと思ふ我ならなくに」

(三)韓退之、孟
結然

(四)足利時代の
禪僧。

言七言者勿論而、爲言合上與下則漢曰聯句居、和曰連歌歷。古集之證文歷數多也。左有虖篡爲成一卷物者、但可謂自韓孟(三)始爾哉。乍左有如鬪鷄納涼者、連續一題之意而、或者成百韻或成五十韻。言則謂兩吟之詩矣。其後我朝如江心策彦者、顧前起後而、爲似今之連俳共、譬則如以秋月對山堂以梅(四)花對荊棘、唯合十二門之名目而、物無體用之差別者、字門算暗許之黑豆而、謂詩歌無姿情之論矣夫。先師大昔所遊洛之相國寺日、有一聯之名對。鳳兮桐倒掛。章知客 蝶也變莊周。白龍子 此一對者膾炙其世而、稱倒掛與莊周之意對止乎。

遺稿ノ奥書ニ、倒掛トハ、東坡ガ詩ニ出テ、鳳ニ似テ小鳥ナリト、常ニ桐ノ木ニ遊ビテ、身輕クシテ倒ニ掛ル。此故ニ名トセリトゾ。莊周ハ、齊物論ニ、寐レバ蝶也覺ムレバ莊周也ト云ヘル。然レバ莊周ハ即蝶ナルナリ。變トハ變化成ニ胡蝶ト云ヘル、例ニ古語ノ裁入ナリ。此對ハ、五山ノ會合聯句ニ、一座ノ學匠モ附ケアグミシテ、此對ヨリ名ヲ稱シテ、世以テ變蝶子ト云ヘリトゾ。

し侍れど、老のにげなき口ずさみなれば、我名を例の華表人にゆづりぬ、とあり。おもへば文鑑に萬歲行のごとき遺稿に、この類の文章はおほく狂名を題せられしが、先師に十名の其一なるべし。

△大和聯句序並歌仙行　　渡白狂

詩歌者夫風雅之花而、所謂詩變而爲騷、騷變而爲詞、皆可歌梟則、詩與歌者、從音訓之違、永詩了則曰作居、永歌了則曰訓歷。總者道之優游而、遊俗談笑語共、不忘意之風雅之謂也焉。左在則其詩有聯句而、其歌有連歌事者、從詩歌之獨有面白歷、我云人云、聯其時之意也則、可弗諸越之人與大和之人爲物語詩歌矣耶。扨社（一）月夜兮花旦兮、見給侍人之心心而、知召賢敷愚也梟矣、貫之之詞歷爲此意矣乎。抑原聯句之始則、或曰上則唐虞（二）之賡歌下則漢武之栢梁共、或曰聯句古無此法、自韓愈孟郊始共、或曰諸公已有聯句之詩、謂自韓愈始者非也共、於玆思聯句之濫觴則、如蘇軾與蘇由之應對、或者四言或者六言、五

（一）古今集の序の詞
（二）虞書「帝庸作歌曰、云々歌曰、股肱喜哉、元首起哉云々皐陶拜手稽首颺言曰、念哉云々、乃賡載歌曰、元首明哉、股肱良哉云々」

ハ、漣波ナリ。然レバ漣波ノ拍子ヨリ、さらばト返辭ニ響カセタル、文ノ起結ヲ稱スベキナリ。
○西行ノ歌ニ「世の中をいとふまでこそかたからめかりのやどりををしむ君かな」按ズルニ此歌ハ、新古今ニ詞書アリテ、江口ノ君ニ逢ヘル時ノ贈答ノ歌ナリトゾ。△源氏ノ夕貌ニ「むれ〳〵しからぬ軒のつまごとにはひまつはれるを」トアリ。○古今ノ旋頭歌ニ「しろく咲けるは何の花ぞも」ト讀メル、是モ四六ノ相詞ナリ。但シ此花ハ梅トモ夕貌トモ二説アレド、夕貌ノ方ニ定ムベシトゾ。

○評ニ云、此篇は琵琶行の面影ながら、文は楊貴妃が榮落によせて、所々に長恨歌の詞おほし。しかるに一篇の大格は、倭文に長歌體ながら、今は起結の斷續にいたりて、七々の語路に轉換せしは、小謠淨瑠璃の拍子をぬきて、全く俳文の新格と稱すべし。或は篇中の廿一句に、催馬樂の例をかりて、假名に眞名字を附けたるは、文章に鎖詞の常ながら、倭文に訓を假る例としるべし。さて此行の奥書に、難波に潮江のなにがしといふ者ありて、都がよひの雨やどりに、此女を伏見に住せたるが、墨染は彼が古郷なるよし、今のありさまを此行につくりて、一軸の記念に殘

「なよびたかぶめてとを（十）はた（二十）みそ（三十）よそ（四十）などかぞふろさま、いよのゆげたもたど／＼しかろましう見ゆ」とあり。●長恨歌ニ「梨花一枝春帶レ雨トハ美人ノ愁フル姿ヲ云ヘリ。梨ト無トノ假訓を稱すべし○空蟬ノ卷ノ引歌ニ「いよの湯のゆげたの數は左八右は九中は十六」とあり。「按ズろニ此二句ハ、前ニ三十年ノ響アリ、四十ト余所トノ訓ヲ假レル、此等ヲ鎖詞ノ絶妙ト稱スベシ。○「難波女の芦のしの屋のしのすゝき一夜のふしも忘れやはする」按ズルニ、此詞ハ、難波ノ遊女ヲ請出シテ今ノ伏見ニ住マセケン。河竹ハ例ニ節ノ鎖ナリ。▲明皇雜錄ニ「皇與ニ貴妃ニ綵戲將レ北。惟重四可レ轉。上連呼號。骰子轉成レ四上。悅賜ニ四緋ニ云々」重三重四ニ朱字を用フルハ、此時ノ賜色トゾ。「按ズルニ芙蓉以下ニ四所ノ黑圈ハ、總テ長恨歌ノ裁入ナリ。其下ニ見合スベシ。但シ草ノ露ニ玉ト結ビテ「魂魄不レ返レ夢」ト云ヘル、裁斷ノ自由ヲ稱スベシ。△しのにトハ和歌ノ詞ナリ。しきりトモしげきトモ兩用ナリ。▲馬嵬原ハ楊貴妃ガ最期ノ地ナリ。天寶遺事ニ委シ。按ズルニもない以下ハ總テ双六ノ相詞ナリ。或ハ相手ノ石ヲ問フニもないか原トハ、最早ナイト云フ事ナリ。或ハ四仕（して）三迷（まよふ）トハ、四三ニ三ノ手ノ多キ時ナリ。或ハ三ノ丁目ヲ指シテ三三並（なる）ト

ハ、漣波ナリ。然レバ漣波ノ拍子ヨリ、さらばト返辭ニ響カセタル、文ノ起結ヲ稱スベキナリ。
○西行ノ歌ニ「世の中をいとふまでこそかたからめかりのやどりををしむ君かな」按ズルニ此歌ハ、新古今ニ詞書アリテ、江口ノ君ニ逢ヘル時ノ贈答ノ歌ナリトゾ。△源氏ノ夕貌ニ「むれ〱しからぬ軒のつまごとにはひまつはれるを」トアリ。○古今ノ旋頭歌ニ「しろく咲けるは何の花ぞも」ト讀メル、是モ四六ノ相詞ナリ。但シ此花ハ梅トモ夕貌トモ二説アレド、夕貌ノ方ニ定ムベシトゾ。

○評ニ云、此篇は琵琶行の面影ながら、文は楊貴妃が榮落によせて、所々に長恨歌の詞おほし。しかるに一篇の大格は、倭文に長歌體ながら、今は起結の斷續にいたりて、七々の語路に轉換せしは、小謠淨瑠璃の拍子をぬきて、全く俳文の新格と稱すべし。或は篇中の廿一句に、催馬樂の例をかりて、假名に眞名字を附けたるは、文章に鎖詞の常ながら、倭文に訓を假る例としるべし。さて此行の奥書に、難波に潮江のなにがしといふ者ありて、都がよひの雨やどりに、此女を伏見に住せたるが、墨染は彼が古郷なるよし、今のありさまを此行につくりて、一軸の記念に殘

「なよびたかゞめてとたはたみそよそなどかぞふるさま、いよのゆげたもたど〳〵しかるまじう見ゆ」とあり。（十　二十三十四十）●長恨歌ニ「梨花一枝春帶レ雨」トハ美人ノ愁フル姿ヲ云ヘリ。梨ト無トノ假訓を稱すべし○空蟬ノ巻ノ引歌ニ「いよの湯のゆげたの數は左り八つ右は九つ中は十六」とあり。「按ズろニ此二句ハ、前ニ三十年ノ響アリ、四十ト余所トノ訓ヲ假レル、此等ヲ鎖詞ノ絶妙ト稱スベシ。○「難波女の芦のしの屋のしのすゝき一夜のふしも忘れやはする」按ズルニ、此詞ハ、難波ノ遊女ヲ請出シテ今ノ伏見ニ住マセケン。河竹ハ例ニ節ノ鎖ナリ。▲明皇雜錄ニ「皇與ニ貴妃一綵戯将レ北。惟重四可レ轉。上連呼號。骰子轉成レ四上。悅賜ニ四緋一云々」重三重四ニ朱字を用フルハ、此時ノ賜色トゾ。「按ズルニ芙蓉以下ニ四所ノ黒圏ハ、總テ長恨歌ノ裁入ナリ。其下ニ見合スベシ。但シ草ノ露ニ玉ト結ビテ「魂魄不レ返レ夢」ト云ヘル、裁斷ノ自由ヲ稱スベシ。△しのにトハ和歌ノ詞ナリ。しきりトモしげきトモ兩用ナリ。▲馬嵬原ハ楊貴妃ガ最期ノ地ナリ。天寶遺事ニ委シ。按ズルニもない以下ハ總テ双六ノ相詞ナリ。或ハ相手ノ石ヲ問フニもないか原トハ、最早ナイト云フ事ナリ。或ハ四仕（して）三迷（まよふ）トハ、四三ニ三ノ手ノ多キ時ナリ。或ハ三ノ丁目ヲ指シテ三三並（なる）ト

も●梨の花の雨にしをれて、年もはや三十年の指やをりあまる、伊豫の湯桁のよそながら、四十
むかしをきけば難波女の、名に流れたる河竹や、伏見の里の住居とても、皆たゞかりの
ちぎりなりけらし。實もろこしの▲楊貴妃も、●芙蓉の帳にかしづかれ七目の奥にいもねず
や、▲朱三朱四の色にめでて、●桃李の春に風をうらみては、入三一に日をくらし、●梧桐の
秋に雨をわびては、なぐさめかねつしのに物おもふ。四ノ二 それも榮花のかぎりあれば、馬
鬼原の夕あらし、四仕三迷 しゝてさまよふ草の露の、●たまのありかもありとのみ、かへらぬ水の
三三並 さゝなみや、さらば○江口の君ならで、かりのやどりをゝしむなと、たちまどひぬる△軒の
つまに、四六 しろく咲たる夕顔の、花に心はとめぬなりけり。

○註ニ曰▲大和トハ双六ノ石立ナリ。本双六ハ三所ノ間ニ石ヲ五ツ立置キテ、十五ノ石ノ早ク入リタル方ヲ勝トス。大和ハ敵陣ノ一地ニ石ヲ二ツ殘シ、其三ヲ我陣ノ外五地ニ立テ、敵ノ六先ヲ留メントシ我陣ノ五地ヲ作ラントス。勝負ニ遲速ノ違アリトイフ。○鸚鵡小町に「雲のうへはありし昔にかはられど見し玉だれの内ぞゆかしき」▲源氏ノ空蟬軒端萩ト碁ヲ打テ目算ノ時ノ詞ニ

附心の趣向をかくして、當句の作に人をおどろかすは、本より撰集の用なれど、俳諧にも例の褻晴あれば、忘るまじきはつれの心とぞ。世に聞ふ此發句は、暮春暮秋の故きをたづれて、行の一字に姿の新みをしれりと、十論の爲辨にも讃せられしか。其餘は當句のふりといひ、附合のすがたといひ、詩歌の媚を求めずして、例に平話のなかしみを稱すべし。作者はいづれも伊勢の名士なり。乙由は麥林に嘉遁して、連俳行に其傳あり。兎士は成子氏にして、名にあふ小鹿の岡本に住めり。發上園は菊の別莊なりとぞ。桃如は結城氏にして、蓮二と同袍のよしみを結びて、風雅に俗をいとはむとす。忘年の友なりとぞ。

双六行

華表人

此世を夢の伏見なる、墨染の奥にすむ人あり。折かけ垣の卯の花も、なりまち顔には咲ねども、いかなる人の住らんと、見すごしがたき繩すだれ、かゝる住居ぞあやしかりける。人もあらしの大和なる、双六の音の聞ゆれば、歌を小町にならはねど、そこのすだれの内ぞゆかしく、碁を空蟬になぞらへて、物の隙よりさしものぞきぬべし。今は姿

牡丹はあれについて菜ばたけ。　士

入札の立木をつもるあら物屋　二

飯臺のめし喰ふははじめて。　如

好色も二宗兼學のけふの月　士

祭といつぱ提灯のふね。　由

早稲の香も君が代なれや秋の田の　如

燕の行くも雁のいたるも　二

柳瀬の關でも加賀を笠にきて　由

いそぐ心は雪隱であろ　士

花のかげ辨當すでに狼藉たり　二

日は山鳥の山にしだり庵　如

○評ニ云、此行は俳諧之連歌といふべし。一篇はすべて七縱八横に言語の曲節を盡せし也。されよ

閏三月は四月とおもやれ。　由
有明も花も心のみよし野に　如
むさし坊には獨活の粕あへ。　二
縄すだれ爰かと飛脚さし覗き　由
歌のちどりの寒き川かぜ。　七

二

糞船といふをはじめて嗅給ふ　二
馳走になみだこぼす老僧　如
起かへる夜著に障子の日のうつり　士
雪の小鳥の南天による　由
耳にさへ古き都の豆腐うり　如
便宜々々に比叡のせんたく　二
させほせと傘の事までいひ置れ。　由

赤兀山に蕎麥のしらはな。　兎　士
狩衣いざ宵の闇をまちかけて　蓮　二
猫殿なぶるはや喰の中。　桃　如
一本の扇に簞司こねかへし　士
出て見る影の畫にかたいた。　由
ウ
松の木の背の高いを植たがり△　如
村はのこらず手習の弟子△　二
齒がぬけて喰にくいげな蒟蒻は　由
凍た布巾をあぶるへつつひ△　士
鼠にはぬらで大津にしろい藏　二
馬子に作法のあるはしるまい△　如
ぬくとさに小比丘尼どもが涌て來て　士

にして、我輩の支配すべきにあらず。幸二句置の順にゆづりて、黄老人の沙汰にまかせば、蛇たゑがく者のあやまちを遁れむとぞ。蓮二のいへる、其故あり。むかし出羽の羽黒に詣て圖司なにがしが家に寄宿せしに、連俳の古懷紙をあまたもたりける中に、宗祇老人の奉納の卷に、發句はそこの館主なるにや、聖廟の花に宗祇の脇あり。さて百韵の名殘にいたり、七句目に素春を出して、老人に擧句を望みけるにや、老木にむすべる手向の花あり。しからば愚老も其例にすがりて、發句の藤を再進すべきか。敏捷の變は吾家の賛ながら、連歌を出て連歌を奪ふに似たれど、今かく求韵の自在をふるまひて、千歳の孔子にもにくまれなむ。頓挫は俳諧の意地なれば、例の虚實を察せよとぞ。誠に此行の大膽なる、評者も一拶をつくる所なし。見る人は例の察すべき也。

作者は越の石動(いするぎ)に住す。いづれも和漢の博士にして、梨壺の舊例より、喚んで獅子窟の三仙といふ。其地は文操の選場にて、瑟々庵記に其いはれあり。おの／＼其記に互見すべし。

求韻歌仙行

行秋(ゆくあき)の道々こぼす紅葉かな。　川乙山

（一）新古今集の歌初句「あけぬとて」

染物の名の今はいろ〳〵。　二
たなばたの化粧も水に月の影　竪
稲にはらます殿もあるとよ。　文
出かはりも宿かし鳥の音をなきて　二
重は淋しきあかのおもがけ　峰
暮ひとへ花によし野の奥もあらず　文
連歌を奪ふ藤の夕ばえ　二

○評ニ云、此行は連歌之俳諧とやいはむ。發句には持統の御製を摘めるより、一篇すべて婉麗の句法也。しかるを鹿の一句にいたりて尻の上風とは平懐なれど、野邊（一）より山に入る鹿のあと吹きおくる荻のうは風と、尻の一字をよみ殘せし其歌を錯綜して、連歌の裁入を例とせしは、法に公表の言譯をかまへて、これらを轉倒の絶妙と稱すべけむ。今また此卷の草稿を見れば、擧句の藤の裁斷あり。方竪のいへる、そも俳諧の求韵とて、此卷を百世の濫觴たらんには、擧句は此式の惣結

奉行の鑓も橋のあちら八　峯
山の端の月しら〳〵としらま弓　文
鹿も荻ふく尻のうは風　竪
給反故に秋はさびたる松花堂　峯
左官も五百いたゞいてなく　二
言葉より人のこゝろもかへり花　竪
つながぬ船と詠むべらなる　文

二

大磯や小磯に波の立うかれ　二
ひもじからふと君をおもひね　峯
風の夜も猫のかよひの戸を細み　文
ちりの世いとふ閼伽の一桶　竪
はづかしのみやこ詞や飛脚でも　峯

二韵をへだつべきにや。

右は和漢の恒例ながら、和歌の古法は勿論にて、爰には我家の式をさだめむと、享保癸卯のことし、黄山老人の駕をとゞめて、暮春と暮秋との二題をもて短歌行をつづり、歌仙行を催す。後の人よろしく潤色すべし。

惟時林鐘日、滄江散叟 壺峯 白梅溪 乙文 榛草主人 方竪 等、操毫於観世音寺之獅子窟に畢矣。

求韻短歌行

香久山のこちらにほすや藤のはな。　良 壺峯
鶯もけふ局折すがた。　蓮 二
扇とは霞くむてふ名にめでて　方 竪
湯あみあらたに簾をまけば。　乙 文
装束は何ぞと餘所を聞あはせ　二

（三）史記滑稽傳「談言微中、亦可以解紛」

韵は、短歌行を四句三韵となし、歌仙行を六句四韵となし、長歌行を八句五韵となすべし。さるは四六とも六六とも六八ともわくる時に、一篇六章の埒ありて、韵をかゆるに換やすからん。しかるに百韵の埒へ、中間の十四句を八韵となすべけれど、假名の一韵十字にして、句ごとに不自在ならんには、しひては好事の沙汰といふべし。但は假名に眞名の韵例あれば、例に萬葉の韵をまじへて、先仙陽唐の一韵をも用ゆべけむ。とかくに求韵の詮ずる所は、中古の漢和の不自在にこりて、句ごとに韵字のおだやかならんには。史記にいふ俳諧の平話を失はず、（三）談言微中の用といふべき也。尚また韵の麁細を論ぜば、細韵は月も花をのごとき、麁韵はかるも（刈藻）たまのをの（玉緒）のごとき、或はとくり（德利）さはち（沙鉢）の類も、俳諧は殊に音語がちなれば、爰に同字の論をさだむべし。本より和漢の韵例にも、同韵に同字を用たれば、今や俳諧の韵式にも、かなとはなとの麁細にて、同字別吟の例といはむ。其餘は不のぬ畢ぬのごとき、古例の用捨を覺悟すべし。或は一篇に同韵を用る事も、たゞ一

されば和漢の韵例をおもふに、和歌は五句にして二韵なるに似たれど、漢文にいふ歌行の類も、「君見、君不レ聞のごときは、和歌の「ひさかた「あらがねのごとく、いづれも起語にしていひ捨なれば、畢竟は四句二韵といふべき也。されど奥儀抄に、長短歌の事も、換韵の高句に同韵をかさぬる事も、今の論には用ひがたき所あり。其故は、漢家の韵例にも、長篇の文は勿論にて、歌行の類に換韵を用ゆるに、或は四句に換へ、六句に換へ、八句十句なるも粗あるべし。奥儀の説には後勘あるべきにや。

今や和漢の例をまじへて、俳諧の家の求韵をさだめば、發句の尾字を初韵として、第二第四と低句にふむべし。しかれば四句三韵とも、六句四韵とも、韵を換むとする時は、次の高句に他韵をふみて、その尾字をもて韵とすべし。發句の尾字を用ゆるにひとし。されど漢家の律詩にも、我朝の漢和にも、蹈おくりといふ事ありて、第二句の尾字を初韵とす。其時は一篇をつらぬきて一韵を用ゆる故也。今や一巻の換

問答し給ひし事、古事記に見えたり。

本といふ時は、短歌に準ずる絶句也。

雙本　以六句爲一絕、第三句終字爲初韵、第六句終字爲終韵。

「しらくもの「たなびくやまは「見れどあかぬかも。

「たづなく「あさとびこえて「ゆふべこましを。

短歌　以五句爲一絕、第三句終字爲初韵、第五句終字爲終韵。

「おきつどり「かもつくしまに「わがいねし。

「いもはわすれじ「よのことゞゝに。

長歌　以八句爲一絕、第二句終字爲初韵、轉々如此。

あめなるや　おほたなばたの。　一韵

うながせる　たまのみすまろ。　二韵

みすまろの。　あなだまはやみ。　三韵

たにふたわたる　あぢすきのかみ。　四韵

はごくみし心はさぞと哀にて　純
質屋の内儀たゞも借す氣じや　由
明暮に詣てあふぐ梅の宮　珍
鮓の加減の一子相傳　二
咲比と告やる夏の花に來て　純
蜂の巣立たあとを約束　由
月は入軒の日影のあたゝかに　珍
やいとはきらひ餅につきや喰ふ　二
縫針のまん中へ來て横たはり　由
いひよりぬれど人はつれなし　純
塵取も箒もそこに物おもひ　二
いやしめらるゝ袖のおちぶれ　珍

（一）保元の亂の待賢門の戰に源爲朝に射殺されし人

年すでに光陰の矢も射つくして　由
學びの窓の雪もさむけし　純
相膳に（一）齋藤六はおそれ入り　二
晝間しばしの旅のやすらひ　珍
便船もこちらへばかり風が吹き　由
小貝ひろふや汐の引あと　純
おどすとて狼になる夕月夜　二
うら枯にける山の高萱　珍

二

時ならず雪にまがひし秋の霜　純
朝寐をさせぬ觀音の下　由
鳴かはしいづち行らん村がらす　珍
お厠にせばき國替のふね　二

維時享保とらの年、十月十二日、祖翁の牌前に香を燒て、薫誦再拜して申もの也。

連俳歌仙行

歌ときけ鶯のねの口ずさみ　杉　正珍
心のはなの幕はへだてず　蓮　二
しるしらぬ人も霞める野に出て　光　純
嗅だり見たり市の買物　乙　由
苫ふきや月の影なきたそがれに　珍
石臼に手のあれる藪入　二
うら盆にそれほど伊達はこかずとも　由
燒く香ゆかしくもるゝ羅　純
通夜したしむすぶの神の宮もあらば　二
此身の幸はいつを待見む　珍

俳諧とも、或は俳諧之連歌とも題して、詩歌の人の漢和に交るがごとく、それより連歌の情のはこびをならひ、これより俳諧の姿のうつりを傳へて、連俳一座の附合あらんには、姿情の意地は面々の門題にして、大和の風雅の名にそむかず、おなじ御裳の流を汲て、世法の人和もこゝにしるべく、花鳥の餘情もこゝにしるべし。さはいへど、此一體は祖翁滅後の大變にして、道に興廢の大事とやいはむ。むかしより人情のならはせに、平生は聞ゆる詞をつかへども、俳諧の席にのぞみては、源氏さごろもの風情をつくる。まして此頃の色ごのみの人に、連歌の艶情をもてそへて、今いふ連俳にあそばむとせば、姿情のさかひにくらき人は、花に小町が紅粉をよそほひ、鳥に菱川が丹青をいろえて、果は連歌のちまたにたゞよひ、邯鄲にかのあゆみを失ひてむ。是たゞ蓮二が生々のまどひにして、かくは互照の席をとゞむ。しりて學ぶ人は百世の功をとげ、しらで學ぶ人は一世の害とならん。人よく姿情の先後をしるべし。人たゞ言語の雅俗を學ぶべからず。

俳姿を寫し、歌はたゞ西行の俳諧をまなぶ。まして五倫の世法にも、連歌の情あり俳諧の姿あれば、俳諧にも連歌ありて、連歌にも俳諧あらざらんや。連歌の名は虚實のあやといふべし。誠におもへば、奥儀抄にも、古今集は半に過て俳諧の歌おほしとや。今も連歌の發句とて、世の人のかたり傳ふるは、おほくは俳諧の姿なりしか、俳諧は誰もおぼえやすく、庭鳥のくだかけならんより、おかべの豆腐ならんには。さるを連歌のあつかひには、一字の手爾波に古今を轉じて、言葉の外の情をふくめとあれば、言下にはやく聞取りがたきを、俳諧は目に見て心におぼゆれば、繩をむすびても忘ぬ筈也。しからば我家の俳諧にも、發句は十が一二をまじへ、附句は百が七八もまじゆべきか。さるに發句の手爾波を専用として、附合に前句より情をはこぶ時の用也。いさや連歌の家とても、ひたぶる俳諧の體をきらはゞ、およそ菎蒻の白和に辛味をいれぬ心地やせむ。實それ連歌と俳諧とは、本より和歌の兄弟にわかれて、世々に中たがふべき家ならねば、其師と此師との交りには、或は連歌之

歌之俳諧といひ、楓は時鳥の古歌をもどきて、是を俳諧之連歌といふ。二章はすべて卯の花をかくして、爰を言外の餘情といへば、連俳はよし虛實の互照にして、おこなふ人は姿情の先後をしるべしとぞ。我はた其詞を聞く時は、物にをのゝきたる心地して、短檠のかげに其夢はさめぬ。そのゝち此二章を暗記して、つら〳〵風雅のはじめをおもへば、諸越は詩におこりて、離騷あり、聯句あり。我朝は歌にもとづきて、連歌あり俳諧あり。いづれも道の變なるより、變には姿情のさかひならんや。此故に、連歌は實をおこなひて、情をもて耳をかたむけしめ、俳諧は虛をさばきて、姿をもて目をおどろかしむ。姿情風雅のつばさならんには、誠に先後をしるにはしかざらん。さればいにしへより懷紙の端書に、誹諧之連歌と題せしは、その世に言篇の誹諧師の酒興に、連歌の情をもて詞の誹諧にあそべるより、誹言連語の穿義をして、さる端書も定ぬらん。今や人篇の俳諧といふは、儒には莊門(一)の俳文をやはらげ、佛には禪家の俳言をまじへて、虛實のつばさをそなへしより、詩はよし杜陵が

(一)莊子の說

和漢文操　巻之三

○行類

連俳互照序　　蓮二房

或夜ほとゝぎすの發句を案ずるに、祖翁に文章の遺詠ありて、殊に此鳥の晴がましく、例の卯の花は更にいはじ、橘の香のむかしならんよりも、若楓の今様にこそ姿の新しみはあるべけれと、其夜は寐がたふ更行まゝに、夢ともなく現ともなく、白髪の老翁のそこに來りて、色紙に此發句をかきて我机の上にさし置けり。

橘のうつり心やほとゝぎす

時鳥きかせ顔にや若楓

かくて老翁のいへる、汝よく此意をつたへよ、橘は手爾波に情をふくめて、是を連

眞名ノ辭ト成セリ。去リヤ佛家ノ經統ニ、眼耳鼻舌身意ヲ六根ト云ヒ、色聲香味觸法ヲ六欲ト云ヒテ、圓通ヲ說キテハ其利益ヲ勸メ、執著ヲ誡メテハ其損害ヲ懲ラス。六根ハ但シ善惡ノ二相ト云ハン。然ルニ此齒ノ用タルヤ、四支九竅ノ働ニ勝リテ、日夜ニ人ヲ利スレドモ、聊カ物ヲ害スル事ナシ。況ヤ老後ノ聲色ヲ離レバ、六欲ノ中ニ何ヲカ樂マン。去ルヲ儒書ニモ佛經ニモ、此齒ノ德ヲ稱セネバ、强ヒテ耳目ニ難ヲ附ケテ、一齒ニ千金ノ價ヲ爭ヘル、爰ヲ文章ノ意地ト知リ、俳諧ノ筆格ト知ルベキナリ。誠ニ一篇ノ風流ヲ稱セバ、老曾ノ段ニハ和歌ノ婉曲ヲ寫シ、摺針ノ段ニハ俳諧ノ談笑ヲ盡シテ、中比ハ一篇ノ大綱ナレバ、管絃ト書畫トニ耳目ヲ讓汰（ゆつろ）ヘテ、齒ニハ老後ノ日用ヲ擧グルニ、前ニハ孔子ノ死生論ヲ合ハセ、後ニハ釋尊ノ餓鬼道ヲ引キテ、儒佛ノ證文ニ文章ヲ固見（かため）タル、增テ鷹ノ羽ト蘭ノ葉ハ、和訓ニ齒ノ字ノ響ナレバ、本ヨリ六書ノ例ニ效ヒテ、和漢ニ假借ノ絕妙ト稱スベシ。然ルニ一篇ノ結段ハ、例ニ連俳ノ敵詞ヨリ、名ニ逼フ書經ノ帝範ヲ引キテ、天ノ一字ニ萬人ヲ誡メタル、誠ニ理論ノ虛實ト云ヒ、誠ニ文法ノ死活ト云ヒ、和漢ニ假名ノ自在ヲ得テ、此事ヲ文操ノ本懷トヤ云ハン。學人ハ文字ノ置所ヨリ句讀ノ長短ニ眼ヲ留ムベキナリ。

也耶。朝顏者花之假也共、不似生而見憂目人焉。昔平焦了雉子之香而不異鬼之嚼煎餅兮。今也剛入豆腐之味而、爲似蝶之嘗牡丹兮。斯迄離老之聲色也則、齒已將爲明暮之樂享哉。我若無目則、隨無而令管絃之中遊心矣。我若無耳則、隨無而可書畫之間置身矣。實夫在世而無齒則、且兮有百味之膳共、夕兮有八珍之菓共、慭令悅老之目而、所宜給心造罪、非施餓鬼之誠爲耶。我今悔一齒之過而、誨百世之人了則、可畏飮食兮、不忘酒色兮、身者所榮若松之緣共、心者黃反老木之葉迄、厭入身秋之風而、從鷹之惜一羽麼、從蘭之培二葉麼、彌疾諍一齒之價而、不換千兩之黃金了哉。左迚換月花之風色而、貪魚鳥之風味則、從詩歌連歌可賤見了共、聖帝之詞爾麼、人者以食爲天與乎。兼好法師麼、從玉巵者此飯思意味敷則哉、書置流石之艸帋臭矣。於然人之忘齒也則、可厥者謂忘來而歇耶。誠爲忘天人也焉。

〔評ニ云、此題ハ白氏文集ニ出テ、樂天ガ老衰ノ歎ナルヲ、灯花詩叢ニ感ノ一字ヲ加エテ、大和

（一）論語に「未知生、焉知死」

之馬車矣。乍左有此四者、善用了則爲樂人兮、惡用了則爲苦人兮。物皆謂一得一失者矣。于然謂人間之齒物者、貴麼賤麼、武夫麼商人麼、有日々夜々之用而、奥齕兮口齢兮、令樂人了共、無令苦人事。爾迚夢過世人者、眠花兮醉月兮、盛時爾者不樂其齒、衰日爾者苦此齒。（一）不知生則何知死與者、孔子麼所宣給齒之事也焉。奈何所哉、人之思違而、耳目者爲不病日之用心共、齒者不思不衰時之養生。奚爾人之嚼老而、老曾森之夕嵐、爲驚一葉之秋則、葛之每葉動初梟矣。荻之上葉麼風洩而、物言則笑了童部兮、物喰則懲通給司兮。何賦老身之爾者有見苦焉。耳副目副不似于齒焉矣。好夫所謂人者髮容了共、伊勢海蝨之不樂藻麼、有令戀墨染之尼樣共、爲齒之拔焉者不眞頰而、曉之添寢麼有物凄焉。扨社人之爲戀迚、飾耳了耶瑳、鼻止耶、齒者誘引謂伊達之花矣止。左者在共、觀物之榮落了則、名麼被瑳摺針之砂而、其所有鏡之山則、沐梅花之油居、嗽楊枝之薫而、昨日者貴於夜光之璧兮、今日者賤如夕貌之核兮。何之榮落如斯

（二）一條天皇の後宮の庭に入來る乞食尼が「夜は誰とねん常陸介とねん」云々の歌をうたひて宮女たちの弄ものとなれる事あり

（三）「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へてわが名漏すな」

▲常陸尼（二）ハ、枕双帋ニ在リ○采女ガ床ノ山（三）ノ歌ハ古今集ニ在リ。「按ズルニ、此一對ハ乞食ト美女トノ衣類ニ寄セテ、蚤ニ哀樂ノ筆占（ふですさみ）ナリ。△小町ノ諷ニ「今に民間の賤女にさへきたなまれ」トアリ。○百人一首ニ「あはぢ島かよふ千鳥の鳴く聲にいく夜寐ざめぬ須磨の關守」

○評ニ云、此辭は托物比興にして、世の榮落を蚤によせながら、或夜の二字に趣意をふくみて、結文に而已の詞をかされたる、文の隱見を稱すべし。其辭は八章五韵にて、全篇は蚤の觀相ながら、七八に御代の賀をむすびて、關守をこなたよりとゞめたらん、そを俳諧の意地と知るべき也。作者は湖南の大津に住す。苗村氏の逸士にして、先師と俳諧の遊敵なり。百老館は別莊なりとぞ。

感ズニ齒落ル辭ヲ一

東花坊

我今年痛ンデ齒ヲ而、見レハ樂天之齒落ル辭ヲ了則、髮衰ヘテ辭シ頭ヲ、葉衰ヘテ辭ス樹ヲ與哉。誠ニ運ビテ和漢之情ヲ一而、爰ニ無ランヤ感慨一焉耶。今將タ不ズトモ住吉之和歌ニ共ナラ、將ニ競ベ文章之哀ト與也。熟ラ〱思ヘバ人之遊ブヲ世ニ則、目ニ好ミ花鳥之色ヲ兮、耳ニ樂ム絲竹之聲ヲ兮。揀ビ其香ヲ兮調フ其味ヲ兮。此四ツハ者實ニ謂ハン意

貌の軒にふるひ捨られ、木枕のうへに身をひしがるゝ、一榮一落の世のさまも、我のみならばと觀ずるのみ。

其辭

秋の夜さむを何ぅらみけむ　春の日影の夢はわすれず
待ほとゝぎすねぶりながらも　水鷄は餘所をたゝくと思ふ
蚊には一重のへだてあれども　我は浮世を飛ありきつゝ
戸ざゝぬ御代に何とどむとて　○すまの關もり幾夜寐ざめぬ

○註ニ曰、▲楞伽經、乾闥婆城ノ註ニ「蜃樓之類也云々」月令ノ註ニ「蜃ハ大蛤也」○西行ノ歌ニ「風になびく富士のけぶりの空にきえて行衛もしらぬ我おもひ哉」△倭語拾芥ノ童謠ニ「蚤が茶臼をせたらおうて背負うて、富士のお山をちよいと越えた」とは農民の子の天下を治めたる其比の風言なりとぞ△山姥謡ニ「妄執の雲の塵つもつて山姥となれる」トアリ「花さく山」モ「月てる窓」モ、其謡ノ裁入ナリ。△書經ニ「以レ食爲レ天云々」●山谷演雅ノ詩ニ「虱聞ニ湯沸一猶血食」

(一)「犬の歯のかみあて」諺

ハ本意ナシ。

蚤の辭 并序

苗 宰 陀

海に蛤の城ありとや。其圖は佛の經にのれり。富士のけぶりの行衛しれぬも、歌によみ繪に寫す。そもや背中に茶臼をおうて、其山を越えたりし、蚤とかやいふものは、雪舟雪村の手にものらず、宗祇西行の歌にも聞えず、ある夜ひそかに彼がいふ事をきけば、煩惱の垢をひねつて化生の魂をうつし、塵つもつて山姥がふところにもあそぶ。その山姥とつれだつ日は、花さく山の日向をたのしみ、月てる窓の茶に寢ざめては、本より脚布のすみかをさだめず。まして獵師の罠にまよはねば、狩人の矢にもおそるゝ事なし。しかれども世にすめば、猫は我食の天なれど、猿の手のをり〳〵にひねり出され、犬の(一)歯のたま〳〵にかみあてられて不慮の命を失ふ事も、有爲轉變のならひなれば、虱の熱湯を聞には似ざらん。むかしは常陸の尼が袴にそひて、宮女のうつり香に心ときめき、采女が寢巻の袖に入りて床の山のさゝめ言をも聞しが、今ば賤男賤女にもきたなまれ、夕

云ヘル如ク、趣ハ漢語ノ字面ヲ飾ルトモ、意ハ和詩ノ風俗ヲ失フベカラズ。然ドモ語路ト音韻ノ沙汰ハ、譬ヘバ菅相江帥ノ智タルモ、我朝ノ土地ニ素達タル學者ハ、漢家ノ飯焼ノ無筆ニモ劣リテ、語路ノ長短ト音韻ノ叶不叶ハ、皆々推量ノ筈ナレバ、返ス〲モ我門ノ學者ハ、假名ト眞名トノ通用ヲ知ルベキナリ。

○辭の類

聖人無レ夢辭　澤庵和尚

旦向者却來天天見禮波　夢茂奈幾物還　柳半綠耳天花波具禮奈日濃色能美。

戯レ書レ之與ニ好事之人一

○評ニ云、此一章ハ、聖人無レ夢ト云ヘル古語ノ四字ヲ題ニシテ、此草體ニ書置キ給ヘルヲ、爰ニ辭ノ一字ヲ添ヘテ、文操ノ飾トハ成セリケリ。去レバ此文ノ拍子ヲ評セバ、或ハ萬葉ノ旋頭歌ニモ非ズ、或ハ庭訓ノ眞名文ニモ非ズ、此等ヲ大和ノ辭ト名附ケテ例ニ文操ノ新製トヤ云ハン。誠ニ此和尚ハ世ニ勝レテ、其文ニシテ其質ナル、爰ニ好事ノ風流ヲ見レバ、其世ニ俳諧ヲ勸メザル

雁燕易過已三春　可憐裏藥長爲客　自愧傳書遠附人
我聞夜深擇木鳥墮　日暮忘家子囂　嗟夫燈火幾年傍母
香烟某月亡親君　見眼染烟霞誰可療　心誇風月未全貧
起來好有皮與骨　猶可風雲放此身

○評ニ云、此歌ハ灯花詩叢ニ在リテ天和ノ比ノ作ナリト。誠ニ一篇ノ體ヲ見レバ、趣ハ漢家ノ語脈ナガラ、意ハ大和ノ風義ト云ハン。然レバ此類ノ一格ヲモ傳ヘテ、和漢ニ通用ノ鑑ト成サバ、此文集ノ操ナラント、例ニ詩叢ノ中ヲ透來テ、此一篇ヲ出セルナリ。學ビハ趣意ノ差別ヲ考ヘテ、黄白ノ紛ヲ恐ルベキナリ。練澁ハ但シ多情ノ樣ニシテ、旅亭ノ病懷ヲ寫セルニ、野盤ハ先師ノ舊名ナガラ、草宿水棲ノ意ヨリ、起句ニ我名ヲ喚出セリトゾ。右ハ本集ノ題註ナリ。「按ズルニ此歌ハ、呉融ガ畫山水歌ノ如ク、七六ノ句法ヲ用ヒテ、三所ノ發語ハ例ノ樂府ニ效ヘリ。然ルニ古文ノ歌曲ヲ見レバ、五七ノ語路ハ和漢ノ恒例ニテ、或ハ九七ノ長短アリ、或ハ五三ノ長短アレド、假名ニハ語路ノ拍子ニ合ハズ。爰ヲ音訓ノ差別ニシテ、和漢ノ學問ノ違目ナレバ、先師ノ詩序ニ

けろ」嵐ノ通フトハ式子内親王ノ歌ノ裁入レナリ○新古今ニ「明ぬとて野邊より山に入る鹿のあと吹きおくる萩の下風」○續千載ニ「千代ふべき宿のまがきに植ゑつれば竹もや君を友と見るらん」●茶歌ノ結文ニ「蓬萊山在ニ何處一。玉川子乘ニ此清風一。欲ニ歸去一云々」結語ハ風ノ一字ヨリ一篇ノ斷續ヲ見ルベキナリ。

○評ニ云、此歌は始より終まで盧同が茶歌を趣意となせれば、起結斷續の句拍子も、およそ長短歌の體にして、これらも新製の一格といふべし。然れども竹に故人の詩は、李白とも李益とも、作者に兩說の沙汰あれば、例の後勘すべき也。さて全篇の稱する所は、茶と酒とに一節の意地をおこし、竹と蓬とに千代の祝言をむすびて、句絕はあまた和歌の拍子となせる、これらを和漢の鑑に見て、長短歌の體はしるべき也。されば此あるじは源家の松姓にして、越の福居に婚宦す。支鼓は俳諧のあだ名なるよし。公暇の明暮は青了閣にあそびて、六根公を方外の友たりとぞ。

練の漉歌

野盤子

野に棲ろ山に宿る野盤子　愁へて病を何爲すれぞ拭ふこと涙頻なる　桃李難し親ろ唯一日

(三)盧同の作。古文眞寶前集に出づ。

までも、此たのしみはつきざらましを。

○註ニ曰●飲中八仙ノ詩ニ、「李白一斗詩百篇云々」○行平ノ歌ニ「立別れいなばの山の峯におふるまつとし聞かは今かへり來む」●關省廬山ノ對ハ前ニ出デタリ。●李白ガ襄陽歌ニ「鸕鷀杓、鸚鵡盃、一日須レ傾ニ三百盃一」●盧同ガ茶歌ニ「摘レ鮮焙レ芳旋封云々」玉川トハ盧同ガ標號ナリ。△十論、芭蕉翁ノ遺訓ニ「なら茶三石喰うて後、はじめて俳諧の意味を知るべし云云」△つれ〴〵草ニ「小松帝のまさな事せさせ給ふとて、御かま木のけぶりにすゝけたれば」トアリ△茶人ノ三茶杓半トハ、茶人歌人ト詞ヲ對シテ、定規ノ古風ヲ笑ヘルナリ。此等ヲ俳諧ノ意地ト知ルベシ。△うたかたハ枕詞ナリ。歌ニハ泡(あわ)ノ訓ヲ假リテ、多クハ哀レト誦メリ。萬葉ニ歌方ト書キタレド、轉瀉ナド書クベキニヤ。「按ズルニ、此二句ハ煎茶ノ泡ヲ立テト云ハヾ例ノ俗言モ遁レ難キヲ、うたかたの枕ニ雅語ト成セル、此等を換骨の絶妙と稱すべし。●茶歌(三)ニ「白花浮レ光凝ニ碗面一」トハ、其泡ノ白キヲ形容スレバ、玉川モ茶湯ハ嫌ト見ヘタリ。二碗以下七碗マデハ其歌ノ取意ナリ。●同歌ニ「唯覺兩腋習々清風生云々」○貫之ノ歌ニ「櫻ちる木の下陰は寒からで空にしられぬ雪ぞふり

（一）「蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」白居易の句
（二）食物に奢らぬ俳諧趣味をいふ。奈良茶は茶粥のこと

故人庵の茶歌

蓮二房

唐のやまとの上戸の中に、一斗百篇の名に聞ふる、李白先生がから歌に、開レ門風動レ竹、疑是故人來とは、さぞおもしろき飲友達の、松としきけば竹におとづれけむ。されど此庵のあるじは、蘭省（一）の花のいとまなき身も、廬山の雨の淋しみをしたひて、その館のこなたに萱ぶきをしつらひ、四疊半に爐をかまへ、浮世の外の窓の前に、塵をへだての竹は植給へど、李白が祕藏の鸚鵡盃はもたず。玉川が數奇の焙爐茶を入れて、をり〳〵俳諧の友達をまねき、（二）奈良茶三石のたはぶれより、まさな事には遊給ふらん。それも肩衣のかたからねば、茶人の三茶杓半をもまなびず。まして歌人の枕詞にはあらぬ、うたかたの泡をべた〳〵とたてさせ、白花のひかりに香をそふれば、一碗二碗はさらにして、七碗にかの清風を生ず。清風いづこより來りぬらん。春は名に高き桐が谷の、空にしられぬ雪ちりて、白根の嵐もこゝにかよふらし。秋は紅葉山の鹿の音に、おと吹おくる荻の風も、かの窓前の竹に吹つたへて、竹にも千代のためしあれば、蓬が島のよろづ世

星のやどりの花やかに、玉のすだれも青丹よし、そのうつり香もあたなれば、
たきもの姫とは名づけたり。
星も夜あけのきぬ〴〵に、一葉の秋の袖さむく、なみだもろさもしら露の、
あさがほ姫とは名づけたり。

○評ニ云、禮讃ハ廬山ノ遠法師(一)ニ始マリテ、太秦ノ善觀房ノ節ヲ附ケ給ヒ、我朝ノ聲明ト成セリ。其意ハ佛ヲ讃歎シテ和歌ニ詠嘆ノ類ナリトゾ。然レバ此讃ノ趣ハ、人間ノ色香ヲ星ニ寄セテ、人ニ無常ヲ示シタルハ、應現婦女ノ佛説ヨリ、菩薩ニ天部ノ稱號ト知ルベシ。マロトニ俳諧ノ贊ニ云ヘル、談笑ノ諷諫モコノ事ニテ、遊宴ノ中ノ哀樂ヲ知レトナリ。百阿ノ名ハ剃髮文ニ出デタリ。

讀ム法華經ヲ　　秋之坊

その時にはたちばかりの龍女なら
わけはあるまい提婆品かな

(一)晉の慧遠

(二)鹿野苑、釋尊說法の處

(三)これも賣春婦の異名

(四)說教節に法をすゝめたる尼の末流故手にさゝらを持つ

此曲ハ例ノ新製ニテ、此等ヲ大和ノ風謠ト云フベキナリ。

むかしは鹿(二)のみのりの苑も　今は犬吠ふ鎌倉河岸に
あたまの花のちりも散らずや　尻はふくべの鯰ほすらめ
嵯峨の(三)まるたの轉びやすきに　服部の名の袖ひかずも
明野のはしの木瓜も咲くてふ　夕日のべにのくちびるにさへ
いせをの一蜑も荻にぬれてや　今朝はおしろいの顏も兀つゝ
世を秋風の目には見えねど　手にはさゝらの音に驚く
身は月雪の哀れしらずも　目に花鳥の遊びなれにし
そも勸進の橋はあれども　腰の批抄に名を流すらん

七夕姬の和讚　三首　　百阿佛

星のねがひもあまの川に、世をかりそめの夢のはし、その曉をおもへとて、
さゝがに姬とは名づけたり。

ノ櫻ニ勝リテ、廟前ニ此花ヲ奉リケルトゾ。作者ノ姓氏ハ蚤辭ニ出デタリ。

挽歌 并序　　渡白狂

我里なりける人の子の、蝶鳥にもてはやされて、いとど美しう生ひたちしが、春もきさらぎの三日のゆふべ、その月影とともに消えうせぬ。つねは我師の膝になれて、あの袋戸のうちに猿の子ぞあなる、さうぞき舞はして、などたはぶれしに、それもきのふの俤にそひて、蓬の風も吹あへね、野邊の草葉の露のみぞ残れる。

花にそよぐ、涙も露もつきせねば。猿のたもとは有ながら、みじかかりける春の夜や、夢に夢見し舞の袖かな。

○評ニ云、此歌モ樂府ノ體ナガラ、前ノ三句ハ七五ニ韻ヲ蹈ミ、後ノ一句ハ七々ニ韻ヲ蹈ム。尤モ歌ノ韻法ニシテ、總テハ八句四韻ナリ。本ヨリ樂府ノ常法ニ、發語ヲ句外ト成セルヨリ、和歌ノ求韻モ五文字ハ言捨ナリ。然レバ此等ノ歌ヲ以テ和漢ノ通用ヲ稱スベキナリ。

比丘尼の曲(一)　　岸昨嚢

(一)勸進比丘尼、比丘尼の姿したる賣春婦

一服一錢一期の中
最期の一念雲脚淡し

行先もその行先もてくるほの(一)
絲きれぬればもとの木のきれ

佛奉レ菊歌　苗　宰　陀

牡丹は花の王といへども　賤がかきねの荒たるをきらひ
さくらを誰か花といふらん　手をらぬ峯の雲と見てのみ
萩にたむけの名は有ながら　をらば袂のつゆけからまし
菊はむかしの友ならぬかは　此ほとけにぞ奉るべき
思ひしまゝの世や住替へて　しるしの石の木葉がくれに

○評ニ云、此歌ハ、樂府ノ古體ヨリ、十句ニシテ五韵ヲ用ユ。去ルハ隔對ノ法ナガラ、論セバ大和ノ新製ト云ハン。去レバ一篇ノ稱スル所ハ、其師尙白老人ノ生前ニ菊ヲ愛セシヨリ、今ハ西行

(一)木偶

○評ニ云、此歌ハ全篇六章ニシテ、毎レ章ニ三句宛ナルヲ、率(いで)ヤ此扇ニト、拍子ヲ換ヘテ、結文ハ和歌ノ語路ト成セル、俗ニハ算(かぞへ)歌ノ格トヤ云ハン。然ルニ此歌ノ韵法ハ、和歌ニ求韻ノ古製ナガラ、例ニ我家ノ新格ヲ加ヘテ、前ノ五章ハ、起語モ結語モ互韻一協ノ體ナガラ、後ノ一章ニ韻ヲ換ヘタルハ、レヌノ舌音ニ前ヲ繫ギテ、結文ハウクスツノ韵ト成セル、漢ニ秋風辭ノ如キ、六韻一叶ノ騷論モ、此等ノ才覺ト察スベシ。音韵ハ暫ク古法ヲ守ルノミ。總テ推量ノ沙汰ナレバ、後ノ人ハ例ノ勘察セヨ。扨一篇ノ註スル所ハ、其一ハ扇ニ寄セテ逢(あふ)ノ字ノ緣語ヨリ班女ガ恨ミタル古語ヲ假リ、其二ハ故鄕ノ扇ヲ見テ法顯ノ歎キシ故事ヲ合ス。其三ハ便面(五)ノ詩歌ニ殘リテ人ノ記念ノ果敢キヲ云ヒ、其四ハ源氏ノ生別ヨリモ今ノ死別ノ悲ミヲ云フ。其五ハ末廣ノ詞ニ敵シテ世ノ定ナキ有樣ヲ云ヒ、其六ハ貫之ノ歌ヲ摘ミテ此世ノ永キ別ヲ云ヘルニ、招魂ノ二字ハ追慕ノ親切ニシテ一篇ノ骨節ト知ルベキナリ。但シ此扇ハ越ノ伯兎ニ傳ヘテ、百栗莊ノ家珍ナリト。所々ニ傳寫ノ違モ有ルベシ。

辭世の詞

宇治の通圓

(五)扇面

そもや扇は、人(一)のかたみに殘りて其名を恨みたるあはれさも、此扇のあはれにはいづれ。

そもや扇は、人(二)の國に見て古里戀しう思ひけむ、この扇の戀しさにはいづれ。

そもや扇は、人の別れにのぞみて詩をも歌をも書かはしたらん、此扇の歌にはいづれ。

そもや扇は、朧夜(三)の名に殘りて、又もと人のちぎりけむ、此扇のぬしなきにはいづれ。

そもや扇は、末のひろごりてめだたき物にいふなるを、此扇のかなしさにはいづれ。

そもや扇は、草(四)の袂にはあらねど、穗に出てまねく花かとぞよみぬ。いでや此扇にその玉を招きて、明暮の扇にあはむとぞ思ふ。

(一)班女が閨の扇の故事

(二)法顯の故事、徒然草に見えたり

(三)光源氏が弘徽殿の細殿にて朧月夜の内侍に逢ひ扇を取換へて分れし事、源氏物語花の宴の巻

(四)古今「秋の野の草の袂か花薄穗にいでて招く袖と見ゆらむ」

稿ヲ改ムルトテ、今思フニ、白髮ノ魂祭ハ其日ノ惑情ハ演ベタレド、發句ハ祭ル姿ニ非ズ。此故ニ參ノ字ヲ以テ步行ノ樣ヲ形容セシニ、常季ノ詞モ慥ナラズ、増テ切字ノ入レ所ナシ。此等ヤ有樣體ト云ヒテ、まゐる心のかたみながらにト下ノ句ヲ云ヒ次ギテ、俳諧ノ歌モ然ルベキヤト云ヘルニ、寶ニモ前書ノ咏嘆ヨリ墓參ノ哀傷ヲ評セバ、玉屑ニ云ヘル蛩螿ノ悲ミ有リテ、吟ノ一字ヲ題センニハト、漢家ニ杜陵ガ三字ヲ假リテ、白髮吟トハ題セシナリ。誠ニ題類ノ太切ナル、此等ノ詮義ニ知ルベシトゾ。但シ此論ハ古文後集ニ黄堅氏ガ麤學ノ沙汰ナリ。然レバ今ノ歌類ニ詞曲吟讃ノ類アルハ、漢家ニハ文選ニ隨ヒ、本朝ニハ文粹ニ效ヒテ、詩歌ハ本ヨリ一根ナル故ニ、此等ノ題ヲ交ヘタル也。後ノ人例ノ考フベシ。

扇の歌 幷序

東花坊

忘るまじ、此扇は我翁の手になれて、木曾寺の舊草に殘りしを、其時の故ありて我もとには傳へし也。されば扇の心なからんにも、此鉑のひかりの世をてらして、風雅の徳のひとへならぬこそ、我道のためには尊けれ。

燒みそに灰のついたは面白し
なまやけなるはちときらひ也

白髪の吟 并序　芭蕉翁

便も文月の玉まつる比、武陵より古里に歸るに、廿年の月日も夢なれや、北堂の萱草も霜がれて、今はその俤だになかりしが、何事もむかしに立ちかへりて、はらからの鬢しろく眉しわみて、つれなき命ありとのみ、いひ出る言の葉もなきに、このかみ守袋をほどきて、母の白髪をがめよ、浦島が子の玉手箱に、汝が眉もやゝ老いたはと、年月のおこたりはかたみに泣つゝ、
一家みな杖に白髪の墓まゐり
まゐるこゝろのかゞみながらに

○評ニ云、此吟ハ遺稿ノ夜話ニ題類ノ評論アリ。其論ノ略文ニ、「故翁嘗テ官ヲ辭シ給ヒ、故郷ヲ隔ルコト廿餘年ニシテ、或ル年此懷舊アリ。去ルハ天和ノ始トゾ。其後伊賀ノ西麓庵ニテ、例ノ文

(一)魂

昔ながらの鮎は忘れね　出店の酒に月をわびしか

○歌の類　雑題

壽老人の賛　正親町公通

つく〴〵と見れば短きあたま哉

命ながきにおもひくらべて

むかし宗祇の播磨へ行とて山崎に立寄給ひしに其使に小鍋ひとつあつらへて　宗鑑法師

忘るなよ連歌の點とはりま鍋

いづれか墨のつかであるべき

題不知　秋之坊

此坊ハ、芭蕉翁ノ稱名ヲ得テ、三越ニ名高キ道心ナリ。

花にあそびて身を忘るなよ　月にひかるゝ影も見えつゝ

音にも珠洲の御牧なればや　霞にいばふ聲ぞ聞ゆる

寄二團扇一戀　高　左　把

團扇は人の袖になれつゝ　風のたよりの裏表ある

(一)この手柏のそら言なりと　とにもかくにも君をまねかむ

越の巴兮より鮭の鹽引をおくりて、かの山中尋レ酒たるをかしさ、其比の詩情も忘れがたければと、よろづに書あつめたる文の返しに

蓮　二　房

鮭とやさけぬ人の戀しさ　酒たづねけむむかし思へば

苞に越路の波やつゝみて　鹽引なれば袖もぬれしか

蓮二師の鮭の詩を和して　得　巴　寫

松にひさしき文の嬉しさ　其葉につゝむ我こゝろには

(一)萬葉「奈良山のこの手柏の二表とにもかくにもねじけ人のとも」

（一）命婦々々伽もせず　手ぬぐひを花野にそむ
あるき神にさそはれて　（二）松坂に明けはてぬ
鼠さへ歯もあはず　ねむり／＼鼻をあぶる
花も香も老の身に　命婦々々伽もせず

雨日愛二蝸牛一　豆風曲

かたつぶり／＼　雨の日のおもしろく
（一）國はおもし角のうへ　家はかるし殻のうち
虎にあらで竹の園　龍に似て茨の垣
手水鉢にあそべども　なめくじりの憂名なし

野馬の贊　桃花仙

春の野馬の狂ふ比しも　遠山ざくら散りやしぬらん
足も千里の風にいさめば　尾に一村の雲をうづまく

（一）禁中に飼はれし猫が位を賜はりて命婦のおもとと呼ばれしこと枕草紙に見えたり
（二）「松坂こえた」は踊のはやし詞

（一）蝸牛の角の上に蠻觸の兩國ありて相爭ふこと莊子にあり

かの僧脇も衣ぬぎ捨て、　鮓の一夜をあかす酒盛

遊女泣ㇾ老　　伊東恕

ひとり寐の肌さむく　霜とさへきえもせぬ
錦木は立てしれど　杓子は(一)盛て見ず
冷飯の夏はすぎて　雑炊の秋もくれぬ
蟲もまた草の名の　いつまでか音を鳴む

恨ㇾ別　　佐麥士

此詩ハ尾城ノ作ニシテ、今ノ名ヲ出セリト、搔餅ノ記ニ其評アリ。

野邊の尾花の何まねくやら　風の名さへも神おくりとは
松はしぐれぬ色に笠きて　梅にさくらに藤にまてとや

呵ㇾ猫　　岸倚彦

首尾の吟

(一)此遊女は宿場の飯盛女郎なるべし

うまし雑煮の春に逢ひつゝ　我すむ軒の梅も咲きけむ
星のひかりも松にをさまりて　遠山かつら鴉啼くなる

鵜舟の遊覧　梅長者

作者ハ童平也。此名ハ文鑑ニアリ。八菊ハ寶生家ノ能師ナル故ニトヅ。

水無月のはじめ、伊勢の八菊をもてなさむと、爰の鵜飼見の模様をつぐるに、風爐に雲龍をはこばせ、樽に毛氈を荷はせたらんは、大炊川の行幸に詩のふね歌のふねの風情過たらん、今は俳諧の物數奇より、鵜ぶねに麥飯と思ひよれば、闇のとろゝも面白からんと、片荷は菅むしろに竹筒をくゝり、片荷は擂鉢をあみに入れて、擂小木も取添たれば、名におふ長良の夕涼に、人もあやしとは見るらん。さて宵月の影も消て、鵜舟のかゞりは日野の山陰よりほのかに、稲葉の松風も波にさゞめきて、世にたとへなき見物にこそ。

鵜繩みだるゝかゞり火の影に　つみもむくいも思ふ隙なし(一)

(一)謡曲鵜飼「罪も報も後の世も忘れはてゝ面白や」

（二）石川丈山の歌「わたらじな蟬の小川は淺くとも老の波そふ影もはづかし」

（二）蟬の小川の影もはぢずや　いつか蹴あげの泥をあらはむ

長北柱

四季の詠

作者ハ長野氏ニシテ、越ノ新潟ニ住ス。長鷲洲ガ家弟ナリ。

我朝起を花にとがめそ　時鳥には目もたのまじを

雪の火燵のむらさきならで　月に宵寐の老はにくむとも

去者日疎

馬才人

世の中の聖靈を見れば　ひとり來てひとり歸る

麻柯の杖にすがり　蓮の葉の笠をいたゞく

刺鯖の孫はもてど　抹香の佛をきらふ

今ぞしる鴨川の　末はしら河となりぬ

年の賀

百花坊

此名ハ除風ガ標號ニシテ、讃岐ノ一夜庵ニ住ス。宗鑑ノ舊跡ナリ。

(一)亥の子にいの(去なん)をかく

(一)猿が挑灯と釣鐘を一荷に擔ひたる畫なり、挑灯に釣鐘の諺の意
(二)月の名所

待レ砧ニ戀　　澤嵐七

作者ハ羽ノ鶴ガ岡ニ住ス。深澤氏ノ優人ニシテ、吾仲左角ト書通ノ友ナリ。

月もる閨にたばこ吸ながら　ふけ行鷄も鐘も物かは
歌をもよまず詩をもつくらず　砧の數に指をれとや

寄レ餅ニ戀　　松丁牧

臼と杵とのはなれがたきに　今宵のこの名はうらめしき(一)
まき繪の重のかさね〲も　君とねのこの數はかざらじ

挑灯ノ吟　　陳素六

作者ノ兩名ハ搔餅ノ說ニアリ。此詩ハ京師ノ作ナリトイフ。

世をぶら〲と猿に荷はれて(一)　身をつり鐘の浮名立ぬる
月のあかつきは廣澤に捨られ(二)　花のゆふべは東山にまよふ
五月の空の水鷄にはねぶり　晦日の闇のくだかけにたゝく

(一)雪をしのぐ旅の薪　(二)雨にやどる狩の蓑
風にけづる櫛ありて　霜にそむ鏡なきを
むかしより此木のみ　日の本ももろこしも

薊の花　　水陣人

若紫の野もなつかしく　角は心の色にしもあらず
(一)眉はきの名もしらぬ男の　鎌磨そばに物思ふらむ

業平の畫贊　　桃花仙

弓箭ヲ負ヘル束帯ノ像ナリ。

むかし男ありけり　詩に歌にくらからず
あくた川に戀わたり　武藏野に蹈まよふ
(一)名は月と花とに聞え　義は弓と箭とに見ゆ
終に行道を知りて　しき島の神となりぬ

(一)佐野源左衛門の故事(二)秦始皇の故事

(一)鬼の眉はきは薊の花の俗稱

(一)慈鎭和尚「花をめで月をながめし古のやさしき人はこゝに在原」

ハ竹林ニ河水ヲ廻シテ、屋敷ヲバ水國館ト云ヒ、茶廬ヲバ此君菴ト云フ。其館ノ名勝ナリトゾ。後對ハ文武ノ稱ニシテ、其名ノ風流ヲ添ヘナガラ、花ゾ咲キヌルトハ本歌ニ敵シテ、語ニ酬轉ノ絶妙ト稱スベシ。況ヤ七八ノ結語ニハ、冥途ノ鳥ノ名ニ寄セテ、同ジ道ニト戀ヒ慕ヘル、近クハ朋友ノ信ヲ盡シテ、遠クハ生死ノ道ヲ忘レズト云フベシ。此公ハ金城ノ駒萬子ナリ。終焉ノ記ノ龜巢ノ註ニ互見スベシ。

晩望　　岡未格

作者ハ岡田氏ニシテ、信ノ善光寺ニ住メリ。獅子門ニ書通ノ俳士ナリトゾ。

山時鳥松に寐ざめり　孤村の月の水よりも涼し
酒にたばこに下戸ならぬには　青葉の雨の晴てそのよち

松の讚　　豆風曲

此松ハ賀ノ金城ニ在リテ、作者ハ豆田氏ナリトゾ。錫文ノ評ニ互見スベシ。

代々の歌世々の詩に　ときはなる松の色

（一）胞衣の形を古來蓮の葉に比したり

（一）賴政最期の歌、「埋木の花咲くこともなかりしに身のなる果ぞあはれなりける」

（二）時鳥は冥途の鳥なりといふ俗傳あり

花は佛のお腰かけられ　葉は產神の胞衣にたくみて（一）

極樂の繪の噓にあらずば　我は翡翠となりてあそばめ

梅嫌　岸倚彦

作者ハ闇ノ論ニ名錄アリ、嫌ト戾ニテ和訓ノ俗習トゾ。

難波津にさく花にあらずも　鶯はその名を憎むとよ

梅の白きをあにもどかめや　我日の本の珊瑚なりしを

悼二水國公一　蓮二房

越のたよりの風も常ならぬ　世をあだし野の夢かとぞ思ふ

月の夕部の水に影なきも　嵐や夜半の竹に聲あらむ

武は景季が梅をかざして　文は賴政（一）の花ぞ咲める

さよ時鳥（二）さそはねばとて　我も行くてふ道は忘れず

○評ニ云、此詩ハ風姿アリ風情アリテ、和漢ニ通用ノ鑑トヤ云ハン。去レバ前對ノ水ト竹トハ、其地

水と岩とのふたつ鏡に　四季もながらの氣色見よとや
春は櫻の日にかゞやきて　夏は螢の闇もすゞしさ
鹿の鳴音の物おもはすも　鴛の添寐の夢もつきじな
老を養ふ瀧はあれども　是ぞいのちの洗濯の川

○評ニ云、此詩ハ全ク賦ノ體ニシテ、四季ニ四詠ノ分明ナル、誠ニ風景ノ四絶ト云ハン。但シ鏡ヲ鏡岩トハ、略語ニ似テ鄙談ナリ。其岩ハ美濃ニ名高キ稻葉山ノ北面ニ聳エテ、例ノ長良川ハ東西ニ横フ。櫻ニ螢ノ花和ナル、鹿ト鴛トノ物淋シキ、國ニ無雙ノ名蹤ト云フベシ。然レバ此詩ノ評スル處ハ、二ツ鏡ノ風流ヨリ、四季モ長良ト詞ヲ繋ギ、國ニ養老ノ名ヲ竝ベテ、結句ニ諧語ヲ用ヒタル、此等ヲ十成ノ俳詩ト稱スベシ。作者ハ今ノ長良ニ住ス。泊楓老人ノ長男ニシテ、林氏ノ優人ナリ。

詠レ蓮ヲ　　其風子

作者ハ越中ノ城ケ端ニ産シテ、市中ノ隱者ト稱セリ。

一年の小松殿北山には茸狩の遊路の御酒宴に於て主馬の盛久一曲一奏の事關東までも隱なし」(二)「松殿」は「小松殿」の誤
(三)能

ヲ結句ト成セル、和漢ノ操ハ更ニシテ、總テハ探文ノ絕妙ト稱スベシ。作者ハ尾城ノ武門ニシテ、近松ヲ氏トシ茂矩ヲ名トス。其祖ハ美濃ノ山縣ニ產シテ、北野天神ノ氏子ナリト。今ハ軍法ノ家ニシテ、練兵堂ハ稱號ナリトゾ。

戲レ花ニ　岩長羽

作者ハ能登ノ七尾ニ住ス。岩城氏ノ優人ニシテ、司鑑ト從弟ノ友ナリトゾ。

花もねむれば鳥も眠れり　梅の横臥のいとどさびしき
暮てにしきの蹈皮もはかねど　いざ山寺の鐘つかぬ間に

笠　丹以之

作者ハ丹羽氏ノ風人ニシテ尾城下ニ放遊セリ。

蓮の葉笠と歌によみしを　五月乙女の名の泥によごれて
あみだはなぞや骨ばかり著て(一)　花の都の西はしらずも

鏡岩詠ニ四季ヲ一　林有琴

(一)阿彌陀佛の後光を笠の骨に見立てたる也

師走の朝寝　　仙　里　紅

身は捨杵の餅もつかねど　　春まち顔の梅は咲きてよ
闇にくらぶの坂も越えねば　　世をしら川に漕わたるかも

○評ニ云、此詩ハ黄鸝園ノ歳暮ニテ、賦ニシテ興ノ體ナガラ、梅ニハ暗部ノ古歌(一)ヲ摘ミ、白川夜船ノ俚語ヲ採リテ、誠ニ俳諧ノ滑利ト稱セン。作者ハ獅門ノ十哲ニシテ、摺小木箴ニ名錄アリ。

松茸狩　　松　丁　牧

秋の時雨の心あるには　　嵯峨の山々狩くらしつゝ
つぼむに袖の香をふくみては　　ひらくに傘の柄をさゝげぬる
そも仲國が嗅や出して　　さて盛久も取りて上けむ
遊路の時も酒はひやとよ　　包やきにと紅葉をぞたく

○評ニ云、此詩ハ全ク賦ノ體ナカラ、後對ハ例ノ寓言ニ似タレド、嵯峨ニハ仲國ガ小督ヲ嗅出セル樣ヲ寫シ、茸狩ニハ盛久(一)ガ松殿(二)ヲ慰メシ亂舞(三)ヲ含ム。然レば西行ノ歌ヲ起句ト成シ、樂天ガ詩

(一)古今「梅の花匂ふ春べは暗部山闇に越ゆれどしるくぞありける」

(一)謠曲盛久「如何に盛久…

民の詞　　　　各東羽

作者ハ文鑑ニ名錄アリ。獅子門ノ親族ナリ。

瓜も茄子も花のさけばや　さよけも君の爲ならぬかは
あつぱれ鍬の柄をとるからに　我名わすれぬ心やさしさ

鶯　　　　渡白狂

擬二古詩一

宿のうき名の梅に飽きてや　竹を一夜のしのび妻とや。
梅こひしとて籠に鳴く日も　竹にはくちぬちぎりあればや。

○評ニ云、此詩ハ一字三韵ノ格ナガラ、梅ト竹トヲ四句ニ配リタルハ、古詩ノ體ト云フベキナリ。本ヨリ一字三韻ハ、漢家ニハ多ケレド、和訓ニハ語路ノ分ケ難キヲ、疑辭ト云ヒ嘆辭ト云ヒ、口合ノ三別ヲ以テ、三段ノヤノ字ヲ用ヒタル、例ニ大和ノ新製ト云ハン。然レバ一篇ノ詮ズル所ハ、鶯宿梅ノ古語ヲ假リテ鶯ノ一字ヲ含メタル、格ニハ隱見ノ絶妙ト稱スベキナリ。

筆はよはひの日もおほからで　文字を傳ふる世ははてしなく
口にいはれぬ戀をかよはし　足のおよばぬ思ひをはこぶ
都金に兎のさのみやせてや　時雨に鹿のかくばぬれつゝ
そもや焰魔の帳をつけながら　いかに遊女の噓をつくらん

憐二小傾城一　渡右範

作者ハ文鑑ニ姓氏アリテ、黄山下ノ隱士ナリ。

身は夕顏の宿にしのびて　たもとの露の晝もねられね
平もとゆひの蝶にはあらねど　鏡の花に舞あそぶらめ

對レ花感レ老　僧音吹

作者ハ越ノ安居寺ヲ辭シテ其麓ニ嘉遁ス、閑居ヲ柳明菴ト云ヘリ。

春も夢とや花に時あり　山もねざめよ鳥と鐘とに
笠にいくたりけふも暮れ行　よしや芳野の里もよしなし

雪の降とても　春めきながら
闇は　あやなし　たれかいふらむ
窓に　香をおくる　あかつきのはな

此詩ハ唐ノ李太白ガ三五七言ニ效ヒナガラ、和ト漢トニ音訓ノ差別ヨリ、句ノ配リノ遂目チ見ルベシ。作者ハ高田氏ニシテ、尾城下ノ逸人ナリ。

擬レ古　張昇角

作者ハ文臺ノ序ニ姓氏アリ。

松と竹とに大路そよけば　鬢にあぶらの太郎月とや
禮は神代のかたち殘りて　餅のすきなる上戸めでたき

筆　岸昨獲

此詩ハ萬葉ノ假名チ假ツテ都金ト時雨トノ二字ニ對ス。大和ニ對類ノ一格ト云フベシ。

（一）古今「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ」

（一）正月の異名

葛の一重に師直はうらみ　雲の千里に成忠はしたふ

木葉も苔も名は埋ずや　つれぐ草の穂にぞ出ぬる

柳後園の晝寐　馬才人

馬才人ハ洛ノ吾仲ナリ。詩歌ノ時ノ狂名ナリ。

柳の雨の軒にはれては　鳥に心もおどろかぬやら

花のさく日も花のちる日も　此盃の夢はさめずや

愛ニ牡丹一ヲ　伊東恕

作者ハ杓子頌ノ名錄アリ

牡丹に蝶の日はながしとて　猶も木陰に晝寐こそすれ

我は寒山のひまもなけれど　心のちりの箒わすれね

詠レ梅ヲ　高左把

梅よ先ひらけ　みんなみのえだ

今宵は葛の風もふかねば　そらさへ櫨(はじ)の色に出(いで)しか
世々のちぎりはよし(葭)長くとも　年のあふせのあし(蘆)のみじかさ
まつる心は歌にやはらぎ(和)　ちかふ詞の詩にもあるから(唐)
我もねがひの衣かゝさき(一)　白きを見ればふけにけらしな

○評ニ云、此詩モ律法ノ新製ニシテ、例ノ大和ノ一格トヤ云ハン。一二ハ葛ト櫨トヲ以テ漢ニ前對ノ法ナガラ、中間ノ二對ニハ文字ヲ對セズ、葭芦和漢ノ四字ヲ以テ、此等ヲ意對ノ絶妙ト稱スベシ。但ヤ假名ニ眞名ヲ附クルハ、催馬樂ノ古製ナリ。作者ハ越中ノ富山ニ住ス。池田氏ノ官士ニシテ、先師ト北蘭ノ友ナリトゾ。

假名詩類(かなのしのるい)　雜題

兼好法師の贊　森花仙

硯にひとり靜(しづか)なるさまは　物狂はしき法師とも見えず
安部野(あべの)の花に筵(むしろ)おりしか　木曽路(きそぢ)の月に袂そめけむ

(一)「かゝさき」は「かささぎ」の誤歟

腰には弓の老いにけらしな　をさまれる世に山田もるてふ

祝二艸餅一　相左角

若菜は君が爲とよみしかど(一)　蓬はけふの餅につかれしを
名も鶯のいろにめでけむ　げに花よりと見れば見あかね

〇評ニ云、此詩モ萬葉ノ體ナガラ、稱スル所ハ三四ノ面通味ナラン。咄ニ草餅ノ撮ミタルヲ鶯ノ振ニ喩ヘ、芋頭ノ蹲リタルヲ鵜ノ形ニ喩フ。去ルハ俳諧ノ形容ナリ。況ヤ花ヨリ團子トハ民間ノ俚語ナルナリ。然ルヲ第二韵ノ鹽ノ字ニハ假名遣ノ論アルベシ。庵ト云ヒ顔ト云ヒ、撥ネル字ハ總テホノ字ヲ用ヒタレド、故實ニゾ道理ナキ。故ニ我朝ノ字書ヲ見レバ、シホトモシヲトモ假名附アリ。惣ジテ假名遣ト云フ事ハ、定家卿已後ノ沙汰ナリトヤ。道理ノ知レヌ事多シ。然レバ兩韵ノ序說ノ如ク、其字ニ其理ノ明ナラヌハ、時宜ニ隨ツテ用フベキニヤ。例ノ勘察スベシ。作者ハ二方樓ノ記ニ名アリ。

喜二七夕晴一　池二川

(一)百人一首の光孝天皇の御歌

怨ニ七夕ヲ戀　鹿安道

こよひ待つ身のいとゞあさまし（淺猿）　何たのみけむ星のそらごと（虚言）
人のねがひの糸かなひなば（菜葉）　いかに一夜とちぎりそめたる（塗樽）

○評ニ云、此詩ハ恨ムル戀ナガラ、逢不レ逢戀トヤ云ハン。誠ニ怨情ノ的白ナル、此等ヲ俳諧ノ微中ト賛シテ、和歌ニモ盡キザル所ト稱スベシ。「按ズルニ、淺猿トハ例ノ假訓ニ意ヲ運ビテ、此類ヲ大和ノ古文ト云ヒ、虚言ハ常語ニテ論ニ及バズ。然ルニ菜葉ト塗樽トハ、全ク作者ノ働ニシテ、菜葉大根葉ハ例ノ俗習ナリ。況ヤ塗樽ノ古語ヲ假ソテ物ヲ染ノ義ニ據レル、字訓ノ響モ文字ノ義モ、此等ヲ自作ノ絶妙ト稱スベシ。

右合せて五首は、文操に新製の二品也。前の三首を萬葉韵といひ、後の二首を二字韵といふ。畢竟は求韵の要にして、作も不作と其間にしるべき也。

老圃の詞　岸昨嚢

我をかたしと人の見るかも（可）　露にしぐれに笠のあけくれ（旭曙）

（一）古今「陸奥の淺香の沼の花がつみかつ見る人に戀ひやわたらむ」
（二）萬葉「淺香山かげさへ見ゆる山の井の淺き心は我が思はなくに」

さをとめの名のいかにつゆけき（露濃）　花もかつ見のよしやよの中（俗中）
淺香にあらぬ沼のかげさへ（影副）　鏡の山のそこにはづかし（慙通）

○評ニ云、此體モ萬葉ノ韵ニ似タレド、多クハ訓ニシテ、音ハ稀ナラン。然レバ此格ノ要スル所ハ、和漢ニ二字ノ熟語ヲ尋ネテ、私ノ韵礎ヲ作ルベカラズ。狂ト不狂トハ此堺ナリ。「按ズルニ露濃(つゆけき)トハ雅俗通用ノ平話ニテ、コイトモケシトモ例ノ通語ナリ。俗中ノ二字ハ日本紀ニ出テ、影副ハ萬葉ニ在リ。慙通ハ眞名ノ伊勢物語ニ、カハシヲカシトハ例ノ略語ナリ。然レバ淺香ノ花ガツミ（一）ト詠ジ、影副所見山井乃(かげさへみゆるやまのゐの)ト誦メル（二）、總テハ古歌ノ裁入レニテ、此等ヲ二字韻ノ鏡ニ見ルベシ。去レド闇思(わざくれ)トモ絲瓜(へちま)トモ、俗習ニ用ヒ來レル故實ノ詞ハ論ニ及バズ。但ハ自己ノ作ト云フトモ、或ハ古文ノ例ニ效ヒ、或ハ文字ノ義ニ據リ、或ハ字訓ノ響ヲ假ラバ、却テ奇絶ノ作モ有ルベキナリ。其等ノ設ハ大和詞ニ見ルベシ。

ことし文月のはじめ、黄山の蓮師より、眞名の二字韵もあればとて、戀の一章をおくり給ひしが、をりふし、たなばた祭る比にて、爰にも戀の題をとりて、

おなじく萬葉體をもてはじめて仄韵の筆をこゝろむ

毛物子

天津みそらに鶴や飛かふ　我日のもとの神ぞたふとき解
筆のはやしの花もさくらん關　硯の海の波はしづかに蟹

○評ニ云、右此三首ハ萬葉ノ韵ノ濫觴ニシテ、或ハ音ヲ用ヒ、或ハ訓ヲ用ユ。去ルハ其書ニ跋渉シテ、多クハ古例ニ據レルニヤ。學ブ人ハ例ノ狂簡ヲ恐ルベキナリ。作者ハ賀ノ金城ニ住シテ、鹿熊(かく)ヲ姓トシ、安道ヲ　、　ヨリ詩騒ノ逸人ナリトゾ。毛物子ハ橘姓ニシテ、嘗俳ヲ侶鵠ト云フ。金城ニ　奇ノ名ヲ稱シテ、緇門官家ノ人々モ、友トシ學ビズト云フ者ナシ。名ヲ先師盧貫トヲ論ジテ、書通ノ遊敵ナリトゾ。

享保甲辰の夏ならん、かの萬葉の詩をひろめて、猶また二字韵の熟語あらばと、獅子庵に例の遊民をそやして、五月雨の夜の淋しさに、おの〳〵戀の題をさぐりて、はじめて二字韵の詩を製す。

田家の戀　　蓮二房

其の人それは「日の本の人の心のなかりせば我が唐國の妻ぞ戀しき」といふことなりと說き聞かす、狂言「茶盞拜」の趣向

(一)公任「嬉しさを昔は袖につゝみけり今宵は身にも餘りぬるかな」

詩者本通和漢之志了則也。今者六歲之先也焉、濃東有桃花老仙而、奈何捨我國之易讀假名而學他邦之難知眞名耶迚、新製平假名之詩而、令盡漢家之詩法者、誠謂本朝之文鑑者矣。於玆不恥我拙、頃日送蓮老師之歸美濃迚、爲假名之詩用眞名之韻止乎、老師稱其詩曰、先師昔有祭猫文而、斯所所交和漢之韻、今也以此詩之格可謂萬葉之韻與所。誠哉如放三文之箭而獲八百之雁、率夫不謂儌倖焉耶。仍以爾云。

松におほくの筆をふりしも　霜　相あふ秋の日さへみじかき　牆
つれなきけふの別ありとも　友　みのゝ時雨の忘るまじくは　桑

序亨保甲辰の歲旦に例の詩をあつめすべて萬葉の韵をもて一冊の模様とす其はじめに國君を祝して　鹿安道

去年うれしさを袖につゝめど(一)　箸　ことしは身にもあまりぬるかや　茨
我しら山もかすみそめたる　足　めでたい國の民はたのしゝ　獅

含レ露髭籠鮮　更思紫所縁
我郷何爲陋　日痩不二嬋娟一

贊二鳥羽繪之蒲萄吸一　　渡白狂

擧吸二蒲萄一何國儔　足如二竈馬一口如レ蛙
盗時有レ好威二童部一　夕遇二栽園一可レ振レ瘧

此圖ハ洛ノ全暇筆ナリト。詩ハ詼諧ニシテ、註ニ及バズ。其繪ハ濃ノ六之亭ニ在リ。但シ栽園ニ百菊チ移シテ、高臥郎ハ自稱ナリトゾ。

△假名用二眞名韻一序　竝詩　　廣安道

我聞、諸越之人者作レ詩了共不レ能レ此國之歌、大和之人者誦レ歌了共不レ能二彼邦之詩一。假令詞者有二音訓之違一歟、情者何迚隔二和漢一矣。聞則高麗人歟馴二大和歌一而誦二我唐國之妻所レ戀一(一)敷、琉球人歴遊二筑紫一而詠二紅葉赤間關之夕昏一集矣、皆只爲二風雅之通情一序哉。扨社所レ聞二彼邦之詩經一者、通二我朝之萬葉集一居、唐詩之風者爲レ似二古今集一與哉。

(一)茶壽拜といふ唐人、日本に來りて妻を持ちしが、或時「日本人無心自我唐國妻戀」といひて泣く。妻之を人に譯ねしに、

（一）枕草紙に「法師ばかり羨ましからぬはあらじ、人には木の端の樣に思はるゝよ」
（二）徒然草に「色好まざらん男は玉の巵に當なき心地なんすべき」

キチト轉ジテ響ルモ、作者ノ活法ナリ。此等ニ意地ヲ知ルベキナリ。其繪ハ越中ノ倚彦亭ニ在リテ、知二齋ノ家珍トセリ。

戲ニ影法師ニ　　水陳人

（一）木ノ端ノ影法師　羞レ恥ニ夜寒ノ姿ヲ
纔ニ寢ル既ニ望ム閨ヲ　（二）無レ當非ズ玉ノ巵ニ

○評云、此詩ハ例ノ諷諧ナガラ、徒然艸ノ意ヲ摘ミテ、今ノ法師ノ無風雅ヲ諷諫セシニ、身ヲ木ノ端ニ捨果テテ、月花ノ世ヲ宵寐セバ、玉ノ巵モ當ナキ心地ゾト、全篇ニ月ヲ含メタル隱見ノ法ヲ見ルベキナリ。結句ハ木端ノ繫ニテ、「玉巵無レ當雖レ寶非レ用」ト云ノ文選ノ詞ヲ採レル非ノ字ノ影略ヲ互見スベシ。去レド當ノ字ニ平仄ノ論ハ、例ノ兩韻ニ任スベキナリ。作者ハ尾陽ノ素水ニシテ、水陳人ハ標號ナリトゾ。

謝ス初茄子ヲ　　土方堅

作者ハ瑟々庵ノ記ニ名錄アリ

雖古神代春來者　東風吹寄天原

○評ニ云、此詩ハ羅山文集ニ在リテ、殊ニ我神ノ始ヲ云ヘレバ、爰ニ眞名ノ詩ノ首篇トセリ。然ルニ詩ト歌トハ、語路ノ拍子ニ聊ノ違アリテ、倭語ヲ用ユレド漢詩ト成リ、漢語ヲ用ユレド倭詩ト成レバ、此等ニ後君ノ評ヲ待チテ、詮ズル所ハ狂詩ト俳詩トニ一歩千里ノ好惡ヲ知レトナリ。

「按ズルニ、言語ノ拍子ハ本ヨリ俳諧ノ日用ニシテ、和歌ニ五七ノ幽玄ヲ知リナガラ、俳諧ニ四六ノ文法ヲ立ツルニ、例ニ一籏ノ意地ト知ルベシ。然レバ詩ト云ヒ文ト云ヒ、五七ト四六トノ拍子ヲ知ラバ、和歌ノ優情モ俳諧ノ平話モ、雅俗ハ言々ニ知ルベキナリ。

贊秋風像　蓮二房

世傳此老翁(一)　越路恨秋風

今見何難面　松殘夕日紅

○評ニ云、此繪ハ松ノ木陰ニ老僧ノ杖ヲ携ヘテ雲ニ夕日ノ殘照ヲ詠ズル體ナリ。去ルハ芭蕉先翁ノ越路ノ行脚ニ、「赤々ト日ハ難面モ秋ノ風」ト詠ゼシ旅行ノ愁情ヲ引替ヘテ、今見レバ景色ノ面白

(一)芭蕉

（三）「いつはりのなき世なりけり神無月誰がまことよりしぐれそめけん」

百九十橋」トモ「南朝四百八十寺」トモ、其類ヲ長安ノ語音トカ註スレド、我朝ノ人ハ語音ニ通ゼズ、何ノ道理トハ知ラネドモ古法ニ任ズルハ、例ノ故實ナリ。去レバ三四ノ結文ニハ、全ク和歌ノ詞ヲ摘ミテ定家卿ノ（三）神無月ヨリ、紙ニ文月ノ名ヲ寄セタル、荻ノ音信モ和歌ノ句鎖ニテ、此等ニ和漢ノ通用ヲ稱スベシ。但シ小菊ハ小杉ノ類ニテ、美濃ニ封紙ノ名産ナリ。二竹ハ戸田家ノ武士ニシテ、濃ノ岩崎ニ嘉遁セリ。先師ニ膠漆ノ舊友トゾ。「按ズルニ今ノ小菊ノ詩ト俄道心トノ詩ノ體ハ、大和ニ連俳ノ二樣ヲ盡シテ、此等ヲ眞名ノ詩鑑トハ云ハン。然レバ祖翁ノ恐レ給ヘル狂詩狂歌ノ難ヲ遁レテ、爰ニ雅俗ノ當用ヲ知ルベキナリ。

右此五首者、元祿之新製而、燈花詩叢之附錄也。左有序再撰文操而、爲大和眞名之濫觴、後人宜敷可勘察也。

眞名詩類　雜題

和栗山氏詩　　林道春

有雄元又有雌元　此氣浩然尤巨言

○評ニ云、此詩ハ全ク大和ニシテ、四十八願ノ佛語ヲ假リテ紙ノ縁語ニ結ビタルハ、戯ノ一字ノ誹諧ト知ルベシ。按ズルニ、此法師ハ歌舞ノ遊興ニ千金ヲ盡シテ若道心ト成レルニヤ。若紫ノ二字ハ其所縁ト聞ユ。此故ニ、七八ノ結句ハ初雪ノ風姿ヨリ梅香ノ風情ヲ含メル、一篇ノ風雅ハ此二句ニ在リテ、立而不レ恥者其由也與ト云ヘル論語(一)ノ詞ヲ裁チ入レタル、談笑ノ虚實ハ更ニシテ、文ニ摘採ノ絶妙ト稱スベシ、増テ梅香ハ紙子ノ臭ニ敵シテ、一篇ノ起結ト知ルベキナリ。誠ニ眞名ノ詩鑑ト云フベシ。

頃日從ニ二竹丈人一、祝ニ七夕之節供一而被レ贈ニ菊紙一束一。爰謝ニ毎レ歳之恩一而、聊寄ニ舊情一而已

一束荷恩何若輕　思レ君四百八十情
誰知小菊戰於荻　音信不レ謁文月名

○評ニ云、此詩ハ大和ノ風體ナガラ、論ゼバ連歌ノ優情トヤ云ハン。十帖ノ紙ヲ枚々ニ分ケテ、四百八十ノ恩情ヲ荷フトハ、誠ニ徹意ヲ盡セリト云フベシ。然ルニ十ノ字ヲ時深ノ切ニシテ、「春風三

(一)子罕篇に「子曰、衣敝縕袍、與衣狐貉者立、而不恥者、其由也與」

何不朝顏知我秋　松憑千歲幾程秋
凋時可恥祇王意　莫恨不知白露秋

○評ニ云、此詩ハ三韻一協ニシテ、詩意ハ註スルニ及バズ。祇王祇女ガ舊跡ハ嵯峨ノ祇王寺ニ在リ。發心ノ歌ニ、「萌出ヅルモ枯ルヽモ同ジ野邊ノ草何レカ秋ニ逢ハデ果ツベキ」ト誦ミテ、佛御前ヲモ恨ミズトゾ。然レバ此詩ノ三韻ハ、其歌ノ意ヲ摘デ秋ノ一字ヲ運ベルナリ。首句ト落句トニ不知ノ二字ハ、連俳ニ云ヘル同字異訓ニシテ、此等ヲ和詩ノ凡例ト知ルベシ。不知モ莫恨モ萬葉ノ熟語ナリ。

戲俄道心

四十八救の願　終に成る紙子坊
與風憎若紫　每物遣淺黃(一)
肩些有伊達　心曾無化粧
穴尊初雪旦　立不恥梅香

(一)野暮の意歟

ニ西行ノ山家集ト杜律ノ五言トヲ持チアルキ給ヘル、信古ノ實情ヲ顯ハセルナリ。此故ニ、七八ノ結語ハ假名ト眞名トノ通用ヲ稱シテ、遠クハ祖翁ノ遺命ヲ傳ヘ、近クハ我師ノ本懷ヲ遂ゲントナリ。

賛二雪中柳一

此給使二人思一レ古詩　梅花未レ識竹先知
知與レ不レ識孰爲レ愈　柳乍二氷凝一被二雪推一

○評ニ云、此詩ハ疊語ノ格ニシテ、法ニハ換骨ノ絶妙ト稱セン。去ルハ嵐山ガ夜雪ノ句ヲ假リテ覺ノ字ヲ識ノ字ニ換ヘタルハ、例ノ腰句疊ム時ニ語路ノ拍子ヲ調ヘン爲ナリ。增テ孰愈トハ、論語ニ知字ノ裁入ナリ。然レバ梅竹ノ知不知ヨリ、柳ハ知ナガラ雪ニ推サレ居ル、人ニ利鈍ノ用ヲ知レトニヤ。詩ハ誠ニ此等ノ諷諫ヨリ、孔子モ常ニ勸メ給ヘリ。此給ハ濃ノ野航亭ニ在リテ、祖翁ノ竹ノ給ト同ク十襲ス。柳雪堂ノ標號モ、此時ノ稱ナリトゾ。

詠二懸レ松葬一

者云些此詩之易レ學而、黄白之紛、歴稍有レ多則、世更成ニ狂詩之思一而、不レ田ニ于畑一學レ文之人者、成ニ(三)巴人薤露之和一共、向レ風而篏レ之則、不レ堪ニ于白雪之詠一焉。誠恐而可レ學、誠學而可レ思者、唯是此詩之風姿也則、風情者今之不レ及レ言焉。于レ時元祿乙亥冬、神無月十二日、試製ニ眞名之詩一而贊ニ故翁之畫像一者爾也。

其贊　　　東花坊

此翁昔在ニ武陵城一　野分芭蕉以レ雨鳴
蘭省得レ時櫻繋レ馬　廬山捨レ世竹棲レ鶯
歌羞ニ西上人之墮一レ涙　詩倣ニ杜工部寫一レ情
和漢文章誰可レ敵　假名不ニ必隔一眞名

○評ニ云、此詩ハ婉麗ノ法ヲ以テ和漢兩用ノ作トモ云ハン。按ズルニ、一二ノ起句ハ、祖翁嘗テ武江ニ遁レテ「芭蕉野分シテ盥ニ雨ヲ聞ク夜哉」ト、其世ニ響キタル發句ニテ、芭蕉菴ノ名モ此時ヨリトヤ。然レバ前對ハ一世ノ榮落ナガラ、白氏文集(四)ノ詩勢ヲ假リ、後對ハ一生ノ風雅ニシテ、常

(三)和する者の多きをいふ、文選宋玉の對楚王問に、「客有歌於郢中者、其始曰下里巴人、國中屬而和者數千人、其爲陽阿薤露、國中屬而和者數百人、其爲陽春白雪、國中屬而和者數十人」

(四)白氏文集に廬山草堂夜雨獨宿、寄牛二李七庾三十二員外詩に「蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草菴中」

（二）群盲象を摸する譬の意なるべし

人爾歴、爲先教誡之情而爲後文章之姿了則、花鳥之優游爾者爲殿樣也共、盡實情之餘迚、加陪助語副止乎。古之情者隨天理居、今之情者嗳人理歴。爾有則、温情之故、而知姿之新了哉。漸從李唐之詩人、增而至趙宋之作者則、詩爾者除助韵之字而、五七之間不費言葉、見習其身其儘之名人而、巧一字一言之妙、欲含無量之情共、似童部之屆言傳而、有聞人歴推量之沙汰也焉。實夫我朝者手爾波國也則、傚詩經之麟之皇矣而、可用焉哉乎也之詞梟矣。歌行之類者勿論之事也。其内音韻與平仄之事者、不知所用之道理共、暫不背古法耳也則、假令遇兩韻之字時者、可勿論用兩韻矣乎。從本見爲得詩聖之名杜律之五言七言了則、平仄之不合歴有多爾者、向不知者而論不知事則、夜歴日歴模象之費也焉。（二）熟思風雅之變則、詩者成騷、騷者成辭而、今者成詩歌與連俳了則、和漢有面々之物數奇而、誅人宛慰我宛、從詞遣之盛實、例知淋敷去與面通去則、詩者唯遊志之行處而不如知言語之無用焉。左

(一)韻瑞は五車韻瑞、活法は圓機活法、共に作詩の參考書

字也共、聽之時者和文也焉。左在共有故翁之所謂事、大和者從中昔之風俗、有狂歌有狂詩而、以如夫者千金是者疝氣秀句與口相之雜話、爲名附詩共歌共焉、左有者一座之酒興而、謂猿樂人之輕口矣、文章者例有姿情之一而、姿情有先後事者、從本詩歌之骨法也則、言語之面通味者可口傳了共、姿情之枯回者不心知與所。我今傳居共間之絲筋而、同以風雅不認於諸越、別以比興不狂于大和、實歷思被喚我朝之詩而、將有雅俗通用之一格事歷。乍左有、和漢語之音韻而爲用倭語之續了則、似通昔之狂詩而不遁翫法之罪止。所詮者爲蹈詩之六義些尋(一)韻瑞活法之古語而、用一字二字之韻礎居、據說文韻會之正義而、調五言七言之和訓焉者、何迚可成藪醫者之狂詩成表具師之狂歌矣耶。爰見羅山之七字城了則、其言取漢語以詠我朝之事而、此可爲骨彼可爲飾與者、一言萬當之凡例而、謂爲盡大和眞名之要矣夫。學彼人者可恐此、不恐此人者不學彼了。增而謂大昔之風俗則、比物風

和漢文操 卷之二

○詩類 附序

△大和眞名詩序 並贊　　東華坊

頃日撰分獅子庵之文庫迚、點檢燈花詩叢了則、從歌行詞曲之題類、雜五言七言之律詩而、大槩有一百餘首焉乎。去者從延寶之中比、及貞享之末迄、十餘年之草稿也。其詩也爲學李太白之風情、寫杜子美之風姿止乎、學之而思之則、心知而不口慊。扨者從音訓之違、決而知雖學物了矣。於茲從元祿之始思立大和之詩而、製假名與眞名之二樣了則、假名之詩者從五七之句法、殆爲似和歌了共、語路之拍子者謂漢土之詩矣。于然謂眞名之詩者、協音韻此調平仄些、蜂腰鶴膝之掟迄、一歴不背漢家之詩法、交以音訓之通路視之時者漢

あり。文に曲、節、地の三別なるにや。杖錢も風羅も例の狂名ならん。爰におもへば、泊船集に祖翁の遺詠の混雜せる、今さら往事をとがむるにかひなし。誠に難波の遺狀に、文章の反故は、武陵に在ながら我師の點檢にまかせ給へる、道の大任をおそるべくば、猶はた恐るべきは遺稿の評なるべし。

一通は猿簑集に出て世にしれる幻住庵記なり。されば此文に三通の子細は、始のは文章の無川をすぐり、中のは文章の花美をそろへ、終のは文章の花實をとゝのふ。道に三思の親切をたふとむべし。誠に此賦の花やかなる、彼記にはまさりておもしろきに、是を捨て彼を取れる、百世の師道をあふがざらんや。しかるに三通の口評にも、花實の論今更にして、記と賦との兩説あり。猿簑に出せる一通は、序文より全く記の體にして、幻住庵の風土をあらはし、今の一通は尤賦體にして、眼前の風景を演べながら、幻住の二字の觀相をつくせる、例の諷諫ならずやと、獅子庵の遺稿に此夜話あり。或は其稿の五祕の中に、故翁遺文を評するとて、此ころ我門の文集に松嶋賦のごときは文章の中の大事といふべく、戰場文も銀河序も、壺碑(つぼのいしぶみ)の結段なき、いづれも奥の細道より首尾を略して兹入れたれば、紀行は前書の法に似て、記賦の體をつくすべきにあらず。もし其集のかざりとて、それらの文章を兹入れば、そこにその子細を斷る(こと)べし。先賢をあがむる法なりとす。誠に道々の興廢は門人の選集によれりとは、儒書佛經の公論なるをや。こゝに畢鉢羅(ひつはら)の閉月を案ずべし。但三通の標號に、始のは杖鐘子とあり、中入は風羅坊とありて、終のは芭蕉庵と

ヲ遺稿ノ夜話ニ、假名眞名ノ配ヲ評スルトテ、故翁ノ夜話ヲ擧ゲテ、我嘗テ幻住庵ノ記ニ、魂呉楚ト書續ケタルハ一生ノ不案ナリ。魂ハ呉楚ト云ヒ身ハ瀟湘ト云フベキニ、何トテ手爾波ヲ失ヒケン」ト返ス〴〵モ悔ミ給ヘリ。此故ニ文賦ニモ、是ヲ第四ノ箇條ト成セリ。此等ニ文言返返ルト返ラザルニテ、和漢ノ差別ヲ知ルベシトゾ。誠ニ恐ルベキハ遺文ノ撰論ナリ。△笠取山ト黒津里ハ、記ト賦トノ口評アリ。彼ノ記ニハ前ニ景物ヲ書續ケテ、「笠取にかよふ木こりの聲ふもとの小田に早苗とる歌」トイヒテ後ニハ名所ヲ續ケテ「黒津の里はいとくらうしげりて」トアリ。此等ニ花實ノ二用ヲ知ルベシト、例ノ遺稿ニ夜話アリ。其外一篇ノ花ト實也。彼記ト此賦ヲ見合スベシ。△山谷詩集ニ「徐老海棠巣上。王翁主簿峯庵云々」二隱者ノ車ハ其註ニ委シ、擧グルニ及バズ。○西行ノ歌ニ「とく〳〵と落つる岩間の苔清水くみほすほどもなき住居哉」▲高良山ハ筑紫ニ在リ。僧正ハ加茂甲斐ガ戲子ナリト、額ノ裏書ニアリ。△莊子に「罔兩問」景云々」註ニ「影邊之淡薄者」

○評ニ云、祖翁に幻住庵の文は三通ありて、始の一通は落柿舍にあり、中の一通は此賦なり、終の

や人にうみて、世をいとひし人に似たり。何ぞや法をも修せず俗をもつとめず、いと若き時よりよこさまに好ける事侍りて、しばらく生涯のはかり事とさへなれば、終に此一筋につながれて無能無才を恥るのみ、勞して功むなしく、魂つかれ眉をしわめて、秋も半に過行くまゝ、風景朝暮の變化にても、又たゞまぼろしの住居ならずやと、やがて此文をとゞめて立去りぬ。

○註ニ曰▲宗鑑法師ハ、山崎ニ住ミテ、門前ノ旅籠屋ニ往キテ旅人ノ如ク朝夕ヲ喰ヒケルトゾ。寶寺ノ下ニ舊跡アリ。▲能因法師ハ白河ノ秀歌アリ。擧グルニ及バズ。○祖翁ノ奥の細道ニ「かたられぬ湯殿にぬらす袂かな」△謠物ニ「みちのくのそとの濱なるよぶこ鳥なくなる聲はうたふやすかた」トアリ。抄ニハ善知鳥とかけり。△知覺ト迷倒ハ、佛書ニ迷悟ノ二ナリ。△生死事大無常迅速ノ八字ハ叢林ニ巡照ノ誡ナリ。巡照トハ夜巡ナリ。○西行ノ歌ニ「宿かし鳥」トアリ。全文ヲ失ス。○祖翁ノ發句ニ「うき我をさびしがらせよかんこ鳥」●杜詩ニ「吳楚東南割。乾坤日夜浮」「按ズルニ、此二句ハ猿簑集ノ彼ノ記ニモ「魂吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭にたつ」トアリ。然ル

く。つたへ聞ぬ除老が海棠の飲樂も、市にありてかまびすしく、▲王道人か主薄峯の住居も、爰を捨てうらやむべからず。虚無に眼をひらいて嘯き、孱顔に虱を捫りて座す。たま〳〵心すこやかなる時は、薪を拾ひ清水をむすぶ。小歯朶ひとつ葉のみどりをつたふとく〳〵の雫をわびては、一爐のそなへいと輕し。前に住ける人もさすがに心高く、たくみ置ける物數奇もなし。持佛一間をへだてゝ、夜の物かくらふべき所などいさゝかしつらへり。さるを▲高良山の僧正洛にのぼり居給ひしを、ある人をして額をこふ。いとやすらかに筆をとりて、幻住庵の三字をおくらる。其裏には予が名を書きて、後見ん人の記念ともなれと也。山居といひ旅寐といひ、させる器物たくはふべきにもあらず。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱にかけたり。晝は宮守の翁彜の里人など入り來りて、猪の稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞きしらぬ咄に日を暮し、かつはまれ〳〵とぶらふ人も、夜座しづかにして影をともなひ、△罔兩に對しては是非おこらず。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂をこのみ、山野に跡をかくさむとにもあらず。病身や

（四）南風

いとひし跡とかや。ぬしは八とせばかりのむかしになりて、棲はまぼろしのちまたに殘せり。誠に知覺迷倒も皆たゞ幻の一字に皈して、無常迅速のことわり、いさゝかも忘るべき道にあらず。山はさすがに深からず、人家よき程にへだたり、石山を前にあてゝ、岩間山のしりへにたてり。（四）南薫高く峯よりおろし、北風はるに海をひたして涼し。折しも卯月のはじめなれば、つゝじ咲殘り、山ふぢ松にかゝりて、時鳥しば／＼過るほど、宿かし鳥の便さへあるに、木つゝきのつゝくとも出でじ、かつこ鳥我を寂しからせよなど、ひとり喜びそゞろに樂しみて、吳楚東南のながめにはぢず、五湖三江もこゝに疑はしきをや。日枝の山比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、膳所の城は木間にかゞやき、勢田のはしに雨晴れては、粟津の松原に夕日を殘す。三上山は富士の俤にかよひて、武藏野の古きすみかも思ひ出られ、田上山に古人をしたふ。さゝほが嶽千丈が峯、はかまごしといふ山あり。笠取山に笠はなくて、黒津の里人の色や黒かりけむ。猶はた眺望隈なからんと、後の峯にはひのぼり、松の棚つくり、藁の圓座をしきて、そを猿の腰掛と名づ

は、源家の義經より此二字を給ふよし。源支は但し俳名なり。はじめには了然齋ともいひ、其後は江金堂ともいへる、いづれも別墅の標號なりとぞ。

幻住庵の賦

風羅坊

五十年やゝちかき身は、苔柏の老木となりて、蝸牛のからをうしなひ、蓑虫のみのをはなれて、行衞なき風雲にさまよふ。かの宗鑑がはたごを朝夕になし、能因が頭陀の袋をさぐりて、松嶋白川に面をこがし、湯殿の御山に袂をぬらす。猶善知鳥鳴そとの濱邊より、えぞか千島を見やらんまでと、しきりに思ひ立侍るを、同行曾良なにがしといふもの、多病いぶかしなど袖をひかゆるに心たゆみて、象潟といふ所より越路のかたにおもむく。さるは高砂子のあゆみくるしき北海のあら磯にきびすを破りて、ことし湖水(一)のほとりにただよふ。(二)鳰の浮巣の流とゞまるべき芦の一葉のやどりをもとむるに、その名を幻住庵といひ、その山を國分山といへり。古き御社の立せたまへば、六根おのつから淸うして、塵なき心地なむせらる。かの住捨し草の戸は、勇士(三)菅沼氏曲水子の伯父なる人の、此世を

(一)琵琶湖
(二)琵琶湖の名物、士御門院「蘆の葉につなぐ浮巣も氷りつゝすみあらしたる冬の鳰鳥」
(三)菅沼曲翠はじめ曲水と號す芭蕉門人。膳所の藩士

入る右に早稲の香を吟じ、●臥佛老人は春にあそびて、島山の風情を詩に盡せり。しかれば今もいにしへも、此うら波のあとたえず、濱のまさごの永き世につたへば、さしも遊觀の人の便ならんかも。

○註ニ曰▲萬葉の十七ニ「大伴宿禰家持、以ニ天平十八年閏七月ハ被レ任ニ越中國守ニ」○萬葉ニ「多胡の崎木の暮しげにほとゝぎすき鳴きとよめばはた戀ひめやも」○萬葉ニ「多枯の海の底さへにほふ藤波をかざして行かむ見ぬ人のため」○「ありそ海波間かきわけかづく蜑のいきもつきあへず物をこそおもへ」●杜詩ニ「呉楚東南割。乾坤日夜浮」▲鼻曲トハ鰡ノ鮓ヲ曲物ニ入レタル形容ニテ有磯ノ名物ナリ。名吉ノ二字の筆占ヲ稱スベシ。○新後撰ニ「思ふ事ありその海のうつせ貝あはでやみぬる名をや殘さむ」△孟子ノ惠王篇ニ「君子遠ニ庖厨ニ」○芭蕉翁奥の細道ニ「早稲の香やわけ入る右にありそ海」●臥佛老人ハ山科ノ月派和尚ナリ。詩作多シ。擧グルニ暇アラズ。

○評ニ云、此篇は全く賦體にして、始には風土の由來を序し、中には島山の風景を對し、終には海山の産物を稱す。文章さらに花實の當然といふべし。作者は有磯の古老にして、姓を源常といふ事

かるに明峯の光禪寺は、洞家に四箇の本寺なるよし。本は七堂伽藍とか、國泰寺はむかし尊氏の建立にして、由良に法燈の光をつたふ。いづれも禪家の名區なり。神社は射水、布勢、箭代、礒部、和泉の天滿宮は相生の竹を生じて、直なる道を世にしめし、金田の虛空藏は枯木にあらはれて福德の名に花さかす。諏訪野の松、五社の宮の櫻、眞砂のちどりは歌人の跡をつたへ、入江のかもめは隱者の影にともなふ。湊は出船入船の帆をかぞへ、●吳東楚南の人をまじふ。かしこに明州の津はしらず、三越に風土の隨一と稱すべし。氷見御座、氷見批杓、鰯、鯔▲鼻曲とは鮓の名ながらも、名よしにはあらであしく聞ゆ。蠣、蜆、海苔、和布、○うつせ貝は歌仙に名だかく、鯯とるとは萬葉によめり。さて山里の土產には、葛葉笊、論田箕、早借筵、指崎繩、女良庖丁は賤が手になれて、終に△惠王の廚を見ず。長坂の桃、味正の柹、山のかせぎも濱のわたらひにも、磯にゆふべのしほがまの煙、沖にあかつきの漁火の影、見るに愁腸を寫さずといふ事なく、聞くに旅魂を驚かさずといふ物なし。近きは元祿の始ならん、○芭蕉先翁は秋にたどりてわけ

柴川、みすみ山の初雪は玉をけづり、もみぢ川の夕日は錦をひたす。たるひめの崎、まつだいの橋、このくれ山もともに名を傳へて、今は其あともさだかならず。しかれば多祜の藤さきて、布施のしら浪と見ゆらんを、和歌には一景二名なるや。唐嶋はめぐり二町ばかり、其かたち方壺をちゞめて、嶺に辨天を安置す。崖をめぐれる奇石怪岩も、龜鼈龍蛇の波に浮びて、ひとへに天宮を護するに似たり。むかし源義經は、安宅の關をしのぎ來りて、しばらく此浦の風景にやすらふ。判官の茶の間、辨慶が香のあと、沖の牛じま、猿すべり、此二島はかづきの蜑の息もつきあへぬ世のたづきに、袖をほすべき寄所とぞ。阿武の島、岩崎の島、弓手には狩野中務の城あり、馬手には長澤筑前の城あり。海老坂山の出城は神保氏張の餘波をつたへ、平布が崎の石壁は菊地入道の世盛をおもふ。金橋の觀音は船から拜むによろしく、朝日の觀音は海より上るをたふとむ。此ふたつの山は、白鳳年中にひらけて、ともに靈佛靈場なり。さがり松、みたらし水、龍灯松の風靜まりて、年越の夜の闇をてらし、出雲の水凊うして三伏の夏の喉をひやす。し

得たりといふべし、作者は前集に姓名あり。鑑亭は彼が別莊なりとぞ。

有磯の賦 并序

源　源支

有磯は、むかし大伴宿禰家持卿、この國の守に任ぜられ、此浦に遊び給ふとて、四郡に越の風景を採りて、詠歌の數すくなからずと。萬葉集に出づる物しか也。それより騷人墨客も、こゝに歌をよみ詩をつくり、代々の撰集に載する物おほし。誠に三越の名蹤なり。西は箱崎博多といひ、東に松島蚶潟といひ、まして琵琶湖の八景といふとも、いかで此浦の產物にしかむ。爰にそれらの耳目をかざりて、一篇に賦するものかくの如し。

世に傳ふ、萬葉集に、駒なみていざうち行かむ澁谷のきよき伊蘇末にとも詠じ、或は有磯によする波いや思久々々に古おもほゆともよめる、南は奈吳の江にならびて、射水川此間に流れいれば、奈吳と有磯との波をわかち、北は能登の三崎につゞきて、眼界さらにはて無し。須柚山の嵐は蜑衣をひるがへし、二上山の月は杜鵑をまつ。英遠浦、眞

燒豆腐ニ青海苔ノトロヽヲ掛クル事ナリ。「按ズルニ鎌倉ト越後ハ一對ノ雜古ナガラ、我國ノ產カト云ヘル、作者ニ頓ノ働ト云フベシ。鯰崩(なまづくづし)トハ、摺物ノ類ナリ。葛ト蒟蒻トニ堅メテ、練葛ニ山葵ヲ置クナリ。鵝勃(もどき)モ摺物ナリ。松葉牛房ニ麻ノ實ヲ交ゼテ、榧(かや)ノ油ニテ揚グル也。砂糖味噌ハ白煮ノ豆腐ナリ。子細ニ及バズ。寺鱓トハ俳諧ノ名也。油摺ヲ串ニ刺シテ胡椒醬油ノ附燒ナリ。海鱓川鱓ノ響トゾ。或ハ細ク切リ、疊ナガラ生醬油ニ唐辛ヲ散ラス無造作ヲ用トセリ。奴豆腐ハ天下ノ通稱ニシテ、今ノ註スルニ及バズ。「按ズルニ、此奴ハ一篇ノ結語ナガラ、文ニ寄セ武ニ寄セテ、名望ノ廣大ナル其所ヲ俳諧ノ談笑ト知ルベシ。況ヤ此賦ニ八十七種ノ名アレド、總テ料理ノ異名ヲ擧ゲタルニ、結段ノ奴ニ至リテ豆腐ノ二字ヲ顯ハセル、此等ヲ文ノ一體ニシテ、法ニ蟋蟀ノ絶妙ト稱スベシ。

○評に云、此賦は俳諧の筆格にして、しなぐ〵料理の名を擧ぐるに、短語あり長語あれど、おほくは意對としるべき也。さるは空(うつほ)の一字に起りて、奴豆腐の三字に結びたらん、常山の蛇の働ありといはむ。まして五七の歌をもて亂辭となせりけるは、漢家に賦の類を見盡して、和漢に自在を

に「亂理也。總ニ理一賦之終ニ云々」

空豆腐ハ仙洞ノ勅名ナリ。淡豆汁ヲ以テ終日ニ煮染メテ、卵醬油ニ口傳アリトゾ。朧トハ豆腐ヲ崩シテ薄葛ニ卵ヲ加フ。淡雪ハ薯蕷ヲ摺テ銅杓子ニスクヒ、豆腐ノ煮ユル上ニテ溫ムレバ淡立チ相圖ニ掛ケテ出スナリ。「按ズルニ、三十二名ハ朧ノ滑ニ歌人ヲ寄スルヨリ、淡雪ニハ新古ノ論アリテ、春トモ云ヒ冬トモ云ヘル、二季ノ惑ヲ云ヘルナリ。文ニ筆占ノ絕妙ト稱スベシ。祇園トハ葛田樂ニ摺柚ト唐辛ヲ散ラシテ串ナガラ出スヲ其名トセリ。田樂ハ味噌ヲ附クル時ノ名ナリ。青丹ノ下ニ註アリ。南禪寺ハ救豆腐ナリ。葛練ニ芥子ヲ加フ。或ハ靈山トモ云ヘリ。小笠原トハ、四角ニ切リテ葛練ノ上ニ花鰹ヲ置ク事ナリ。治部トハ、燒立ノ豆腐ヲ生醬油ニ入ル音也。然ラバ鍋ノ和訓ヲ用フベケレバ、治部ヲ牢人ノ名ニ寄セテ、萬葉ノ假名ヲ用ヒタル文ニ寓言ノ絕妙ト稱スベシ。溫飩トハ、算木ニ切リテ煎醬ニ鴨頭ヲ加フ。多クハ卸大根ニ刻根深ナリ。八盃トハ頓ノ料理ナリ。醬油一盃ニ水八盃入レテ、酒鹽ニ加減アリ。雪ノ下トハ、湯煮ノ豆腐ニ胡麻味噌ヲ掛ケ、椀ノ底ニ盛リテ其上ニ飯ヲ一杓子ヅツ裝リテ出スナリ。先ハ夜食ニ限レリ。松ノ山トハ、

(一)今の禪豆腐といふものなるべし

(二)白氏文集、洛中集記に「願以二今生世俗文字之業。狂言綺語之語一、翻爲二當來世々讃佛乘之因。轉法輪之緣一」

をはなれて、鷄をさく小刀をも用ひず、手してつかみくだきしに、やがて唐辛の錦をちらせば、時ならぬ帝の御目には龍田川とも見給ふべきに、かれらは奴豆腐とかいへる、物の名は時の仕合によるべし。我は明暮に此物を調じて、それらの鹽梅にくはしければ、賦にいふ亂詞にならひて、五七の歌をつくりて鑑亭のはしらに題す。○雁鴨は我を見捨て飛行きぬ豆腐に羽のなきぞうれしき、となむ。料理は客の望次第なり。

○註ニ曰▲淮南王始製二豆腐一出二于酉陽雜俎一△本朝ノ諺ニ、隱元豆腐(一)トモ隱元餅トモ、此類ノ名目多シ。爰ニハ和漢ノ通稱ト知ルベキナリ。○古今ニ「さつきまつ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする」▲青丹吉トハ歌ニ誦シテ奈良ノ枕詞ナリ。然ルニ田樂トハ、奈良ノ祭ニ、黄衣ノ法師ノ棒ニ登リテ躍ル時ノ形容トゾ。△狂言綺語(二)ノ戯モ讃佛乘ノ縁ト云ヘルハ、禮讃ノ詞ナリ。△孟子ニ「君子遠二庖廚一」△論語ニ「割レ鷄用二牛刀一」「按ズルニ、此二句ハ料理場ノ古語ヲ假リテ、例ノ筆占ト見ルベキナリ。○古今ノ序ニ「秋のゆふべ龍田川に流るゝ紅葉をば、帝の御目には錦と見給ひ」△國語ニ「篇章既成撮二其大要一以爲二亂辭一」樂記ニ「古賦亂曰、皆卒章也」註

爰に物あり、其かたちは四角にして、その色の白ければ、秋の夜寒を司れるとや。むかし淮南王の部屋住に、ある夜の小鍋せゝりより、此物をめで給ひ、今は唐のも大和のも、黃檗派よりひろまりて、金殿玉樓にもはゞからず、さとて蓬生の宿をもいとはず。かたじけなくも、空の勅名をかうむりて、朧夜の名には歌人をうまがらせ、淡雪の味には連歌師をまどはす。さるを祇園の姥がはからひにて、花柚のにほひをもてつけしより、○花橘の袖のうつりも、今はあかねの前垂にゆかし、靑丹よし奈良の都には、田樂法師とはやされて、狂言綺語の緣ながら、念佛講の夜食には、一蓮托生の菜飯にともなふ。是より佛家にも南禪寺あれば、武門には小笠原ありて、牢人の治部も隱者の溫飩も、すべて腹八盃の名類なるべし。されど雪の下は鎌倉の名にかぎらず、松の山は越後の產なるにや。其餘は鰻くづしといひ、鶴もどきともいへる油揚の類は、法事の獻立にして、砂糖味噌は尼御所のふるまひなるべし。しかるに寺鱒といへる名は我師の狂語にひろまつて、海川の名にひゞきたるもをかし。さて弓取の若さぶらひ、鎗持の髭男も、君子ならねど料理場

○仲丸ガ歌ニ「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」○古今集ニ「みさぶらひ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」▲東坡ガ雪見ノ圖ハ張笠ヲ著テ野馬ニ騎レリ。多クハ竹林ノ樣ナリ。▲浮世又兵衛ハ大津繪ノ元祖ナリ。捲笠ニ藤ヲ被キタルヲ其中ノ名物トセリ。「按ズルニ、此對以下ハ文ニ長短ヲ盡セル中ニ、近江ト加賀トニ古今ヲ對シテ、踊ヲ踊リ謠ヲ謠フトハ、倭文ニ字對ノ絶妙ト稱スベシ。△論語ニ「女子與二小人一爲レ難レ養也。近レ之則不レ遜。遠レ之則怨」註ニ「臣妾也」△宋玉ガ賦ハ文選ニ在リ。「按ズルニ、其賦ニハ笠ノ沙汰ハ無ケレドモ、好色二字ニ賦ノ一字ヲ寄セテ、和漢ノ證文テ結語セリ。

○評ニ云、此賦は婉麗の法ながら、例に俳諧の筆格を忘れず、結段は妾の一字より無名の笠を形容して、月日にも威光をあらそひたる、爰を談笑の諷諫と稱すべし。作者は前集に姓名ありて、今の文操にも文章おほし。さるは市朝にありながら、常に雲林の志を失はず、斜雲涯の三字を額に題して、俳諧の老をたのしめりとぞ。

豆腐の賦

北七里

(一)出替の下女
(二)比丘尼の姿したる下等の私娼
(三)「犬も傍輩鷹も傍輩」諺
(四)傍輩

▲竹にはり笠は東坡の風流をつたへ、▲藤にぬり笠は又兵が名物に殘る。紫衣の和尙の網代笠よりも、白髮隱者の檳榔笠は、物のあはれもしるらんとゆかし。さるを近江には古風の躍をどり、加賀には今様の謠にうたふ。茶摘の笠の靜なるも、田植の笠の斜なるも、おのがさまぐの色ならぬかは。たとひ出替のくけひぼに、(一)小野の小町が色をふくめるも、伊勢の神だに見そらし給へる勸進比丘尼の嗚呼なるには似ざらん。(二)しかるに妾といふ者の上ざまなるは、其殿を笠に著て、國をもかたむけ家をもほろぼし、下ざまなるは亭主をかぶりて犬の鷹のと(三)奉輩(四)ににくまる。それを▲孔子の詞にも、近づくれば心おごり、遠ざくればうらむとや。さばかりの聖人さへ、をりぐはかぶられ給ひけむ。いかにおほぞらの月の笠も、いのらば照りも降りもすべきを、今いふ笠は人の代にはやり出でて、帆負の神もしろしめさず、まして唐土の▲宋玉が好色賦にも、その沙汰を聞かねば、おのれぐが甲の緒をしめて、笠にきられぬ思案をすべしと、孫子に此賦を殘し侍りぬ。
○註ニ曰▲文選ノ序ニ「冬穴夏巢」▲舊事記ニ、手置帆負ノ神チシテ始テ笠ヲ造シメ給フトアリ。

條の法をもて譯文せしに、歌書物語の手爾遠波は、まして俗語の舞乃而爲レ舞兮のごときも、漢家の字義をひき來りて、一點のわたくしをいれざるより、なれては副假名にも及ぶまじと也。しかれば此賦の太頤なる、本朝の眞名の濫觴といふべし。つら〳〵此賦の次第を見るに、始は四聲七音より韵の冥合に文ある事をいひ、中比は陸機が文賦に敵して教誡は情の先なるをいひ、文章は姿の先なるをいへる、こゝに儒佛の意地をしり、こゝに連俳の建派をしらん。終は白馬を證文にひきて、百世に文章の鑑となせるは、述而不レ作の辭宜のみならんや。二對に和漢の文法をたちめて、俳諧の筆格をつくせりといふべし。

笠の賦　　岸　昨　嚢

むかしは木に巣くひ土に穴ほりて、人も鳥獸の住居なりけるを手置帆負の神とかや、はじめて此笠をつくり給ひ、雨をしのぎ霜をふせぐ。圓きは天の姿なりけらし。そののち世々の物數奇ありて、花笠の伊達すがたより、紅葉笠の名は残りけむ。冬は著る人もきぬ人もあれば、春日野の三笠は名のみにして、宮城野の御笠は、からかさの事なるにや。

ル、大和詞ノ一條ナリ。然ルヲ此賦ハマミムノ通語ヲ以テ此等ヲ筆占ノ絕妙ト稱スベシ。但シ文章ノ筆占トハ、漢ニハ筆端鼓舞ト云ヘリ。△史記ノ俳諧ノ贊ニ「天道恢々。豈不レ大哉。談言微中。亦可ニ以解レ紛云々」或ハ曰ク「笑言合ニ大道一」トモ或ハ曰ク「以ニ談笑一諷諫」トモ、評林ニハ總テ言語ノ自在ヲ稱セリ。武士ノ心ハ前ニアリ。▲史記ニ比干ハ諫メテ忠死シ伯夷ハ遁レテ餓死ス。共ニ殷紂ノ賢臣ナリ。擧グルニ及バズ。△論語ニ「邦無レ道危レ行言遜」△白馬ノ文章訓ニハ草紙ノ二對ヲ引イテ、其訓ノ序説ト成セリ。去ルハ武江ノ芭蕉庵ニテ素堂ト文章ノ夜話ナリトゾ。△禪錄ノ語ニ「頓具ニ一向十知眼一可レ見ニ千絲一斬功一云々」△白馬ノ教誡訓ニ「俳諧に三條の法あり。世情の人和は五倫の常法にして、をかしきは俳諧の名としろべく、さびしきは風雅の體としろべしとぞ」

○評ニ云、此賦は祖翁の生前に猿蓑集をえらび給ふとて、大和眞名の新論ありて、おほむね文賦の草稿ありしよし、遺稿の夜話に其沙汰あり。さるは假名眞名の通用より、漢土の助語辭をやはらげて、大和の手爾波に自在ならん爲とぞ。此故に寶永のはじめならん、大和詞の新製ありて、五

トアリ。▲史記ニ子游ガ武城ノ宰ト爲テ百姓ニ教ヘテ絃歌セシヲ孔子ノ笑ヒ給ヘル事アリ。▲神樂ニ面白ノ事ハ日本紀ニ在リ。擧グルニ及バズ。△論語ニ「天之未レ喪ニ斯文一也、匡人其如レ予何」

●山谷ガ禽語ノ詩註ニ脱却布袴ト啼ク鳥アリ、提胡蘆沽美酒(こひしゅ)ト啼ク鳥アリ、何レモ詩人ノ寄言ナリ。然ルニ大和ノ俗諺ニ、糊摺了スポツポト啼ク鳥アリテ、鳩トモ木兎トモ云ヘリ。明日ノ日和ヲ定ムル聲トゾ。詩歌トハ文ノ飾ナリ。△つれ〴〵草四季ノ結段ニ「折にふれば何かはあはれならざらん」とあり。△我家ノ五條トハ芭蕉翁ノ白馬經ニ文章訓ト云ヒ。教誡訓ト云ヘル、兩訓ノ差別アリテ、道ニ文敎ノ二法アリ。其中ニ一篇ノ趣向トハ、儒佛老莊ノ經書ヨリ詩歌連俳ノ文章トテモ、趣向ニ執中ノ法アリテ、一部ノ始ト終トヲ調フ。委曲ハ其註ニ見ルベシ。但シ第四第五ノ評ハ、此賦ニ先師ノ釋文ナリ。▲莊子ニ「擧ニ莛與レ楹厲與ニ西施一道通爲レ一」希逸ガ註に、莛楹ハ横直ナリ、厲施ハ美惡ナリ、或曰厲ハ癩ナリトモ。△古今ノ序ニ「かくてぞ花をめで鳥をうらやみ霞をあはれみ露をかなしみ」とあり。天地ノ詞ハ前ニアリ。「按ズルニ花鳥ノ對ハ日出ニ浦山ノ二字ヲ對セル、六箇敷(むつかし)トモ浦山敷(うらやまし)トモ、此類ハ和訓ノ常ニシテ、故實ノ法ニ隨フト云ヘ

於樂」「按ズルニ、今ノ一章ハ此三句ノ文勢ヲ假レルニヤ。△古今ノ序ニ「春のあした、芳野山の櫻を、人丸が心には雲かとなむおぼえける」花を白雲の歌多シ。擧グルニ及バズ。○宗鑑ノ發句ニ「月に柄をさしたらばよき團扇かな」△論語ニ「溫レ故知レ新可三以爲二師矣」△陸機ガ文賦ハ文選ニ在リ。十二字ハ今ノ文言ナリ。△孟子ニ「無二恒產一者無二恒心一」△論語ニ「逝者如レ斯夫。不レ舍二晝夜一」「按ズルニ、此一句ハ情ハ水ノ流ル、如ク念々變化スルニ似タレド、流レテ元ノ水ナル故ニ、情ノ不變ニ喩フ、然ルニ晝夜ノ音語ヲ假リテ春秋ノ和訓ニ對シタル、和漢ニ意對ノ絶妙ト稱スベシ。○伊勢物語ニ「雁鳴きて菊の花さく秋はあれど春の海邊にすみよしの濱」△古今ノ序ニ「花に鳴く鶯水にすむ蛙の聲をきけば、いきとしいけるものいづれか歌をよまざりける」△歌ノ詞書ニ「言葉を濱の眞砂にたとへてちどりの跡たえせれば」とあり。△韓文ニ「維天之於レ時也亦然。擇二其善鳴者一而假二之鳴一」「按ズルニ、此二句ハ此等ノ文勢ヲ假レルニヤ。●家語ニ「舜彈二五絃之琴一操二南風詩一。曰南風之薰兮、可三以解二吾民之慍一兮」△佛經ニ、祇園精舍ノ無常院ニ六時ノ鐘ヲ鳴ラシテ煩惱ノ眠ヲ驚カスト云ヘリ。▲大論ニ「乾達婆王奏レ樂。迦葉聞レ箏起舞」

兹則、毎章之起結歴在兹而、風雅之淋敷見歴俳諧之面通去歴、皆々不在兹焉耳。然則以故翁之一言百世成文章之鑑則、姿情者隨花鳥之時而、虚實者可以心傳心皋矣。

○註ニ曰、△說文ニ、「ナ」出爲聲。成文爲音。音冥爲韻「按ズルニ韻ノ冥合トハアイヅエチノ五ヨリ喜怒ヲ知リ尊卑ヲ分ツ詞内ノ餘韵ヲ云ヘリ。○歌林良材ニ「いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ」能因ノ歌枕ニハ「野中の清水とはもとの妻といへりとも」△古今ノ序ニ「ちからをもいれずして天地を動し、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるは歌なり」「按ズルニ、此賦ニハ此序ノ取意數多アリ。相紋ノ下ニ見合スベシ。△八義ノ譯文ニ「鶯は雨を愁ろ鳥にて、雨苦不乾と和訓す」ト古今ノ物ノ名ニ其歌アリ。○古今集ニ「鶯の笠にぬふてふ梅の花をりてかざさん老かくろやと」△松虫ノ諷ニ「おもしろや千種にすだく虫の音の機おろ音はきりはたりちやう〳〵つぶれさせてふ」トアリ。紅葉錦ハ詩歌ニ數多アリ、擧グルニ及バズ。△論語に「興於詩。立於禮成ニ

醜者連歌之文法而、厲施者俳諧之筆格也。●斯構文章之家而爲宗言語之姿者、情無新古之詮義了則、將殊儒佛之教誡爲也。假令以和歌連歌之幽玄目出於花兮浦山於鳥兮、憐霞兮悲露兮、一首動天地共、不所聞與平三藏之耳矣則、有難立町人百姓之用焉。雅言歷俗語歷爲人之日用虖哉。●●率哉謂俳諧之法乃者、史記有談笑之贊而、自在言語之虛實也則、乍目入兮乍鼻出兮、歷於猛來武士之心兮、悅于卑敷木樵之耳兮、諫君宥父爾歷其詞之不比干兮、其行之不伯夷兮、乍遊酒色之中遂言而撓其人了則、更不及儒佛之太儀、從和歌歷從連歌歷、風雅者以俳諧之文章、可寫於花鳥之情了則、可達於醬鹽之用矣夫。今也稱白馬之文章訓則引古草紙之美人揃而、所書紫式部小式部鬼之娘之十郎姫、小野小町之若盛者、二對曖言語之虛實居、四句調文句之長短歷。●●斯所學文章人者、此等開十年之眼而、可見千絲一斬之功與所。●●諸那評此文之巧則、起何條無事短對而、和鬼神之娘於十郎之名卻、斷百歲之姥於若盛之詞了。第一之虛實者例之不言、每篇之法格歷在

信而爲文兮、爾又蝶鳥之無心歴、筆之物言則成章兮。孰若觸其時之折則、何歟者不哀焉。詩歌者可知文章之花也。其詩也有杜陵兮李白則、其歌也有定家兮家隆而、今者成連俳之四了則、連歌者令含烏玉之風情兮、俳諧者所寫素顏之風姿兮。左程有家々之意地共、論則姿情之先後而已也焉。其外者稍流糸竹之文而、三線之喋爾者令泛於佛仁乎兮、尺八之哀爾者使泣於鬼鹿毛兮。夫尙不音韻之文歟者。況隔玉之翠簾而通馳心於琴音焉者、色好人之文憎也則、泣歴笑歴心之隅而、總而不文章之哀怨焉耶。然共染硯于筆而左兮謂文章時者、我家製五條之法而。一篇之趣向者不及言、第一有言語之虛實、第二有文句之起結、第三有句讀之長短、作左有此三者文章家之通法而、和漢有斧痕了則、今更不及斷其譯止。第四有假名眞名之配者、譬則如謂鶯囀梅、眞名者返而有語之間共、假名者直地讀下而將爲書續鶯梅者、字面之配歷不大和、鶯者梅共鶯之梅共、爰加無用之手爾遠波而、助語爾者知有無用之用了哉。第五有俳諧之筆格者、譬則將謂人之奸醜（一）迚、所謂莊子之寓與施、（二）奸

（一）「奸」は「姸」の誤なるべし
（二）同上

情之爲不易月雪乎歟。姿者似山而染易春秋兮、情者如水而不舍晝夜兮。左許有和漢之違則、今者論姿情之先後而、新可建俳諧之筆格與也。左在則謂詞之巧者、春者楊柳之假風而添空于雲雀之氣色兮、夏者菖蒲之濺雨而待閣于郭公之初音兮。鴈啼于菊秋之夕昏兮、雪降于松冬之曙明兮、添四季折々之文而、令遊蛙於硯水兮、爲鳴鶯於筆林兮。詞者爲濱之眞砂摩哉。斯者天地之誨人而、使人鳴之了則、其辭分儒佛之文而、五絃之琴爾者解庶民之慍兮、六時之鐘爾者覺衆生之眠兮。迦葉之舞歟子游之歌歟、埒而我朝之神樂爾者、乍難天扉之明人面之白梟則、草木歟靡而無音于風兮、鶴龜歟舞而有色于雲兮。皆是爲家々之祕曲則、遠者以斯文調四民些、近者以斯文和五倫來。天不喪斯文爾者、詩歌者埒而連俳之人歟、道知文章之有天理了哉。抑謂詩歌之用者、令物言非情之草木而、寫出其物之姿則、鳥歟分和漢之文而諸越之詩爾者啼提胡蘆兮、大和之歌爾者囀糊摺了兮。櫻之與雪散日爾歟、柏之兼雨降夜止歟、神鳴于雲兮木枯于風兮。實夫荻萩之有聲歟、人之音

文の賦

東花坊

天地開初而後、萬物自有聲而、從其聲之分音其音之調韻、鳥獸者啼而知哀樂兮、草木者鳴而見榮枯兮。增而人間之委敷其言、橋懸不及雲而汲野中之水心則、通馳男女之情兮、和發神佛之心兮。爾有而社、言葉者不斷綴而、曰文曰章也了。春鳥之囀雨害不乾則、梅之花笠寄歌人之詞兮、秋虫之鳴幾利波多、則紅葉之錦繡織姫之手兮。皆只聞其物之其聲、而人之以筆被文成也梟。抑謂文章之要者、物有姿情之二而情者一樣古今也共、姿者萬別日夜也則、興詩兮和歌兮、扨成連俳之四而、詠芳野之花於白雲兮、喩更科之月於團扇兮。總而不言端之文歟者。左有則月花之情迚、有孰所可求情焉。月者惜山端之傾月兮、花者歎木間之散花兮。惜姿者萬別也共、歎情者一樣也也。爾有則學文章人歷、改姿之今古了共、不溫情之新故了哉。今將見陸機之文賦了則、爲其體也屢遷。爲其意也可巧、與者、我副作謂文體之變、思遣詞之巧而、所謂意之巧爾哉。但者從博學之惑失恒心而、不知姿之爲變化花鳥了共、

○註曰、此詞鉢ハ木ノ謠ニテ世ニ在ル人ヲ羨ム樣也。⦿香爐峯ノ雪ハ白居易ガ詩也。清少納言ガ枕草紙ニ簾ヲ捲キタル働アリ。▲「晉子猷居二山陰一。雪夜乘二小船一而訪二戴逵一。造レ門不レ前返。曰乘レ興而來興盡而歸」⦿錦城ハ放翁ガ詩ニアリ。蜀成都ニ歌舞ノ地也。▲なこその關ハ奥州ニ在リ。莫來ハ名社ノ假訓ナリ。▲越史ニ「范蠡滅レ呉後、取二西施一遊二五湖一不レ返云々」⦿杜律ニ「越女紅裙濕。燕姬翠黛愁」「按ズルニ此詩ハ妓女ト船遊ノ風情ナレバ、今ノ雪見舟ニ結ベル也。▲經ガ岡以下ニ四所ノ印ハ、三國川ノ名所ナリ。

○評ニ云、此賦は例の俳諧にして、月見に文法の對といふべし。かしこに月賦の婉麗なる、こゝに雪賦の虛誕なる、文操は此二篇に俳門の虛實をしれとならん。按ずるに、賦體は、瀏亮といひ婉麗といひ、おほくは文句を對すべけれど、漢にも宋玉が好色賦のごとき、文は百體千格にして、これらの一體をもしらしめむと、月雪の二賦をならべたる也。例に文操の詮ずる所は、月賦と文賦とに假名眞名の通用をしらば、此賦は賦中の婉曲なるをしらん。邐乙子は先師の隱號にして、乙はその角の象形とや。さるは此賦の文華を憚れるならん。

たる雪かなと、身の上に謠ひ捨たるは、花も紅葉もあそび過して、今さら物の淋しけれど、をりをり父母をこらしたる、ひとりむす子の身の果ならん。世はかくさまざまの相手あれど、是とあそばむと思ふ人はまれ也。たとへ香爐峯に簾を捲たるをんなも、智慧すぎてすさまじく、かの山陰の夜の雪に、小船の模樣をつけたるをのこも、興つきて後さむからん。いざや無分別界に平白漫地の雪見せむと、此三國川に船を浮たるに、錦城の歌吹はさらにしらず、中に置火燵の紫ぶとんは、雪の夕日にかゞやきて、繻子の緋無垢も緞子のそら色も、なこその關の名こそとがめね、しかは人目もしのばずやあらん。むかし陶朱公が船に乘せて五湖のあなたにあそびし人は、我もの顏にてにくからんに、越女の紅裙も燕姬の翠黛もこゝにとぼしからぬあそびならん。さて䋈が岡の松の雪は佛くさいをいやがりて、上戶は長くらべ山に頭をめぐらせば日野が嶽には反椀の名ありて、我とおもはむ者あらば此盃まいりさふと、舳先に立て相手をまつに、我は小盃の陰にかくれて、月窓寺の入相に此夕暮ををしむばかり也。

て、百世に文鑑の時宜といひ、道をおそるゝの冥加といはむ。今や文操の本懷といふは、眞名には菅家の賦をえらみ、假名には兼好の文を對す。そなたは文章の博士にして、大和に眞名の祖とあふぐべく、こなたは風雅の隱者にして、一道の意地の師とあがむべし。しかれども二篇を評せば、我家の談笑にとぼしければ、あながちに温故の辭宜にして、一部の詮する所といふは、月見賦に假名の眞名なるをしり、文賦に眞名の假名なるをしらば、雪賦は虛實の文對にして、和漢に文を操るといへる標題の心をもしるべきと也。誠に此賦の婉麗にして、しかも談笑の自在なる、そこを我家の筆格にして、文章はよし五箇の絶妙に感却すべし。此故に、此賦には句讀に我家の式をわかち、文賦には助語の圏點を加ふ。一部の新製は此二篇にしるべきや。

雪見の賦　　遷乙子

十月のしぐれ、霜月のしも、師走は雪のふる月とて、ひとり法師は火燵の小藥鑵に物くるゝ友達をもてなし、金箱のもりするおやぢは、袖口より背中をかゝせて、菜飯にふけ行く鐘の聲をかぞふ。それより一ふしなれたる男は、夜著の袖より庭を見やりて、あゝ降

ノ絶妙ト稱スベシ。▲神仙傳ニ「蓬萊之地隔ニ弱水ヲ不レ堪レ泛ニ羽毛ニ」▲漢武故事「擎ニ芙蓉掌ヲ承レ露云々」仙術ヲ學ブ事ナリ。▲竹林ハ七賢ノ寄セナリ。細擧ニ及バズ。「按ズルニ、竹ノ林トハ酒ニ竹葉ノ響ヨリ、畢竟ハ酒ノ枕詞トモ云ハン。増シテ此對ノ短簡ナガラ赤壁ノ兩語ヲ栽入レテ、文ニ錯綜ノ絶妙ト稱スベシ。○西行ノ歌ニ「谷のとにひとりぞ松は立てるなる我のみ友のなきとおもへば」●詩格ニ唐賈嶋、騎レ驢得レ句。「鳥宿ニ池中樹ニ僧推ニ月下門ヲ推敲未レ定。引レ手作ニ推敲勢ヲ時衝至ニ韓愈行隊ニ嶋具道レ所レ得。愈曰。敲字佳。並レ轡歸。爲ニ布衣交ヲ云々」

○評ニ云、此賦は元祿の始ならん、湖南の幻住庵(一)に山住の時、祖翁と先師と文章の評論ありて、假名眞名の通用より、俳諧の家の筆格を建つべき、と百練千鍛の斧を加へて、祖翁は月賦に四六の法をやはらげ、先師は文賦に五條の式を傳ふ。さるは百世の家訓にして、無下の俳集に入らむ事をおそれて、獅子庵の遺稿に十襲せり。しからば本朝文鑑に先づとて出すべかりしを、季吟老人の硯賦に敵せば師を輕んずるに似てんとて、既望賦の幽玄なる物を對す。それらは選場の心得にし

(一)近江國石山の奥に芭蕉翁が暫く住みし時の庵

づれ草ニ「よき友三あり。一には物くるゝ友。二にはくすし。三には智惠ある友云云」○兼好ノ歌ニ「こゝもまた浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな」▲繪本抄ニ李白ガ瀧見ノ圖アリ飛龍三千尺ノ詩ニ據レリトゾ。△蘇東坡ガ赤壁賦ニ「有レ客無レ酒。有レ酒無レ肴」或曰「擧レ網得レ魚。狀如二松江之鱸一」或曰「我有二酒斗一待二不時之需一云云」「按ズルニ、此賦ニハ前後ノ赤壁ヲ取合セテ多クハ古語ノ裁入ナリ。以下ノ相紋ハ爰ニ見ルベシ○躬恒ガ歌「しら雲にはねうちかはし飛ぶ雁の數さへ見ゆる秋の夜の月」●三體詩楓橋夜泊「月落烏啼霜滿レ天」「按ズルニ、鏡山以下ニハ多ク湖上ノ八景ヲ擧ゲタルニ、歸帆ハ今宵ヲ饗スニ似タリトハ此等ヲ結前ノ絕妙ト稱スベシ。▲七小町ノ事ハ諸抄ニ此名アリテ、細擧ニ及バズ。小町ガ一生ノ盛衰ヲ云ヘリ。「按ズルニ、此發句ハ東坡ガ西湖ノ詩情ヲ含ミ、源氏供養ノ風情ニ寄セテ、月ノ艷色ヲ形容セル、浮ノ字ハ鎖詞ノ絕妙ト稱スベシ。▲紫式部ハ、源氏ノ趣向ヲ祈ルトテ、石山ニ參籠シテ六十帖ノ面影ヲ寫セリトゾ。●蘇居士トハ東坡ナリ。西湖ノ詩ニ「若把二西湖一比二西施一。淡粧濃抹兩相宜」「按ズルニ、此一對ハ式部ニ居士ノ官名ト云ヒ、源氏ニ越女ノ字義ト云ヒ、此等ヲ俳諧ノ筆格ニシテ、和漢ニ意對

そふほどに月は長等山の木の間に入りぬ

○註ニ曰▲本朝名蹟志ニ、近江國湖水志、「其形尤似二琵琶一云々」。「按ズルニ、爰ノ木曾寺トハ木曾塚ノ義仲寺ヲ摘ミテ、其名ノ風流ヲ殘シ給フニヤ。其地ハ祖翁ノ廟所ナリ。○百人一首ニ、「三日の原わきて流るゝ泉川いつみきとてか戀しかるらん」「按ズルニ、三日ノ名トハ、大津ニ泉屋ト云ヘル酒家アリテ、三日ノ原ト云フ名酒ヨリ、往來ノ騷人モ其名ニ詩歌ヲ殘セリトゾ。▲信樂ハ近江ニシテ、政所ト云ヘル茶ノ名所ナリ。○玉川ハ盧仝ガ標號ナリ。茶歌ハ擧グルニ繁シ。●樂天ガ詩ハ白氏文集ニ在リテ、多クハ酒ノ稱美ナリ。△源氏ニ尼の事ないへる詞に「中〳〵なま浮びにてあしき道にぞたゞよひぬべき」トアリ。「滑稽」ノ歌ハ擧グルニ及バズ。△論語ノ先進ニ「三子者之言何如。子曰。亦各言二其志一也已矣」「按ズルニ、乙州以下ハ例ニ孔門ノ弟子解ナリ。此故ニ此章ハ一字一言ニ人ノ生質ヲ寫シテ、惟然法師ガ評ニ至リテハ「空ニ風吹ケ」ト言捨タル、春秋ニ一字ノ勸懲ハ知ラズ、文ニハ隱見ノ絕妙ト稱スベシ。▲列子ニ伯牙ト子期ト知音ノ事アリ。峩峩洋々ハ琴中ノ趣ナリ。●杜詩ニ飲中八仙ノ歌アリ。總テ高名ノ風人ナリ。擧グルニ繁シ。△つれ

（八）鹽川三益、大津の人

名月や湖水に浮ぶ七小町

されば。我朝の紫式部は。石山に源氏のおもかげを寫し。唐國の蘇居士は。西湖に越女のよそほひをたとふ。いづれも風雅の名にのこりて。今のまぼろしに浮かざらんや。實そも和漢の名蹤なりけらし。さて。松本に船をさしよせて。茶店の欄干に心をはなてば。目はよし蓬萊の水をへだてず。身はたゞ芙蓉の露うるほふ。竹の林の酒も時なくて。松が江の鱸はこよひなるをや。猶はたかたぶく月の名殘には。辛崎の松もひとりやたてる。古き都の名もゆかしければ。尾花川の明ぼのをこそと。千那（八）尚白をおどろかしぬれば。夜ははや又更に過ぬべし。

三井寺の門たゝかばやけふの月

誠よ。推敲のむかしながら。船にこよひの遊をおもへば。此座に韓愈が文章をもあざむき。賈島が詩賦をもどきぬべき詩人文客にとぼしからねば。たとへ赤壁の前後といふとも。その地に此人をはづべきやと。見ぬもろこしを相手にとりて。今宵の風流をあら

それが中にも惟然法師は。酒におどろきて茶に感じ。ほむるもそしるもそらに風吹きて。爰に三子者(六)の志をためざらんや。まして其外の友とする人も。(七)峩々洋々の心ざしを知れれば。すべては飲中八仙のあそびならん。誠や。つれ〴〵の法師だに。心をつくろはぬ友えらびては。かゝる月見の侘なるやと。思ひしまゝの草の庵に浮世の外の風狂をつくせり

米くるゝ友をこよひの月の客

かくて三盃の興に乗じて。湖水の月に船を浮べんと物このむ人の風情をそへたるに。杖に瓢箪の唐子はなけれども。扇に茶瓶の若男あれば。赤壁の船のとほしさにあらざめり。さゞ波や。打出の濱の名にしあふ。鏡の山もこなたにさしむかひ。日枝は横川の杉につらなりて。比良の高ねは雁をもがぞへつべし。うしろに音羽の峯たかく。石山の鐘はあは津の嵐にさえて。そこに楓橋の霜も置きぬらん。矢橋の歸帆は。今宵をもてなすに似たるべし

(六)美濃の人、風羅坊

(七)列子「伯牙善鼓琴、鍾子期善聽、伯牙鼓琴、志在高山、鍾子期曰、善哉、峩々若泰山、志在流水、鍾子期曰、善哉、洋々若江河」

（一）徒然草の註釋書十六種
（二）支考作九卷
（三）論語「子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉人焉廋哉」

者達は、釋迦孔子の勸懲ともおなじ心の註なれば、十六抄（一）は杓子を定規ならんと、先師のつれづれの讃（二）に評論あり。しかれば今いふ月花の段は、論語のいへる視觀察（三）にして、目をもてつれ〴〵を視る人は、終に兼好の安んずる所をしらじ。誠につれ〴〵の意地といふは、色を勸めて色を懲らし、是れをよろこびて非をうらみずとや。そこを俳諧の荷擔にして、此賦を第二段に出せる也。次に題下の官名は、菌太暦の勅謚なるを、菅家の三品に對せむとて、没後の僧都を稱名せしは、まさに選場の働といふへし。

○此文の句讀は原書のまゝ也

月見の賦　　芭蕉翁

ことし琵琶湖の月見むとて。しばらく木曾寺にたび寐して。膳所松本の人々を催すに。乙州は酒をたづさへて。泉川に三日の名をつたへ。正秀（一）は茶をつゝみて。信樂に一夜の夢をさます。今宵は茶といひ酒といひ。かたうの人も二派にわかれて。洒堂（二）は灯にかたぶきて。其茶に玉川が歌を詠じ。丈草（三）は月にふそぶきて。其酒に樂天が詩を吟ず。支考は若く。木節（四）は老いぬ。智月（五）は物のおぼつかなう。かづきのあまのなま浮びならす。

（一）水田利右衞門、膳所の藩士、菅沼曲翠の伯父
（二）荷屋
（三）内藤林右衞門、尾張犬山の藩士
（四）稽翁、大津の醫
（五）大津の人、乙州の母

かの枝ちりにけり、今は見所なし、などはいふめる。よろづの事も始終こそをかしけれ。男女の情も、ひとへに相見るをばいふ物かは。あはでやみにしうさを思ひ、あだなるちぎりをかこち、永き夜をひとりあかし、遠き雲井を思ひやり、淺茅がやどにむかしをしのぶこそ、色このむとはいはめ。望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、曉ちかくなりて待出たるがいと心ふかう青みたるやうにて、深き山の杉の木ずゑに見えたる木の間のかげ、うちしぐれたる村雲がくれのほど、またなくあはれ也。椎柴しらかしなどのぬれたるやうなる葉のうへにきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都こひしう覺ゆれ。すべて、月花をばさのみ目にて見る物かは。春は家をたちさらでも、月の夜はねやのうちながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

○評ニ云、此賦はつれ／＼艸に名高き月花の段の略文なり。爰に草紙の大意を評せば、始に好色の一段より、月花の段も、是非の段も、まして大福長者の段など、或は僧俗の名聞をそしり、或は男女の愛著をいましむるに、おほくは儒佛を飜轉して、兼好一流の建派なるを、むかし今の註

書式ニ、讀點ハ中ニ打チテ切レズ、句點ハ旁ニ打チテ切ルヽトヤ。物ノ中ヲ隔テ切レヌト云フ、當然ノ理ハ明ラメ難シ。然ラバ大和ノ文式ニハ、讀ハ旁ニ點シ句ハ中ニ點スベキヤ。但シハ漢文ノ法ニ任セテ、道理ナキ故實ニ隨フベキヤ。此故ニ此賦ノ點ハ、古來ノ法ヲ憚リテ暫ク漢ノ校書式ニ隨フ。月見の賦ハ倭文ノ新式ナレバ、讀ハ旁ニ點シ句ハ中ニ點ス。此等ヲ和漢ノ意地ト知ルベキナリ。或ハ發語ニモ返辭ニモ讀點ヲツヾケタルハ、例ニ倭文ノ新式ニシテ、誦ム時ニ長短ノ埒ナレバ、一部ハ總テ三日月の賦ト月見の賦トノ句讀ヲ見テ、旁中ノ點ノ差別ヲ知ルベキナリ。

月花の賦　　兼好僧都

花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春の行衞しらぬも、なほあはれに情ふかし、咲ぬべきほどの木末、ちりしをれたる庭などこそ見所おほけれ。歌のことば書にも、花見にまかれりけるにはやくちり過ぎにければとも、さはる事ありてまからで、などもかけるは、花を見てといへるにおとれる事かは。花のちり、月のかたぶくをしたふならひはさる事なれど、殊にかたくなる人ぞ、此枝

遑而悽悽。　齊句三叶

○評ニ云、此賦者在二本朝文粋一而爲レ題二織月賦一共、今者和二三日月之三字一而、所レ成二此文操之巻頭一、菅家者我朝之博士而、爲二文章家之祖一則也。是以評二此文一則、文字者寫二諸越之姿一共、文體者運二大和之情一而、爰用二三日月之和訓一了共、叙二作者之本懐一間敷哉。誠可レ恐者此賦之評也焉。此故不レ註二文中之故事古語一、例將レ俟二後君之沙汰一與也。但謂二此賦之埒一則、以二望在レ天一西一易二隷蠻先齊之四韻一歷。左有者除二六所之發語一而以二三十八句一成二十九章一、以二二百十二字一成二一篇一止矣。然則可下以二白角一知二韻礎一以二黑圈一知中發語上也。全篇者謂二四六之文法一矣乎。

「按ズルニ、文章ニ句讀ノ事ハ、文鑑序ニ細論アリテ、假名ニハ漢土ノ式ヲ戻キテ、句ヲ先ニシ讀ヲ後ニシテ、句ハ旁ニ點シ讀ハ中ニ點ス。去ルハ一句一讀ナルモ、二句一讀ナルモ、三句四句ヲ合セテ一章ト云ハンニ、和訓ハ長短ノ違アレバ、倭ニハ其論モ尤ト云ハメ。然レドモ後勘ニ評セバ、漢文ハ讀ヲ先ニ點シ、句ヲ後ニ點スル事ハ、讀トハ誦ム時ノ息續ニシテ、其次ヲ誦ハ埒ノ明ク故ニ、先後ヲ合セテ一句ト云ヘリ。先後ハ但シ漢式ヲ是ト云ハン。去レドモ漢ノ校

和漢文操 巻之一

○賦類

三日月賦

菅三品文時

瞻彼新月。有微其狀。攬之不盈手。皎々之光未舒。仰之則在眸。纖々之質可望。洋句二叶 若乃風吟中秋。月沈西海。伴星揄兮。片影因茲而見。隨曆英兮。孤姿於是乎在。蟹句二叶 觀其。以陰爲位。成象於天。彼合璧之有始。諒推輪于向前。德也不孤。暗知珠玷之未實。物也有漸。豫驗金魄於將圓。及夫影倒秋江之浦。光傾暮山之巔。遊魚疑沈鉤於碧浪。旅雁驚虛弓於紫烟。翊夫。高秋易感。良夜未眠。窺仙娥之容輝。尙祕綽約。訝靜女之眉態。空迷蟬蜎。先句七叶 士有一出董帷之內。再拜庾樓之西。慮就盈之所基。愼終如始。悟忌滿之可法。見賢思齊。猶怪。攀桂枝於暮秋。獨遑

○此文の句讀は原書のまゝ也

(一)晋の庾亮樓に上りて月を賞し「今宵一輪滿、清光何處無」の句を得、自ら以て絶唱となす。

(二)早に「滿拓損」



は祖父翁の遺訓ながら、論ずれば滅後の筆功にして、獅子菴に例の遺稿を預かりて百世の師道を失はず、爰に俳諧の中興と云ふべきなり。

一毎篇の「註ニ曰」は、▲故事は此黒角を加へ、△古語は此白角を加へ、●古詩は此黒圓を加へ、○古歌は此白圓を加ふ。但し漢歌は詩に准ずべし。「此鍵(かぎ)點の下は、愚按を以て多くは章句の働を註して、文の斷續と起結を知らしむ。其中に文法と句格を稱する時は、黒圓を加へて絶妙の二字を用ゆ。絶妙好辭は曹娥が碑に銘して文章の讚(ほめ)詞なり。

一毎篇の「譯ニ云」は、第一は其篇の鼻目を稱し、第二は作者の姓名を記す。然れば註と評とを合せて、毎篇の起結を考へ、毎章の法格を知る時は、和漢の通用は自然と知るべけん。但し註解に及ばざるは評詞に兼用の所も有るべし。

一此文集に註者を博望司と云ひ、評者を烏有仙と云へり。何も獅子門の親弟と見ゆれど、前後の撰集に此名を聞かず。然れば二人は寓(よせ)名にして、選場に自稱を憚れる古法の辭宜と知るべきにや。有無は卷軸の祭文を見て、儒佛の萬卷をも知るべき事なり。

ふ。讀む時は其埒を考ふべきなり。

一此文操に八品の新製あり。其一は眞名の和文にして、其二は眞名の和詩なり。去るは寶永の辛卯に、新に大和詞を撰んで漢土の助辭を倭語と成せるに、五條の法ありて一字の私を容れず。言語と文句の兩樣は、八義の譯文に據れるなり。其三は假名の詩に萬葉體の韻を用ひ、其四は萬葉の韵に效ひて熟語にて二字韻を用ゆ。二口ともに漢家の韵法なり。其五は、連歌と俳諧と漢和の如く交會して、風雅の舊緣を結ばんとなり。其六は和歌の家にも求韵の沙汰あれば、増て俳諧聯句に似て韵を求むるに須便あればと、換韵の法を製するに、短歌行は四六二十四句に分ち、長歌行は六八四十八句に分つ。何れにも二折の表裏にして、畢竟は換韵の埒と知るべし。歌仙行は例の釋するに及ばず。其七は大和聯句なり。此格は羅山の七字城に似て、既に舊例と云ふべきに、彼は字門の古法を對し、此は字外の新趣を對す。其例は詩文の意對に效ひて氣形に生植を對する類なり。此等を溫故知新とや云はん。其八は聯の類を以て標題と成せる事は、但し和漢の文集に遺たるを拾ふと云ふべきや。此外詩歌にも文章にも、時に臨める新製は指を倒すに暇あらず。然れば前撰の文鑑に假名の詩を製し、引の類を改め、或は辭の類に和漢の論も、後撰の文操に八品の新製も、總て

凡例

一和漢の文法に句讀の點を附くる事は、本朝文鑑に論あれども、讀を先にし句を後にすることは、漢家の故實に隨ふべく、讀は旁に點し、句は中に點することは、倭文の新式に據るきべにや。委細は三日月の賦と月見の賦に和漢の式の兩樣あり。學人は二篇の點式を考へて、何れに後勘あるべきなり。

一大和の眞名文は、漢文よりも手爾波の多ければ、或は連續の語をも分けて、句と讀との字數を合すゆゑに、漢文の字配とは違ひたる所も有るべし。去るは溪廉が日東曲に云へる、喫飯を直に飯喫と云ひ、故字をかるがゆゑにと訓ずれば、語路の長短は各別にして、字配は日本の國曲と察すべし。

一大和の眞名文に漢土の助字を用ふるには、言語と文句との差別ありて、大和詞に五條の法を出せり。此故に文賦に新製の助訓を知らせんと、言語は右に點し、文句は左に點す。一部の助字は其賦に知るべし。然れども古來より用習ひたる之乎者也の如き、于於而則の如き、一字の訓義は助辭の常なれば、爰に圏點を加ふるに及ばず。去れども細かに和訓を論ぜば、詞の內の句あり句の內の詞ありて、文句に從へば句の點を加へ、言語に從へば語の點を加

云院宣云、如文官之促國法、如武士之傳家訓、公儀之制札者增而不言、佛家之諷
誦歴神社之願狀歴、學之而擴之則、何歟者埒之不明焉。有媚度雁魚之唐樣者、言
則謂我朝之恥矣。此故從寶永之御代、試製平假名之詩而、今也僞交眞名詩于假
名、詞用假名詩于眞名韻焉。蹤夫以我朝之詩歌足欺諸越人也矣。況如清輔之奧
儀抄、和歌有求韻之沙汰則、我家爾歴有求韻之俳諧、其外聚日本之俗話而、風里
巻之謠、雅朝廷之歌了共、不嘗違詩經之六義者、誠謂和漢之文操者矣。所仰者歟
嶋之流不斷、永傳千鳥之跡而、不霞三神之冥慮矣止。維時享保癸卯之秋、蓮二等
續師之遺命而敍黃山之文星觀者也。

和漢文操

眞名序

蓮　二　房

和漢文操者、先師之遺書而、將令知眞名有和漢之通用事也。此故、先撰大和詞而通五十餘員之助語、訓二百二十箇之文句。然則眞名之爲假名也、諸楚辭文選之言端却、調源氏狹衣之出葉歷。見之時者漢字也共、聞之時者倭文也來。昔者如軍書牒狀、今者如庭訓往來、其外寺社之緣起迚歷、諺云不田于畑而、例無和訓之點了則、無可讀道理之法臬矣。是以、大和詞者譯文立五條之法而、或者用古今之兩樣居、或者隨正譌之故實歷。假令雖一字一點、不容和訓之私爲也。近頃有我朝之學者達而、助字考之用字格之殊、如譯文筌蹄者、博知漢土之書物而、隨其書而、雖其事共、臨無文而不設彼理則、乍有字意之運、全無和訓之便焉。左則一一附假名、而謂有某字于某意、則奚乎可讀無點之文耶。譬則如些兮之詞、和訓左兮共思へ。些共而不立我國之用猿乎者、漢字者有何益焉耶。爾有則從我朝之神書、帝詔、

の眞名文をさだめ、第二には我朝の眞名の詩を作れり。或は大和聯句といひ、或は連俳互照といひ、其外は俳諧の求韵より萬葉の叶韵にいたるまで、大和詞の助語辭をもて、和漢に通ぜずといふ物なし。誠に此集のおほいなる、文苑英花は倭國の耳にいらず、本朝文粹は唐人の口をまねむとす。いづれも今日の用にたゝず。今や文操のむねとする所は、目に見る時は眞名なれど、耳に聞く時は假名にして、我朝には歌をよむといへる、神の大和もその意ならずや。八重たつ雲のうへ人はいはず、あらかねの田打も薪賣も、まして武門に月花を詠ずる人も、論語に繪の事はありながら、文字のあつかひもむづかしければ、女子も童部も合點する、此俳諧の丹靑をまなびて、假名眞名の二樣はしるべき也。むかしは文鑑に此事を跋し、今は文操に其意を序す。二集は我朝の規模にして、和漢にはぢざるは此時なるべし。

享保癸卯三月日

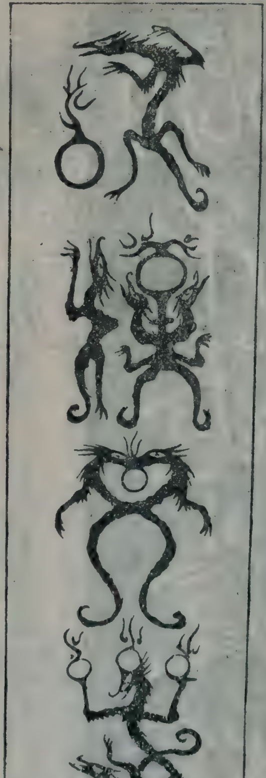
和漢文操

假名序

渡　吾　仲

そも〳〵詩歌連俳の中に、今の俳諧の姿といふは、強からず弱からず、直ならんより、すこし曲りたらんには。白からず黒からず丹からんより、すこし青からんには。曲れば物のをかしくて、青ければ物のさびしき故也。それを先翁の金言にも、詩歌は梅のきよくとも、俳諧は松のにくかれとぞ。しかれば其門に東花坊ありて、儒書に曾參の一以をさとり、佛經に迦葉の微笑を傳へしより、誹諧と俳諧の兩家にわかれて、中古の誹諧は連歌にしていろはず、今の俳諧を繪にたとへて、姿は先にして情は後なるに決定せり。さて其門に兄弟の弟子あり。白狂は弟にして繪の具をこしらへ、蓮二は兄にして繪の法をひろむ。是より天下の俳諧師は、梅に鶯の古からんも獅子に牡丹の樋定規をやめて、ふくさ紙のさびを學びずといふ者なし。それが中にも、俳諧の文章は、先翁も東花を木鐸として武陵の遺稿をつたへ給へば、先には本朝文鑑をあらはし、此時は和漢文操をえらみて、第一には我朝


獅子菴遺稿



らんとおもはゞ、篆字にわたつて、其源をたどして知るべし。されば和朝のいろは文字も、此正字をもて、たしかに書かば、たとひ異朝にわたしたりとも、文字の正字はすみやかに、異國人もよみあかすべしと、九花亭の主人、松氏汶村、風俗文選、かなづかひをたすけんが爲に、これを跋す。峕寶永三丙戌春三月望。

右此本朝文選全部十卷者。五老井許六先生之選也。嘗聞先師芭蕉雖有此志。文章未調而止之。先生十五年來。繼此志終其功成。雖然甚祕之。深藏之。門人等空歎朽文庫。二三子合力而偕發書笈。爲自他直其本書。與書林井筒屋彫之梓。全無一字誤。最無類本。只恐僣偸罪。可豢和歌三神御罰者乎。

寶永三丙戌年秋九月吉日　　五老井門人

といふ。ゐは衣の字にて、ちゞみえといふは、兄の字に歸す。これ橘諸兄の兄なり。上代のいろは文字と、中比今様の字なりは、はなはだちがへり。次第にあやまりもて行きて、あらぬ物になり果てたり。そのかみ、源氏物語書ける比にさへ、はやとりあやまれりとて、紫式部もこれを歎きたるを、當世野郎傾城の書きちらしたる字形には、正字の俤もなく、此後次第にしる人もなくなり果て、いかばかりの字形にか、なり行かんもはかりがたし。京極黄門定家卿の、かなづかひとて、定めおかれしより、歌道の傳授物にして、是をしらざるものは、無下の事なるべし。されど大和言葉に用る假名字には、まつたく字心なし。上古の萬葉書にて知るべし。これ天竺の陀羅尼字の類ならん。假名遣一通は、和國の者のしるべき事にして、しひて吾俳諧の上にては、ふかく吟味せんもむつかしかるべし。たゞかな書のたぐひには、此以呂波の正字を、たゞしおぼゆるを、第一とすべき事なり。文字のたゞしきもろこしにさへ、文字をとりあやまりて、古篆の篆書に、たがふものおほし。眞は眞なり、行は眞より出づる。草は古篆より出て、まつたく行をやつすにあらず。草書に精しか

京の一字は傳敎の作也。いろははもと四十七字なるを、傳敎此一字を加へて、邊鄙遠境の男女迄、王土の字をしらすべき心ざしにて、一二三より、千萬億の數字は、聖德太子のかぞへ歌を、こゝに添へたりといふ。又は空海、勒操、傳敎の三師、共に造るともいへり。又兼良の纂疏には、四十七字は天地自然の聲、彼漢聲を假て、和字となすとかや。さればいろはを國字といひて、天竺震旦になき字とはいひがたし。是まつたく漢字にして、草書の姿なるをや。文の體は、長歌短歌のさまにして、あまねく末世に、手習ふはじめにぞなれりける。さるを後代此中の字性、とりあやまり、書きあやまる事おほし。まづへの字は、へノのㇸにして、ためずして斜なるべし。これ、へとゑの分にて、たわみたるを、ちゞみゑといふなり。とは土也、止の字にあらず。すべていろはは訓をとらず、皆聲を用るによつて、土なる事明かなり。つの字に說々多し、たゞ門の字と心得べし。但口傳むは牟也。世に步武と思へるは、點をうつ所になづめり、またく步武にあらず。點は厶の押の點なり。おの字はおいての字にして、木篇に作るは非也。又をの字は遠の字なり。これを口のを、奥のお

以呂波文字後序

上古日本の文字ありて、今に用ひ來るもの兩三字あるべし。いつの比よりか、漢字わたりて、本朝の文字はたえ果てゝしる人もなし。もと假名字といふは、萬葉書の事にして、訓と聲とを交へ用ゆ。これ以呂波文字のなき以前、男女尊卑これをもて文字の用を達せり。源順が萬葉集のかな付も、聲と訓とのまぎらはしきが故なり。片かなは吉備公の製作にして、アイウエヲの五音相通の文字とす。大和假名とは此事なり。又いろは文字は、世に弘法の作とのみおもへるも、一決しがたし。一說に、

以呂波仁保ヘ土。知利奴留遠。

以上十二字護命の作、

吾加與太禮曾。門禰奈良牟。宇爲乃於久也末。計不己衣天。安左幾由女美之。惠比毛世守。

以上三十五字は弘法の作、

（一）筍

院ノ艶書

やまとの國に梟（ふくろふ）といふ鳥あり、鶯姫（うそひめ）をこひて、文かきやる。ことにそもじはまこともじ、いくたびも文（ふみ）かよはして、まことの文字の返し見るまで。

日蓮上人ノ報書

新麥（しんむぎ）壹斗、（一）たかんな三本、油のやうな酒五升、南無妙法蓮華經と回向（ゑかう）いたし候。

ふ、味ひ鷄蘇のごとし。予が五老井の上に、草字藤あり、其西に紫芝岡あり。されば坡翁が夢は、余が五老の地なる事明かなり。戯れに賛じて云く、

靈芝よ、靈芝よ。

田夫の孫の手(二)となる事なかれ。

禪僧の如意となる事なかれ。

我きく、いにしへの韓氏(三)は、楚にあつては、わづか執戟郎にいやしといへども、漢につかへては、元帥にのぼつて、終に大漢を興す。器物も又同じ。我朝とゝやといふ名物の茶碗は、魚店何がしが猫の飯器たるを、達人とつて萬貫の道具となせり。これ用ひらるると、用ひられざるとなり。あなかしこあなかしこ、諺文(四)の出しおくれ、出損になる事なかれ。

○書　類

(二)痒きを掻く具

(三)韓信

(四)諺

鹽梅よしに贊して曰く、

味噌つけてあぶられればよき團扇かな

入學贊　　許六

儒家何がしが猶子、洛に入つて道をまなぶ。贊じていはく、もろこしに橡樟（一）七年の才といふは、鈍にして遲し、當時は三年にして、大木の幅する木あり、油斷すべからず。

本箱にまづなる桐の若芽哉

紫芝岡贊　　許六

五老井四絕之一絕也

靈芝の産たる事、王者仁慈（二）ある時は、かならず生ずと、泰平長久の時をしりける、いとめでたし。されど聖代に、あはじ〳〵と待ちけん心長さよ。さる心ながさにては、不鬪うちわすれたる代もありけんかし。又地靈なれば生ずともいへり。ある書にいはく、東坡夢に人家にあそぶ、堂西に小園あり、古井の石上に石芝あり、上に紫藤を生ず、折りて喰

（一）文選の註に「豫章大木也、生七年乃可知」とあり

（二）瑞命記、「王者仁慈則芝草生矣」

すてはてて、身はなきものと、おもへども。雪のふる日は、さぶくこそあれ。(一)
花のふる日は、うかれこそすれ。

(一)山家集には「雪のふる夜はさぶくこそあれ」とあり

神農像讃　涼菟

野にもね、山にも寐る人を、人は神とも佛とも思へど、薦著たる乞食は、門にもたゝせず。この皇いかなれば、十善の位におはして、手づかみに物はきこしめすらん。さはいへ、春の野遊には、酢味噌あらばといひおきけん、慮外ながらもわれらが活計なり。

神農もおもへば苣に野蒜かな

團扇贊　荊口

詩あり、歌あり、はいかいあり。おほくは班女が似せ箔つかひ、これこそ古手の打ちぬきなれ。中にも山崎(一)にすめるさる法師が

月に柄をさしたらばよき團扇かな

とは、いうたりけりにて證はなし。上弦下弦は、月の部に入れぬ合點も迷惑なり。今當流のちか道は、其その傍の炙餅、いかなる人も一串は、

(一)山崎宗鑑

（二）「めでためでたの若松さまや枝も榮ゆる葉も茂る」

にもつぱらなればなり。不斷土間にあつて、筵より外を見ぬは、謙に居る事のとゝのへるにあらずや。かりにも黃姉の手にとられざることの、ありがたき事を、ふかくさぐりしるべし。目なだらかなる時は、かますを擔ふ老翁の出來て、こつ〳〵とする音すみて後は、季札が劍を塚にかくることを恥づべし。名をぬすむ盜人はあれど、石臼をぬすむ盜人はなし、また人の心をみださゞるのいたりならずや。月さしのぼる夕顏の陰に、ひとりはおどろの髮をまくね、ひとりは佛のまねをするあたまなりにて、くるしき事をおぼえず、挽きまはす力に、其飢ゑをたすくるは、文王の始につかへたまへるに事たがはず、やゝいま様のむつかしき歌のふしにもかまはず、聲も唱歌も古代のまゝにして、抜もさ（二）かゆる葉もしげると、しはぶきがちに、わなゝかれたるぞをかしきや。

○讚贊類

西行上人像讚

芭蕉

藤次といへるものも、けふは何がし町の名主、宿老の列につらなり、小賣請酒の細望姓も、白壁をならべ、大釜の煙絶ゆる時なし。これ世に上戸といふものありて、酒の德は顯れたり。さあらば下戸はあまねく富めるものにやといへど、むかしより下戸のたてたる藏もなしとは、皆飲みぬけの金銀にて、三葉四葉の酒藏とはなれるなり、是も又理のとりあやまりなるべし。其德孤ならんや〳〵。(二)

石臼頌　芭蕉

市中にあつて、俗塵によごれぬものは、げにそのはじめをよくするよりも、その終りをとぐることはかたし。商山竹林の猛士も、猶出でてつかへ、寛平華山の上皇も、終りたしかならず。たま〳〵これを見るに、たゞ石臼のひとつのみ。聖一國師は、これをもて肉身をやしなひ法身をしる。民家にはまた、麥刈りそむる頃よりも、籾こきおとす冬にいたるまで、片時も餘所にする事なし。其高き事を論ずれば、役優婆塞の庵の中にかくれて、彼たぐひを(一)道引きりの上に立つべし。上と下とふたつなるは、ちからたらざる者の爲

(二)論語里仁、「德不孤、必有隣」

(一)小文庫には「道引く功の上」とあり

に應ぜずとて、一生請合ひ申されずとかや。花車を好みたる、あるへいたう盛もくるしく、又一箸づつの盛並べも、中々待遠なれば、たゞつくね盛の大椀にて、三盃目の時、はじめて本性には立ちもどりけり。仕舞限の二兩がさねは、無念無想の境界になつて、うき世のおもひ出を申しけり。

酒徳頌

朱 廸

伯倫酒徳の頌作る、其徳あげてかぞへがたし。さる徳ありて、内損脾虛の病を愁へ、酒毒悪腫の痛を生じ、身をやぶり、徳を失ひ、なま醉の號をとりて、朋友のまじはりを斷ち、破戒の過を蒙りては、佛の道にそむく。されば盜跖にも徳ありて、伯夷にも損あり、これ其用る人によりて、其理のとり誤りなるべし。我今酒の徳を見るに、京奈良の酒店、伊丹鴻の池の酒藏、(一)日々に身を潤し、月々に屋を潤す。綾羅錦繡に目を見出し、五味八珍に腹をこやす。ある時は吉原島原の揚屋にあそび、大臣とあふがれ、作善供養の場につらなりては、大檀那の號をとる、是みな酒袋のしぼり粕なるべし。きのふまでは下部の

(一)大學、「富潤屋、徳潤身」

(一)飯後に出す小食を後段といふ

(二)木曾の寢覺の蕎麥は代金によりて盛り方に等差あり

(三)君臣輔佐役使の意

蕎麥切といつぱ、もと信濃國、本山宿より出て、あまねく國々にもてはやされける。されば宇治の茶あつて、同じく茶臼石に名高く、伊吹蕎麥、天下にかくれなければ、からみ大根、又此山を極上と定む。洒々落々の風流物、誰か是を崇敬せぬものはあらじ。世に道成寺の能あれば、其次は三輪にきはまり、鍋の料理過ぎて、後段(一)の時は、かならず蕎麥切の場所なるべし。常に胃の氣をめぐらし、諸鬱を散じ、壽命を延ぶる聖藥なるに、いづれの虚氣人か、中風の毒とあだ名をたてられ、蕎麥喰ぬ人も、頓死中風はするなるべし。只蕎麥一人の罪となるこそ口をしけれ。近頃は慳貪屋の手に落ちて、所化寮の俄客に、青貝の手桶荷ひこみ、比丘尼宿の大よせに、錫の鉢をすゑならぶ。壁に紋書きたる大津茶屋には、一本鑓の旅客をとゞめ、寢覺(二)の門前の何本もりには、通りの馬士を招く。有馬の夜食、淀の川舟の乘合、眞那精進のわかちもなく、をとこ女の去嫌ひもなし。夫蕎麥大根は、君臣佐使(三)の付合なるを、越路の國に、胡椒の粉の折形を備へ、都の方には、山葵薑にてやらるゝこそ本意なけれ。先師翁のいへる事あり、蕎麥切俳諧は、都の土地

みを記し、火燵にずりこみ、障子の穴に、雪霙を吟じては、餘所の寒さを佗びたり。獨居無言の行に倦まず、旅店山野の道づれを求めず、豪貴にともなひ、鄙賤にまじはり、夜明しの會に、親の心をやすめ、年に似合ぬあだ口も、俳諧師にゆるされ、野老村童も、睦月五月のひまを伺ひ、馬士船頭も、山川萬里の勞をなぐさむ。夫俳は市中にあつて、山林のさびしきをうらやむものなり、全く山居の道具にあらず。目に見えぬ鬼を泣かしめ、勇武の心をやはらぐるものは、詩歌連俳ともに、其感ひとしかるべし。かの中にも、一言の活法に、白髪を若やかし、忽ち千歳の命を延ぶるは、獨り俳諧の徳也。鄙言俗風とて、君子いやしめ給ふ。連歌は徳高うして、やむごとなき御翫びよりはじまり、宗祇一代は百韻に花三本なりしが、宗長の時、ふかくかなしみ、花四本、雨二つの勅許を蒙る。鰒は毒ありとて、喰ふ人の稀なるに、陰徳をかくし、俳諧俗流とて、捨てられたるに、大きなる手柄ありて、日々の流行に新風をおこす、これ其徳のすぐれたる第一なるべし。

蕎麥切頌

雲鈴

麥ずき、地は地好には極れり。そしりてをかしければ謗り、ほめてあたらしき時褒むるものは、我が大道の俳諧なり。

○頌　類

俳諧頌

李　由

はいかいもと和歌の一體にして、神代よりはじまり、更に連歌出よりたるにあらず。其法式、連歌に相似たれど、あながち無言(一)、新式(二)になづむ事なかれ。俳諧、誹諧、誹說、滑稽、諧隱、謎字、空戲、鄙諺、狂言、九つの品にわけられ侍る。いかなるを云ふにかあらん、まさしく知る人なし。公任經信ごときの人も知らざる事なれば、末代にさだむべきにあらずとは、御抄(三)のおもむきなり。古今、千載、後拾遺等に見え侍れど、今のはいかいも、九つの中には、相かなへるならん。これ和國末代の風俗にして、四海こと〴〵くながれわたり、あまねきもてあそび物とはなりにけり。石筆の早態に、花月のおもしろ

(一)木食上人應其の無言抄
(二)二條良基の應安新式
(三)順德院の八雲御抄

(一)娥黄、女英
(二)孟子離婁上、「男女授受不親禮也、嫂溺援之以手權也」
(三)梁の武帝多く寺院を建立し達磨に向ひ其功徳如何を問ふ達磨無功徳と喝破せり

うおもはるゝ人のなきこそ本意なけれ。儒佛の最初はあたらしからん、次第々々にふるくなりて、聖人佛も出給はず。是に俳諧を加へたらば、忽ちあたらしき聖人も出で、當流の佛も出世し給はん。昔堯の二女(一)を許したるは、聟も舅も聖人の寄合ひ、孟子(二)嫂おぼるゝ時、さし合をくりはじめたるは、豈孟軻の流行にあらずや。佛は功徳をすけり、達磨(三)の無功徳はいき過ながら、これ佛法のあたらしみならん。夫當時凡家の人、聖人佛になりて何の益かあらん、たゞ一家の中の聖人にて、世の助けにはなりがたし。其上仕官は浪人のもとゐ、工商農業の人は、金銀田畑をかすめ取られ、道しりだけの損をして、たちまち非人乞食なり。その時例のふるみにおとし、時にあはぬとて仕舞ひけり。とてもなりにくき聖人佛をうらやむよりは、たゞ愚痴に金銀をたくはへ、世のため、人の爲、ほどこし侍らば、生聖人、生佛とて、釋迦孔子より有難がらん。たとへば饂飩を好く人あり、其子は蕎麥切を好めり。蕎麥ずきはうどんを謗り、温飩方はそばきりを悪めり、日夜朝暮此論やまず。むかしより、蕎とも麥とも、世の一統せざれば、蕎はそば好、麥は

大きなる棺槨をこしらへ、檀那寺のやつかいとする、是より外によき事は見えず。異朝の法に、地を買ひ取りて葬るは、大國の風俗にして、深きわづらひなきと見えたり。和國廟の爲に、地を買ひとらば、神代より日本半國は買ひとられん。砂糖曲物にて埒するこそ、佛家大きなる才覺なれ。いにしへより鳥邊船岡に葬りあまりたる事をきかず。釋氏の事たる事、田畑もたで秋をさめ、蠶飼せずして冬あたゝかなり。人間一種の建立にして、もし此法なくば、此ともがら、いづれの島にかわたさん。佛法には精進日あり、むかしは祥月一日の沙汰なり、それさへ大小のくり合、閏月の相違にて、命日の錐もみは覺束なきに、眷屬あまた出來て、飯料不足を補はん爲、毎月にはなりたるとや。月々齋米をやりながら、二親もたぬものなければ、一とせの中、二日はのけて、二十二日魚くはぬ日こそ口をしけれ。佛法修行の人を見るに、其なす業は坊主のまねなり。成就の時と見えて、くり〳〵と剃りまはし、袈裟衣の仲間に入つて、上品上生と思へる時、其なり濟したる所を見れば、物も見事なる坊主なり。たま〳〵佛法をたのしみて、浮世をやす

陽五行を以て、萬物化生する事をきかず。聖人天地の沙汰を大きにほめたり、天地はほむれどもよろこびず、そしれども怒らず。これ皆聖賢の理窟にして、元來天地に分別はなし。天は升る事を好き、地は降る事を好みて、四時の骨をり、晝夜の苦勞、人もやとはぬ僣上こそ、大きなる損なれ。それより人物山川草木鳥獸まで、おのが一筋に好入つて、外の物好は更になし。雨は雨好、風は風ずき、夏は暑ずき、冬は寒ずき、されば櫻に梅もさかず、鶯がほとゝぎすを鳴きたるためしなし。聖人は聖人好、阿方はあはうずき、鬼は地獄ずき、佛は極樂ずき、人は人ずき、我は我ずきより外はなし。世に儒釋道の好人出て、位鼎の足のたてるが如し、世々の方人ありて、わが好きたる道の外なしとおもへり。五戒五常は、此方より出づると思へど、五倫五戒の墨曲尺をはづれて、人一日のたゝぬ上は、儒佛なくても事は缺くまじ。儒佛崇敬の人、聖人佛より、飯一盃ふるまはれたる沙汰をきかず、たゞ士農工商の家業の外、さら〳〵別に大道なし。當時儒好を見るに、敬の一字は胸中にありて外より察しがたし。たゞ坊主を惡み、佛をそしり、親兄弟身まかる時、

されば とて、かの藪醫者のはやらざるも、仁とはいひがたからん。たま〱病人とてむかへたらんをうれしと、羽織打懸け、時得たり顔に、走り出らるゝこそ、これも不仁なるべけれ。むかしもろこしに、矛盾を一荷にしてうる人あり、矛うらん時は、いかなる盾もたまらずといひ、盾かふ人には、干將鏌鎁も、通る事あたはずといふ也。かたへの人きゝて、其方が盾を、其方が矛にてとほさば、いかにやと問はれて、終に物いはずして、本國に逃げかへりぬ。これを矛盾とて、をかしきたとへにはいふ也けり。吾朝にはこれをやはらげて、慶庵(三)とも、いしやほん(四)ともいふ也。又は小村の道場坊も、藥をほどこす道は仁者なれど、これもはやりをよろこばれて、縮緬醫者にかはる事なし。又は後生たすけんといふも仁の道にちかし、されど釋氏も死を喜び、鈴打鳴らしてとぶらはるるは、これも不仁の沙汰なるべし。昔より此譬を穢多(五)の伯樂とはいふなりけり。

蕎麥論　　許六

天は天ずき、地は地ずきにして、いづれの時、おもき命あり、又は誰人頼みあつらへ、陰

(三)輕薄追從して辯舌巧なるものをいふ
(四)幇間醫者
(五)穢多は牛馬の死をねがひ伯樂は之を生かすを職とす之をかぬるは矛盾なりとの諺

二藏三八が上にたつ事かたし。一日の糧、一月の糧、一年のかて、一生の糧もとめたくはふる計、其根ふかく、其源とほし。又馬士飛脚のやからも、旅に生涯を果たす圓位(一)、風羅のたぐひも、旅に死なんとはかりて、心のまゝに終る。さればかたちの似て、志のたがふ所は、雲泥の論なり。我ことし衣更著のはじめより、五月の半までに、旅する事すでに四百餘里、おのが身の上を論じて見る時、大軍の將は、罪重しといへども、其利益大きにふかし。吾れ今日の一錢をも求めず、五斗の米を荷うて、東西に漂泊する事、馬子駕籠かきの論に落ちて、終には竝松の間に餓死せん。さればとて、鮨めしの蛆を願ひ、糞虫の粮に飽きけるを、うらやむにあらず。

仁不仁論　　北枝

楯(一)つくる人は仁にして、鏃するものは不仁なりとかや。(二)醫をなす人は國を醫し、醫人の名目は仁にして、實は不仁なるべし。病者多く療ずる人を、名醫とも、はやり醫者ともいふ也。其はやる所をよろこび、乗物ざゝめかして隙なからんは、不仁の第一なるべし。

(一)西行、芭蕉

(一)孟子公孫丑上、「矢人豈不仁於函人哉」

(二)國語、「上醫醫國其次疾人」

風俗文選卷之十

○論類

旅論　許六

陰陽にしたがふ蒼生は、これ皆天地の螂蛆也。鮨食に生ずる蛆は、生れながら粮に富み、口あきて夜出づる鳥は、觜にさはるをとりて、やうやうおのが糧とす。さればとて粮のとぼしきを歎き、俄に業をかへん手段もなければ、木啄のつゝきまはり、蜘蛛の網を張りて、待つより外はなし。つらつら東西に奔走する旅客、粮の爲にせざる人稀なり。かの中に風雅に旅する人に代つて、論をくはふ時、こゝに大國を領じ、大軍を將て、往來する人は、粮を求むる事おほいなれば、又其罪も甚深し。又寶引の錢をたくはへ、十二灯をあつめて、ぬけ參りする二藏三藏、一錢の袖乞に滿足して、五臟をやしなふ。かれと是とを論ぜば、

(四)とをはことをの行か

かひありとぞ見はてぬる。今年は老の名によばれて、此古里(ふるさと)の春をも迎ふるなるべし。人の命のさだめがたきに、耕(たがやさ)ずして食(くら)ひ、織(お)らずして著る。我はた世の人に、何をかおふせたらん。入つては此神の光に照らされ、出でては彼の翁の徳にあそぶ。俳諧はおのづから人の上にいはれて、我はいかいの人をあやまてるなるべし。人の俳諧のあしからんをば、我俳諧のあしき也、我俳諧の よからぬ をば、神の風雅のよからぬをといふべし。まして夜居りの神心には、朝寐も身につみておぼすらんかし。此表をいさにくみ給ふな、疎くはかうまで頼むまじき物を。たゞ俳諧に命をかふべくとも、四時の變化に私なからんとを、(四) 幣(しで)の御まへにかしこまりて、稽首の涙をかけ奉る。

おのれがおもひにまどひぬるをと。理ははじめていたりぬ、事はつくすべからず。かくて俳諧は、まのあたりにありて、口まさにいはんとすれば、心のくまをつくさず、人のやすき所をまなばんとて、おのれはむつかしき奥をたどり、おのれむつかしからざらんとすれば、人は金玉の手づまをつくす。ふかゝらずしてあさく、あさからずしてふかし。朝におもひ、ゆふべにいねて、此心又やすからず。ある夜、曲翠亭にあそぶ事ありて、尾の荷兮が蔦の(二)葉の一句を評じて、俳諧はかく言ひつくすまじきをと申されしに、さはとむつかしき夢の、さめたる心地ぞせらる。落柿舎のぬし、酒落堂(三)のあるじも、おなじ夜のあそびに侍りて、我はかくおぼゆるといへば、人はさもおもはずとこそあざむかるれ。よしや我心のせまりたらん時は、燒火(たきび)の轉寐(うたゝね)に、雪折竹をきゝ、戸の節穴(ふしあな)に、稻妻を見ても我はかくまどひたりと、おもひしらんに、我はわがやすき所を知れりけりと、今宵はじめてぞさだめける。是よりあづま路のかたに旅立ちて、松島象潟(きさがた)のながめにあき、越(こし)の白根のしらぬ行くすゑも、心づくしの旅寢をだに、生(いき)の松原の名によそひて、生ける

(二)「蔦の葉や殘らず動く秋の風」の句をさすれや

(三)濱田珍夕の堂號、芭蕉に酒落堂記の文あり

は、支考が坊號にして、野にある時は、野盤子といひ、家にある時は、獅子庵といふなるべし。さるは此御神の氏子にして、風雅はおのづから漂泊のたづきとぞなれりける。むかしは桑門に袂を染めて、ほのかに祖佛の影をしたひ、中比は翰窓に灯をとつて、ふかく孔老の腸を見んとせしも、おのれが智をたのみ、物の理にたどりて、たゞ春の蜂の窓にまどへるたとへにぞ侍りける。一とせ湖南の幻住庵に、白頭の翁を見て、才能は文字をはなれ、風雅は心をあそばしむる物なりと聞いて、此翁とあそぶ時は、酒にゑへる人の、何ゆゑならでも、たゞおもしろきこゝちにぞ侍りける。翁の曰く、俳諧といふに、三つの品あり、寂寞はその情をいへり、女色美肴にあそびて、麁食のさびをたのしみ、風流はそのすがたをいへり、綾羅錦繡に居て、薦著たる人をわすれず、風狂は其言語をいへり、言語は虛に居て實をおこなふべし、實に居て、虛にあそぶ事はかたし。此三つの品は、ひくき人に、高き所をいふにはあらず、高き人のひくき所をいふなりとぞいへる。されば此さかひは、人のほめ人のそしる所なるを、ほめられんと思ひ、そしられんとおもふ、

るべしと、かれが淺見を嘲つてしかいふのみ。

しばらくは蠅を打ちけり韓退之

讀ム二佛骨ノ表ヲ一

厚爲

佛骨は西域の人の骨なり、漢土を飛び越え日本に來る。豆腐昆蒻に足突き給ふな、いらざる長逗留して、廚子にこめられ、外より鎖をおろしぬれば、大小用にからき目見給ふこそあはれなれ。はやく手作の紫雲に打乘り歸り去り給へ〳〵。

から鮭の舍利にならぬこそ過分なれ

陳情ノ表

支考

美濃國山縣郡。在二三輪明神社一。清輔袋雙紙ニ。記ス二此神詠ヲ一(一)。東華坊作テレ文ヲ奉ル二此神ニ一云云。愚謂借二用李令伯之表ノ題號ヲ一耳。

世に天地ありて、天地は人の父母とこそいふなれ、人は萬物の上にたてる物なり。その人に我あり、その我に東華坊ありて、西にあそぶ時は、西花坊といへり。東西の二華

(一)「食とする木の葉は風にちりはてぬ露の命を何にかはせん」

樣は天道次第たるべしと、庄屋肝煎謹んでかくのごとし。臣悲歎の情にたへず、拜表して以て聞す。

嘲二佛骨一表　其角

古文傳類、准下讀二孟嘗君傳一之例上

むかし韓退之(一)、表を奉つて佛骨を嘲る。今我これを讀んで、退之をあざける。人死して骨となり、骨朽ちて土とかはる。佛骨何の王位をけがさん、佛骨もし人を穢さば、禽獸の皮骨は、猶人をけがすべし。人は天地の靈にして、禽獸人に及ばず、夫束帶のかざりには象牙をたふとび、珍簟の鋪物には、虎豹の皮にふす。鼈甲は笄につくり、尾毛は筆の用にぬかる。鹿茸(二)、牛角、鯨の髭のたぐひ、宮室を飾り、器物を造る。たゝき鹽辛は、なめて口中を潤し、雉子の胴殼、蕪骨(三)は、嚙んで直に腹中にはしる。退之佛骨をいやしとし、禽獸をたふとしとするは、何の謂ぞや。若佛骨細工のたすけにもならずといはゞ、はやく疾鬼(四)にあたへて、錢かねとせざる、假令拂底の鬼なりとも、虎の革の犢鼻褌は取

(一)憲宗佛骨を宮中に迎ふ
(二)鹿の袋角
(三)鯨の頭枕骨
(四)足疾鬼佛牙を盗みし故事

千里草枯れて赤地となり、百川水盡きて川原となる。野老たふれふし、村翁餓ゑつかる。牛羊唾かわき、犬馬舌こがれたり。白晝に星あらはれ、日月は赫々としてあかし。龍神も岩穴に引込み、鳴神の駒も膝を屈してたゝず。土器の大豆は、忽ちいれこがれて、水晶の艾は、たちどころに火となる。白髭(一)の鳥居は出て、葦原の變を感じ、鹿飛岩あらはれては、勘者の勞を盡す。大堰桂の水いさかひには、鋤鍬の鋒先をあらそひ、鳥羽の田づらの古井を汲んでは、釣瓶のひまもなかりけり。されば國王もまことありて、政たゞしく、古代の風を興し、かりほの庵のあらはなるをあはれび、寒夜のあかつきには、御衣をぬがせ給ふ。百官忠義を盡し、郡主民を撫でては、限りある貢物をゆるされけるに、天何の怒かあつて、かゝるからき目見せ給ふぞ。神泉苑の祈さへしるしなくて、布留の社の名のみ空し。牛を洗うては雨をいのり、簑笠をかけては氏神をたのむ。天早くあはれみをたれて、雨をほどこし給はゞ、御湯は大釜を盡し、相撲はあたらしき鼻褌をかゝせん。猶ひなびたる笠の躍もをかしく、裝束出立は揃はずとも、借著ばかりはゆるされて、模

(一)白髭明神は琵琶湖の神にして人壽六千歳の昔より此にすみて湖水の七度まで桑原と變ぜしを見たりといふ(太平記)

曲尺合、殘る所なくおぼえて、これらを常に肺肝の間にかくし、泰平の世の安居の樂となせり。汝ひととなり、筋骨つよく、力つきなば、おのが分限をしりて、當役を勵むべし。功成り名遂げて餘力あらば、天地陰陽の理を探り、仁義五常の道を學びもすべし。これを文武の侍とはいふなり。かならず文にながるゝ事流れ、武士は武道を先にして、文は後にと心得べし。今わが猶子十歲の時、遺誡のはじめに、此辯を書して、武の魂をいるゝものなり。

○表類

雨乞表　　許六

皇天天に位し給ひてより以來、四海の民を愛し、農業おこたらず、蠶飼時をうしなふ事なし。あまねく御うつくしみの波は、八島の外までながれ、ひろき御めぐみの風は、いたらぬ里々もなかりけり。しかるにことしの夏六月、大いに旱して、雨一すぢも降らず、

(四)黄帝の時馬師皇といふ者ありよく馬を醫す

を繼ぎ、寶藏院の法印より、我に至りて五代なり。馬は悪馬新當流を學んで、かけひきの道は達者なり。此三つのものは、一騎武者の手足にして、これを知らぬ者は曾てなし。これに精しからんと思ふに、太刀打はつよく首に斬付け、鑓ははやく敵の胴腹を、突きぬくより外に道なし。馬は其品おほし、よく乘り得たりとも、軍馬の上をしらぬ時は、おほきに缺けたりとて、黄母衣の隨一、河合氏の祕術を尋ねて、常に數卷のおもむきを、ふところに納む。馬はわが足なり、いたはる道をしらでは、息合病馬に疎しとて、太閤秀吉公の愛臣、桑島左近は和の馬師公(四)也。此術をたづねもとめて、百二十卷の祕方に渉る、馬の好惡をしらざれは、求むる道に疎し。古今目利は一流にして、山上入道が傳也。世に馬を見るといふ人あれど、山上入道の名をだに知らず、まして深き習ひある事は猶しらず。往昔は此藝稱ぜられて、祿をいたゞくもの多し、今はしる人さへなくなりたり。これを段の目利とはいふなり。馬上の五物、鑓合、太刀打、早乘、早おりは、鞍鐙の善惡により、これを知りて求めざれば此事かなはず。大因幡三代より、代々の手曲をしり、寸法、

（三）說經僧の檀家より迎へらるる時の用意にとて馬乘を習ひし話徒然草にあり

なるを、打忘れたる不覺仁の、穴澤をいふにあらず、たゞ藝術を賴むべからず。むかしより、一番鑓をしたる人に、上手の號もなく、又下手の號もなし。かくいへばとて、武藝をなすなといふにはあらず。武藝の名稱は、太平の看板なり。武藝とて、我役にあらぬ事は、せぬがよし。しらぬというて恥にならず。立身にしたがひ、役替にのぞみて、其時すみやかに當役は習ふべし。其癖當役は無沙汰にして、いらざる說經者（三）の馬乘習ふたぐひならん。一藝すぐれたりとも、武の全きにはあらねど、一藝をも愛し給ふは、大將の役なり。我わかゝりし時、此道に深くわけ入り、春の花のむなしくちり、秋の月もおもしろからず、あけては食を忘れ、暮れては寐る事をしらず。されど弓は力弱くて矢束を引かず、玉打は目に病ありて細かにあたらず。此二いろの道は口をしく缺けたり。凡そ手足にかぎりあれば、知りても持では益あるまじ。劍術は、母方の祖父にしたがひ、正法念流の兵法を學び、すでに未來記の奥義を傳ふ。祖祖父より四代の門弟、二千餘人の中、未來記を嗣ぐもの纔に二三子に過ぎず。これ劍術諸流の源也。鑓は横手物に利ありとて、父が術

目まじろかず、能登殿の矢尻は、胸板にをれこみ、彦四郎が切先は、腹の皮にをさめかくす。老は齋藤が髭にちかより、年は諸葛が齢に隣る。嗚呼千行萬行の涙をおとし、三（一二）思一言の辭を殘す。夫武士の武道だて珍しからずとて、商人のなすにもあらず、たゞ武士の眞似がよき也。さればとて、武士の武士臭きは、鼻を覆ふ。おのれ〳〵が家職の、ふるき事をしらず、魚物野菜のたぐひも、ふるき物はかならず臭し。武士の武藝を好むといふは、本意にあらず、其武士幸に武藝に好き當れり、博奕遊興好に曾てかはらず。武術力量をあてにおもふべからず、馬物具を頼むべからず。佐々木四郎は、わが氏姓の祖なれど、生食頼みに宇治川の先をかけられたり。もし世に生食和墨なくば、先のならぬも不自由なるべし。搦手數萬の由斷人、一騎も殘らず渡しぬれば、佐々木が鎌倉の荒言も、すこしは是にて戻りけり。嘲り笑ふに似侍れど、佐々木、梶原になづまぬものは、大きに褒めたる言葉とは、必ず知るべし。一とせ大阪表において、穴澤といふ天下無双の長刀の名人も、折下外記にたばかられて、終に組討には討れたり。一生の骨折は、此時一度の用

（一二）論語公冶長「季文子三思而行」

よりもやすかるべし。今の上手めく人は、毎度素問の語で堅め、本草の説をつばなかす、文盲の病家、平詞を信ぜずして、大きに漢字に驚きて、上手名醫に極む。當世のやまひは文盲にて、素問本草を聞きしらずして、彼の名人の御藥はかつてきかず。ある人犬の吠えかかるには、虎といふ字を、書いて見すれば、忽ちにぐると習ひ置きて、ある時人喰(二)飛びかゝりけるに、習の文字を書いて見すれば、其手にくらひつかれけり。日本の犬は文盲にて、虎の字のよめぬが如し。たゞ理窟より理窟にくひ入り、是は上を見てゐる句、これは下を見てゐる句なりと、小刀刻の小細工は、みな素人に耳ぢかければ、終に理窟に勸め入れて、理窟地獄に墮すなり。さればはくらん(三)の賣藥は、はくらん病が買ふなりとは、名人の一言なり。百年の後、若理窟がすたらば、わが僭上のこと葉も、又眞となるべし。

射御辯　　許六

比類なき勇武の木陰をたのみ、百年の高恩は廣く天をいたゞき、三代の微祿は、徒に地をせばむ。是を食める腸は、忠義をのべて形となし、武道を錬て肉を作る。膚(一)たゆまず、

(二)人喰犬

(三)俗に霍亂を訛りてハクランといふ、さる文盲なる人には通俗を主としてハクラン藥といふがよしとの諺

(一)孟子公孫丑上、「北宮黝養勇也、不膚撓不目逃」

（二）名醫にて元の至正頃の人

又人參のきゝたるをも、たしかには知り給ふまじと覺束なし。きくとあたるとの境目もわかれざるに、朝鮮唐の産の微細の能は、知り給ふまじと、猶々おぼつかなし。我おもふ唐より渡す所の數百方の醫書、皆唐人參にて組みたる方也。若人參朝鮮にかぎらば、其國所を記すべし、唐人何の遠慮すべき。されば川芎藭芎のたぐひも多し。それ萊菔は、尾張の産を極上とす。されど大根のなき國所、なくて事の缺けたる事をきかざるが如し。それ醫道、俳諧、よく相似たるべし。醫者やまひにむかひて方をつけ、作者前句題に望みて、趣向をよする所、其理窟をはなれ、つくつかぬの危き境は上手名人の手限、同じ場所ならん。當時醫をまなび、歌道を習ふ人を見るに、其稽古前後なり。まづ所作を盡しからして、なほ其道に精しからん時の學文なるべし。これ古人上手の仕かたなり。さるを學文よりまなび入りて、一切理窟にてすますゆゑ、祭過ぎての皆掃除也。むかし丹溪（二）素問を見て、四十より醫に入る、古今の醫聖と稱す。すべて醫學は狹き物ならん。道を盡し、理を究むるは、素問一部の事也。其餘は味噌鹽の獻立にして、以呂波寄の字盡を引く

(一)新古今、「さなきだに重きが上の小夜衣わがつまならでつまは重ねじ」

かたし。産は朝鮮を最上とす。其代物たちどころに魂を失ふ。醫家朝鮮の産を好まるゝは、重きが上の小夜衣(一)、質に置くより外はなし。彼の人參醫者を察し見るに、理窟人の利錢する心になぞらへ、又は低人の價高直物にめでて、ひたすらたふとまるゝと見えたり。人參の力にて、あまねく人の命を助かるならば、邊塞醫療なき地は、人種は盡くべし。たとへ死ぬるにもせよ、人參に殺さるゝ者なし。人參ある國は、人參にて人を助け、又人參にて人を殺す。生死の算用は、持にして置くべし。されど大切の金銀、つひえぬ方勝ならん。やまひに三つあり。人參にてたすかる病、人參にて死ぬる病、人參なくて活きる病、此三つの內、人參なくて事缺けぬ方、二つなれば是も一つの勝なるべし。我沈痾老衰して、折ふし人參を用ゆ。唐の産、朝鮮の産、其功すこしも變る事なし。醫家は人に與へて、外より察し、病者は我呑みて功を知る。たま〳〵病家に入りて脈をつまみ、そこ〳〵に尋ねちらし、病見どほしの顏つきにて、合點々々で歸らるゝなり。彼人參にもり殺され、忽ちあたりたる事をしらず、其功いまだとゞかずして、空しくなりたるに極めぬれば、

撫づる、至らざる所なく、叉なさずと云ふ事なし。是いやしき事の第一なるべし。貴人高家の傍に、侍女小姓のつとめあれど、厠の役ある事を聞かず。されば我脚にて、他の鼻端の塵を拂はゞ、人怒つて我を罪せん。人また我頭の蠅を、足にて追はゞ、我是をたふとしとおもへど、世の人我に代つて、にくみのよしり、怒をうつして、我を阿方と號することそ、おほきなる僣上なれ。其僣上人、蒲團簟に臥して、休する時も、必ず足を伸すを一番とす。湯にも入る人も、足からならでは這入りがたし。向後足にあたらしみをつけて、手を古風のふるみにおとさん。但し德利子は、各別の沙汰なるべし。

人參辯　許六

夫人參は、元氣大補の聖藥也、からやまと、これを寶とす。とりわき三十年來の和醫、人參なくて、人を療する事かたしと見えたり。邪氣濕熱陰虛火動のわかちもなく、人參には、病家おほきに草臥れたり。凡人參の斤兩はかぎりあり、かぎりなき人參つかひに買取られて、世界の人參威をまし、時を得たり。價高直にして、凡夫貧僧の口に入る事

れて、たから物の數には入りぬ。ある人、洛の大儒に天狗を問ふ。これ深山幽谷のいきれより、かゝる變異は生ずる也。何の怪とするにたらんと。されば天狗を山谷のいきれといはゞ、麟鳳は聖人のいきれならん、尾長虫は糞土のいきれにして、虱は乞食のいきれなる事慥なるべし。

手足辯　汶村

甲冑のよろひかぶとをあやまり、行燈挑灯をとりちがへたるは、むかしより國中みな誤り覺えければ、却つてあらためたる人を、あやまりといふも理ならん。こゝに一身の中、足を賤しとし、手を貴しと定め置きたるは、いづれか賤しとし、いづれかたふとしせんや。賤しとて終に斬り捨てたる人もきかざれば、持にこそ定め置きたけれ。それ足は行歩を產として、外の用をしらず。沓木履をかけ、草履わらぢをはきて、直に土をふまず、居る時は、足袋襪に包みまはし、歩みつかるれば、馬駕籠に扶け乘せられ、千山萬水の間に坐して風情に嘯く。手は一身の奴にして、定めたる產なし。頭の虱を拈り、踵のあかぎれを

萬の形ある物、いづれか畫圖に寫されぬ物はあらじ。されど眞向の天狗ばかりはなるまじとて、繪かく人は常に笑ひ侍りけり。いかにぞや、天狗しりの古法眼も、正面の鼻にはこまりぬらん。此もの神祇釋教にもあらず、人倫生類の部をのがれて、俳諧の爲には、よき道具ならん。世の人の我慢長ずれば、鼻にあらはれ、天狗となりて、杉の木ずゑに居をトめ、愛宕高雄の山住を好み、都の秋のなつかしとや、浮世の嵯峨のあたり近き、嵐の山の夜あらしに、木の葉天狗ぞさそはるゝ。又は大峯かつらきや、高間の山の花ざかり、(一)富士の高根にねぶりては、月雪のふる里をわすれたる、浮世のさまぞあはれなる。されど名歌などよむべき顏にもあらず、かの里も出かはりやありけん、盧氣たる男をたぶらかし、嫁取もせぬ宿に、礫を打ちかけ、火事をすかれたるこそうるさけれ。かゝる境界にも、何の奢かありて、無盡の沙汰には及び、天狗賴母子と人にいはれ、(二)弦めその一座につらなり、六波羅の酒盛は、醉狂ひの擧句もいぶかし。うるさき顏にても、花の都人を(三)戀ひそめ、牛若殿に浮名をながし、心中のしるしにや、爪をはなし、果は竹生島に送ら(四)

(一)新古今、「よそにのみ見てややみなん葛城や高間の山の峯の白雲」
(二)とりぬけ無盡のこと
(三)染殿の后をさす
(四)竹生島の寶物に天狗の爪あり

(二)朱子、大學序、「異端虛無寂滅云々」
(三)配は排の誤か
(四)とびあがり者

く物を、豆腐の聖とはいひはやらす、猶五倫五常の獻立を作りて、是は仁也、それは義なりと、急用に取出す、七つ入子の三つめ五つめを、求めに應ずるには似たり。田樂一串にも、仁義は自然にありて、天地をつらぬく風味はもてり。折ふし藪賢人あつて、豆腐をあへ物にせんといへば、朱子程子の鹽から口は、これを異端寂滅(二)と配(三)すれども、元來聰明睿智の飛助(四)ならでは、此行過はならず。たとへば用名介が非揚名介口傳云々隣家にあたつて、碓を穿てり、終日耳中に客たり、過去の聲は盡きて、未來の音はひゞかず、たゞ一聲の碓にして、終日一聲のからうす也。許由むかし堯の天下をうけず、なりひさごもかしかましとて捨てたり。天下國家のたくはへは、輕うして棄つるにやすく、耳中の瓢の蓄は、重うして捨つるに難し。巢父が牛を洗はざるは、元來許由が耳の汚れたるをにくむなるべし。和漢同じ耳垢等が、ほめしるしたるこそ口をしけれ。されば前後なき事をみづから知らば、すたりたる田舍豆腐も、開闢一丁の豆腐に、異なる事はなかるまじかし。

天狗辯　　木導

らん事を爭ふ。其あらそひは、まことに君子なるや。東花坊これが判者たらんといふに、いとけぶたし。風雅に通じて、翁を見ざる嵐青は、見ぬ戀にあくがれ、翁を見て、風雅に通ぜざる林紅は、逢うてあはざる戀なり。いづれも戀の部にはありながら、心とけぬ程はいかにかまさらん。くらぶ山の嵐も吹きあへず、あだし野の露もおきかはりて、八とせのむかし語ならば、我も其翁は戀ひしかりける。世に風雅の信あらば、其翁は湖南に(一)おはして、面白き人には見ゆべきとなり。されば風雅の心にあそべ、心の風雅をば求むまじき也。

逢坂も粟津も果は秋の草

豆腐辯　　許六

むかし晝とあけ、夜と暮れたる時、豆腐といふ物一丁出て、名もなく、類もなく、甲もなく乙もなし。只うまきとばかり覺えたるこそありがたけれ。それより小路々々に出生して、世々の聖賢に料理せられ、昔豆腐は、石部金吉とてすたり果て、今やうのおぼろめ(一)

(一)幻住庵をさす

(一)豆腐をくづして薄葛に卵を加へしものをおぼろといふ

(一)しれりけるの衍なるべし
(二)諷詠せよ

のかたちたるや、蓑笠竹杖草鞋しめつけて、朝立したるがごとし。京田舎去嫌ひせず、一所にあなまとひせず、雪の市中に押され、陽炎の芝原にこけたり、あるは山寺の小料理になぐさみ、士亭に逗留をあかれたるも、一段の笑ひなるをや。月ほとゝぎすの曉を、木の根、岩ばなに寢覺めて、又見ぬ方に歩をすゝむ、はてかぎりなき津々浦々、薩摩潟、蝦夷が千島の門背戸までも、さらばいへ、殘す物あるかは、これ吾道の廣みにして、我あそび所といふべし。氣の向く處、目のおよぶだけ、風せよや〳〵と、(二)募つておぼえず手をうちけれど、從者は例の茶に倦じて、火の氣を打消し、勝手は夜半の時雨じみけり。

定二先後一辯　　支考

林紅法師、むかし浪化に具せられ侍りて、吾翁と物いひ、顔をもしれるける(一)人なりしが、其頃は年いと若くて、風雅もねぶたき比なるべし。此地に嵐青のをのこありて、其時の次手ならん、手水湯もまだなつかしき梅の花といふ句を、手水湯に竹縁あをし梅の花と、翁の生前に筆を添へられたれば、かれは林紅が下にたゝん事を耻ち、是は嵐青が上にあ

ら男も頂をたるゝ正道なり。其樣體、たとへば雲の上人の、衣冠つやゝかに、帶笏けだかうして轅の中にいまそかるがごとし。青侍白丁はな〴〵しく、競ふよそほひ、住吉玉津島と氣色うかび、あるひはよし野はつ瀨の遊山めきたり。たま〱には富士、淺間、須磨、明石の逆旅に、浦の苫屋の夕暮までは、ながめ盡しぬれど、さすがに蛸壺の底さし覗きて、あはれ知るにたよりなく、小鰕(一)まじりに竈馬鳴く蟹の屋には、腰かくべき褥も見えず、まして野くれ山くれのはし〴〵、牛道、鹿道、猿すべりの邊は、名を聞くにも及ばず。これその位高く、官高きが故に、下に臨める風景、乘る物おほしといつつべし。詩ははなはだ無碍自在にして、志のおもむく處辭の隨ざるはなし。其飛行のすみやかなるありさま、かの名におふ八匹の駿馬をまるめ合せて、飼ひにかうたるが如し。手綱すれば、盤面にしゞまり、鞭すれば、四方八極、時の間なり、況やその上の風流、山を見て後むきに跨り、句を錬つて手問をなしぬ。鞍の上疊勝りにして、前後左右かけ障なし、嗚呼快なる哉快なる哉。如何せん、今是に乘る者の、おほくは桃尻なる事を。俳諧

(一)芭蕉、「海士が家は小鰕にまじるいとゞかな」

風俗文選 卷之九

○辯類

詩歌俳諧辯

丈草

一士あり、火燵壇上に俳䴪を把つて、諸生に示して曰く、泰平聲震つて、風雅四海に波わく事久し。中にも俳道の一流、あらゆる國鄕に入りわたりて、村童野老も干麥を流し、鍬杖を朽さんとす。然れども、詩歌の高みに涼み居て、古人よばりする輩は、にが〳〵しく彈指していへり、渠がこと、なんぞこゝろざしをやしなひ、道におもむくたよりならんや、ひとへに滑稽の雜口、虛言にして、俗中の俗なるもの也と、今我一辯を出して、銘々の境をあらため、道々のおし及ぶべき所を判斷すべし。まづ和歌の德たる事、誰かあふがざらん。上つ代より傳へ來りて、人の心を程とする言葉、其誠より責めらるれば、鬼もあ

（六）季札徐君の死後墓に劍を掛けし故事

やく塚に來り。季札（六）が劍をかけて、一句をたてまつらば、生前の門葉にひとしかるべしと、弟子李由字買年謹んでこれを書す。

川落ちて、道あらたまり、石は埋れて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代變じて、其跡たしかならぬ事のみを、こゝに至りて、疑ひなき千歳の記念、眼前に古人の心を閱す。行脚の一徳、存命の悅び、羇旅の勞を忘れて、泪もおつるばかりになん。

笠塚碑　　李由

江東平田邑、光明遍照寺の地に、先師芭蕉翁の笠塚あり。十四世の僧某、蕉門に入つて學をつむ事二十餘年、恩は琵琶湖より深く、をしへは打出の眞砂より高し。朝には香華を備へ、夕には句を錬つて、推敲を定めん事を祈る。むかし(一)芳野山にのぼりては、花の明ぼのを見せかけ、(二)竹植る日は東坡が笠をうらやむ。月のあみだ笠に、(三)時雨(四)霰のいかめしき音を、侘びられたる俤もなつかしとて、死後に此笠を乞ひうけ、終に土中にこめて、門人各一句をさゝげて、かの塚に同じく納む。世に報恩を殘したる、長崎に(五)尾花塚、深川に發句塚、越中に翁塚、木曾塚は直に遺骨を葬る地なり。されば西行の塚とて、國々に殘したるも、此類ならん。あなかしこ、死後の門人、師にまみえぬ事をなげく事なかれ。は

(一)芭蕉、「吉野にて櫻見せうぞ檜笠」
(二)同、「降らずとも竹植る日は蓑と笠」
(三)同、「いづく時雨笠を手にさげて歸る僧」
(四)同、「いかめしき音や霰の檜笠」
(五)同、「ともかくもならでや雪の枯尾花」

是先師滅後の句也、先師生前の耳を驚かせざるも無念にして、今又一人も、此の句の腸を聞く人なきこそ、猶又無念の事なれ。後人芭蕉翁の血脈、嗣ぐ人なしといふ事なかれ。今此傳を讀んで、定めて過當といはん。謝して云く、過當人も死し、又過當といふ人もほどなく死せん。これその怒をやはらぐる處なれば、かならず見ゆるしおくべしと云々。

○碑類

壺碑　　芭蕉

在二奥州市川村多賀城一

つぼの石文は、高さ六尺あまり、横三尺ばかりか、苔を穿つて文字かすか也。四維國ざかひの數里を記す。此城、神龜元年、按察使、鎭守府將軍、大野朝臣、東人之所里也。天平寶字六年、參議、東海東山節度使、同將軍惠美朝臣獵(一)修造而、十二月朔日とあり。聖武皇帝の御時に當れり。むかしよりよみ置ける歌枕、多く語り傳ふといへども、山崩れ

(一)獦の誤

る事は、たゞ百人一首の歌を見るがごとし。無爲の妙句はいひながして盡きず、跡に光明の光を放つ、理窟の句はつまりて跡へもどる。是彼の光明をあやまり覺えて、終に理窟の境をしらず。和歌は貫之より、基俊、俊成に傳はり、連歌は宗祇、宗長とつゞく。今先師の俳諧血脈相承の者を聞かず、我東に赴き、始めて師にまみゆる時、旅の句問はれけるに、宇津の山にて、

十團子も小粒になりぬ秋の風、と申ければ、師驚きていへり、汝何れの教によつて、愚老が流を見屆けたるやと問ふ。我曠野猿蓑を師とすと。吾子は俳諧の集を見る者なり。今わが腸は見ぬかれたりといふ。再會の日、嵐蘭子に語つて云く、我門人の器をもとめて、俳諧を殘さんと思ふに、昨日許子に會して我望を休せり。選集に我魂をとどむる時は、後代許子がごときも又あるべし、千歳の後も、愚老が血脈は朽ちざる事をしれり。其後三月盡の夜、師來りて、終宵閑談して、衣更の句を望めり。我一兩句いへどいまだ叶はず。師云く、すべて世の人、句の慥を好む、上手はあやうき所に居れり。さ

出されて、果は六條河原にさらされて、尸の上の恥辱をかうむる。一陣やぶれては殘黨まつたからずして、終に太平を謠ひ、腹つゞみを鼓いて、天下戸ざしをわすれたり。

橙や疝氣治る御代の春

直指傳　許六

百年後の人に傳へて云く、俳諧直指の傳あり、たとひ上手の名ありとも、理窟あるは、眞の直指の俳諧にはあらずと知るべし。むかし守武宗鑑より以來、興をとる物をはいかいと名づけ、實ある事はかつて知らず、先師はじめて、躬恒貫之の魂を見ぬき、正風幽玄の實を得たり。道のべの木槿は馬に喰れたるより、あら野猿蓑に至つて、正風の體を慥に顯はせり。俳諧中興の開山となつて、是より翁とは稱し侍りける。されば其風になびく門葉、里にみち巷にみてり。されど理窟の境にまよひて、直指のはいかいは一人もなし。夫理窟を離るゝはやすし、理窟を離れたる後は、趣向をはなれ、手に携ふる一物もなし。人麿のほの〴〵、赤人の田子の浦の場所は、先師のはいかいにして、ふるくさびかへりた

疝は病の名にして、氣をつむ事山のごとしとは、素問(一)の說なり。いづれの臟腑より出づる事をしらず、陰經に城郭をかまへ、淫囊をかくれ里にさだむ。常は腰のあたりに逍遙して、火箱煖母の陽氣にうそぶく。かれが一世の手柄をかぞへば、花に啼き、梅に囀る時、人のとがめをうけず、卯の花に千聲萬聲を叫び、陰を感じては、秋の野もせの聲よりもしげく、時雨ふり初むる頃、火燵にやりわたしては、きりぐ〵すの弱りにひきかへ、高音をはりても、屁負比丘尼の(二)働も見えず、公界に出て不圖とりはづしても、おのづから咎を疝氣に蒙らしめ、病氣不相應の大食も、かれが病の色に取りなし、青ざめたる顏色も、ふく病やみと名付けがたし。貴賤老若、男女小兒のさかひもなく、又は虛實のわかちもなし。大雪をしり、雨氣をさとり、土用八專には每度蜂起して、胸膈に横たはり、痰を帶びては眩暈を起し、怔忡(三)をしては胸ををどらす。世に醫術の良藥ありて、三和五積(四)の煎湯を施し、あるは蕎麥切のおろしに驚き、芥子番椒の目を醒して、斗方を失ふ時か、飛脚の腨にかくれ、瀉腹の勢ひにさそはれて、不圖此界に下る時、矢場に杖のさきに巻き

(一)醫書の名
(二)他人の放屁を我身に引受くるを云ふ
(三)驚悸虛煩の病
(四)三和散、五積散

久しく民間にとゞまらず、地頭代官のもとに上られ、或は鞍つぼに遣ひのぼりて、須磨逢坂の關をこえ、あるひは船板に飛び移りて、敦賀下田の沖をはしる。終に商家の藏の中にかくれて、おそろしき空音(二)を啼き出しぬるは、あやしき里に春の鳥の花にたはぶれ、秋の虫の露を悲しめるおもひにもあらず。時しらぬ虫の音ながら、春は一しほ音もまさりけり。又は旱うちつゞき、雨風さわがしき年の暮には、かならず高ねを出して、嫠婦の胸ををどらせ、窮士の腸を斷せるのみか、乞食などのこれになきこゝろされんも、いとあはれふかゝるべし。常に國々よりあつまりて、おほき時はねよわく、旁々に分れて、すくなき時は音つよし。まことやみづから鳴かずして、人の口をかりて音をふるゝも、あだにあやしかりける虫のしわざなり。たゞ富貴の場にあそべる事をよろこびて、貧賤の竈に入る事を恥づ。しかはあれど、家々に買ひとられ、唐櫃の中の辛きめ見しより、ながく晝ねをとゞめて、いつとなく減り失せけるにぞ、人々は皆あきれ果て侍られける。

疝氣傳　　李由

(二)音を價にかけていふ

むもの、絶えて嫌ふ事なし。しからば物の程をいへるなるべし。汝が本性はいやしからねど、多くは賤の女の杓子にかゝりて、ありがたき生涯をあやまる。されど世をてらひ人にこびて、身をかざらんとする人には、おのづからまさりもすべし。此さかひは、汝五郎四が知る所にもあるまじ。何晏(三)がおしろいせぬ顏も、一世の願ひにはあらず、兵部卿の宮の、かりのにほひもまた仇なりとしるべし。世はたゞ世にしたがひて、眼前のたのしびをたのしむべき事なり。

夕がほに鏡見せばや五郎四郎

靈虫傳　去來

浮世に米といふ虫あり、母は出雲の國、稻田姫のながれとかや。父はゆく方もしらぬ稻(一)のとのの、夜な夜なかよひ來りて、かくは稻穗の孕み初めけるとなん。ふるさとに侍りし中は、川水にやしなはれ、案山子法師にもりそだてられ、やゝ生ひたちぬるまゝ、賤のふせ屋に籾とよばれ、晝はあら筵の上にならび、夜はせはしき俵の中に臥す。されど

(三)美男として名高し

(一)電光を稻の殿とも稻妻ともいふ、その光をうけて稻穗生育すといひ傳ふ

（一）志賀寺の上人京極御息所を戀ひて、「初春の初子のけふの玉箒手にとるからにゆらぐ玉の緒」とよめり

（二）拾遺、「岩橋の夜の契もたえぬべし明くるわびしき葛城の神」

五郎四郎傳　　支考

筑紫に五郎四郎といふものあり、其性は小麥の餅也。明暮これに馴れたる人は、たゞ五郎四ともいふ也。此もの野畠の間に生じて、肌おろそかに色くろし、しかれども菓子屋の手にわたりて、百錬千鍛すれば、あるひは饅頭の肌やはらかに、かすてらの味ありて、ほとんど僧を落さんとす。むかし（一）志賀寺法師の、容こそ痩せたれ、心は花の都人を戀ひそめて、玉の緒の歌はよみ給へり。まして其名も、三輪の山本に住みて、（二）葛城の神の、晝のかたちにもはづる事なし。されば心くだり、姿いやしきだに、花はすつまじき世なりけり。五郎四何にか侘しからんよ。あるつらの人は、衣食の價をむさぼらず、酒肆婬坊の眼高しと、人の人にもてはやされて、こゝろの外に見ぐるしうやつれ、座上にありて虱をひねる。さばかり捨てはてたる世ならば、石上樹下のすまひこそあるべけれ。しのぶ山の關路も、こゆる人のあればこそあれ、戀せじ酒のまじとは、誰にかかためたるぞや。先師の曰く、色を思ふ事、饂飩の如くせよと、汝をよろこぶもの、日夜に愛せず、汝をにく

（一）寺小屋を終へし兒童

公平ガ傳

汶郎

坂田公平は、何の處の人といふ事をしらず、源頼義朝臣に仕へて、公時が男、山姥が孫とはいひ傳ふ。年のほどは三十あまりにして、終に衰老の容なし。其生質正直正路にして、人の異見を聞かず、一生彼が妻といふものの沙汰なし。其高名をいはゞ、夷が千島の末々まで、知らざる人もなく、慥に見たる者もなし。たゞ好む物には茶筌髪に鐵棒にて、其勇力のつよき事は、恰も木綿織物の名目にさへなりにける。かゝる兵も、すこし艶だちたる所のあるや、公平女とはいへども、いまだ男子の號には蒙せず。治世榮花の程を見んと思はゞ、和泉大夫が芝居に走りて、寺上り（一）のわらんべ、又はつよみを好む中小姓の、感に堪へたる顏つきを見るべし。つら〱無常迅速の哀をしるや、いづくの隱元禪師にはだまされけん、ごそとすりて、公平道心とはこゝをいふ。剛き物先づほろぶためし、死ぬべき場所をこしらへ、終に黄泉に旅立たせて、地獄破りの沙汰まではありて、其後は便りをせず。彼公平が手柄のほど、上下萬民おしなべて、感ぜぬものこそなかりけれ。

（六）豐干禪師

（七）つれ〴〵草に見ゆ、法然上人の語をもぢれり

（八）詩小雅、「鶺鴒在原、兄弟急難」

（九）鄭谷、齊己の早梅の詩の「前村深雪裏、昨夜數枝開」を「一枝」と改めしより一世に一字の師といふ

にある此人ならば、硎刀のわざのみいときよげなり。かくするどなる物の中にも、かの居眠りのさむまじくは、物と我と忘れたりとやいふべき。物其我をや忘れけん、我其物をやわすれ劍、ねぶるに時もなく、さむるに又時もなし。何がし和尚の（六）、虎によりて居ねぶりたらん、世にをこがましく見られがまし。ある上人は（七）、目のさめたらん時、俳諧せよとも仰せられしが、拙はいかいは人の心にすまじきや、たゞ我心にすなりけり。然れども、人の面白がらずは、我もおもしろからず、此さかひを知りてこそ、俳諧はすなりけれ。さりや、はいかいは人の心をやはらげて、花に啼く鳥の、花ならずしてかうばしといへる、世のまじはりの媒とならば、彼の鶺鴒（八）のはらからも、などや一巣のよしみなからん。俳諧はたゞ戯也、はいかいにはあそぶべし。世にたはぶれ、世にあそぶ時は、草苅笛の世にわすれて、牧童の名もをしむまじけれ。所謂素子堂が一蓮のちぎりあらば、其時の翁の心にあそびて、今も一字（九）の師の影をもふまざれとなり。

（五）孟子の語

がら、眠り来り眠り去つて、四十年の春秋も過ぎ行きぬれば、貴介もこれを忘れ、高明も是をゆるし給へば、終に兜卒の内院にも、高く眠らんとぞたかぶりける。湖南翁、かつてある法師に向ひて、牧童はよき者なりと申されしよし、よくてあしからんや、あしくてよからんや、其翁ならずは知らじかし。しからば生天は先なるべくとも、成佛は後ならんといへる、むかしの人の心も、人はふたりの人に似てや侍らん。牧童常にいへりけり、我むかし、芭蕉の翁にまみえて、武の素子堂が、浮葉巻葉此蓮風情過ぎたらんといふ句の物語に及ぶ。此句は此蓮と聲に唱へたるがよしと、をしへ給へりし外は、別に何事もおぼえ侍らずと。時の人是を評じて、げに人は人のならひありて、さらぬみなもとも辿りたるやうにおよづけいふらん、かくたゞありの人は、世にたふとしと。されば世の中の老の坂越えたらん其人は飢寒の間におきて、風雅もやゝあやふからずといふべし。

　東花坊賛じて曰く、むかし人は、恒（五）の産なければ、恒の心なしとて、つれ〴〵の法師だに、安部野のあたりに、花むしろ織りて、都のつてには賣りもせられしが、まして世

（一）晉の謝玄謝韶兄弟共に立身出世せり
（二）晉書阮籍傳に北阮は富み南阮（阮籍阮咸）は貧しかりし事見ゆ
（三）詩秦風、「豈無衣、與子同袍」
（四）西山宗因

湖上に生れて、東野に終りをとる、是かならず大隱朝市の人なるべし。

入る月のあとは机の四隅かな

牧童傳　　支考

牧童は、もと小松の素生にして、賀の金城に居る事年ひさし、家は硎刀の業をもて、よのつねのたづきとはなせりけり。牧童は彼が兄にして、北枝は是が弟也。本より謝公が（一）才能をあらそはざれば、かつて阮家（二）の富貴をもうらやまず、たゞ同袍（三）のあはれみ、おのづから世の人の鏡ともいふ也けり。むかしは梅翁（四）の風流をしたひ、中頃は芭蕉の門に入て、時の風流にあそべる心の、ふたりともにあそぶ所おなじからず。たとへば一巢におひたちぬる鳥の、彼は梅の花の淸きに囀り、是は卯の花の曇れるにあそぶ、あそぶ處の同じからずといふは、たのしむ心の異なればならし。砥取の山の時鳥も、けふはとぎそと啼きわたれば、夜を梟のあそび數奇となりて、吟席交會此人をしらずといふ人なし、時に居眠りをもて、生涯の得物とせり。ある時は欄干の花にそむき、ある時は檐外の鳥を聞きな

風俗文選 巻之八

○傳類

東順傳　　芭蕉

（一）竹下の略

（二）病中、「死病には千草の露の驗もなし」の句あり

（三）其角が、「信濃にも老が子はありけふの月」といひしに東順答へて、「子と姨とたがかへて見ん今日の月」

（四）釜中魚を生じ甑中塵を生ずとて米なきをいふ

老人東順は、榎氏にして、其祖父江州堅田の農士、竹氏（一）と稱ず。榎氏といふものは、晋子が母方によるものならし。ことし七十歳ふたとせの秋の月を、やめる枕の上に詠めて、花鳥の情、露（二）を悲しめる思ひ、限りの床のほとりまで、神みだれず、終に更科（三）の句をかたみとして、大乘妙典の臺に隱る。若かりし時、醫を學んで、恒の產とし、本多何某の公より、俸錢を得て、釜魚甑塵（四）の愁すくなし。されども、世路をいとひて、名聞の衣をやぶり、杖を拆いて業を捨て、既に六十年のはじめ也。市店を山居にかへて、樂む處筆をはなさず、机をさらぬ事十とせあまり、其筆のすさみ、車にこぼるゝがごとし。

五とせ、僧は肝腎に積をうれへ、我は肺肝に疝をやむ。平生病がちに打ちなやみて、朝の露に世をはかなみ、夕の鐘に命をかぞふ。僧と我といへる事あり、我死せば、僧口を閉ん、僧身まからば我絃をたゝん。思ふに蕉門のはいかいも、日々に衰へ、正風の血脈も、次第に絶えて、きく人もなければ、する人も猶なし。孔子の道は、春秋にとゞまり、五老井がはいかいは、此文選に盡きて、これより後、はいかい閑の博士とはなる也。僧すでに身まかりぬれば、我果して絃を斷ちぬ。

（五）葉鶏頭

僧が白眼もわきむいて通る。遲々たる春の日のみじかければ、長々たる秋の夜長からず、伊勢住吉の物まうでの頃も共に奉幣をさゝげ、吉野龍田の旅寢の夜も、同じ花紅葉に臥したり。三日對せざる時は、百日のおもひをなし、五日音信れざれば、三年の月日を隔つるがごとし。然るにことし寶永第二、乙酉の六月廿二日の夜、例の積氣胸隔にさしつめ、たれかれ呼べとばかりにて、終に息絶えぬ。親族朋友したしきかぎり、末寺諸檀の俗僧男女、足を空にまどひ、國中さわぎかなしみ、四日五日はとりつゝみ物しけれど、壁生草の、いつ迄かはとて、終に夏野の原に送り捨てて、平田山に立ちのぼる一すぢの烟に、遠近の里人もいまはと思ひやるべし。後の事共は、有難きかぎりとり盡し、法中の高僧、日夜に席をかさね、和泉なるはらからの御坊も、朝夕のまことをつとむ。中陰の日數も程なく過ぐれば、つどひあつまれる人々も、おのがかたざまにわかれさりぬ。反魂の香も、招魂の祓も、共に手ぶるき處を好まざれば、ふたゝび俤を見る人もなし。無碍堂の垂布の色も、鴈來紅（五）に時を奪はれ、五老井のまつ宵も、一人の席を缺きたり。つら〳〵四とせ

光明遍照寺十四世の僧、亮隅上人、字は李由、一の字は買年、四梅廬と號す、嘗て律師に任ず。姓は豫州河野の嫡流にして、安藝の宍戸を兼ね合せたり。母なんやむ事なき深窓の女にして、藤原なりけり。僧三代、我三代、あるは茶に交りてさびを好み、又は碁に暮して勝負をよろこばず。我と僧は風雅に交る事廿餘年、僧は寺を忘れ、我は家に歸る事をしらず、ひとつ蚊帳にむれ入り、同じ衾に足をつゝむ。若孔孟の理窟人を親にもたば、生きたる甲斐はあるまじといへば、老佛のいき過ぎたるを、子にしたらん時、身代破滅は立處なるべしとて、是より天地を識り初めて、牡丹芍藥はひくき花也、櫻海棠は能過ぎたり、かれは愚痴、それは鈍なりとて、果は食好の上に落ちて、餅蕎麥切は急用にたゝず、終にはやみの豆腐に流れて、夜中の勝手をおびやかし、面目もなく其夜も明けたり。月見、雪見、星祭、靈まつり、四梅廬の明ぼのには、鳥の初音を待ち侘び、七種の踏草には、蕗の臺を捜す。筍の藪を覗き、瓜なすびの畠をあらす。風臺に吹れ、水臺に冷し、爐開きの次手には、歳旦の句を鍛ふ。煤掃の逃所、鰒汁の定舞臺、從者が無返事に空耳をつぶし、小

(二)杜甫、「國破山河在、城春草木深」

(一)詩小雅、「伐木丁々、鳥鳴嚶嚶、出自幽谷、遷于喬木、嚶其鳴矣、求其友聲、相彼鳥矣、猶求友聲、矧伊人矣、不求友生」

(二)說苑、「鍾子期死、伯牙破琴絕弦」

(三)世說、「管寧華歆共園中鋤菜、見地有片金、管揮鋤與瓦石不異、華提而擲去之」

(四)古今十三、「みるめなき我身を浦と知らねばやかれなで海士の足たゆくくる」

一時の叢となる。國破れては山河あり、城春にしては草青みたりと、(二)笠打鋪きて時うつるまで泪を落して侍りぬ。

夏草や兵どもがゆめのあと

斷絃文　　許六

(一)鳥の嚶々と啼き、木の丁々とひゞく、專ら友をもとむるかなしみの聲也。人はいふにたらず、子を捨て妻をすてて、山林の友にまじはり、(二)琴を斷ち、(三)金を擲つて、まことのこゝろざしを盡し、語りかたらふこそ、浮世のおもひ出とはいふべけれ。假初の旅寢に、一夜二夜の別をさへ、かなしと思ふならひなるに、あるは雲ゐの國に貶せられ、遠きあら磯に配せらるゝわかれ、いたりてかなしかるべし。されど濁江に影見ざる歎きのみにて同じ世にすむなぐさめもある也けり。たゞ長門國に舟を出し、廣島の方に赴く人の別は、(四)みるめなき海士の呼聲のいなせもきかず、磯馴松の獨さびしきに音信るゝ便もなし。こしかた行末おもひつゞけぬる悲しさは、遣方なからん。我に方外の友あり、江東平田邑、一

後世はかならず音樂にあそばん、ともに菩薩の物數奇。
(四)玉の林の鳥も啼くらむ。
蓮の臺の花も降るらし。
涅槃の鐘の聲冴えて、圍爐裏の眠たちまちにおどろき、
菩提の月の影晴れて、卒都婆の心なにかうたがはん。

如是畜生
南無阿彌

弔ニ古戰場ヲ文　　芭蕉

三代の榮耀(一)一睡の中にして、大門の跡は、一里こなたにあり、秀衡が跡は、田野になりて、金鷄山のみ形を殘す。先高館にのぼれば、北上川は南部より流るゝ大河なり、衣川は泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。康衡等が舊跡は、衣が關を隔てて、南部口をさしかため、えびすをふせぐと見えたり。扨も義臣すぐつて此城にこもり、功名

(四)三昧に猫皮を用ふるをいふ

(一)清衡、基衡、秀衡

(一)源氏若菜下「うちふしたれど目もあはず見つる夢の定かにあはんこともかたきを思ふにかの猫のありさまいと戀しと思出さる」

(二)杭州徑山寺の僧、宋の人

(三)諺に傾城は猫の生れ替りといふ

秋の花の霜にほころも、　馬鬼が原の一夜に衰ふ。
きのふは錦茵に千金の娘たりしも(之毛)、
けふは墨染の一重の尼となれり(連梨)。
　されば　柏木衛門の夢、(一)
　　　　　虚堂和尚の詩。(二)
戀にはまよふ(迷)、(三)欄干に水ながれて、　梅花の朧なる夜。
貧にはぬすむ(盗)、　障子に雨そゝいで、　燈火の幽なる時。
鼠は可レ捕とつくり(作)て、褒美は杜工部。
蛙は無用といましめ(誡)て、異見は白藏司。
昔は女三の宮の中、牡丹簾にかゝやき(輝)て、花まさ(正)にはやく(速)。
今は李四が庵の邊、天蓼垣にあれ(荒)て、實すで(已)におそし(遅)。
(三)前生は誰が膝枕にちぎり(契)てか、さらに傾城の身仕舞。

剃髪文　支考

浪花の舎羅、剃髪の前も舎羅といひ、ていはつの後も舎羅といふ。此舎羅を捨てて、どの舎羅をか求めん、舎羅々々として、更に舎羅なし。

一たびは瓢の花のあたまかな

（一）童子の結髪にひさご花といふ名稱あり

祭猫文　小序　同

此文以二四六之法一用二漢字韻一也是全似二諧諧之漢和一而不レ然始以二萬葉手爾波文字一用レ之爲レ韻惟爲二和文用レ韻之始祖一太奇也。

李四が草庵に、ひとつの猫兒ありて、これをいつくしみ思ふ事、人の子をそだつるに殊ならず。ことし長月二十日ばかり、隣家の井にまどひ入りて身まかりぬ。其墓を庵のほとりに作りて、釋自圓とぞ改名しける。彼をまつる事、人をまつるに殊ならぬは、此たび爪牙の罪をまぬがれて、變成男子の人果にいたらんとなり。其文に曰く、

秋の蟬の露に忘れては、　烏部山を四時に噪ぎ、

側(がは)に直るこそあはれなるべけれ。生前の列座のころは、あたま數よみて、膳だてもせられたるに、灰の足跡に人數(にんず)をしられ、終に送火の明(あかり)に、はやし出されて、草葉の陰に歸りても、料理馳走の評判せんは、もとの人界より、願ひ損(ぞん)の後生なるべし。伏惟(ふしておもんみれば)中(二)元の佳節(かせつ)、浮屠(ふと)の教におほはれ、目連(三)の母を始とし、西の海へ父を沈めしあはれまで、放逸の衆生、たまゝゝ五倫親屬の名を呼び出し、我も一たびは此馳走の數には入るべし。一念の慈悲に、寺の小僧が腹をふくらかし、一包をよろこばしむるこそ有難けれ。あがり膳は齒のあともなし、果は魚鳥のたすけとなりぬ。報恩經に一とせの中(うち)六度(四)、聖靈の來去の日ありて、上古は年の暮にも、此祭ありしを、いつの比の簡略(かんりやく)よりか、世間一統にいひ合せて、其沙汰もなくなりたるは、たゞつまる所は、坊主の迷惑とはなりにけり。聖靈達聖靈達、今年は殊に穗づるもよし、地獄極樂の亡者達、(五)才太郎畑のいき過(すぎ)まで、さそひ合せて御出あるべし。六日飛脚の頓死をきゝたて、一紙の祭文は御免を蒙らんと、仍謹如斯。

聖靈よ蓮にあまらば芋ばたけ

(二)七月十五日

(三)目連の母餓鬼道に墮ちしより之を救ふため盂蘭盆會を始めしといふ

(四)二月十五日、五月十五日、七月十四日、八月十五日、九月十六日、十二月晦日

(五)生意氣半可通などいふ意、甲陽軍鑑にサイタラ畑とあり

言綺語のふるみにおとし、百韻千句の數を合せて、一座の廻向は、あみだぶ〳〵と申して仕舞ひ侍りける。

聖靈祭文

李由

それ娑婆のありさまは、寸地に五穀を植ゑぬ所なく、寡婦が紡績の隙なる日なし。されど貧乏に追ひぬかれて、餓口更に閉づる事かたし。いかなれば極樂淨土の臺をたより、百味の飯食をさし置き、盂蘭盆になれば、取る物とりあへず、瓜の馬の迎を待ちかね、麻骨の杖引きずり、戸板あら筵の座敷つき、莧荒和布の賞翫、殊に(一)きり麥冷素麵の腹中あひこそ覺束なけれ。淨土のあまみに飽きて、娑婆のかるみをよろこばれたる聖靈もあるかし。地獄の釜の御戸ひらけたらんは、たまさかの仕合なるべし、食好みの振舞まではちと奢の沙汰にもなるべし。たゞ修羅畜生のあふれ者、中有の浪人かわきとこそ、おもひやられ侍れ。常に願ひ置れたる作善功德、讀經念佛の行は、そも何になりたるぞや、佛果を得られたる歷々も、餓鬼あしらひにおもはれ、中にも新聖靈は、葛籠持の夫にさゝれて、外

(一)溫飩

（一）播州印南郡曾根村の名松
（二）駿州清見寺の臥龍梅

がめて、見る目もくるしかるべし。わづか五寸の瓶に、千山萬水の思ひをこめんも、猶々氣づまりならんかし。若立花せんとならば、曾根の松（一）を心に立てて、ながしに清見寺（二）の梅ならば、少しは心のびやかなる風情も有るべし。されど一時の榮花も盡きて、まづ椿ころりと落ちて、無常をしめし、木槿一日の榮をさとりて、程なくしぼる、例の心短きにや、やがてぬき捨て、果は烟と立ち登る。それさへあるを、碁うつ人は、赤目引きつり、喰物時をわすれ、終夜同じ事並べたらんは、飽かずやあらん、よき手あしき手とて、一座打ちこぞり、案じふくれ、碁石の限り蒔き盡す時、何のをし氣もなく打崩したるは、さりとは殘多き事なるべし。さしも手間入れて案じたらんは、せめて五日十日もながめよかし。此人死たらん後は、必ずさゐの河原に生れて、父母戀しがる子供に立ちまじはり、地藏おぼさつの御衣の下にかくれ、あけくれ同じ事すらんも、又あはれなるべし。若一枝さして諸佛に奉り、一日投げてはあみだぶ唱へたらん人は、うたがひなく西方に生れて、百味の外の飯食には、なら茶、蕎麥切はくひ次第たるべし。今吾はいかいの結縁は、狂

(一)賣と買と顚倒せりとの支考の說よかるべし

(一)天上、人間、餓鬼、畜生、修羅、地獄

題しらず　おなじく

あみ雜喉を升にはかりて賣る人は(一)買ふ人よりもあはれなりけり

二かいより落ちてよめる　去來

などてかくいそがしいとて二階からおちての後はひまになりけり

やまひにふして　許六

白がゆはきらひなれども病めば只いひをばくはで啜る也けり

○文類

俳諧發願文　浪化

人死して六道(一)に生れ、からき目見んは、ひとへに娑婆の業因によれりけるとかや。世に立花すく人は、たてては崩し、くづして又たて、終日大汗ながし、葭のさきに枇杷の葉つけて、馬の耳のおもひをなし、屈曲を好みて、鐵釘に打ちつけ、針がねにしばりか

世はたいかならん、　我はたかくならん。
窓のあらしに燈をまもり、
軒のしづくに影をしたふ。
をしむべし、ア丶、かなしむべし、ア丶。

栃の木もあれ行く猿の涙には、夜こそねられね、人も歎らん、嵐の山の山あらし、世にあらしとは山ぞしる、嵯峨野に人のさがなごころや。

○鄙歌

あふみぶり　よみ人しらず

北方　寒　南邊　己等　所　來
鶯にきとろはさぶいみなべらのうらしがことの軒にけよやれ

自得　ばせを

思ふことふたつのけたる其あとは花のみやこもゐなかなりけり

なき人の此ごろおほき世やさらにと、むかしの人のなげかれしも、かくあぢきなきをりなるべし。人は廿ばかり、三十も過ぐるまでは、おのれが友達も、同じ心のすこやかにおひたちて、たま〳〵なき人の上を見ても、あはれとは思ひけめ、驚ろくほどの悲しさにはあらず。よそぢも過ぎ行くほどよりは、幾とせの交をかさねて、その人ならねば此事はしらず、あはでは戀しう、見ざらんはいかにと、文にもいひかはすほどに、けふは其人もなくなりて、世は扨はかなきもの哉と、ことし初めてしらる也。誠に此人よ、風雅は武門より出づれば、堅き所にやはらみありて、先師もそれをゆるし給へりしが、我はやはらぎたる所にかたみあらんをと、逢ふ時はたはぶれていひもしつ、まして蕉門の高弟にして吾輩の先生なるをや、何にか此人ををしまざらん、我のみかくをしむにやあやし。

其歌に曰く、

家は聖護院の森に隠れて、　寒き梟の聲に驚き、

名は落柹舎の梢に殘りて、　空しき秋の色を恨む。

(一)寶永元年

(二)西行、「願くは花の下にて春死なん其如月の望月の頃」

風俗文選　卷之七

○歌　類

落柹先生挽歌　　支　考

此歌四章而後。加ニ變聲之歌三章ヲ一。漢ニ無ニ此法一。蓋和文ノ一體歟。

ことし(一)はいかなる年なれば、かくあぢきなき人をのみ見るらん。去年(こぞ)の神無月は、浪化の君にわかれて、霜の光に名をしたひ、粟津の丈艸は、此きさらぎ(二)の願ひにみちて、花の陰に歸り給ひぬ。卯月のはじめは、落柹舍に日をくらし、其事彼事語り合ひて、是よりたれが身の上をや、鳥も啼くらんと、はかなみいひしが、去來はいはるゝ人の數に入りて、かくいふ我計り殘り居たらん、沖の船の友を失ひて、老の波のよるかたなき心地ぞせらる。

ふひまもなくて、南禅寺の豆腐屋も暁をおかし、白川黒谷の鐘も、手枕のすき間をつたふに、うち驚かされて、帯引締め、刀ぼつ込み、氷交りの朝川越えて、小幸中ぬきの頃、京にはいきつきたり。今はの時の人しらぬ、心の中さへ思ひやりぬ。現の境も千々の思ひを砕き、娘の生さき、其子の母の行末、いかに覺束なく見果てつらん。ア、悲哉。松本山の僧が身まかりぬる時は、此秋我に誄せらるべしとは、よも思ひよるまじ。今我辭を作りて彼を痛む、此次必ず我番にあたらんも、又哀なるべし。ア、悲哉や。

や。猶思ふ人のなきにしもあらで、此事かの事仕果してん、今宵は森の下露わけそぼちて、小萩がもとに袂しぼらんと、玉だれのひまもとむるに、あらぬさはりのみ出來がちにて、初夜過ぐる雪駄の音も程なく靜まり、夜がれのみぞ多かる。又の日もつとめて、とくより例のいそぎに、心のどまるきはもなくて、そゞろ事に暮しつゝ、夕陽西にかたぶけり。こよひこそと物くひ湯あみし、みじか羽織に長刀、足ばやにすべり出て、東がしらにむかうたるは、天晴私の黨の簱頭熊谷笠の見いれもよしや。よしやあしやの取沙汰はせそ、うき名は賀茂の早瀬にながせど、川風寒み千鳥さへ啼きて、下庵ちかき聲づくろひ、仕はてざるにさつと明けて、打入りたるけはひ、しばしいふべき事さへなくて、灯火ほそき方に向ひ、盆引寄せ少しくゆらせてより、心地づきたり。此程四五日のとだえに、珍しと見るなでしこの、もとゆひものびやかに、露けき心地せられて、あはれなる事ぐさに、節小袖の染もやうも、いまだ其夜はきはまり兼ねて、膝のはづれに打ちふしたれば、小夜もやう〳〵更けて、衣手さむくそひ臥したり。明けばとく歸らんなど、契り語ら

庵に老を訪ふ、心ざし深くて、一とせ難波の變を聞きて、速にともづなを解き、義仲寺の葬りにも、肩衣に鋤鍬を携ふ。死後の城を堅く守り、諸生をなづけ初心をたすく。(二)越の浪化にかはりて、有磯、砥浪の書を選じ、(三)崎の卯七をたすけて、渡り鳥を集む。此秋我大願に力をよせて、文選序者の一人にすゝみ、病床に伏しても、三度自他の書を寄せたるに、いかなる蕉門滅亡の月日にやありけん、去年の冬は、中越の院家薨じ給ひぬ、ことし衣更著、丈艸卒す。秋九月此郎去つて、手もぎ足もぎの思ひをさせて、人の腸を斷せけるぞや。猶生き殘りたる十大弟子の中にも、世のたすけとなりがたきもあるべし、其人かの人と、かへまくほしと思ふ方も有るべし。從來の因緣ふかきえにしありて、しかも同じ術疾のやまひをうけて、共に終りをとれり。身は貧閑清寂の高みに遊びながら、老兄法印の孝養を忘れずして、常は心ならぬ餘所のいとなみもいそがしく、ある時は攝家親王の御館に候じ、遠近の來客に對し、四時の運氣を察し、二六の陰晴を考ふ。されど花鳥の細みを忘れず、月雪のあはれに、情をなやます病ありて、起臥のさびしさを知らずとか

(二)越中井波瑞泉寺の住職
(三)長崎の人蓑田氏、去來の從兄弟

勝老人の末の子に生れて、筑紫の方におひたち、名は平次郎、武を業とし、若かりし時より洛に居す。弓矢を捨てて十五年と吟じたるは、十五年先の事也、合せて三十年來の大隱士、和名これを浪人とはいふ也けり。いつの頃よりか、先師蕉翁にま見えて、風雅の名に高ぶり、京師にかまへて、諸子のかしらに坐す。南西の氣を押へ、東北の風を護す。天下蕉門の高弟と稱じて、あら野の時、正風體のまなこをひらきて、

湖の水まさりけり五月雨

とかや。猿蓑の選を蒙りて、不易流行の巷をわかち、後猿の新風にのぞみても、終に幽立の細みをわすれず。

木がらしの地にも落さぬ時雨かな

ほとゝぎす啼くや雲雀の十文字

とは申しけり。又いづれの仲秋にや、

岩ばなやこゝにもひとり月の客

と吟じて、先師の耳を驚かし、月賞翫の第一、古今の秀逸には極まりたり。すべて一代秀逸は、一兩句もてる人さへ稀なるべし、此をのこは、已に數句に及べり。二十餘年薪水の功積み、嵯峨の落柿舍に師を迎へ、石山の幻住

山に這ひ登りて、脚下琵湖水、指頭花洛山と、眺望を共にし侍りしを、人は山を下らざるの誓ひあり、予は世にたゞよふの役ありて、久しく逢坂の關越ゆる道もしらず、去々年の神無月一夜の閑をぬすみ、草庵にやどりて、さむき夜やおもひつくれば山の上と申して、こよひの芳話に、よろづを忘れけりと、其喜びも斜ならず。更け行くまゝに雷鳴地にひゞき、吹く風扉をはなちければ、「虚室欲奪閑是寶」「滿山雷雨震寒更」と興じ出でられ、笑ひ明してわかれぬ。(七)身の上を啼くからす哉と聞えし、雪氣の空も再び行きめぐり、今むなしき名のみ殘りける。凡そ十年のわらひは、三年のうらみに化し、其恨は百年のかなしみを生ず。をしみても猶名殘をしく、此一句を手向けて、來しかた行末を語り侍るのみ。

なき名きく春や三とせの生別れ

去來誄　　許六

維寶永元甲申の年秋九月、落柿舍の去來卒す、嗚呼悲しいかな。此郎は、向井氏去(一)

(七)丈艸、「雪曇り身の上をなく烏かな」

(一)元升(勝に非ず)の第二子なり末子にあらず

（三）其角、「吹飯より鶴を招かん時雨かな」
（四）支考、「叱られて次の間へ出る寒さかな」
（五）去來、「病人のあまりすゝるや冬籠」
（六）丈草、「うづくまる藥の下の寒さかな」

感ありて吟じ、人ありて談じ、常は此事打ちわすれたるが如し。先師深川に歸り給ふ頃、此邊の句ども、書き集めまゐらせけるうち、大原や蝶の出て舞ふおぼろ月などいへる句、二つ三つ書入れ侍りしに、風雅のやゝ上達せる事を評じ、此僧なつかしといへとは、我方への傳へなり。又難波の病床、側に侍るもの共に、伽の發句をすゝめ、けふより我が死後の句なるべし、一字の相談を加ふべからずと宣ひければ、或は吹飯(三)より鶴を招かん、と折からの景物にかけてことぶきを述べ、あるは叱られて次の間に出る(四)と、たよりなき思ひにしをれ、又は病人の餘りすゝるや(五)と、むつまじきかぎりを盡しける。其ふしぐ\も等閑に見やり、たゞうづくまる寒さかな(六)といへる一句のみぞ、丈草出來たりとは、感じ給ひける。實にかゝる折には、かゝる誠こそうごかめ、興を探り、作を求むるいとまあらじとは、其時にこそ思ひ知り侍りけれ。先師遷化の後は、膳所松本の誰かれ、たふとみなつきて、義仲寺の上の山に、草庵をむすびければ、時々門自啓、曲々水相逢などと打吟じ、あるは杖を横たへ、落柿舍を扣いて、飛込んだまゝか都の子規とも驚かされ、予も彼の

秋風に折れてかなしき桑の杖

丈艸誄

去來

今歳二月末の四日、月は草庵に殘る物から、禪師身まかり給ひけりと、湖南の正秀が許よりしらされけるにぞ、胸ふさがり涙とゞめかねぬ。つく〴〵此人の昔を思ふに、尾張の國に生れ、犬山に仕へて、勇猛の名もありしとかや。一日若黨一人を供し、ひそかに君父の前を忍び出で、道の傍に髪おしきり、黑染(一)には引替られける。常の物語には、指の痛ありて、刀の柄握るべくもあらねば、かく法師にはなり侍ると也。ある人のいへるは、其弟に家祿讓り侍らんと、かねて人しれず志ありて、病にはいひよせられけるとなん。其後洛の史邦にゆかり、五雨亭(二)に假寐し、先師に見え初められしより、一疊の蚊屋の内に、頭をおし並べ、四間の火燵の上に、面をさしむけて、吟會おほく此人をかゝず。先師の言に、此僧此道にすゝみ學ばゝ、人の上にたゝん事、月を越ゆべからずとのたまへり、其下地のうるはしき事うらやむべし。然れども、性くるしみ學ぶ事を好まず、

(一)墨染の誤なるべし

(二)史邦の亭號

澤の波の枕に月をそふとて、鎌倉に杖を曳き、其歸るさより、心地なやましうして、終に息絶えぬ。同じき二十七日の夜の事にや、七十年の母に先だち、七歳の稚子におもひを殘す。いまだをしむべき齡の、五十にだにたらず、公の爲には、腹おしきりても悔ゆまじきうつはものの、はかなき秋風に吹きしをれたる草の袂、いかに露けくも、口をしくもあるべき。今はの時の心さへ知られて悲しきに、老母の恨、はらからのなげき、親しきかぎりは聞き傳へて、偏に親族の別にひとし。過ぎつる睦月ばかりに、稚子が手をとりて、予が草庵に來り、かれに號得さすべきよしを乞ふ。王戎五歳の眼ざしうるはしと、戎の一字を摘んで、嵐戎と名づく。其よろこべる色、今目のあたりを去らず。いけくる時むつまじからぬをだに、なくてぞ人はしのばるゝ習ひ、まして父のごとく、子のごとく、手の如く、足の如く、年頃いひむつびたる俤の、愁の袂にむすほほれて、枕も浮きぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべんとすれば才つたなく、いはんとすれば胸ふたがりて、たゞおしまづきにかゝりて、夕の雲にむかふのみ。

(三)晉書王戎傳に裴楷王戎の目を見て戎眼爛々如巖下電といへり

非を非とするは謗るに近し。

羽官平日、儒釋道の書をよむ、道は儒の敵となり、儒は佛のむかふ座主にとれり。若酢吸の三翁(一)、世に再生して、吾はいかいの道を鹽梅せば、きはめて是非齋の遊を覗いて、箸箱の連衆に入らんと、あの方より望まん。

○誄類

嵐蘭誄　芭蕉

金革を褥にして(一)、あへてたゆまざるは士の志也、文質偏ならざるをもて(二)、君子のいさをしとす。松倉嵐蘭は、義を骨にして實を腸にし、老荘を魂にかけて、風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事、十とせあまり九とせにや。此三とせばかり、官を辭して岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷なひ、稚子をほだしとして、いまだ世波にただよふ。されども榮辱の間に居らず、日々風雲に坐して、今年仲の秋中の三日、由井、金

(一)孔子、釋迦、莊子

(一)中庸「衽金革、死而不厭、北方之強也」
(二)論語 雍也、「質勝文則野、文勝質則史、文質彬々然後君子」

は形のもてはなれたれば、人の得しらぬも尤なるべし。是に黄な粉といふものを、など添へては給はらぬぞと、或人のいひたるを、飯ずし見るたびの、笑ひ草にはいふなるべし。其銘にいはく、

以飯名鮓。鮓而非飯。一點躑躅皮。十重鳥子。色於雪白。香非梅酸。藤花漸暗。橘香已近。貴介尤褒。下臈未知。昔卞和玉。似之是照。

座右銘

芭蕉

人の短をいふ事なかれ。
己が長をとく事なかれ。

銘に云く

ものいへばくちびるさむし秋のかぜ

是非齋銘

許六

是を是とするは諂へるにちかし。

(一)伊勢物語、「鳥の子を十づつ十は重ぬとも思はぬ人を思ふものかは」

(一)文選崔瑗座右銘の句也

二泉は、茶を烹るによろし。三の間(一)の水、柳の水(二)ありといへども、許子が五老井を汲んで、此茶を烹る時は、白雲満碗花徘徊す。一たびこれをすゝる人は、專風雅の志をすゝむ、盧同(四)が七椀といふは長過ぎたり。

飯鮓銘　　吾仲

飯鮓は、いづれの時よりかもてはやしけん、此六條の銘物にはいへりけり。今は公の奉りものに數ふれば、下ざまの人は、口を限りても待つべし。まして卯の花の咲く比は、此物のけしきも清からんに、藤の花の咲く時に、それが節をあはせたらん、いかなる人の深き心か侍りけん、是にて二季草の名も、世の人はいふべし。器物は、杉の香もてつけたる折に入れて、此花をかざしにも、又は文など付けてもやるべし。かくことぐヽしきやうなれど、すべて上ざまの翫物なり。長良の鮓はむかしをしのぶより、梅津かつらの名にしられて、大津、松本の旅人も、笠をかたぶけずといふ事なし。かの茄子たけの子の鮓といへば、何のこけらにも似かよひて、尼法師のこがれものならんに、これ

(一)宇治橋三の間
(二)京都西洞院三條青柳寺の水
(四)盧同に七碗歌の作あり

（一）歸田錄、「茶莫貴於龍鳳團」

夫茶は龍鳳（一）を貴とするは、歸田錄の詞也。和漢飲食の中の重味也。陸羽が茶經にのする所、建州、洪州に名茶多うして、杜牧もこれをほめたり。和朝明惠といふ聖、唐巴東の實をとりて、始めて越前の國に植ゑ、都の北、栂の尾に移せり。猶茶の土地に佳ならずとて、終に宇治山に掘りうつして、上林何某が家をかゝやかす。近世の土産は、駿州の安部、美濃の莖長、熊野、近江、其中に江東の茶勝れたり。政所、松の尾は極品也。しがらき、宇治、田原は、又其次也。蘗山禪師來朝して、唐茶の鍋煎を製す、世もつて隱元茶と號す。これは是出し茶也。それより首の長き藥罐を作つて、給仕の小坊主をたすけ、几下牀頭にすゑて、手づからくむ。其銘に云く、

能くさます　　能くまじはる

よく悟る　　よく寂す

能くすゝむ　　能くへらす

六の德を兼ぬるといふとも、茶ありて水なく、水あつて茶なくは益なし。龍焙、金砂の

布引の機物をはへたる糸すぢも、皆是ほそみより出たる女の手わざならん。猶日本紀の局が、初音の巻にいひけん、(一)瀧のよどみの年なみより、(二)水上としつもりて老いにけらしな、黒き筋なしとは、共に双白堂の事なるべし。其銘にいはく、

髪の花女瀧男瀧のかざしかな

茶碗銘　　嵐雪

黒茶碗あり。花の朝は、ます／＼くろく、雲の夕は、いよ／＼黒し。月待つ宵のやみをさぐり、闇夜に鼻をとられしは、おの／＼つちめくらのまじはりなるべし。

検校　貧僧　大黒　小ぐろ　はちの子　早ふね　小雲雀

三代目をのんこといふ、のんここそなほふかき意味あれ、祕してしばらく殘す。

まつむしのりんともいはず黒茶碗

雲華園銘　　汶村

五老井四絶一章也。

(一)御髪も年比に衰へゆきまして瀧のよどみ恥しげなる云々
(二)古今、「落ちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老いにけらしな黒き筋なし」

（一）論語、「繪事後素」

（二）墨子は白きを見て悲まんも孔子は涅而不緇といへり

馬の貞に習ふ。是をあげて一用とせんや、また二用とせんや。

東銘　　支考

雙白堂主野紅子。夫妻相共好二風雅一。因有二双白之號一。東銘指二野紅一。西銘曰二其妻一。

むかし人の繪を書きそめしに、（一）丹青は後の事なりとて、此白の一字をぞたふとまれけん。身に錦繍をまとひ、頭に金冠をいたゞきて、君といひ、臣といひ、男といひ、女といふ、さるは人の見て名づけたる名なるべし。しかるに女のをみなへしは、嵯峨野の露のよすがもあるに、男のをみなへしは、いづこの野邊の秋にかあらん。たゞ此双白堂の主とならば、かの商山の翁に頭ならべて、花も面白からん、月も面白からん。其銘にいはく、

花鳥にさとればもとのしら髪かな

西銘　　許六

つよからずつよからぬ女の風雅は、糸筋の如く、此糸五色に汚れざれば、（二）狂客の悲しみをそへても、何がしが緇塵にそまらざるよろこびを見せたり。天の香來山の衣をたち、

人感をなさずといふ事なし、是其民の邪を禁ずるの源也。されば嘩を譏り、戸ざしをわするゝもことわりならん。婬樂暗に戀の思ひをなし、鉦鐃鈸、自然に死の近づく事を悲しぶ、是人心の私なきしるし也。何ぞ聖人樂を以て、國を治むるに治らざらんや。王昭西施が美なるをきけど、人終にほれたるためしなし。これ其王昭西施に念を動かさゞるしるし也。吾情たゞしき時は其物にあづからず、聖人耳に惡聲をきかずといましめ、禮にあらざればきく事なかれといふも、此あたりのいましめなるべし。

○銘類

机銘　芭蕉

間なる時は臂をかけて、嗒焉吹噓(一)の氣をやしなふ。靜なる時は書を紐といて、聖意賢才の精神をさぐり、靜なる時は筆をとりて、羲素(二)の方寸に入る、たくみなすおしまづき、一物三用をたすく。高さ八寸、面二尺、兩脚にあめつちのふたつの卦を彫にして、潛龍牝

(一)嗒焉は萬事を忘れたる貌
(二)王羲之、僧懷素

の人は、常住これを左右にし、旅行にも携へ、瀧を詠むるにももたせたり。すべて一日の中、見る事は一にして、きく事は九つなるべし。須臾の間も、耳中に物の音聲の、客とならざる間なし。されば見る警よりも、聞く警はさきなるべし。其かたち見たらんより、其聲を聞くに、情をますたぐひこそ多けれ。むかしより見ぬ戀にあこがれ、思ひをちぢにくだき、傾城の箱階子あらゝかに蹈みならす音は、見るよりも其音に胸つぶるゝわざなれ。蕎麥切はおろしの音に心ときめき、樂屋の笛のしらべは、其猿樂のめでたく、舞ひかなづるよりもゆかしきわざなれ。隣家に餅つく音、極熱の頃、垣を隔てて車井のはしる音は、其亭主の心まで涼しく思はれ侍る。和朝もてはやす小歌、淨瑠璃、箜篌、三味線、是皆婬樂とて、君子はいやしまれける。此音曲をきく時は、何のあて事もなくて、不圖戀慕のおもひを催す。鉦鐃鉢の音は、我人心よからぬ聲と、おほえたるこそことわりなれ。此音聲は、無常を催す事を、第一につくれり。むかし聖人樂を以て天下を治め給ふ、我朝の樂も又同じ。夫樂は、天地を動かし、神鬼をなかしむるもの也。これを聞く

きかず。

聽箴　　許六

耳はきく事の役者にして、聖人耳に惡聲をきかずといふは、大きなる無理也、たとひ山林深谷にかくれたりとも、惡聲を聞くまじとはいひ難かるべし。されば釣鐘も通ぜぬかな聾をよしとはせず。瘂は元來母の胎内より聾にして、此の世の音聲を聞かずとかや。元來舌の短きにはあらず。其かたちを見ず、其聲を聞きて埒するものは、神鳴・ほとゝぎすのたぐひなるべし。尤も鳴神は、雲中の沙汰なればさもあらんか。昔より此鳥、此聲をなくと、慥に引合てきく人なし。當世は鳩鵯のたぐひ、此聲を鳴くもしらず、たゞ本律かけたとなければ、是非とも此鳥にするもおぼつかなし。和漢詩歌の相違あり、千聲萬聲、たゞ鳴くとばかり詩には作れり。此國の歌には、鳴かぬ事をかこちて、きかぬうらみをよめり、つまる所はひとつなり。和國風流の手柄にして、此鳥にかぎらず、此たぐひ多し。琴(一)をきんとよむは、禁の字の心なるべし、此音を聞く時は、邪念を禁ずる事也。もろこし

(一)白虎通、「琴者禁也、禁止於邪以正人也」

(八)古今、「今ははや戀ひ死なましを逢ひみんとたのめしことぞ命なりける」
(九)新古今、「待宵にふけゆく鐘の聲きけばあかぬ別の鳥は物かは」

たり。鯉の子づけの清げに、飯鮹のおぼつかなき味をもてる。

色はおもひのまゝならぬを命とはよめり(八)。あはぬをかこち、逢ふ夜の鳥をうらみ、待宵(九)の鐘に戀の情を盡せり。湯殿柴部屋のせはしきちぎりに、百とせのよはひをのべたる心地して、さらぬ顔をつくりて出たるもをかし。せはしき事を、戀のあはれといふとも、八坂北野の茶屋ものの振廻ほど、手廻しなるはなし。燭臺を握り、階子に上り、客を迎ふるより進退に左右の手を空しくせず。内の亭主心得て、二階口へ銚子盃さし出し、取肴あまたならべり。二三獻の過ぐるを待ちかね、屏風引廻したるは、つまみくらひたる、鮹や酢貝の、胸につかへたる心地やせん。

玉子、山ノ芋は、腎の藥とばかり覺えて、同じくひ物ならば、水をます物にしくはなしとて、朝夕すゝめり。虚實ともに病となりて、尅する所をしらず。古人も、口よく病を致し、其德を敗る。口を守る事は甁の如くせよとはいへり。吾生は限りあり、情欲は限りなし、色好むものは、みだりに淫せず。傾城に家を亡すものあれど、腎虛をしたる人を

（七）「冬ごもり年のうちには咲きながら垣根の外に匂ふ梅がえ」

ある法師の、茄子の鴫燒をほめられければ、傍の俗人、鴫の茄子燒も又よしと返しける。

時を感ずるといへるは、かけ菜に打大豆汁の春めきたるもあるに、つまみ菜に、唐がらしの青くさきは、初秋のあはれをすゝめり。

芹蕗のたうを、春の景物に撰み置くは無念なり。(七)定家の卿、冬の花に梅を讀み給ふいとよし。

鰤は、節振舞をかぎりとし、鯖は生身玉を終にとれり。

さんちやは四つ時、出女は八つを威勢の盛といふべし。吾翁、色と義の道をしめし給へる詞にも、

色をおもふ事は、うどんを見るがごとく、

義を守るものは、唐がらしの辛きに類せよと。

山葵、生姜、蓼、からし、山椒の辛き類も、各其場所を得たり。海鼠腸といへる物には、わさびの打ちあがりたるからみをすり込み、昆布に巻き込るゝ時は、山椒の手柄を見せ

（六）惟然坊の木枕に帯をまきつけて寝しより芭蕉に頭の奢に家を破りたりと笑はれし事あり

のまじはりをするを自慢顔なり。されども頭ばかりをはやされ、獄門の如くになりて、口口にさゝれ、果は箒の先にかゝりて行方しらず成り行きけるも、猶々口をし。

かながしらといふ魚は、あたまがちのみにて、くふべき所すくなし。彼のかしらのかたき所に手柄ありて、産屋のことぶきには、かしづかれて出づる。（六）惟然坊が、つぶりのやはらかなるは、彼にも似よかし。

魚鳥の匂ひをもてなさるゝは、むしり喰れながらも、本意とやはおもふらん。

鶴は、芹の香の俤を残し、雉子は昔なつかしき匂ひをとゞめり。痩せて小兵とはいへども、雲雀のいきりもの、水無月の鶴鴈とほこりける。

生海鼠といふものの匂ひは、たとふべき物なし、牛蒡の香にかよひてをかし。松茸のふんぷんたる物に、毎度柚の相客に出らるゝ類ひ。

焼蛤の馨しきには、胡椒の粉の鼻に入りたるがうれし。かばやきの匂ひ、風流にはあらねどうまき匂ひとやいはん。

（五）女の男したる數だけ鍋をかぶる祭

も、祖母々々とよばれつるこそうたてけれ。色欲におぼれて、あくまで淫するものは、男女に上下のたがひありて、高家富貴の人の妻は、七人半のあてがひといへるも、男子の德とおぼえり。たとひ七人が十人といはれたりとも、いやとはいふまじきに、半とかぎりたる、はしたの妻こそおぼつかなけれ。

雪駄の男、鼻紙の知音と定めて、いくたりの夫を重ね侍るは、下女やはしたの上の奢なりけり。（五）筑摩の祭のあとたえて、行れざるは、かれらが爲には、おほきなる仕合ならん。かゝる淫樂の世となり行くも、神道の衰へたる、神のとがめとやいふべき。

鮟鱇、河豚魚といふ魚あり、形も大きにうまれつきて、あくまで肉をくはれながら、汁を吸はるゝを手柄にいはれけるこそ、大きなる損なれ。

鯛は魚の最上とほめられながら、鼻屎にて釣られける例もありや。いと口をし。

鰯といふものは、魚類の下品にいひなされて、賤しきもののそへ物となるのみならず、田畠の肥しとなるこそ、猶口をしけれ。しかれども、正月のことぶきに引出されて、上臈

のかくし子といへるものあれば、少しはもどるか。

温飩は汁をほめられ、蕎麥切は、からみに威をとられり。奈良茶は、跡一盃を茶につけらるれども、其號を持てり。飲食器物共に、勝れたる極品の物は、賓容のもてなしとせるに、煙草ばかりは、亭主を奔走せり。客人たばこは、へらぬを調法とせるは何ぞや。

餅は心地よき物、酒はうれしき物、茶は淋しき物、もちくひは酒をのまず、酒好は饅頭をくはず、是天の自然か。たま〳〵上戸に、嫌なき生れつきあるは、牙あるものの角をいたゞきたる類とやいはん。

傾城の色は、晋子が見届けて、いひふるしたれども、遊君の情は、下品にこそをかしき事はあれとて、木導は出女の上を盡せり。よき遊女のきぬ〴〵のうつり香は、こぬか袋の匂ひともおもはる。やす傾城の匂ひは、郡内島のうつり香ならん。追込辻君のたぐひは、にほひ曾て定まらず。

隱居の妾ほど、うらやましからぬものはあらじ。さだまれる名をさへいはれず、若きを

（三）孟子離婁上「不孝有三、無後爲大」

（四）聖徳太子の語

一とたてて、孝を五倫の始におけり。若周公、孔子、天性精の備したる人ならば、子なけん、第一の孝道は缺けぬべし（三）。是とても聖人のまつたきといふべきか。桀紂が極悪も、子あれば是孝子なり、子なき君子にはまし侍らんか。

吾朝、いづれの御時よりか、西域の教を廣めり。此教は後なきを第一とせり。其ながれをたつる者世に多し。大路を行く人も、十が三四はこれ也。神の道に合してこれを兩部と云へり。扶桑東夷の機をよくしり、且小國の分量をよくさとせり。地のせまく、人の過ぎたる國也。彼のやからの人々、後なきを不孝とし、鼠の子を産み捨て侍らば、程なく富士山もこぼち入れられ、湖も彌鹿飛を切りぬく沙汰に及ばん。堂塔に金銀を鏤め、法事法席に美を盡すといふとも、其費は國にとゞまりて、他の所へはもれず、多くの眷屬の食ひつぶし侍らんよりは、いとめでたし。佛供といへる物は、供へたるばかりにて、會てへらず。是日の本建立の源ならんか（四）。こゝを切れ、かしこをたて、子孫あらせじと思ふなりと宣ひて、一人の罪人となり給ふ。御心こそありがたけれ。しかはあれども、此頃は借

（一）孟子告子下、「取食之重者、與禮之輕者而比之、奚翅食重」
（二）孟子梁惠王、「王如好色、與百姓同之、於王何在」

○箴類

飲食色欲箴

許六

善は常也、惡は變なり、惡出でて後善あらはる。善惡に迷はぬ人は、其善惡になづまぬ人なり。食（一）は禮より重く、色（二）は民と共にせよとかや。されど食の命をやしなひ、色のあはれをしれる功も、なづむ心より、やがて大病を生ぜり。色は三教ともにくむ事甚しきゆゑに、甚だ制せられず。和朝歌道のをしへの高き事は、戀を第一とす。色は風雅也、風雅は仁なり、惻隱（そくいん）の心あり。大舜の二女に嫁し給へるも、今日おして見る時は、是畜生なり。かのながれを汲（く）むやからは、これらをもよしとなづめり。元來畜生兄弟姉妹と嫁する事をせずは、人倫は姉妹と嫁する事を道とやはいはんか。彼の教には、後なきを不孝の第

(一)植木鉢
(二)かづらを掛けたる如き髭

びて付けたるなるべし。皆やさしからぬ名目は、汝が生得のふつゝかなれば、天資自然の理、さら〳〵うらむべからず。かれが愛をうくるや、石臺(一)にのせられて、竹緣の端のかたにあるは、上々の仕合なり。ともすれば擂鉢のわれ、底ぬけ釣瓶に培れて、やねのはづれ、二階のつま、物ほしの日陰をたのめるなど、あやふく見え侍るな、朝貌のはかなきたぐひには、誰も〳〵おもはず、大かたはかづら髭(二)つり髭の益雄にかしづかれて、貧乏樽の口をうつすみさかなとなり、不食無菜の時、不圖取出され、おほくは奴僕豆腐の比紅葉の色を見するを、榮花の最上とせり。かくはいへど、ある人北野詣の歸るさに、道の邊の小童に、こがね一兩くれて、汝が青々とひとつみのりしを、所望せし事ありといへば、いやしめらるべきにもあらず。しかじ、今は其人々も此世をさりつれば、いよいよ愛をも賴むべからず。からき目は見すべからずと、小序をしかいふ。

石臺を終に根こぎや番椒

波を隔てて、東西三十五里に、よこをりふしたり。みねの嶮難谷の隅々まで、さすがに手にとるばかり、あざやかに見わたさる。むべ此島は、こがねおほく出て、あまねく世の寶となれば、限りなき目出度島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるゝによりて、たゞおそろしき名の聞えあるも、本意なき事におもひて、窓押開きて、暫時の旅愁をいたはらんとするほど、日既に海に沈んで、月ほのぐらく、銀河半天にかゝりて、星きらきらと冴えたるに、沖のかたより、波の音しば〳〵はこびて、たましひけづるがごとく、腸ちぎれて、そゞろにかなしびきたれば、草の枕も定らず、墨の袂なにゆゑとはなくて、しぼるばかりになん侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川

番椒序

野坡

たうがらしの名を、南蠻がらしといへるは、かれが治世、南蠻にて久しかりしゆゑにや、未詳。酸醤子、天覗き、空見、八なりなどいへるは、おのがかたちを好める人々の、翫

（一）麻生といふ狂言は麻生殿の烏帽子を誂ふる事を作れり
（二）西行、「年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山」
（三）良經、「うかりけるまだ山深き宿もあらば人をもとはん雪の曙」
（四）俊成、「夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里」
（五）寂蓮、「村雨の露もまだひぬ槇の葉に霧たちのぼる秋の夕暮」
（六）木導の別號
（七）鳥落人は惟然の一號、「梅の花赤いは〳〵赤いはさ」

麻生後序　許六

麻生（あさふ）（一）の名を、烏帽子折（ゑぼしをり）ともいふは、好（すき）に赤烏帽子と同じゑぼしの釋なるべし。すべて世は好嫌（すききら）ひの二（ふたつ）より流れ出て、天地黒白のたがひともなるなるべし。妹（いも）といふは人丸の好（すき）、（二）西行はなりけりより事起りて、後京極殿は、（三）雪の明ぼのやうを好き給ふ。（四）俊成卿の鶉（うづら）に、（五）寂蓮法師の槇の夕暮は、たま〳〵なるべし。桃といへば、桃隣にきはまり、翁は蒟蒻（こんにやく）をすかれたり。是は精進物の沙汰に及ぶべし。晉子が傾城に、（六）阿山人が出女は、朝夕にして、名護屋の柹の、かの字のひゞきは、末摘花（すゑつむはな）のから衣と、同じ五音のカキクケコなるべし。（七）鳥落人が赤いは〳〵の赤きは、好（すき）に赤烏帽子の、あかい所を發明したり。されば、撰者の范孚も、柳後園の人なれば、柳の青き所をも、此集に述べらるべしと、俳諧大居士跋す。

銀河序　芭蕉

北陸道に行脚して、越後國出雲崎といふ所に泊る。彼の佐渡が島は、海の面十八里、滄

又公私のいとまをぬすみ、花に坐し、水に戲れ、月に嘯き、雪に吟じて、又ゑがく日すくなし。たま／＼清朗の日あつて、ゑがかんと席をうつし、水を汲む時、例の雜客入りみだれ、あるは物喰ひ、酒飲み、炭火にからをはたき、果は莊蝶が生寫しにあき果て、今年の春、頻に畫樓を造る。おほきさ方丈餘、東西の銘は、薄暮雲霧のくらきを扶く。北に書齋あり。半日は樓にのぼり、半日は齋にこもる。人來て繪を好む時、きはめていふ詞あり。遲き事は三會(二)の曉を期すと約して歸る。次の日來て、はや遲々の罪を責む。予が隣家にすむ人、一生ゑがく事を知らず、一生遲々の罪をうけず。我たま／＼繪なつて求に應ず、遲しといへども隣人にははやし。三年過ぐる日は五年め也、五年終る時は、七年の月日也、これ成就の時節としるべし。樓成つて門弟子六人、題を探つて、人物山水花禽をうつす。各一軸を懷にして左右に列なり、すでに勝負を爭ふ。此撰にもるゝ門人すくなからず。これを畫樓の繪合といふ。樓主五老井許子六、自ら序作つてふける。鄭公が樗散にして、老(三)畫師と稱するのみ。于レ時元祿壬午冬、十一月日書レ之。

(二)彌勒出世の時期

(三)杜甫の鄭廣文に送りし詩に酒後常稱老畫師とあり

る囀りもなくて、明暮諸鳥の眞似を所作とし、一生餌袋にたくはへたる囀りもなし。ただ
さら／＼、つら／＼と霰ふりける柞原に、ある事ない事虚言八百、これを樂の最上とおぼえて、筆にまかせ書き付けたるを、要文集とぞ申し侍りける。

畫樓繪合序　　許六

(一)和朝のいにしへ、繪かく人の中に、火難に家を燒きて、不動尊の妙筆をふるひ、あるは他の國に赴き、漢王の夢に入て、雪ふねの名を殘す人もありけり。當世の風情はあはれすくなし。布袋、福祿壽の二筆をおぼえて、あつぱれ畫師の一列に入る。弟子となり、師と稱む時、第一番に人前をしへ、次に筆法をしめす。唐土のゑがく人は、樓を造りて人を禁ず。起きてゑがき、寢てゑがき、おのが精神を盡す。猫をゑがきて鼠を絶すも、むべなるかな。われ畫樓を造らん事望久し、されど沈痾老病につかれて、筆をとる日稀也。一とせの中、夏暑の六七月は、墨爛れ、膠とらけて、ゑがく日なし。冬寒の三月は、水凍り、筆かじけてゑがく日なし。是を一とせ五ヶ月の禁筆とさだむ。猶雷雨風霜は、一日の禁筆、

(一)宇治拾遺にいでたる繪佛師良秀をいふ

になして贈りぬ。今予が四絶もかくの如しと、おの〲これを感じて、說、賦、銘、贊の四文を書して、終に五老志にとゞむ。某李由これに一章をくはへば、おそらくは五絶とならん事を知りて、やがて四文章の始に序して、此心をのべて、此罪をのがるゝのみ。

要文集序　　許六

相坂山(一)の杉に雪はふれども、法花經法花經と囀り出し、淀(二)のわたりの夜ぶかきに、本尊かけた〱とぞ鳴きける。百千のとり〲に、おのが一聲の外に、かはりたる音聲もきかず。烏のかあ〱と鳴き暮し、雀のちい〱と同じ事囀るに、飽かずやありけん、本尊をかけ、法花經よむ鳥は、かあ〱ちい〱よりは、少し物しりたる顏つきこそをかしけれ。其顏つきにても、同じ事ばかり囀るに、イヤ、ヲウ、にくし可愛しのかはりめやありけんかし、よくぞ聞きわけける。もろこしの鸚鵡といふ鳥は、人のいふ事をよく眞似ける。此國に渡りても、和語を聞きしり、父、母、爺、口鼻をよくぞまねける。此鳥此國になければ、はじめ終り慥ならず。かれもこれも、もどかし鳥といふは、父母の産みつけた

(一)新古今、「鶯のなけどもいまだ降る雪に杉の葉白き逢坂の山」
(二)拾遺、「いづかたに鳴きてゆくらん時鳥淀のわたりはまだ夜深きに」

には雲花園、四には紫芝岡なるべし。我問ふ事あり、四は須彌の四州によるや。曰く、不ㇾ然。四海四方の四にあらずば、四時四月の四ならずや。曰く、不ㇾ然。(一)四恩四教の四にたよらずば、(二)四民四姓の四の數によるや。曰く、不ㇾ然。(三)四天四睡の四をねがはずば、(四)四王四皓の四をうらやむか。曰く、不ㇾ然。我惘然として、問をやめたり。許子が曰く、分別理窟は我有にあらず、若三絶五絶の增減あらば、吾子が算用はたち所に相違すべし、たゞ一二三四の第四番にあたれば、四絶とはいふ也。むかし愚なる法師あり、無才にして法名の文字にくるしめり。ある人をしへて云く、まづ法の一字をかしらにかうぶらしめて、下はいろはを以てつくべしと、法師おほきにちからを得て、やがて法以、法呂と、段々に名づけて、すでに一二の篇にいたり、第六の番にあたれり。時にかはらけ賣身まかりて、法名たべといへば、法六と改名して、やがてとらせぬ。妻子ふかくかなしび、たとひ此世の業は是非なし、せめて來世に生るゝ時、此苦患をたすけたべといへど、法師かしらをふりて、我法名は土のたぐひにはあらず、今六の當番なれば、是非なしとて、終に法六

(一)四恩は天地師親、四教は藏通別圓
(二)四民は士農工商、四姓は源平藤橘
(三)四天は蒼旻昊上、四睡は豐干、寒山、拾得、虎
(四)四王は多聞天、持國天、增長天、廣目天、四皓は東園公、綺里季、夏黃公、甪里先生

よりといふものにして、くさめさせむとぞたはぶれける。

近江八景序

千那

近江八景は、湖水の絶景をあつむ。比良堅田より、三井石山につらなり、粟津辛崎を見渡し、勢田矢橋を合せ、瀟湘の八景になずらへ、八の所を定む。そのかみ永祿第五、[一]仲秋の月に乗じて、近衞の政家公、石山寺にあそべる時、はじめて此景を詠ず。すべて我朝國々の八景、諸寺諸山の十境、題せずといふ事なし。されど此湖上の八に、いまだ竝ぶものを見ず。いにしへより、八の詩歌はあまたあれど、俳諧の八景ある事を聞かず。さればば近江八景はあふみ人がよしとして、繪は五老子が筆をかり、題はわが里、堅田の病[二]雁の夜寒をはじめ、自他遠境の作を集めて、すでに近江八景の一軸となす。これを集め、是に自序するものも、江州の産、蒲萄坊の主人僧千那、筆を本福寺の東軒にとる。

(一)明應九年八月十三日の誤

(二)芭蕉、「病雁の堅田におちて旅寝かな」

四絶文章序

李由

許氏が五老井に四絶あり、絶は絶勝の義なるべし。ひとつには草字藤、二には揚揮豆、三

俳諧に魂の入りたらんにこそとて、我翁行脚のころ、伊賀越しける山中にて、猿に小蓑(一)をきせて、はいかいの神(たましひ)を入れたまひければ、たちまち斷腸のおもひを叫びけん、あだに懼るべき幻術なり。これをもととして、此集を作りたて、猿みのとは名づけ申されける。これが序も、其心をとりて、魂を合せて、去來凡兆のほしげなるにまかせて序す。

宴(スル)柳後園(ニ)序　　支考

世にあそぶ人ありて、綾羅錦繡にたのしぶ時は、樂つきて後たのしむものなし、山林樹下にあそぶものは、心にみたざれば、世にうらやむかたも出きぬべし。此ふたつのさかひに居らざるものを、心に天遊ありとぞ、むかしの人もいへりける。されば柳後園の何がし、三四の友達ありて、遊ぶ事日あらず(一)。額には閑の一字を題して、しづかならぬ時は横になし、やかましき時はさかさまに置きて、其時の心に隨ひ行くは、大小(二)の額見る心にや侍りけん、此日東花坊も、此中にあそびて、人々酒のまんと催したるに、心に物をとめ、口に餘情をいふ人ならば、罰(三)は金谷の酒もをしからん。俳諧に案じ入りたる時は、こ

(一)「初時雨猿も小蓑をほしげなり」

(一)日を選ばずの意

(二)大小の文字を兩面に記したる札を柱にかけおき月の大小にかけかふるに從ひかけかふる事あるよりいふ

(三)李白、「如詩不成、罰金谷酒數」

空のけしき、柳櫻の錦をあらそひ、蝶鳥のおのがさまぐ\なる風情につきて、聊か實をそこなふものもあればにや、糸遊のいとかすかなる心のはしの、あるか無きかにたどりて、姫ゆりの何にもつかず、雲雀のおほ空にはなれて、無景のきはまりなき道芝のみちしるべせんと、此野の原の野守とぞなれるべらし。

元祿二年彌生　書

猿蓑序　其角

はいかいの集つくる事、古今にわたりて、此道のおもて起すべき時なれや。幻術の第一として、其句に魂の入らざれば夢に夢見るに似たるべし。久しく世にとゞまり、長く人にうつりて、不變の變をしらしむ。五德はいふに及ばず、心をはらすべきたしなみなり。彼の西行上人の、骨(一)にて人を作りたてて、聲はわれたる笛を、吹くやうになん侍ると申されける、人には成りて侍れども、五の聲の別れざるは、反魂の法のおろそかに侍るにや。さればたましひの入りたらば、アイウエオよく響きて、いかならん吟聲も出でぬべし。只

（一）撰集抄四に西行が野に出て骨をあみ集めて人の姿を作りしが聲は吹き損じたる笛の如くなりきといふ話あり

松風身にしみわたり、小袖の膚にさはりぬるも、いま〲しき心地せられ、あまりに忝きと思ふをりは、さむきものなり。又奉納、

百八のなみだのかゝる蕨かな　聖

今ぞしる月日の花も梅さくら　男

つきせぬ御名残も暮に及べば、すでに御暇申して出たり。二見の方もゆかしけれど、行さきいそがしければ、おもひとゞまりて、例の太夫の許に歸りて臥しぬ。

○序　類

曠野集序　芭蕉

尾陽(一)蓬左、橿木堂主人荷兮子、集を編みて、名をあら野といふ。何ゆゑに此名ある事をしらず。予はるかに思ひやるに、ひととせ此郷に旅寝せしをり〲の書捨をあつめて、冬の日といふ。其日かけ相つゞきて、春の日また世にかゝやかす。げにや衣更著彌生の

(一)名古屋

宮川の渡りを越て、代垢離の子供は、蛙の如く、一銭剃の鋏は、蟹に似たり。

髪結の腰にしたゝる柳かな　聖

山田に入りて、何がし太夫のもとにつく。日高ければ、參宮の支度して出たり。抑も神前に詣でぬれば、よろづの事は忽ちわすれて、かたじけなさの一すぢに、涙はおとし侍りぬ。

奉納二句

青海苔も和光の塵のひとつ哉　男

松櫻川を隔てて墨の袖　聖

天の岩戸に入れば、灯明かゝやかし、常闇のむかし思ひ出られ、有難き事かぎりなし。

穴藏と見ればおそろし雉子の聲　男

内宮に詣でて、御社ちかき杉のむら立に、御裳濯川はきよくながれ、御寶前はしんくとして、くり石の上に畏り拜し奉る。つたなき心にもまことはありて、又上もなき嶺の

に、日野椀の壺皿、いとさびしげにつきすゑたり。見る目いぶせく胸ふさがり、やがてもかゝらず、杉箸しらげ直し、腹のけしきつれなければ、其日の役をはらふ。はき物は寢所よりしめつけ、笠は上壇より著ながら、此宿を出たり。前後の家並はしづまりかへり、左右の鷄の聲、みだれたる中を出ぬけて、火繩の火影ちら／＼と見えがくれなり。紀行毎に、溫庭均（六）が早行も聞きあきぬれば、此度は法度にして、雲津川の假橋を渡る、かくはいへど景氣胸の內にうかめたり。松坂の矢川といふは、人の面白がる所なり。其所さき肩にとへば、今は絕えてたゞの所になりたりといふ。筑摩、朝妻、江口、神崎は、むかし語りともおぼえぬるに、きのふの淵は、けふの矢河となりて、人かはり、家かはりぬれば、搗米の船には、むなしく蠅のむらがり、草履草鞋の鎰は、徒に風に動く、今は其土に色香もなし。

松坂や越後屋とへば江戸ざくら　男

出女の雲むら消えて明野哉　聖

（六）「晨起動征鐸、客行悲故郷、雞聲茅店月、人跡板橋霜、槲葉落山路、枳花明驛墻、因思杜陵夢、鳧雁滿迴塘」

（四）便所

（五）坂下に大竹屋小竹屋といふ宿屋あり

明れば彌生朔日、湯番の男ぬからじと起きて、行く（四）べき所へはしる。例の一藝長々と勤めければ、聖もゝ尻にて待ち兼ねたり。天氣よき夜明の雲あひしらみかゝり、竝木の木陰、まだほのくらく、遠近人の笠の內、そろ〱見えたり。鈴鹿山越えんとて、聖駕籠、男馬、

天井に首はつかへて山ざくら　聖

伊勢はてる馬士の鈴鹿や花曇　男

下り坂、山あひくらく、朝霞の中に、坂泊の咄も程なくちかよりたり。

鶯も竹屋（五）どまりや朝あらし　聖

晝氣色は、關の地藏にて見るなり。茶店をすこし打ちたゝきて、しばらく、腰をかけたり。

田樂やあふのく口になく雲雀　男

たそがれ過ぐる比、雲津に著けば、宿の案內もおぼつかなし。

二日、聖夜ぶかく起きて、非番の男を起す。煤氣たる行燈の影に、會津盆の打ちひらめたる

月はやし梢は雨を持ちながら　翁

雨に寐て竹おきかへる月見哉　曾良

南行紀

李由　許六

烏は黒く生れながら、鷺の白からん願ひもなし。笠はあるにまかせ、雨をしのぐ物に、菅蓑はあれど、今様は合羽で仕廻ふ。錢を入れたるは、草鞋一足にて、天晴旅人の出立は出來たり。二月晦日といふ日に、蝸牛の家を離れ、名吉(一)の國廻りにうかれ出て、田づらの柳、木瓜(二)、すみれ、遠音の雉子のうす曇、旅の心にはなりきりたり。前途路遠しと、杖の頭をからめかし、首にかけたる頭陀袋、身は雲水の果しなき、布引山の山中に、道づれせばやと見れば、見しれる聖なりけり。男是より、角文字やいせの野飼の跡や先やと打ちつれ、やがて土山の泊につく。(三)手ぶるき水風呂の時宜に時をうつし、聖長袖の役に、其夜はあら湯を請取る。明日よりは湯番の前後を定め、猶日々の事を筆に記さん。これも湯番につけて廻すべしとて、書記も湯番も男に渡しぬ。

(一)鯔
(二)山店、「木瓜葉旅して見たく世はなりぬ」
(三)湯の時宜は古風なりとの意

任はてゝ歸る時長櫃十二合に萩を入れてもち上れりと見ゆ

(五)白氏、「朝飡飢餲費杯盤、夜宿腥臊汚牀席」

(六)佛頂禪師

(七)杜甫、「欲覺聞晨鐘、令人發深省」

(八)淸少納言をさす

せたるも、風流にくからず。きちかう、をみなへし、かるかや、尾花みだれ合ひて、小男鹿のつま戀ふ聲、いとあはれなり。野の駒、所得がほにむれありく、又あはれ也。日すでに暮れかゝる程に、利根川のほとり、布佐といふ所につく。此川にて鮭の網代といふものをたくみて、武江の市にひさぐ者あり。宵の程、その漁家に入りてやすらふ、(五)夜の宿腥し。月くまなく晴れけるまゝに、夜船さしくだして鹿島に至る。晝より雨しきりに降りて、見らるべくもあらず。麓に根本寺のさきの和尚(六)、いまは世をのがれて、此所におはしけるといふを聞きて、尋ね入りてふしぬ。すこぶる人をして、深省(七)を發せしむと吟じけん、しばらく淸淨の心を得るに似たり。曉の空いさゝか晴れぬるを、和尚おどろかし給ふれば、人人おどろき出ぬ。月の光、雨の音、たゞあはれなるけしきのみ、むねにみちて、いふべき言の葉もなし。はる〴〵と月見に來たるかひなきこそ本意なきわざなれど、かの何(八)がしの女すら、時鳥の歌、えよまでかへりわづらひしも、我ためにはよき荷擔の人ならんかし。

とりは浪客の士、ひとりは水雲(一)の僧、僧はからすの如くなる墨の衣に、三衣の袋をえりに打掛け、出山の尊像を、厨子にあがめ入れて、背中にせおふ。(二)拄杖曳きならして、無門の關もさはるものなく、あめつちに獨歩して出でぬ。今ひとりは、僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶりの、鳥なき島にも渡りぬべくて、門より船に乗りて、行徳といふ所に至る。船をあがれば、馬にものらず、細脛のちからためさんと、歩行よりぞ行く。甲斐國より、ある人の得させたる檜木もてつくれる笠を、おの〳〵いたゞきよそひて、やはたといふ里をすぐれば、かまがいの原といふ廣き野あり。(三)秦甸の一千里とかや、目もはるかに見わたさるゝ。つくば山むかふに高く、二峯ならび立てり。かの唐土の雙劍の峯ありと聞えしは、廬山の一隅なり。雪は申さずまづ紫のつくばかなとは、我門人嵐雪が句なり。すべて此山は、日本武尊の言葉をつたへて、連歌する人の、はじめにも名づけたり。和歌なくはあるべからず、句なくは過ぐべからず、誠に愛すべき山の姿なりけらし。萩は錦を地に敷けらんやうに、爲仲が長櫃に折り入れて、都の土産に持

(一)名を宗波といふ

(二)拄杖

(三)朗詠、「秦甸之一千餘里、凛凛冰鋪、漢家三十六宮、澄々粉飾」

(四)無名抄に橘

おろそかなり。主人律師、風に乘じて遊び、醉客李氏酌んで月をとる。兼ねて榮耀をこのまざれば、まして名利の煩しきもなし。常に風狂の遊士、此臺にのぼつて、風水の二つを諍ふ、其爭ふ所は、たゞ餅酒にあり。上戸方は、風臺にふかれて水をうらやみ、下戸等は、水臺に腹をふくらかして風を望む。其いどみを見るに、蝸牛双角の諍に等しく、源平水陸の戰に似たり。されど酒のみは、舌もぢれ、足よろめきて、下る事得難く、餅好は、胸こがれ、喰ひおもりして、更に動くに懶し。終に相引に引退き、上戸は桓公の蚊となつて禮を忘れ、下戸は蝦蟆と化して、腹を撫でて樂しむのみ。

○紀行類

鹿島紀行　　芭蕉

洛の貞室、須磨の浦の月見に行きて、松かげや月は三五夜中納言といひけん、狂夫のむかしもなつかしきまゝに、此秋鹿島山の月見んと、おもひ立つ事あり。伴なふ人ふたり、ひ

(二)竹生島、多景島、沖島、奥島

(三)徒然草に菊亭大臣柱の落ちたるを懐中せし續飯にてつけたる話あり

(四)孔の名に滿月半月あり、

(五)新古今、「花さそふ比良の山風吹きにけり漕ぎゆく舟のあとみゆるまで」

(六)金葉、「鶉なくまの入江の濱風に尾花波よる秋の夕暮」

がたく、關の蟬丸も、膝せまければすゑ所なし。柱には四の(二)島々をたてて、落つべきわづらひもなく、何某(三)が袂のそくいひもいたづらなるべし。撥面には唐崎の松をゑがき、覆手には、勢田の長橋を横たへたり。(四)二の月は、出しほ人方のながめを添へ、四時の細き絲筋を、絃手にねぢあけ、(五)花さそふ山風に、春のわかれをしみ、(六)鶉鳴く濱の夕暮には、秋のあはれをかなしむ。あけては彈じ、暮れてはをさむ。倦む時は比良横川に足を打ちかけ、眠る時は三上伊吹に枕を高うす。此亭のあるじは誰ぞ、杉原氏、みづから高ぶり、これを琵琶亭と名づく。むかし伯牙がしらべも、鍾子期が耳なくては益なし、これをきく人は誰ぞ、五老井の許子六、力を合せ口にまかせて記す。同じ穴の狐の寄合、犬の嗅ぎつけぬ間を重寶と見るべし。

風臺水臺記

許　六

四梅廬の南北に、風臺水臺を築く。風は涼をとり、水は月を弄するの心なるべし。春の風あたゝかに吹けば、水香しうして、梅の影を浸し、秋の嵐雲に音信れては、池あれて荷葉

（三）李臣異石九峯なるを藏す東坡名づけて壺中の九華といふ
（四）李建勳、杜荀鶴共に唐人

清眞人は、日月を呼んで大寶九華とし、李正臣（三）は、壺中の九華をたくはふ。建勳（四）は九花先生と號し、荀鶴は九花山人と稱す。我が四柱の亭、九は陽の極數といふ理窟にもわたらず、華は壯麗のひくみにもあらず、たゞ方寸をやしなふの天地にして、春は曙、千里鶯啼て、梅かうばしき朧月に嘯き、青楓風すゞしく、ほとゝぎすあやめにかをり、水鷄若竹に敲く。萩女郎花露細うして、菊は黄に、柞さびしげなり。比良伊吹遠くそびえ、金龜金花ちかく峙てり。亭外の風物すくなからず、亭中の物數、又いくばくぞや。屛風、傘、味噌、疊、馬一匹、鶴一羽、亭あり、其主人は誰ぞ。近陽城下、松氏汶村みづから記すといふ。

琵琶亭記　　許六

（一）眞敏の衍か

むかし嘉祥の比、貞敏（一）といふ人、三面の琵琶を唐土より傳はり、猶代々に作りおかれたる樂器おほしといへども、あるは火の爲にやかれ、又は田舍の土に落ちて、口をしき事のみおほし。こゝに名物一面ありて、終にもてあそぶ人なし。島の經政も、撥短うしてとゞき

(五)蘇東坡顧芝瑞の竹、楊子華の馬、梅道人の梅共に有名なり

(六)韵寥には縱欒とあり、されば樹枝の思ふままに伸びたるさま也

(一)文帝の誤か

(二)茶に九華英あり

潛居士、文畫に僻する事二十餘年、子瞻、(五)芝瑞を師とし、楊子、梅道人が骨髓を伺つて、雪裡のばせを、炎天の梅、自然に一味の風雅を兼ねんとす。世上予が筆痕を樂みて、予が心頭のたのしびをしらず、風雅は是非をあらそひ、畫圖は郷童の前のたはぶれとなる、いまだ風雅の爲に、文畫をたのしぶといふものを聞かず。予と共に志を同じうして、はやく吾をたすけよや〳〵。終日樹下に徘徊すれども、更に答ふるものなし、四隣の鳥聲花間の蜂蝶のみ。笑つて青天に腹鼓を鼓し、五老の流に脚を洗つて歸る。于時元祿五年壬申春二月、於(六)婆欒樹林下灑毫。

水筋をたづねて見れば柳かな

九花亭記

汶村

亭主あり、九花と名づく、九華は何ぞや。抑も九花安妃は神仙の名にして、山に九花あり、丹に九花あり。衾に名あるは王侯の用る處、魏の武帝(一)は衾に名づけ、唐の伊氏は室に名づく。觀あり、殿あり、帳あり、扇あり。菊に九花の名ありて、(二)茶にも又此美稱あり。上

（二）常州惠山の泉と京師晃天觀の井と水脈相通ずといふ

（三）西行、「道のべに清水流るゝ柳陰しばしとてこそ立ちとまりけれ」

（四）拾遺、「音にきく狛のわたりの瓜作となりかくなりなる心かな」

ならし。其水の清き事は、惠山（二）の泉脈を通じ、甘き事は肅州の金泉にひとし。立ちかへる春の朝、白散の藥をさけてより以後、四時の生涯を養ふ事かぞふべからず。一とせの間に、わきて泉を翫ぶ事は、夏を主とす。霍山鳴が井盤の納涼、西上人（三）の柳の陰も、今此水に倂そひぬ。其德其要廣大にして、神佛のたふときをすゞしめ、且堯の井を掘り、禹の水土をたひらげてより、四民猶おだやかならしむ。後に山あり、さゝ栗の岡といふ。晴に望み、雪に對して、眺望きはまりなし。湖水の島々、江南江北の山のたゝずまひ、日枝伊吹の嵩、比良三上の高根に眸をさく。西南の間に千鳥が岡あり、聖德太子の御歌より、犬上の名どころとなりぬ。杖を曳きては籬を廻り岡に登る。蕨は羹をたすけ、栗は茗粥を炊ぐ。抑も庵は、纔に筵三枚をまうけて膝を窄め、賓主六人一座に全からず、茶碗五つ、枕五つ、筆墨の外に物なし。月に杜鵑をそへ、驛路の鈴に、里の砧を合せて、秋をかなしむ。庭に箒をあてず、樹に木鋏を入れず、窓前の草おのづからなり。たま〳〵畑を穿てば、狛（四）の瓜種を求め、五色の茄子を植うるといへども、山蟻の爲にせゝより落さる。吁

かひしげく、漁村軒をならべて、網をひき釣をたるゝ、おのがさま〴〵も、たゞ此樓をもてなすに似たり。暮れがたき夏の日も忘るばかり、入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝかゞり火の影もやゝちかく、高欄のもとに鵜飼するなど、誠にめざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八つのながめ、(二)兩湖の十の境も、涼風一味のうちにおもひためたり。もし此樓に名をいはんとならば、十八樓ともいはまほしきなり。

此あたり目に見ゆるもの皆涼し

五老井記　　許六

靈泉あり、水のたゝゆる事、纔に尺あまりにして、三尺の盆池よりながれ出づる事、濺々滔々たり、五老井と名づく。別墅をひらきて、五老庵を結ぶ。主人姓は森、名は許六。みづから五老井先生と僣す。五老は予が別號也。驛が原不知哉川ながれて、鳥籠の山南に近し。(一)十旬の休暇をうかゞひ、半日の閑を領ずる所なり。遙に聞く、東江ばせをの翁、錫を坂西に趣しめ給へるの折ふし、靈泉を共に汲んで、風騷の匂ひを、袂の中にとゞめんと

(二)西湖の誤なるべし

(一)滕王閣序、「十旬休暇、勝友如雲」

談、日既に山の端にかゝれば、夜座靜に月を待ちては影を伴ひ、燈を取りては罔兩に是非(一二)をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとにはあらず。やゝ病身人に倦んで、世を厭ひし人に似たり。つら〳〵年月の移りこし、拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室(一三)の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞じて、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして、此一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり、賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと、おもひ捨てゝふしぬ。

まづたのむ(一四)椎の木もあり夏木立

十八樓記

芭蕉

美濃の國、ながら川にのぞみて水樓あり。あるじを賀島氏(一)といふ。稲葉山後に高く、亂山左右にかさなりて、ちかからず遠からず、田中の寺は、杉の一むらにかくれて、岸にそふ民家は、竹のかこみのみどりも深し。曝布所々に引きはへて、右に渡し船浮ぶ。里人行き

(一二)莊子齊物論、「罔兩問景曰、曩子行、今子止、曩子坐、今子起、何其無特操與」

(一三)惠能禪師偈、「吾三十而窺佛籬祖室」

(一四)源氏椎本、「たちよらん蔭と頼みし椎がもと空しき床になりにけるかも」

(一)賀島落梧

（六）萬葉に網代守の歌なし
（七）山谷集、「徐孝澥棠巣上、王翁主簿峯庵」注に「徐佺、樂道隱於薬寮中、家有海棠數株、結巣其上、時與客飲其間、又王道人登峨帰、結屋於主簿峯上、有手人其上其闇」
（八）王子瑞「門前寡客、詩好營外、孱顔は峨嵯山」
（九）「青山捫虱坐、黄鳥挾書眠」
（一〇）賀茂祠官藤木甲斐守敦直能書の名あり
（一一）古文前集「…人何來、…日已夕」

黒津の里はいとくろう茂りて、（六）網代守るにぞとよみけん、萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからんと、後の峯に這ひのぼり、松の棚つくり、藁の圓座を敷きて、猿の腰掛と名づけ、彼の（七）海棠に巣をいとなび、主簿峯に庵を結べる、王翁徐佺が徒にはあらず。唯睡癖山民となりて、（八）孱顔に足をなげ出し、（九）空山に虱を捫つて坐す。たまたま心まめなる時は、谷の清水を汲みて自炊ぐ。とくとくの雫を侘びて、一爐の備いとかろし。はたむかし住みけん人の、殊に心高く住みなし侍りて、たくみおける物ずきもなし。持佛一間を隔てゝ、夜の物をさむべき處など、いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、（一〇）加茂の甲斐何がしが嚴子にて、此たび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして額を乞ふ。いとやすやすと筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。頓て草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寢といひ、さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝はまれまれとぶらふ人々に心を動し、あるは宮守の翁、里のをのこ共入り來りて、ゐのしゝの稲くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞きしらぬ農（一一）

りにして、五十年やゝちかき身は、蓑蟲のみのを失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波にたゞよひ、鳰の浮巣のながれとゞまるべき、蘆の一本の陰たのもしく、軒端茨きあらため、垣ね結ひそへなどして、卯月のはじめ、いとかり初に入りし山の、やがて(三)出でじとさへ思ひそみぬ。さすが春の名殘も遠からず、つゝじ咲き殘り、山藤松にかゝつて、時鳥しば〳〵過ぐるほど、宿かし鳥の便さへあるを、木つゝきのつゝくともいとはじなど、そゞろに興じて、魂(四)呉楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薫峯よりおろし、北風海を浸して涼し、日枝の山比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣たるゝ舟あり。笠どりにかよふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に、水鷄のたゝく音、美景物としてたらずといふ事なし。中にも三上山は、士峯の俤にかよひて、武藏野のふるきすみかもおもひいでられ、田上山(五)に古人をかぞふ。さゝほが嶽、千丈が峯、袴腰といふ山あり。

(三)西行、「吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらん」拾玉集、「誰か知る憂世をすてゝ柴の戸にやがて出でじと思ふ身ぞとは」

(四)杜甫、「昔聞洞庭水、今上岳陽樓、呉楚東南拆、乾坤日夜浮」

(五)猿丸大夫の故跡あり

侍れど、かくばかり落ちぬる柹を見ず。きのふの價、かへしくれたびてんやと侘ぶ。いと便なければ、ゆるしやりぬ。此者のかへりに、友どちの許へ消息送るとて、みづから落柹舍の去來と書きはじめけり。

柹ぬしや木ずゑはちかきあらし山

幻住菴記

芭蕉翁

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ、そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微(一)に登る事、三曲二百歩にして、八幡宮たゝせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや、唯一(二)の家には、甚だ忌むなる事を、兩部光をやはらげ、利益の塵を同じうし給ふも又たふとし。日比は人の詣でざりければ、いとゞ神さび、物靜なる傍に、住み捨てし草の戸あり。よもぎ根笹軒をかこみ、やねもり壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住菴と云ふ。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予又市中をさること十年ばか

(一)山の半腹
(二)唯一神道

○記　類

落柹舍記

去來

嵯峨にひとつのふる家侍る。そのほとりに柹の木四十本あり。五とせ六とせ經ぬれど、このみも持ち來らず、代がゆるわざもきかねば、もし雨風に落されなば、王祥(一)が志にもはぢよ、若鳶鳥にとられなば、天の帝のめぐみにももれんと、屋敷もる人を、常はいどみののしりけり。ことし八月の末、かしこにいたりぬ。折ふしみやこより、商人の來り、立木に買ひ求めんと、一貫文さし出し悅びかへりぬ。予は猶そこにとゞまりけるに、ころころと屋根はしる音、ひし〳〵と庭につぶるゝ聲、よすがら落ちもやまず。明くれば商人の見舞來たり、梢つく〴〵と打詠め、我むかふ(二)髮の頃より、白髮生ふるまで、此事を業とし

(一)晉書王祥傳「有丹奈結實、母命守之、每風雨祥輒抱樹而泣」

(二)前髮

にか、何がしの良醫、但州養父といふ所に隱れて、治療をほどこし、死を起し生に回すものすくなからず。されば其風をしたひ、其業を習ふ輩、津々浦々にはびこり、やぶとだにいへば、病家も信をまし、藥力も飛ぶがごとし。それより物替り星移つて、今は長助も長庵となり、勘大夫は勘益となる。當時の藪達を見るに、先門口に底拔の駕乘物をつるし、竹格子に賣藥の看板をかけて、文字の紺青も、半は兀けたり。たまさかの藥取を賴みて、藥店にはしらせ、物申は暖簾の内に答へて、女房の顏をつゝむ。町役には牢舍を療じ、藥代にめでては、河原者にのます。牛膝(一)には牛の膝を尋ね、鶴虱(二)は鶴のしらみをさがす。藥のみも次第にかれて、胃の氣よわり、元氣衰へて、果は何がし村の道場の明をまつ。我が俳諧の道をもてこれを押せば、師說もいまだとほからざるに、其手筋を失ひながら、宗匠めくをみるに、今はやらるゝ紗綾ちりめんの、乘物の中におほつかなく、緋衣木蘭色のさとりの拂子も、心許なけれど、佛法には藥毒の氣遣なければ、其分なるべし。たゞ藪醫者のやぶはらに、又出る竹の子も、藪とならんこそうるさけれ。

(一)ゐのこづちといふ藥草
(二)ゐのしりといふ藥草

(一)諺

(二)草木(臭き)がたへぬといふ隱語

(三)良經、「きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣片敷きひとりかもねん」

(四)文選、「大隱隱朝市」

一藝の達人は、鄕童に上座を許され、名字持ちたる人と、座席の爭ひをする。早喰、(一)早糞は男子の一藝とは稱じ侍る。此藝おほくは無風雅の人にあり。たとひ一藝はつきたりとも、一藝一德ありて、萬德一藝にはかへがたからんか。されば甲斐の名將の分別所に定め、山(二)といふ隱語を殘し、森蘭丸が、きざみ鞘かぞへたるは、信長公も藝者と見えたり。詩歌連俳の名句も、此所より產出し、大悟十八度も、此室に入て工夫を極めり。つく〴〵と一とせのあはれを盡して、鳴くや(三)霜夜の莚、薦の編目をもる月夜まで、人に心はつくめり。いにしへより朝市(四)に隱家ありといへるは、檣に此所の事なり。世務所用のいとまなき身も、しばらく閉關する時は、印纓を解きて、公役を許す。いそぎ閑居に入りて、跡を遠ざけ、半日の寂寞を樂まんと、尻をかゝげて走る。

何おもふ長雪院のしぶ團

藪醫者解　　汶村

世に藪醫者と號するは、本名醫の稱にして、今いふ下手の上にはあらず。いづれの御時

もふものは、麒麟を第一にたふとび、次に聖人をあがむべきか。箸折るれば親に離れ、櫛の歯缺くれば子に別るゝ占とて、童蒙のものは深く悲しめり。箸をるゝ毎に親にもはなれず、櫛木履缺くるたびに、子を失ふにてもなし。されば仁義の占もあはぬためしもありぬべし。麟をすかぬ聖人もありや、又聖人を好まぬ麟鳳もありや。むかし三皇五帝より以來、孔子の外出たる聖なし。和國も神代より打ちつゞき、當時百年枝をならさぬ聖朝なるに、麟鳳出たる取沙汰もなし。犬は戸口を守り、鷄は時を報ず。麟出て人もおどさず、鳳啼きて旅客の夢を破る能なし。出ぬ方の聖人、いよ〳〵出たかりぬべし。(二)見ぬ唐土の鳥もねじと、徹書記があやまりたるは、もし出ぬ方をよみたるにや。世間聖人をしらずして、麟鳳にのみ目をつけて、末の凡夫の不目利は、かの一言のあやまりにて、聖人なしとおもふなるべし。今此麟を解して見るに、とまり兼ねたる春秋の、(三)よき場所に出合せ、擧句の趣向と見こなしたらば、何の麒麟に理窟のあらんや。

長雪隱解　許六

(二)「なか〳〵に見ぬ唐土の鳥もこじ桐の葉もとせ秋の夜の月」

(三)春秋の結末に西狩獲麟とあるをいふ

につかまるれど、夜出づる鵂鳥は、網にかゝりても、やがていなさるゝを、たふとしとおぼえたり。

○解　類

獲麟解,　　　許　六

魯の哀公十四年、西の狩に麟を得たり。孔子大きになげき給ひて、春秋をとゞむ。夫麟はいづれの時出て、孔子は見覺え給ふぞいといぶかし。鼠は愚にして火難の家をさけて命をたもつ。麟は四靈(一)の隨一にして、狩ある事をしらず、うろたへ出たるも又いぶかし。孔子みづから聖に高ぶり、もしや牛馬の生れそこなへるにてやありけん、これも又いぶかし。麟うせ、道おこなはれざる物ならば、道は麟にのみありて聖人の上にはなき事にや、猶又いぶかし。麟ほろぶれば、聖人も共にうせ給ふ例にてもあるや。たとひ聖人うせ給ふ例ありとも、道はまさしく存せり。是とてもなげくにたらず。儒道たふとしとお

(一)麟、鳳、龜、龍

嘲宵惑説

巳紈

秋の暮のあはれを知らぬ人は、入麺をこのみ、長雪隠をする人は、唐様の書をすく。風雅のうつる、うつらざるの違ひなり。かの人生得燈を見ず、眠室にかきこもり、寐る事を樂の最上とする、寐酒さめ、夢盡きて、ひたもの寢返れども、夜の明くるけしきもなく、屋普請の胸算用も仕あき、大國を領じ、治めんとおもへば、言下に治り、又は金持の浪人となりては、嵯峨の奥に引込み、斗藪頭陀(一)に心を變じては、松島象潟に身をよす。されど給に書ける色に心を動かし、獻立紙にすわりたる心地せられて、やがて興盡きぬ。たまたま庚申の夜ありて、宵寐せぬ物とおどされ、大欠に懸金をはづし、田樂の燒くるを待ちかね、病人の夜伽に當つては、樂風爐に額を焦す。かゝる人たのしぶといふ事をしらず、琴碁書畫は屏風の模樣とおぼえ、花鳥風月は手本に書くとばかりしる。昔宰予が晝寢も、夜ふかすあてに寐つらんかし。(二)古人の燭をとるといへる、誠にゆゑあり。人生七十今時はいきず。たとひ五十で死にたりとも、百年の算用にはたつべし。晝ありく鶴鴒は、鷹

(一)行脚僧

(二)李白春夜宴桃李園序、「秉燭而夜遊」

はかゝるけしきありて、坂は日の照る所なるべし。

草刈の道々こぼす野菊哉

山芋説

吾仲

芋に數種あり、山中に生ずるを山芋と號し、自然生と稱して山藥(一)に用ゆ。畑に植ゑてまろがせとなるを、つくねと呼んで、其功もすくなく、其味も次也。秦楚には玉延といひ、鄭越には土藷と號す。杜詩嚢中の法をこゝろみず、陣簡齋は玉延の賦作る。鐘山の薯蕷は、三日炊るれど色を變ぜず、我國みちのくの芋は、絲を引く事蓮のごとし。四月に葉を生じ、初秋に子を結ぶ。ぬかごとよばれて坐禪豆に入れられ、いもが子(二)は這ふ程とよみて、叡聞に預る。寒夜の痳酒には、峨眉山の芋をすり込み、卯月の麥飯には、まり子の(三)宿のとろろをうらやむ。世に腎藥ともてはやさるれど、貧僧の爲には少よろしからず。人參よく人を活し、よく人を殺す類なればとて、棕櫚芭蕉を植ゑまぜて、其勢をもどされけるこそをかしけれ。

(一)二月と八月とに根をとり乾してさらす之を山藥といひ虛を補ひ氣力を益すといふ

(二)平家に、忠盛「いもが子は這ふほどにこそなりにけれ」と奏したるに白河院「只もりとりてやしなひにせよ」と仰せられし事あり

(三)芭蕉、「梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁」

來れば、怒つて斧をとるわづらひもなし。藤の性酒をこのむ。山王常に餅をたしむに何の興ありて、かゝる裊々とは長き事ぞ。我おもふ草字藤は、藤の中の下戸なるべし。情(二)中にあれば色に出づ、これ其餅のかたちをあらはし、三尺さがりを咲けるよと、賓主とり廻してぞうらやまれける。

打盌に蛸のかざしや藤の花

草刈説　露川

松の葉かきは雪間のけしきありながら、その親のまづしきより、其子はつゞれ著てをかしからず。馬糞かく子のいかなれば、親もなく、兄弟もなく、いづこより出て、いづこには歸るらん。さゞ波や、粟津の松の木の間かけて、馬の鈴音に風情は得たれど、鮑のいふかひなき名なるべし。此草刈は、笛の名人、さてこそ牛にも乘せておきたれ。夏は朝かげの、見てもいと涼しく、百合風車刈り入れて、(一)絡緯のゐて鳴く日もあるべし。秋はむら雨のとりあへず、道かきいそぎ、荷ひつれたるに、空また晴れて又をかし。鈴鹿

(二)詩大序、「情動於中、形於言」

(一)きりぎりす

のたそがれに、疎影横斜をうつす。(三)山路の朝日のどやかにさし出たる、(四)折りかけ垣の匂ひ殊に春めき、谷の扉うらゝかに打霞み、竹の嵐枯葉がちなるに、初音ほころび、(五)十月江南の天氣、醉客馬にねて、酒家の村を出で、師走の冬籠りたる、越路の雪の中に、朝數寄の袂に匂ひをとゞむ。(六)遍照が折箸、(七)皇后の額、數珠、十露盤の粒、耆木、染屋の汁、これ皆かれが風姿風情のわづかの端なるべし。彼の說にいへるは、牡丹は花の富貴なる物なり、菊は花の隱逸なる物なりと、是そのかたちにより、其愛する人によれり、蓮は花の君子なる物なりと、是は其理窟によれり。我は其理窟をとらず、梅は花の風雅を好むもの也、我は其風雅を好むものを愛する者なり。

草字藤說　　程己

五老井四絕之一也

(一)草臥れて宿かる藤は大和路や、實と(二)なつては、俳諧のかたちにあらはれ、手折て塗笠にかざさば、大津繪の風流なるべし。高松に倚托して、佞者のためしにひかれ、梅の傍に

(三)芭蕉、「梅が香にのつと日の出る山路かな」
(四)菅家、「山里の折りかけ垣の梅の花いかなる人の見しといふらん」
(五)白氏、「十月江南天氣好、可憐冬景似春華」又、「此時却羨閑人醉、五馬無由入酒家」
(六)大和物語に梅の枝を折りて箸とせし事あり
(七)宋書に壽陽公主の晝臥せし額に梅花の落ちて點ぜし事あり
(一)芭蕉、「草臥て宿かる頃や藤の花」
(二)同、「藤の實は俳諧にせん花のたね」

かいにたふれて、生涯を終る。其門葉あまたの中に、たふるゝ所同じからず。武の杉風は耳のとほきにたふれて、微細の論をきかざれば、二十餘年半は流行し、半は流行せず。洛の去來は、風雅の正直にたふれて、(二)春風桃李花の開くる日をしらず。其角は作にたふれ、支考は理にたふる。凉菟はふるみのしたるきに倒れ、露川は俳諧の數にたふる。史邦、木導は風雅のつよみに倒れ、千那、李由は風月の情の過ぎたるに倒る。嵐蘭は鎌倉の月にたふれ、丈草は(三)松本の閉關にたふる。(四)杜國は横にたふれ、惟然は高みにたふる。尚白は(五)忘梅の趣向に倒れ、許六は文章の文に倒る。されば芭蕉流に倒るゝものあれば、ばせを流をたふす人もあるなり。鶯は時鳥に倒れ、櫻は紅葉にたふる。人は人にたふるゝもあれば、我は我に倒るゝものなり。

愛梅説

萬子

全篇説レ梅而無二梅字一。終句以二一梅字一結レ之。

屈原楚辭にわすれ、菅家宰府に招く。(一)西の對のおぼろ夜に、我身ひとつをかこち、(二)孤山

(二)長恨歌、「春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉落時」

(三)松本山に閉居して終る

(四)伊良古崎に讁死す

(五)元祿五年の撰集

(一)業平、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして」

(二)林逋西湖の孤山に閑居して「疎影横斜水淸淺、暗香浮動月黄昏」の句あり

子あまた産み捨て、爛鍋の間に餓ゑて、生涯を終る。未來とても覺束なし、紺屋(五)の地獄まではあれど、出女の地獄の沙汰はきかず。たゞ八萬地獄の門々にたゝんも、又あはれなるべし。

雜説　　不知作者

人物禽獸は、其人物禽獸の粉骨なる所に倒れ、山川草木は、其山川草木のすぐれたる所にたふる。物皆おのがたのしみの纔なる所に、たふれ果つるも哀なる事なるべし。瞿曇(一)は無爲に倒れ、仲尼は仁義にたふる。莊老は寓言にたふれ、神仙は靈異に倒る。伯夷叔齊は賢にたふれ、楠正成は忠に倒る。火はあつきにたふれ、水はひやゝかなるにたふる。砂糖はあまきにたふれ、野老はにがきにたふれ、長はながきにたふれ、短はみじかきに倒る。されば瘡を患ふる人は、痒をかく所にたのしみ、貧を苦しむものは、盜賊の難なき事をたのしぶ。是皆和漢人情の赴く事は、さら／＼かはる事あるべからず。昔より風雅に倒るゝ人おほき中に、西行は歌に倒れ、宗祇は連歌にたふる。先師ばせを翁は、はい

(五)紺屋は約束を守らぬより地獄におつといひて白山立山等にこの地獄あり

(一)釋迦

(一)班女は美濃野上の遊女、照手は相摸權現堂の遊女

(二)撰集抄、「世の中を厭ふまでこそかたからめ假の宿りををしむ君かな」

(四)撰集抄には室の遊女の普賢菩薩となり古事談には神崎の遊女の普賢と化身せりとあり

ふたつけかへ、座敷の手拍子に輕忽の聲をあけて、返事を答へ、油火かきたてる指は、おのがつぶりにぬぐふなるべし。靑天に塗木履を引きずり、急用には赤脚で飛ぶ。御油、岡崎の全盛もむかしになり果て、班女、(一)照手がうけ出されたる取沙汰もなし。もろこしの楓橋にて月落烏啼の吟も、此君にあはぬうらみをのべ、江口の泊に、(二)宿かさぬ君もなくなりて、今はたゞの所にはなりぬ。伊勢路の彩色はあかめがちにて、大津、草津は少しうすかるべし。冬枯のまばらなる比は、いつとなく弱り果てて、鼻の下の煤氣も寒く、木綿所の小車の音もさびしく暮れて、水風呂の火影に足袋さすわざも侘し。片田舎は法度きびしく、表向は勤もせず。されどあはれなる方には心ひかるゝならひ、夜更け亭主しづまり、ぬけ道よりしのびやかに、書院床の小障子あけて、神の瑞籬もはゞかりなくて大股に打越え、終に一夜の枕をならぶ。出替は年の暮を定め、給分の加増は赤前垂をこぎる。物皆終りあれば、古筵も薦にはなりけり、此ものの行方何にかならん。(四)昔は普賢菩薩にもなりたる先例もあれど、今はすこしの違ひありて、果は駕籠舁の妻にこもり、痩

（一）關所の通券

みに落ちたり。爰に道人がかりの遊君ありて、終に人の魂をとらかす意氣張も見えず、まして歌よむ程の戀にてもなし。たゞ物くひ酒のみ、言語進退のやすき事は、かりに和光同塵の姿をあらはし、慈悲第一の出女とはいふなりけり。倩生涯のありさまを見るに、地をはしる旅客の勞をなぐさめ、女郎花のたぐひにもあらで、江湖行脚の獨坊主を落さむとす。あるは朝立の旅人を送り、打著姿をぬぎ捨てゝは帚を飛し、蔀やり戸おしひらきてより、やがて衣引きかづき、再寐の夢のさめ時は、腹の減期を相圖とおもへり。高足打の塗膳にすわりながら、通りの馬士に言葉をかはす。やう〳〵晝の日ざしはれやかにかゞやく比、見世の正面に座をしめ、泊り作らんとて兩肌ぬぎの大げはひ、首筋のあたりより、燕の舞ひありく景氣こそ、目さむる心地はせらるれ。(一)關札の泊りをうけては、あたらしき竪島に、京染の帶むすびさげて、鬢の雫のまだ露ながら、門の柱にうち添ひたるは、かれが一世の勢なるべし。いかなる人かやどりて、いかばかりの仕合すらんもしらずと、頼母しく見やられ侍る。あるはすさまじき髭やつこになぶられ、弓同心の灸の

目にあらずや。さるを今の人、名は天地以前よりつけ置きたると思へる、いとはかなし。けふ名をあらため、明日はや目のさけやう、鼻のかゝり、さも呼ぶべき人とは見する。敎識とは顯密の名、鐵巖とつめてはぬれば、禪師の號、大むね一派一流の名目あり。もろこし人の名つく事、深き心なし。(二)敵を殺して我子の名とし、(三)白魚を得て其名を定む。わづか一兩字の間に、ふかき心をふくめ、夕可、木端の類も、漸くきゝあき、一笑、志計もあまりにつたなし。小坊主阿段よく茶をくむ。予が湯をとゞむ事、(四)杜子が獠奴に等しければ、名づくる説つくつて、かれにとらする事かくの如し。

出女説　　木導

傾城傾國は、唐人のつけたる名にして、白拍子ながれの女は、我朝のやはらぎなるべし。昔より品類あまた、かぞふにいとまなからん。國々の名目、當世の洒落、柄杓、干瓢、白人、巾著のたぐひ、大むね一種より出て、位階の高下は金銀の相當なるべし。たつとからずして勅撰にゆるされ、貴人のかたはらに侍るゆゑにや。少子細過ぎて、多くはふる

(二)晉の穆公の仇人條の役に太子を生みしより仇と名づく
(三)魯の昭公鯉魚を孔子に賜ふ、孔子之を榮とし其子を鯉と名づけ伯魚と字せり
(四)杜子に獠奴阿段あり

（一）李斯小篆を作る
左は
右は


の善悪を究むる事をしらず。先師身まかりて、十とせ餘二とせの春秋をへぬれど、師の餘光いまだ國中をかゞやかせり。其道を繼ぐ十哲の門人、口をならべて、我こそ血脈道統なれと、手ぼめの宗匠にかどはされ、眞の道統ある事を知らず。其人俳諧をしらんとおもはゞ、まづ其所の俳諧を見るべし。眞の俳諧一人あれば、一郷すべて道に迷はず、これ言下に惑を解て、あらぬくまぐをたどらぬ故なり。茲に弟子孟遠、余にしたがひて道を聞く事久し。我官袴懸命につながれ、沈痾老衰の床になやみて、たすけとなる事稀也。今かれが爲に師説作つて送る。必ず余が俳諧のたふとき事を知つて、余が俳諧の貴き事に迷ふ事なかれ。若明眼有徳の師あらば、速かに乗りかへて、行きたき方へ行くべし。

名阿段説　　許六

左右（一）の下に物をつけて、文字の埒を明したるをこそ、李斯が手柄とはいふなれど、通字ありて己の己とよむまじければ、なくても事を缺くまじくや。名目のなき世ならば、一日もあるまじ。されば味噌桶に水風呂もせず、尿桶に飯をもらぬためしは、ありがたき名

せぬ顔つきこそをかしけれ。山伏の師を先達といひ、其弟子を強力と名付け、比丘尼の師たるものを、お寮といひて、其弟子を米かみとはいふなり。伊勢富士の神職の人を、御師といふはいかなるゆゑかしらず。其道其業を敎へて、仁にちかしとはいへど、年の暮のあはれを感じては、二朱一歩の使を待ちかね、無盡の(四)企、表がへの割付もうるさく、朝夕の摺鉢時を考へ、夜食の遲き奈良茶を侘びたり。さるは世の風俗にして、敎ゆる人もぬからず、まして習ふ人も猶ぬかる事なし。こゝに俳諧の師たる事、貞德老人よりおこりて、貞室は弟子となり、花の本をうけ繼ぐ、これを天下の宗匠とはいふならし。それより(五)厨子小路に、點者の看板をかけて、あたらしき道を說きて、宗匠めくものは、一座一興の宗匠にして、眞の花のもととはいはず。先師芭蕉翁、ひとり天下に甲たり。世擧つて道を受け、まどひを解く、これを天下の宗匠とはいふなり。今のはいかい人を見るに、一生師と賴む人も見えず、見取聞取の人眞似に、朝夕をあやまり、まどひより惑に分け入る事をしらず。人生れながら知るものなし、師にしたがひて惑を解く。師說にうとき人は、自己

(四)賴母子講や疊の表替に弟子の出金を賴む也

(五)京都にて袋町をいふ

（二）いひはいひしの行か

（三）僧正遍昭の歌、「たらちめはかかれとしてもうば玉の我黑髮はなでずやありけん」

れどもろこしにも、此事久しく絶えてつたはらず、まして吾朝には、むかしよりさる事をきかず。往昔神道のさかんなりし時は、唯一の師有りて道を教ゆる事、退之がいひ（二）にかはらず。然るをいつの頃よりか、兩部といふ事はじまり、神道は日々におとろへ、佛法は月々にさかんにして、和國の風俗はたえ果て、やう〳〵家々に大黑どのをあがめ、初春をむかへては、惠方棚にしめ引きまはしたるこそ、はつかに和國の道の殘りたるしるしならめ。當世佛道の師たる人を見るに、大路に門おし拔き、鐘鼓を打て貴賤をあつめ、利益を說て寶を蒔かす。其弟子となる者を見るに、孤になりて家業にたよりなき人、あるは飛鳥川の淵瀨にかはりて、家を賣り田をうり、はては行所なき人、又はあほうの子供、片輪者の行末、父母の產みつけたる黑髮、露ばかりも惜まず剃り落し、素性（三）法師がつぶりを撫でては、たらちめはかゝる涼しき事はよも知らじなど輕みに落し、何某寺の新發意とはいふなりけり。これもいにしへの師道に相似たれど、世を渡る口すぎなれば、巫醫樂師、百工の師を求むるにかはらず。又は弓馬兵法の道、諸禮、躾方、讀書、有職の師たる人の、由斷

身の行末をむさぶり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、遥にまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事は、僅に二十餘年也。はじめの老の來れる事、一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寐がちに朝起したる、寐覺の分別何事をかむさぶる。おろかなる者は思ふ事おほし、煩惱增長して、一藝すぐるゝものは、是非の勝るゝもの也。是をもて世の營みにあてて、貪欲の魔界に心を怒らし、溝洫におぼれて、生かす事あたはずと、(二)南華老仙の唯利害を破却し、老若を忘れて、閑にならんこそ、老の樂とはいふべけれ。人來れば無用の辯あり、出でては他の家業を妨ぐるもうし。(三)孫敬が戸を閉ぢて、杜五郎が門を鎖さんには友なきを友とし、貧しきを富めりとして、五十年の頑夫、自書しみづから禁戒となす。

朝がほや晝は鎖おろす門の垣

師説　　許六

(一)いにしへ學ぶものは必ず師あり、師は道をつたへ、業を受け、惑を解くものなりと。さ

(二)莊子

(三)孫敬の衍

(一)韓愈師說、「古之學者必有師、師者所以傳

花虎杖をたばね、行くさき〴〵の山づとゝなしぬ。道のほど一里二里、とほくは三里にあまりて、肩かゆる業もなく、花の陰には睡をもかけず、漸く京の町に近づきては、歸りの事どもちぎりて、大路小路にわかる。或はおろして門をはき、あるひは出口の市に米をしろがへて、小袋の首をくゝる。月の夕はつれに後れて、紅葉の雨を分け行くこそ、いつかは我屋にいたらめと、見るをだに物うきに、東の翁の笑ひて曰く、身の賤しきを思へば、官女もかたらひがたし、心の鈍きを思へば、傾城もなほまじはりがたし。若妹背をなさんに、此をなごをなんといたはり給へり、左禮言ながら殊勝にぞ侍る。

閉關説

芭蕉翁

色は君子のにくむ所にして、佛も五戒のはじめに置くといへども、さすがに捨てがたき情のあやにくに、あはれなるかた〴〵も多かるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下ぶし(一)に、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人めの關も、もる人なくはいかなるあやまちを仕出でん。あまの子の波の枕に袖しをれて、家をうり身を失ふためしも多かれど、老の

(一)古今、「梅の花匂ふ春べはくらぶ山闇にこゆれどしるくぞありける」

又以男文字述古風

蓑蟲々々。落入牕中。一絲欲絶。寸心共空。似寄居狀。無蜘蛛工。白露甘口。青苔粧躬。從容侵雨。飄然乘風。栖鴉莫啄。家童禁叢。天許作隱。我憐稱翁。脱蓑衣去。誰識其終。

柴賣説　凡兆

柴賣の柴うる事、小野、細河、くらま、高雄もあれ、矢背、小原は、花園、梅が畑よりは先をかし。(一)深山柴おのが竈に折りくべてといへるは、すめあたりの氣色ならん。かの秦の(二)毛女が賢にも似ず、河陽の(三)焦子が仁にもあらず、唯世渡りのよすがにして、女は都に出てこれを賣り、夫は山に入りてこれを樵る。頭は日に晒せども黒く、足は泥に染むれども白し。さすがに建禮門院の女房、阿波の典侍の局などいふ人の名殘あるにや。青きひとへは、色香の爲に襟をつくろひ、袿して二布をあらはし、白き手おほひ、しろきはゞき(四)、白き帶はうすくたゝんでうしろに結びさけ、幾男の心をか動す。春は躑躅山藤を戴き、茅

(一)堀川次郎百首、「深山柴おのが竈に折りくべて朝食たく煙たつめり」
(二)列仙傳、「毛女始皇宮人、秦亡入山、食松葉不飢寒」
(三)同、「焦先河東太陽人、常食白石、日伐薪施人」
(四)脚絆

(二)蟲の戀物語御伽草子にあり
(三)古今、「雨により田蓑の島をけふゆけば名にはかくれぬ物にぞありける」
(四)遍照が蓑に涙をそゝぎし事大和物語に見ゆ

みのむし〳〵、かたちの少しきなるを憐ぶ。わづかに一滴を得れば、其身をうるほし、一葉を得れば、これがすみかとなれり。龍虵のいきほひあるも、おほくは人の爲に身をそこなふ。若かじ汝がすこしきなるには。

蓑蟲々々、漁父が一絲をたづさへたるに同じ。漁父は魚をわすれず、風波にたへず、幾度かこれをときて、酒にあてんとする。太公すら文王を釣るの謗あり、子陵も漢王に一味の閑をさまたげらる。

みのむし〳〵、玉蟲(二)ゆゑに袖ぬらしけん、田蓑(三)の島の名にかくれずや。いけるもの誰か此まどひなからん。鳥は見て高くあがり、魚は見て深く入る。遍照(四)が蓑をしぼりしも、ふるづまを猶わすれざる也。

蓑蟲々々、春は柳につきそめしより、櫻が塵にすがりて、定家の心を起し、秋は荻ふく風に音をそへて、寂蓮に感をすゝむ。木がらしの後は、空蟬に身をならふや、骸も躬も共にすつるや。

(一)辛き目にあひての意

風俗文選卷之四

○說類

蓑蟲說

素堂

みのむし〱、聲のおぼつかなきをあはれぶ。ちよ〱となくは、孝に專らなるものか、いかに傳へて鬼の子なるらん。淸女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも瞽叟を父として舜あり、汝は蟲の舜ならんか。

みの蟲〱、聲のおぼつかなくて、かつ無能なるをあはれぶ。松蟲は聲の美なるが爲に、籠中に花野をなき、桑子は絲を吐くにより、(一)からうじて賤の手に死す。

みのむし〱、無能にして靜なるをあはれぶ。胡蝶は花にいそがしく、蜂は蜜をいとなむにより、往來おだやかならず、誰が爲にこれをあまくするや。

(一)丹後の切戸

に書くべし。松島はあやしくたへに、景冷じかるべし、象潟は景を殘してあはれに、九(一)世戸は景等分にして麗しかるべし。須磨明石はあはれにさびしく、吉野龍田は花やかにさびし。住吉は神久て面白く、泊瀬はむかしなつかしかるべし。六玉川、近江八景、風雅の上をもて知るべし。唐の僧、和の江湖を見ていへる事あり、これ唐の西湖に十倍せりと。和畫西湖を寫して、帆ある舟をはしらす。唐の西湖は水淺くして、人の溺るゝ湖にあらず、たゞ遊人の舟のみといへり。世上に洛中洛外の繪とて、切箔惣金おきちらし、丹青鮮かに彩り、黄白細微に文をなす。奴の頬髭に墨を點じ、傾城の脣に丹を含む。これ其遠近をしらざるもの也。假令丹青は塗るとも、洛中城外の景色は、まつたく山水の部にして、遠人の格式なるべし。すべて畫圖をよくせんものは、まづ風雅をしるべし。古人畫中の詩、詩中の畫と云ふは、此所なるをや。世に料理する者、魚鳥を切る事を知つて、喰ふ事をしらず、畫工はゑがく事を知つて、面白き事をしらず。されば面白き事しらずして、面白き事を書かざるは、何のおもしろき事あらんや。

（一一五）しやくれといふに同じく凹凸不齊なるをいふ

ず。日やけの梨のじやぐれたる座頭のあたまこそ、俳諧の實には究り侍る。

山水譜（一一五）　許六

凡そ山水をゑがくに法あり、一丈の山には一尺の樹、一寸の馬には豆ほどの人なるべし。遠人には目鼻を書かず、遠樹には枝なし、遠水波なくして雲とひとしかるべし。岩に三面を見せて、道には二つの岐あるべし。すべて畫は遠近を知るを第一とす。遠山近き山とつらならず、遠水近き水とまじはらず。林木遠きものは疎平にして、近きは高密なるべし。葉あるものは枝やはらかに、葉なきものは硬し。土に生ずる時は直く、石に生ずるものは曲れり。古木は節多くして、半は死を書くべし。四時の變化を察し、山の淺深をしるべし。山谷樹深き所には、寺觀樓閣のやねを重ね、水郷山店の間には、酒旗の青白を飜すべし。これ王摩詰が山水の賦の法式なるべし。やまと山水とてかはりあらず。されど城ある所には、天守を聳かし、神社ある地には、鳥居を書くべし。山石水木ともにやはらに、櫻は白妙に、和松は綠にして、これ其和漢各別の沙汰なるべし。富士は下野長く、景大やう

る所々に、おもひかけず風流のある心地ぞする。冬牡丹のしやれ過ぎたる、たとへば大津伏見など、(二一)分内狹き所の遊女町、工商の家ゐ軒をならべ、打交りたれば、白地のむすめども、傾國の風俗を見習ひ、養父入、生身玉の里がへりに、しやれを盡し、一向遊女の立振舞に似たれば、兩親いかばかり悲しと制しつらん。時と所をしらざるは、大きなるいき過ならん。

當世の人の花過ぎ、古人の實過ぎたる、嗚呼いづれのときか、花實兼備の世あらん。或問うて云く、當時人情の花にうつり、鳥に心を驚かしやすきは、こと〴〵く此文章に盡きて、はじめて人の耳目を動し侍る。今先生が歎く所の俳諧の實は、いかなるをいふにかあらん、おぼつかなし。はやくこれを明し、俳諧大道に悟入させよ。答へて云く、夫れ實のかたちをいはん。茘子の顏のぶつ〳〵としたる、(二二)實性の人の髭尤よりくるしく、若暑き題の歌よまんとおもはゞ、はやく此もとに立寄るべし。姫瓜の丸顏は、(二三)さんちや風の俤あり。瓢の青ざめたる、熟柹のあから顏、(二四)下戸上戸はふるくして、今樣は是をとら

（二一）境域

（二二）茘子の如くぶつ〳〵の吹出物ある顏は堅氣の人の無精髭はやしたるより暑苦しと也

（二三）散茶は下級なる遊女

（二四）下戸上戸に譬ふるは古しとの意

桔梗は、其色に目をとられり。野草の中に、おもひかけず咲き出たるは、田家の草の戸に、よき娘見たる心地ぞする。

萩はやさしき花也。さして手にとりて愛すべき姿はすくなけれど、秋といへる名目にて、人の心を動かし侍る。たとへば地下の女の、よく歌よむときゝつたへたる、なつかしさには似たり。

菊の隱逸なるは、和漢ともに名にたちたる花なれば、あらためては言ひがたし。風流物好(一八)、目だちたる事を嫌へるは、よき女のをつとなどにおくれて、閑なる片はづれに立ちしのび、よはひもいまだ三十に、なるやならずの盛なれば、さすがに髮などおろすべくもあらず。たゞ一人あるをさなきものに引かれて、心ならず世中に住み侘びたるを、はづかしとおもへる人には似たり。

寒菊の霜をいたゞき、雪をかづける中に、忽然と精骨(一九)を盡したるは、天地造化の行はれざる所はなしと感ぜり。たとへば越路の果のはてにも、三國、金津(二〇)、富山、高岡などいへ

(一八)周茂叔愛蓮説、「菊者花之隱逸者也」

(一九)精力を發揮すること

(二〇)越前にあり

（一五）僧正遍照、「名にめでて折れるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな」

（一六）窮屈の意

（一七）源順、「花色如蒸粟、俗呼爲女郎」

かしければ、これに先をこされて、口を閉ぢていはず。

鳳仙花といふ花は、是もけばけばしく、紅粉鐵醤を粧ひ、人の眼を驚かすやうなれども、手に携へて見るべきものにもあらず。木ぶり葉つきのいやしき事は、彼の出女の李喰ふ口もとには似たり。

女郎花は、いにしへより女にたとへ、我落ちにきと、（一五）法師の破戒によめるは、女郎の二字になづめるならんか。初秋の風によろめき立てるも、菊にさきをかけられたらんは、手柄やすくなからんと、おもへる物ずきこそやさしけれ。此女郎花といへる物、花にしてはちと請取りがたし。たとへば聲のうつくしきを撰みて、小歌を習はせ、髪をおろして是を比丘尼といふ也。大率は女色にして、かざりなければ、大象をつなぐべき執心のきづなもなし。さればとて、男色のかたづまりたる（一六）類にもあらで、男女の中にたてる風俗也。此花百花に類する姿なし。古人（一七）蒸粟のごとしといへるは、草實のたぐひに比すべきか。莖も花も等しく黄にして、下葉すくなによろめきたるは、彼比丘尼のたぐひとや見ん。

蓮は、うつくしき所すくなし。たとへば上手の繪にかける天人の顏にひとし。どこやら佛めきて、心こそおかるれ。

卯の花は、第一名目よし。時鳥の來べき頃は、かならず咲くと覺えたるこそをかしけれ。うつ木の花といふ人は、無下の事なり。卯の花月夜の夕すゞみに、しろめなる衣裳に、黑き帶仕なしたる女の、ふと打ちつれたるが、行違ふ程もなく立ちわかれて、顏のほどもおぼつかなく見かへせば、はや尻影ばかりを、見送りたる心地ぞする。何方へか通ふらんといとなつかし。

朝顏の盛すくなきは、よき女の常は病がちに打ちなやみ、土用八專(一二)のかはる〴〵、隙なきに打臥し、一月の日數も、廿日はかしらからけ、引込みたるが、たま〳〵空晴れきり、朝日さし出たるに、心地よげに打粧ひ、衣裝などあらためて、ほのめき出たるに似たり。

鷄頭は、和(一三)のなき花なり。よからぬ女の、一筋に貞女をたてるがごとし。

(一四)らにの花は、蝶の羽に薰物すと、先師の腸より捜し出し侍るこそ、其佳人の面影もなつ

(一二)土用は十八日を一期として一年に四度あり、八專は壬子の日より癸亥の日に至る十二日間にて一年に六度あり

(一三)やはらぎ、やさしみ

(一四)芭蕉、「蘭の香や蝶の翅にたきものす」

杜若は、のぶとき(九)花也。うつくしき女の盜して、恥をしらぬに似たり。

あやめは、小づくりなる女の、目を病める心地ぞする。

百合花は數品おほし。笹ゆり、博多ゆり、鬼百合、色は異なれども、元來一種にして、生得いやしき花なり。たとへば輿車にのれる位なければ、かゝへ(一〇)帶つよくからげあげ、上(一一)づりに脛たかく、あゆみ出たる女に似たり。

姬百合は、十二三ばかりなる娘の、後に帶うつくしく結びたるがごとし。

合歡の花のねぶげなるは、深閨の中に縫物をかゝへ、晝眠る女に似たり。過ぎにし夜半の、いかなる事かありて、かくはねぶりけん、いとおぼつかなし。

其下に晝顏の目を覺したるは、二十にちかき頃まで、男心をしらぬ女の、はじめて宮づかへに出たる頃の、よろづつきなきありさまならんか。

紫陽花の花は、色白に肥えふとりたるが、ちかくよりて見れば、白病瘡のあとのすき間もなくて、興さめてやみぬ。

(九)づぶといといふに同じ
(一〇)しごきの腰帶
(一一)衣服のつり上りたる也

ゞどいへる許りにて、さして命をかけてと思はざる類こそ、女の本意とはいふまじけれ。

長春、薔薇のたぐひは、紅白うつくしく、粧ひたるには似たれど、元來いやしき花の、殊にさかり久しきこそうたてけれ。たとへば惣嫁といへる辻君の、日のくるゝを待ち兼ね、世上に徘徊し、物心おぼえてより、其ながれをたてて、五十にちかき頃まで振袖を著し、始もなく終もなきこそうるさけれ。

牡丹は、寵愛時を得たる妾の、天下にはゞかれる、心なげに打ちほこり、常は嫉妬我執のいかりふかくして、青天にむかつて吐息をつきたる風情に似たり。

芍藥といふ花は、いまだ嫁せざる娘の、よはひも二八にあまりたるが、ねよげに見ゆる心地ぞする。

罌粟は、眉目容すぐれ、髪ながく、常は西施が鏡を愛して、粧臺に眠り、後世なゝどの事は、露ばかり心にかけぬ身の、一念のうらみによりて、ごそと剃りこぼして、尼になりたるこそ、肝つぶるゝわざなれ。

(七)四季咲の薔薇

(八)花散りたる後の罌粟坊主をいふ

（六）一式と同じくありたけの美服

海棠は、同じく時を得たる野郎の、大夫と仰がれ、勢ひもさかんに、世の中猛とのゝしれども、質素にしてうるほひ少し。誠に香のなき一色の、缺けたる心地こそ本意なけれ。

梨花は、本妻の傍に侍る妾のごとし。よろづ物おもひにうちしづみ、常に人の下にたてるがごとし。

椿は、たゞありの人の、本妻とむかへたるが、端手なる風俗をも似せず、ありがかりに家を治め、身を修めるをもととし侍れども、さすが女色なれば、うす化粧に紅粉をたえさぬ身持のよき花なり。

桃は、元來いやしき木ぶりにして、梅櫻の物好、風流なる氣色も見えず。たとへば下司の子の、俄に化粧し、一戚（六）を著飾りて出たるがごとし。爛漫と咲きみだれたる中にも、首筋小耳のあたりに、産毛のふかき所ありていやし。

藤は、執心のふかき花なり。いかなるうらみをか下に持ちけん、いとおぼつかなし。

山吹のきよげなる、眉目容すぐれ、鼻筋おしとほり、襟廻り綺麗に生れつき、たゞ透融るな

へていはゞ、吉野、高尾などいふべき遊君の、心おとなしく、名を恥ぢ、いき過ぎたる心より、相火(きうくわ)(二)の高ぶり、かたち痩(やせ)ぎすに涙もろく、きのふの我に飽(あ)きける心より、一たび著たる衣類調度など、ふたゝび目にもかけず、人に打ちくれ、金くれる男なれども、愚癡なるにはすりぬけ、請出さるゝ場所をはづして、はずんだる男(三)の一言に、百年の富貴をかへたり。借錢の利に利を重ね、やう〳〵盛も過ぎたる頃、生前の本望を遂げて、幽(かすか)なる住居に、朝夕の烟をたてても、猶物ずき風流の細みに富めり。子さへなくて、夏冬の寢覺もやすし。待つ事もなくて、世を靜にいとなみ、同穴のかたらひを、なせる人には似たり。

紅梅といふ花は、一度(ひとたび)彼岸參の心を動かし、未開紅(みかいこう)の光をはなちぬれども、やがて莟(つぼみ)くだけ、花ひらけてより、日々におとろへ、雨風を帶び、夕日にしらけて、つぼめる色を失ふ。たとへば三十過(みそぢ)ぎたる野郎の、大躍(おほをどり)(四)につらなり、心ならず風流をつくりたる心地ぞする。

櫻は全盛の傾城なり。天晴(あつはれ)當風(五)に打ちこみたる風俗、行末明日のたくはへの、一點もなき花なり。

(二)肝氣
(三)いきごみて熱中する男
(四)一座總出の踊
(五)當世風

(二五)命々鳥又共命鳥ともいふ一身二頭なりと雜寶藏經に見ゆ
(二六)寒苦鳥の事をいふ
(二七)孔子の弟子、能く鳥語を解すといふ
(二八)天狗をさす
(一)十月に至り陰極りて一陽初めて生ず

鳥ありて、聲は少しにごりたるやうに侍れど、啼く時はやゝ涼し。かの明々(二五)といふ鳥は、かしら二つにてはめるよし、むかへて我友となさば、米櫃の底をやはらはれんかし。世を便々といふ鳥ありて、春秋のさかひをしらず、遊ぶ所又常なし。しかれども巣つくらう鳥(二六)の、明けては忘れ、暮れてはかなしめる類にもあらず。たまたま啼く聲はありながら、公冶長(二七)が輩ならねば、知るものなし。（一説ニ夜遊テ朝寢ヲ好ム鳥也。其餌ハ、蕎麥白米ノ類。饅頭ハ嫌ナリ。）誠にしるものなからましかば、世にありて是も又詮なし。其形にたぐへたる隆鼻鳥(二八)は常に人の惡をたゞし、（愛宕高雄ノ山ニ在テ、杉ノ木ニ棲ル鳥ナリ。）迦陵頻は聲の美におほれたれば、我はしらず。かの蝙蝠といふものにしたがはんか。

百花譜　　許六

當世の人の花過ぎ、古人の實すぎたる、いづれの時か、花實兼備の世あらん。梅の風骨たる事、水陸草木の中に、似たる物はあらじ。十月一陽の氣(一)に、燦々たる江南の玉妃、まづえめるより、生涯を物ずきにくるしみ、風流のほそみに終る。是を色にたと

(二二)琉璃鳥

(二三)枕草紙をさす

(二四)世俗鴉は愛宕の神使烏は熊野の神使といへり

我友となさば、はしなき人にやあやしまれん。名を聞くより、其姿のおもはるゝ、鶺鴒の中は更也。琉璃(二二)といふ名は、世の人のきゝをもかざれるかな。

鶯の聲は滑にして、殊に住所もいやしからねば、是も美少年のたぐひにはあらめど、風情やゝおだやかならず。(二三)まして夜なかぬは、いぎたなしともいへりけり。

鳶烏の世をさみたる中にも、烏ばかり觜のいやしきものはあらじ。夕べには寐まどひ、朝にははやく起きて、前栽の木の實などにつきては、え思ひ捨てずや。いかなる時にか、息などもつまるやうに啼きて、いとどにくさげには侍るなり。それをも神(二四)のつかひのみならば、かゝる事いひもせまじ。

およそ鳥の觜のたひらぎたるものは、死水のあかを啜り、とがつて長きものは、魚を探り侍る。五穀をはめる鳥の、まどかにして細やかならぬは、誠に備はりたる事なるべし。觜のさきのかいまがりたるは、おのれが友をやぶるべきたくみにや、いとおそろし。

鳥にして鳥の名にあらざるものは、鶻鴣の一名を泥滑々といひ、倭國にも行々子といふ

(一九)楚襄王陽臺に神女と會せし故事
(二〇)翡翠鳴衣桁蜻蜓立釣絲
(二一)翡翠にかほよ鳥の名あり

でたしとさゞめかし、笹の葉打きせて、おくりもおくられもする人は、鳥よりは一しほもおとり侍らんか。鷹は羽の下に鳥をくみ敷きて、譽を人にも見られんと思ふは、せめて名の爲にもなさばなりぬべし。さらば此ふたつのものを、我友となさば、打おきたる心のいとまもなからん。

鵙はたちるにつれなくて、へつらはぬものなり。子など持ちたらばいかにかあらん。

鷺の風情はいとなまめかし。何がしの中將が、はつかに人を思ひそめて、雨にもそぼち、露にもしほたれて、常の心もさだかならねど、色には出じ、出じとこそしのぶなりけれ。されど田面にうかれ出て、田螺ふみまよふ比は、まさしくさるものの、たとへともおぼえずなり。

楚臺[一九]の夢は、一夜の枕に驚き、驪山の契は、萬里の雲を隔つ。朝の嵐に錦帳を動せば、李夫人が影も、ふたゝびはかをる事なし。しからば翡翠といふ鳥は、いかなる美人の魂にかあらん。杜子美[二〇]が衣桁に啼くといへるも、此鳥ならで外はあらじ。[二一]名にめでて是を

子法中、爲道士、以養其親」

（一八）張九齡、「宿昔青雲志、蹉跎白髮年」

に珍しう、さし籠めたる障子のかぎりは、もゆるばかり長閑なるに、物の影のさと過ぎて、またゝきもあへぬは、いかなる鳥にか侍らんと、いつも〳〵おもはるゝ也。蓋鳶などのゆるやかに舞ひありくも、隙を過ぐるほどなれば、あわたゞしきか。

軒の雀の晴を喜びて、何やら殊の外に囀る、是は市人にもたとへ侍らん。鷄は碁僧の風情にして、人の隙を窺ひありくものなり。家鴨もおなじ家にありて、おのれが身ををしともおもはずや。たゞに淤泥のけがれをもいとはずして、是を世の外に出て、物にもかかはらぬとおもふは、さばかり悟りたがへたる事は、世の人の上にもあるかし。そなへおきたる翅も、いつかは青雲の心ざしにあへらん。（一八）誠にあはれむべし。

世に人を葬る者ありて、常は顔など見合すべきにもあらねど、なすべきわざあれば、呼びて酒のませ、價をもやりつ。しかるに鷄といふものは、詮なき鳥なるべし。早川に魚などかづきあげたる、己れならずとも、網しても得つべし。さるものならば、わきまへぬ事もあるべきに、人の手にかはれて、追ひはみたる魚をも、白地に吐せて、それをめ

しがらせんとす。なべて卯の花の曇は、いとねぶげなるに、夕日の影も木の間にちり殘りて、山には思ひかけぬ鳩も啼く也。啼く處のさだかに知れねば、是もいと淋し。此ものは偏(ひとへ)に雨の日を悲しめるとかや。百花の深き所ならば、終日(一五)ぬるともいとはざらまし。梟(ふくろふ)の晝出でて、まよひありきぬるいとをかし。かならず笑はれじと、はたらきたる顔にもあらず、さるたぐひの老僧にや、むかしも市中にあそびゐける也。

深草に住むなる鶉は、其聲すみやかにして、世をはゞからず。山にもちかく、水にも遠からず、粟の穂の靜なる時は、こゝにも出でてあそぶなるべし。

啄木鳥(けらつゝき)の飢(うゑ)をしのびかねて、木にそひ、梢をたゝきあるきて、終日(ひねもす)しづかならぬこそ、はかなきわざなれ。かぎりなき生涯の、いとなみとならば、誰も〴〵あさましき事おほかるべし。されば空山の日影に、霜たばしりて、楢(なら)の柏(かしは)(一六)もちり〴〵に吹かれ行く比は、此鳥の聲の更に幽(かすか)にして、いざや、張道士(一七)が家を、とぶらふも人に似たれ。

木がらしの夜一夜吹きあかして、しのゝめには吹かずなりぬるを、さし出づる朝日の、殊

(一五)拾遺、「櫻狩雨はふりきぬ同じくばぬるとも花の陰にくかれん」

(一六)柏は梢の衍なるべし

(一七)韓昌黎送張道士序、「張道士嵩高之有道者、通古今學、在文武長才寄跡老

（一〇）鄭谷、「雨昏青草湖邊過、花落黃陵廟裏啼、遊子乍聞征袖濕・佳人纔唱翠眉低」

（一一）貫之、「思ひかね妹がりゆけば冬の夜の川風さむみ千鳥なくなり」

（一二）生鳥を捕らず只牛馬の糞をつかみて食とするより此名あり

（一三）半道心の意、生鳥を捕らざるのみ道心あらげなれば也

（一四）芭蕉、「憂き我を淋しがらせよ閑古鳥」

つゞけぬるより、孤村に出て夕陽を啼き盡せば、誰が家にか今宵もおくるらんと、あぢなき事もおもはるゝなり。

鷓鴣とは名のかしこきもの也。青草の暮の雨には、遊子の魂をおどろかし、黃陵の曉の雲には、旅人の涙を催す。すべて夜啼く（一〇）ものは悲しきに、水鷄は隱逸の風情を得たり。星月夜のおぼつかなき比は、磯のちどりのおほくあつまりゐて啼くは、心もきゆべくてかなし。たゞ人の別墅なる所に、水の湛もいと淺くて、晝は來馴れてあそぶらん。戸などかいやりたる音に驚きて、忽ち二三聲のすみ行くは、其あとも遙に見送られて、河風寒（一一）しと思ひ出たるは、またるゝ人もなくて、何にかはせん。

鴫はましてたつ時のあはれなるに、馬糞（一二）といふ鷹の、風にひるがへりたる、なまうかびにていとにくし。彼の澤の夕暮は、江山の風情をそなへたれば、もろこしの雲夢（一三）ときこえし澤は、いかなる澤にかあらん。

白鷗は人をさけて、おのれ靜なるものなり。しかるを諫鼓鳥の、おのれ啼て、人をさび

（七）江天の衍なるべし

（八）蔡相確新州に貶せられし時鸚鵡と侍妾琵琶とを随ふ琵琶は死したるも鸚鵡は猶其名を呼べり蔡相確詩あり「鸚鵡言猶在、琵琶事已非、傷心瘴江水、同渡不同歸」

（九）山家集、「山を分け花を尋ねて日は暮れぬ宿かし鳥の聲も霞みて」

めて托物の聲ならくのみ。

秋の鴈の江夫（七）におくれ、時鳥の曉の雲にさけぶ、いづれにかさだめ侍らん。鴈はあはれに、ほとゝぎすは悲し。

鸚鵡は恩をわすれぬよし。此國にはまれ〳〵なれば、よくも知らず。むかし蔡君（八）が鸚鵡は、琵琶が身まかりし跡の名を呼びつたへしに、心をいたましむ瘴江のほとり、おなじくあそべどもおなじくかへらずといへる、配所の詩ならばさもあるべし。我國の鳥も、物はえいはずして、萬里の別をしたひ行きけるとかや。○扶桑十勇志八有飼鳥渡海慕主君之故事 是さへおもひかけぬ事なるべし。

燕もゆかりはわすれぬ鳥也。終日にひるがへり、終日に囀りて、餌にはかならず身をつくさずや。いはゞ江湖の僧の、一夜二夜にちぎり捨てゝ、身を雲水にまかせたるが、年を經て後は、見しらぬ人もおほかる。されば行脚の身の、人にもおくられ、おのれもおくりたらんに、涙のこぼるゝは、いかなる時にかあらん。かの法師の、宿かし鳥（九）とよみ

（三）拾遺、「咲く花に思ひつくみのあぢきなさ身にいたづきの入るも知らずて」

（四）古今、「鶯の笠にぬふてふ梅の花折りてかざさんおいかくるやと」

（五）かいつれての術か

（六）提壺といふ鳥は沽美酒となき布穀は脫却布袴と鳴くといふ

は、其實をはめる時の名なるべし。しかるを鶫といふ鳥の、（三）花におきふしたらん、いと心得ね。木々の花の咲きこほれで、明ぼのの雪にもまがへる時は、駒鳥の聲のみ、ひやゝかにしていとよし。されば此鳥の名は、聲のたぐひをいへるならん。おのれがかたちを、名になせるものは、目白頰白のたぐひなるに、[illegible]は殊にをかし。年々菊をいたゞきける、自然の理はあやまたねど、ことしは珍しう、（四）梅花をもかざせよかし。

雲雀は終日に啼き暮して、はては空にもふすにかあらん。此ものは小春の空をよくおぼえて、鳥羽の田づらなどに、ふと啼き出でたるに、（五）かいつけて囀る鳥もなければ、あはれさびしきものかなと、おもふ時もある也。

三光は、啼く時に月日星といふなるよし、むつかしとも思はめや。佛法僧と啼く鳥ありて、高野の山にのみ住むなる、是をも三寶とこそいはめ。しかるに鶯の、法華經と唱ふる、さるは世さらに老めきたるわざ也。（六）提壺の美酒をかひ、布穀の袴をぬげよといふは、皆おのれがゆゑならねど、世の人のしからしむるものなるか。蜀魄の不如歸と啼くは、きは

然見南山」の句を評して陶淵明早會見性成佛之理、然則第一達磨云々といへり

(二)荘子逍遙遊の故事

へるものは、鶴に淵明が風流ある事をしらず。されば野草の花の、あきらかにひらきぬる時、柴門の月のあらたにすめる夜ならん、此ものひとりは見まくおもふ也。しかるを鳶の無能にして、衣裳もおろそかに侍るは、まして風雨にもいとはじとならん。かの荘周が夢に、胡蝶とあそべる、是もむつかしとやはおもふ。

雉子の啼く聲はいとかしこきに、百矢の数をのがれずやあらんといはれて、一朝にたまの命を落しぬるは、是も韓信が輩の、文武をつくさゞるものなるべし。

蒼鷹の人を見こなして、眼の内に、あらゝかなる才智をそなへたる、いとにくし。されど一藝に名あるものは、世の人それをゆるしもしつべし。

かの斥鷃(二)が蓬生の宿は、膝をいるゝに過ぎねば、大鵬の雲の萬里をうらやまず。さらばおのれをたのしむのみにして、かならずうらやむ方にもあらず、彼鳳凰といふ鳥は、いかなる鳥にかあらん。

稲負鳥、呼子鳥とかや。はこ鳥は春に住むなるよし、なかぬ物にやしらず。椋と樫との二鳥

かよらん、歸りて是を見ざらんや。たましひとく歸りきたれ。むかし俳諧に、詩歌の信ありといはれて、鶯の花に鳴き、蛙の水にすめるたぐひ、いづれか信なからんと、俗は是をもて世をいとなみ、僧は是をもて後世をたのまんとせしに、中比はいかいは信あらずとふみやぶられて、信ある人は、このまことなしと誹り、僞ある人は、このいつはりなしとよろこぶ。そも叉炭俵、後猿簑の變なるべし。今や俳諧は、信あらざるにもあらずといはんに、世に指をたふすもの、終にいくばくもあらず。其あらずといふもの、こゝにあらざらんや。此日の魂すみやかに歸り來れ。かへらば吾翁にせん、魂誠にかへり來れ、魂誠に歸り來れ。

○譜類

百鳥譜　支考

鶴は仙家のもの也、是がみさをは人にちかゝらず。昔し陶淵明に、(一)達磨の風骨ありとい

(一)韻語陽秋に「採菊東籬下、悠

（五）芭蕉、「辛崎の松は花より朧にて」
（六）新續古今、「近江路や、まのの濱邊に駒とめて比良の高根の雪を見るかな」
（七）芭蕉、「病雁の夜寒におちて旅寢かな」

（七）圖司呂丸は出羽羽黑山下の人、翁にさきだちて没す
（八）岐阜

ちりて、志賀の古びぞ年々なりける。かの辛崎（五）の松の孤のみ、花の朧のちぎりやはわすれん。殊にあはれむべき比良の高根は、入江（六）の駒とむべき人こそなけれ。むかし（七）堅田の、秋の夜寒に落ちては、病雁の旅ねに、其身を侘びしが、其後のたよりは聞かずなりぬ。さるは水ぐきの岡の、名のみとむらん、鏡山の面影も、今宵は待つ人あるにぞありける。松風の音羽山とかや、こなたの岡はまそばの花も咲きたり。世に逢坂の關はあれど、粟津の原のあはでや歸らん、魂こゝに歸り來れ。世にいふ天堂は、人の心あまし。さるは風月の情過ぎたらん。地獄はたゞおろそかに、まして風雅のいとまもなからん。されば彌陀ほとけのねぶりて、いとたふとげにおはせど、左右の御手の置處なからんに、地藏ぼさつは色のみ白うして、梅の花の寒き所こそおはさね、焰王宮の人々も、たゞ世の人の是非のみ見んとすらん。そも打解けたる心もあるまじ。しかるに杜國嵐蘭がともがら、圖司（七）何がし、岐山（八）の落梧までに、明暮の心隔つまじけれど、十とせ餘りの風雅の變におくれたれば、それも心ゆかぬ所ありて、相手にはいととぼしからんよ。然らばたましひ誰に

十日あまり、湖南の舊草に、門人あそんでたましひを待つ。またばなどか歸り來ざらん、たましひそれ歸り來れ。柴門に春の花ちれば、鳥驚きて別をうらむ、蓬窓に秋の月落つれば、人荒て(一)住まずなりぬ。さればすみれ草の住みよき世の中に、何に卯の花の垣ねとはよみけん。時鳥の行方なからんにも、春の雁の終にかへらずやあらん。しからばたましひいづこに行くとしてか、還るに道なからん、還り來れ〳〵。王孫むかしは草とおひぬ、蘼蕪(二)の香今や衣にみつらん。まして花薄の穗に出でよ、まねかばなどかへらざらん、魂すみやかに還り來れ。東花坊は、此日のあるじまうけせむに、かの蕎麥切は、宇津の山道の細き手際にはあらねど、むかしの心わすれざればなり。豆腐は夜寒の都ぢかく、蒟蒻は黑津の里の名にしあへり、いかで世の人の風味にあまからんや。琥珀の霜(三)をふるは、果やゝかうばしく、瑪瑙(四)の氷をふくめるは、酒更にみどり也、香花なほさばかりならんや、魂まづ歸り來れ、たましひ何にかあかざらん。さゝ波や、打出の濱のむかしおほゆらん、水渺々となかれて、山更に長し。長等の山の山櫻も、たゞ春のあだなる物に咲き

(一)人すさみてと讀むべきか
(二)當歸をいふ　唐孟遲、「蘼蕪亦是王孫草、莫送春香入客衣」
(三)羅念菴、「秋後經霜熟、朝來帶雨香」
(四)杜甫、「春酒杯濃琥珀薄、氷漿盌碧瑪瑙寒」

（八）酸、苦、甘、辛、鹹

（九）會津蠟燭は名產也

（一〇）地租

（一一）番人、木守

つ事もなくて明しくらすこそ、まことの閑居とはいふべけれ。今の閑居めくものを見るに、食には八珍を盡し、酒には五味（八）をたしむ。摺板の障子には、四季の花鳥を彩り、皮付の柱には、樟ふくらの名木を求む。額には花紺青の文字を彫め、軸にはきれ人形の箔を光らす。窪き所には水を湛へ、高き所に亭を築く。琴三味線の夕、小歌淨瑠璃の曉、隣家の眠を覺し、行人の足をとゞむ。粉白く黛翠なるもの屋をつらね、帶廣く袖長きたぐひ廊をめぐる。牡丹芍藥に數金を盡し、蘇鐵海石に財をつひやす。伽羅は交趾をくべて蚊ふすとし、燭は會津（九）をたてゝ、月の光を奪ふ。或は地黄枸杞子を植ゑて、地子（一〇）をつぐのひ、又は瓜茄子を作りて、八百の店に出す。夕顏の借屋に、隣の生業を語らせ、柑類の菓（一一）堀には、錢の算用を聞く。これらの閑居も彼の淸貧の閑居と名を同じうせんや。聖人いへる事あり、小人閑居して不善をなすとは、此閑居の見通しなるべし。

招魂賦　　支考

西方に吾翁の魂あり。行ていづこにか歸らざらん。たましひ速に歸り來れ。ことし神無月

居ながら、風雅の友の入り亂れ、賓主寄居虫の家をわすれて、例の夜鷹の寄合よと、はやされてたのしむのみ。

閑居賦　　汶村

（一）廬山の雨の夜に月をしたひ、たれこめて（二）春の行くへしらぬ住居もあるに、よしや吉野の奥は住みうくとも、うき世の嵯峨のさがなきよりは、中々すみまさりけめ。栗栖野（三）のおくの、菊紅葉の閼伽棚も、柑子の垣に見おとされ、宇治山の隱家には、梅柳の風流を爲れど、人喰犬にさめたり。花は一もとのさびしきをうらやみ、水はとく〳〵（四）の雫をしたふ。秋は東籬の下をめぐつて、沓（五）の底をきらし、冬（六）は西嶺のさむきを望みて、笠の重きをわする。茶粥糂汰の輕みに、五臓を沙羅し、紙子背身のさびしき音に、千石をかへたり。詩は三籟（七）の趣を悟り、歌は山家の風を好む。手桶一つ、鍋二つ、疊三疊、米四五升、手鼎の拍子を覺えて、紙のたくはへを忘れ、自剃の自由を得て、耳の危きをのがる。壁一重に市聲の喧しきを隔て、簾一枚に車馬の埃を避けたり。世を捨て、世に捨てらるゝ類、ま

（一）白氏文集十七、「蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」
（二）古今、「たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり」
（三）つれ〴〵草の故事
（四）西行、「淺くともよしや又汲む人もあらん我に事足る山の井の水」
（五）芭蕉、「菊の香や庭にきれたる沓の底」
（六）詩人玉屑、「笠重呉天雪、鞋香楚地花」
（七）莊子に、天籟、地籟、人籟をいへり

(四)小豆芋牛蒡豆腐などを味噌煮にしたるものおひ〳〵煮る(甥々似)の意より此名あり
(五)芋茎と小豆と共に煮たるもの疫病を拂うて死せずといふ
(六)こきりこ

(一)月令、「鳩化爲鷹」
(二)童謡、「出々虫々々角出せ槍出せ出さねば釜わらう」

竹にからめき、張鼓の糸につながるゝも、かれが中の一つの遊なり。嫌となれば大きに嫌ひ、好に逢ひぬればおほきにすく。かゝる堪能を持ちながら、頓の料理に煮えかぬるは、いかなる小豆殿の御分別かおはしけん。

四梅盧賦

僧　李　由

恙を怖れたる時は、窩に住居し、氷の雨の用心とて、岩窟の所々に殘りたる世もあるに、廂に孫庇をおろし、下側にしころをつけて、民の竈の賑ひけるこそめでたけれ。堅田の蜑の舟に年を重ね、乞食は橋の下に子を産むたぐひ、鶯の巣のやさしく、烏の巣のふつつかなる、皆おのれ〳〵が生得なり。ことしの秋、予ひとつの巣を營む。燕の土をはこび、蟻の塔をくみて、四根の梅をたより、頰白の家をかゆるたぐひにはあらで、病鷄が塒に憑む、鳳凰の威をふるはんよりは、凡鳥の嘲りなからん事を喜ぶ。山鳩(一)が逸物の鷹と吹き上げらるゝも心ぐるしく、たゞ一日の閑鷗とおぼえて眠る。蝸牛(二)の釜打破らんとせがまれては、又出て蚰蜒の部とのらめく。蚫の貝の半造作、榮螺の蓋の戸もつらぬ住

古往の人、旅懐の情を盡して、風雅の腸をさらす。能因は白川の歌をよみて、二たびみ（一二）ちのくにおもむき、不二（一三）都鳥の二句を求めて、すみやかに故郷に歸る者は、貞室老人なり。東海道の一すぢもしらぬ人の、風雅におぼつかなしといはれし、翁の聲耳の底にとどまる。

揚揮豆賦

毛紈

赤小豆殿の能には、一に俵に納り、二につとあかうて、是よりあかのと仇名を取る。初春の粥には疫をのぞき、卯月の空の牡丹餅、うるはしき名目を略して、今様のいき過は、ほた〳〵とのみいひならはし、歌よむ人は、秋の夕のあはれなる名を好みて、萩の花とめされてより、誹諧の人は、（一）隣しらずともよむなり。饅頭の唐韻めく時は、アンとよばれ、學のつよき物識のこびる時は、赤飯ともいふ也。深更とは理屈人の名づけたる名にして、あかつきと解く謎なるべし。（二）蕪蔞亭に君臣の義を盡し、（三）七歩の詩は兄弟の情を述ぶ。（四）從兄弟煮、（五）不死汁の名は、いづれの御時にはじまりたる由緒をしらず。又（六）あや折の

（一二）袋草子に二度下向の由あり云々

（一三）「跡の月はみ吉野の雲や不二の雪」「いざのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥」

（一）萩の餅は搗く音せねば隣人も之を知らずとの意

（二）後漢の光武帝薊東より饒陽蕪蔞亭に至りし時天寒く衆皆飢え疲れたりしに馮異豆粥を上りしかば帝大に悦びたりき

（三）曹植は魏の文帝の同母弟なり文帝之に七歩の間に詩を作らしめ成らざれば刑せんといふ曹植聲に應じて「煮豆持作羹、漉鼓以爲汁、萁在釜底然、豆在釜中泣、本是生同根、相煮何太急」と詠ぜり

とぶく月日を、出替の季と定めけるは、世をやすうおくる人にも似たり。

出女も出かはり顔や年の暮

流浪漂泊の上にこそ、あはれなるためしはおほけれ。獨坊主には宿をかし兼ね、同じ所に二夜はとめず。五月雨の朝、雯の夕暮に、情ふかきあるじは、長持くさき布子かして、ぬれたる物を焼火にあぶる。あるは三寶荒神(一〇)といふ物にしがみ付て、しばらく足を休むれど、極めの札場より追ひおろされて、却てのらぬ前より股をすくめ、兩方の手に杖を携へて、あゆむべしとも見えず。人間病死の到來は、時も所もまたず。醫療のたすけうとく、懐中のふり藥は、やう〳〵急病を防ぐ。巡禮飛脚の族は路頭に倒れ臥し、片目なる肝煎に追ひたてられ、老僧の愍みにて門下に入り、おとろへかさなり、終に黄泉の下に赴く。かねて何國の土とならん、終をしらず。犬走(一一)の土中にこめて、年の齡、衣類の模様を小札にしるされて、何國のいかなる人と、いふ名もしらずなり行く也。岡部の辻堂の笠に、經文をよみて、同行の別を惜み、隅田川の念佛を尋ねて、我子の古墳にのぼる。今來

(一〇)馬に乘るに用ふるやぐらの類

(一一)垣と溝との間の狹き空地

たるは、見付の臺也。卵子の煮ぬきは、木曾の旅、はな紙は竹にはさみ、錢の看板は筒をかけたり。(八)蒟蒻の田樂は、何ものゝ喰ひけるぞ。

乘りかけに春の蜜柑やうつの山

舟川の上、馬駕籠の情、しば〳〵かぞへがたし。五月の大水も、かり借の手形に出入り、おのが草の戸は流るれど、首だけの借錢を納して、しばらく息をつぐものは、島田金谷の(九)賊なり。水の淺深を何文川とこたへたるは、大きなる洒落也。天龍の中の瀬は、馬人足を空にまどふ。乘る人は股だけ入りて、荷を肩にかけて待ち、あがるものは、負れ支度して舟端に立つ。旦那が鑓をかたねたるは、渡し場の情也。馬士駕籠舁は、輕重に日月を送り、一盃の酒に、浩然の氣をやしなふ。一生を漂々飄々とすまして、雲介の號を蒙り、炎暑の日も、立冬のあしたも、榎の木の下に眠りて、蟻の都に到る。終に飲喰を座敷につかず。汁かけて出す馬士の食と作られ、小便ははしりながら、吸ひがらは手の裏にはたき、錢は耳の穴に納め、金は犢鼻褌に結ぶ。一とせの名殘も暮れて、世にある人々のこ

(八)遠州濱松

(九)旅人の金を貪るより賊といへり

（七）事は字の衍か

行灯はくらく、紙はわらんべの心といふ事（七）に燃えたり。錢賣、草鞋賣にせがまれ、ややうに枕をかたぶけ、心よき寐入ばなは、馬さしの聲に夢を破る。出立は七つといひふくめたるに、旅人も亭主もよく寐て、夜のあけてふためくつらもにくし。

大名の寐間にもねたる寒さ哉

道づれの上をいはゞ、船頭の胸づくしをとり、駕籠廻しをたゝき、馬さしとつかみ合ひ、一僕の跡にさがるをねめまはし、鷄のなかぬに、つれの男を起し、挑灯とぼして、夜道を行くを手柄とし、入湯の一番に入りたがるは何の爲ぞや。つはの枯葉に雨のはら〱といふ前に、

世話やきの友にあきたる旅の宿

といふ句も、此情にかなへり。

海道の賣物に、餅酒のなき所もなし。磨針峠の餅をくはねば、未來焔王の前にて、からきめを見るといへり。寒天にも冷素麵をすゝむるは、逢坂の茶屋、饅頭のほか〱と見え

ほひすら、本意を遂ぐる事は、猶きこえざりけり。

旅賦 并引　許六

旅は風雅の花、風雅は過客の魂、西行宗祇の見残しは、皆誹諧の情なり。我翁白川の(一)田植歌を聞初め、奥羽の間をめぐり、高館の夏草に、兵共が夢を驚かし、あつみ山の(二)夕涼には、吹浦を詠め、佐渡に横たふ天の川に、(三)初秋の袂をしぼる。それより蛤の二(四)見を渡りて、七百三十餘程を吟ず。曾良が落髪の力量を感じて、(五)一鉢の飯を分けて、風流を盡さる。ひとひ芭蕉庵をたゝき、繪の雜談に及ぶ時、予に旅十體の繪をかゝせて、讃じて何某が求めに應ず。其風雅にたより、俗語をあつめ、狂賦五段となす。あなかしこ奥の細道、草枕の類にはあらず。

旅店のさま、上段に書院床、劒菱のすかし、火のなき火燵にやぐらかけて、門口の入湯桶、かたぶけて居ゑたり。底に小砂のさはるは、夜べの殘りもいぶかし。出女のたて島は、(六)春秋をしらず、根太板敷は落ちて、隅々まで疊とゞかず、天井襖は、雨もりにきはづき、鐵

(一)芭蕉、「風流のはじめや奥の田植歌」
(二)「あつみ山や吹浦かけて夕涼」
(三)「荒海や佐渡に横たふ天の川」
(四)「蛤の二見に別れゆく秋ぞ」
(五)曾良剃髪して、「剃捨てゝ黒髪山に衣更」と吟ぜしを芭蕉衣更の二字力ありて聞ゆと賞せり
(六)出女は竪縞の衣を著る風習なり

きを、焼鼠となりて、狐狸の命とらんこそ、あさましく罪ふかけれ。(ヒ)つくぐ＼汝が尊きを思へ。日よみの初に呼れて、位司いやしからず、(ス)百敷のかしこきも、甲子をむかへて、年の號あらため給ふぞかし。(シ)あら玉の春立ちかへれば、子の日の御賀あり。(リ)子祭といへるは、いづれの長者の傳へなる。(ル)からの日本の歌にもよめり。(リ)海原や、もしほの陰に友なふなまこは、海鼠とかゝれ、(ヒ)秋風の尾花が末に妻こふ鶉は、田鼠の化したる也。(リ)烏羽玉の闇き夜は、いかづちともなれり。(リ)象といへる(八)獸すら、かつ恐懼れぬる。(ル)麝香鼠は筑紫に住みなれて、こと國に行かず、(ス)かづき姿のわかやかなるは、嫁入の繪虚事にぞ、(ソ)どこの乙子を七郎とは申す、(ス)新左衛門とつけるは、さかやきすりての後なるべし。(シ)大ねら小ねら、(ラ)將二十日鼠と名のり、(リ)(九)月々十二の子をうむ。(ム)誰が家にかとりつくし得む。(ム)もし白子出て、福の神にや愛せられむ。(ム)汝が隱里いづくのほとりぞや。(ヤ)武藏野の鼠穴にや、(ヒ)出羽の境の鼠が關なるか、(カ)信濃の奥の鼠宿なるか、(カ)目出度身をもて、かり初の世をむさぼる、(ル)などか歸らん事をおもはざる。(ル)窮鼠かへりて猫を嚙むの志ありとも、三井の(十)賴豪が、千疋のいき

(八)五雜俎、「虎畏火、象畏鼠」

(九)童謠に、「京都鼠をとらまへて月代そつて髮ゆつて云々」とあり

(十)賴豪三井寺に戒壇をたてんことを請ひ許されざりしより鼠となりて延暦寺の經卷を嚙みし事盛衰記に見ゆ

らに疵持ちけらし。油をのむ事、世の酒にひとしけれど、いつしか沈醉を見ず、粟を蠹し、器をそこなふは、殊更にいはじ、大棗をかむ牙にふるれば、病を生ず。恥しき文をちらして、男女の中をもさまたげ、あやしき巣をつくりて、(一)源平の亂をきく。何をへつらひて、(二)佞人のためしに引出られ、いかにすゝめてか、(三)書を焚く代の宰相となしぬる。神佛のたふときも、尿糞に汚したてまつる。草の根をはむ月の鼠は、(四)俊成ノ卿のうらみなりけり。つく〴〵汝が危きを思へ。それ人の賢しきや、萬木龍をまき、吹矢を備け、黐をぬりて、往來もたやすからず。けはしき城をたのむとも、鼬を防ぐ手段はあらじ。杳なる空をながめては、鳶のつかまん愁わするべからず。桁走り、障子のぼり、早業得たりがほなるも、おもはず舛にかゝりて、いかばかりの思ひをすらむ。曬死仕て仕合に、(五)東坡が袋を逃げたりとも、生捕れてなまなか、(六)張湯が文をうけなむ。或は鈴を頸にさげて、兒童の戯となり、あるひは筆の用に髭をぬかれて、老の悔を殘せり。あやまりて書鼠とあなづられ、濡鼠と笑はれ、(七)更に吹鼠とくるしみて、人の爲にぞ悦ばれぬる。我さへかなし

(一)馬の尾に鼠巣くひ子生みし事盛衰記二十六にあり

(二)城狐社鼠

(三)李斯が厠中の鼠と倉中の鼠とを見て志を立てし事其傳に見ゆ

(四)俊賴の誤なるべし、「我たのむ草の根をはむ鼠ぞと思へば月のうらめしきかな」

(五)東坡黠鼠賦「聲有槖中、視之無有、發燭而索、中有死鼠、覆而出之、墮地而走」

(六)漢書張湯傳に張湯幼き時鼠を捕へて磔し之が宣告文を作りし事あり

(七)吹矢にて射られしものをいふ

風俗文選卷之三

○賦類　附譜

鼠賦　并引

去來

此賦以二五音相通假名字一爲レ韻ト

鼠、一つの名はよめが君、又よめともよめり。其たね品あり。四尺の鼠は圖はづれにして、大なるは五六寸、ちひさきは寸にみたず。山椒の眼、小豆の鼻、齒は絲をつけて小袖も縫ふべく、耳は木の芽のめだつに似たり。尾をきつて錐のさやとなさばなしてん。背腹の色にめでて、うすくも濃くも染出せり。其行くや、夜出て晝隱る。常にぬすみをもて身を養ふ。まことに憎むべきものの一つなり。乃賦を作りて曰く、

二月鼠の穴を塞ぐ、つくぐ〵汝がいたづらをおもへ。家に居て人をおそるゝは、足のう

りおもへらん人もあるべしと、あらぬ心さへ取りそへられてかなし。見渡したる人々の、おのが國びいきに、物くらべしあそばんにも、難波の浦の、あしさまにはいはぬをと、ひたすらにあまの子の、あさましとのみ思ひあなづりて、都の商人も、手袋(一)ひきたるためしおほしとかや。かゝる事などはいひいたるべき年のほどにあらぬを、西花坊(二)に、此ながめの賦つくりたりとほのめかされて、終に後の賦のぬしとはなり侍りける。

いなづまやどの傾城とかりまくら

(一)俗にいふ手を燒く意か
(二)支考の一號

（一一）新古今、「野邊ごとに音づれ渡る秋風をあだにも靡く花薄かな」
（一二）古今、「女郎花うしと見つゝぞ行き過ぐる男山にし立てりと思へば」

ときめきせられて、（一一）花ずすきのなびき合ひたる野邊は、（一二）男山もあだに立てりと見ゆらんかし。さるは浮草の世にうかれて、身をあだなりと見る人は、浦の見るめも、いかにあだならん。今さしあたりたる物思ひはなけれど、左右の翠簾ごしにのぞかれて、顔のおき所なからんこそ、うたておもはるれ。禿といふものの、何心なくて、茶漬喰ひたしと思へる、雀の花見顔にもたとへ侍らん。おひさきいかなるあだ人にか馴れて、物思ふ事もならひてんと、これさへあはれにおぼえられける。

草花の名に旅ねせん禿ども

後鷹山賦　　去來

十月八日は、たふときちかひありて、ちかき山寺に佛をがまんとて、こゝの遊女共の、月まうでするなり。唐土舟も入りつどふ湊なれば、浦人の氣色さへうちさわぎて、秋風の折にふれては、葛の葉のうらみがほに、磯部の雁の大空に吹きなされて、そゞろに人を思ひ驚くならん。それが中にも、はかなき世をちぎり、諸共に苫の下になどと、一すぢに祈

（二七）新古今、「花さそふ比良の山風吹きにけり漕ぎゆく舟の跡みゆるまで」
（二八）山科月波和尚
（二九）毎年十一月一日禁中に獻ず
（三〇）在士八幡の社前の藤は藤堂家の祖先此村に居りしより此花を祝ふとぞ
（三一）景行天皇の時栗の大木ありしといふ
（三二）大木にて花は櫻に似たりとぞ
（一）此日觀音に參詣すれば二萬五千日の參詣に匹敵すといふ

マセ風、ナガセ風。サキ風は春夏の名にして、秋冬は日あらしなり。根わたしは湖上の風の名にして、宮内卿（二七）は漕ぎ行く舟をながめ、臥佛老人（二八）は、路縱横と吟ず。眞野の鶉に袖をぬらし、山吹の崎にはこ鳥を聞く。萬木の鷺、老曾の時鳥、鶴、白鳥、衡、水鷄。鹿は玉川に啼て、百足は三上山をまくとかや。（二九）王の濱の郁子を獻じては、新米の供御を備へ、在士（三〇）の藤咲ては、藤堂家に花を捧ぐ。栗本（三一）の栗の木は、神代の沙汰にして、花澤（三二）の花の木は、今も咲くなり。龍灯松は巳待の夜毎に光をあけ、大藪の雨夜には、星鬼の火を簑にうつす。抑も江州八十餘萬石、皆此水にやしなはれて、年々の貢を備へ、大嘗會の稻穗を奉るも、たゞ此湖の潤ひなるべし。

前鷹山賦　　　支考

鷹山者丸山也。在肥長崎歌舞之地也。

七月十日、けふは二萬（一）五千日の功德とかや。殊に女心の頼みおける物詣の日なるべし。此津の遊女どもの、人も見、人にも見られんと、よそほひたちたるに、ゆきさの追風に、心

(二一四)大網は引網、巻網は打網

(二一五)一艘の舟にて網を引き一艘の舟は竹にて魚を網の中へ追ひこむしかけ

(二一六)二月廿四日比良大明神の社に法華八講あり此日湖上暴風多し諺に「比良の八講荒れ日和」といへり

清濁をわかちて、うらの言葉をつかふ。桑によろしく、又茶に宜し。世に川魚といへる物は、湖魚の事なり。汐ならぬ海士のいとなみもをかしけれ。大網、(二一四)巻網、四手、跡懸、手丸、唐網、魞、簗、カリ〳〵、(二一五)竹瓶、あさりいさりのあはれもふかゝるべし。鯉、鮒は總名にして、鯉の品類、鮒のたぐひ、其名かぞふにいとまなからん。春は山吹の子をいだき、秋は鱗に紅葉をちらす。江鮭、鱒の名を變じ、鰣、鱵の味をわかつ。取りよき物は鮇と名づけ、鯰は王城五十里を去らずとかや。勢田鰻、和爾鯵、氷魚は近江に限る。内膳式云、田上ニ取迯シタルヲ、宇治ニテ取、九月ヨリ十二月マデ供レ之氷魚ヲ捕モノヲ、網代ト云ナリ。不賀比、鯖ノフト、鮎ノカト、鯉ノヒヲ合テ、其形トスル魚也。鮎、小鮎、鮠、鯽、水鮭子、山水鮭、ギギ、鰌、蟹、小鰕、蜷、蜆、胴亀、石亀のたぐひ。獺は魚を祭り、川太郎は相撲を好く。船は大津百艘と稱す。八十の湊、津々浦々、大丸子、小丸子、小ばや、川御座は大名船、高瀬、傳馬は川舟なり。段平に大石を積み、艜は耕作のたすけ也。〆進ニ肥付馬ニ不レ入ニ舟數ニ。棚なし小舟、堅田舟。比良の八講は、(二一六)舟人湖上の風をおそれ、論義とは、風の定まらぬをいふ。トイテとは、日和風、ハヤテとは、雨をさそふ、勢田嵐、伊吹風、ヤ

發菩提心」と唱へたり

(一九)杜甫、「窓含西嶺千秋雪、門泊東呉萬里船」

(二〇)明智左馬助此城に入り光秀の子女を刺殺し城を燒きて自刃す

(二一)壽永三年義仲追討の時稻毛三郎重成の謀にて此瀬を渡す

(二二)政宗の弟子彦四郎貞宗

(二三)明應九年八月近衛政家公父子佐々木高賴の招待によりて江州に來り八景の詠あり

とゞむ。野寺の鐘、練貫の水、松尾寺の本堂は、飛驒の匠が建てゝ、千年の星霜をかさね、瓦屋寺は、太子、天王寺の瓦をつくらせて、其殘り此地に埋て今もあり。東西本願寺の御坊、院家一家の寺々、淸涼寺、龍潭寺は、禪の道場、窓には千嶺の雪を含み、門には萬里の舟をとゞむ。(一九)菅山寺は世に菅の寺といふ。菅家の遺愛寺也。安土山摠見寺は、信長の城跡、日本天守の始り、七重の甍を聳かす。廣間の名額、此寺に殘る。觀音寺は、佐佐木の城山、すなはち觀音城也。今濱の城は、太閤秀吉の城の持ち初め、坂本の城は、明智(二〇)光秀が終りをとれり。俵藤太のながれは、蒲生家に殘り、六角、京極は、佐々木のわかれなり。稻毛(二一)三郎は、供御の瀬を知つて、多勢を渡し、賤ヶ嶽の七本槍は、後代に名を擧げたり。木の匠の豐後は、甲良の庄より出で、道を坂東に傳へ、鍛冶の貞宗(二二)は、高木より出て、名を鎌倉に揚げたり。猿丸、黒主の舊跡をとゞめ、僧元政、季吟翁、皆此國の産也。すべて歌名所一百餘ヶ所、猶撰集に殘るものすくなからず。近江八景は、騷人墨客これを翫ぶ、これ近衛政家公の歌をはじめとす。國中土に灰汁なく、水に泥なし。音聲に

（一一）夫木集、經信、「彦根山普き門ときゝしかど八重の雲ゐに迷ひぬるかな」同乳母、「世をてらす彦根の山の朝日には心もはれてしかぞかへりし」

（一二）良辨僧都吉野の藏王權現の神託により此地に如意輪觀音の像を安置せし程なく奥州より黄金を出せり

（一三）天台兼淨土開基眞盛法師一派の本山

（一四）西國三十一番札所

（一五）岩上より帆柱を水面へさしだし島人水中に入り種々の藝をなす

（一六）大江定基入唐の事盛衰記七にあり

（一七）寂室は作州の人、康安六年寂

（一八）日野資名剃髪出家の時、上人「如是畜生」

大納言經信、贈答の歌にも、彦根山とよめる也。山上の觀世音、堀川の御宇、寛治三年、（一一）白川の上皇、御幸の地也。神社佛閣、金龜山の城の爲に、地を移して、今の北野寺に同坐あり。石山は觀音道場、石は白瑪瑙、山は黄金なり。皇州金山の始り、（一二）三井は園城寺、鐘に名高く、むかしながらの山ともよめり。夫山といへば、延暦寺にきはまり、寺といへば園城寺をさす。共に押出したる靈場也。坂本西敎寺は、天台淨土の一本寺、（一三）堅田の浮御堂は、惠心僧都の千體佛、長命寺は、（一四）順禮の札に顯れ、猪崎の不動尊は、棹飛の術に（一五）名高し。矢取の地藏、木の本の地藏、石塔寺には天竺阿育王の塔をとゞめ、是所謂八萬四千塔ノ一也。日本ニ來止、三ツノ其一也。平流山は、行基四十九院を建てゝ、（一六）都卒の内院を移す。三國傳記ニ云、昔鬼神靈山ノ一峯ヲ盜ミ、湖水ノ濱ニオロス。其下ニ隱レテ石ト化ス。今ノ荒神山ノ蛇石是レナリ。高野永源寺は、寂室派の一本寺、（一七）女人の高野山になぞらへ、番場の辻堂は、一向時宗の源にして、仲時已下の過去帳よりは、如是畜生の願文にて隱れなし。（一八）百濟寺の下乘は、小野道風の眞蹟、池寺の八夫の繪は、金岡の筆也。正樂寺は、佐々木道譽が菩提所、コンクワイの狂言、白藏主が寺也。敏滿寺般若坊には、那須與市が願書を

(六)彥根藩士百市右衛門家傳の安產の藥
(七)四十九院村にて作りたるをいふ
(八)太平記に、此神人壽六千歲の時より此所の主として此湖の七度まで桑原に變ぜしを見たる由あり
(九)義光七歲の時神前にて元服し新羅三郎と名乘る
(一〇)伊勢內宮攝社二十四所の內

硯、武佐墨、白部石、舟木材木。庭石は木戸によろしく、盆山の敷砂は大洞の白石、是レ方解石也伊吹の產は、蕎麥、からみ、艾、石灰、藥種の類、すくも、岩木。日野椀は會津の根本、しがらき燒は高麗の藥也。混元丹、(六)百々藥、播磨田米、醒が井餅、多賀杓子、綣村鍋、(七)四十九張のきせる、池の川縫針、守山鞦、國友鐵炮、武佐枡の八合升、是レ柴田勝家之制、軍中兵粮ノ助トス。端無のヂバン、佐々木家ノ具足屋也。其ノ子孫ノ者ノ農父マデ于レ今著レ之。大津馬は飛驒材木を飛し、鎌倉の生食も、本此國より出たり。湖中の獵頭は、尾上片山に綸旨をいたゞき、石垣つきは、阿野人を天下に用ゆ。(八)白髭の御神は、湖水七度の蘆原を見給ひ、磯崎の明神は、日本武の御廟也。多賀、日吉の神社は、しらぬ人なくして更なり。筑摩の神は、鍋の數に名高く、新羅(九)の社は、源氏の大將より、威を益すとかや。大津四の宮の神社、今濱の八幡宮、豐滿の神は、幡竿を守り、宇賀野の神明は、第十四座(一〇)の遷座也。彥根山の天神は、幾津彥根命と申し奉る、金德の御神なれば、金龜山に迹を垂る。吾すむ平田山、鳴宮の天神は御旅所也。流天神は、天津彥根命なり。木德の神にて、千々の松原に宮居し給ふ。名は神代よりはじまりて、

だむ。善積一郡は、已に湖となりて今はなし。わづか磯といふ一村殘り、古郡變じて、坂田の新郡に屬す。同國余吾、筑摩江の兩湖あれど、大きさわづかに二里に過ぎず。たゞ日本みづうみと稱する物は、琵琶湖の事也。形似たればとて、其名とす。佐々波實國とは、風土記に出て、樂々波や丹穗てるの文字は、萬葉よりはじまれり。東西十里、南北二十餘里、山谷のしたゞる所、八百八川、湖を圍む水郷五百餘村、中に大小の島あり。竹生島は周廻一里、寺院九坊、天女をあがめて、岩つなぎの神事あり。(三)空海の祕密を封じ、經政の撥をひゞかす。武島は、つくぶの半にたらず。沖の島は、沖津島山とよめる、(四)漁人わづかにすめり。白石といふは、四石湖上に峙ち、樹木一株もなし。奥の島は、人家數百、疊の表を產とす。猪崎、岡山、黑津の八島。なら島は水鳥の巢つくり、勢田の中島には、蛇柳あり。入龜、出龜の二島は、筑摩江の中に浮ぶ。山は比良四明の翠をひたし、鏡伊吹の影をうつす。橋は勢田、青柳の橋、松は辛崎、千々の松、蓮は支那に(五)名高く、蓴菜は四川に肥えたり。柳大根、兵主蕪、八幡蚊屋、長濱絹、高宮布、野洲ざらし、高島

(三)黑津の大日山は竹生島の缺けてとゞまりしなりとて毎年三月三日島つなぎの神事あり

(四)萬葉十、「近江の海沖つ島山おくまけて我思ふ妹にことのしげけん」

(五)栗太郡支那村

くは原よし原のあたりなるべし。諏訪の湖には、倒の影を浸し、甲州の府には、三つ峯に見えて、扇の繪はこゝなるべし。むかしより、詩歌連俳の句數、合せてこれをつまゞば、大かた此山の高さには比せむ。されど古今の間、たゞ一首秀でたる者は、赤人(七)の白妙なるべし。其餘は此山に對して、萬が一にも及ばず。吾翁、富士吉野の句、一生なしとかや。東路に赴く人は、かくなりがたきふじの詠に、心力を費し、又あづま路におもむかぬ人は、かく有難き富士を見ずして、一生を終はるも、共に殘多き事なるべし。

湖水賦　李由

近江、もと淡海なりしを、大宮にちかき江とて、近江につくり、遠き江を、遠江と號すとかや。仁皇十二代、景行の御宇、滋賀の郡に、遷都あつて、高穴穗宮に行幸す。三十九代、天智帝、大津の宮にうつり、廢帝(一)の御宇、保良の都をたつ。近州はじめは十三郡、(二)保疆潤澤、種千倍を得。春氣早く到り、日本四番、大上々國と稱す。仁皇七代、孝靈五年、地裂け湖となる。同時富士山現ず。されば不二禪定するに、近江人を先達とさ

(七)つまばの誤か
(一)天平寶字五年十一月
(二)國内

(三)長明無名抄に俊成富士のなる澤を富士のなるさと讀みてなるさの入道と仇名されたり
(四)「駿河なる富士の煙の空にきえて行くへも知らぬ我心かな」の駿河なるを俊成は風に靡くと改め定家は之を非とせり
(五)古今序に富士の煙によそへて人を戀ひといひ、又今は富士の山も煙たゝずといへるよりいふ
(六)富士の笠雲とて舟人暴風の兆として怖る一尺八寸は笠の直經よりいふにや

形けづりたるがごとく、高き事北斗に近し。夜陰に旭をかゞやかし、夏天に雪をいたゞく。山間に海をたゝへ、山上は眞砂を攀づ。和國異朝類するものなく、三國名山と稱して、義楚六帖に甚だほめたり。日本武尊は、東夷をたひらげて、草薙の名をあらため、右大將頼朝は、ものゝふをあつめて、牧狩をかる。鳴澤の池は、(三)俊成の仇名をとり、人穴の奥は、仁田が無分別さうなり。十郎の宮、五郎の社、(四)西行は五文字をすゑかね、探幽は墨色にあぐむ。烟は古今の序に、(五)二流に讀まれ、(六)雲は廻船に怖れて、一尺八寸の號をとゞむ。禪定の人は、寶冠に頭をつゝみ、下向道は、小袖の砂をふるふ。絶頂の鮗、半腹の雀、巣鷹は大心にして、伊豫の松山におとし、水鳥の羽音には、臆病になつて、都の方に逃る。ふじ海苔、不盡灰、富士甘艸、ふじ黄茋、栗、柿、松、檜の木のたぐひ。往還は竹の下越、根原ごえ、關は足柄の關、横ばしりの關、あら井の渡口、佐夜の山越、海を隔て、峯をかさぬ。三保淸見寺の見越、箱根、鎌倉の姿、日本、兩國の橋上には、馬上の人の首をめぐらし、赤坂、駿河臺には、乘物の窓に眸をさく。遠くは朝熊山をかぎり、ちか

田の玉川、沖の石、宮城野の萩、武隈の松、猶此境に名をならべたり。しほがまの浦には、鹽がまの明神あり。神前のかな灯籠、文治三年、泉の三郎寄進と記す。雄島が磯は地つゞきにて、雲居禪師(四)の別室のあとに、座禪石、瑞岩寺は、相模守時頼入道の建立、當時三十二世のむかし、眞壁平四郎(五)出家して、入唐歸朝の後開山す。其後伊達政宗再興して、七堂伽藍となれりける。法蓮寺は、海岸に峙ち老杉影をひたし、化鯨波(六)にひゞく。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。其氣色窅然(七)として、美人の顔を粧ふ。ちはやふる神のむかし、大山づみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を盡さん。

富士賦　嵐蘭

不二は日本の蓬萊山也。むかし孝靈五年、山はじめて現ず。徐福も此山に登りて仙藥を求め、かくや姫も神と化してこゝに靈をとゞむ。峰は八葉にわかれて根は四州(一)にまたがる。道路は三口(二)よりのぼりて、千筋にわかれ、すそ野は東西に長うして、百里につらなる。

(四)正保頃の人後光明院紫衣を賜ふ
(五)法心和尚といふ入宋して經山寺の佛鑑禪師に學べり
(六)鯨
(七)いたみなやむ貌
(一)駿河、相模、甲斐、伊豆
(二)吉田口、大宮口、須走口

（一三）鹽竈櫻は花のみならず葉まで美しきより濱で見事の義に取るといふ

（一）洞庭七十二山に比していふ也

（二）杜甫、望嶽詩、「諸峯羅立似兒孫」

（三）實朝、「世の中は常にもがもな渚こぐあまの小舟の綱手かなしも」

伊勢櫻、江戸ざくら、火櫻、樺ざくら。うば櫻は葉のなきをいひ、しほ竈とは濱に咲くといふ事にや。熊坂といひ、楊貴妃といふ。世に色よき杜若は、八橋（一三）と名付け、よく垂るる萩を、宮城野と號す。さればむかしより、たゞさくらの名に吉野といへる花をきかず。たゞ吉野とも櫻とも、理窟をつけぬこそ高みなれ。

松島賦　　芭蕉翁

そも〳〵事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたゝふ。七十二峯（一）、數百の島々、欹つものは天を指し、ふすものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重にたゝみて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫（二）愛するがごとし。内ふたご、外ふた子、鎧島、かぶと島、牛島、蛐しま、内裏島、屛風じま。笆が島は、あまの小舟漕ぎつれて、肴わかつ聲々に、（三）つなでかなしもとよみけん俤を殘し、末の松山は寺となりて、松のひまびま墓を築く。羽をかはし、枝をならぶる契の末も、終には皆かくの如しと悲し。野

（七）元弘三年正月村上彦四郎義光大塔宮に替りて自殺す

（八）尊算は高算の誤此上人二月朔日の花供懺法を創む

（九）熊野より葛城大峯を經て吉野へ出るを順の峯入、吉野より大峯の後に入り熊野に出るを逆の峯入といふ

（一〇）曲物に葛の手つきて釣瓶に似たるよりいふ鮨也

（一一）貫之、「櫻花散りぬる風の名殘には水なき空に浪ぞたちける」

（一二）貫之、「櫻ちる木の下風は寒からで空にしられぬ雪ぞふりける」

が太刀。口の山門は、彦四が痛腹の所、つゝじが岡は、忠信が空腹の地なり。勝手の寶藏には、靜が舞の裝束を納め、（七）子守の拜殿の歌仙は、定家卿の眞蹟、（炎上の後狩野永德が筆なり）櫻木の宮、金情の明神、力乞の不動、廻り地藏、（八）尊算の御影堂には、花供養の餅をまき、五臺寺、櫻本は、當山の先達也。大瀧、宮瀧、西河の瀧、高瀧、蟬が瀧、淸明が瀧、菜つみ川、とくとくの淸水、外象の橋、神子の水、鷲の尾の鐘、龍返しの岩、龜石、玉石、大杉殿、人丸塚、若葉の鳥井、錨懸の松、かげろふの小野、猿引坂、琴堂、琵琶山、青根が嶺、釋迦が嶽、七十二なびき、八十の窟、（九）これ皆順逆、二つの通路なるべし。產は頭巾、ほらの貝、火打、塗物、紙、漆、葛、榧、たばこ、（一〇）釣瓶鮓、柹、木の子、籠細工、木鉢、材木、山折敷。さくらは吉野に名だかく、よしのは櫻にて名を擧げたり。籠より奥の院まで、左右の山々、前後の谷々、たゞ雲を攀上り、たゞ雲をくだるが如し。海道の吹きためには、（一一）落花の波を揚げ、木の間の嵐は、（一二）寒からぬ雪をふらす。籠ははやく、奥は遲し。開落山の淺深によれり。春此山に上り、いづれか花の盛ならぬ所はあらじ。夫櫻の名目は、

(一)「吉野山花さく頃の朝な朝な心にかゝる峯の白雲」
(二)「これはこれはとばかり花の吉野山」
(三)古今、「唐土の吉野の山にこもるとも後れんと思ふ我ならなくに」
(四)「吉野川花の音して流るめり霞のうちの風もとゞろに」
(五)大臺原の巴獄にあり
(六)壬申の亂に國栖の翁、川舟をうつぶせて天武帝をかくし奉る

の井、花園を詠ず。すべて二十一代の歌數三百七十餘首、猶家々の集、物語類、詩連俳諧のたぐひ、(一)佐川田喜六があさな〳〵、(二)貞室老人のこれは〳〵まで、かぞふに中々いとまなからん。されば(三)もろこしの吉野とは、おほいまうちぎみの俳諧の歌より始り、芳野(四)川花の音するとは、慈鎮和尚の大きなる歌の手柄なり。川は(五)巴が淵よりわかれて、紀の和歌山に落ち、山は大峯よりつゞきて、那智高野につらなれり。藏王堂は、三ところに安置し、一郡は八郷とかや。上市よりは飯貝にわたり、下市をこえては、六田よりのぼる。妹背山をへだて、高取の城にむかふ。ちもとの櫻、日本が花、櫻田の谷、さくらが嶽、關屋の花、瀧ざくら、雲井櫻、布引の櫻、花矢倉、花籠の水。嵐山は、龜山の御字に都にうつされ、袖振山は、天武帝より五節の舞を始む。(六)清見原の天皇は、國栖人の舟にかくし、後醍醐帝は、吉水院を皇居に定む。義經も此院にやどり、秀吉も此寺を本陣とす。賀名生は要害の御所、如意輪寺には御廟を築く。厨子の戸びらに、南帝勅作の詩を、みづからあそばし、過去帳の奥には、楠正行最期の歌をとゞむ。判官の鎧、辨慶

（一四）賴朝三崎遊覽の次實平に命じて多く榮螺を海に放たしむ實平左に向て投ぜしかば左巻の榮螺生ずといふ
（一五）藥草
（一六）延寶中心越禪師八景の詩を作る
（一七）金岡筆すての松
（一八）冬になりても葉の色を變ぜずといふ

をまし、鳩の聲は、懷舊の腸を斷つ。鰹は兼好が筆にいやしめ、左蒔（一四）の榮螺は、實平が麁相を殘す。苔、磨砂、海老、柴胡（一五）。すべて魚鼈の類、あまかづきいとまあらず、高瀨おしおくり、かよはぬ日なし。名にしの地藏は、武相の境にして、六浦、金澤は、むさしの地なり。瀨戶の明神には、四橋一覽の眼をさき、能見堂には、八景（一六）惣詠の詩を見る。照手の松、筆捨（一七）の松。金澤の文庫といふは、稱名寺にあつて今はなし。文珠像、普賢像、こく梅、櫻梅、せいこ梅、青葉（一八）の紅葉。わづかに西湖、さくらの二梅をとゞむ。大きなるものは、賴朝のかうべにたとへ、廣き所は、かまくら海道に比す。今の戶塚は、いにしへの材木町といひ、大磯の宿は、遊女町の沙汰なり。されど、東南に海近く、西北に山つらなれり。境地狹してすでに谷々の號あり。むかしの繁花繁榮を論ぜば、なんぞ今の泰平不易の江戶に及ばんや。

芳野賦　　丈艸

よし野を御吉野といふは、皇居の地なればなり。山、川、里、嶺、嶽、高根、尾上、山

（七）建長寺の僧自休、白菊といふ兒に戀慕す、白菊きかずして自殺す
（八）宗尊、「歸り來て又見ん事もかたせ川濁れる水のすまぬ世なれば」
（九）手塚太郎光盛の女
（一〇）時宗の室之を創む實朝とするは誤
（一一）橋の下の菖蒲は折れども折れず刈れども刈られず云々
（一二）爲相、「さし上るみなのせ川の夕潮に湊の月の影ぞちかづく」
（一三）顯仲、「鎌倉や御輿がたけに雪きえてみなのせ川に水まさるなり」

竹の紋の畦あり。腰越の寺には、辨慶が申狀の下書を殘し、兒（七）が淵には、白菊が最期の歌をとゞむ。（八）片瀨川には、宗尊親王の影をうつし、滑川には、青砥が錢を捜す。日蓮盛久が首の座、景清（九）からいとが籠のあと、大塔の宮は、佞臣の讒にくるしみ、實朝の卿は、公曉が爲に弑せらる。勝長壽院には、義朝の髑髏を葬り、法華堂には、賴朝の墳墓を築く。西行上人は、三夜に軍法を說き、定家の卿は、七年和歌を談ず。化粧坂は、少將に名高く、神前の舞臺は、靜が舞をはやす。和田、畠山、千葉、北條、管領屋敷、梶原屋敷、佐々木屋敷には、馬ひやし場の水あり、正宗が舊跡には、刃をきたふ泉を見る。花が谷、蛇が谷、梅が谷、松葉が谷、建長寺、最明寺、圓覺寺、壽福寺。海藏寺は、石割立翁の開基、松が岡は、（一〇）實朝の尼寺也。籠釋迦、鐵地藏、深澤の大佛、長谷の觀音、金洗澤、星月夜の井、（一一）橋の下の小歌は、あめ牛めくらが威勢をそしり、小栗の說經は、横山が强盜を語る。阿佛、長明が日記、重衡、俊基の紀行。春は雪の下に花を踏んで惜み、夏は山の内に鵑を待て眠る。（一二）美奈能瀨川の月、（一三）御輿が嶽の雪。礎のあとは、感慨の情

(一)染谷太郎太夫時忠は鎌足の玄孫なりといふ
(二)貞盛の孫守護として在城す源頼義其婿となり義家を生む
(三)鎌倉名所記に、「平安城は花の都、鎌倉は柳の都」とあり柳營の意なるべし
(四)嚴島、竹生島、江島
(五)下河邊庄司行平將軍家の弓の師
(六)佐竹四郎秀義の舊跡、五本骨扇を家紋とす

かつ。夏冬の朝起、春秋のなりはひ、諸國にすぐれ、諸人にこえたり。是皆舊都のありがたき遺風なるべし。

鎌倉賦并序　　許六

夫相模國鎌倉は、郡の名にして、大織冠鎌子丸の時、靈夢によつて、鎌を埋むの地也。このゆゑに郡の名とす。(一)染屋の時忠、惣追捕使として、文武の御宇より、聖武の神龜年中まで、こゝに居す。それより(二)上總介平直方、これに住して、八幡太郎義家朝臣より、源家代々居住の地なり。賦して曰く、

三代の將軍、九代の執權、春の花さけば、秋の紅葉と變ず。(三)柳のみやこ、もろこしの里、鶴が岡、雲井の嶺。下の若宮は、頼義朝臣の建立にして、上の若宮は、源二位の勸請なり。宮柱ふとしき立てゝ、民の戸烟にぎはへり。江の島は、(四)三辨財天、三浦三崎に、杜戸の明神あり。鳥合が原は、相模入道が闘犬の地、由井の濱は、(五)下河邊の庄司が、笠懸を射初むる。小袋坂、稻村が崎、七里が濱。月かげが谷には、曆を作り、扇が谷には、(六)佐

(一七)好忠、「春日野の若草山にたつきじすけさの羽音に目をさましつゝ」
(一八)海龍王寺
(一九)璉城寺
(二〇)元祿年中東大寺龍松院公慶上人再建す
(二一)伊賀守藤原繼蔭の女
(二二)柳生但馬守宗嚴
(二三)寶藏院胤榮鎌槍を創む
(二四)土製の狛犬名物也
(二五)丸藥の名
(二六)伊賀にゆく山中鳴川村に石あり之に腰かくれば癩病となるといふ
(二七)春日野鹿、三笠山雪、轟橋行人、雲井坂雨、佐保川螢、猿澤秋月、南圓堂藤、東大寺鐘

の羽音には、わか草山に眠をさます。鹿は春日野に臥し、魚は猿澤の池に浮ぶ。衣懸柳、(一七)良辨杉、夜泣の地藏、文使の地藏、元興寺の鐘は、鬼の手の痕になだれ、十三鐘は、七つ六つの間につぐ。角寺(一八)、紀寺(一九)、般若寺には、大塔の宮を隱し、何がしの坊には、義經の鎧をとゞむ、重衡は治承に燒き、松永は永祿に亡す。俊乘坊の跡をふんで、(二〇)龍松院は願をおこす。輿懸石は(二一)伊勢の御の眺望をなし、柳綠花紅の碑は、紹巴翁のしるしとかや。華原磬、泗濱石、蘭奢待の伽羅、鴨の毛の屛風、(二二)柳生家の劒術、(二三)寶藏院の十文字、法花(二四)寺の作り犬、西大寺の豐心丹(二五)、法論味噌、力饅頭、なら漬、奈良酒、奈良こんがう、なら團扇、墨、曝、世に名高く、打箔、中繼は此京より起る。岩井が具足、文珠が打物、膠、綠青、鞁、鼓の皮、土風呂、灰炮焙、櫟、木練、なら茶はヤヂウと名づけ、晝食を硯水といふ、油烟取、五合禰宜、(二六)乞丐坂の石、穢多村の木格子、赤き物は、頭屋の赤飯にたとへ、痩たる人は、金堂の鉦打といふ。木辻の待宵、鳴川の別れ、情に萬金を盡し、思ひに一命を輕んず。口は七口、(二七)景は八景、町々に御門の名ありて、五條三條の巷をわ

を領ず。西金堂の樂をあらため、南大門に移して、薪の能をはじむ。七度半の使に、四座の猿樂をめす。（六）雨天には紙を踏んで試み、夜陰には薪を積んで焚く。保生が鉢の木に、名人の號をとり、大倉が芭蕉に、達人の名をあらはす。（七）水屋の能、若宮の能、春日祭、御祭、素絹に大衆の顔をつゝみて、大華表につらなり、錦を著て、松の下に弓矢の立合を舞ふ。頭屋の兒は牀木に腰をかけ、赤衣の仕丁ば棒を横ふ。大名馬、大名鑓、大太刀持、小太刀持、競馬、流鏑馬、長谷川黨は甲冑を帶し、射手の兒は、綾藺笠に弓矢を持つ。關白代は束帶して、藤の花をかざし、（八）バチョの兒は供つれて、腰に木履をつくる。（九）ハイデンの神子、奈良の神子、細男、（一〇）氷室付の樂人、（一一）トカミ、柏手は、仕丁の宿老、頭屋の御幣、田樂のビンゾロ、（一二）春は二月（一三）の雪をちらし、冬は霜月の花をさかす。手向山に、（一四）菅家の紅葉を詠じ、武藏野に、業平（一五）の若草をよむ。雪消の澤、野守の池、御手洗川、佐保川、一位、二位、五位の橋、馬出、轟、故郷の橋、鶯の瀧、青龍の瀧、森は神垣、手分の杜、地獄谷、千手谷、劍塚、逢火塚、むら雨のたえ間には、雲井坂に晴を祈り、雉

（六）芝生に紙を敷きて晴雨を試み紙濕はざれば能を始む
（七）水屋社は大宮の北三百歩許の所にあり
（八）馬長兒
（九）若宮拜殿の巫女
（一〇）齋の男の義か
（一一）戸上、役の名
（一二）ピンザサラ、柏板
（一三）二月申日十一月申日に行ふ
（一四）菅家、「このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに」
（一五）「春日野は今日はな燒きそ若草の妻もこもれり我もこもれり」
（一六）寫違、「村雨の晴間にこえ上雲井坂三笠の山は程近くと

風俗文選　巻之二

○賦類

南都賦　汶邨

あをによし奈良の都は、御さふらひ(一)三笠山の麓なり。元明天皇、和銅二年、(二)藤原の宮より、此京に移さる。大宮殿、大佛殿、佛神をあがめて王法を輔く。若宮のやしろ、月日の宮、竈殿、尾上の宮、鏡の神は、橘の廣繼をまつり、浮雲の宮は鹿島立の始とす。氷室、卒川、東大寺の八幡、二月堂に若狭井あり。三月堂、四月堂、釣鐘は、久我の入道の詩をとゞめ、大門の折釘は、源の頼朝の幕を張り、興福寺は七堂伽藍、はじめは山階寺といひ、中比(三)に馬屋寺と號す。東金堂、中金堂、食堂、講堂、南圓堂には、補陀落(四)の藤をうつして、順禮の札を納め、東圓堂には、いにしへの八重櫻を残して、花垣(五)の庄

(一)古今、「みさぶらひみ笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」、
(二)和銅三年の誤
(三)白鳳元年高市郡厩坂に移し厩坂寺といふ
(四)新古今、春日明神の詠、「補陀落の南の岸に堂たてゝ北の藤波今ぞ榮えん」
(五)上東門院八重櫻を愛し伊賀余野の庄を寄付すよりて花垣の庄といふ

の瀧の音もなし。嵐木がらし、唐がらし、岡部の里の冬ごもり、何を師走の年くれて、金一段に責め寄せたり。かはせ小判、大名借、つゝみ廻して相坂をこえ、高瀬の舟のかぢ枕、汐路はるかにとられ行く、鄙の旅寝ぞあはれなる。(二一)神は人の敬ふによつて威をますとかや。伊勢熊野のお初尾時、樂代は銀一枚、衣配は小判なるべし。すでに煤と明け餅と暮れて、廿九日といふなり。けふは小の大晦日、一日の違ひとはいひながら、一年中の大油斷、今此時にあらはれたり。三千世界の金銀は、けふ一日の亂世にて、入りみだれ〳〵、あたる所さはる所、皆こと〴〵くしたがへて、(二二)壽永も已に暮れにけり。抑もやまと歌は、神代より傳はりて、おもき國の翫びなれば、天下誰あつてこれをおさん。されど末の代にあつて、和歌の道に對するものは金也。目に見えぬ鬼神をなかしめ、をとこ女の中をやはらげ、たけきものゝふの、心をなぐさむるものはこれ也。上古はいやしきものに言ひなされたる、それもさる事ながら、今やうは此物にくまれたる人、此界にては一日の逗留ならず、たゞあはれなるは金なるべし。

(二一)貞永式目、「神者依人之敬増威、人者依神之徳添運」

(二二)平家都落の年號なるより戯れていへる也

（一九）棒に振るといふ意

（二〇）頭陀袋

の中立となるたぐひもあれば、釣りがへといふはいかにぞや。こはき風、あらき日影をさへ、いとほしとおもふべき身を、いま〳〵しく大杯（一九）にふらば、昆布干鮭の思ひをすらん。あるは家を賣り、家督をうりて、くはず貧樂の道樂人、つまる所は俳諧師也。いくとせか松島象潟の旅をうらやみ、此秋しきりに姨捨更科の月見んと、三衣袋（二〇）に身帶をたたみ込み、木曾の御坂を越かねて、尾花のつてにまねかるゝ、かけ路の下の草枕、一夜二夜はもてなされて、長逗留に飽れぬる、たゞ行くさきの袖の露、ちらりと見せてあはれ也。秋もはやくるゝと菊の名に立ちて、黄々白々粧二東籬一といふは、かれも金銀をうらやむたぐひか。時雨ふりそむる頃は、諸家の爐開きとて、名物の寶くらべ、風流に似て、金づくのはたらきなるべし。霜月朔日より野郎の顔見せ、給分は小判也。むかしは吉原堺町と打ちならび、中なるが葺屋町、天下の金をとらかして、まぶといふ詞も、此時より出づらん。今朝からは師走とかや。乙子の朔日とて、節季候の來初むる日也。空はうす墨の冬氣色、比良の高根、志賀の山、むかし長等の峯の雪、都の方はあられふる、音羽

(一四)芭蕉、「六月や峯に雲おく嵐山」
(一五)土用は通例十八日なるが土用中に没日あれば十九日なり
(一六)京西七條にあり
(一七)奥州路の豐作
(一八)七月十五日現在の父母の壽命長久を祈るをいふ

此時例の一歩小判の働きこそ、目さむるわざなれ。梅雨晴の六月空さえて、峯(一四)に雲おく頃、植田沸えかへり、天地は蟬の聲に鳴きひしがれ、一日の暑さもたへて、千とせをふる思ひなるに、十九(一五)土用とかや、京田舍熱病にたふれ臥し、家々わらはやみはやりて、水藥(一六)師の泉も其功ぬるく、驗者のいのりもたえまある頃、紫雪とかや、世に良藥ありて、たち所に醒めたり。これこそ黄がねの鍋にて、黄金を煎じたる物なれ。やゝすゞ風粟の葉むけに立ちそめ、芋の葉ぶりつく頃は、金氣世におこなはれて、星合の空もうち過ぎ、物際近づく頃、革財布とぴまはり、丁銀箱を出てうそぶく。奥(一七)の世の中打ちつゞき、巡禮のほりつどひ、金の直下る頃を、巡禮小判とはいふ也。家々むかひ火燒き捨て、魂祭るころ、旦那寺の小僧、棚經とてよみありく、物喰せ酒のませ、やがてかけ合に、一粒包みてやれば、まだはづかしと思へるいとあはれなり。やう〱生(一八)身玉、養父入事過ぎて、躍見る心にはなりぬ。彼の島原と申すは、二十四日をかぎりと定め、世界の金銀は、此時この里にとらるゝなるべし。たゞ一夜さの假のにほひに心とゞまりて、これよりえにし

（一二二）聖武天皇の時良辨僧正勅を奉じ此山の金を掘取らんとせしに藏王權現彌勒出世の時使用すべき金なりとして許し給はざりしといふ

（一二三蠶）

をわけつらん。此御山は彌勒の代につかふべき金とかや。昔より世の人の、面白しとおもふもことわりなり。やう〳〵やよひも暮れて、ほとゝぎすの來べき、卯月の空打曇りたる、片山里の垣根の雪は、何を卯の花とうらやみけん、錫も鉛もともに白銀の膚なるべし。牡丹の花の白きはさら也、世に稀なる紅とて、長安の豪富はもてあそび、これに魂をうばはれける。その面白き所は、たゞ小判を植ゑて詠むるなるべし。雲雀は終日に囀り、水鷄はよもすがらたゝく。池鯉鮒野の馬市なるべし、一歩はひとつふたつなどいひ習ひけるに、馬買ひ牛買ひの詞とて、五つぶ十粒とならべてかぞへ、伯樂が錢金を皆あてに、集りたる遊女野郎のたぐひ、賽ふり樗蒲一のより所にして、廣野の小屋のたゝずまひ、しばし里あることゝちなるべし。はやし祭、喰ひ祭、打ちつゞき、桑子（一二三）庭に起きかゝる頃、茶山いそがしく、からし種こぼるゝなど、麥跡の田植さへおくれて、例の五月雨ふり續き、舟にて市に入る時、矢矧堤はきれて道筋かはり、大井川とまりて、島田金谷に、陣を張る大名小名いくかしら、猶行末の川々、いかばかり出づらんと心ぼそし。

日の空は、まだ鴨の羽音ながら、日影うらゝかに、南の障子押しやり、飛石よりかけろふ燃ゆる頃、かばらけの捻りもぐさ、誰にかすゆらんと、おぼつかなく見なさる。風く(九)らうたる悪太郎、小路がくれを尋ね出し、お乳めのととり廻し、あたり近きやいとの婆婆をかり招き、筋違風門すゑられて、涙のかゝる饅頭も、中々それもうるさくて、やうやう膝をすべり落ち、からき命いきたる心地して、灸竈(一〇)の芥子銀は、湯氣のたつまで握られて、何買ふ物とは知らねども、たゞ嬉しとばかり覺えける。明日は初午とかや、錢數寄の稻荷殿、御簾の中より、千貫の散錢にめでさせ給ふ御物好こそ有難けれ。されば佛とてもいやにはあらず、黃金の膚を願ひ、閻浮檀金(一一)を最上とおぼえ、極樂には金銀を鋪くとかや。いづれの佛神に詣でても、錢箱の響きにめでたまはぬはなし。世の中の人の心の、花にはうつりやすく、奢は日々に長じて、田舍の金銀は、すべて都のあたゝまりなるべし。西東の遊び所、南北の參り事、すべて錢なし人は、一足も進みがたし。櫻は四方山にさきこぼれても、吉野を花の名所とはいへり。飯貝六田の軒端より、幾重の雲

(九)灸を厭ひて逃げたるをいふ

(一〇)灸の慰勞

(一一)閻浮洲よりいづる金は佳品なり

れがあはれならざるはなし。むかし紫氏清氏の物語にも、華ちり、時鳥とかはるあはれをのべて、錢金のあはれをいはず。世わたるわざのはたらきは、たゞ此ものの手柄にして、神佛とても及びがたし。まづ春の御賀の引出物より、八朔歳暮の奉り物、皆金銀の手柄にて、下萬民の末々まで、千代萬代を十かへりと、あふぎ奉るもことわり也。金子の威德とて大判は裸で出仕し、白銀は付臺(三)とて卑下したるこそ哀なれ。錢は凡夫の手に落ちて、青ざし(四)一貫文を頭とし、こき箸蠟燭一挺ぎり、二十五十の年玉まで、皆相應にこそめでたけれ。春賓引をせぬ人は、六月の蚊にくはるゝとて、しはき親仁もゆるされて、錢つかはすもことわり也。惠方參の十二燈(五)より、よろづの神々はとりそめられて、細き穴から世の中を、廣くめぐみをたれ給ふ。梅(六)は花の兄とかや、春の風やはらかに吹て、里の中道溝石をつたふ頃、まづ江南の一二輪咲き初めて、白きは本色といひながら、南鐐(七)の寒き風情をこのむならん。柳連翹の黃色に、菜たね山吹のあたゝかにさけるは、かの大判の裸をうらやむか、鶯の金衣鳥とは、直に似せ金の同類なるべし。きぬさらぎ(八)二

(三)紙に包みて臺の上に張りつくる也

(四)青苧の緡に貫くよりいふ

(五)燈明料十二文なるをいふ

(六)黃山谷、「含香體素欲傾城、山礬是弟梅是兄」

(七)銀の最上なるをいふ

(八)如月(二月)

(四)「ことごとく寝覺はやらじと鉢扣」
(五)木下長嘯の墓西山花の寺にあり此人の擧白集に鉢たゝきの文あり
(一)方丈記の文に擬す
(二)産婆

(四)とごとく寝覺はやらじと吟じけるも、ひとり聞くにや堪へざりけん、打ちとけて寢たらんは、かへり聞かんも口をしかるべし、明かしてこそとの給ひける。横雲の影よりからびたる聲して出で來れり。げに老ぼれ足よわきものは、友どちにもあゆみおくれて、ひとり今にやなりぬらんと、翁の

(五)長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき、と聞え給ひけるは、此あかつきの事にてぞ侍りける。

四季辭　　許六

古今和歌文章謂二四季一者多矣。假令姿用二俳諧詞一爲レ之。其情和歌文章不レ可レ更。今此辭。全篇以二財寶之上一盡二四時情一。是俳諧也。

(一)行く年の晝夜は絶えずして、しかももとの晝夜にはあらず。(二)子取婆々の足手を返し、隱坊の鋤鍬休する時なし。人若かりし時の月日は、行道ゆるやかに廻り、老いての後の光陰は、憿に徑路を行くにきはまれり。五十年來のすぐるは、一杯の蕎麥切よりも早く、今又五十年生きん事は、田樂を飜すよりもやすし。つらつら一とせの變相を見るに、いづ

師走も二十四日、冬もかぎりなれば、鉢たゝき聞かんと、例の翁のわたりましける。こよひは風はげしく、雨そぼふりて、とみにも來らねば、いかに待ち佗び給ひなんといぶかりおもひて、[illegible]

箒こせ眞似ても見せん鉢扣、と灰吹の竹うち鳴らしける、其聲妙也。火宅を出でよとほのめかしぬれど、猶あはれなるふしぐの、似るべくもあらず。かれが修行は瓢簞をならし、鉦打ちたゝき、二人三人つれてもうたひ、かけ合ても諷ふ。其唱歌は空也の作也。かくて寒の中と、春秋の彼岸は、晝夜をわかず、都の外、七所の三昧をめぐりぬ。無緣の手向のたふとければ、かの湖春も、わが家(一)はづかしとはいへり。常は杖のさきに茶筌をさし、大路小路に出でて商ふ。業かはりぬれど、さま同じければ、たゝ(二)かぬ時も鉢扣とぞ、曲翠は申されける。あるひはさかやきをすり、或は四方にからげ、法師ならぬすがたの衣引きかけたれど、それも墨染にはあらず、おほくは萠黄に鷹の羽打ちちがへたる紋をつけて著たれば、月(三)雪に名は甚之丞と越人も興じ侍る。されば其角法師が去年の冬、こ

(一)「米やらぬ我家はづかし鉢叩」
(二)「面白や叩かぬ時も鉢叩」
(三)「月雪や鉢たたき名は甚之丞」

かるゝ事、何を情とせん。義經の逆落は、暫時さしおく。(二)須山小宮山が夜討は、かくれて謀をなすといへども、天下の爲にして、名おのづからしたがふ。又汝といはんや。虞舜は頑父をさけ、日本武尊は夷賊をのがれ給ふ。共に天にして、汝といふべきにあらず。大盜あに樞戸を穿たんや。汝がふるまふを見るに、帳をたるゝ時は、其罅々の間をうかゞひ、垂れをはつて縦横の透間をたづね、すべて小破の所をもとめ、人のしりへにつきて入らんとはかる。嗚呼(三)跖蹻が徒にはあらじ。すべて汝がおこなふ處、猛き事もなく、たのしむ事もなし。あはれなるかたにも、やさしきかたにもあらず、たゞ憎むべきものの甚しき也。蚊、蚊、帳中の蚊、汝をやくに辭をもてす。汝此ことばをきく時は、我手に死すともみづから足れりとせよ。

(四)子や啼かん其子の母も蚊の喰はん

鉢扣辭　去來

(二)元弘元年九月二人の夜討により笠置城没落す

(三)齊の盜跖、楚の莊蹻共に大盜なり、跖の傍訓はセキの誤なり

(四)憶良の歌、「憶良らは今はまからん子泣くらん其子の親もわを待つらんか」

いまださかんなる齢のいかなる縁にや、俄に墨の袂に染めかへて、塵のすみかをかけ出で、山寺にかきこもれるよし、傳へ聞き侍りて、今のこゝろざしの正しきに、猶後の出家をおこたらぬ、みさをのほどをねがひて、拙き辭を申しおくりぬ。

蚊屋を出て又障子あり夏の月

燒蚊辭　　嵐蘭

蚊、蚊、帳中の蚊、汝を燒くに辭をもてす。汝此辭を聞く時は、わが手に死すとも、みづから足れりとせよ。夫澤雉は、樊中にやしなはれんことをねがはずと、彼は心をとる。これは食をもとめて、人の肌にせまる。かれを愛せんや。これをにくまんや。きゞすは草にかくれて、草の爲にやかる。汝は帳に入つて、帳の爲にやかる。あはれなるかた、いづれとかせんや。

蛼促織の火に入るは、戀ゆゑときけばわりなしや。雨に濡れ露にそぼちて、さそはれし風だにもつらし。げに玉の緒の絶えなん事もしらず、いく偽の夜や頼み來し。汝がや

(一)荘子、「澤雉十歩一啄、百歩一飲、不蘄畜於樊中」

（四）弄は琴の衍なるべし

（五）鏡を研ぐに水銀を用ふ

まり、きのふもまろくけふも又丸し。

此人かつて詩をよくす。多情有聲の畫を彩り、美言無糸の弄（四）をあやつるといへども、猶風雅に足をそばだて、敷島の道をさぐり、一とせ先師、關の旅寐の比まみえて、一棒をうけたりといへども、いまだ澁皮もむけず。今幸に予に參じて、又鏡を磨がんとす。風雅はもと明なる物なり、鏡の物の影をうつすが如し。汝元來磨ぐことをしらず、速に去つて、水銀（五）を求め來れ。

分別に花のかゞみも曇りけり

贈二新道心一辭　　丈艸

世をのがれて道を求むるほどの人は、皆一かどの志を發して、まことしきつとめともしあへれど、年を重ねぬれば、又かれこれにひかるゝ縁おほく、事繁くなりて、更にはじめの人ともおもほえぬふるまひのみぞおほかる。古人も此事をいましめて、出家は出家以後の出家を遂ぐべきよし、勸めはげましぬ。魯九子は美濃の國蜂屋の山里にあそびて、

ふとけれ。我又こゝに來りてあそばゝ、何某が三すね(二)といふ歌よみにやあらんと、そこの人々もわらひけるなり。秋の坊が云く、はいかいはさる事ならんか。曰く、さだむべからず。俳諧にくはしからんとせば、世情におちて、心の花にうつろひぬべし。花なきは又世の風流なし。世にはたゞする(三)すみならんこそ、法師達におきてはさる事なれ。ただはいかいにはあそぶべし、俳諧にまどふべからず。しひてくはしからんとせば、東花坊が如き、世情のうき名とりてん。はいかいのくるしさ、誠にしかのみならんや。

瓜ふたつ三つにわる手や塵劫記(五)

示僧古鏡辭　　李由

こゝに僧あり、古鏡といふ。學業にわしりて、東湖の濱にあそぶ。產は濃州關ならば、な(一)ど志津、孫六が鍛を得て紫電白虹赫々とし、三尺のひかりを振はざるや。天下誰あつてか敵するものあらん。さるはむかしの劍、今の菜刀とおほえ、俊成卿(三)の花の鏡もうち曇り、今は閑村の葎にうづもれ(二)、祭のはやしにもたゝかれず、終に鐘鑄の奉加道具にきは

(二)躬恒の地口
(三)無一物なること、匹如
(五)算術の書名
(一)志津三郎兼氏、關孫六共に刀鍛冶の名工
(二)諺
(三)「年をへて花の鏡となる水は散りかゝるをや曇るといふらん」伊勢の歌也

師とはなりける。かのさゞ波や、堅田の海士が海老すくひも佛縁の内かとぞいひける。隠士大きに打腹立ちて、汝がいひ分皆々理窟の論なり、曾て風雅をしらず。(七)古人生前一瓢の樂は、身の後の金よりは勝たりといへり。草刈が云く、其集といつぱ上戸の情也。瓢のかたちをいはん、腹便々と肥えふとりて、口のせまきは何ぞや。せまくて餅の入らざるは、下戸のなげきなりと大笑して、歌つて云く、(八)滄浪の水、すめらばつけて泳ぐべし、濁らば鱠を押ゆべしといひて、(九)去つて共に物いはず。

示二秋之坊一辭　支考

あら秋の坊や、紅葉の秋か、世の秋か、又たゞ秋の坊なるか。見ればいとにくさげに、見ねば又なつかし。好惡は人の心にありて、彼は一物もなきもの也。むかし湖南の幻住庵に、一夜の夢をむすびしが、其夜も知らずよみしやすらん、にくみしやすらん。(一)無常迅速の一句をあたへて先師も餞までおくりは申されしが、今此草庵に同じ心にすね合ひたる法師の、相住みて侍るが、物いはぬ日の終日も侍りて、かく住みけるこそあやしくた

(七)白氏文集五十一、「身後堆金拄北斗、不如生前一樽酒」

(八)屈原漁父辭「滄浪之水清兮、可以濯我纓、滄浪之水濁兮、可以濯我足」

(九)同書、「遂去不復與言」

(一)「やがて死ぬ氣色は見えず蟬の聲」

みとぞ覺えける。かの岡に(四)草苅るをのこあつまり、此甲のにくさに、わざと返しとはなくて、

かまきりに降參したるふくべ哉、とぞ笑ひける。主きゝつけて、陋巷にあつて一瓢のたのしびは賢人の上、里の子はしるまじ。草刈の中より、其賢人くらべならば、許由はかしかましとて捨てたりとのゝしる。あるじいよ／＼勝に乘て、かゝる名物もしらず、汝等は田植の煎茶を入れ、たね物の納所とおぼえたるこそ口をしけれ。花はむつかしき色もなくて、楊墨(五)がこゝろざしに叶ひ、源氏の卷の名となり、歌人の腸にまとひたる夕顏ぞかし。

抑も夕がほの、玉樓金殿にさがりたる由緒をしらず、たゞ喰物とぼしき五條あたりに徘徊して、貧乏神の神木はこれなるべし。隱士が曰く、汝宇治の物語をしらずや。答へて曰く、其拾遺(六)の瓢も、咎なき隣人が一命を絶てり、これ全く瓢の罪といはん。かゝる目出度ひさごに何の罪かあらん、かれ佛緣深きゆゑ空也上人には携へられ、鉢たゝきの祖

(四)謠曲敦盛、「かの岡に草苅るをのこ野をわけて歸るさになる夕まぐれ」

(五)楊子は逵路を見て哭し墨子は練糸を見て泣くといふ故事

(六)宇治拾遺

遠なる處、予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇(四)のごとし、衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿(五)、西行のことばのみ、かり初にいひちらされし、あだなるたはぶれごとも、あはれなる處おほし。後鳥羽上皇(六)のかゝせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかもかなしびをそふると、の給ひ侍りしとかや。されば此御こと葉を力とし、其ほそき一すぢをたどりうしなふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず、古人のもとめたる所をもとめよと、南山大師(七)の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じといひて灯をかゝげて、柴門の外におくりてわかるゝのみ。

瓢辭　許六

男鹿なく(一)、此山里と詠じける、嵯峨野の方に隠れたる人あり。まだつり兀の跡もきえかね、わり菱(二)の系圖咄に、甲州の劒も今は菜刀一丁の身帶にて、あまりさびしさに、垣に瓢簞を植ゑて、折ふしの筆次手にや、中にもしたゝか物(三)に書付け侍る。

甲にもならで果てたるふくべ哉。無名子とは見え侍れど、身は雲水の便なき浪人ひが

(四)論衡、「夏爐冬扇」
(五)俊成の法名
(六)後鳥羽院御口傳
(七)空海
(一)源氏椎本、「男鹿なく秋の山里いかならん小萩が露のかゝる夕暮」
(二)武田家の紋
(三)大なるもの

風俗文選　巻之一

五老井許六選

○辭類

柴門辭

芭蕉翁

送ㇾ歸ニ許六之故鄕ニ餞別之文也

去年の秋、かり初に面をあはせ、ことし五月のはじめ、深切に別ををしむ。其わかれにのぞみて、ひとひ草扉をたゝいて、終日閑談をなす。其器繪を好み風雅を愛す。予こころみに問ふ事あり。繪は何の爲好むや。風雅の爲好むといへり。風雅は何の爲愛すや。畫の爲愛すといへり。其まなぶ事二つにして、用をなす事一なり。まことや君子は多能を恥づといへれば、品二にして、用一なる事感ずべきにや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は精神徹に入り、筆端妙をふるふ、其幽

(一)元祿五年

(二)論語子罕篇、「吾少也賤、故多能鄙事」

(三)徹は微の誤なるべし

師選猿簑。後病死。年五十三。

萬子者。加州金澤之武士也。生駒氏。號此君菴。蕉門之英士也。

厚爲者。加州大聖寺之武士也。河地氏。蕉門之英士也。病死。

木導者。江州龜城之武士也。直江氏。自號阿山人。蕉門之英才也。師翁稱奇異逸物。

汶村者。江州龜城之武士也。松井氏。字師萬。號九華亭。蕉門之達士也。嘗能書畫。給師五老井。

毛紈者。江陽彦城之武士也。北山氏。號大雅堂。好風雅。愛畫圖。師五老井。

程已者。近州龜城之武士也。朝倉氏。號白日堂。愛蕉門之風雅。

朱廸者。江陽彦城之武士也。寺島氏。號甘露亭。年久好風雅。而入蕉門。病死年四十三。

撰者許六者。江州龜城之武士也。名百仲。字羽官。森川氏號五老井。別號菊阿佛。一見蕉翁。得正風體實。血脈道統之門人也。常友李由。撰俳書數篇。

以上二十八人

雲鈴者。奥州南部之人。產武。壯年入道自號摩詰菴婆且人。風雅師東花坊。一渡佐渡島著入日記。

吾仲者。洛陽人也。居于六條。業佛畫。好風雅。師李由。自號柳後園。著杮表紙三卷。

路通者。不知何許者。不詳其姓名。一見蕉翁聽風雅。其性不實輕薄而長違師命。飄泊之中著俳諧之書。

凡兆者。加州之產也。業醫居于洛。學蕉門之風雅。一罪事不知其終處。

素堂者。山口氏也。居于武陽。避世務隱于深川。友芭蕉翁善。

嵐蘭者。不知何許人。松倉氏。業武奉仕板倉家。而奉諫速辭官携母隱于武淺艸。蕉門之老弟也。爲月遊于鎌倉病死。

荆口者。濃州大垣之武士也。宮崎氏。蕉門故老之士也。此節。千川。文鳥三士之父也。後致仕改名東宇。

去來者。肥前之產也。後隨兄居于洛陽。向井氏也。中華蕉門之高弟也。號落杮舍。隨

學風雅年久。故著韻塞。篇突。宇陀法師書。病死。年四十五。

支考字盤子。號東花西花。亦號獅子庵。濃州之產也。入蕉門業風雅。一方門人也。先師滅後遊東西南北。說風雅而助諸生。故往々慕支考風者多矣。中適居于勢州山田。後歸故國。作誹書數篇。辨俳諧之論。

晉其角者。武州江戶產也。生醫家。不學醫術。終業誹諧。寶井氏。號狂而堂。蕉門之一人而後起己一風。著誹書數篇。

嵐雪者。服部氏。不知何許人。　業風雅。遊武江戶。蕉門之高弟也。後別妻出家。

野坡者。越之前州人。生商家。居于武江戶。蕉門之學者也。一遊西海。不定其所居。隨師得炭俵之撰號。

北枝者。加州金澤之人也。業磨工。見蕉翁。好風雅。北方之逸士也。

凉菟者。勢州山田神職之人也。業風雅。初號團友。

露川者。伊賀之人也。生商家。居于尾名護屋也。好蕉門之風雅。

作者列傳

芭蕉翁者。伊賀之人也。武名松尾甚七郎。奉仕藤堂家。壯年時辭官遊武州江戶。風雅爲業。號桃青。乃誹諧正風體中興開祖也。嘗世爲遺功。修武小石川之水道。四年成。速捨功而入深川芭蕉庵出家。年三十七。天下稱芭蕉翁。遊東西南北說風雅助諸門人。國中悉歸芭蕉風。一遇難波津伏病。終卒年五十一。葬江州義仲寺。

浪化者。東門主一如大僧正之連枝也。號應眞院。居于越中井波瑞泉寺。一日遊洛。會芭蕉翁效風雅。後著有磯海前後集。病薨年三十二。

僧丈艸者。尾州犬山產也。壯年辭武出家。隱松本山上蕉門之騷客也。能詩。後三年閉關而終不出。病死。常讀法華經。年四十四。

僧千那者。江州堅田產也。居于本福寺。釋名妙式上人。嘗任律師。號蒲萄坊。中華蕉門之高弟也。

僧李由字買年。近州之產也。居于光明遍照寺。釋名亮隅上人。嘗任律師。入蕉門而

風俗文選

自序

五老井許六選

文は貫道の器也、孔子も餘力あらば、これを學べといへり。吾朝往昔のむかしより、大和詞の文筆、庫にみち車にみてん。されど世におこなはるゝ言葉、おほくは女官の筆にして、源氏狹衣のたぐひ、男女の中をつくし、實は歌よますべき道びきなるべし。共に歌連歌の文法にして、俳諧文章の格式一言もなし。先師芭蕉翁、始めて一格をたてゝ、氣韻生動をあらはせり。たとひ鄙言漢字をまじへたりとも、心は吉野たつ田の花紅葉をうらやみ、和歌の浦に志をよせて、難波津の細きよしあしをたどりしるべし。縦横自在を盡したりとも、ひとつの趣意をたつる所なくては、童蒙の丸い物づくしに落ちて、果は松坂を仕舞となせる、甚だ無下の事なるべし。今こゝにあらはす文章、體は二十、文は一百十有餘篇、皆々俳諧文章なり。これをよみこれを學びて、此門に入るべしとて、弟子五老井許子六撰み集めて、寶永二乙酉歳、自序して風俗文選とは云爾。

の四字をもて、暑し涼しの時宜をとゝのふ、文章はまして手爾遠波の事なりとぞ。されば一句の長短をしらず、二句の句讀をしらざれば、よむ者息のつぎはを忘れて、海雲海鼠腸とすゝりつゞけたらんは、はてしなき心やすらん。世はかくそしりてもあそび、又そしられてもあそぶ中に、我は此文選の時をほめて、あそぶものなるべしとか。

寶永元年甲申臘月日

記はおのれがおぼえ書なれば、人の見てえ知らぬ事をも、我は見てあそぶらんかし。記と紀とは、おなじ心ながら、旅には紀行といふ事もあるにや。世に平家物語といふものありて、ひとへにものゝふの草紙にあらせじとて、祇園精舍の鐘の聲に、無爲の遊びを書き添へたるなり。平家物語とつけたる名も、物に對したる名なるべし。鴨の何がしは、方丈の記に遊べる人也。發心集といふ物は、さるものともおぼえぬにや。四季物語といふものありて、其人の作にはあらずとこそ。撰集抄のみいとたふとし、歌の心のきすくなるは、まして撰者の法師のあそび處なるべし。兼好法師のつれ〳〵草は、それには劣りても侍らんか、硯にむかひて物をさだめねば、世情の境目にあそぶ合點と見えたり。あるひは宗祇の終焉記も、あるひは長嘯の擧白集も、おのれ〳〵が心にあそびて、むかしの姿をつたへずといふ事なし。天はこれをもて月にあそび、地はこれをもて花にあそぶ。龍吟ずれば雲起り、虎嘯けば竹すゞし。梅に鶯、紅葉に鹿、いづれかかたちを傳へずしてあそばん。先師つねにいへりけり、漢には之乎者也の四字をもて、貴賤尊卑の詞を分ち、和には手爾遠波

風俗文選序

東華坊　支考

もろこしに文選ある時は、吾朝に文選なからんやと、ことしえらびて遊ぶものは、湖東の武子許羽官なり。凡そ文章は周孔の心を傳へ、莊孟の筆に鼓舞せられて、和漢に心を傳ふれども、姿を傳ふるものは又まれ也。人は其すがたはつたふべく、その心はつたへがたしとぞおぼえぬる。文章に何の心かあらん、心は天地の心なり、姿は世々に變化して、其變化をしれる人をこそ、姿をしれる人とはいふなれ。昔の人の下恵をまなべるも、道につたふべき心なければ、姿の變化をまなべる人とはいふべし。されば源氏物語は、はじめ終ありてたやすからず、人の見てあそぶ處も、巻々にまち〳〵なるべし。狹衣は歌にあそべりとぞ。うつほ、竹取、おちくぼの草子など、淸少納言が枕双紙は見る事にあそび、聽く事にあそびて、はじめ終あらせんとせばいかでかは。榮花物語とかいへるものを、我いまだ見ねばよくもしらず。伊勢物語のこと葉はぶきたるをさへ、土佐日記はまたさらなり。日

風俗文選序

落柹舍　去來

世に俳諧の文あつて、其集といふものいまだ聞かず。先師一たび思ひ立ち給ふ事侍れど、心にかなふ物希なれば、空しくやみぬるも十とせ餘り五とせなるらん。今や門葉のたれかれ、風雅に腹ふくるゝまゝに、管城に槊を横へ、文場に臂をふるふものすくなからず。今此文集に斧を入れて、始に柴門辭あり、終に頌讚の風流を盡す。或は書あり、或は論ありて、說賦のまことを述べ、文誄の哀を殘す。自ら堪能の才ありて、許多の體をもらされず。これを千歲の後に施して、はいかい文章の手本とせば、彼の童子の師の句讀を敎ふる類ならんや。此文をしれる者は此道をしる者なり。作者みづから五老先生と稱するものは、湖東森氏六子にして、虛實にあそべる人といふべし。しからば今の名望を感じて、此文選を戀ひざらめかも。寶永元秋日序。

風俗文選序

月澤律師李由述

龜城の羽官子、五老井の許六、滑稽俳諧新古の文章を拾ひ集めて風俗文選と題す。むかしやまとの文を集めて、これを本朝文粋といへり。我おもふ、此文粋は本朝の人の述作にして、文の體まつたく漢文なるべし。今許六が文選は、和國の文章にして、其體おのづから漢文にかなへり。むかしよりやまと詞おほしとも、皆々双紙物語のたぐひのみにして、本朝の文章と稱すべき物は、今此風俗文選の事なるべし。夫漢文は文字の數を定め韻をふみて、其格まぎれがたかるべし。されど同じ文章をもて、文選と古文とに記する所、其體相違あれば、漢文とても慥ならずと見えたり。まして和文には、文字の數さだまらず、韻字とてもなし。しかるを去來が鼠賦に、五音相通のかなをもて韻とす、是和文に韻をふめる一格なり。あながち韻を用るにもよらず、其事にしたがひ自由なるべし。向後體をわかつ事は、其題の趣によつて、其體をさだむるを、學者心得とすべし。江東僧律師李由字買年於四梅廬序。

拾遺

上

續篇

上

中

後篇

上

下

下

續

卷之三

卷之二

詩類附序

目録

影、和漢文操及鶉衣は三諸、各原本に據りて之を校訂し、校正は專ら石井晴信氏を煩はしたり。

大正四年九月

校訂者　藤井紫影

武笠三諸

と。げにや、所謂碌々たる餘子の作中にも、稀には此の三子者の壘を摩するものなきには非ざれども、通觀して其の家數の大小を計較するときは、評者たる也有が獨り燦然として前人の光を奪はんとするの概あるを除きては、德川時代を通じて、遂に之を同日に語るべきものあるを見ず。

許六支考は共に蕉門の高足にして、前者は風俗文選（寶永三年刊）を撰びて、其の師其の友及び自家の文を輯め、支考は本朝文鑑（享保三年刊）、和漢文操（享保十二年刊）を編みて、また其の師友の作と自家の編章とを輯錄せり。されば、之に也有の鶉衣（天明六年？前篇刊）を併する時は、德川時代の俳文の精華、殆ど之を盡せりといふを得べき也。

今本文庫中の一册として一部の俳文集を輯成せんとするに、上記の四部を併せ取る時は、卷册あまりに浩瀚にして、到底之を一册に盛るに堪へず。よりて姑らく本朝文鑑を割愛して他の三部を採錄せり。蓋し同じく支考の撰に成れる二部の中、文鑑の既に活刷せられたるに拘はらず、文操は未だ嘗て活字に飜刻せられたるを見ざれば也。而して風俗文選は紫

緒言

横井也有、嘗てその友堀田六林の文集に序して、俳家の文章を評して曰く、

世の俳人ともかうも五七五はいふべし。只俳諧の文章は難し。風俗文選世に行はれて後、其躰を學ぶ者の間〻あるも、よくいふ者は甚稀なり。古人の文とても其風躰一ならず。祖翁の筆を許するはいとこちたきわざなれど、濳に之をいふべくば、蕉翁の文は正しくして俗中に雅を失はず。たとへばやごとなき人の、編笠羽織にやつして花のもとの床几によりたれど、風子に手を觸れず、茶ばかり飮みてやすらひたるが如し。其位に至らぬ人の、及ぶ事や難からん。東花坊支考が文ははたらきて遁らず、面白く言ひなぐりて情を深く含ませたり。たとへば諸藝に勝れたる當世男の、一座の興に三線とりて、相の手ばかり引き捨てたるが如し。彦根の許六は、物の姿情をよくいひて、詞を飾るにおくれたれば、やゝ卑きに似たれども、さりとて雅趣のなきにあらず。たとへば何がしの忠右衛門など、人に顔よく見知られて、駒下駄に尺八吹きて大道に肩いからし、あはれ傍に人なきが如しといはん。其餘碌々たるは論に及ばず。

風俗文選　全

和漢文操　全

鶉衣　全

